

とある幻想の夢想天生

大嶽丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼女は博麗霊夢だった。

しかし、そこは幻想の楽園ではなく、科学と魔術が交錯する街だった。

目次

プロローグ	2
とある高校	21
一方通行	42
ヒーローまたはヒロイン	60
友人	77
買い物	95
虚空爆破	116
幻想御手	140
白黒な憧憬	162
因縁	181
接近	201
魔術師	219

聖人	233
禁書目録	250
板挟み	272
喪失	300
多才能力	324
幻想猛獣	351
涙子	376
強襲	396
茶番劇	418
自動書記	439
中道	459
最大主教	481
切り裂き魔	502

妖夢	疑念	竜王の顎	自己幻像	黄金鍊成	齟齬	秘封	吸血殺し	乱雑開放	離別	盛夏祭	蜘蛛	辻斬り
787	772	749	725	699	667	648	626	607	588	567	542	524

人鬼	超常操作	アイテム	潜入	妹達	居候	鍛冶屋	偽者	マネーカード	天上の意思	絶対能力	駆動鎧	不和
1050	1028	1006	992	972	950	935	920	900	880	862	832	809

人間
二色蝶
黒翼
絶対
第一位
闖入
違和感
多角スパイ
無意味
思惑
超電磁砲
混沌
雷轟

1311129012741249122812101191117311461128111010891069

正義
恋路
お祓い棒
御使墮し
天使
容疑者
神の力
死の天使

14471427141413971383136613461328

プロローグ

楽園は何処に――。

少女はただ渴望し、夢想する。

“学園都市”。

それは東京西部に存在する科学の総本山。あらゆる教育機関や研究施設の集合体であり、その名の通り人口二百三十万人の八割を未成年の学生が占めている。

外部より数十年も進んだ最先端の科学技術で運用されているこの街は、ある研究に心血を注いでいた。

PSI――超能力。

念動力、空間移動、発火能力。この街では、脳を開発することで人為的に異能の力を発現させる技術を実用化させており、この街で暮らす学生は皆それを受け、何らかの能力を所有している。

大半が無能力であつたり日常生活においてもあまり役に立たぬものであるが、中には現状の科学技術では再現不可能なものや頂点となれば軍隊にも匹敵する程の力を有す

る。

学園都市では、そんな学生たちが、自らの能力を高める為に日々努力し、切磋琢磨していた。

——自分は、何故この場所に居るのだろうか？

少女は思う。高層ビルの建ち並ぶその街並みとそこを歩く大勢の人々を空の上から見下ろしながら。

「……喧しいわね」

人の声、歩く足音、電車や自動車の走る音、機械類による電子音、ビル風、e t c、e t c……あちこちから響き渡る騒音の総てに煩わしさを覚え、ただ嫌悪する。

そこは科学の街。人工的な「能力持ち」が暮らす箱庭。ありとあらゆる例外が悉く否定された、「幻想」の居場所など許さぬ世界。

少女は憂いた。

何故この場所なのかと。

少女は嘆いた。

何故あの場所ではないのかと。

己は——????だというのに。

生まれながらに感じていた疎外感。どこに居ても馴染むことが出来ず、目に映る何も

かもが色褪せて見える。

この街へ来てからその感情はより一層強くなるばかり。しかし、別に世界が異常な訳ではない。少女こそがこの世界にとって拒絶するべき異物であるのだから。

それは少女自身も確かに自覚しており、故に彼女は这个世界に生まれ落ちた運命を呪う。

呪ったところで、何も変わらぬ訳だが――。

気だるげに溜め息を吐き、そんな諦観を抱きながら少女は地面へと降り立つ。

瞬間。行き交う人々の視線が彼女へと寄せられる。そこには好奇と困惑が入り雑じっていた。

当然の反応だろう。少女がその身に纏っているのは学園都市には明らかに場違いである紅白な巫女装束。それも下は袴ではなくスカートになっており、腋部分が無く素肌が露出している。

加えて、艶のある黒髪に整った顔立ち。その容姿は大和撫子然とした美少女なのだから注目するなと言う方が無理があつた。

「……………」

堂々と恥ずかしげもなく。少女は然したる反応も示さず、何食わぬ顔で街道を歩く。空を飛ぶ不思議な……いや、この街の人間は空を飛ぶことも不思議とすら思わない。

そんな程度では、もはや異常には成り得ぬ場所なのだ。

それでも人々の目を引いたのは巫女装束だったからであるが、ただでさえ外と異なるものでありふれ、変わり者が多いのもまたこの学園都市。最終的にはそういうコスプレイヤーが居てもおかしくはないという認識に落ち着き、やがて大衆の興味は薄れ、人混みの中へと溶け込む。

異常を容易く受け入れる。さも当たり前前であるかのように。そんなこの街の在り方すら少女は毛嫌いし、忌々しくさえ思った。

「……あん？」

だからだろうか。突如として響き渡る轟音に彼女は足を止め、苛立った声を上げる。

音がした方角へ視線を向ければ黒い煙が上る建物があつた。そこは銀行であり、平日の真つ昼間にも関わらず閉めていた防犯シャッターが爆発したのだ。

つい先程それを認識した少女はそのようなことを理解してはいなかったが、煙の中から現れた顔を隠した三人組の男たちを見て、強盗の類いであることは容易に察せられた。

鳴り響く警報。白昼堂々で行われた犯行に場が騒然とする。その混乱は瞬く間に人から人へと波及して伝わり、悲鳴や怒号が飛び交う。

「あー、だるい」

そんな周囲の状況に反して少女は冷めた目でその光景を見据え、怠惰の言葉を吐き捨てる。

「何でも面倒事ばかり起こるのかしらねえ……」

学園都市は最新鋭の科学技術を有する。それは防犯システムも例外ではなく、加えて武力行使が可能な独自の警察組織が存在するにも関わらず治安は悪く犯罪率は外部と比べても異様に高い。

——この街は退屈しない。

果たしてそれは誰の言葉だったか。騒動や事件に巻き込まれるという意味では少女はその言葉に概ね同意するが、無意味に惰眠を貪るのを至福とする彼女にとっては余程暇を持て余さない限りはなるべく避けたいことだ。

少女が目の前で行われる悪行を至極どうでもいい事象だと思いつつも、黙って見過ごせぬ性分なのであれば、尚更だった。

「……本当に、くだらない」

溜め息混じりに少女はそう呟き、飛んだ。

そこに正義感や義務感など特にある訳でも無く、あるとすれば未だに抱き解決出来ぬ疑問へのどうしようもないイライラをぶつけること。

謂わばストレス発散である。

「おい！ グズグズすんな！ 警備員アンチスキルが来る前にさっさとズラかる……は？」

故に、彼ら強盗たちは運が悪かった。

多少お粗末な所はあるものの逃走用の車両まで用意した計画。後々どうなるかはともかく成功する見込みのあったはずの彼らの犯罪は、少女という意図せぬ「天災」によつて崩れ去ることになるのだから。

「ごきげんよう、良い天気ね」

少女の名を、博麗霊夢。

楽園無き世界でその名と力を持つてして生まれ落ち、幻想として生きる運命さだめを受けた、ただの巫女だ。

「なつ、何だテメエ……ッ!？」

いつの間に、とリーダー格と思わしき男が目を見開く。気が付けば仲間が居るはずの自身の隣には巫女服の少女が立っており、足下にはその仲間が白目を剥いて転がっていた。

「見て分らない？ 通りすがりの巫女さんよ」

「ふざけんな！ クソアマが舐めやがって！」

初めこそ動揺していた男であったが、仲間が目の前の少女に無力化されると理解すると怒りの形相を浮かべ、その掌から小さな炎を発生させた。

少女——靈夢はそれを冷やややかな目で見る。

「へえ……それでさっきの爆発を起こした訳ね。えつと確か……何だっけ？　パイロな
んとかって奴よね、それ」

「発火能力だ！　へっ……今更ビビっても遅いぜ！　消し炭にしてやる……！」

発火能力。念動力で対象物の分子運動を高めることで発火現象を引き起こすという、
学園都市においてはメジャーな能力であるが、低い強度でも殺傷力が高く危険な能力
だ。可燃物も無くこれだけの炎を発生させていることから、少なくともそのレベルは3
はあるだろう。

能力者ということとはつまり学生。力を手にすれば、それを使用したくなるのは人間の
性である。況してや成人にも満たない若者がそんな手に余る力を手に入れてしまった
場合どうなるかは、分かり切っていた。

力に驕る者。力に溺れる者。そうやって増長し、不平不満の果てに非行に走る。

中には能力の強弱で他者を差別し、弱者を見下す者まで現れる始末。それに対抗せん
と力を持たぬ者たちも彼らへ憎悪を向け、群がって武装するという悪循環を度し難いこ
とに、この街は看過していた。

「じゃあ、やってみれば？」

燃え上がる炎。生身の人間がそれに当たれば火達磨になることは明らかであり、そし

て男は霊夢を焼き殺すことに躊躇は無かった。

しかし、そんな恐ろしい力を前にしても霊夢は余裕の表情のまま挑発して見せる。ご自慢の能力を見せ付けても臆するどころか眉一つ動かさない。

見下すような視線。それは自らの能力に対して絶対的な自信を持つ男には耐え難いものだった。

「そうか！　なら焼け死ね！」

痺れを切らし、遂に男は炎を放つ。ボールのように飛んで行くそれは少しでも掠れば一瞬にして燃え広がり、霊夢の全身を焼いて死に至らしめるだろう。

「——遅いわね」

が、それはあくまで当たればの話である。

霊夢は何てことのないように身体を僅かに動かす。それだけで彼女の横を通り過ぎて炎はあらぬ方向へと消えていく。

「何っ!？」

あつさりと避けられたことに男は驚愕する。ならばとより大きな炎を放つが、これも当たらない。

「そんな馬鹿な……!」

「馬鹿はそつちでしよ。弾をでかくしたって、鈍いままだったら意味ないわよ」

信じられないといった表情をする男。対する霊夢はつまらなそうに吐き捨てる。

あまりにも単調な軌道。加えて、彼女からすれば男の放つ炎など止まっているに等しいまでに遅鈍であつた。

「ふ、ふざけるなっ!」

その指摘と目の前の現実を認められず、男は半ばやけくそ気味に何度も炎を放つが、やはりただ真つ直ぐに飛んでくるそれらを霊夢は最小限の動きで回避しながら距離を詰めていく。

炎……霊夢の朧気な記憶は竹林に住まう蓬萊人を想起させ、しかし彼女とは比べるのも烏滸がましい代物だと否定する。

「畜生、どうなつてやがっ——!?!」

——昇天蹴。

霊夢は充分な距離まで近付くと、何故当たらないと混乱する男の顎を思い切り蹴り上げる。

俗にサマーソルトキックと呼ばれる蹴り。華奢な身体から繰り出された一撃にも関わらずそれは大柄な体格が宙に浮く程の威力であり、脳を大きく揺さぶられた男は泡を噴いて倒れ伏す。

「ヤッてと——」

これで二人目。靈夢の視線は既に最後に残った一人へと向けられている。「う、嘘だろ……!?!」

最後の一人は啞然としていた。大の男二人が、それも一人は強能力者レベの発火能力者だというのに、たった一人の少女に為す術も無く叩きのめされ、白目を剥いて倒れ伏している光景はさぞや衝撃的なものだろう。

「どうする? 降参する?」

「ッ……糞が!」

気だるげにそう問い掛ける靈夢。男は舌打ちし、ズボンに突っ込んでいた拳銃を取り出す。

銃刀法違反のある日本ではそう易々と手に入る代物ではないが――。

「させないわよ」

「なっ!?!」

その銃口を向けるよりも早く靈夢は回し蹴りで拳銃を弾き飛ばした。

路上を転がる拳銃。痛んだ手を押さえながら男はあまりにも一瞬の出来事に目を見開き、戸惑う。そんな明らかな隙を晒す男に靈夢は攻撃することなく、ただ彼を見据える。

心なしかその目付きは鋭くなっていた。

「もう一度訊くわ。降参する?」

「ヒイツ!」

再度問えば男は悪態を吐くどころか怯えた声を出す。完全に戦意を喪失していた。リーダー格とは違い、無能力者で銃を失ってしまつては、靈夢に対抗する術を何一つ持ち合わせていなかったのだから当然の反応と言えよう。

その様子を見て靈夢は安心する。大人しく投降してくれた方が面倒が無くて楽だった。

「く、来るな……!」

しかし、男は思わぬ行動に出る。何を血迷つたのか靈夢に背を向けて逃走を凶つたのだ。

「あん?」

あまりの怯え様に靈夢は呆氣に取られるも即座に逃がすまいと地面から足を離し、後を追う。大の男が年端もない少女を相手に逃げ出し、そして追い掛けられるその有り様は何とも情けなかった。

「おいガキ! こつち来い!」

「えっ な、何っ!」

何らかの能力により浮遊する靈夢の速度は男の全力疾走よりも速く、掴まるのも時間

の問題。そんな時、進路方向にたまたま居た小学生くらいの子供に、天はまだ自分を見過してていないと男はにやりと笑う。

「動くんじゃねえ！ こいつがどうなってもいいのか！」

そのまま男は走る勢いに任せて子供が反応するよりも早く掴みかかり、軽々と持ち上げて抱え込む。

人質。陳腐だが、この場においては最適な判断だろう。実際、男を追おうとしていた霊夢は動きを停止させたのだから。

「……成る程ね」

気紛れで見せた慈悲が、仇となった。

「ち、近付くなよ！ 少しでも動いたらこのガキぶつ殺すからな！」

懐中から取り出した小さな折り畳み式のナイフを子供の首筋に向け、ゆっくりと後退りしながら男は叫ぶ。

対する霊夢の表情は変わらない。全く動じていないその態度は酷く不気味であるが、男の心には幾分か余裕が出来ていた。

動きを止めたということは人質が有効であることは明白。このまま隙を見せずにいれば事前に用意していた逃走用の車まで逃げ切れるはずだと。

尚、その後どうするかや人質の始末など男の脳内の片隅にも無く、ただ場の窮地から

脱することしか考えていない。

「た、助けて……」

一方、霊夢は視線を男から子供へと移す。突如として捕まり、凶器を向けられた子供は混乱しながらも自身の危機的状況を理解し、目尻に涙を溜めながら怯えていた。

そんな姿を見ても霊夢は動じた様子を見せることはなく、それどころか面倒臭げに頭をポリポリと掻く。

「勿論。助けるわよ」

すると霊夢が男へと掌を翳す。あまりにも唐突な動作に男は一瞬呆けた顔をするもすぐに自身の命令を無視したことに激昂する。

「おいゴラァ！ 動くなつて——がはあ!？」

見せしめに子供を傷付けようとした次の瞬間。男は後ろへと吹っ飛んだ。

その衝撃でナイフを落とし、子供からも手を離してしまう。尻餅をつき、男は突然の衝撃と痛みに何が起きたのか理解出来ず混乱する。

そして、気が付いた時には子供を抱き止めた霊夢が目と鼻の先にまで接近していた。

「あつ、ちよ、待つ——」

ゴッ

有無を言わず鋭い足刀が男の顔面にめり込み、その意識を刈り取る。

これで三人目。倒れた男が起き上がる気配が無いことを確認すると霊夢はふうと一息吐き、抱き抱えていた子供をゆくりと地面に下ろす。

「……大丈夫？ 怪我とかしてない？」

「え？ う、うん……」

「そう。なら良かったわ」

ぽかんとしていた子供であつたが、霊夢にそう問われるとこくりと頷く。男に掴まれた腕は多少痛むもののこれといって目立った外傷は無かつた。

「その、あ、ありがと……ごさいます」

「どういたしまして。まあ、元はと言えば私が悠長にして逃がしたせいだから別に感謝とかしなくていいわよ」

礼を言う子供に対し、霊夢は素っ気なくそう言いながら視線を逸らす。

「——またあなたですの」

すると背後から声を掛けられる。聞き覚えのある甲高い女の声だ。つい先程まで気配を感じることはなかつたため霊夢は眉をひそめた。

つまり気配を消せる者が、そういうことが出来る能力の持ち主ということになり、そして恐らく後者だろう。

振り向けばやはりと言うべきか、見覚えのあるツインテールの少女が立っていた。

「随分と早いじゃない。仕事熱心ね」

「たまたま現場に居合わせただけですの。もつとも、対処する前に貴方が乱入して全員蹴散らしてしまいましたけど……」

「ふーん」

訊いておいてどうでも良さげな反応。これにツインテールの少女は僅かに頬を引くつかせる。

お嬢様のように上品な口調。そのニットベストの制服は学園都市でも五本の指に入る世界有数の名門中学のものであり、また彼女が高位の能力者であることを表していた。

しかしながらそんなものに興味の無い霊夢は知らないし、知ったところでどうでもいい。

故に、目の前の少女は単なる面倒事ではなかった。

「何度言ったら分かりますの？ 学園都市の治安維持活動は私たち ジャッジメント 風紀委員[〃]の仕事だと。あなたの行動は一歩間違えれば傷害罪に成り得るのですのよ？」

ジャッジメント 風紀委員。

罪を犯すのが学生ならばそれを取り締まるのもまた学生。そんな学生のみで構成された治安維持組織であり、学園都市に存在する自警団の片割れ。

ツインテールの少女もまたその一員だった。彼女は友人たちとお茶をしている際、偶然今回の銀行強盗に居合わせ、そして目の前の少女が瞬く間に無力化する場面を目撃した訳だ。

これにツインテールの少女改め「白井黒子」は顔をしかめながら注意喚起する。客観的に見て霊夢の行動は称賛されて然るべきなのではあるが、一步間違えれば無謀。彼女からすればあまりにも危険な行為であり、到底看過すべきではなかった。

初めてではなく、過去に何度も似たようなことを繰り返しているのならば、尚更だろう。

「じゃあ何？ 黙って見てろってこと？」

「そうは言つてませんけど……他にも方法はあるでしょう？ 私たちや警備員アンチスキルに通報なさるとか」

「けどあんたら、いつも来るの遅いじゃない。それで手遅れになったらこつちの寝覚めが悪くなるのよ」

ばつさりとして、白井の言葉を切り捨てる。

「なっ……」

「そもそも私は別に好きで面倒事に関わつてる訳じゃないの。あんた達がさつさと駆け付けてさつさと解決してくれるならそれに越したことはないわ。まあ、無理だからこう

なっているんでしようけれど」

「な、なっ……………」

齒に衣着せぬ物言い。特に暗喩もせず自分たちが役立たずであると吐き捨てられ、わなわなと震える白井。奇しくもそれは彼女と同じように荒事に関わる敬愛するお姉様」と似たような発言であつた。

「と、とにかく！ 一般人が事件に首を突っ込まないでください！」

「そう言われてもねえ…………えつと、あなた名前何だつけ？ 白黒みたいな名前だつた気がするけど」

ふと霊夢は尋ねる。はて、目の前のツインテールの名前は何だつたか。以前に名前を聞いたことがあつたような気がするが、どうにも思い出せない。

「白・井・黒・子ですわ！ いい加減覚えてくださいまし！」

「やっぱり白黒じゃないの」

「だから！ 白黒ではありませんの！」

うろ覚えな様子でしかも白黒呼ばわりされたことに白井は顔を真っ赤にさせて叫ぶ。

しかし、霊夢はどこ吹く風。そんな開き直つた態度がより神経を逆撫でさせるが、当の霊夢にそのようなつもりは微塵も無いのが余計にたちが悪い。

「で？ もし首を突っ込むのを止めなかつたら私を逮捕でもするのかしら？」

「えっ？ いえ、それは……」

「なら、文句言われる筋合いは無いわね。あなたの説教に付き合ってる暇も無いし、帰らせてもらうわ」

思わず言い淀んでしまう白井。すかさず霊夢はそう告げ、彼女へ背を向ける。

「ッ、逃げられるとでも——」

有無を言わずに立ち去ろうとする霊夢を行かせまいと白井は能力を行使しようとする。

彼女の能力は空間移動^{テレポート}。それも外部の技術では再現不可能とされる大能力者^{レベル4}だ。その限界飛距離は81.5mであり、直線上に連続で移動した場合の速度は時速に換算すれば288km/hにもなる。

故に、追跡から逃れることは至難の業。例えば自動車を使用したとしても容易く追い付くことが可能であり、目の前の少女を引き止めるくらい朝飯前に思われた。

「そうね。——だから少し飛ばすわ」

が、次の瞬間。霊夢は一気に飛翔し、ぶわりと風が巻き起こる。

突風に等しい風圧。間近で受けた白井は思わず怯み、よろけてしまう。

「!? しまつ——」

ハッと前方を確認するも時既に遅し。

空を見上げれば、彼女は遙か遠くに居た。もはや白井の空間移動では届かぬ程の高さに。

「~~~~~！ あれのどこが異能力者²ですの！」

まんまと逃げられてしまった。

あの一瞬で空間移動の範囲外へと逃れる瞬間飛行速度。どう低く見積もっても強能力者³はあるのが妥当な評価であり、詐欺も良いところである。

地団太を踏みながらキー！ と甲高い叫び声を白井はあげるが、空の彼方へと消えた霊夢にはもはや聴こえるはずもなく、ただ虚しく木霊するだけだった。

「ハア……さっさと帰って寝よ」

対する霊夢は学園都市の空を漂いながら、心底疲れた様子で溜め息を吐く。

これは、幻想を生きる少女の物語。

——その序曲である。

とある高校

博麗霊夢は捨て子だった。

この学園都市において捨て子と聞けば社会問題の一つである置き去りチャイルドエラーを思い浮かべる者も多いが、彼女の場合はそうではなく、言葉そのままの意味である。

関東の何処かにある片田舎。山を越えた先にある、小さな集落の近くに放置されていた身元不明の幼子。それが今の霊夢……らしい。

らしいと曖昧な表現なのは彼女自身は当時のことを何一つ覚えておらず、ただ集落の人間からそう教えられたからだけに過ぎない。それ以前に何をしていたのかも両親がどんな顔だったかすらも思い出せないので本当に捨てられたかどうかを確かめる術は持ち合わせていなかった。

何らかのショックによる記憶障害。酷く衰弱していたため病院へ運ばれた霊夢は幾つかの検査の末、担当医師にそう診断された。エピソードの記憶の大半を失っており、唯一どういう訳か自分の名前が「ハクレイ・レイム」であることだけは覚えており、うわ言のように呟いていたそうだ。

地元警察は虐待やネグレクトの果てによる犯行と疑い、集落とその近隣の市町村を中心に捜査を開始したが、結局彼女の親と思わしき人物は見つからず、出生記録を調べても該当する児童は居なかった。

捜査は行き詰まり、やがて打ち切られる。霊夢は施設へと預けられた後、最初に彼女を発見し、保護した養父に引き取られることになった。

こうして縁も所縁も無い山奥の集落で霊夢は幼少期を過ごすことになった。

妻に先立たれた養父は不器用ながらも霊夢のことを孫のように可愛がったが、集落の住民たちの対応は違った。未だに古い慣習に囚われ、排他的な意識が残っていた彼らは彼女の境遇に同情しながらもあまり関わりとはしなかった。

加えて、霊夢はこの頃から今と変わらぬ性格であまりにも子供離れしていたため余計気味悪がられ、避けられてしまう。

得体の知れぬ不気味な子。それが多くの者が霊夢へと抱く印象であった。

しかし、とうの霊夢本人はそんなこと露程も気にすることはなかった。最初からそういうものだど認識していたのもそうであるが、別に無視されるといった村八分のような酷いことはされておらず、特に現状に不満がある訳でもなかったからだ。

むしろその立場に納得さえしていた。故に、彼女は甘んじて受け入れ、時々養父の仕事を手伝いながら伸び伸びと育った。

そんな彼女にも転機が訪れる。

ある日、霊夢は近くの山を散策していた。狭い村であるが故に娯楽や遊び場が少なく、時折山菜採りも兼ねて暇潰しに訪れることがあり、今回もそうだった。

しかし、その日はどういう訳か採れる山菜が少なく、彼女はいつもよりも奥へと向かい、そこに古い建造物があるのを見つけた。

廃墟と化した、かろうじて「神社」だったと分かる建物。ずっと前から棄てられ、忘れ去られたのだろうか。そんなものがあるという話を聞いたことがなかった霊夢は首を傾げ、しかし妙な懐かしさを覚える。

——自分はこの場所を知っている。

まるで惹かれるように、何かを予感するように霊夢は廃墟の中へと入り——。山から帰ってきた彼女は以降、自らを「博麗の巫女」と称するようになった。

「ハア……眠たい」

そして現在。紆余曲折を経て霊夢は学園都市に居る。あの片田舎で暮らしていた頃はきつと想像も付かなかつただろう。

心底面倒臭そうに溜め息を吐く彼女の格好はいつもの紅白な巫女装束ではなく、黒っぽいセーラー服であり、頭髪含め黒一色の姿に頭の大きめの赤いリボンが目立っている。

時刻は早朝。その格好から察せられる通り、彼女は自らが通う高校へと向かっていた。

無論、通学方法は飛行である。

「コラー！ 博麗ちゃん！」

「おはようございます。先生」

「あ、おはようございます。……つて違います！ 窓から入らないでくださいって言ったじゃないですか！」

「えー、だつて面倒くさいんだもん」

上履きに履き替え、自らの教室の窓から登校して真つ先に会うのはクラス担任。明らかに小学生にしか見えない幼い容姿をしているが、どこぞの魔法先生とは違い、本当に成人しているらしい。

「思わず妖怪ですか？ と尋ねてキレられたのは懐かしい思い出だつた。」

「だもん！ じゃありません！ 可愛く言つたつてもう騙されませんからね！」

もう、ということとは一回は騙されたのだろうか。

「はいはい。次はしませんから。反省します」

「はいは一回！ いつもそう言つて前科何犯ですか！ 次やつたら今度こそ指導します

からね！ 本気で怒りますよ！」

「頭突きでもするんです？」

「え？ 流石に体罰は……ってちよつと！ まだ話は終わってませんよ！」

プンスカと怒る担任を華麗にスルーし、霊夢はそのまま自らの席に座る。若干涙目になつてゐるその姿に多少の罪悪感湧くも面白さが勝つてしまふので止めるつもりはなかつた。

霊夢が通う高校は変則的な造りが多々ある学園都市においてもあくまでスタンダードを極めようとしているらしく、あまりに平凡過ぎて個性が無い。そのため彼女からは校名すらも覚えられていない有り様だ。

しかし、先程の小さな担任のように教員や生徒たちはかなり個性的で濃い面子ばかりである。

「何や霊夢ちゃん。また窓から侵入したんか？」

「相変わらず破天荒だにやー」

「あん？」

声を掛けられ、振り向けばその濃い面子の中でも上位の色物が居た。

一人目はエセ関西弁で喋る青い頭髮にピアスを付けた細目の男——呼び名はそのまま青髪ピアス。本名は定かではない。

二人目は学ランの下にアロハシャツを着込んだ金髪サングラスの筋肉質な男、土御門

元春。ふぎけた口調だが、底の知れない奴だと霊夢は思っている。

「侵入とは人聞きが悪いわね。ボコるわよ?」

「怖っ!? 朝から血の気多過ぎやない? けどウエルカム! 霊夢ちゃんならむしろ褒美やで!」

「……そういうあんたは朝から気持ち悪いわね。青ピ」

「あゝ! その絶対零度の視線が堪らんわゝ!」

ゾクゾクと肩を震わせる青髪。この男の変態発言や奇行は今に始まったことではないので霊夢はただ塵を見るような目をするだけだった。

「ところで大丈夫かじゃー? あれだけ問題行動を繰り返してたら流石の小萌先生もそろそろガチで指導するかもしれない?」

「別に。その時はその時でしょ」

「うーん……流石は博麗っち。天上天下唯我独尊。己が道を往く、って奴だぜい」
「素行さえ良ければ優等生やのにほんま勿体無いなあ……」

成績優秀、容姿端麗、文武両道。その裏表無くミステリアスな性格もあつて博麗霊夢という女子生徒は校内どこに居ても大きな注目を集め、密かにファンクラブが出来程に人気であつた。

更に能力者としてもこの高校においては高い方である異能力者^{レベ}。それも世界で五十

人ほどしか存在が確認されていない「原石」であり、能力自体も重力操作による浮遊と成長すれば科学的に大きな成果が得られると期待が寄せられている。

故に、少しばかり問題的な行動をしても一部の教員を除いて強く言えずに居るのが今の現状だ。尤も、霊夢は他者からの評価など微塵も興味無いが。

「あつそ。で、あの馬鹿は？」

どうでも良さげに霊夢は無人の隣の席を一瞥し、ふと尋ねた。土御門と青髪、それにあと一人を加えて彼らはクラスの三馬鹿——デルタフォースなどと呼ばれている。

故に、霊夢はもう一人、あの不幸な毬栗頭が居ないことについて疑問に思う。既にホームルームが始まろうとしているが、教室にその姿は見えない。

「ん？ カミヤンならまだ来てないにやー」

「あら、また遅刻——」

次の瞬間、扉が開く大きな音と共に一人の男が教室へ駆け込んでくる。

「うおおおおおおお!! ギリギリセーフ!!」

「上条ちゃん。十秒遅刻です〜」

「な、何ですとぅ?!」

息を切らしながらガッツポーズをしていた毬栗のようにトゲトゲした独特な髪型の少年——上条当麻は、担任の無慈悲な一言により絶望へと突き落とされる。

その光景を見て土御門と青髪はゲラゲラと笑い、霊夢は呆れた様子で頼杖を突く。次に彼が何を言うのかは明白だった。

「ふ、不幸だ——!!」

こうして哀れな少年の叫びと共に、霊夢の優雅な……とは言い難い高校生活は始まる。

「……朝っぱらから騒々しい」

何気無い日常的一幕。そんな日ばかりが続く今日々は、霊夢にとって決して悪くないものだった。

しかし、彼女はそう思いながらどこか冷めた様子で現状を憂い、嘆き、諦観していた。

その心は、幻想に囚われたままなのだから。

「……………」

その姿を“背中を刺す刃”は、鋭い目でサングラス越しから見極めるように、見据えていた。

システムスキャン
身体検査。

学園都市の代名詞でもある超能力の“レベル”を測る行事である。

それぞれの能力に対した実験を行い、その成績に応じて無能力者から超能力者⁵まで六段階にランク分けされる。能力が全て。

そんな風潮が広がるこの学園都市では、高レベルは羨望の、低レベルは嘲笑の対象と成り得る。

故に、この身体検査は、学園都市の学生達にとって、とても重要な意味を持つ。

「めんどくさい」

……なのだが、霊夢にとっては至極どうでもいいことだった。

「よし、じゃあ次は高度を測るわよ。そのまま浮き上がって」

「あー、了解。10mくらいでいい？」

校内の施設にて。白衣を着た赤髪の女性が指示すると、霊夢は欠伸をしながら冷たい床からその足を宙に浮かせる。その高さは言葉通り10mぴたりだった。

「……因みにその気になればどれくらい高く飛べるのかしら？」

「うーん……この街で一番高い建物くらいなら飛び越えられるけど。もつと高く飛んだこともあるけど息が苦しくなったから途中でやめたわ」

「へえ……相変わらず素敵な能力ね。つくづく異能力者²で燻ってるのが勿体無い」

赤髪の女性……霊夢の担当研究員である彼女は腕を組み、口惜しそうに言う。

〃^{グラビティ}無重制御〃

それが霊夢が生まれながらに持つ主に空を飛ぶ程度の能力に名付けられた呼称。重力操作による浮遊とされているが、他の原石と同様に科学的根拠や物理法則から逸脱している部分があり、その原理は未だに解明されていない。

一見すれば空を飛ぶだけと、他の超能力に比べれば見劣りするが、その速度や機動性は凄まじく、もしも霊夢が手を抜かずに身体検査を受けていた場合、即座に大能力者⁴に分類されることだろう。

況してやその真髄たる奥義を見せればきつとこの街の頂点たる超能力者⁵にだって――

「私は嫌よ？ 興味無いし」

「分かつてるわよ。今回も異能力者²つてことにしておく。そもそも貴女の能力つて評価されづらいし」

単に空を飛ぶだけ。原石であるが故に科学的な研究価値も低い。それ故に、無重制御は、博麗霊夢の力はあまり注目されず埋もれてしまっている。

霊夢にとつてはあまりにもどうでもよく、むしろ面倒事にならないのなら大変好ましい状況。しかし、担当する研究員である彼女からしてみればこれ程に勿体無いことはなかつた。

その力は、あの原石ナンバーセブンの頂点すら倒してみせたというのに――。

「勿体無いわねえ……ほんとに」

故に、研究員は嘆く。とうの霊夢にやる気が無ければ無意味なことであつた。

「そういうえば上条くんはどうかしら？」

「あん？ 何でそいつが出てくるの……つてああ、そうか。あいつも『原石』つて奴なんだっけ？」

「ええ。担当は違うけど興味があつてね。これまたかなり特異な能力らしいじゃない」

研究員の問いに霊夢は眉をひそめるもすぐに納得する。彼女が担当する学生の多くが『原石』という生まれながらに能力を持つ者たちであり、故にいつしか『原石の専門家』としてその界限では有名になっていた。

「ふーん……まあ、一言で言えば馬鹿ね。不幸なものには同情するけど」

上条当麻。

今朝遅刻した三馬鹿の一人。世界一不幸を自稱し、その言葉に恥じぬ災難にいつも苛まれる哀れな同級生。疫病神か貧乏神にでも憑かれているのかと思つたが、どうも右手に宿る「異能を打ち消す力」によつてご利益や運氣すらも打ち消されてしまつていらしい。

その有り様を憐れんだ霊夢が正真正銘本物の厄除けの護符を渡してみたこともあつたが、効果は無し。オカルトでも自らが不幸から解き放たれるのは不可能だと断言させられた時の彼の顔はそれはもう酷かつた。

「あら、辛辣。先生方からは随分と仲が良いと聞いたのだけれど？　あと取り巻きとも「はあ？」

「心配していたわよ。優等生なのに不良たちと絡んでるつて」

「あいつらつて不良なの？」

「さあ？　少なくとも先生方はそう認識してるみたい。担任のオチビちゃんも否定してはいたけれど……で、どうなの？」

「そりゃ同じ教室だし。付き合いがある方ではあるけど……別に仲良くしてるつもりはないわよ」

そのくらいで騒ぐなど呆れる霊夢。彼女は上条、土御門、青髪の三馬鹿デルタフォーエスがこの高校で双壁を為す程の問題児たちであるということを知らず、単に馬鹿の集まりに対する蔑称

だとしか思っていないかった。

因みに双壁を為すもう片方は博麗霊夢その人であり、最近では彼女を四人目に加えて、四天王にしようという動きが一部であったりするが、何分霊夢は“馬鹿”ではないのと人気があるため反対派も多数居て揉めている。

「そう……じゃあ、彼の能力についてはどう思う？ 見たことはあるのでしょうか？ 彼

の右手に宿る力、イマジンプレイカー“幻想殺し”を」

「イマジンプレイカー幻想を壊す者、ねえ……名付け親は私に喧嘩でも売ってるのかしら」

「え？」

「いえ、何でもないわ。見たことならあるっちゃあるけどどうって言われてもねえ……能力者相手なら強いんじゃない？ 本人の工夫や技量次第だけけど」

「フフ。それじゃあ、あなた能力者も相手にすれば危ないのかしら？」

「まさか。要するに触れなければ良いんだからやりようは幾らでもあるわ。……まあ、あの“中身”はちと厳しいかも」

「中身？」

「……って無駄話してる場合じゃないわ。検査はもう終わりってことでいいわよね？」

誤魔化すように話を切り上げる霊夢。あからさまであったが、問い詰めても無駄だと理解している研究員は何も言うことなく僅かに微笑んで頷く。

「ええ。ああそれと霊夢。学校でもプライベートでも自由奔放に生きてるみたいだけれど、怪我とかしないように気を付けるように」

「はいはい」

「はいは一回。あとご飯は毎日栄養あるものを食べて友達とかもちやんと作るのよ。一度きりの青春なんだから大切にね」

「喧しいわね。あんたは私のお母さんかっつての」

「一応身元保証人よ？ それに大切な研究対象モルモットなんだしこう見えて心配してるのよ」

「あつそ」
そう軽口を叩き合いながら霊夢は部屋から出ていく。後ろで怪しげに笑う研究員に目もくれずに。

誰が何を企んでいようと、自分に害が無いのであればどうでもよかった。

「あー！ 博麗ちゃん、身体検査終わりましたか？」

「あら、小萌先生」

一息吐きながら廊下を歩いていると小萌が待ち構えており、ブンブンと手を振っていた。
「わざわざ待つてくれていたのですか？」

「はい。他の皆はもう終わって博麗ちゃんが最後だったので。で、どうでしたか？ 結

果は」

「別に。異能力者のままですよ」

「ええー？ 本当にですかあ？ あれだけ自由に飛び回れるなら強能力者でもおかしくないと思うんですけど」

「そうなんです？」

「そうなんです！ これは岡崎博士にもつと検査するよう具申するしかありませんね！」

「いえ、結構です。別に能力のレベルがどうのとか興味ありませんので」

「えっ!？」

似合わぬ敬語を使いながらきつぱりと言い放つ霊夢に小萌は涙目になってしまう。

「そんなあ……博麗ちゃんはやればできる子なのに……」

「やらなくてもできるの間違いでは？」

「何て自尊心の塊！ 間違つてませんけどやればもつと出来るのですよ！ 博麗ちゃんはこのところで燻つてる人じゃありません！」

「こんなところろ」

「こんなところろ！」

霊夢は自他共に認める天才だった。知能面においても身体面においても常人とは一線を画す。何をやってもそつなくこなすし、人に出来ることは当然のように出来る。

完璧過ぎる、と言うべきか。勉強も運動も、何でも出来てしまいが故に、努力に価値を見出だせず、情熱も湧かない。

そんな性格であることは十分に理解している小萌だが、それでもこのまま教え子の才能をみすみす腐らせたくはなかった。

つくづく教師の鑑のような人物である。そういうところは霊夢も認めており、だからこそ己のような怠惰な人間に構うべきではないと思うのだ。

「折角ですが、いつも言っている通り能力のレベルがどうのとか成績がどうのとかそういうの全く興味無いですし、向上心とかも欠片も無いんで。こんな奴よりもっとやる気のある奴を見てやった方が良いでしょう。ほら、吹寄とか」

「ううっ……どうしても、ですか？」

「はい。やりたくないことはやらない主義なので」

涙目に上目遣いでお願ひする小萌。そこに打算は無く自然に出た仕草であったが、霊夢は断固として拒否する。

「それじゃあ、先に教室戻つてますので」

そう言い、霊夢は彼女の横を通り過ぎる。

「——先生、諦めませんからね！」

しかし、背後から聞こえる未だに挫けぬ小萌の言葉に一瞬立ち止まり、やれやれと溜

め息を吐く。

無償の、純粋な善意ほど鬱陶しいものはなく、かといって無下にする訳にも行かず、困ったものであった。

「レベル、ねえ……」

放課後。

珍しく飛ばずに道路を歩く霊夢は身体検査後の小萌との会話を思い返していた。

この街においての強さの序列。日常生活において役に立たない程度のものから軍隊に匹敵する程のものが一括りにされるのはおかしいため、ある程度の仕分けは確かに必要だと思うが、それは多くの偏見や差別を生んでしまう。

よりレベルの高い能力者が優遇されるのならば尚更だろう。競争意識を高めるとい

う目的においては正解と言えようが、それでも真つ当に運営するのだとしたら看過すべきことではない。

「……やつぱり駄目ね。先生には悪いけど」

くだらない。どうでもいい。

小萌の言葉を受けて少しは考えてみたが、やはりどうしてもその気にはなれず、ただ窮屈さを感じるばかりだった。

つくづく霊夢は自身がこの学園都市という場所が嫌いなのだと思い知らされる。

まるで巨大な実験場。どこに居ても能力だのレベルだのに縛られ、空の上ですら極小の機械群が飛び交い、自由が存在しない。

改めて疑問に思う。何故己がこんな街に居るのかと。可笑しな話だ、ここへ来るという選択をしたのは紛れもなく霊夢自身だというのに。

無論、少なくとも望んでいた訳ではなかったが。

「それに……」

ふと、彼女が足を止める。そこは薄暗い路地裏。下校中に来る場所とは思えない不良共の溜まり場であった。

そして、霊夢の視線の先には、色素の抜けた真つ白な頭髮をしたアルビノの少年が立っていた。

「能力者のトップがこれ、じゃあねえ……」

「あ……？」

苛立った様子で振り返ったアルビノの少年はその充血したような赤い瞳で霊夢の姿を捉えると怪訝な表情を浮かべる。

「何だ、テメエか……久しぶりだなア。わざわざこんなところへ来るなんて珍しいじゃねエか」

「帰り道の近くでね。やたらと喧しい物音が響いてたから様子を見に来てみたら、見覚えのある白もやしがり弱いものいじめをしていただけよ」

死屍累々。少年の足下には数人の男たちがボロボロの状態で倒れていた。

腕の骨が本来とは真逆の方向に折れ曲がった者。刃物が脚に刺さって抜くのも躊躇される惨状になった者。砕けたコンクリートに埋まっている者。

皆、おおよそ単なる喧嘩では起こり得ぬ大怪我をしており、見るに堪えない光景だった。

武装無能力者集団。通称「スキルアウト」と呼ばれる者たちの成れの果て。とてもじゃないが、痩せた体つききの少年一人に出来るような芸当ではなかった。

しかし、高位の能力者であるならば誰だってこんなことをやってのけてしまうのがこの学園都市という街である。

そんな凄惨な現場を目の当たりにしても、霊夢は多少眉をひそめるだけで大して反応を示さなかった。

「心外だな。先に襲ってきたのはコイツらだ」

「にしてもやり過ぎじゃないの。治療費とかふん取られちゃうわよ?」

「一応正当防衛だ。というか、この俺に喧嘩売って死んでねエだけマシだろオが」

「それもそうね」

あまりにも短絡的な理由で無謀にも襲ってきた愚かなスキルアウトたちをものの数瞬で全治数カ月の重傷者へと変えた少年は心底つまらなそうに吐き捨てる。

彼こそが、学園都市最強。

この街に八人しか存在しない超能力者の第一位であり、全ての能力者の頂点に立つ者。

「一方通行」^{アクセラレータ}である。

そんな能力者ならば誰しもが憧れるであろう存在が、このような有り様なのだから本当にこの街はどうしようもない。

「で、どうする? 天下の風紀委員様としては見逃せねエか?」

「生憎ともうクビになってるわよ。けどまあ小市民としては暴行犯を見過ごす訳にはいかないのよねえ……」

「はん。どの口がほぎく。イカれ腋巫女が」

どうしましょうかと戯ける霊夢に対し、一方通行は顔をしかめ、しかしすぐに獯猛な笑みを浮かべる。

退屈しのぎにもならない足下に転がっているゴミ共よりも目の前の少女の方がずっと楽しめることを彼はよく理解していた。

むしろ彼女ならば或いは……。

「面白エ……あん時の続きをやるってんなら——」

「そうね、通報されなくなったら飯奢りなさいよ。今晚」

「……ああ?」

しかし、霊夢の思わぬ要求にその顔は呆けたものへと変わった。彼女はどこまでも、気紛れであった。

一方通行

とあるフアミレスにて。

一方通行はげんなりした様子でテーブルに頬杖を突いていた。

「いやー、只飯にありつけるなんてツイてるわね」

目の前では華の女子高生とも言うべき一見すると清楚な印象を受ける美少女がその幻想をぶち壊すかのようにテーブルに並べられた料理をがつついている。

カツカレー、ビーフハンバーグ、ローストビーフ丼、オムライス……他人の金で全く遠慮せず普段ならば絶対注文しないような高めのメニューを片っ端から頼んでは喰らい、既に六皿目に到達していた。

「まだ喰うのかよ」

「何よ、金持ちだから平気でしょあんた」

「さっさと帰りたいんだけどなア……」

唯一頼んだブラック珈琲に口を付け、今のうちに食べるだけ食っておこうという意地汚さに呆れる。

確かに金銭的には全く困らないが、時間は有限で貴重なのだ。一方通行としては一秒でも早く解放されたかった。

(一体何を考えてるのやら……いや、どうせなんにも考えてねエなコイツは)

空気のように掴み所が無く、浮世離れしている。全く行動が読めないが、実のところその思考は恐ろしく単純であり、裏表が無い。

それが一方通行が彼女の性格を分析した結果だ。少なくとも学園都市超能力者第一位を捕まえて飯を奢らせようとする時点でおおよそ常識的な思考回路ではないだろう。

博麗霊夢。年齢は15歳。希少な原石の一人。またの名を、変態腋巫女コスプレイヤー。

あれはいつだったか。いつものようにスキルアウト共に喧嘩を売られ、いつものように潰していたら当時風紀委員だった彼女が駆け付け、一方通行のことを巷で流行っていた無能力者狩りと勘違いして「戦闘」となったのが全ての始まりだった。

(未だに信じられねエ……こんなイカれ女に俺の反射が破られたなんてなア……)
とつくの昔に完治した傷が未だに疼く。あの時の衝撃は今でも忘れられない。

ベクトル操作。それが一方通行の能力だ。

ベクトルとはこの世界に存在するありとあらゆる物質やエネルギーに存在する向きと大きさを持つ量のこと。それを彼は高度な演算により自由自在に操ることが可能な

のだ。

その特徴の一つが攻撃の反射。向きを操るため如何なる攻撃も彼には通らず、跳ね返る。しかもこれを一方通行は自動で常時発動させており、核攻撃すら彼を殺すことは出来やしない。

そんな無敵と言う他無い力を持つが故に、久しく感じていなかった肉体的な「痛み」というものを、あの日一方通行は嫌というほど思い出させられた。

何よりも気に食わないのが、その相手が腋が露出した明らかに奇抜な巫女服を着た変質者であったことだ。

（今すぐにも前の「続き」をやりてエが……それで実験に支障が出て困るしクロン共全員ぶつ殺すまで我慢しておくかア……）

あれから一方通行も成長した。あの正体不明の「エネルギー弾」も既に解析済みで今なら問題無く反射出来るだろう。

しかし、霊夢の手札があれだけとは限らない。何せ彼女は多重能力デュアルスキル擬き。全く性質の違う能力を二つ同時に使用するという学園都市の常識を崩壊させているのだから。

だが、それでも、だからこそ一方通行は彼女との再戦を望んでいるが、そうも言つてられない理由もまたある。

絶対能力進化計画。

二万体のクローンを一人ずつ殺して絶対能力者^{レベル6}へと至るといふ狂気の実験を一方通行は行っていた。

現在漸く九千体近くまで殺したのだ。霊夢との戦闘で計算が狂って振り出しに戻るなんてことは勘弁したかった。

無論、あちらから喧嘩を売ってくるなら喜んで殺り合うつもりであるが。

「……そういえばさ」

「あん？」

すると料理を食うだけだった霊夢が手を止め、思い出したように口を開く。

「学園都市第一位ってどんな気分？」

「はア？　ンだよ急に？」

「ほら、ここの連中ってどいつもこいつも能力だのレベルだのなんだのに拘るじゃない？　あれの気持ちがいまいち理解出来なくてね。一位のあんたの立場からすればどうなんだろうなー、って」

コーラをストローで吸いながら、霊夢は問う。その雰囲気から心底真面目に質問していることが察せられるが、学園都市に住まう高校生が抱く疑問にしてはあまりにも今更が過ぎた。

恐らく今までは本当に微塵も興味が無く、無関心だったのだろう。それが何かの切っ

掛けで考え出し、やっと疑問を抱くようになった。

「……さあなア。頭お花畑なガキ共の思考なンざ知らねエよ。大方自分も超能力が使いたいとか他人より強い力が欲しいとかそんなんだろ。ンで手に入れたら今度は上の連中に評価されたくてもつと力を求める」

「あんたもそうだったの?」

「……ンなこと覚えてねエよ」

多くの者が超能力に憧れて学園都市へ来る。しかし、霊夢の場合はそもそも前提が違う。何せ彼女は最初から空を自由に飛べていたのだから。

一方通行の場合は——忘れた。自分の本名すら苗字が二文字とか名前が三文字とかくらいしか思い出せないのだ。学園都市へ来ることになった理由や動機など覚えていゝるはずがなかった。

「ふーん……苦労してるのね。まあ、じやなきやそんな終わった性格してないか」

「あ? 馬鹿にしてンのか?」

他人事のように語る霊夢に、世間から見ればお前の性格も充分終わっていると睨み付ける一方通行。

しかし、彼女は全く動じず、涼しい顔のまま。如何なる威圧も彼女には通用しない。そんなことは分かり切っていたが、やはりムカつく舌打ちする。

「別に。納得しただけよ。つくづく私にはこの街を理解することが出来ないってことを」

「はア?」

そんな言葉に怪訝な表情を浮かべる一方通行を他所に、気が付けばコーラを飲み干していた霊夢はどこか遠い目で天井を見上げる。

「……お互い不自由ね」

「! ……はン。テメエに何が分かる」

「あんたが現状を憂い、望んでいないということくらいは」

「……チツ」

「やっぱり。凶星みたいね」

「うるせエ。知った風に言うンじゃねエよ」

同情でもされたかと思つたが、どうやら共感の方だつたようだ。一緒にするなという苛立ちと共に意外だつたと一方通行は僅かに驚く。

好き勝手に振る舞い、自分のルールを振りかざし、常に余裕に満ちていた目の前の少女は一方通行には誰よりも自由に生きているように見えていた。

きつと、羨望すら抱いていただろう。

「……なア」

故に、今の彼女の表情は酷く新鮮に感じ、一方通行は無性に気になった。

「オマエは欲しくねエのか？ 絶対的な力ってヤツ」

「あん？」

突然の問いに霊夢が訝しげな視線を向ける。

「何よ、厨二病？」

「茶化すな。例えば、だ。俺は学園都市で最強だ。だが、さつきみてエに身の程知らずのゴミ共が毎日のように襲って来やがる。軍隊を差し向けられたこともあった」

「……………」

「いい加減ウンザリしてンだが、どうも『最強』だけじゃあゴミ共を黙らすには足りねエらしい……………なら、もっと『上』に行くしかねエだろ。誰もが認め、誰にも文句を言わせねエ程の、戦おうとする意志さえ奪う程の絶対的な力。それこそ神のような『無敵』の力がありやきつと——」

熱が入り出した一方通行の語り。対する霊夢の反応は乏しいものだった。

しかし、それは確かに彼女の関心を引いた。

「……………そんなもの、本当にあると思ってるの？」

「無いとも限らねエだろ。誰もそこに行き着いてないんだからなア……………なら、目指してみる価値はあると思わねエか？」

「あら、意外とロマンチストなのね」

現実的ではない、と。一方通行の語る内容には一定の理解こそ示すも決して同意はしなかった。

「で、どうなんだ？ もしもそういう力があつたとしたら」

「そうね……力があつたに越したことはないし、もし本当にそんな何でも出来てしまうような力があるのなら……」

霊夢が想像する。夢見る少女かのように、一方通行の語る絶対的な力とやらがどんなものかを。

もしも、それこそ彼女が憂い、嘆く現状を打破出来るだけのものだとしたら。

そうすればきつとあの場所にも――。

――

一方通行が目を見開く。この時、霊夢は目を輝かせ、無意識に口角を吊り上げていた。初めて見る、純粹な笑顔だった。

「――いや、やっぱり面倒臭いわ」

しかし、すぐに顔をしかめ、そう切り捨てる。

「は？ オイオイ。何だよそりゃ」

「ちよつと考えたけどそこへ行くまでの過程を想像したらやる気が失せちゃうわ。私っ

てば根本的に努力とか修行とか大嫌いなものね」

「……………くだらねエ」

怠惰の化身が如き物言い。これには一方通行も呆れるしかなく、真面目に語って損した、と溜め息を吐く。

しかし、逆に努力等を必要としないのであれば欲しいということ。一方通行とは違い、彼女の場合はあるかも分からない不透明なモノに時間を割くだけの余裕も気概も無いだけなのだろう。

「けどまあ理解は示すわよ。努力は嫌いだけど努力家は嫌いじゃないから」

どこか感心した様子の霊夢。もしもその為に行っていることがクローンの虐殺だと知ったら、一体どんな顔をするのだろうか。

驚くかもしれないし、怒るかもしれないし、怯え……………することは絶対に無いなど一方通行はその思考を一蹴する。どうせ大した反応はしないだろう。

「ただ無茶はしないことね。無いとも限らないということはあるとも限らないってことだから。そんな曖昧なモノを追い求めて身を削る羽目になったら、本末転倒でしょ？」

「そりやどうもオ……………腋巫女が真面目にエール送ってくるとかなんか死ぬほど気持ち悪いな……………」

「何よ、失礼ね」

応援とも忠告とも取れる言葉。らしくもない発言を一方通行は馬鹿にするように一笑いながらも内心複雑な心境だった。それは彼に掛ける言葉としてはあまりにも遅過ぎたのだから。

もう後戻りなど、決して出来やしない。

「まあ、参考にはなったわ。ありがとう」

「……おう」

素直に礼を言い、再び食事へと戻る霊夢。これに感謝され慣れていない一方通行はむず痒い思いをしながらそっぽを向く。

「さて、デザートも頼もうかしら」

「いい加減にしろよテメエ」

孤高の存在。

誰も尊ぶことなく、誰とも並び立つことなく、誰からも理解されない。

博麗霊夢とはそういう人間だ。天衣無縫の極み。この世界から爪弾きにされ、どこにも馴染めず、馴染もうともせず、得ることも求めることもなく、ただ己があるがままを往く。

単純に優れているからだけではない。純粹に見え方が違うのだ。彼女とそれ以外との視点はどこまでもずれていた。

それはもはや孤高ではなく孤独と呼んでも差し控えないだろうが、彼女にその自覚は無かった。最初から存在しないものに、どう気付けと言うのだろうか。

しかし、霊夢は聡明だった。自分が他人と違うということは理解しており、その理由もまた分かっていった。

にも関わらずそれを解決しようと何か行動をすることはなかった。別に諦観していたからではなく、その必要性を感じなかったからだ。

そんな彼女であつたが、そういう意味では一方通行に対してはシンパシーのようなものを感じていた。

第一位。学園都市最強。全ての能力者の頂点。その名に恥じぬ絶大な力を持つ。

一目見た瞬間から今まで出会った能力者とは明らかに格が違つたと分かつた。他の

超能力者の面子……特に第二位と比べても飛び抜けているように思える。

霊夢は生まれて初めて敗北の可能性を予感し、結果としては途中で中断されたが、あのまま続いているれば一体どうなっていたか。

——久方ぶりに楽しかった。

人も、妖も、神すらも有象無象。だが、それでも張り合いの無さ過ぎるこの狭い世界で過ごす彼女に危機感を思い出させた一方通行という存在は酷く特別なもののように見えたのだろう。

故に、無意識に彼も自分と同じなのだろうと思ってしまう、そして即座に否定する。

「あいつ、意外と向上心の塊だったのねえ……」

まるで違う。何もかもを諦観してしまっている霊夢とは違い、一方通行は現状を打破しようとは必死に足掻いていた。

その手を血で汚すことすら厭わずに。

「まあ……応援くらいは、してあげましょうか。何だかんだ腐れ縁だし」

ただそれだけ。別に霊夢は何もしない。一方通行がやっていることにも、この学園都市の裏で行われていることにも、大して興味が無かった。

尤も、当事者となれば、己が平穏を害するのであれば、彼女はそれらを全身全霊で潰す。

何せ彼女は巫女は巫女でも――。

「……………で？　気は済んだ？」

「ひっ……………す、すみません……………」

そう問い掛けた彼女の視線の先には梅干のように顔が腫れ上がった男が土下座していた。その後ろには同じような格好をした男たちが十人も倒れている。

もう二度と奢らねエという捨て台詞と共に帰っていった一方通行を見届けた後、帰宅中にいきなり囲まれたかと思えば路地裏へ連れ込まれかけた。

男たちは金属バットやナイフで武装していた。しかし、烏合の衆が何人束になったところで霊夢の敵ではなく呆気なく返り討ちに遭い、今に至る。

「私を狙うにはお粗末な襲い方だったし、あいつ目当ての馬鹿かしら？」

一方通行は日常的に命を狙われていると言っていた。ならば目の前の連中もその類いであり、恐らくは霊夢を彼の関係者だと思い、人質にでもするつもりで襲ったのだらう。

「どいつもこいつも馬鹿ばかりで大変ね。他の奴ならともかく攻撃を反射する奴にバットで挑んでどうやって勝つてのよ」

一方通行の能力がベクトル操作であることくらい書庫等バンクで少し調べれば簡単に分かると思うが。

そんなこともせず、無計画で学園都市最強を襲う馬鹿さ加減に霊夢は呆れ返ってしまふ。

(くそがああああああ！ 何なんだよこの女はっ?!? こんな奴が居るなんて聞いてねえぞ!?)

対する男は土下座しながら滝のような冷や汗をかいていた。

一方通行と仲良く食事をしていた女。彼の友人か恋人か。少なくとも関係者であることは間違いない。男たちは彼女を人質に利用するべく捕縛しようと画策した。

路地裏へ繋がる道の近くまで来た瞬間に取り囲み、連れ込んで拘束する手筈だった。しかし、女はあっさりと男たちの隙間を通り抜けてしまふ。

逃げた先は人混みではなく路地裏。連れ込む手間が無くなったと男たちはその愚かな行動を嘲笑い、追い掛けた。

この時点で気付くべきだった。自分たちが逆に誘い込まれ、狩られる立場であったことに。

始まったのは一方的な蹂躪。攻撃を仕掛けてきた女に対し、男たちは取り囲んで各々が金属バットやナイフ等の武器を振るった。

だが、女には掠りもしない。まるで横や後ろにも目でも付いているかのように四方八方から来る応酬を最小限の動きで避けられ、徒手空拳で一人一人、確実に屠っていく。

その光景は恐怖でしかなかった。次々と倒れていく仲間。気が付けば、残されたのは自分だけであり、それもたまたま当たりどころが良く、気絶を免れただけだった。

「ハア……めんどくさ。見逃してあげるから、さっさと失せなさい」

そんな男の思考など考える気すらなく、霊夢はつまらなそうに見下ろし、そう言う。

「ツ……ほ、本当ですか？　へへっ、ありがとうございます——」

「嘘よ」

慈悲の言葉に顔を上げた男の顔面に足がめり込む。逃げた先で仲間を呼ばれた経験がある霊夢からすれば見逃すつもりなど毛頭も無かった。

彼らに不幸があるとすればこの日の霊夢が学生服であつたことだろう。いつもの紅白だったのであれば襲うようなことは決してしなかつたのだから。

「……さて、そろそろ出てきたら？」

ボールのように吹っ飛んでいく男に一瞥もくれてやることなく、霊夢は背後へ視線を送る。

途中から誰かに見られていた。

「……あ、いや、えっと、その……こ、こんばんは」

すると物陰から出てきたのは、とてもじゃないがスキルアウトには見えない、人畜無害といった風貌をした黒髪でセミロングの少女。

気付かれていたのが予想外だったのかかなり動揺した様子で挨拶してくる。

「……誰？」

見覚えはない……はずだ。制服はあのツインテールの風紀委員の相方の花畑のものに似ているような気もする。

「えっと……この前、銀行強盗を倒した人……ですよね？」

対する少女はジト目でこちらを見る霊夢にびくりと身体を震わしながらもそう尋ねる。

「……誰って訊いたはずだけど？」

「あっ！ すみません！ さ、佐天涙子と申しますっ！」

「サテン、ねえ……やっぱ知らないや。一応訊くけど初対面よね？」

「は、はい！」

何を緊張しているのだろうか。体を固め、大きめの声を発する少女の態度に内心首を傾げながら霊夢は彼女の言う銀行強盗について思い返す。

最近の話だとすると十中八九あの発火能力者が居た三人組だろう。少女……佐天はその目撃者らしい。

「ふーん……で、何か用？」

「えっと、さつき怖い男の人たちに追いつけられているのを見てそれを追ったら……」

「あー、そういうこと」

納得する霊夢。野次馬根性か、正義感かは知らないが、たまたま現場を見られてしまったらしい。

となれば色々と厄介だ。

「もしかしてもう通報とかしちやった？」

「え？ いえ、まだですけど……」

「じゃあ、秘密にしといてくれる？ 通報されると色々と面倒臭いからさ」

他の風紀委員なら別に構わないが、またあのツインテールが来て説教が始まるのを危惧した霊夢はそう頼むが、佐天は困惑の色を隠せない。

「そうね。通報しなかったら出来る範囲でお礼してあげるわ。丁度晩飯代が浮いてるし」

「へ？ ほ、本当ですか？」

「本当よ」

あっさりとした様子で霊夢は取引を持ち掛ける。

いつもの気紛れなようであるが、霊夢としては意図せずとはいえ見るからに無害そうな幼気な少女にスキルアウト共を一人一人ボコボコにするというなかなかシヨッキングな暴行現場を見せてしまったことに対する申し訳無さもあった。

そして、しばらく考え込んでいた佐天の口から出たのは思わぬ言葉であった。

「それじゃあ……友達になってください！」

「え、やだ」

「ええっ!？」

ヒーローまたはヒロイン

圧倒的な光景だった。

まるでアクション映画の一場面を観ているかのように、佐天涙子は見入ってしまふ。突如として発生した銀行強盗。何気ない日常は一瞬で崩壊し、悲鳴が飛び交う。即座に対処へと向かう風紀委員の友人たちとは違い、一般人である彼女はただ茫然とし、困惑するしかなかった。

そんな中、彼女は颯爽と空から現れる。

三人の強盗を、それも一人は強能力者^{レベル}の発火能力だったにも関わらず軽快な動きで攻撃を避け、鋭く洗練された足技で文字通り蹴散らす。

そして、人質を取られるというハプニングに見舞われながらも瞬く間に強盗全員を無力化した。無論、人質になった子供も無傷だった。

出遅れた風紀委員の知人とは顔見知りだったようだが、少し会話したかと思えばその制止を振り切り、目にも止まらぬ速さで飛翔して飛び去って行く。

——カッコいい。

空の彼方へと消えていく彼女の姿をただ茫然とした様子で眺めることしか出来なかつた佐天だったが、その目は輝いており、いつになく興奮している様子だった。

当然だろう。幼き頃に夢描いた、絵空事だと思っていたモノが現実に存在していたのだから。

ピンチの時に颯爽と駆け付け、悪を打ち倒し、見返りも求めず去っていく。

それはまるで物語の中に登場する正義の味方、“ヒーロー”のようではないか。

この日、彼女は初めて“ヒーロー”を目撃したのだ。

「お願いです！・メアドの交換だけでも！」

「えー」

それから数日後。ずっと脳裏に焼き付いて離れなかつた正義の味方と再会したのは、もはや運命としか言い様がないだろう。

少なくとも佐天はそう確信している。

たまたま鉢合わせた女子高生の拉致現場。連れ込まれそうになって路地裏へと逃げ、追い掛けられる彼女を反射的に追った先で見たのは、予想に反して件の女子高生が鬼神が如き強さでスキルアウトの集団を蹂躪する様だった。

そこで漸く彼女がああ時の巫女なのだと気付く。

蝶のように舞い、蜂のように刺す。

元々はとあるボクシング選手のスタイルに対する言葉であるが、少女の動きは正しくそれを体現しており、その美しく魅せるような有り様に佐天はあの時のように再び見入ってしまう。――否、見惚れてすらいた。

スキルアウトたちは逃げ場無く取り囲み、金属バット等を振り回していたが、一撃も掠りもせず逆に少女の反撃カウンターによって繰り出された蹴りや打撃により一人、また一人と倒れていく。

何よりも驚くべきなのは、あれだけ動いていながら少女は特に疲労した様子も無く涼しい顔をしていたことだ。

それに見たところ能力を使っている素振りは見せていない。肉体強化系かと思ったが、空を飛んでいたことから違うだろう。にしてもあの華奢な身体からどうやってあんな力を出しているのか不可解であるが……。

気が付いた時には、全てが終わっていた。立っていたのは少女だけ。あの時と同じように一瞬の出来事だった。

強く、恐ろしく、そして美しい。

佐天の心はすっかり少女――博麗霊夢に奪われてしまった。

「何でもお礼してくれるって言ったじゃないですか!」

もっと知りたい。もっと関わりたい。

そんな思いが渦巻き、だからこそ、自らの存在に気付いた彼女が通報しない代わりに何か頼みを聞くと提案した時、真つ先に飛び付いた。

「いや、言つてないわよ。出来る範囲で、とは言つたけど」

一方、霊夢は怪訝な表情を浮かべる。あまりにも予想外な頼みだったため咄嗟に断つてしまった。

戸惑うのも無理は無い。初対面でいきなり友達になろうなどと宣う人間など彼女の記憶の限りでは存在していなかったのだから。

その心の内を知らない身からすれば、佐天はただの変人にしか見えなかった。

「そ、そんなあ……」

目に見えて落ち込む佐天。どうにかお近づきになりたくてアタックしてみたが、いきなり友達になってくださいというのは失敗だったか。

確かに新手のナンパみたいだったと佐天は己の短絡的な行動を反省する。

「まあ、別に良いけど」

かと思えば、一転して霊夢は了承した。

「えっ!?! 良いんですかっ!?!」

「ええ。減るもんじゃないし。むしろ飯を奢るよりはお得だわ」

「本当ですか! ありがとうございます!」

即答で拒否されてしまったかと思えば、あっさりと了承されたことに困惑しながらも満面の笑みを浮かべて歓喜する。

その様子を見て霊夢は大袈裟だなど思いつつも照れ臭さを隠すように頬を掻く。

そんなに自分と友人になりたかったのか。どうもむず痒い気分である。

「けどじゃあ何でさつき断ったんですか?」

「なんかつい。貴方ってどうも面倒臭そうな雰囲気あるし」

「酷いっ!?!」

実際佐天は生粋のトラブルメーカーなため霊夢の勘は流石と言えよう。

「で、メアドって何?」

「え? 携帯のメアドですよ、アドレス」

「アドレス? あー、メール送るのに必要な奴ね。ほい」

すると納得した様子で霊夢は裾の中から(どうやって所持していたのだろうか?)折り畳み式の携帯電話を取り出し、乱雑に投げ渡す。

「わっ……ってかなり古い機種ですねこれ……」

慌ててそれをキャッチした佐天は学園都市どころか外部においても何世代か前であるろう機種に驚く。所々傷があったり開いてみれば画面が少し割れていたことからかなり使い込まれているようだ。

「そう？ お爺ちゃんと同じ機種だけ？」

「お爺ちゃんとおそろい!？」

「そのメアド交換って奴、やっといてよ。通話とメールの仕方しか分かんないから私」

「ええ……いつの時代の人ですか……」

「明治初期くらい」

「……えっ!？」

「冗談よ」

「な、ちよ、驚かささないでくださいよ」

意外とユーモアのある人なのだろうか。冗談なんて言うタイプに見えなかったため佐天は驚く。

先程までの超然とした雰囲気はすっかり消えていた。まるでスイッチが切り替わったようだ。

「……あ、今更ですけどお名前の方お伺いしてもよろしいでしょうか？」

二つの携帯を操作しながら登録する際の名前を打つところでもまだ霊夢の名前を訊いていないことに気付いた佐天が尋ねる。

「博麗霊夢よ」

「はくれないいむさん……漢字はどう書くんですか？」

「博識の博に端麗の麗と書いて博麗。幽霊の霊に夢と書いて霊夢」

「成る程……あ、私は佐賀の佐に天高くの天に佐天で涙の子と書いて涙子です！ ……はい。登録出来ました」

「あながと」

メールアドレス、ついでに電話番号の交換を終え佐天が携帯を手渡すと霊夢は再び裾の中になってしまう。そんな所に入れながらあれだけ動いて落としたり壊したりしないのか不思議であった。

「それじゃあ……えっと、博麗さん」

「霊夢でいいわよ。苗字で呼ばれるのってなんか嫌だし、そつちも涙子って呼ぶわ」

「では、霊夢さん！ 改めてこれからよろしくお願いします！」

「……まあ、よろしく」

こうして佐天は念願の“ヒーロー”とお近づきになれるというビッグイベントを成し遂げ、霊夢は初対面の少女と友達になるという珍事を経験することとなる。

尤も、彼女の覚えている存在の中で彼女が“友”だと認めた存在など誰一人としていないし、目の前で澆刺に笑う佐天に関しても形ばかりで本当の友情が育まれるかは今後次第であった。

ただ少なくとも、多少は騒がしくなるだろう。

——よう、?????

何故か、魔女の尖り帽子がやたらと似合う金髪の少女の姿が脳裏に過った。

まだ霊夢は彼女のことを、思い出せない。

「……つてな感じなことがあったんだけどどうすればいい?」

「いや、何で上条さんに相談するのですか?」

昼下がりの学校にて。霊夢はまたしても遅刻してしまい、机に突っ伏しているツンツン頭の少年、上条当麻にあの夜の出来事について会話をしていた。

「だって他の二人よりはまともだし常識あるでしょ。知能レベル的な意味だと断トツの最下位だけど」

「誉められたかと思ったら辛辣に貶されたっ!? いや、比較対象があいつらな時点で誉

められてすらないよなっ!」

霊夢と上条は席が隣同士で住んでいる学生寮も近く常連のスーパーも同じなためかそれなりの付き合いがあり、高校ではこうやって暇な時は結構話す仲であった。

「つてか上条さんがビリビリ中学生に追い掛けられている間にそんなことしてたのかよ……」

「ビリビリ中学生?」

聞き慣れぬ単語だ。ツンデレ女子の類義語だろうかと霊夢が首を傾げていると上条が経緯を説明する。

何でも不良に絡まれていた常盤台中学の制服を着た女子生徒を助けようとしたら急に怒り出して電撃を浴びせられた挙句に追い掛けられたらしい。

「ふーん……そりゃ随分と乱暴な奴ね」

誰かを不良から守って追い掛けられたり痛め付けたりといった話は今までも飽きるほど聞いてきたが、よりにもよって助けた相手に襲われるというのはなかなか珍しく、初めて聞くパターンだった。

もし霊夢ならば両者とも成敗していたことだろう。

「だよな? 本当に酷い目に遭った……不幸だ」

「どうせあんたのことだから何か粗相をしたんでしょ? トキワダイつて有名なところ

みたいだし」

「うっ……身に覚えは無いんだが……」

「ま、どちらにしる理由が何であれ他人に平気で電撃浴びせる時点で論外なのはそれだけで」

常盤台中学なる場所は由緒正しきお嬢様学校で学舎の園という話を青髪ピアスから聞いたことがあったが、どこでもそういう馬鹿は居るといふことだろうか。

聞く限りでは上条に非があるようには思えないし、例え何かやらかしていたとしても少なくとも彼は問答無用で電撃を浴びせられるようなことをするような人間ではなく、そのビリビリ中学生とやらは他人に平気で能力を使用してしまふような短絡的な人物なのだろう。

「毎度の事ながら大変ねえ……けれど、あまり卑屈にならないようにね。不幸とは心が作り出す邪神。心持ち次第でどうとでもなるんだから」

「え？ お、おう……」

そう励ましながらも上条の場合は少し度が過ぎていくように思えなくもない。

厄除けは効果が無く、他に思い当たる不幸への対処と言えば富と夢。しかし、上条のような貧乏学生が富など持ち合わせているはずもなく、況してやこの科学ばかりが溢れる街で夢や希望など――。

だが、そんな街であるが故に、上条は疫病神扱いされず普通の生活をしていられるのであり、それが逆に忌々しかった。

「あの博麗がこんなことを言うなんて……急にどうしたんだ？ 何か悪いモンでも食ったのか？ それともまさか偽者——」

「あ？」

「いえっ！ 何でもございませぬ！ 有り難きお言葉に感謝感激ですとも！」

一睨みすれば即座に頭を下げる上条。その情けない反応に折角の励ましの言葉を無下にされた怒りはすぐに冷める。

これが幾度の不幸に見舞われ続けた上条当麻が培った処世術である。特に感情の起伏が激しく、一時的な怒りならばすぐに忘れてしまい、突発的に思い出すことはあれど後には引き摺らない霊夢には効果的だった。

怒っていたかと思えば次の瞬間には笑っていることなど日常茶飯事なのだ。

「つたく……次なんかあったら言いなさい。ボコボコにしてあげるから」

あつさりど、何てことのないようにそう言う。他人に無関心な霊夢だが、少なくとも上条は知らない仲ではなく、何かあれば手助けしてやるくらいの義理はあった。

「ははは……博麗なら本当にやりそうで恐いな……」

「？ 当たり前でしょ」

「いや何言ってるんだコイツみたいな顔しないで。こっちの台詞だから。思考が世紀末過ぎるだろ」

流石に冗談だろうと思ひ、苦笑いを浮かべていた上条だが、どうやら本気だったようだ。

どうにも彼女は何でも暴力で解決したが。無論、そんな方法は好んではないのだろうが、然れど一番手つ取り早く、それ以外の手段を興じる面倒臭さが勝ってしまうのだ。

実際彼女ならやりかねないとその気性の荒さをよく知っている上条は危惧する。かの鬼巫女なら喧嘩を売られれば相手がスキルアウトだろうが常盤台のお嬢様だろうが、一片の容赦もしないだろう。

「……で、話を戻すけれど」

「ん？ ああ、年下の女の子に友達になろうって言われて実際になっちゃった話だっか」

「そ。どうすればいい？」

「どうすればって……聞く限りじゃあ悪い子じゃなさそうだし普通に仲良くすればいいじゃないか」

サテンルイコなる女子中学生。聞く限りでは霊夢の熱烈なファンのようにも思えた。

「霊夢は本人にその気はないとはいえ日常的に人助けを行っているため人気が出るのも無理はないと上条は納得していた。尚、自分もまた助けた者たちから好意を抱かれていますなどは微塵も考えちゃいない。」

「仲良く、ねえ……そんなこと言われても友人なんて生まれてこの方一人も居なかったからそこら辺が分からないのよ」

「そうなのか？ まあ、確かに博麗みたいな奴と友達になれる奴なんて限られてくるよなあ……そう考えるとなかなかの勇者だなそのサテンつて子」

「うーんと唸りながら考え込む上条。何気に滅茶苦茶失礼な発言をされたが、霊夢は喧嘩売ってんの？ と内心思いながらもそこら辺は一応自覚しているのでとりあえず聞き流す。」

「上条だからすんなり信じたが、これが土御門や青髪ピアスだったらあの博麗霊夢に友人が出来たなどまず耳を疑い、今日がエイプリルフルかと確認していたことだろう。」

「そして、事実だと知れば爆笑しながらからかい、キレた霊夢に折檻されたに違いない。「そうだな……上条さんは男ですからよく分かりませぬが女子同士で遊ぶなら……シヨツピングとかか？」

「シヨツピング。買い物のことね」

「後はカラオケとかゲーセンとか……思い当たるのはそのくらいだな」

「ふうん……」

霊夢は訝しげな反応をする。はつきり言って全く楽しそうには思えなかった。

しかし、そもそも一般論というものを知らず、価値観が他人とずれている彼女の思考と食い違うのは当然の帰結であり、そういうものなのかとすぐに納得した。

「というか、俺なんかよりも吹寄とかに相談した方が良くないか？ 同性だしそういうの詳しいだろ多分」

吹寄制理。厳格な性格であり、不真面目な霊夢を目の敵にしているが、それはそれとして同性の中では一番会話しているクラスメイトだ。

「……それもそうね。けどまあ期待してなかった割にはマシな意見が出て良かったわ」
「期待してなかったのかよ……ん？」

待てよ、と上条は何かに気付く。

（これはもしや博麗を真人間にするチャンスなのでは？）

恐ろしい怪物が友情によって人間性を獲得するのは物語においてはよく聞く話だ。

ならば佐天なる少女と親交を深めることによって霊夢の問題だらけの性格が多少なりとも改善されれば自分や小萌を筆頭とした教員一同の胃を守ることに繋がるかもしれない。

（よし！ この上条さんがいつちよやってやりますよ！ 待っててください小萌先生

！)

そう決意し、奮起する彼を他所に、霊夢は唐突に携帯電話を取り出し、ポチポチと弄り始める。

「……よし」

「ん？ どうした？」

「早速誘ってみたわ。ショッピングって奴に」

「行動力の化身かよっ!？」

どうやらメールしていたようだ。思い立ったが吉日とばかりに彼女は例の友人とショッピングへ行く約束に漕ぎ着ける。

驚く上条だが、向こうが積極的なのはむしろ好都合と言えよう。

普段の霊夢ならば考えられないことだ。何気に彼女も初めての友人というものに興味を抱いているということだろうか。

ふと、上条は思う。目の前の少女は友人は初めてだと言った。ならば自分たちのことはどう思っているのだろうか。

「……なあ、博麗」

「あん？」

「お前がどう思ってるかは知らないが……少なくとも俺はお前のことをその、友達だと

思つてるからな。多分土御門や青ピも」

「……………そう」

淡泊な反応。それに呆気にとられながらも彼女がそういう奴だと知っている上条は気にすることもなく、気恥ずかしげに笑った。

それ故に、彼は気が付かない。霊夢の眼が確かに揺らいだことに。

「……………」

博麗霊夢は「友」というものを知らない。居たのかもしれないし、居なかつたのかもしれない。それらは忘却の彼方へと追いやられてしまった。

そのため何を持つて友と判断するか基準が分からなかつたし、その必要性もまた感じられなかつた。

しかし、霊夢は上条の言葉を受け、思い返す。もはや日常となつた馬鹿共とクラスメイトたちとの騒がしく、くだらない日々を。

友とは、ああいうものなのだろうか？ 本当に？

「……………ねえ、当麻」

「はい？ 何でせうか？」

先の言葉への返答かと上条はドキリとしながら身構える。しかし、霊夢が切り出したのは全く関係のないことであつた。

「シヨッピングって具体的に何すんの？」

「……そこからかよ。分かりました、この上条さんがご教授してやりますよ」

こうして上条は先程まで頭を悩ませていたビリビリ中学生のことなどすっかり忘れて常識を知らない目の前の少女にシヨッピングが何たるかを説明する。因みに内心では博麗霊夢真人間化計画も企てていた。

その後、話を聞き付けた土御門と青髪ピアスまでもが乱入し、ついでに吹寄も交えて授業が再開するまで混沌とした談義が続くのであった。

友人

白井黒子には、気に食わない人物が居た。

いつもいつも、まるで先回りしてるかのように自分たちが駆け付けるよりも早く事件や騒動を解決してしまう空飛ぶ紅白の巫女。

先日の銀行強盗においても手柄を横取り……ではなく、いきなり現れ、強盗たちを瞬く間に無力化し、そのまま逃げ去った問題人物である。

名を、博麗霊夢。

世界に五十人しか居ない希少な「原石」の一人であり、巷では「鬼巫女」と恐れられている少女だった。

（あんの巫女擬き……！ 次会ったら今度こそ取っ捕まえてやりますわ……！）

風紀委員活動第一七七支部。

柵川中学の一室にある風紀委員の活動支部の一つ。そこでティーカップに注がれた紅茶を啜りながら白井は忌々しげな表情を浮かべる。

思い出すだけでも腹立たしい。今回こそは逃がすまいと誓っていたにも関わらずま

んまと逃げられてしまった。

相手は確かに身体能力に優れているとはいえ所詮は異能力者^{レベ}という侮りが心の何処かにあつたのかもしれない。

それは無理もないことだろう。低能力者^{レベ}よりは上とはいえそれでも日常生活においては役に立たない程度の強度。大能力者^{レベ}のテレポーターである白井には逆立ちしても敵わぬというのがこの街での共通認識であるのだから。

だが、白井は知っていたはずだ。博麗霊夢はそのような常識など容易く覆す存在だということ。

空を飛ぶだけというあまりにも限定的な能力。それでもあれだけの速度と高度による飛行が可能であるのなら強能力者以上、下手すれば大能力者に分類されるだろう。あの華奢な肉体からは考えられない身体能力と力の強さも飛行の際の推進力を利用しているのだと白井は予想していた。

明らかに異能力者という枠組みから越えている。ならば詐称かと思いきや書庫^{バンク}のデータベースにもきちんと記載されており、現に彼女が通っている高校も無能力者から異能力者までが多く在籍する場所だった。

原石だからか？ 否、解析不能である。第七位^{ナンバースピ}が超能力者の末席に居るのだ。その道理は通じない。

恐らくは身体測定の際に手を抜き、敢えて低いレベルで登録させている。

ならばその理由は？ 相手を油断させる為？ 否、彼女はそんな姑息な真似はしようとも思わないだろう。

では何故――。

「なんか機嫌が悪いですね、白井さん。また博麗さんのことでも考えているんですか？」

「……よくお分かりで。初春」

「あはは。そりやいつものことですからね……」

カタカタと手元のノートPCを弄りながら話し掛けるのは頭に花畑が咲き誇る少女。

初春飾利。白井の同僚であり、パートナーであった。

「そろそろ本格的に対処しなければいけませんの。これ以上の勝手は風紀委員の沽券に
関わりますわ」

「そんな大袈裟な……別に悪いことはしてないじゃないですか。むしろ仕事が減って楽
ですよ」

「黙らっしゃい！ 何故あなたは毎回そうやって楽観的ですか。固法先輩も元部下だから
対応が甘く感じられますし……」

「うーん……まあ、確かにそうかもしれないんですけど……」

白井の言葉に初春は消極的な態度を見せる。何せ博麗霊夢が相手にしているのはス

キルアウトや犯罪者ばかりでその大半が正当防衛であり、そうではないのも他者を被害から守ったり犯罪を未然に防いだりといったのが殆どだった。

その存在は世間にも半ば都市伝説扱いされながらも周知されており、ネット上では彼女のことを通り魔と揶揄する者も居れば正義の執行者と称する者もあり、一部ではカルト的な人気を誇っている。風紀委員の中にも彼女の行為を肯定する者が居る始末だ。

「第一何なのですかあの破廉恥な紅白は！ 本物の巫女さんに失礼とは思いませんの！」

「あー、確かに変な格好ですよ。腋を出してるのは勿論のこと袴じゃなくてスカートです。靴もブーツみたいな履いてますし……」

あれを巫女装束と言い張る勇氣と羞恥心の無さは凄い。しかも腋から覗かせる下着はスポブラかと思いきや何とサラシを巻いてるだけなので変質者一歩手前の痴女である。

因みに下はドロワーズなのでご安心を。夏だと蒸れるからかスパッツだったりするが。

(博麗さん、か……苦手なんですよねあの人……)

初めて会った時のことを思い出しながら初春は苦笑いを浮かべる。

噂に聞くヒーロー。一体どんな人物なのかと当時の彼女は内心ワクワクしていた。

そして、実際に会い、その幻想は打ち砕かれた。

整った美しい顔立ち。腋が露出した奇抜な巫女装束は、しかしやたらと似合い、映える。フワフワと空を舞うその姿は天女にすら見え、見惚れてしまう。

しかし、次に感じたのは恐怖だった。

研ぎ澄まされた刃物のように近寄り難い雰囲気はあからさまに他者を拒絶していた。にも関わらずこちらを威圧している訳ではなく、特に意識せず自然体の状態がそれなのだ。

天上天下唯我独尊。目に映る何もかもが有象無象。そう言わんばかりの冷め切った瞳で見据えられた際、初春は心臓が止まるかと思った。

犯罪者を叩きのめしている時も、自分や白井と話している時も、助けた相手に声をかける時も、変わらぬ調子で、まるで何てことのないことのように同じ表情。動機を問えば「邪魔だったから」と、「ただ鬱陶しかったから」と当然の如く素面で答える。

その有り様は、楽しんでいるようにも、怒っているようにも、哀しんでいるようにも、憂いているようにも、そもそも何も感じていないようにも見えた。

初春にとつては今まで会ったことのないタイプの人間であり、そして現在までも彼女と同じような人種とは会ったことはない。

——気味が悪い。

自分でも驚いた。初対面の人物に対してこのような感情を抱くなど。

そこから自己嫌悪に陥るものの未だに彼女への苦手意識は拭えていなかった。

「……まあ、一先ず博麗さんのことは置いていて、それよりも今は例の連続虚空爆破事件グラビトンに集中しましょう」

「む……」

そんな思考を中断し、初春はそう言つて話題を変えた。

虚空爆破事件グラビトン。

それは先日から世間を騒がせている連続爆破事件である。量子変速シンクワットンという能力によりアルミを基点に重力子を加速させ、一気に放出させることで爆発を引き起こしていると推測されている。

アルミといえば缶や車両、果てはルビーやサファイア等々生活に何かと馴染み深い金属であり、それはつまりありとあらゆる場所が爆破現場に成り得るということだ。

故に、警備員や風紀委員は一刻でも早く事件を解決するべく捜査にあたっているのだが、重力子の増大から事前に爆発物の大まかな位置は特定できるものの、爆発の爆破する時間や場所に法則性が無いため犯人の特定にすら至っていない。

加えて、唯一の容疑者であった大能力者の量子変速である釧路帷子も事件発生前から原因不明の昏睡状態であり、物理的に犯行は不可能であったため捜査は一向に進展せず

完全に行き詰まっている状態だ。

「せめてもう少し、手掛かりがあれば……」

「はい。もう九件目ですが、分かっているのは大能力者以上の量子加速ということくらいしか……」

「でも書庫に該当者は無し。急激にレベルアップした能力者！ ……というのは現実味が無さ過ぎですわよね」

「一連の事件に何か関連性があれば良いんですけど……完全に無差別だったらどうしようもありません……」

二人して大きな溜め息を吐く。既に九件目もの犯行にも関わらず未だに事件解決の糸口さえ見つけられていない状況に彼女らは頭を悩ませる。

(……私たちはいつも来るのが遅い、ですか)

ふと、初春は思い出す。先程話題にしていた巫女がかつて口にした言葉を。確かにその通りだ。

風紀委員はあくまで治安維持組織。警察と同じく事件が発生し、通報を受けてから動く。そのため犯罪や事件を未然に防ぐといったことは難しい。現に今回の事件も後手に回ってしまったている。

初春が白井とは違い、霊夢のやっていることを看過しているのにはそういった理由も

あったからだ。彼女の迅速な対応のお蔭で救われた者たちや被害を免れた者たちはきつと多いだろう。

(今回の事件も博麗さんならもしかすると……いえ、流石にすがってしまふのはいけませんよね)

希望的観測。そんな不確かな期待を抱いてしまうくらいには初春は霊夢のことを恐れながらも買っていたが、彼女が行き過ぎた行動をしているのもまた事実。風紀委員として頼ったり任せてしまうのは違うだろうと自身を戒める。

そんなことを考えていると、ポケットに入れていた携帯から通知音が鳴った。

「ん？ あ、佐天さんからメールです。何々……」

親友からのメール。確認してみれば、その内容は今度の週末に自分と白井と御坂、それから最近知り合った友人を交えて、一緒にシヨツピングに行こうというものだった。

現状そんなことをしている暇は無い。と、言いたいところだが、思えば彼女らとも久しく遊んでいなかったような気もする。ここぞずっと働き通しで疲労も溜まっているし、息抜きには丁度良いかもしれない。

暫く考えてから、初春は今受け持っている仕事に片付いたら行くという趣旨のメールを送るのだった。

「あら？　白黒の相方じゃない。相変わらず咲き誇ってるわね」

「……………え？」

そして、当日。意気揚々と待ち合わせ場所へとやって来て待機していた初春は横から声を掛けてきた紅白な人物に目を剥いた。

「は、博麗さん……………」

例の奇抜な巫女装束。

多くの通行人の視線を集めながら博麗霊夢がそこに立っていた。

「何よ、妖怪にでも出会したみたいな顔して」

「あついえつまさかこんな所で会うとは思わなくて……………あははは」

まさかの人物の登場に一瞬パニックになりながらもどうにか心を落ち着かせる。

同じ学園都市に暮らしているのだ。こうして偶然出会すことは何ら可笑しいことで

はない。

「それで……ここには何の用で？ まさかまた何か騒ぎがあつたとか……」

「別に。友人と待ち合わせしてるだけよ」

「へ、へえ……そうなんですか……」

これまた偶然。ここで待ち合わせているということは彼女も友人とシヨツピングでもするつもりなのだろうか？ 何というかそのようなものとは無縁なイメージだったため意外だった。

というか、いつも見慣れた格好なため疑問に思わなかったが、本当に普段着としての巫女装束を使用しているようだ。

「奇遇ですね、私も友達と待ち合わせを——」

動揺していた初春は気付かなかった。

自身の背後に怪しい人影が忍び寄っていたことに。

「う……く……は……る……つ……！」

「へ？ ——?!?!?!」

掛け声のように名前を呼ばれ、何事かと思つた矢先に、初春のスカートが勢いよく捲り上がった。

「……母？」

こてん、と霊夢は首を傾げる。対する初春はしばらくの間現実を受け止められず、ひらひらとスカートが自由落下により元の位置に戻った頃、ボンツと顔を真つ赤に爆發させ悲鳴を上げる。

「おおく 今日もちご柄かあ〜」

「さつ、ささささささ、佐天さん！ いきなり何するんですかもう！」

振り返ればやはりそこには親友の姿が。顔をこれでもかというくらい赤面させてぶんぶん両手を振り回して抗議する初春のリアクションに内心癒されながら佐天は笑顔で応対する。

「……何してんのよ」

一方、霊夢は呆れた様子でその光景を見ていた。

「あ、霊夢さん！ もう来てたんですね！」

「ええ。こういうのは五分前には到着しておくといいでしょ？ ……いえ、私も今来たところって言うべきだったかしら？」

「いや〜そんなデートじゃないんですから」

すると霊夢の存在に気付いた佐天が彼女へ手を振った。その光景を見て初春がぴりりと固まる。

まさか彼女が言っていた最近知り合った友人とは。いや、そんなはずはない。

「え? ……えっ!」

「あ、初春。知ってると思うけど一応紹介するね、ついこの前私とベストフレンドになった博麗霊夢さんです!」

「ベストかはともかく一応フレンドね」

戸惑う初春に佐天が大仰な手振りで紹介し、霊夢もまたこれに頷く。

瞬間、初春は驚愕に目を見開いた。

「ええええええええええええ!」

サプライズ成功。

顎が外れるのではないかというくらいの絶叫をあげる初春の姿を見て佐天は満足げにほくそ笑む。

彼女は霊夢と以前から面識があるであろう風紀委員の二人を驚かせ、その反応を楽しむ為に敢えてその存在を伏せていた。

結果としては大成功だが、もっと面白いリアクションをしたであろう白井が仕事が付かず、来れなかったのは非常に残念だった。

「ほんつとビックリしました。まさか佐天さんが博麗さんといつの間にか友人関係になつていたなんて……」

「えへへ。でしよでしよ」

一体どういふことかと詰め寄り、事の経緯を聞いた初春は漸く落ち着きを取り戻す。

無論、風紀委員である彼女にあの夜の出来事について馬鹿正直に話す訳には行かなかったので出会いはナンパされるところを助けられたなどそれとなく自然に嘘を織り混ぜて教えた。霊夢もこれに「あー、そうね」と適当ながらも話を合わせる。

(本当なのでしょうか……？　いくら佐天さんが社交性抜群だとしても俄には信じられませんか)

鬼巫女としての霊夢を知る身としてはとてもじゃないが、考えられない。いつも自分をグイグイ引つ張っていく佐天だが、流石の霊夢相手では軽くあしらわれるイメージしか湧かなかつた。

「……要するに、こいつが涙子が言つてた他に来る子つてこと？」

「はい。初春とは同じ中学で親友なんですよ」

「ふーん……じゃあ、もしかして白黒の奴も来るの？」

初春の存在から、ですのものと喧しいツインテールの姿を連想してしまう。

「いえ。白井さんは都合が合わなくて来れなかったみたいなんですよね」

「ああ、そう、誘いはしたのね」

すると案の定だった。口振りからして彼女とも佐天は友人関係にあるみたいだ。

「やっぱり駄目でした？」

「あいつと会うと面倒臭いのよねえ。いつも説教してくるし。まあ、閻魔や仙人とかよりはマシだけど」

「えんま？ せんにん？」

誰かのニックネーム、または名前だろうか。この街には意外と変わった名前の人物が多いため佐天は一瞬首を傾げるもそう判断する。

「そうですよ佐天さん。ただでさえ今の白井さんは博麗さんを目の敵にしているのに……」

「大丈夫だってメイビー。話してみれば案外仲良くなるかもよ？ 霊夢さんも今後白井

さんが来ることになったとしても別に構いませんよね？」

「いや、良い訳が……」

「ええ。別に良いわよ、好ましくはないけれど」

「良いんですかつ!？」

あつさりとした了承の言葉。確かに霊夢は白井には苦手意識を抱いており、出来ることならば関わりたくない。しかし、逆に言ってしまうはその程度であり、佐天がどうしてもと言うのなら、別に強制するつもりはなかった。

「ふふん。霊夢さんはこういう人なんだよ初春」

「何で得意気なのよ」

ジト目で睨む霊夢。実のところ今日の佐天はいつもよりもやたらとテンションが高かった。

何せ一方的に友達になった矢先に、霊夢の方から誘ってきてくれたのだ。てつきり向こうにその気は無いとばかり思っていたため佐天はメールを見た瞬間に即返信し、嬉しさのあまりそれはもうはしゃいだ。

そして、同時期に働き詰めの初春と白井を労う為のショッピングを企画していたのでドツキリも兼ねてそれに霊夢も連れて来ることにし、今に至るのであった。

「で、もう一人は？」

そんな様子に呆れながらも霊夢はまだ見ぬ友人について尋ねる。恐らく彼女らと同じ中学生だろう。

「多分もうすぐ来ますよ。その人は白井さんと同じ常盤台の先輩で何と――」

「あ、佐天さーん！ 初春さーん！」

すると噂をすれば何とやら。背後から佐天と初春の名前を呼ぶ声に反応し振り向いてみれば一人の少女が手を振りながら走ってこちらへ近付いてきていた。

「……誰？」

「ん？ なつ、あんたこの間の……！」

現れたのは、短い茶髪の少女。佐天たちを視線に捉えていた彼女は霊夢の存在に気がつき、その姿を見るなり驚きの表情を浮かべる。

対する霊夢もまた常盤台中学の制服を纏ったその姿に既視感を覚えたが、どこで会ったかは思い出せない。

「もしかして佐天さん。最近知り合った友人って――」

「お、察しが良いですね御坂さん。そう！ 我がベストフレンド・博麗霊夢さんです！」

「えっ？ そ、そう……」

「毎回その紹介やるの？」

茶髪の少女――御坂と呼ばれた彼女は何故かハイテンションな佐天の紹介に困惑してしまふ。

「で、誰なのよ？」

「フツフツフツ……よくぞ訊いてくれました！」

霊夢が問い掛ける。すると佐天はにんまりと笑みを浮かべ、これまた大仰な態度で語り始めた。

「この御方は『御坂美琴』さん！ かの有名な超能力者の超電磁砲です！」

「ちよ、止めなさいって佐天さん……」

「へー、そうなの」

ジャジャーン！ とでも言いたげな佐天の紹介に少女改め御坂は恥ずかしがる。

そんな彼女らに対する霊夢の反応は特に驚く訳でもなく、非常に淡泊なものだった。

「ありや？ リアクション薄くないですか？ レールガンですよレールガン！ 学園都

市第三位！ 常盤台中学のエース！ 誰しもが憧れる電撃姫！」

「だから何よ。そんな騒ぐようなことでもないでしょ別に」

学園都市においては超が付く程の有名人であるにも関わらずどうでも良さげな反応。ただでさえ霊夢はそういった情報には疎く、況してや超能力者など顔見知り以外は顔や名前すらも知らず、当然御坂美琴という名にも聞き覚えはなかった。

しかし、超能力者ならば先程から感じる妙な既視感にも納得が行く。恐らくテレビか何かで見たことがあったのだろう。本名すら定かではない一方通行はともかく一部の超能力者はメディアへの露出も激しく学園都市の広告塔にもなっている。

「へえ……」

そんな態度に対し、御坂は僅かに顔をしかめるもすぐに笑みを浮かべた。

「改めて御坂美琴よ。よろしくね、空飛ぶ巫女さん？」

「ええ。よろしく」

何やら含みのある言い方だが、霊夢は差して気にする様子も無く、そう返す。

——こうして、巫女と電撃姫は出会い、彼女らの長きに渡る因縁が始まるのであった。

買い物

「そういえば霊夢さんって、普段からその格好なんですか？」

セブンスミストへ行く道中。今更ながら気になっていた疑問について佐天は尋ねる。

制服である他三人と違い、紅白な巫女装束を着た霊夢はその純和風な美貌も相まって
通行人から非常に注目を集めていた。それらの視線はすぐに消えるが、すれ違う度に一
度は視られるため一緒に居る彼女らとしても何とというか、恥ずかしい。

「ええ。私、これと学校の制服しか持っていないから」

「ええっ!?! マジですかっ!?!」

「あ、誤解しないでよ。ちゃんと予備5着を着回してるから」

「いやそこに驚いた訳ではなくて……っつか結構多いですね5着って。道理で胸元のり
ボンが青かったり黄色かったり……」

「逆にその巫女服はどこで買ったのよ？」

「行き付けの仕立屋で一から作ってもらってるわ。それなりに値は張るけどね」

「まさかのオーダーメイドッ?!」

「なんか……色々と凄いわね……」

「? どうしたのよ」

まさかの二種類。私服に限ればこの巫女装束一種類のみしか所有しておらず、しかもわざわざオーダーメイドで製作していたという事実には一同は絶句する。

そんな彼女らに反応に、霊夢はただ頭の上に疑問符を浮かべるだけだった。

「……ところで何で他の服を買わないんですか?」

「何でって、そりゃ特に必要性を感じなかったからよ。金も掛かるしわざわざ買いに行くのも面倒だし」

「ええ……」

女子としてそれはどうなのだろうか。

いきなりシヨップピングに誘ってくるくらいだからつきりこういう女の子らしいことも意外と嗜んでいるかと思っただが、ファッションに対して全く関心が無い様子に流石の佐天も困惑の色を隠せない。

別に衣類を買うことだけがシヨップピングという訳ではないのだが、女子同士のシヨップピングで買う物と言えば大体衣類か化粧品だろう。

「因みに霊夢さんは今回行く店は洋服店なんですけど、そこで服をお買い上げになられる気は?」

「うーん……正直無駄な買い物な気もするけれど、シヨツピングつてのはそういうもの
なんでしょ？　なら、多少は奮発するわ」

恐る恐る訊いてみれば消極的ではあるものの服を買う意欲はあるようで安心した。

「絶対！　買いましょー！　霊夢さんに似合う服を！」

「？　ええ。分かったわ」

佐天は決意する。必ずや彼女にまともな服を着せようと。色々な意味で勿体無いし、
あの巫女服のままでは今後も一緒に遊ぶ際に視線を気にしなければならぬ。

(……やっぱ変な人ね)

一方、その光景を眺めて御坂は内心そんな感想を抱く。

先日の銀行強盗。彼処には御坂もたまたま現場に居合わせていた。初春や佐天と初
めて出会い、彼女らと白井の四人で親交を深めていた最中の出来事。突然のことにも関
わらず迅速な対応を開始する風紀委員の二人を差し置いて誰よりも早く駆け付けた不
思議な少女はそれはもう見事な手際で三人の強盗を無力化した。

あの身体能力の高さには、御坂も目を見張った。顔見知りのようである白井に何者か
と尋ねれば不機嫌そうにヒーロー気取りの問題人物だと告げられる。彼女があんな態
度を他人に取るのを見たのは初めてだったのでそれ程かと驚き、それ故に彼女への印象
は良いか悪いかで言えば後者であった。

しかし、こうして言葉を交わすと、また違った印象を受ける。年齢を尋ねれば意外なことに自分よりも二つ上で高校生。背丈にあまり差がなかったのでつきり同年代かと思つた。

そして、この学園都市で巫女装束なんてものを着用している時点で察していたが、なかなか常識外れというか、浮世離れしている。自分が超能力者であると知つても驚くどころか興味すら微塵も見せないのには流石に面食らつてしまった。

そんな態度は普通ならば気に障るものであるが、御坂の場合はむしろ逆であり、目の前の不思議な少女への興味をより駆り立てられる。

(博麗霊夢さん、か……今度機会があつたら勝負を挑んでみようかしら)

犬猿の仲の某女王が聞いたら脳筋過ぎると呆れそうな思考回路。そんな御坂を他所に、先程から黙っている初春は何とも複雑そうな表情だつた。

(なんか……距離近くないですか?)

つい最近知り合つたとは思えない程に、霊夢と佐天は打ち解けているように見えた。これが別の人物ならば佐天のコミュニケーション能力の高さに感服するのだが、相手が常日頃から苦手意識を持つている博麗霊夢であればまた変わってくる。

あまつさえ下の名前で呼び合っているのだ。自分は苗字呼びなのに。付き合いが長く、佐天のことを親友だと思つている初春はその異様な距離の近さが気に食わず、小さ

な嫉妬心を抱いてしまう。

「ん？ どうしたの初春？ 具合悪い？」

そんな彼女の様子に気付いた佐天が尋ねる。

「ふえ？ あ、いえっ何でもありませんよ、ちよつとブーツとしてただけです」

「大丈夫？ やっぱり風紀委員の仕事で疲れてるんじゃない？」

「あはは……そうかもしれないね……」

何とか笑つて誤魔化す初春。実際、連日働き詰めだったのは事実であった。

「こき使われて大変ねー」

一方、霊夢は完全に他人事だった。

「まっ 最近の初春って女捨ててるとこあるし、今日はゆっくり楽しみなよ」

「そうですね……ありがとうございます佐天さん。……つて女捨ててるってどういうこ

とですかっ!？」

セブンスミスト店内にて。

少女四人は和気藹々とシヨツピングを楽しんでいた。

「いやー！ 流石霊夢さん！ 何でも似合いますね！」

「はい！ 凄いです！」

「おお……本当に見違えたわね」

試着室から出てきた霊夢の姿に佐天と初春、御坂が称賛の声をあげる。

ファッションに拘りどころか興味すら無かった霊夢は当然どんな服が欲しいとか、どの服が良いというのも全く分からなかったためとりあえず今時の女子である佐天らに全てを委ねることにした。

その結果、こうして彼女は着せ替え人形にされている訳である。

何せ素材が良いのだ。適当に選んだ組み合わせでも実に映えるため途中から佐天は勿論のこと店に入るまでは複雑な心境だった初春も楽しくなってしまうていた。

(博麗さん……こうして黙っているとクールビューティな和風お嬢様って感じでこれはこれでなかなか……)

先程までの悪感情はどこへやら。お嬢様に憧れる初春はその普段のガサツな態度からは考えられない気品溢れる佇まいに大興奮する。

そう、黙っていれば誰がどう見ようとお淑やかな大和撫子なのだ、霊夢は。

「……ちよつと派手過ぎない?」

対する霊夢は何度も着替えることに煩わしさを覚えながらもショッピングとはこういうもののだと受け入れ、渋々であるが従っていた。

困みに今彼女が着ているのは最近流行りのブランドのブラウスとカーディガン。大人っぽさの強いシックな組み合わせだ。

「いえいえ、むしろ地味で控えめな方ですよ。というかあの巫女服の方が派手では?」

「……そうなの?」

「まさかの自覚無し!?!」

これを冗談ではなく、素で言っているのだから反応に困る。しかし、自分が世間知らずだということは霊夢自身は当然自覚しており、それ故に彼女らの意見は真摯に受け止める。改善するかどうかはまた別の話であるが。

「涙子が良いって言うのなら別にこれで良いけれど……ん?」

ふと、ある場所に霊夢の視線が止まる。

「どうしました? うわっ何ですかこのTシャツ」

そこにあつたのは、黒い生地にでかかど “Welcome Hell!!” と書かれ、ハートマークや血のような赤いスプラッシュで彩られた派手なTシャツだった。

“Welcome Hell……何というか、独特なデザインですね”

「変なTシャツ。めっちゃダサくない？」

「佐天さん直球過ぎます」

「けど確かにセンスは良くないわよね……というか文法間違つてないこれ？ 地獄へようこそという意味合いにしたいんでしようけどそれならWelcome “to”

Hellになるはずよ」

「あ、確かに。これじゃWelcome Hellになっちゃいますね」

散々な評価である。一方、霊夢は何とも不思議そうな表情でそのTシャツをジツと睨む。

「もしかして霊夢さん、この変なTシャツが気になるんですか？ いえ、人のセンスにどうこう言うつもりはないですけど……」

「……別に。少し見覚えがあつただけよ」

一目見た瞬間に感じたのは奇異でも懐古でもなく、僅かばかりの恐怖。佐天の言う通りこんな変なTシャツにそのような感情を抱くのは可笑しな話であり、彼女は眉をひそめる。

しばらくして彼女は視線を外す。ずっと視ていると、何だか無性に腹が立ってきた。

「H. K. T. 社……このTシャツのメーカー。結構な大手みたいですね。他にも色々なTシャツがありますよ」

初春が指差した方角を見ればあの変なTシャツ同様に多種多様なデザインのTシャツがずらりと並んでいた。

「ほんとだ。ネタTシャツ専門なのかな?」

「ふーん……あ、これもしかしてゲコ太——じゃないや。カエルの帽子? いや、でも結構可愛い?」

一瞬大好きなマスコットキャラクターのデザインかと思いき、Tシャツを手取る御坂だが、よく見れば眼球の付いた蛙のようなハット帽だった。

少し残念そうにするもこれはこれで愛嬌があつて可愛らしいと気に入る。

「お、これとか霊夢さんのイメージに合ってます? ほら、この白黒の勾玉が二つ合体してるマークとか巫女っぽい」

「巫女っていうか陰陽師とかでよく見るマークですけど……」

「陰陽魚太極図ね」

佐天らの言うTシャツを見てみれば確かに赤い生地そのマークがプリントされていた。

太極図とは、その名の通り太極という陰陽思想において万物の根源を意味する概念を表す図だ。

この形をした太極図は、陰陽太極図、太陰太極図ともいい、太極の内に陰陽が生じた様子が描かれている。白黒の勾玉を組み合わせたような意匠となっており、中国ではこれを魚の形に見立てており、それが陰陽魚という名の由来だ。

黒色は陰を表し右側で下降する気を意味し、白色は陽を表し左側で上昇する気を意味していた。魚尾から魚頭に向かって領域が広がっていくのは、それぞれの気が生まれ、徐々に盛んになっていく様子を表し、やがて陰は陽を飲み込もうとし、陽は陰を飲み込もうとする。

陰の中央にある眼のような白色の点は陰中の陽を示し、いくら陰が強くなっても陰の中に陽があり、後に陽に転じることを表す。陽の部分に関しても同様だ。

この太極図は、これを永遠に繰り返すことを表しているという。

そして、奇しくもそのシンボルは霊夢にとつて、とても馴染み深いものであった。

「へえ、やっぱり巫女さんだからこういうの詳しくあったりするんですか？」

「まあ、それなりに……」

即座にマークの名称を言った霊夢に佐天は感心する。あの奇抜な巫女服からしてコスプレイヤーにしか見えないが、実は外部に居た頃は本当に巫女だったのかもしれない

い。

携帯がお揃いな祖父についても気になるし今度また彼女の外での生活について訊いてみようと思つた。

「あ、そういえば御坂さんは何か探し物がありますか？」

ふと、佐天が尋ねる。

「え、そうねえ……パジャマ、とか？」

「それならこつちですよ」

「じゃ、私は着替えてくるわ」

そう言つて佐天と初春は御坂を連れてパジャマ売り場へと向かう。

一方、霊夢は元の服へ着替える為に再び試着室へ入つていく。ちやつかり氣に入つたのかあの太極図のTシャツを手にとって。

「色々回つてるんだけど、あんまりいいのが置いてなく……て……」

パジャマ売り場へ来るや否や御坂の目がある一点で止まる。そこにはピンクに花模様、対象年齢が幼そうなパジャマがあつた。

可愛いものに目がない御坂はそのデザインに瞬く間に心を鷲掴みにされる。

「これこそが、彼女が求めていたパジャマだつた。」

「ね、ねえ！　これ、凄くかわ——」

「うわあ、見てよ初春このパジャマ。今時こんな子供っぽい着る人いないよね」
「はい。小学生の頃は着てましたけど流石に今は……」

目を輝かせ、御坂は他二人へ同意を求めようとするが、それを遮るように現役中学生の真つ直ぐな意見が無慈悲に突き刺す。

「そ、そうよね！ 中学生にもなってこれはないわよね！ うん！」

「？ あ、私ちよつと水着見てくるわー」

「水着ならあつちにありますよ」

一瞬凍り付き、ちよつと泣きそうになりながらも、必死に合わせる同じく現役中学生である御坂。

無自覚に目の前の少女の心を抉ってしまったとは露知らず佐天と初春はそのまますぐ近くの水着コーナーを見に行くが、御坂はまだこのパジャマから目を離せなかった。

(……いいんだもん。パジャマなんだし、誰に見せる訳でもないんだから)

誰も聞いてないのに心の中で必死に弁明しながら、横目で佐天たちの様子を確認し、素早く手に取り姿見で合わせる。

「それっ」

「何してんだ、ビリビリ？」

しかし、姿見には自分だけでなく、見覚えのあるツンツン頭が映っていた。

「ひゃっ?! な、ななななななんであんたがここにいんのよっ!」

小さく悲鳴をあげ、咄嗟にパジャマを背中に隠しながら振り返った御坂はその人物が居ることに驚愕する。

——上条当麻。

御坂の電撃をも無効化する正体不明の能力を持つ、彼女が少しだけ……否、かなり気になっていいる高校生だった。

「いちやいけねえのかよ……まったく、何そんな慌ててんだ?」

「……見た?」

「え? 見たって……一体何を?」

「いや、見てないなら良いんだけどさ……」

若干顔を赤くさせ、動揺していた御坂だが、少女趣味全開なパジャマを見られていないことを知ると、ホッと胸を撫で下ろす。

「つていうかここレディース売り場よ? 本当に何で——」

「おにーちゃん〜」

「ん?」

すると小学生くらいの少女がそう言いながら上条の近くへと駆け寄ってくる。

「あつ! ときわだいのおねーちゃん!」

「あ、鞆の……お兄ちゃんって、あんた妹が居たの？」

少女は御坂に気付くと笑顔で手を振る。その姿を見て御坂も彼女が以前助けたことのある少女だと思い出す。まさかそれが上条の妹だったということか？ だとしたら物凄く偶然である。

「違う違う。俺はこの子が洋服店探してるって言うからここまで案内してあげただけだ」

しかし、その予想はすぐに否定される。どうやら単に世話を焼いただけらしい。一歩間違えれば事案になりかねないが、八割以上が未成年の学園都市。スキルアウトならいざ知らず流石に即通報されるようなことはなかった。

（それとついでに博麗の様子も偵察しに来たんだが……どうやら別の所に居るみたいだな。サテンって子と仲良くやれてるか非常に不安ですよ上条さんは）

少女を案内するのにこの店を選んだのは、初めての友人とショッピングに来ている同級生の様子を見に来るためでもあった。くれぐれもあの変な巫女装束は着て行くなどいう当たり前のことから色々アドバイスをしたが、面倒臭がりの彼女のことだ、きっちり守っているか怪しい。

そして、タイミングが悪いことにその同級生は丁度試着室へと入ってしまい、会うことはなかった。無論、アドバイスの殆どを彼女は実践していない。

「あのね！ おにいちゃんにつれてつてもらったんだ！ わたしもテレビのひとみたいにおようふくでオシャレするんだもん！」

「そうなんだ……今でも充分お洒落で可愛いわよ？」

「短パンの誰かさんと違つてな」

「なっ」

そう言つて少女の頭を撫でる御坂。するとデリカシー皆無の上条は日頃の恨みもあつてかつい余計な一言をぼそりと呟いてしまう。

ギロリ、と御坂が睨む。

「何よ、やる気？ だつたら、いつぞやの決着をここで……！」

「はあ？ お前は頭ん中はそれしかないのかよ。大体こんな人が多い場所でおつ始める気ですか？」

「ぐうっ……」

先日の河川敷での決闘の続きをしようとする気満々の御坂に対し、上条は呆れた様子でそう言う。これに御坂は先に煽つたのはあんたでしようが！ と文句を吐き出しそうになるも言葉自体はまごうことなき正論であるため押し黙る。

「ねーねー、あつちもみにいきたい」

「ん？ おう、分かつたよ」

「ばいばい！　ときわだいのおねーちゃん！」

「あ、バイバイ。またねー」

少女に手を引かれ、上条は別のコーナーへと向かう。別れ際に少女が手を振れば御坂もまた苦笑いを浮かべながら振り返り返して見送る。

ふと、視線を落とせば例のパジャマは未だに握られていた。あれくらいの少女ですらお洒落に気を遣うというのに自分ときたら、と御坂は言い知れぬ敗北感に襲われる。

「……ふう。どうもあいつが居ると調子狂うのよねえ」

「あいつって誰よ？」

「!？」

安堵するも束の間、背後から声を掛けられて振り向けばそこには元の巫女装束へと着替えた霊夢が立っていた。

「なっ……」

「んっ？」

時が止まったかのように表情を硬直させる御坂。そのあまりの驚き様と挙動不審な態度に霊夢は一瞬首を傾げるも、その手に握られる派手で可愛いパジャマへと視線を移す。

「……そういうのが趣味なの？」

「は、はあっ!? いやいや違うから! 全っ然そんなことないし!!」

そう尋ねれば、御坂はあたふたしながら必死で否定する。しかし、それは凶星を突かれたようにしか見えなかった。

「あー、まあその、私は良いと思うわよ。ちよつと派手だけど」

年頃にしては可愛らしい趣味をお持ちなようだ。その意外な事実とあまりにもバレバレな態度に霊夢はくすりと笑ってしまいながらもぎこちないフォローの言葉を送る。

それを見て御坂は全く誤魔化せていないことを悟り、わなわなと震える。

「わ、笑うな——!!」

「はあ……最悪……」

疲れ果てた様子で御坂は溜め息を漏らす。実質今日が初対面の相手にとんでもない

醜態を晒してしまった。

「あら、結局買わないの？ 別に趣味なんて人それぞれだし気にすることないじゃない。なんか似合いそうだし」

「うっさいわね。ってか最後どういう意味よ？」

とうの本人は素知らぬ様子でそう語り掛けてきて御坂は目を尖らせる。嫌味でも何もなく本心でそう言っているのだから余計にたちが悪い。

しかし、人それぞれ。ありきたりな言葉だが、露出の激しい奇抜な巫女装束を人目も憚らず着込んで堂々としている人物が言うとかかなり説得力がある。

だからこそ、服の趣味で笑われた挙げ句にフオローまでされてしまっているという事実が果てしなくムカつくのだが。

「御坂さんどうでしたー？ ……って何してるんですか？ 霊夢さんも」

「ん？ ああ、実はこいつの寝間着が……」

「いや！ 別に何でもないわよ！ 全然良い奴が見つからないなーって話してただけだから」

「？ そうですか……」

戻って来た佐天たちに当たり前のように先程の一件を語ろうとする霊夢の言葉を慌てて御坂が遮った。

(ちよつと！ なに普通に言いふらそうとしてんのよ！)

(何よ。黙っておいてほしかったの？ なら最初にそう言ってくれないと)

(察しなさいよそれくらい！)

(えー)

小声で怒る御坂に対して霊夢は面倒臭げに肩を竦める。どうやら特に秘密にするように頼まれていなかったから普通に喋ろうとしていたようだ。

「で、霊夢さんはどの服を買ったんです？」

「さつき試着した奴で適当なの三着くらい。最近の服って高いのね。値札見たときはたまげたわ」

手に持つ紙バッグを見ながら霊夢は言う。田舎育ちで古着屋しか行ったことのない彼女が衣服の値段が自身の食費よりも高かったことに驚愕を隠せなかった。

これが一般的な女子の買い物だというのだろうか。とてもじゃないが、正気の沙汰とは思えない。

「あー、確かに服とか化粧品とかそういうのが一番お金が掛かりますからねえ……」

「涙子とかはいつもこんな買い物？ 凄いわね」

「え？ いえいえ。毎日こんなに買ってたら、すぐにお小遣いが無くなっちゃいますよ。

ね？ 初春」

「そうですねえ……あ、御坂さんや白井さんは結構買うんじゃないですか？」

学園都市の学生たちの生活費は奨学金や補助金が殆ど。能力の強度が高ければその額も跳ね上がるので超能力者である御坂は勿論のこと大能力者の白井もかなりの金額を貰っているはずだ。

「黒子はともかく私もそんなに頻繁に服とか買わないわよ。そもそも常盤^ち台^ちって私服禁止だし」

「ふうん……」

流石に日常的にこのような買い物をしている訳ではないようで安心する。かといって理解し難きものであることには変わりないが。

霊夢にとって衣服とはただ着るものに過ぎず、それ以上でも以下でもなく、そもそも着飾るという発想すら無かった。

では、あの巫女装束に拘る理由は何かと問えば、それが彼女を彼女足らしめる要素の一つであるからという他無い。

「じゃあ、次は——ん？」

服を買い終え、次の行動について示そうとする佐天だったが、それは突如として鳴り響いた音楽によって阻まれる。

「初春。携帯鳴ってない？」

「あ、本当だ」

佐天に指摘され、初春は自身の携帯電話から着信を告げるアラームが鳴っていることに気付く。名前を確認すると同僚の白井からであった。

「はい、もしもし」

『初春っ！ 今どこにいるんですの?!』

電話に出ると同時に響いてきた大声。初春は予想外の剣幕にたじろぐが、何をそんなに慌てているのかという疑問は続く言葉によって解消される。

『虚空^{グラビトン}爆破事件の続報ですの！ 衛星が重力子の爆発的加速を観測しましてよ！』

その言葉に表情を強張らせる。

世間を騒がせている連続爆破事件、それがまたしても起ころうとしているという。となれば風紀委員として動かないという選択肢はない。

「か、観測地点は？」

『第七学区の洋服店 “セブンスミスト” ですよ！』

「——え？」

目を見開く。セブンスミスト。それは今正に自分たちの居るこの店の名前だった。にやり、と誰かがぬいぐるみを遊びながら笑う。

虚空爆破

「——ぐらびとん？」

その名に、靈夢は眉をひそめる。

「はい！ その犯人の次の標的がこの店なんです！」

白井との通話を途中で打ち切り、初春は状況を説明する。要約すれば巷で話題の連続爆破テロの犯人の手によって、この店に爆弾を仕掛けられているということ。

そういえばそんな物騒な事件が連日ニュースで放映されていたな、と靈夢は思い出す。グラビモスだかグラードンだか知らないが、傍迷惑な奴が居たものだ。

「……いつ爆発が起きるとか、どこに爆弾があるのとか分からないの？」

「は、はい。衛星からの重力子反応の観測ではこの店のどこかということしか——」
「なら、急ぎましょう。さっさと客を逃がすわよ」

「——！ はい！ 御坂さんも避難誘導をお願いします！」

「ええ。分かったわ」

事態を把握するや否や即座に行動を起こす靈夢。普段怠惰な彼女であるが、人命が懸

かっているとすれば話は別だ。どれだけの規模の爆弾かは知らないが、今日は休日なのもあつてか客はかなり多いためどこで爆発が起きようとも少なからず被害は出るだろう。

しかし、銀行強盗のお次は爆弾魔ときた。本当にこの街は面倒事を呼び込んでくれる。お蔭で折角の人生初めてのショッピングが台無しになつてしまった。

「佐天さんはすぐにここから避難してください！」

「え、うん……初春も気を付けてね」

協力を乞われた御坂。しかし、佐天の方は避難を促される。同じ一般人といえど、超能力者で自衛可能な御坂と違い、佐天は無能力者でごく普通の学生でしかない。

故にそれは至極当然の判断であるが、どうも佐天自身は不服なようで少し悔しそうな表情をしながら頷いた。

「……………」

その様子に霊夢だけが気付く。

力無き者の渴望は、見慣れたものであるが故に。

『お客様にご連絡いたします。誠に申し訳ございませんが、店内で電気機器の故障が発生したため、誠に勝手ながら、本日の営業を終了させていただきます』

店内の放送機器から、繰り返し同じ文言が流れる。パニック誘発を防ぐべく、緊急時

用にあらかじめ用意されていた文言だ。

その放送と御坂と霊夢の誘導に従い、大勢の客は店の外へと出ていく。

「ふう……これで全員かしら」

店の外でざわめく客たちを見ながら御坂がそう言って一息吐く。初春の迅速な対応により避難自体は滞りなく完了した。後は警備員アンデスキルの到着を待つだけだ。

しかし、霊夢は神妙な面持ちだった。

「……嫌な予感がするわね」

「え？」

「ちよつと確認してくるわ」

「は？ あ、ちよつと待ちなさい！」

ただそう言い、引き止めようとする御坂を無視して霊夢は再び店内へと入って行く。

「あいつ！ 一体何考えて……!!」

「おいビリビリ！ あの子を見なかったか！」

その勝手な行動に苛立ちを露にする御坂。すると入れ違う形で避難していた上条が焦った様子でそう尋ねてくる。

あの子、とはあの鞆の少女のことだろう。しかし、二人は一緒に行動していたはずだ。それに誘導している際にも少女の姿は見なかった。

「は？ 一緒じゃなかったの？」

「外に居ないんだ。もしかしたらまだ中に……！」

「ツ——何やってんのよ！」

どうやら目を離れた隙にはぐれてしまったらしい。取り残されてしまっているという可能性に御坂は目の色を変えて店内へ駆け込む。

「あつ おい……！」

上条もまたその後続く。

「全員避難終わりました！」

一方その頃。無人となった二階フロアにて。全員が店内から立ち去ったことを確認した初春は携帯で白井へと報告する。

『初春！ 今すぐそこから離れなさい！』

「——え？」

『過去の八件の人的被害は風紀委員ジャッジメントだけですの！ 犯人の真の狙いは観測地点周辺にいる風紀委員！ 今回のターゲットはあなたですよ初春！』

焦った様子の白井から告げられた驚愕の事実。その言葉の意味を噛み砕くより早く、状況は更なる加速を見せる。

「おねーちゃん！」

一人の少女が初春の元へ駆け寄ってくる。まだ避難していなかったのかと驚くよりも先に、彼女はその腕に抱えた大きな蛙のぬいぐるみをバツと見せた。

「これ、メガネのおにーちゃんがわたしてって」

「？…これは……」

虚空爆破事件グラビトンの犯人は、量子変速シンクロトロンの基点となるアルミ製のスプーンや缶を別の物体の中に隠して破裂させている。

そう、例えばこのようなぬいぐるみの中などに。

「——ま、さか」

顔を青ざめさせる初春。少女が差し出したぬいぐるみが、その手に渡った次の瞬間。

——ボコツとその顔が凹む。

「!？」

重力子の急速的な収縮。その異常を視認した初春の行動は早かった。すかさずぬいぐるみを遠くへと放り投げ、自身の背を盾にする形で少女を抱え込む。

「逃げてください！ アレが爆弾です！」

まだ誰か残っているかもしれない。故に、初春は出来る限りの大声でそう叫び、周囲へ伝える。

——それを丁度現れた上条と御坂が聴いていた。

(レールガン超電磁砲で爆弾ごと……！)

消し飛ばす。即座にそう判断して御坂はゲームセンターのコインを構え、しかし焦りからか照準を合わせる前に手が滑り、床に落としてしまう。

「しまっ——!？」

あまりにも致命的な失態。コインを拾う時間は無く、単なる電撃では爆発を防ぐことなど出来やしない。

万事休すか。そう思われた矢先に上条がバツと彼女らの前へと出る。一か八か、その異能を打ち消す右手で防ぐつもりであり、ほぼ反射的な行動だった。

そして、ぬいぐるみだったモノはどんどん収縮していき、遂に爆発した。

「——封魔陣」

しかし、爆発は彼の右手に届く前に、突如として発生した見えない壁によって阻まれる。

「なっ」

「えっ……!!」

「やっぱり確認しにきて正解だったわ」

何が起きたのかと騒然とする一同。そこにそう言いながら上から降り立つのは、紅白の巫女。

「は、博麗……!!」

「悪いわね、当麻。あんたの右手の範囲じゃどこまで打ち消せるか分かんなかったから、手柄を横取りさせてもらったわ」

「え？ お、おう……正直俺も一か八かだったし、むしろ助かった。ありがとな」

呆気にとられながらも上条は礼を言う。イマジンプレイカー幻想殺しが能力によって発生した副次的な爆発も無効化出来るかどうかは単純に賭けであったし、そもそも防ごうとした時はそのような思考にすら至ってなかった。

一方、御坂はその登場に驚愕していた。先に店内へと入っていったはずなのに姿が見えなかったが、どうやら能力でずっと上方を飛んでいたらしい。

いや、それよりも――。

「あんだ、一体何をしたの?」

空中浮遊。それが彼女の能力であることはあの銀行強盗の件で確認済みである。しかし、ならばあの爆発を小さな正方形の範囲に留めた透明な壁は何だというのか。

実は念動力テレキネシスか空力使用エアロハンドでその応用? 仮にそうだったとしてあの規模の爆発を防ぐとなれば彼女の強度は大能力者レベル4クラスということになる。

それに、少なくとも御坂の目には、あれは念動力にも空力使いにも見えなかった。

「……さあ、何でしょうね」

対して霊夢は彼女の疑問に答えるつもりは更々無いらしく、一瞥するだけで未だに少女を抱えて力無くその場にへたり込んでいる初春の方へと向かう。

「大丈夫? 怪我とかしてない?」

「博麗さん……はい。大丈夫です。その、助けてくれてありがとうございます」

安否を確認され、そう答えながらも初春の表情は暗かった。自身の早計な判断が招いた命の危機。もしも霊夢が来なければ、来るのが少しでも遅ければ、最悪自分はおろか少女の命すらも失っていたかもしれない。

実際のところ彼女に非は無いのであるが、そう思わずにはいられなかった。

「しかし、どうしてここに……? もしかして博麗さんも虚空爆破グラビトの犯人が風紀委員狙いってことに気付いていたんですか?」

「勘よ」

初春の疑問に、霊夢はただ一言そう答える。

「か、勘……ですか？」

「そ。私の勘はよく当たるの。今回もなんか嫌な予感がしたから来てみれば案の定って感じ」

「は、はあ……」

勘。即ち、第六感。あまりにも非科学的で学園都市では笑われそうな理由であるが、実際に初春の危機に駆け付けて回避しているのだから何も言えない。

「にしても……やるじゃない。少し見直したわ」

「へ？」

礼を言えば笑みを浮かべて突然そう返され、初春は間抜けな声を出してしまう。

「子供を守ろうとしたでしょ？ 少し頼りないイメージだったけど白黒の相方だけあるわね。そういう奴、嫌いじゃないわよ」

「――」

誉められた、そう理解するのにそれなりの時間を有した。そんな言葉を掛けられるとは夢にも思わなかったが故に。

ずっと冷たい人間だと、無感情だと恐れ、気味が悪いとすら思っていた。

しかし、こうして自分に笑い掛けてくるその姿はそんな今まで抱いていた印象とはあまりにも掛け離れていて、漸く初春は理解する。

結局のところ自分は彼女の一面しか見ていなかったのだと。

「……さて、と」

くるり、と霊夢は初春へ背を向ける。

「ちよ、どこ行くのよ？」

「決まってるでしょ。買い物を買無しにされた落とし前を付けさせるのよ」

ただそう言い、霊夢は飛んだ。

ふと顔を覗き込んだ御坂はぎよつとする。その表情は先程の優しさに満ちた笑みと打って変わり、どこまでも冷徹なものだった。

犯人の目星は付いている。あのぬいぐるみ爆弾から仄かに匂った異臭。それがアルミの金属臭であることを彼女は知らないが、それと同じ臭いを発する男が自分たちの近く——つまり初春の周りを彷徨っていたのを思い出したからだ。

然れど、確証は無く、しかし彼女にはそれだけで充分であった。

「どうして爆発しなかったっ?!」

セブンスミスト付近の薄暗い路地裏にて。眼鏡を掛けた冴えない少年が腹を立てた様子で喚いていた。

少年の名は、介旅初矢。

彼こそが、この虚空爆破事件グラビトンの犯人である。

「不発？ 有り得ない！ 制御にミスは無かった、確かに起爆したはず。まさか未然に防がれた？ 馬鹿な、あんな見るからに無能そうな風紀委員ごときに止められるはずが……！」

これまで数回の実験を重ね、その度に威力を更新してきた。前回は遂に風紀委員の一人に入院レベルの重傷を負わせることに成功した。

そして、今回のは過去の爆弾の比ではない。殺すつもりで能力を使い、会心の出来だった。にも関わらず待てど暮らせど爆発は起こらなかった。あの力作が何の問題も無く爆発すれば建物の一角を吹き飛ばす程の威力があるというのに。

つまり問題があつたということ。子供に運ばせる過程で不備があつたか、はたまたより高位の能力者によつて防がれたか……どちらにせよ、今回ばかりは失敗と言う他無く、しかし介旅はその事実を認められない。

「次だ！ 次はもつと威力の高い奴を！ この力で無能な風紀委員も！ あの不良共も！ みんな、みんな纏めて——」

「ねえ、そのの貴方」

「なっ!?!」

喚き散らしていると背後から声を掛けられ、びっくりと身体を震わせながら振り返る。

そこには見覚えのある少女が居た。

（ここ、こいつは……!?! あの風紀委員と一緒に居た奴じゃないか！ まだ店の中に居るはずなのに何で……）

目に見えて動揺する介旅。もしも先程の独り言を聴かれていたとしたら知らず知らずの内に自白してしまつたことになり、言い逃れは難しい。

「ちよつとこの辺でボヤ騒ぎがあつただけど何か知らないかしら？」

「え……?」

しかし、そんな想像とは裏腹に霊夢はそう尋ねる。ボヤ騒ぎ……というのは十中八九自分が起こした爆発のことだろう。どうやら独り言は聴かれていないし、自分が犯人で

あるということも気取られていないようで介旅はホツと胸を撫で下ろす。

「さ、さあ？ 知らないな……何のことやら……」

自分の爆発をボヤ呼ばわりされたことに苛立ちを覚えながらも作り笑顔を浮かべて惚ける。

「そっ……」

すると少女は顎に手を当て何やら考え始めた。誤魔化し方が下手で怪しまれたのかと介旅は危惧するも例え自身のことを疑っているのだとしても証拠は無いはずだと心を落ち着かせる。

「えっと……じゃあ、僕この後用事があるからこれで——」

「うーん……推定無罪ってところだけど、別にいいか。間違ってたら災難だと思って諦めて貰うわ」

「は……？」

爆破は不発ではなかった。ならば誰か死者は……居ないにしろせめて怪我人くらいは出なかつたかそれとなく尋ねようとも思ったが、これ以上怪しまれるのも嫌だったので介旅はこの場から立ち去ろうとする。

しかし、少女がぼそりと溢した言葉に呆気に取られ——次の瞬間には地べたに這いつくばっていた。

正確には、蹴り飛ばされた。

「がはっ……!!」

「ごきげんよう、爆弾魔のグラなんとかさん」

何が起きたのかも分からず、下腹部に伝わる鋭い激痛に大地をのたうち回る介旅。咳き込みながら視線を向ければ少女が冷たい眼差しでこちらを見下ろしていた。

「っ……い、いきなりな何を……爆弾魔つて僕はそんなこと知らな——」

「あー、そういうの良から。どのみちボコるし。どうせあの子供に顔を確認させればすぐ分かる話よ」

有無を言わさぬ暴論に介旅は啞然とする。まさか単に怪しいという疑いだけで犯人と断定したというのか。

——見た目通り、頭のおかしい奴だ。

それに子供に顔を見られているというのは完全に失念していた。異能力者^{レベル}である自分²は未だに容疑者に含まれていないだろうし、そもそも生きているということ事態が想定外だったからだ。

介旅は顔を歪ませる。やはり納得が行かない。

「馬鹿な、あれは僕の最大火力だったはずだ！ 一体どうやって……!!」

「あら、自白ご苦労様。けど最大火力ねえ……あんなチンケな爆発なら即席の結界でも

充分よ。感謝することね、私が居なかつたら今頃あんた大量殺人犯なんだから」

本性を露にし、問い掛ける介旅。これに少女は心底呆れ果てた様子でそう吐き捨てる。

「チンケな爆発、だど?」

それは彼を虚仮にする発言だった。

「……けるな」

「あん?」

「——ふざけるなア! お前らはいいつもこうだ! お前らはいいつもそうだ! どいつもこいつも見下しやがって!」

激昂した介旅は隠し持っていた空き缶を投げ付け、能力を作動させる。

この距離ならば自分も巻き添えをくらってしまふのは明らかであったが、これまでの犯行で増長していた彼は培ってきたプライドを傷付けられ、完全に頭に血が上っていた。

故に、そんなことは頭の片隅にも存在せず、ただ目の前の少女を殺す為に全力で重力子を加速させる。

あまりにも短絡的な行動。しかし、追い詰められ、逆上した人間の行動は予想外なものであるのが、世の中の常だ。

「
単なる悪足掻きだろうと判断し、避けようとしていた少女は自身へ届く前にぐちゃぐちゃに凹んでいく空き缶に目を見開く。

——そして、誰にも止められることなく、空き缶は爆発した。

（初春……どうか無事でいてくださいまし……！）

白井黒子は焦っていた。

観測された重力子の爆発的加速。急いで同僚に連絡すれば何とその場に居合わせているというではないか。

つまり今回のターゲットは同僚——初春だということ。しかし、それを伝える前に彼女は避難誘導すると通話を切ってしまい、何度も掛け直してやっと犯人の狙いが初春だと伝えることができたが、またすぐに切れてしまった。

もしかすると手遅れだったかもしれない。最悪の事態を思い浮かべながら白井は空間移動テレポルトを連続使用しながら全速力で彼女の居る洋服店、セブンスミストへと向かう。

(もう少しで目的地に——!?)

そして、それらしき建物が見えてきた次の瞬間。凄まじい爆発音が響き渡る。

思わず白井は足を止め、音がした方角へ視線を向ける。だが、そこは次の爆破現場と目されていたセブンスミストではなく、近くの路地裏の一角だった。

「ど、どういふことですか……?」

目撃者たちの悲鳴や怒号が飛び交う中、白井もまた困惑するが立ち上る黒い煙の中から何か物が凄まじい速度で飛び出してくるのに気付く。

遠目で分かりづらいが、それは人の形をしていた。

「あれは……まさか……!」

白井には心当たりがあった。故に、その可能性へと至った瞬間にはそれが飛んでいった方へと転移し、追いかける。

「——随分と舐めた真似してくれるじゃない」

「がっ……」

しばらく滞空していたそれはやがて降下する。その地点へと駆け付けた白井は視界に広がる異様な光景に絶句した。

予想通り、そこに居たのは忌み嫌う紅白の巫女——博麗靈夢。未だに足を地面から宙に浮かせている彼女は、見知らぬ眼鏡の少年の首を締め上げていた。

か細い腕からは考えられない膂力。靈夢に持ち上げられる形になっている少年はその足をばたつかせながらもがき苦しむ。

その姿を靈夢は冷めた眼で見据えていたが、少年——介旅が呼吸困難により意識を失う寸前になると乱雑に投げ捨てた。

「があ、っ……お、え、……(っ)ほっ(っ)ほっ………」

吐きそうになる程に噎せる介旅。高速で空へと持ち上げられたかと思えば首を絞められ、挙げ句に地面へと叩き付けられた彼は完全にグロッキー状態だった。

そんな彼に追い打ちとばかりに靈夢はその顔面に無慈悲に前蹴りを入れる。

「(っ)がっ!」

白い歯が血飛沫と共に何本か飛んでいく。

「何で? って顔してるわね。簡単なことよ、ただ爆発するよりも速く飛んで逃げた、それだけ」

呻き声をあげ、顔を抑える介旅に何てことのないように靈夢は言うが、それがどれだけ異常で困難なことであるのは誰の目から見ても明らかであった。

完全に不意打ちによる爆破。それも作動して起爆するほんの一瞬の間に彼女は介旅

を掴み、上空へ飛んで爆発の範囲外から逃れるという判断を下し、そして実際にやつてのけたというのだ。

「ヒツ……」

理解不能。もはや介旅には冷徹にこちらを見下ろす目の前の少女が同じ人間とは思えず、化け物か悪魔にしか見えなかった。

「博麗霊夢……！ 何をしていますのっ!?!」

「あー?」

茫然としていた白井であるが、まるで颯のように非力にしか見えない少年を痛め付けているのを見てハッと我に返ってその名を叫ぶ。

「……何だ、白黒か」

「白井黒子ですよ！ じゃなくて、これは一体——」

「ああ、こいつがあればよ、世間を騒がせてるグラードンって奴なの」

「グラードン? ……まさか虚空爆破グラビトンのことですよ!?!」

「そう、それ」

自分たちが追っていた連続爆弾魔。それが目の前で這いつくばる少年であると告げられた白井は驚愕する。

無論、本当のことかどうかは不明だが、先程の爆発や状況を見るに信憑性はかなり高

い。何よりも白井は霊夢のことを嫌っているが、このようなことで嘘は吐く人間ではないということには確信を持っていた。

しかし——。

「ツ……だからといってやり過ぎではなくて？　もうおやめになつてください」

相手は戦闘不能。戦意もまた完全に喪失している。いくら相手が爆弾魔といえどもここまで暴行を加える必要は無いはずだ。

そもそも霊夢の蹴りは大の男を一撃で失神させる程の威力。介旅のような痩せた体つきの人間がまともに受けて意識を保っていられるはずがない。

単純に当たり所が良かったのか。否、霊夢がわざと手加減して蹴ったのだ。それは慈悲深いようでその逆。より長く痛め付ける為に弱く、しかし決して優しくない暴力を振るっているのだ。

少なくとも白井はそう判断した。はっきり言って彼女の知る霊夢らしくない行動であり、いつものように飄々としているように見えて、内心かなり気が立っている証拠である。

「ごちとら買物を買無しにされた挙げ句、危うく爆死するところだったのよ？　生かしてやってるだけ感謝してもらいたいわ」

実のところ霊夢一人が助かるつもりだったならば爆発から逃げる必要すら無かった。

即ち、そのまま自爆してしまう介旅も助ける為だけに、わざわざ彼の首根っこを掴んで飛んだのだ。

睨むような視線を向けられるが、白井は毅然とした態度で対峙する。

「これ以上は正当防衛ではなく、私刑になりますわよ。風紀委員を免職になった理由をお忘れで？」

「ええ。とつくの昔に忘れた」

きつぱりと言い放つ霊夢に、白井の顔が歪む。

「風紀委員……風紀委員だと？」

ぼそりと、倒れていた介旅が吐き捨てる。二人が視線を送れば彼はこちらを睨み付けていた。

その眼に宿るのは嫉妬、侮蔑、憎悪、そして怨嗟の念。歯を食い縛り、怒りの形相を浮かべながらゆつくりと起き上がる。

これに霊夢は気にも留めず、白井は驚く。先程まで完全に戦意喪失していたというのに。

「いつもこうだ……何をしても……何もしていなくても……こうして僕は、いつも地面に振じ伏せられるっ！」

「はあ？」

嘆くような、訴えるような悲痛な叫び。これに霊夢は怪訝そうに眉をひそめた。

「遅いんだよ！ お前たち風紀委員は！ いつもいつも終わつた後にこのこやつて来やがつて！ 学園都市の治安維持がお前らの仕事だろうが！ だつたら力の無い奴の盾になれよ！ どうして僕ばかりがこんな目に遭わなくちゃいけないんだ！」

「つ、あなた——」

「……で？ 何でそれが大勢の人間を巻き込んで殺していい理由になんの？」

あまりにも他力本願で自分勝手な物言い。逆怨みとしか言い様が無い犯行動機に白井が物申そうとするよりも先に霊夢は大した反応を示さず、そう問い掛ける。

「はっ！ お前なんかには分からないだろうな！ お前みたいな力のある人間に、僕の気持ちなんか！」

「そりや分からないに決まつてるでしょ。自分より弱い奴の気持ちなんて」

「——は？」

あつさりと同いてみせる霊夢。これには介旅も白井も呆氣に取られてしまう。

「けれど、強者が弱者の気持ちを理解出来ないように、弱者も強者の気持ちなんか理解出来ないし、愚かさで言えば同じようなものよ」

「な、何を——」

「強者は弱者から、弱者はより弱い者から搾取するだけ。あんたはその典型つてこと。」

少なくともあんたが爆弾を持たせた子供は、あんたより弱いでしょ？」

「っ……………」

その言葉に、介旅は何も言い返すことが出来なかった。どんなに理屈を並べようと、力で振じ伏せられた者が、力を得て増長した途端、今度は力で振じ伏せる立場に変わったに過ぎなかった。

それは霊夢からすれば腐る程見てきた光景。この学園都市では介旅のような人間は実にありふれている。故に、何も思うことはなく、肯定することは無いが、否定することも無い。

「要するに、あんたの罪は一つ。この私の貴重な休日をふいにしたことよ」

——足が振り下ろされる。

白井が反応するよりも速く、霊夢の踵は介旅の頭に命中し、その意識を刈り取った。

「ッ——あなたって人は……………」

倒れ伏す介旅を転移して受け止め、拘束するとキツと霊夢を睨み付ける白井。彼女は何もする訳でもなく、相も変わらず涼しい表情を浮かべてこちらを見ていた。

カチャリ、とその手に手錠が嵌められる。

「!? ……逃げないのでして？」

手錠を嵌めた白井の方が驚く。てつきり回避されるとばかり思っていたからだ。

しかし、霊夢は一切の抵抗も無く逮捕を受け入れ、手首から伝わる冷たい鉄の感触を感じながら微かな笑みを浮かべる。

「そうね……毎回逃げるのも面倒だし、涙子の友達つてことに免じて今回ばかりは捕まっただけわ」

「……分かりました。俄には信じ難い話ですが、一通り警備員の対応等が終わりましたら、うちの支部へ来てもらいま……いや、今何と？」

今まで頑なに逃走を続けていたというのに、一体どういう気紛れなのか。白井は警戒心を抱いていたが、霊夢の口から出た友人の下の名前に耳を疑う。

かくして、世間を騒がし、警備員や風紀委員が手をこまねいていた連続虚空爆発事件グラビトンは、天災が如き鬼巫女が現場に居合わせたことで呆気無く解決した。

幻想御手

あれだけ捜査が難航していた連続虚空爆破グラビトン事件は、九件目にして犯人確保という異例のスピード解決を果たした。

これまでの八件と違い、負傷者はゼロ。爆発の被害もたまたま現場に居合わせた常盤台の超電磁砲の協力もあつて最小限に食い止められ、付近を彷徨っていた犯人の少年も拘束されたことで風紀委員ジャッジメントを狙った無差別爆破テロは幕を閉じる。

……しかし、どうやらこれにて一件落着とは行かないようだ。

「一体どういうことですか？ 固法先輩」

「どうもこうもさつき言つた通りよ。博麗さんについては嚴重注意のみに留めて事情聴取が終わつたら釈放するように」

第一七七支部にて。眼鏡を掛けた女性——同じ風紀委員の先輩、固法美緯から告げられた内容に、白井は不服そうに顔をしかめる。

「ですから納得の行く説明をお願いします。犯人の男は顎を骨折し、全治一ヶ月以上の重傷。これは明らかな過剰防衛ですの」

「こちらとしては警備員アンチスキルの方針に従う……というのが上の判断だそうよ。それに今回事件が解決したのは彼女のお蔭のようなものだし、初春さんが言うには爆発を阻止したのも実際には御坂さんじゃなくて彼女らしいじゃない」

「それは……そうですが……」

結論から言えば、博麗霊夢は一切の罪に問われなかった。

まず犯人の介旅が凶悪な能力者で明確な殺意があつたことに加えて、事件現場において避難誘導に協力していたこと。更には爆発による被害を食い止めたという証言等々を考慮して警備員は今回の彼女の行動に目を瞑ることにしたのだ。

風紀委員もまた同様の方針。ある程度罪が軽減されるのならばまだ分かるが、全くの無罪放免というのは白井としては到底受け入れ難い話である。況してや相手が普段から目の敵にしている問題人物ならば尚更だ。

罪を犯したのならば、然るべき罰則が必要。それは如何なる理由があろうと、揺るがぬルールでなければならぬ。

「既に決まったことよ。あなたの気持ちも分かるけど今回ばかりは組織の人間である以上、我慢してもらえないわ」

「そんな……!」

白井は歯噛みする。上層部の判断である以上、いくら意見具申したところで無意味だ

ろう。最悪、霊夢が介旅へ暴行を働いたという己の証言が揉み消される可能性すらある。

「何？ 要するに、お咎め無しってこと？」

一方、当の霊夢本人は客用のソファァーに腰を下ろし、寛いでいた。その手には既に手錠は嵌められておらず、完全に自由の身であった。

「なんか拍子抜けしちゃうわねえ……」

「つ……やつぱり納得行きませんわ！ 全く反省の色無しじゃありませんのー！」

折角、逮捕されてあげたつてのに……、と言葉を続ける霊夢の姿を白井はキツと睨み付けながら声を荒らげる。

「まあまあ落ち着いて。博麗さんもナチュラルに人を煽るのはやめなさい。昔からあなたの悪い癖よ？」

「……あ、スケベ眼鏡か。今思い出したわ」

「今思い出したのっ!? それにスケベ眼鏡つてなにっ!? え、あなた私のことそういう風に思ってたのっ!?!」

大人な女性を振る舞いながら両者の間に入って宥めようとする固法だったが、霊夢の思わぬ呼び名に一瞬でキャラ崩壊してしまう。

「だってあなたのクリアポイントポイントの、服の下とかお風呂場とか透視するんで

しよ？ 凄いスケベな能力って青ピが言ってたわ」

「何その偏見にまみれたデマ!? そんな破廉恥なことしないし、私の能力名は透視能力クレアホイアンズよ！ あと青ピって誰っ!？」

意外だったわー、なんて宣う霊夢の言葉に慌てて否定する固法。まさか久しぶりに会ったかつての同僚にスケベ眼鏡呼ばわりされるとは夢にも思わず、啞然とする。

完全に出鼻を挫かれてしまった。

「ハア……相変わらなうね、博麗さん」

「……あなたの方はでかくなつたわね、色々」と

「え?」

覚えられていなかったのはシヨックであったが、元より彼女はそういう人間であったことを思い出し、昔と変わらぬ姿に安心すべきなのかそれとも全く改善されていないことを憂うべきなのかと固法は溜め息を吐く。

対する霊夢はそんな彼女へ訝しげな視線を送る。どうも記憶の中の彼女の容姿と食い違いが生じていた。

主に胸部が。

「やっぱり牛乳ばかり飲んでるからかしら? いつか牛になるんじゃない?」

「ちよ、どこ見ながら言ってるのよ」

その言葉の意味を理解すると固法は胸を腕で隠し、少し顔を赤らめる。

「もしかして僻み？ あなたも毎日飲めばいいじゃない、ムサシノ牛乳」

「生憎と緑茶派よ。朝昼晩ね」

「……そうだった。あなただってそういうの微塵も興味無かったわよね」

「ええ。当たり前判定が大きくなるだけだし、むしろ無い方が良いわ」

「当たり前判定って……あとその発言は一部の女性を敵に回すかもしれないからやめておきなさい」

強がりでも何でもなく、本気でそう言っている霊夢に固法は苦笑いする。

そこも昔と何ら変わっていない。彼女は誰しもが認める美貌を持ち合わせながら自身の容姿に関して酷く無頓着だった。

尚、霊夢は別に貧乳という訳ではなく、年相応に持ち合わせているため二人の会話を聞いていた持っていない側である白井は固法の懸念通り僅かながらの敵意と嫉妬心を抱く。

誰とは言わないが、彼女の敬愛する先輩である電撃姫もこの場に居たら同様の反応をしたことだろう。

しかし、霊夢にとってはどうでも良いことだ。

「で？ 何もないならさっさと帰りたいんだけど、どうせそういう訳にも行かないんで

しよう?」

気だるげにそう問えば、固法は笑みを浮かべる。霊夢は彼女が風紀委員らしく規則に厳しい真面目な人間であることを知っているためこのまま手放して解放されるとは微塵も思っていないかった。

それが白井よりも利口であるのなら、尚更だ。

「ええ。察しが良くて助かるわ」

「?」 固法先輩、それはどういう……」

「ほら、このままだと白井さんは納得出来ないでしょ? 私も流石に無罪放免なのはどうかと思うし、上に掛け合つて条件を付けてきたわ」

「条件……ですの?」

首を傾げながらも白井は安心する。どうも固法はかつての部下である霊夢のことを鼻唄している節があつた。

それ故に、今回の一件にも消極的な態度を見せるのではと疑っていたが、むしろ意見してくれていたらしい。そして上層部の決定を一部覆して条件を加えたというのだから流石と言えよう。

しかし、彼女が語つたのは、思わぬ内容だつた。

「今回の件について博麗さんが一切の罪に問われないのは変わらないけれど……その代

わりに、彼女には今日から二週間、風紀委員の臨時隊員として奉仕活動をしてもらうわ
「は？」

二人の言葉が重なる。白井は耳を疑い、霊夢はあからさまに顔をしかめた。

「あー、面倒臭い」

渡された腕章を遊びながら霊夢は心底げんなりとした表情で吐き捨てる。

固法の発言が冗談ではないことを理解するや否や霊夢は即座に誰がやるものかと抗議した。しかし、強制的であり、拒否するならば本当に逮捕して刑罰を与えなければならなくなると半ば脅迫紛いなことを言われ、従わざるを得なかった。

元より何かしらの罰則が課せられるのは白井の逮捕を受け入れた時点で覚悟してい

た。以前と違い、期限付きでしかもたったの二週間だけだと考えればむしろ想像よりもだいぶマシと言えよう。

だが、やはり面倒臭いものは面倒臭い。況してや風紀委員など、向こうからクビにしておいて今更都合が良過ぎる話だ。

「へえー、そんなことがあつたんですねー」

そんな彼女の嘆きに、相槌を打つのは佐天涙子。彼女らの居る場所はとあるファミレスのテーブル席であり、お互いが向かい合うように座っていた。

「ええ。本当に勘弁してもらいたいわ」

「凄く心配したんですよ？ あの後、急に居なくなつたかと思つたら逮捕されたなんてメールが送られてきて……死ぬほどビビりました」

「そうなの？ なら、悪いことしたわね。連絡だけはしておこうかと思つただけど」

「簡潔明瞭過ぎですよ。にしても犯人をゴコゴコにして捕まるなんて……そんなに酷いことしたんですか？」

「まあ……あの時はかなり頭に來てたから。ちよつとばかりやり過ぎたかもしれないわね。白黒の奴もそれが気に食わなかつたみたいだし」

「なんか今更な気がしますけどね……」

あのスキルアウトたちを全滅させた夜のことを思い出しながら佐天は言う。

話を聞く限り白井の言うことは尤もではあるのだが、それを言うなら御坂だつて不良に容赦なく電撃を浴びせている。加えて、相手は無差別爆破テロを何度も引き起こしているような凶悪犯だ。

些か過剰な暴力があつたのかもしれないが、犯人の特定と逮捕に一役買ったのだからそのくらいは別に大目に見ても良いのでは、と少なくとも佐天はそう思った。

「それじゃあ霊夢さんは今、風紀委員なんですね」

「あくまで臨時らしいけどね。んで早速とばかりに駆り出されているわ」

「え？ つてことは今は……」

「ええ。仕事、もとい捜査中よ」

あっけらかんと言つてのける霊夢。ということは今このファミレスで駄弁っているのはサボリになつてしまふのではないだろうか。

しかも初日から。霊夢ならやりそうではあるが。

「捜査……ですか？」

「そ。あの爆弾魔のグラビモスだっけ？ そいつの能力のレベルと事件の規模が違つてるらしくてね」

霊夢は固法から聞いた話を思い返す。書庫に登録されている介旅初矢のレベルは何と異能力者^{レベル}だつた。書庫^{バンク}に登録されている介旅初矢のレベルは何

いくら捜査しても容疑者が絞り込めないはずだ。爆発の規模は明らかに大能力者^{レベル4}クラスであり、それより下の者など候補にすら上がらないのだから。

しかもこのように書庫とのレベルが合致しない事例は過去にも幾つかあったのだという。それが今の今まで疑問視されていなかったのは介旅と違い、本来のレベルとの格差がそこまで大きくなかったからであつた。

これに霊夢は驚かず、むしろ納得する。介旅の言動は力に溺れた者の典型ではあつたが、同時に虐げられた弱者のような物言いでもあり、力を持つ者に対する憎悪があつた。

高位の能力者ではそのような歪な思考には至らない。ならば弱者が何らかの手段で力を得たと考えるのは自然だろう。この学園都市の常識や理屈に縛られない霊夢は当然の如くその事実を受け入れられる。

問題は、どうやったのかということ。

「その手掛かりになるかもしれない情報、あなたが持つてるんでしょう？」 涙子

「はい？ ……あ、もしかして『幻想御手^{レベルアップバー}』のことですか？」

「それ。悪いけど私にも詳しく教えてくれないかしら？」

「構いませんけど……私もそんな詳しくは知りませんよ？ ただそういうものがあるつていう噂がネットで流れてるつてだけで」

——『幻想御手^{レベルアップバー}』

「ここ最近、まことしやかに噂されている、使うだけで能力のレベルが上がる代物だという。」

俄には信じ難い話だが、こうも立て続けに急激にレベルが上がったような症例が見つかれば、眉唾物とは思えなくなるもの。何かしらの関係性があるのではと疑うのは必然だろう。

「ふーん……便利な代物ねえ。興味ないけど」

「あははは……そりゃ霊夢さんは能力が無くても強いですもんね……」

「あなたはどうかなの？」

苦笑いを浮かべているといきなりそう問い掛けられ、佐天の表情がぴしりと固まる。

仮に察したとして、こうもストレートに切り出すものなのか。少なくとも霊夢はそういう人間だった。

「興味あるの？ そのレベルアップってのに」

「そ、それは……まあ……多少は。私、無能力者レベル0ですので……」

嘘だ。本当は物凄く興味がある。

「良いんじゃない？ 別に」

「——え？」

言い淀む佐天。しかし、そんな彼女を霊夢はあつさり肯定する。

「取り締まってる訳じゃないし、能力なんて結局のところ才能だもの。手っ取り早く強化出来るのならそりゃ使うでしょ」

「で、でもそんなのズルじゃ……」

「能力にズルもへったくれも無いわよ。この街がやってる能力開発とやらと何ら変わらない。それが薬か何かを使ってるのか知らないけど私からすれば同じようにしか見えないもの」

「そもそも人工的に能力を獲得している時点で、霊夢のような天然の能力者からすれば充分にずるのようなものだろう。」

無論、霊夢はそのようなこと微塵も考えていないし、ただただどうでも良かった。

しかし、この時は一方通行アクセラレータの話をもふと思いついていた。

「大半の奴らは能力に憧れたり、そういう力が欲しかったりしてこの街に来たんでしょ？ だからレベルとかに拘る。それで能力が使えるようになるのなら良いけど、弱かったりそもそも使えなかったりするような奴からしてみれば、能力を得られる手段があるなら手を出して当然じゃない」

「――」
言葉を失う。さも当然のように、霊夢は佐天やその他の力無き多くの者の羨望を肯定していた。

「つまり霊夢さんは……私が幻想御手を使っても良い、とおっしゃるんですか？」

「ええ。人間を辞めるような外法じゃなければ私は止めやしないわよ。そんなの使う奴の自由だし、問題はその使い方でしょうに」

「使い方、ですか？」

「そ。何事も使い方次第よ。涙子は仮に能力を手に入れたとして、あの爆弾魔みたいに誰かを傷付けたりする？」

「い、いいえ！　しませんよそんなこと！」

「なら、別に良いと私は思うわ。尤も、そう気を付けていても力に溺れるような奴はごまんと居るけど」

「そう、ですか……」

「使い方次第。確かにその通りであり、しかし超能力に憧れ、羨むばかりでそんなこと頭の片隅にも無かったことに気付いた佐天の表情は曇るばかりだ。

力に溺れる、誰かを傷付ける、そんなことは絶対にはしないと思っている、いざ力を手に入れた時、自分がそうならないと言い切れる自信が無かった。

「まっ、もしも何かの間違いで道を踏み外すようなことがあれば……友人のよしみで止めてあげるわよ」

「……ありがとうございます。霊夢さん」

「? 何か感謝されるようなこと言ったかしら?」

だからこそ、その励ましに心が熱くなる。

強者でありながら弱者に寄り添う。きつと本人は大したことなど言っていないように思っているのだろうが、自分のことをどこまでも肯定してくれる霊夢の言葉は常日頃から思い悩んでいた佐天にとって何よりも救いであった。

「あ、けどもし入手の仕方が分かった時は教えてちょうだい。風紀委員の連中はその出所を調べてるみたいだから」

「はい。分かりました。……で、この後はどうするんですか? まさかネットの書き込みを片っ端から調べたりするなんて……」

「そうねえ……一応知ってそうな奴らから訊いて回って、それで駄目だったらそうなるかもしれないわね」

「うわあ……大変ですね」

そもそもネット上でも噂の域を出ておらず、本当に存在しているのかどうかすらも怪しい代物だ。書き込みの中には当然デマも混在しているのだから風潰しに調べるとなれば一体どれ程の時間が掛かるのだろうか。

「本当。相も変わらず人使いが荒いこと。まあ、程よくサボりながら適当にやってこの二週間を乗り越えていくわ」

「へえ……それは良い度胸ですの」

「——あん？」

突然聴こえてきたクセのある甲高い声に、霊夢は顔をしかめながら振り向けばそこにはこれでもかと眉間に皺を寄せた妖怪ツインテールが立っていた。

「げっ 出た、古代怪獣」

「誰が古代怪獣ですよ、ぶち殺しますわよ。はぐれたかと思つたらこんな所で油を売つて……初日からサボリとはどういう見ですよ？」

「失礼ね。ちゃんと捜査してるわよ。ね？ 涙子」

「え？ あ、はい……多分」

「佐天さんも口裏を合わせる必要はありませんの。あなたから聞いた話は事前にお伝えしていますし、そもそも今回は私とツーマンセルで行動するよう固法先輩に言われましたでしょう」

「つーまんせる？ ……あー、そうだったけ？」

「聞いていませんでしたの？ 呆れた、本当にあなたという人は……」

額に手を当て、唸る白井。対する霊夢は惚けた表情を浮かべながら肩を竦める。

完全に非は彼女にあるように思えるが、微塵も悪いと思っていない様子だった。

「にしてもよくここが分かったわね？ もしかして発信器とか付けてた？」

「まさか。あなたが行きそうな場所を虱潰しで探して回っていただけですの。行き付けですものね、このお店」

「ふーん……何で知ってんのよ？ 私がここによく来るって」

「そ、それは……とにかく！ 勝手な行動をせず、私について来てください！」

「はいはい」

「はいは一回！」

「へいへい」

「喧嘩売ってますの!?!」

「まあまあ白井さん……そうカツカしなくても……」

売り言葉に買い言葉。このままでは口論どころか本気で喧嘩に発展してしまうと佐天は怒髪天を衝く勢いの白井を宥めようとする。

これは当分、二人一緒に遊びに誘うなんてのは無理そうだ。

「つ……佐天さんまで彼女の肩を持つおつもりで？」

「え？ いや、私はそんなつもりじゃ……」

「……いえ、申し訳ありません。私としたことが頭に血が上っていたみたいですの」

「カルシウムが足りないんじゃない？」

「だ！ か！ ら！ あなたはいちいち余計なことを口に挟まないと死んでしまうの

でっ!! あとカルシウム云々は単なる迷信でしてよ!」

口の減らぬ霊夢に怒りが再燃する白井。こりやどうしようもないなと堪らず佐天は額に手をやる。

「……じゃ、そろそろ真面目に捜査するとしましょうかね」

「つ……最初から真面目にやってください。さあ、聞き込みに参りますの。お姉様も待たせていますし」

やれやれといった様子で霊夢が立ち上がる。予想通り地道に聞き込みから始めるようだ。

「けど白黒。その前に……」

「白・井・黒・子! 何度言ったら分かりますの! いい加減覚えてくださいまし!」

「じゃあ黒子。先に心当たりがありそうな知り合いのところに行つていいかしら?」

「え? そ、そんな方がいらつしやいますの?」

「ええ。確証は無いけれど」

「……そうですわね。なら、まずはその方の下へ行つてみましょう」

さらつと下の名前と呼ばれるが、それに続いた思わぬ言葉に驚く。ネットの噂でしか手掛かりがなかった幻想御手について知っている人物がよもや霊夢の知人に居るといふのか。

半信半疑ではあるものの彼女がくだらぬ嘘を吐く訳もなく、訊いてみるだけの価値はあると白井はこれを了承した。

——そして、すぐに後悔する。

「……何ですの？　（ト）」

「不良共……スキルアウトって言うんだっけ？　そいつらの本拠地よ」

「は……？」

訪れたのは、第七学区の入り組んだ路地裏を進んだ先。薄暗く物々しい雰囲気の放つ場所であり、先導していた霊夢の言葉に白井はびしりと硬直する。

「もしもヤバくなったら逃げなさい。レポートなら、囲まれても逃げて増援を呼べるでしょう」

続け様にそう忠告され、決してふざけた冗談ではないということを理解する。

武装無能力者集団の本拠地。そんなものが存在し、その場所を霊夢が知っていたのも驚きだが、そこへ風紀委員である己を連れて来るなんて——。

「どういうつもりだ？　鬼巫女」

瞬間。重圧がのし掛かる。

「……………!?!」

白井が瞠目する。先程から感じていた複数の気配。潜んでいながらも僅かに感じて

いたそれらが一瞬で消え去る程の異様な存在感を放つ男がそこに立っていた。

「あら、リーダー直々にお出迎え？」

「……お前の相手は他じゃ務まらないからな」

「それは結構なことね」

ゴリラのような筋肉質で大柄な体格。黒いライダージャケットを纏った大男は、その厳つい顔に似合わず、陰鬱でコピー用紙をそのまま吐き出しているかのような口調で喋る。

（なっ……！ この男が……スキルアウトのリーダー、ですか？ こんな男が……？）

明らかに強い。見掛け倒しなどではなく、今まで相手にしてきたスキルアウトたちなど児童にも等しいと思わせる程の実力者であると、そのオーラや所作から白井は分析し、内心戦慄する。

とてもじゃないが、単なる不良集団に居ていいような人間ではない。そして、周囲に潜んでいる男たちもまた、いつも相手にしている鳥合の衆ではなく、しっかりと統率が取れていた。

「……そここの常盤台の少女は風紀委員だとお見受けするが？ それにお前の着けているその腕章はまさか……」

「そ。一時的に復職したのよ、私」

霊夢がそう言い放った次の瞬間。潜んでいた気配が露になり、四方八方から殺気が飛び交う。

二十、三十……否、もつと居る。

思わず身構える白井に対し、霊夢は何事も無いかのように涼しい顔を浮かべたまま、目の前の男を見据えていた。

「……ほう。風紀委員に戻った身で、ここへ来た。……それがどういう意味になるのか、我々が想像する通りの認識で構わないか？」

「私はあんたらが何を想像したのか知らないけど、別に争うつもりはないわよ。ただ訊きたいことがあっただけ」

「……仲間を引き連れてきた理由は？」

「こいつがツーマンセルで行動しなさいって言うからさ」
「~~~~~!!」

傍から見れば敵の巣窟に乗り込んできた命知らず。そんなの聞いてなかったと霊夢を睨みながら訴える。普通ならば事前に説明し、腕章を外しておけとか最低限の準備をするべきだろう。

尤も、風紀委員のテレポーターは彼女が思っているよりも名も顔も知れているため無意味だろうが……。

そんな白井の様子に大男も察したのか同情的な視線を送る。

「……信用出来んな。第一何故我々が敵対関係にある風紀委員に情報を渡さなければならぬ？」

「——こっちは力尽くでも良いんだけど？」

殺気が鎮まり、代わりに男たちの喧騒が響く。というよりは霊夢の威圧に無理矢理押さえ付けられたと言うべきか。

彼らは充分に理解していた。あの見るからに華奢で幼気な少女の持つ理不尽なまでの強さの前では、数など何のアドバンテージにもならないのだと。

「……………」

「……………」

一触即発。両者が対峙し、視線を交錯させながら沈黙する。その緊迫した空気に白井は息を呑む。

恐らくあの男は自分が想定しているよりもずっと強いのだろう。霊夢が未だに手を出しておらず、大人しくしているのがその証拠だ。

相手が取るに足らぬ象無象であるのならそもそも警告や脅迫なんてせず、とつくに実力行使に出ているはずなのだから。

「……………分かった。何を知りたい？」

「賢明な判断ね。最初からそう言ってくれば尚のこと良かったのに」

「テメエ、このアマ……！ さつきから下手に出てりや調子に乗りやがって……！」

「——よせ、浜面」

「けどよ駒場のリーダー！」

「何度も言わせるな……あれがそういう女なのは分かっているだろう。噛み付くだけ無駄だ……」

「ツ……ああ、分かったよ、すまねえ」

沈黙を破り、頷いたのは男の方。その後方に隠れていた部下と思わしき金髪の男が霊夢の物言いに怒りを露にして吠えるが、男——駒場というらしい、に竦められると悔しそうに歯軋りしながらもあつさり引き下がった。

対する霊夢は気にも留めていない。

「……さつきと質問の内容を言え。気が変わらぬ内にな」

「はいはい。じゃあ、訊きたいんだけど……」

——レベルアツパーって知ってるわよね？

知らないとは言わせない。そんな暴君が如き圧を込めながら霊夢は問い掛ける。

白黒な憧憬

——痛い。

——苦しい。

——そして、寒い。

ボロボロになり、地面に這いつくばって、私は何故こうなってしまったのかと自問する。

油断はしていなかった、と思う。

……いや、ここ最近負け知らずで調子に乗っていなかったと言えば嘘になる。相手が自分と同年代、下手すれば年下の少女だということもあつて無意識に警戒を削いでいたのかもしれない。

この街では、見てくれなど何の当てにもならないというのに。

「アツハツハツハツ！ なあんだ、全然大したことないじゃん！」

あどけなく、しかし豪快な、さぞ愉快だと言わんばかりの高笑いが響く。

視線を向ければ、そこには先輩たちと交戦しているはずの一人の少女が居た。どこま

でも無邪気で、澆刺さすら感じさせられる笑みを浮かべながら。

幼気な姿をした、冷気を操る大能力者^{レベル4}。完全に実力を見誤り、無謀にも応援を呼ばずに挑んだ挙げ句が、このザマだった。

時たまに起きる精神的に未熟な高位の能力者の暴走。その通報を受け、駆け付けた私は空間移動^{テレポルト}で背後に回り込み、すかさず取り押さえた。それ自体は相手が慢心していたのもあつて呆気なく成功し、後はいつものように手錠を嵌めるだけだった。

けれど、私は知らなかった。短絡的で命知らずな人間がどれほど愚かで厄介であることを。

気が付けば叩き伏せられていた。何と彼女は自らを巻き込んでその周囲全域を凍り付かせるというトチ狂った方法で私の逃げ場を奪い、打ち破ったのだ。

圧倒的な暴力。純粹過ぎるが故の容赦の無さ。人生で初めて私は打ちのめされ、己が不甲斐なさを呪う。

「強靱！ 無敵！ 最強！ どいつもこいつも口ばつかりの雑魚ね！ やっぱりあたいが——げっ」

その時だった。

少女の背後の分厚い壁のような氷塊が砕け散り、何か舞い降りる。

——あの人だ。

「つたく……寒いわね、冷房病になっちゃったらどうすんのよ」

「嘘お!! ノーダメっ!!」

紅く、白く。

烈しく、妖しく。

それは現実から切り離されたかのように、あまりにも幻想的で、あまりにも神秘的で。

悠然と、優雅に飛び、舞うその姿はまるで二色の蝶のようで――。

どうしようもなく、輝いて見えた。

言うまでもなく、白井は博麗霊夢が嫌いだ。

自由奔放で無計画。いつも好き勝手に動き、人の話を聞かない。おまけに口も悪く、名前すら覚えてくれないような人間を嫌わない方が可笑しいだろう。

誰しもが犬猿の仲、水と油だと認める間柄。しかし、実のところそれは憧憬の裏返しである。

白井が彼女と初めて出会ったのはまだ彼女が風紀委員ジャッジメントに所属していた頃。当時新入りだった白井は巫女装束を纏った風変わりな先輩の存在に衝撃を受けたのを今でも覚えていいる。

「第一七七支部に配属されました、白井黒子と申します。本日はよろしくお願いします。博麗先輩」

「……そ。よろしく」

緊張した面持ちで挨拶をすれば無愛想にそう返し、彼女は冷めた眼でこちらを一瞥するだけだった。

最初に目を引いたのは艶やかな黒髪とその端麗な容姿。しかし、どこか無気力そうに、或いは不機嫌そうに振る舞うその姿はとてもじゃないが、良い印象とは言えなかった。

それからあのあまりにも際どく巫女装束と呼んで良いものなのか疑わしい奇抜な紅白。たまに制服を着用していることもあったが、明らかに風紀委員でありながら風紀を乱しており、何故あんなものを着ていることが許されているのだろうかと思議でしようがなかった。

風紀委員は志願制。更に誰しもが簡単に入れるものではなく、十三種もの適性試験と四ヶ月以上の研修があり、それらを突破して漸く一員になれる。

つまり皆、望んで風紀委員になり、士気の高い者が殆どだということ。そんな者たちの中で霊夢のような見るからに不真面目でやる気のない人物が交ざっているという事実は意外なことであり、そんな心持ちで治安維持の仕事が務まるとも思えず、理解し難かった。

後から訊いた話だが、元々彼女は校内で問題を起こし、その指導で強制的に風紀委員

に加入させられたのだという。別に前例が無い訳ではないのだが、通常そのような場合で強制加入させられた際には臨時、見習いの隊員として扱われる。

にも拘わらずどういふ訳か霊夢は正規の隊員と認められていた。一応正規の手順を踏み、上述した適性試験も合格しているようだが、ならば尚更風紀委員としての自覚を持つべきだ。

そんなこともあり、白井の霊夢への評価は最悪といって差し支えない。軽蔑すらしていた。

性格もいい加減で面倒臭がりとおおよそ尊敬出来るようなものではなく、事あるごとに同期の固法や四葉に叱られている場面を目撃していたから、決してあんな風にはなるまいと反面教師にしていた程だ。

ただ、何度か行動を共にしている内に白井の心境は変わっていった。

予想に反して霊夢はこれらのマイナス要素を帳消しに出来てしまうくらい優秀だったのだ。

——優秀過ぎる、と言った方が正しいか。

頭脳明晰で基本的に何でもそつなくこなし、また空を飛ぶという能力のお蔭で現場に駆け付けるのも早い。

加えて、足技を主体とした我流の体術を修めており、その実力は異能力者^{レベル2}でありなが

ら大能力者すらも単独で取り押さえてしまふ程である。

そして、何よりも白井が衝撃を受けたのは、その在り方だった。

傲慢だが、差別はしない。

怠惰だが、妥協はしない。

何ものにも縛られず、囚われず。何事も平等に接し、如何なる状況においても冷静な視点で迅速に判断し、的確な行動を取る。

時に規律を乱し、必要とならば違反ギリギリの型破りな方法を用いることもあったが、それでも彼女が間違っていたことはただの一度も無く、常に本質を見据えながら善悪と賢愚を問い、正すべきことを正す。

その姿勢は白井にとつて実に模範的であり、そして理想的であった。

今までの印象や評価は大きく覆るのは当然として、いつしか彼女のようになりたいという憧れを抱くようになり、気が付けばその背中を追っていた。

白井がいくら始末書を書かされても管轄外の事件に介入するという越権行為や規律違反を頻繁に行うのは持ち前の正義感の強さ以上に霊夢へのリスペクトと対抗心が故であった。

しかし、だからこそ、白井は頑なに霊夢のことを認めようとはせず、むしろ目の敵にして会う度に食って掛かっていた。彼女が如何に優秀であれそれ以外の面ではいい加

減で不真面目な人物であるのは変わらず、それが無性に気に食わなかったからだ。

つまり憧れているからこそ、自身の抱く理想と食い違う部分が許せないということ。何とも我が儘な理由であるが、まだ小学生であることを考えれば年相応の感情と言えよう。

察しの良い同僚らからその様子を素直じやないと揶揄されれば必死に否定し、いつも悶々とする。彼女としては自身が霊夢へ尊敬の念を抱いてしまっていることが心底受け入れ難い事実だったのだろう。

そんな無意識レベルで避け続けていた歪な感情を自覚したのは昨年こと。霊夢が風紀委員から去ったのを知った時だった。

信じられなかった。彼女が辞めるなど夢にも思っていなかったが故に。

あまりにも唐突な出来事。一報を聞くや否や白井がすぐに彼女が所属している支部へ向かうが、既にその姿はどこにも無く、彼女の机も撤去されていた。

それでも何かの間違ひではないかとその場に居た固法を問い質すも、それが紛れも無い事実だということ突き付けられる。

博麗霊夢は懲戒免職の処分を下され、そのまま依願退職。風紀委員から完全に除籍されていた。

何故？ どうして？ 白井はただただ愕然とするばかり。彼女は風紀委員に必要な

人材のはずだ。それを追いつく道義などあつていいはずがない。

理由は至極単純。——あまりにも正し過ぎたのだ、彼女は。

風紀委員はあくまでも組織。そのため彼らにとつて霊夢は途方もない戦力であると同時に、手に余る存在だった。

元より法や規則に縛られず、己が主観による善悪を基準とし、立場に左右されずに動くが故に、越えるべきではない境界を一切の躊躇無く踏み越えてしまう恐れがあつたらだ。

それでも多くの事件を解決してきた実績を誇る優秀な学生だったためある程度は看過されていたが、ある学校で起きた“無能力者狩り事件”によって遂に彼女は暴走してしまった。

結果だけを見れば事件自体は手早く解決した。しかし、その際に彼女は幾度も命令違反を起こし、挙げ句に犯人たちを再起不能に追い込んだ。

事態を重く見た上層部は不適切な、必要以上の暴行であると判断し、霊夢にその責任を負わせた。

白井としては到底納得出来ない内容。無論、その行き過ぎた行動に非はあるのは確か。で何かしらの処分が下されるのは当然とは思ふが、懲戒免職というのは流石に重過ぎる。

彼女のことを疎んじる者たちの声があったのは明らか。上層部にとって勝手な行動ばかりする霊夢はもはや目の上のたん瘤だったのだ。

それ以上に許せなかったのは、霊夢がその処分を甘んじて受け入れたことである。彼女が不服を申し立てれば処分はいくらでも軽くなつたというのに。

理由は明白だった。元々彼女は望んで風紀委員に入った訳ではなく、そのため食い下がる理由が無かつた。むしろ今回の一件は辞める口実として好都合だったのであろう。

そんな身も蓋もない事実には気がきながらも白井はこれを否定しなかった。

あんなにも活躍しながら。彼女にとつて風紀委員での日々は、自分や固法たちとの日々は、そんな簡単に捨てられるものだったのか。そこに何の思い入れも無かつたのか。

彼女がもう居ないことが、答えだった。

この時に受けたショックは計り知れない。自分がどこまでも盲目的であつたことを思い知り、打ちのめされた。

そして、思い返しながら気付くのだ。結局のところ自分は博麗霊夢という人物のことについて何一つ知らなかつたということ。

今までの憧れが裏返り、黒い感情が沸々と湧く。裏切られたとすら感じ、当時の白井はそれはもう荒れに荒れ、今でこそ落ち着いたが、心の凝りは今尚残っている。

勝手に憧れ、勝手に失望したに過ぎない。そう言われればそれまでの話。分かつては、いるのだ。

しかし、だからといってこれらの感情を受け止められるほど白井は大人ではなかった。

故に、彼女のことが嫌いだ。

風紀委員じぶんたちの下から去りながら、何ら変わらない様子で、何の後ろめたさも無い様子で様々な事件に首を突っ込んで解決しては、正義の味方ロイと持て囃されるその姿が心底気に食わず、大嫌いだった。

御坂への感情が敬愛だとするのならば霊夢への感情は愛憎とも言うべきもの。

嫌いで、憎たらしくて、忌々しいとすら思っている、その深層には確かな憧憬が存在しており、それが煮え切らぬ感情を抱かせる。

「……まったく、あなたという人は」

「何よっ。」

そして現在。とある公園にて。

白井は憂鬱げに額に手をやり、溜め息交じりに吐き捨てる。その視線の先にはベンチで寛ぎながら小型のUSBメモリーを遊ぶ霊夢の姿があった。

作品名：Level Upper

アーティスト名：UNKNOWN

レベルアップ!

幻想御手なる代物の正体は機械や薬物といった類いの代物ではなく、音楽ファイルだった。

製作者は不明。ある裏サイトの隠しページから無料でダウンロードすることが可能らしく現在初春に詳しい入手経路を調べさせている。

「相変わらず型破りというか……まさかスキルアウトと取引をするとは……」

「一番手っ取り早い方法を選んでだけよ」

悪びれもせず言つてのける霊夢。あの後、駒場という男から幻想御手の情報を聞き出すだけでなく、元々所持していたのか手下に入手させたのかは分からないが、現物を手渡された。

流石は曲がりなりにも裏社会に通じていると言うべきか。その情報網は脅威的と言わざるを得ず、スキルアウトといえど侮れない連中だと駒場の存在も相まって白井は改めて認識する。

これ以上のない成果。闇雲に聞き込みを続けるだけではこんなにも早く行き着くことはなかっただろうが、方法が方法だけに白井は素直に喜べない。

「彼らとは、どういうご関係で?」

「別に。ただの知り合いよ、大した関わりは無いわ」

その返答に嘘は無い。見た限りでも友好的な様子ではなかったが、第七学区のスキルアウトを取り纏めているような大物と繋がりがあつたことに白井が思う所が無い訳がなかった。

「そうですか……にしても意外でした。あなたはスキルアウトには蛇蝎の如く嫌われていると思つていましたのに」

誰が呼んだか「鬼巫女」。

圧倒的な強さと、あまりの容赦の無さから名付けられた、安直で暴力的過ぎる異名。

あのスキルアウトのリーダーは彼女をその名で呼んだ。今では半ば都市伝説扱いされているかと思つていたが、どうやらその筋でも相当有名らしい。

曰く、アレは災厄。決して近付いてはならない。「鬼」と恐れられるのには、それ相応の理由があるということであり、だからこそ彼女が彼らの活動を看過し、あまつさえ協力を仰ぐ程度の関係を保っているということは、それだけの正当性が彼らにも存在することを意味していた。

スキルアウトを悪しき連中だと認識している白井からすれば一部とはいえ彼らを肯定しているように思え、複雑な心境だった。

——そして、恐らくそれは正しいのだろう。

「そりゃ大抵はくだらない連中ばかりだけど中にはああいう義理堅い奴だつて居るもの

よ。他と違つて多少は弁えてゐるみたいだし」

「だから見逃してゐると?」

「ええ。見える範囲で悪さしてないんなら、わざわざ喧嘩売る道理も無いでしょう」

「見える範囲……例えばそれはどんな?」

「うーん……私の機嫌を損ねるとか、許可無く目の前を横切るとか?」

「どこの暴君ですか?」

あつけからんと言ひ放つ靈夢。義理堅い……ということは何かしら恩を売つてゐるということだろうか。彼女がスキルアウトに恨まれることはいくらでもあるが、果たして感謝されることがあるとは到底思えないが……。

「それとも全員取つ捕えてやった方が良かったかしら? 今は一応ジャツジメントだものね、私」

「……いえ。どのみち我々二人だけでは厳しく、応援を呼んだところでその間に逃げられていたことでしょうし」

無論、その気になれば全員とは行かずとも駒場を含め大勢を拘束することは出来ただろうが、そもそも現行犯ではないため惚けられてしまえば終わりだし、ただスキルアウトというだけで逮捕する権限は無く、たとえ強引な手を使ったとしてむしろ風紀委員の横暴だと非難の聲が上がりかねない。

歯痒い思いをする白井。対して霊夢はそこまで考えている訳でもなく、別にどちらでも良かった。

「ふうん……で、目的のブツは手に入れた訳だけど、これって別に違法なものじゃあないんでしょ？ 能力持ちが増えたり強くなるのに関してはこの街にとってむしろ好都合に思えるし」

どうでも良さげに話題を変え、疑問を口にする霊夢。法律で禁じられていない以上、違法薬物のように取り締まることなど出来やしない。

一体何が問題だというのかとすら思う。そもそも成人にもなっていない少年少女らに超能力なんてものを無責任に与えて平然としているのがこの学園都市。悪人が力を持つのを良しとしないのであれば、その時点で終わっている話なのだ。

この街の倫理は、とうの昔に破綻している。

「それは……まあ、そうですねが……しかし、犯罪率が急増しているのもまた事実。その出所を調べるのは治安維持組織である風紀委員として当然のことですの」

ここ最近起きた事件の大半が幻想御手を使用したと思われる事件ばかり。たとえばこのアイテム自体に何の違法性が無かろうと無視出来るようなものではなく、何よりも唯一の手掛かりだった。

「それに使用するだけで能力のレベルが上がるなんてものが本物だとして、何のデメ

リットも無いとは到底思えませんわ」

真つ当なアイテムならば公に発表しない理由は何なのか。そうせずに裏サイトのみに流しているということは、まだ試作段階で学生を実験台にして効果を調べている可能性だつてある。

少なくとも何かしらの後ろ暗い理由があるはずだ。

「……そういうもんなのね」

一方、それを聞いた霊夢の反応は淡泊なもの。原石である彼女には幻想御手も能力開発も、そこに何の違いがあるのか分からなかった。

ただ確かに楽しんで力を得るのなら、それなりの代償があるのは当然のことだろう。

「じゃあ、この後どうすんの？ 作つてる奴を特定して潰しに行くにしても口実が必要だけど」

「……そうですね。まず幻想御手の仕組みを説明しないと、今のところは何とも言えません」

物騒な発想。これを冗談でも何でもなく本気で言っていることを理解している白井は顔をしかめながらも、しかし大元を叩くことが最適解であることもまた事実であると内心同意する。

いつもそうだ。霊夢は遠回りを嫌う。故に、最も早く事態を解決することを好み、そ

の為ならば手段を選ばない。

やり方が暴力的だったたり極端だったりするのには彼女がこの方法こそが一番の最適解で手っ取り早いと判断したからだ。スキルアウトと取引したのもそれだけの理由でしかなく、だからこそ今の白井はその姿勢を危険視していた。

彼女が常に正しいという幻想は、もう捨てたが故に。

「なので一先ず支部へ戻りましょう。何故かお姉様とも連絡が付きませんし」

「お姉様？ ま、分かったわ」

姉なんて居たのかと思いつつも霊夢はその言葉に従い、気だるげにベンチから立ち上がる。

そして、スツと手を差し出す。

「ん」

「……何ですの？」

「何って、レポート。その方が楽でしょ」

「ああ、そういうこと……」

突然の行動に困惑の色を隠せない白井だったが、その言葉で漸く意図を理解する。

ここから支部まではそう遠くないが、空間移動を使用した方が時間を短縮出来ることだろう。

納得した様子で白井は彼女の手を取ろうとし――。

「……………」

ぴたりと、その手が止まる。

「……………何よ?」

「つ……………いえつ、な、何でもありませんわ」

「?」

どうしたのだろうか。一瞬硬直したかと思えばブンブンと首を横に激しく振りながら乱暴に手を握ってくる挙動不審な白井に対し、霊夢は首を傾げるばかり。

(いやいや! 何を意識してるんですの私! しかもよりにもよつてあんな紅白に!)

頬を染め、気取られぬよう俯く白井。手を握る際に思わず性的な羞恥心を抱き、躊躇してしまつたことに激しく狼狽している様子だつた。

そんなはずはないと脳内で必死に否定する。自分が同性愛者であることは認めよう。しかし、それはあくまでも御坂美琴のみが対象。彼女以外に対して劣情の類いを抱くなんてこれまで一度足りともなかつた。

(これは何かの間違いですの! 私が劣情を抱くのはお姉様ただ一人! 百歩譲つても博麗霊夢なんか絶対有り得ません!)

つくづく自分自身の感情に疎い彼女は知らなかつた。己が抱く御坂に対する異常と

も言える劣情や欲情はその高過ぎる敬愛の念が発展したものであることを。

そして、霊夢にも同等かそれ以上の歪んだ感情を向けてしまっている。況してやそれが愛憎や憧憬の類いならばどうなるかは明白だろう。

要するに、白井は霊夢を性的対象として見ていた。本人すら無自覚な内に。

「……まだ？ さっさとしてよ」

そんな明らかに動揺しており、様子が可笑しい白井を怪訝そうに見据えながら霊夢は急かす。

「わ、分かっております！」

今度こそ白井は空間移動を実行し、二人の姿は公園から消える。

白井黒子は博麗霊夢が嫌い。それは周知の事実であり、揺るがぬものかと思えた。しかし、実際にはそのような言葉だけでは言い表せないような複雑で歪な感情がそこには存在し、そんな彼女にとってここ最近の出来事は劇的な変化と言えよう。

故に、彼女たちの関係にもまた変化が訪れるのは、そう遠くないのかもしれない。

因縁

——私、上条当麻は不幸に愛されているとしか思えない青春を送っている。

心の中でそんなことを独白しながら自称世界一不幸な少年は陽の落ちた学園都市の街を我武者羅に走っていた。

理由は単純。背後から追いかけてくる不良たちの魔の手から逃れるためである。

「がああああ！ しつこ過ぎるぞあんたら！」

何故こんなことになってしまったのか。彼を知る者が見れば誰しもが「またか」と呆れることだろう。

いつもと何ら変わらない。持ち前の正義感と親切心による善意の行動。ファミレスで女子中学生が不良に絡まれているのを見掛け、助けてやろうかなと思ひ、声をかけたところ色々あつて逆上した不良たちに追われる羽目になった。

無能力者^{レベル}とはいえ腕っ節にはそれなりに自信がある上条であるが、一人や二人ならともかくこんな集団が相手では流石に袋叩きにされてしまうので、振り切るか諦めてくれるまでこうして逃げ続けているのだ。

(前は爆破テロに巻き込まれるし、夏休み直前だったのに本当にツイてない……！)

不幸だー！ ともはや口癖となった嘆きを叫びながら走る、走る。そうして鉄橋の位置まで来て漸く怒声と足音が聴こえなくなった。

「ハア……ハア……やつと、撒いたか？」

息を切らしながらしやがみ込む上条。この距離までの全力疾走はかなりきつかったが、どうにか振り切れたことに安堵する。

「不良を守って善人気取り？ 熱血教師ですかあ？」

「げっ」

それも束の間、声に反応して振り返ればそこにはファミレスで絡まれていた女子中学生が不遜な態度で立っていた。

「まさか……あいつらが追いかけて来なくなったのって……」

「うん。邪魔だったから焼いといたわ」

あつけらかんとそう言いながら髪をかき上げ、バチバチと青白い火花を発する女子中学生。

——改め、ビリビリ中学生・御坂美琴。

「やっぱり……」

上条は頭を抱える。自分の善意が無駄になってしまったのを察してしまったからだ。

彼が助けようとしていたのは目の前のビリビリ中学生などではなく、絡んでいた不良の方だった。彼らが不用意に手を出そうとしている少女の素性を知っていたが故に。

この学園都市に八人しか存在しない超能力者レベル5にして第三位の電撃使いエレクトロマスター。そう考えれば今回最も不幸なのはそれを知らずに絡んでしまった今頃黒焦げになっているであろう不良たちかもしれない。

否、それでも上条は己の方が不幸であると自信を持って言える。

何せ目の前の超能力者は鬪争心を剥き出しにしており、これから喧嘩を売られようとしているのは明白であったのだから。

「ねえ、レールガンって知ってる？」

「……はい？」

聞き慣れぬ単語に首を傾げる上条。対する御坂はスカートのポケットから何かを取り出す。

それはゲームセンターのコインだった。

「別名“超電磁砲”。フレミングの運動量を利用して砲弾を撃ち出したりするんだけど、どうしても電力の問題から巨大な物になっちゃうのよね」

キンツと響く金属音と共に、コインが彼女の手から宙に打ち上げられる。

「だけど、私とその電力を補って磁力も上手いこと利用すると……」

そして、パチンとコインを指で弾いた瞬間。凄まじい轟音と共に、橙色の閃光が瞬いた。

上条が反応する間もなくその軌跡は彼の真横を通り抜け、橋を縦に分断するかのよう
に大地を焼く。

かろうじて、あのコインが射出されたということだけは理解出来た。

「なっ……」

「こんな風に、ただのコインでも音速の三倍で飛ばせばそこそこの威力が出るのよ」

とてもじゃないが、＼そこそこ＼なんてレベルではない威力だ。電熱が肌を撫でる感
覚に冷や汗を流しつつ、飛び退いた体勢のまま上条は声を張り上げた。

「まさか……連中を追い払うのにそれを……!?!」

「はあ? 馬鹿にしないでくれる。無能力者共の料理法くらい心得ているわよ」

「いや、俺も無能力者なんだけど……」

「どの口が言ってるのよ……とまあ、挨拶はこのぐらいにして勝負を——」

獰猛な笑みを浮かべ、電流を纏う御坂。どうやら既に臨戦態勢のようで上条はもう何
度目か分からない展開にげんなりした表情をしながら、いつでも右手を出せるように身
構える。

本当に、ツイてない。だが、今回ばかりはまだ希望が残っていた。

「——こんな時間に何やってんのよ」

その時だった。救世主が舞い降りたのは。

「なっ……!!?」

「その声は……!」

スタツと二人の間に誰かが降り立つ。突然の、それも空からの乱入者に御坂は目を見開き、そして上条は聞き覚えのある透き通るような声に歓喜した。

彼は闇雲に逃げていた訳ではない。この場所はある人物の自宅近隣。一縷の望みをかけて上条はここまで必死で向かっていたので。

思い当たる中で、最も頼りになる存在の元へ。

「博麗——ってあれ?」

が、次の瞬間には御坂と同じように驚きの表情を浮かべる。そこに立つのは、上条の予想通りクラスメイトである博麗霊夢その人であった。

彼が驚いたのはその服装。いつもの紅白な巫女装束ではなく、半袖のパーカーにホットパンツを着用していたのだ。

「……何よ?」

「いや、えつと、その格好……」

「ああ、これ。この前、友人と買った物よ。折角だし着てみようかと思って」

何というか、普通の格好だ。巫女姿と学生服ばかり見慣れた上条は困惑してしまふ。何せ今の今まで私服姿の霊夢なんて見たことなかったからだ。

彼女の言う友人というのは例のサテンルイコなる女子中学生で間違いないだろう。てつきりあの爆破テロ騒ぎで有耶無耶になったかと思つたが、ちゃんと買ひ物はしてゐたようだ。

「どう？ 変かしら？」

そんな態度に眉をひそめながらも、霊夢は問う。

「へ？ あ！ い、いや！ そんなことないぞ！ むしろ滅茶苦茶似合つてますとも！

よっ！ クールビューティ！」

「そ。ありがと」

物珍しさに困惑していたのを誤解されたかと思ひ、慌てて訂正し、誉めちぎる上条。無論、世辞などではなく本当に似合つており、正直な感想だ。

ラフな格好にも拘わらず様になっており、雅さすら感じる。恐らくどのような服装であらうと、彼女は着こなしてしまふのだからと上条は友人との付き合ひにシヨツピングを薦めた過去の自分へ最大限のグツジョブを送つた。

博麗霊夢真人間化計画の出だしは好調である。吹寄や小萌が見れば感動すら覚えるだろう。

「な……なっ……ななな……!」

一方、完全に蚊帳の外と化していた御坂はそんなやり取りを前にわなわなと震えていた。

「何イチャついてんだゴラァ!」

「あ?」

突然の怒声に振り返った霊夢。そこで漸く同級生と対峙していた存在の顔が見覚えのあるものであることに気付く。

「……ミサカミサカだっけ? こんな所で何してんの?」

「御坂美琴よ! 博麗さんこそ何で……というか! あ、あいつとどっ、どという関係なのよっ!」

「あいつって……当麻のこと?」

「ととととととととととととととととと、とうっ、ま……!」

「?」

こてん、と首を傾げる霊夢。顔を赤らめ、吃りながら目に見えて動揺している姿は、以前会った時とはだいぶイメージが違う。

そもそも何故こんなにも動揺しているのか全く理解出来ず、後ろの上条へ視線を送るも彼もまた当惑している様子である。

(な、何であいつと博麗さんが……そ、それに下の名前で呼んでたつてことはまさか……!?)

対して御坂は完全に冷静さを失っていた。上条とあの霊夢が知り合いで親しげな様子だけでなくも衝撃的だというのに、何と彼女は下の名前で呼んだのだ。

一般的に、しかも異性が相手を下の名前で呼ぶのは家族か相当親しい関係であり、実際には霊夢が基本的に誰に対しても下の名前で呼ぶだけなのだが、それを知る由が無く、年頃の少女である御坂が在らぬ誤解を抱くのは必然と言えよう。

在らぬ誤解とは勿論、そういうことだ。

「……で、騒がしかつたから文句言いに来ただけだ。どういう状況なのよ、これ？」
 よもやそのような脳内ピンクなことになっていなんて露程も思っていない霊夢は訝しげな視線を送りながら何があつたのかを問いかける。

幻想御手の現物を持ち帰り、後のことは白井と固法に任せて早々に帰宅し、漸く骨を休められるかと思つた矢先に襲つてきた騒音。初めに聞こえてきたのは男たちの怒声であり、いつものように馬鹿な不良共が喚いているのかと思えば今度は大砲のような凄まじい音が響き、何事かと様子を見に来るとそこには見覚えのある顔が二つもあつた。

上条当麻と御坂美琴。一見すると接点なんて無さそうな意外な組み合わせであるが、こんな場所で何をしているのだろうか。

「えつと……実はこいつが不良に絡まれてて、たまたま見掛けた俺がその不良を助けようとしたら追いかけて、その不良はこいつにやられて、んで今こいつに勝負を挑まれようとしていたところ……だな」

「はあ？」

答えぬ御坂に代わり上条が噛み砕いて質問に答えるが、状況を把握するどころか余計意味が分からなくなる。

不良の方を助けるといふのは御坂が超能力者だと知っていれば納得が行くが、何故勝負を挑まれることになったのだろうか。

それに、超能力者が無能力者に勝負を？

「一応確認するけど、あんたが勝負を挑んだ訳ではないわよね？ 遂にその右手で天下を獲る気になったとか」

「はい!? いえいえ滅相もございません！ 今回の件に関しては上条さんは完全な被害者ですことよっ!？」

言い間違いかもしれないと訊けば上条は心外とばかりに即座には否定して己が潔白を主張する。変な敬語口調なのが無性に腹が立つ。

「……らしいけど、弁明はある？」

再び御坂へ視線を戻す。彼女は未だに固まったままブツブツと小声で何かを呟いて

いた。

「ねえ、聞いてんの?」

「——え? な、何よ?」

「だから、こいつに勝負を挑んだって本当?」

何度か呼び掛けて漸く反応した御坂。先程までの話を一切聞いていなかったようであり、若干の苛立ちを覚えながら霊夢は再度問いかける。

「そ、そうよ! 今から勝負するところだったのよ!」

「……あ、そう」

弁明するどころか全面的に認めた。これに霊夢は溜め息を溢し、呆れ返った様子で額に手をやる。

一体何故そのようなことになったのか気になるものの事実確認し、先に仕掛けたのが御坂の方であることが解ったので動機や経緯を問い詰めるつもりはない。

「あのねえ……レベル5つてのは、血の気が多い奴ばかりなの? 痴話喧嘩なら他所でやってちょうだい」

「はあ!? だつ、誰と誰が痴話喧嘩ですつて!」

御坂がこめかみに青筋を立てる。どうやら今の発言は彼女の地雷を踏んでしまったらしいが、霊夢はそんなことで退くような人間ではない。

「そりやあなたとこいつ以外に誰が居るつてのよ。急に大声出さないでちようだい。喧しいわね」

「何ですつて……!!」

空気がピリつく。それは比喩ではなく文字通りであり、プルプルと震えながら御坂が纏う青白い電流によるものであつた。

一応フオローすると、普段の彼女ならばこの程度でキレることはない。況してや相手は知人で虚空爆破事件の際に友人を助けてもらった恩もある。

しかし、宿敵との勝負に水を差されたこと、少し、ほんの少し気になつてゐる男子と親しげな会話を見せつけられたことに加え、彼女が憤る何よりの理由がその眼だつた。

(何なのよ、まるで有象無象を見るような冷たい眼……前とは全然違うじゃない……！)
見下されているとすら思つた。あの時も無気力な目をしていたが、それとは全く違
う、こちらをどうでも良さそうに見据える様は酷く冷徹なものに見えた。

これは単に霊夢から見た御坂の評価が友人の友人から騒ぎを起こす迷惑者にグレー
ドダウンしただけに過ぎないのだが、御坂が気付くはずもない。

「何？ 今度はバチバチうるさいんだけど」

「お、おい博麗つ、あんまり煽るなよ、ビリビリを怒らせたらヤバイことに……」

「あー？ ビリビリー？」

明らかに殺気立っている御坂にも臆することなく、鬱陶しげな視線を向けていた霊夢だったが、上条の言葉にふと思いつく。

「……そういえば佐天は御坂のことを、こう呼んでいた。」

——学園都市第三位の超電磁砲^{レールガン}、常盤台中学のエース、誰しもが憧れる電撃姫、だと。常盤台中学なる学校は知っている。世界有数のお嬢様ばかりが通う学舎の園であると、青髪ピアスから聞かされたことがあったからだ。

レールガン、というのが能力名のことなのかは知らないが、電撃姫という呼び名からして電気系統に関係した能力、それこそ電撃^{エレキ}使い^{ロマスター}か何かなのだろう。

であれば、だ。自ずと答えは見えてくる。

「もしかして……あなたが例のビリビリ中学生？」

「ブチッと堪忍袋の緒が切れる音が響く。」

「ビリビリ言うんじゃねえゴラアア!!」

直後、前髪から迸るように放たれた高圧電流。突如として視界を埋め尽くす雷光に霊夢は瞠目し、反射的に飛び退く。

「……危ないわね、いきなり何すんのよ」

数本の毛髪が焼け落ちる。完全に不意を突かれ、然れどギリギリで回避に成功した霊夢は突然の攻撃に瞠目しながらも目を鋭くさせ、確信した。

間違いない。彼女こそが、いつぞや話題に出たビリビリ中学生なる存在であると。

「なあっ?! 避けたっ?!」

一方、御坂は驚愕する。つい頭に血が昇って電撃を放ってしまったことを焦るよりも先に、後ろのツンツン頭の少年のように不可解な右手で防ぐ訳でもなく平然と、ただ普通に避けられたことに。

「ちよつ、大丈夫か博麗っ?!」

「ええ。平気よ、避けたし」

「お、おお……マジか。雷って避けられるもんなのかよ」

「あんたが言う?」

流星に手加減はしているだろうが、それでもただでは済まない威力の電撃に上条は心配して声をあげれば霊夢は何食わぬ顔でそう言う。

恐るべき反応速度。安堵しつつも改めて戦慄する。上条もまた前兆の感知とも言うべき上条自身も理解し難い人間離れた技能を持っているが、霊夢のそれはもはや未来予知にさえ等しいものだった。

「にしても……まさか問答無用でぶっ放してくるなんてね。もうちよつと理知的な奴だと思っていたんだけど、どういうつもり?」

呆れと失望。そんな感情を隠すことなく露にし、あの電撃を目の当たりにしても霊夢

は全く動じず、悠然とした態度で御坂と対峙する。

(ツ……やっぱり、只者じゃなかったのね)

ギリツと歯軋りする。ここで漸く御坂は理解した。以前に彼女が自身が超能力者だと知っても大した反応を見せなかった理由を。

——強者の余裕。

有象無象を視ているようだというのは正しくその通りであり、彼女はこちらを脅威とすら認識していないのである。

しかも相手は本来であれば格下のはずの異能力者。御坂はレベルの強弱で差別するような人間ではないが、あからさまにこちらを見下す霊夢の態度はプライドの高い彼女にとっては酷く癪に障るものであった。

しかし、無能力者にも拘わらず己の電撃を無効化する目の前のツンツン頭の少年のように低位の能力者の中にはまだ予想だにしない存在が紛れている可能性は充分にあった。

(あいつと同じ、特殊な能力なのかしら？ 空中浮遊とあの時爆発を防いだ見えない壁に加え、電撃を避ける程の反射神経……全く繋がりが見えないわね)

念動力、空力使い、或いは重力操作、はたまた全く性質の違う能力か。理解不能さで言えば上条の右手と同等かそれ以上の霊夢の能力を御坂は冷静に分析し、考察する。

しかし、現時点ではあまりにも情報が足りない。

「——上等よ」

故に、彼女が望むことは一つ。

「今から私と勝負しなさい！ 博麗さんっ！」

「……はあ？」

何を言ってるんだ、こいつは。

こちらを指差し、闘争心を剥き出しにする御坂。その言葉に霊夢は耳を疑い、何故そのような思考に至るのかと顔をしかめる。

「嫌よ。面倒臭い」

無論、了承してやる道理は無く、きつぱりと断る。しかし、目の前の殺気立つ少女はそれを許す様子ではないようだ。

「あれだけ挑発しておいて今更逃げるなんて言わせないわよ！ ——それに、あんたとは前から戦ってみたいと思ってたから丁度良いわ！」

「……まるで狂犬ね」

「あ、あ、んっ!？」

溢れる溜め息。これならまだ一方通行アクセラレーダーの方が話が通じるだろう。

御坂と会ってまだ日が浅いが、そんな彼女への評価は決して悪いものではなく、これ

まで会ったことのある超能力者たちと比べると比較的好ましい印象を抱いていた。

しかし、こちらに向かつてガンを飛ばしてくるその有り様を前にしてやはり超能力者にはろくな奴が居ないということのを再認識する。

「ちよつと待てよビリビリ!」

すると上条が怒りを露にしながらか呼び止める。

「いきなり電撃飛ばしてきたかと思えば博麗に勝負を挑むって……何を言ってるんだお前は!」

「うるさいわね! あんたとの決着は後で付けるから大人しく見ていなさい!」

「あ、奇跡的に矛先が別の所に向いたと思っただら上条さんはしつかりロツクオンされたままなのでございますのね。……じゃなくてっ! 博麗の言い方は確かにアレだが、言ってることは確固たる事実で悪いのは先に攻撃したお前なんだからな!」

「何よ!? また私に説教するっての!」

「お前なあ……! 説教説教ってそういう話じゃないだろ……!」

この場所まで誘い込んだ上条が言うのもどうかと思うが、そもそも彼の目的はあくまで不良たちの対処をさせる為であり、超能力者である御坂の相手をさせるつもりなど微塵も無かった。

対する御坂は逆ギレ。その身に纏う電流が威嚇するようにバチバチと青白い火花と

なつて弾ける。

「……あほくさ」

そんな言い争いを冷めた眼で見ていた霊夢は吐き捨てるようにそう呟き、二人へ背を向ける。

進行方向は愛しの我が家。あまりにも馬鹿馬鹿しく、付き合い切れなかった。

「ちよつと！ どこ行くのよー！」

が、当然御坂に気付かれる。

「帰る。私の負けでいいから」

「ハアツ!? ふざけないで！ ここまで虚仮にされて終われる訳ないでしょー！」

「知らないわよ」

そう切り捨て、ギャーギャーと喚く声を無視して霊夢は宙に浮く。それを見て御坂が攻撃動作に入った時には時既に遅く、彼女は以前に白井から逃れたように凄まじい速さで飛翔しており、あつという間に射程外へ逃れていた。

今日は耳栓をして寝よう。

「~~~~~!!」

どんどん小さくなっていく霊夢の姿に、地団駄を踏む。

一方、上条はホツと胸を撫で下ろす。あはや大喧嘩に発展するところだったが、どう

にか事なきを得たようだ。

(良かった〜！ 博麗とビリビリが戦うとか、とんでもないことになるのは目に見えて
いるからな……)

霊夢は確かに強い。異能力者でありながらスキルアウトが百人束になるのが無傷で
薙ぎ倒すし、高位の能力者が相手だろうと瞬殺する。そんな与太話のような、学園都市
の常識を覆す光景を直接見たことがあるからこそ、上条は霊夢を“強さ”という観点に
おいては誰よりも信頼していた。

しかし、今回の相手はこの学園都市において最強と目される超能力者であり、それも
序列第三位に位置する存在。

何度も追いかけられていた上条はその恐ろしさをよく知っており、電気や磁力を自在
に操る彼女と戦えば如何に霊夢といえど厳しい状況になるだろうと思った。

(つーか、そこまで人間離れはしていないと信じたい。電撃を平然と避けるのはやべー
としか言い様がないが)

それに霊夢が勝つにしても、彼女は一片の容赦も無く御坂を痛め付けるだろう。それ
こそ以前に言ったように“ポコポコ”にしてしまふに違いない。

御坂はあんな態度だが、根は悪い奴ではないことは分かっている。故に、自分となら
ともかく他人、それも同級生と争うのは許容できなかった。

もしも戦闘に発展した場合、上条は真つ先に割って入り、全力で止めようとするだろう。

「……………」

「……………」

ふと御坂へ視線を戻すと彼女はこちらを睨んでいた。そこで気付く。霊夢が居なくなった今、再び己に矛先が向くのは至極当然の帰結であったことに。

「あー、その、御坂さん？」

咄嗟に宥めようとする上条であったが、ゴロゴロと、腹に響くような音に動きを止める。

まさか、と空を見上げた。

「ちよっ!? 本気かよっ!？」

真つ黒な雲が渦巻いていた。時折この位置からでもはつきり見える程に青白い閃光を放ちながら。

——雷雲だ。

「ふ、不幸だあああああああああああああああああああああああ!!」

そうして巨大な落雷と共に再開した追いかけっこは朝方まで続いた。

因みに場所が鉄橋であった為に電流が街を伝い、周辺区域に大規模な停電が発生し、

エアコンも止まったため就寝していた霊夢は猛暑で地獄を見たという。

接近

夏休み。

勉強を怠り、補習を受けなければならぬ一部の馬鹿たち（主に某ツンツンヘア）を除けば殆どの学生が休みになる期間。当然霊夢の高校にもそれは存在し、今日がその初日である。

学生ならば誰しもが待ち侘びていた一大イベントの一つであり、霊夢もまた登校しなくもいい長期休暇の到来は非常に好ましいものであった。

何せこの時期は暑い。夏なのだから当たり前のことであるが、ならば無闇に外出せず、冷房の効いた部屋の中で涼みたいと思うのは至極当然のことだろう。

故に、今年も基本的に何もすることなく、ダラダラとした生活を送る予定だった。

しかし、今の彼女は臨時とはいえ風紀委員。夏休みであろうと、問答無用で駆り出されてしまう。

「ああ〜極楽極楽〜」

そんな訳で嫌々支部へ赴いた霊夢であったが、ソファアの上に寝そべりながら至福を

感じていた。

何せ昨日の停電により灼熱地獄を味わっていたのだ。冷房の効いた部屋は正しく天国であり、初めて霊夢は風紀委員の仕事に感謝する。

「あの……聞いてました？」

「ちゃんと聞いてるわよ。昏睡状態になったんでしょ？ グラビモス」

「グラビトンです。まあ、そこはどうでもいいのですが……」

部屋に固法や白井の姿は無く、代わりに少し前まで発熱でダウンしていた初春がノー
トPCを膝に載せながら座っていた。

彼女が言うには、あの虚空爆破事件グラビトンの犯人が原因不明の昏睡状態に陥ったらしい。

「詳しいことはまだ分かりません。それで確認する為に白井さんが病院に……」

「ふうん……」

幻想御手の入手経路が判明した以上、犯人の証言は必要無いが、このタイミングでの昏睡は何かしらの関連性を疑うには充分だった。

恐らく白井も同様の考え。彼女とはつい昨日幻想御手の使用への副作用について推察したばかりなのだから。

「レベルアップって奴のせい？」

「確証はありませんが、恐らくは……」

「もしそうなら、ばら蒔いてる奴を取っ捕まえる口実が出来るってことね」
「え？ あー、確かにそうですね……」

霊夢の言葉に初春は一瞬首を傾げるもすぐにその意図に気付き、同意する。

副作用にしろそうでないにしろ、人体への危険性が僅かでも判明すれば幻想御手を取り締まつたり所有者へ使用禁止を呼び掛けたり回収活動を行ったり出来るということ。

当然、そんな危険物を拡散させている者を逮捕・拘束する権利だつて生まれる。

「それなら、とりあえずこのサイトを閉鎖するよう運営側に連絡しておきますね。これ以上広げる訳にもいきませんから」

「ええ。そこら辺は任せるわ。正直 “いんたーねつと” っていうのはよく分かんないから」

妙に外れた独特なイントネーション。今時の、それも最先端を地で行く学園都市で暮らす高校生とは思えないような発言をする霊夢に対して初春は思わず笑い掛けてしまう。

まるでお婆ちゃんみたいですねという失礼な感想が口から漏れ出ようとしたが、そんなことを言ってしまうえば殺されかねないので必死で呑み込んだ。

「因みに現時点で入手してる奴ってのはどのくらい居るの？」

「えつと……このサイトでのダウンロード数は……うわあ、五千件以上もありますよ」

「……そんなに？」

未だに噂レベルの代物にしては随分と多いが、当然と言えば当然だろう。

全体の六割が無能力者。能力者にしても多くが低レベルで大能力者以上はほんの一握り。その大能力者も成長が行き詰まったり、頂点たる超能力者への羨望から手を出し
かねない。

言つてしまえば、ほぼ全ての学生に対して需要があるのだ。供給に関しても音楽ファイルということで実質無限で尚且つ無料で配られているのだから利用者は後を絶たぬのが現状だった。

「少なくとも五千人……他の入手経路や使い回しも考慮すると、その倍は居そうね。不良共の中にはこれを売買してる奴も居るって話だし」

「うっ……そうですなえ」

つらつらと述べられる事実にも初春があからさまに嫌そうな声を出す。

「そして、そいつら全員が昏睡状態になったら……なんか結構話が大きくなってきたわね」

「結構どころか大事件ですよそれは……」

発生し得る最悪の事態。想像するだけで背筋が凍る話だ。しかもこうも出回つているともはや流通を防ぐのは難しく、迅速に対処すべきであるが、現状後手に回るばかりだ。

「それにしても、聴くだけでレベルアップなんて……一体どういう仕組みなんでしょうか？」

「さあ？　能力開発とやらみたいにならぬ脳味噌を弄くってんじやないの？　ほら、音波とかで」

「うーん……そんなことが可能なら、皆苦労してないと思うんですけどねえ……」

「そうなの？」

「そりやそうですよ。私だって万年低能力者レベル1ですし」

ふとした疑問。幻想御手の原理が気になる初春に対して別に原理なんてどうでも良かった霊夢は適当で投げやりな推察を述べるがあっさり否定される。

「原石」であり、能力開発を一切受けていない彼女は詳しく知らないが、学園都市において超能力を発現させるプロセスである「開発」とは時間割カリキュラムとも表現され、具体的には薬物投与、催眠術による暗示、脳や首筋への直接的な電気刺激、五感の遮断など様々な手段で脳を開発することで脳の構造を変化させ、「自分パーソナルだけの現実」という独自の認識・感覚を獲得させているのだ。

そんな大掛かりなことを何度も行つて、それでも能力を得られなかつた者がただ音を聴くだけで得られるなんて学園都市の常識からすれば俄には信じ難い事実だった。

「……ま、大元が特定出来たら教えてちょうだい。私がつづ潰しに行くわ」

未だに手掛かりは無し。手っ取り早く実力行使を何よりも好む霊夢からしてみれば狙う標的さえいない状況は実に面倒極まりなかった。

かといって学園都市には山のように存在する研究施設を片っ端から調べ回るのは現実的ではない。一先ずは事態が進展するか、黒幕が動き出すのを待つしかないだろう。プルルルッ

その時、携帯の着信音が鳴り響く。誰のかと視線を向ければ、机の上に置いていた自分のものであった。

面倒臭そうに画面を開けば、知らない電話番号だった。

「……もしもし」

『博麗霊夢！ 何をしているんですの！』

甲高い大声に思わず画面から耳を離す。聞き覚えのある声に、霊夢はあからさまに顔をしかめる。何でこいつが自分の番号を……と思うが、そういえば風紀委員に加入した際の書類に記入していたし、固法辺りから訊いたのだろう。

「ごめんあそばせ。間違い電話ですわよ」

『えっ!? いえ、そんなはずは……まさかあの嘘の番号をつ!? も、申し訳ございません!』

「よろしくてよ。……で、何か用? 黒子」

『くくくく!! ふざけないでくださいまし!』

からかつてみれば激怒して電話の相手……白井は叫ぶが、事前に察していた霊夢は耳から遠ざけているため聴こえていない。

『通信機に何度呼び掛けても応答しないから電話したというのに……一体何をやっていらつしやるんですのっ?!』

「あー、あれね。鬱陶しいから外してたわ」

『外してたって、この……! とにかく! 今すぐあなたがよくいらつしやるファミレスに来てください!』

「えー? 何でまたあ?」

『良いから早く! 仕事ですの!』

「はいはい。分かったわよ」

くれぐれも寄り道はしないように! という言葉と共に通話が切られる。

霊夢は気だるげに身体を起こし、溜め息を吐く。

「白井さんからですか?」

「ええ。ファミレスに来て。まったく、そう言うならあいつが転移して連れてつてくれれば良いのに」

そんなことを言えば、私はタクシーじゃありませんの! とキレるのが容易に想像出

来た。

「あははは……仲良くしてくださいと嬉しいのですが……」

再び猛暑に晒されることに對して億劫になりながらも部屋から出ていく霊夢を初春は苦笑いを浮かべながら見送った。

それからすぐ後、彼女の携帯にも着信が入る。

「佐天さん？」

確認すれば、それは親友からだった。

「もしもし。どうしました？」

『あつ初春？ ちょっと見せたいものがあるんだけど——』

支部を出てすぐ、霊夢は飛んだ。

燦々と太陽が照らす中、高所へ行けば余計暑いように思えるが、風を感じることによつて熱気を誤魔化せるので徒歩よりも断然涼しかった。

元より霊夢はこの心地好い風が好きだった。冬場は逆に寒いのではないかと思うが、そうなれば『遮断』すれば良いだけの話に過ぎない。

(……相も変わらぬ鬱陶しいわね)

しかし、この学園都市の空は嫌いだ。大気中を漂う、極小の機械群。恐らくは誰かが街を監視する為に散布したものだ。塵に等しいサイズで電子顕微鏡を用いなければ視認すらできないようなサイズにも関わらず霊夢はその存在を確かに認識していた。

蟲のように飛び交うそれらを霊夢が好ましく思うはずもなく、彼女は近付くそれらを悉く触れもせずに粉々に砕く。いくら破壊しようとも学園都市一帯に埋め尽くす程存在するためキリがないが、だからといって許容するつもりはない。

そうして五分と掛からず、目的地であるファミレスに到着する。

「あ、いらつしやいませ〜」

入店してきた巫女装束を纏う少女の姿に特に動じることもなく空いている席へ案内しようとする顔馴染みのウエートレスに今日は人と待ち合わせていると告げ、霊夢は辺

りを見回して白井の姿を探す。

見つけるのに、そう時間は掛からなかった。

「さて、先程の話の続きだが……何故、同程度の露出度にも関わらず水着は良くて下着は駄目なのか？」

「いや、そつちではなくて」

「……何やってんの？」

聴こえてきた妙な内容の会話に、霊夢は眉をひそめる。白井が居たテーブル席には彼女以外に御坂美琴と、見知らぬ長髪の女性が座っていた。

「あら、意外とお早かったですわね」

「げっ……」

二人が霊夢の存在に気付く。呼び出してから数分も掛からずに来たところに白井は驚き、御坂は昨日の事を思い出してあからさまに顔をしかめた。

そんな反応を霊夢はさして気にすることもなく、空いている席へと座る。

「！ ほう……君は……」

「……どちら様で？」

何やら意味深な反応をする女性。少なくとも霊夢の記憶の限りでは面識はないはずだ。

「『木山春生』先生ですの。今回の捜査にご協力いただきありがとうございます」
「木山だ。大脳生理学を専門としている。よろしく頼む」

霊夢の疑問に白井が答える。すると女性——木山も改めて自己紹介する。

「ふうん……博麗霊夢です。こちらこそ、よろしくお願ひします」

対する霊夢もまた名を名乗る。彼女が敬語を使ったことに白井は衝撃を受けるが、元より彼女は年上の他人に対しては意外にも礼儀正しい。

最低限の良識は持ち合わせているのだ。それ以外の非常識さがすべてを台無しにしてしまっているが……。

「さて、博麗れい……博麗さんも揃ったところで本題に入りましょうか」

「え？ まさか黒子が呼んだの？」

「ええ、お姉様。一応今回の事件については彼女が一番の功労者ですし、聞いておくべきと判断しましたの」

（お姉様あ？ へー、こいつら姉妹だったんだ。全然似てないわね）

意外な事実に興味無さげに鼻を鳴らしながら霊夢は木山へと視線を移す。

大脳生理学……つまりは脳の学者。ということは十中八九あの昏睡状態の件、延いては幻想御手についてだろう。

しかし、何故わざわざ自分を呼び出したのか。白井の意図が読めないが、問い質した

ところで話が面倒臭くなるので大人しく耳を貸すことにする。

「専門家として木山先生に聞きたいことがあるんです。——幻想御手というモノを、ご存知ですか？」

「幻想御手……それは、どういったシステムなんだ？ 形状は？ どうやって使う？」

木山が問うと、白井は鞆から取り出した物をテーブルの上に置く。

それは以前に霊夢がスキルアウトを介して手に入れた幻想御手の現物であった。

「これは……音楽ファイルか？」

「はい。恐らくこの自身の音声を聴くことで効果を得られるのかと」

「ふむ……君たちは、それが昏睡した学生達に関係しているのではないかと考えているのか？」

「その通りです。調査を進めていますが、こちらが独自にピックアップした『幻想御手を使用した』と思われる、書庫バンクとのデータの食い違いがあった容疑者たちの実に80%が昏睡状態……そして、これは尚も増大しています」

「それは……由々しき事態だな」

顎に手を当て、思考する木山。その姿を霊夢は頬杖を突いて見据える。

「それで、木山先生の見解が聞きたいのです。音楽を聴くだけで、能力の強度が向上するのかわか？」

「……現段階では、どうとも言えないな。確かに急激に、それも無理矢理レベルを上げるとなると脳には絶大な負担が掛かるはずだ。そうなれば意識不明に陥る可能性は充分にある」

木山は淡々と語る。

「要するに、脳味噌を強引に改造しているってこと？ 元凶の思うがままに」

「かもしれないな。しかし、五感全てに働きかける学習装置テストAMENTならともかく、音楽……つまり聴覚のみでそこまでの干渉は難しいように思える」

「へえ…… “難しい” ってことは、技能さえあれば可能ということでしょうか？」

「……そういうことになるな」

似合わせぬ敬語を使い、霊夢が確認するように問えば木山は否定せずにそう言う。

「成程ねえ……」

「それがどうかしたか？」

「いえ、別に。ただ気になっただけです」

そう言いながらもどこか納得した様子だった。この姿を白井は目を細め、見据える。

（クオリア……だったっけ？ あれを拡大解釈すればもしかすると……）

そういう知識に疎い霊夢は如何なる仕組みで幻想御手が作用しているのかはさっぱり分からない。しかし、それでも彼女はやはり聡明だった。

知っている知識のみを用い、ある仮説を立てる。もしも「同じ形」の脳と脳が連動するとすれば。荒唐無稽ではあるものの、この仮説によって幻想御手をばら蒔いた元凶に何のメリツトがあるのかという疑問はあっさり氷解する。

「どちらにせよ、そのファイルを解析してみないことには何も分からんな」

「それなら、是非ともこちらを調べてもらいませんか？ コピーは取っておりますので」「勿論だとも。むしろ、こちらから頼みたかったところだ。一人の脳生理学者として興味をそそられる」

白井が幻想御手を差し出すと木山は快くそれを受け取り、承諾する。

漸く事態が進展しそうであった。

「話は終わり？ じゃ、私は帰るね」

すると霊夢が席を立つ。

「なっ またあなたは勝手に……！」

「私が居てもしょうがないでしょ？ 知りたいことは知れたし、私は私で調べさせてもらうわ」

「……………！ つまり、そういうことなの？」

「さあ、どうかしらね」

呼び止めようとする白井にそう告げ、霊夢は店を出る。そもそも己が居なくとも問題

の無い話の内容だった。これ以上、時間を無駄に浪費する必要も無いだろう。

「ちよつと黒子……あいつを呼んだ意味あったの？」

「……だと、良いのですが」

「？」

寸前で追うのを止めた白井に、傍らで話を聞いていた御坂が尋ねれば彼女は神妙な面持ちになる。

霊夢を呼び出した理由は、彼女にも話を聞かせれば参考になる意見が出るかもしれないと思つたからだ。白井は過去の経験から霊夢の人並み外れた直感と慧眼に関しては一歩認めているつもりである。

“知りたいことは知れた”という発言。加えて、木山との会話の中で見せた意味ありげな態度……何かに気付いたのは明白だったが、どうも彼女はそのことを白井には教えたくないようだ。

或いはこの場では教えなくなつたのか。ちらり、と木山を一瞥する。

「うん？ どうかしたか？」

「……いえ、何でもありませんわ」

言われ無き疑惑だと理解しながらも、白井は頭の片隅にその“もしも”の可能性を置いておく。

この後、靈夢は帰ったことを後悔する。

入れ違うように御坂たちを見つけ、入店してきた友人。一連の話を聞いてからの彼女の不審な態度をもしも目撃していれば、容易に気付けたはずだ。

手遅れになる前に――。

――犯人の目星は付いた。

靈夢すら思い付く幻想御手の仕組みの予想。それを、その分野においての専門家が付かぬはずもなく、隠匿していたということは犯人かその関係者に他あるまい。

極端な結論だとは思ふ。灯台もと暗しという言葉がある通り本当に気が付かなかつただけなのかもしれないし、考えてはいたが、早々にその可能性を切り捨てたのかもしれない。

けれど、それでも霊夢は確信する。己の「勘」がああの木山春生という研究者が元凶であると感じているが故に。

(……ま、どうでもいいか)

目的が何であれ、いつか尻尾を出すだろう。わざわざ事前に対処してやるほど霊夢はこの事件に対して情熱を持ち合わせてはいない。むしろ自分に害が無いのであれば放逐して構わないとすら思っていた。

(そういえば……涙子に警告しておかないとね)

超能力に憧れる少女。彼女が望むのなら別に幻想御手に手を出しても構わないと考えていた霊夢であるが、それが昏睡状態に陥る危険性があるような代物となれば話は別だ。

もし仮にリスクを理解した上で、それでも能力を渴望するというのなら……。

「——どうしよう」

思わず口に出す。止めるべきだろう。人生を棒に振る可能性だってあるのだ。そのままですべて能力を得たところで一体何になるというのか。

然れど、きつと、霊夢は止めない。彼女が考え、悩み、それでも求めた結果ならば……。

否、そんな上等な考えではなかった。結局のところ、いつものようにただ無関心なだけに過ぎない。自分は彼女のことを、友達になりたいと言ったあの少女のことすらも、

どうでもいいと思えてしまうような人間なのだと思が応にも自覚させられる。

「……らしくないわね」

そんな思考を振り払い、霊夢は佐天へ連絡しようと携帯を取り出し——その足を止めた。

「うん？」

いつからだろうか。まだ明るい時間帯にも関わらず、気が付けば周囲には人っ子一人見当たらなくなっていた。まるで消え去ったかのように。

「これは……まさか、人払い？」

試しに飛んで上空から見渡してみるのが、それでも人の姿は一切確認できず、気配すらも感じられない。普通ならば有り得ぬ光景だった。

霊夢はその現象に心当たりがあった。しかし、それはこの科学の街では決して見ることはないと思っていた存在であったがため目を見開く。

その存在とは——。

「——『魔術師』」

魔術師

光は単なる明かり。

闇は単なる暗がり。

文明の、科学の発展と共に、神秘は明かされ、信仰は廃れ、奇跡は失われ、忘れ去られた。

ありとあらゆる事象が科学的根拠と紐付けられ、それまで怪奇だったものは解明可能となり、科学のみを人々は盲目的に信奉する。

夢は単なる脳の記憶処理で、感情もまた脳のメカニズムによつて発生するものに過ぎず、恋ですら電気信号と分泌物の次第であると言われる世の中、例外は悉く否定される。理解し切れぬモノは迷信や空想のたと、視えぬモノは初めから存在しないのだと、これまで当たり前のように存在していたモノすらも忘却の彼方へと追いやる。

そうして、“幻想”と成り果てるのだ。

だからこそ、博麗霊夢は憂い、悲観する。ならば一体樂園は何処にあらうか。しかし、そのような夢無き世界にも非科学オカルトが存在するのも彼女は知っていた。

それを知ったのは本当に偶然だった。あの閉鎖的な片田舎では、何も知らぬまま一生を終えていた可能性の方が高いのだから。

—— // 魔術 // 。

大半がそう一括りにされた異能。古今東西ありとあらゆる宗教や神話・伝説に由来する超常的な力を扱う者のことを、この世界では「魔術師」と呼ぶ。

そんな者たちが歴史の影に潜み、この科学ばかりが神がかかる時代においても世界各地で暗躍していた。

霊夢は彼らのことが嫌いだった。この学園都市と同じくらいには。

彼女という存在が科学と魔術のどちら側に近いのかと言えば当然、魔術の方だろう。この世界においては巫術も陰陽術もすべて魔術という一つの学問に含められているのだから。

そのため霊夢にとって彼らは漸く見つけた手掛かりであり、彼女がああ狭い集落から飛び出すキツカケであった。

けれど、その胸に抱いた期待と希望は呆気無く裏切られる。

幻想は幻想。魔術は魔法に非ず。そんなもの所詮は夢ゆめまぼろしに過ぎず、在りはしないのだと。

科学とは対極の位置に立つ彼らにとっても、それは何一つとして変わらなかったの

だ。

故に、とうの昔に興味は失せていた。

それに加え、学園都市へやって来た時点で魔術師とはもう二度と会うことはないだろうと思っていたため、すっかり記憶から抜け落ちてしまっていた。

今この時までには。

「……これ、ね」

ピキン、と見えない何かが触れた途端に硝子のように砕け散った。すると静まり返っていた街からがやがやと人の声が聴こえ始める。

人払いの魔術。

何となく、そこへは行きたくない。そう思わせることで、その場所に部外者を寄せ付けないよう誘導する術式。

理屈としては風水の理論を応用しており、地脈や龍脈のエネルギーの流れを変えることで意図的に「居心地の悪い流れ」を形成することで人の寄り付かない空間を形成する……おおよその原理はこうであるが、様々な宗派・学派によってその仕組みや方法は違う。

人目に触れることを避けたがる秘密主義な魔術師にとっては必須とも言えるポピュラーな術式であり、別に特段珍しいものでもない。

しかし、ここは科学の総本山。大抵の魔術師はこの場所にはまず寄り付かない。そう聞いていたはずなのだが、一体どういうことなのだろうか。

(何を企んでるのやら……ま、どうせろくでもないことなんでしょうね)

確か、魔術結社……と言ったか。魔術師が所属している組織の通称。基本的に魔術師は個人主義者であるが、役割分担や情報収集、資金獲得等々の目的で同じ志を持つ者たちが集まって組織を形作る。

その形態や規模、目的や活動、宗派や使用術式などは千差万別。無償の人助けを行う善良な結社から殺人やテロも厭わぬ犯罪組織的な結社まで大小問わず世界各地に無数に存在する。

それが無秩序に増殖しては無秩序に争い無秩序に数を減らしていく。こうして全体的なバランスを保ちつつ、日々人々の知らない水面下で、各々好き勝手に勢力を増減させているのが現状……らしい。そこまでの多様性があるのであれば、学園都市に関わろうとする連中が居ても不思議ではないだろう。

(正直関わりたくないんだけど……)

自然と溜め息が零れてしまう。霊夢にとっては至極どうでもいい事象。影に潜む日陰者共が自分の知らない場所でいくらドンパチしようがしまいが、勝手にやっててくれと言う他ない。

しばらくして、再び人払いの術式が張られる。そのタイミングで霊夢は薄暗い路地裏へと降り立つ。

「見過ごす訳にも、いかないのよねえ……」

「——貴女ですか。人払いを解いたのは」

凜とした声が響く。視線を向ければ路地の先に一人の女が立っていた。

一本に束ねた、腰まである長い黒髪。白いTシャツを身に纏い、それを片方で縛って腹部を大きく露出させた格好。加えて、穿いているジーンズは片足を根元から切つて白い太腿が見えていた。

そして、一際目立つのが手に握られている身の丈にもなる長大な刀。あまりにも異質な風貌だが、霊夢はただ涼しそうだと思うだけだった。

「ステイルの人払いを突破して侵入するどころか、術式そのものを破壊してしまうとは……」
「神道」の一派だと見受けませんが、何者ですか？」

神道……：惟神道ともいう八百万の神々を信仰する自然崇拜、祖霊崇拜に基づく日本の宗教。霊夢の格好を見ればそう思うのも無理はない。

実際、巫女なのだから間違いいはないが、目の前の女が言う神道とは魔術世界においての神道という意味合いなのだろう。

「名を尋ねるのなら、そっちから名乗るのが礼儀ってモンでしょう？」

「……失礼しました。私は神裂火織、「必要悪の教会」の魔術師です」

——神裂火織。

そう馬鹿正直に自らの名を告げる女に、霊夢は僅かに顔をしかめた。

佇まいからして、相当な実力者だ。一目見ただけで霊夢は理解した。少なくともこれまで出会った魔術師たちの中でも別格と言って差し支えないだろう。

先程口にした「ステイル」というのは流派か術式の名称か、それとも人名だろうか。後者だった場合は他に仲間が居るということになるが……そこまで考え、目の前の女と同等がそれ以上の魔術師を相手取るかもしれない可能性に霊夢は内心舌打ちする。

ともかく名乗られてしまったからには、こちらも名乗り返さねばなるまい。

「博麗霊夢。見ての通り、素敵な巫女よ」

「れいむ、霊夢ですか……それは随分と、らしい名前ですね」

「はあ？」

自らの名を告げた途端、神裂と名乗ったその女は小さく笑う。いきなり自身の名を批評された霊夢は眉をひそめる。

霊夢とは、予知夢のようなものであり、神仏のお告げが現れる不思議な夢のことを意味する。そう考えれば、確かに巫女の名前としては相応しいものなのかもしれないが……。

「いえ、何でもありませんよ。ただ少しばかり思い出していただけです」

「あ、そう……で、えつと、ネ、ネセ……ネサセ？」

「必要悪の教会です。……知らなかったのですか？ てつきり我々のことは把握済みで接触しに来たのかと」

「生憎とね、有名なの？」

意外そうな表情をする神裂。どうやら魔術世界では結構有名らしい。名前に恐らくは西洋の組織だろうが、残念ながら霊夢の記憶の限りでは聞き覚えはなかった。

元より魔術結社の名称なんて一つも覚える気は無く、そうでないのならば尚更であろう。

「では、『イギリス清教』と言えば、分かりますか？」

「あー、それなら聞いたことがあるわ。キリシタンの連中でしょ。カトリックだかプロテスタントだか言うのよね」

——『十字教』。

唯一神、そして神の子である救世主を教祖とする世界で最も信仰されている最大の宗教。大規模であるが故に、多数の派閥で分かれており、その中でも特に代表的な勢力が『ローマ正教』、『ロシア成教』、そして『イギリス清教』の三つだ。

その名は霊夢も知っている。尤も、歴史の教科書程度の知識に過ぎず、そういう連中

の中にも魔術師が多く居るということくらいだった。

理由は勿論、魔術師のことなんて全く興味が無いからだ。

「……ええまあ、そうですね」

期待していた返答とは違ったことに、神裂は微妙な反応をする。霊夢のことを「神道の魔術師」だと勘違いしている彼女はそのモグリとしか言い様がない、あまりにも浅過ぎる知識に困惑してしまう。

目の前の少女が只者ではないと確信しているのならば尚更だった。

「……で、そのイギリスのネセサリウスとやらの魔術師がこんなところで何やってんの？」

話を戻し、霊夢は問う。

イギリス清教とはその名の通り、英国^{イギリス}全体で信仰されている宗派だ。ならばそこに属する神裂は顔立ちこそ日系であるが、英国の魔術師だということになる。

わざわざそんな遠方から、それも学園都市へとやって来た。つまり、それ相応の理由があるということだ。

「……残念ですが、貴女の疑問を満たしてあげる理由が、こちらにはありません」

「でしようね」

やはり答えぬ神裂に霊夢は鼻を鳴らす。ぶつちやけ魔術師の目的など興味は無いが、

どうも今までの魔術師とは雰囲気が違うように感じられた。

理由は分からない。そのことを怪訝に思っていると、神裂は予想に反した提案をす
る。

「しかし、そちらと争うつもりはありません。貴女に敵対の意思が無いのなら……どう
です？ お互い何も見なかったことにして、退くというのは？」

口封じに記憶を消そうとも、命を奪おうともせず、ただ見逃してやると。

魔術師にしては随分とお優しいことだ。或いは、それだけ彼女は荒事を控えなければ
ならない事情があるのだろうか、霊夢はより一層訝しむ。

「……あなたたちが私に迷惑を掛けない保証は？」

しかし、霊夢の側には見逃してやるメリツトは無い。彼女を看過したところで学園都
市で暗躍する以上、そこで起こした騒動に巻き込まれる可能性は大いにある。

そもそもこの人払いが張られている区域は、霊夢の自宅近隣なのだから。

「なら、約束しましょう。決して貴女たちに危害を加えることはない。私たちの目的
はこの街で騒ぎを起こすことではなく、ある人物”の保護なのですから」

「保護、ねえ……」

「はい。それが成せれば、即刻この街から退散するつもりです。どうか、お願いできませ
んか？」

そんな懸念を察したのか、神裂はそう語る。保護……それが必要だということはその人物はイギリス清教が手放せない程に有益な能力を持った人物か、或いは大多数の勢力から狙われる人物なのか、またはその両方かもしれない。

となれば充分に面倒な厄ネタだ。もしも事実だとすれば、そいつが学園都市に留まって変なトラブルが起きる前に神裂に連れ去ってもらった方が良いだろうが……。

「にとしては——『血の臭い』がするけど？　しかもついさつき殺つてきましたって感じの」

「ッ……………!!」

その言葉に目を見開く。

霊夢の感覚は第六感だけでなく、視覚や聴覚、そして嗅覚と五感に至るまで常人よりもずっと研ぎ澄まされている。

故に、気付くのは容易だった。既に振るい落とされているもののその鞘に納められた刃から発せられる『血の臭い』に。

本当に殺人を犯したのかは分からない。傷を付けただけかもしれない。どちらにしろ、つい先程まで流血沙汰があったことは確定的であり、明らかに動揺している神裂のその姿からしても、彼女が黒であることは明白であろう。

「常識的に考えてさ。そんな奴が信用できると思う？　事情があるってんなら、説明し

てくれないとね」

もしも洗いがらい全てを話し、本当にこちらに害の無い目的だと言うのならは一考してやるくらいの余地はあった。

霊夢の目からは神裂は彼女の知る魔術師とは違い、そこまでの悪性ではないように見えたからだ。場慣れしているはずなのに指摘されただけでこうも動揺してしまうくらいには、彼女にとつても不本意な出来事だったのだろう。

「……………それは……………」

「あつそ。じゃあ——無理矢理吐かせるまでよ」

神裂は口ごもる。元より言う気が無いのは分かり切っていた霊夢は間髪無くそう言い放つと、彼女との距離を一気に詰めた。

「ッ!!」

疾風のような速さ。流れるように霊夢は鳩尾を狙って鋭い足刀を繰り出す。

先手必勝。そこに一切の躊躇も無かった。

——が、それは空を切る。

「良い一撃ですが、遅い」

霊夢を遙かに上回るスピードで、あつさりと回避した神裂はそのまま彼女の背後へと回り込んで鞘にしまったままの刀を振り下ろす。

音を置き去りにする程の速度。殺意の無い、手加減された一撃であったが、それでも少女の意識を刈り取るくらいは訳ないであろう。

「そっちが、ね」

しかし、刀は霊夢の真横を通り抜ける。

「なっ——」

振り向き様に避けられた。神裂は瞠目しながらも即座に次の動作をしようとするが、それよりも速く霊夢の掌底が露出した腹部へ叩き込まれる。

「かはっ……!?!」

ドスツ!! と鈍い音が響く。

魔力が込められた、強烈な一撃が内臓を揺らす。まともに受けた神裂は衝撃で吹っ飛んだ。

「ツ……」

しかし、壁に叩き付けられる寸前で何とか踏み止まり、態勢を立て直した。

「へえ……頑丈な身体ね」

平然と立つ女に、霊夢は顔をしかめる。並大抵の魔術師ならば今ので気絶していたはずだ。

加えて、あの速さ。身体強化の魔術にしても度が過ぎる。人類を遥かに超越したその

動きは、かつて戦った第七位ナンバーセブンを思い起こされた。

「……少し、甘く見ていました」

対して神裂もまた、口元を拭いながら相手の実力を上方修正する。

「もう一度言います。どうか、ここは退いてくれませんか？ 私と貴女が争ったところで、何の意味も無いはず。出来得ることならば無益な争いはしたくありません」

そう言いながらも刀を持ち上げ、構える。それだけで彼女の雰囲気はがらりと変わり、空気が張り詰めていく。

然れど、霊夢は眉一つ動かさず、ただ涼しい顔を浮かべ、これと対峙する。

「残念。意味ならあるのよ。今ここで潰しておけば、私は何の憂いも無く安心して眠れるでしょう？」

再度持ち掛けてきたその言葉をそう切り捨て、霊夢はどこからともなく何かを取り出す。

(あれは……大幣おおぬぎ……?)

それは大幣という巫女が主に祈祷に用いる道具で、一般的に“お祓い棒”と呼ばれる物だった。

野球のバットより少し短い程度の長さで外観も神裂の記憶している物と然して変わらない。おおよそ武器と言えるようなものには見えなかったが、何らかの“霊装”かも

しれないと油断せずに見据える。

「……では、これ以上の語りは不要ですね」

「ええ。さっさと始めましょう」

緊迫した空気が漂う。

互いの間合いを維持しつつ、睨み合う両者。どちらかが僅かにでも動けば鬨の火蓋が切られる。

「……………」

「……………」

沈黙が支配し、空間が静寂に包まれる。けれど、それもほんの一瞬の出来事。

轟!! と空気が引き裂かれるような爆音と共に、暴風が巻き起こり、周囲一帯が揺れた。

——霊夢と神裂が、衝突する。

聖人

異常なまでに人通りの少ない路地で、轟音が鳴り響く。

(ツッ・当たり前のように「七閃」を避けますか……!)

神裂火織は瞠目する。

自身の愛刀に仕込まれた七本の鋼鉄製のワイヤーによる遠距離の斬撃……神速の居合術に見せかけた、相手の意表を突く攻撃であるが、目の前の少女はこれを避け切つてみせた。

長きに渡つて隠すことのみ一心を注がれた業を、初見で。まるで視えているかのよう。

否、実際に彼女は高速で揺らめく鋼糸を視認しているのだろう。

「博麗霊夢」——そう名乗った、神道の巫女。対峙した当初から只者ではないとは思っていたが、よもやここまでとは。

神裂は「聖人」と呼ばれる存在だった。世界に二十人といないとされる、生まれた時から「神の子」に似た身体的特徴・魔術的記号を持つ人間。

その能力は一般的な魔術師が太刀打ちできるような次元には無く、銃弾を見てから避け、数十トンもの重量を腕力のみで振り回し、呼吸さえ出来れば大気圏外でも活動が可能……と、同じ人類に区分して良いのかすら怪しい。

あまりにも規格外。——では、それと渡り合う彼女は、何者なのだろうか。

(パワーもスピードも明らかにこちらが上。ですが、それを補って余りある反応速度……的確にこちらの動きを先読みしてくる)

元より神裂は普通の「聖人」よりも並外れた身体能力を誇り、一秒間に千回もの行動が可能な程であったが、霊夢は肉体面でのスペックは彼女に劣りながらもその反応速度と反射神経は遥かに凌駕していた。

内心そんな事実には驚きながらも神裂は地面を蹴って走る。それだけで舗装されたアスファルトが砕け、音を置き去りにし、衝撃波が発生した。

音速に達する速度。そんな常人ならば反応することすら敵わない超スピードで動き回る神裂の姿を、霊夢はさも当然かのように目で追う。

「七閃——」

抜刀の動作はしない。鋼糸という絡繰が見抜かれた以上、そのフェイクは不要なのでから。

七本の鋼糸が暴風の如くうねり、外灯や街路樹を切り裂きながら霊夢を取り囲んだ。

掠れば致命傷。初めは殺さず捕縛するつもりであったが、そのような甘えが通じぬ相手であると理解した瞬間から、その一撃には殺意が籠められていた。

「それしか能がないの？」

「ッ——」

しかし、霊夢は恐れることなく前進し、糸と糸の間を通り抜けていく。

やはり見切られている——。自身の十八番を軽々と破るその姿に神裂は小さく舌打ちし、思わず悪態を吐いてしまう。

「魔術を行使する暇など、与えてはくれぬでしょう……い！」

白兵戦を得意としている神裂だが、聖人が故に魔術の腕前もそこらの魔術師などとは比べ物にならない。その気になれば大魔術クラスのものだつて連発することが可能だ。

だが、彼女はそれを行使しようとしめない。少しでも隙を見せれば霊夢がここぞとばかりに攻撃を仕掛けてくると理解しているからである。

「つまり——今あなたの手札はそれだけつてことね」

次の瞬間、霊夢の姿が視界から外れる。

「ッ!？」

一体どこへ？ という疑問よりも先に背後から襲つてきた殺気に振り返つた。

「なっ——」

ヒュン！ といつの間にかそこに居た霊夢はこちらの頭目掛けて大幣を振り下ろす。咄嗟に鞘で受け止めれば決して弱くない衝撃が襲う。

（馬鹿な、あの一瞬でどうやって背後に——）

困惑の色を隠せない神裂。しかし、霊夢はそんな彼女を待とうとはせず、姿勢を低くし、一気に懐へ入り込むようにして鞘による防御を突破する。

「くっ」

しかし、正面から来るのであれば対応するのは神裂にとつては容易いことだった。すかさず刀を振るい、霊夢を叩つ斬らんとする。

ガキーン!!

大幣と刀がぶつかり合えば、火花が飛び散る。

木製とは思えぬ硬さと鋭利さ。まともに受ければ普通の人間ならば真つ二つに割られるだろう。

鏢迫り合う両者。だが、神裂が力を強めればその均衡は一瞬にして崩れ去る。

「チイツ——」

霊夢は舌打ちし、距離を取ろうとするが、刀を振り抜かれると、数m後方へと吹っ飛ばされてしまう。

神裂はそのまま追撃を仕掛けようと高速で近付き、再度斬り掛かった。

が、これを霊夢はぐるりと空中で体勢を変え、避けて後方へと退く。

物理的に有り得ぬ挙動。一重に彼女が空を飛んでいるが故に可能なことであつた。

これに神裂は齒噛みする。

(あの空中浮遊……「撃墜術式」が効かないのは何故なのでしょうか?)

撃墜術式。その名の通り、魔術的な力で飛行しているものを撃墜する術式である。

十二使徒の一人である聖ペテロが、悪魔の力を借りて空を飛ぶ魔術師、シモンⅡマグスを、「主」に祈るだけで撃墜したという伝承に基づいている。

シンプルで強力、かつ有名なエピソードを基にしているため魔術の世界においては極めて広く普及している。

故に、十字教の教義で説明できる範囲の異端の飛行術式は、飛ぶのも落とすのも簡単というジレンマに陥っており、現代の魔術師は魔術で空を飛ばない。箒で飛行する魔女たちでも、低空を高速飛行することで「地上を走行している」と誤魔化するのが常識であつた。

霊夢が戦闘の最中に「宙に浮いた」瞬間、神裂は即座にこの魔術を発動したが、霊夢は然したる変化もなく飛び続けている。

何らかの抜け穴を突いたのか。それとも彼女も「第十位の聖人」と同じような特異な存在なのだろうか。

(まさか魔術ではない？　だとすれば……いえ、それこそ有り得ない話です)

一瞬、神裂はここが学園都市であることもあつてか「超能力」の可能性が脳裏に過るが、即座に否定する。

何故なら「才能の無い者」が扱う為に作り出された魔術は能力者が使用するように出来ておらず、現に自身の仲間は天才的な魔術師だったにも拘わらず能力開発を受けたことで簡単な魔術を使用するだけで死にかけるような体質に成り果ていたからだ。

(どちらにせよ……やりづらいことこの上ありません。おまけに素人ではなく、動きも洗練されている)

有利なのは間違いないが神裂の方だ。彼女が一撃でも加えればそれだけで霊夢にとっては致命的なダメージになるのだから。

けれど、そんな状況下で未だに掠り傷さえ負わせていないのもまた事実。宙に浮き、足場に囚われず、あまりにも不規則で三次元的な動きに惑わされ、苦戦を強いられていた。

「——妖怪みたいな馬鹿力ね」

対する霊夢は何食わぬ顔でそう呟く。

「……私からすれば、貴女の方が妖怪染みていると思えますが」

これに神裂はどの口がと思わず言い返すと、霊夢は心外とばかりに顔をしかめた。

「失礼ね。私は人間よ？」

「だからこそ、理解し難いのです。ただの人間が『聖人』と渡り合えるはずがありません」

あくまで常人の範囲内の身体能力。それでも実は同じ聖人でしたと言われた方がまだ納得出来る。魔力を纏う程度で聖人との差が埋まるなんてことは考えられない。況してや神裂は自らのスペックに驕らず、肉体強化の魔術で更に補強しているのだから。「セイジン、ねえ……どちらかと言うと『超人』の方に思えるけど。実は仏門だったりしない？」

そんな疑問に対して霊夢は答える気は更々無いようである。訳の分からないことを言われ、神裂は怪訝な表情を浮かべつつ、刀を構えた。

一方、霊夢は動かない。涼しげな表情を浮かべ、神裂の動作を待つ。

(一気に決める——！)

手加減は無用。聖人のスペックをフルに活用し、再び音速を越えた速度で駆ける。

だが、次の瞬間。霊夢が腕を振るう動作をしたかと思えば、何かが飛来してくるのを視認した。

(これは——『針』ですか……！)

数本の短剣程の長さの針。どうやら霊夢が投擲したものであるようだ。

しかし、銃弾すら避ける神裂にとってその速度はあまりにも遅い。難なく避け、刀で弾き落とす。

「!!」

同時に、霊夢が眼前に迫っていた。

まさかこのまま迎え撃つつもりか？ 無謀だと思いながらも接近した霊夢に刀を振るえば彼女はこれ避け、肩口を掴んだ。

「なっ……!!?」

そして、神裂を支点に身体をひねり、跳び上がることで背後へと回り込んだ。

人間離れたした動き。予想外の行動に驚く神裂。対して霊夢は空中を飛んだままいつの間にか指と指の間に挟み込んでいた針を投擲する。

(飛び道具。今の今まで温存していたのですか)

あんな数をどこから取り出したのか、という疑問は一先ず放棄し、先程同様に弾く。素早く、正確無比な投擲。一発ずつならば神裂にとって避けるのは容易であったが、霊夢は上空を巡回するようにして投擲を繰り返し、瞬く間に全方位を無数の針が取り囲んだ。

宛ら、針の“弾幕”だ。

「——七閃!」

鋼糸を自身を守るように展開し、全ての針を神裂は弾き落とす。同時に、糸も何本か千切れた。

ジャラジャラと地面に転がる針。油断することなく神裂は刀を構え、霊夢の姿を探す。この攻撃が彼女にとって本命ではなく、隙を作る為であることは分かり切っていたのだから。

「！ 速い——」

そして、予想通り霊夢はこちらに急接近していた。今までトップスピードを出していなかったのか思わぬ速さに反応が遅れるもギリギリでその存在に気付いた神裂は直ぐ様鋼糸を操り、彼女を切り刻まんとする。

「——させないわよ」

が、それよりも速く霊夢が刀を踏みつけた。

「はあっ——!?!」

思わず声が出てしまう。刀を動かさなければ鋼糸は操れない。予想だにしていなかった七閃の破り方に目を見開く。

どうにか踏みつける足を振り払おうとするが、その動作こそが致命的な隙だった。

霊夢が大幣を振り下ろす。

「ッ………甘い！」

だが、彼女とて戦いのプロ。霊夢がその隙を突いてくることは読んでおり、身体を反らして回避してみせる。

そのまま刀を放し、素手でカウンターを仕掛けようとし――。

「(っ)っ……あ……ッ!？」

何かが脇腹にめり込み、激痛が走る。

完全に認識外の攻撃。突き刺さるようなその一撃は神裂の肺から一気に酸素を奪い、動きを低迷させた。

「神技――」

そして、それだけで終わらせる霊夢ではない。すかさず張り付くように神裂へ近付き、構えを取る。

「しまっ……」

即座に刀を手取るが、時既に遅し。

「――天覇風神脚――」

宙返りしつつ、蹴り上げた。俗にサマーソルトキックと呼ばれる技が神裂の顎にクリーンヒットし、脳を揺さぶる。

ただの蹴りではなく、聖人にすらダメージを与えられる程の濃い魔力が込められた一撃だった。

「が、は——」

それが三度——間髪無く、宛ら高速回転するかのように連続で放たれ、神裂の身体がその度に天高くへと打ち上げられていく。

「ハアッ！」

駄目押しとばかりに最後に鋭い足刀が胸に炸裂し、神裂は更に宙を舞い、やがて重力に従って真つ逆さまに落下した。

「ッ——グウ……ッ!!」

ドサリと地面に転げ回り、倒れ伏す神裂。ピクピクと痙攣しているその姿を、霊夢は油断無く見据える。

そして、しばらくすると寸前で握り締めた刀を杖代わりにして立ち上がった。

「ハアッ……ハアッ……」

「まだ立つの？ さっきの一応決め技みたいな奴だったんだけれど」

その頑丈さに霊夢は呆れた様子だ。対する神裂は朦朧となった意識を回復すべく必死に息を吸い、脳に酸素を送り込みながらある部分へ視線を送る。

彼女の手には、槍か棍と見間違う程の長さになった大幣があり、それを見た瞬間に神裂は悟る。

如意棒のように伸び縮みが可能な仕掛ギミックけが施された霊装。あれが、自身の脇腹に一撃

を加えたのだと。

「なる、ほど……私を油断させる為に、長さを変えられることを隠していたのですね……」

「ええ。こうも見事に引つ掛かってくれるなんてね」

霊夢は得意気に笑う。これに神裂は何も言い返せず、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

大幣への警戒が次第に疎かになり、そして完全に度外視されてしまっていたあのタイミングを狙ったのは見事と言う他なく、目の前の少女が自分よりも場数を踏んでいることを物語っていた。

「……で？ 結構効いてるみたいだけど、まだやんの？」

「ッ——」

鋭い眼で見据え、霊夢が問う。確かに神裂は意識こそ保っているものの、ダメージは大きく軽い脳震盪に陥っている。

正直立っているのがやつとであったが、それでも戦意を喪失する理由にはならない。脳裏に過るのは、先程誤って傷付けてしまった、守るべき少女の顔だ。

「あつそ。でも動かない方が身の為よ」

「!？」

その意思を読み取った霊夢がそう告げると、紫色の光が突如として現れ、ぐるぐると円を描きながら神裂を取り囲む。

よく見るとそれは陰陽師等が用いるような「御札」であった。

「いつの間……！」

完全に囲まれている。今の神裂にこれらを避ける術は持ち合わせていなかった。

完敗と言えよう。ほぼ同年代の少女を相手に、聖人の肉体という圧倒的なアドバンテージがありながら、傷一つ付けることすら出来ずに追い詰められている。

甘く見ていた、などというのは言い訳にはならない。純粹に実力も経験も、目の前の少女が上手だった。

「——Salverre000」

故に、覚悟を決める。

「あん？」

ぼそりと呟かれた言葉。『救われぬ者に救いの手を』——神裂が自身の胸に刻む魔法名。それを知らない霊夢は突然呟かれた意味不明の文字列に眉をひそめる。

「生憎と……まだ、こんなところで、終わる訳にはいきません」

「——いいえ、終わりよ」

パチン、と指を鳴らす。それと同時に御札が一斉に迫り、未だに抵抗しようとする神

裂にトドメを刺さんとする。

幸いだったのは霊夢が勝敗は決したと思っていることだった。無論、油断など微塵もしていなかったが、心のどこかでほんの僅かに、気を抜いてしまっていたのだろう。

そんな0コンマにも満たない、しかしあまりにも致命的な隙を、神裂は突く。

「私には、やるべきことがあります！」

今から放つのは、奥義。

独特の呼吸法で魔力を練り上げることにより、自身を人間の限界を超えた体の組織に組み変え、そこから繰り出される必殺の抜刀術。

ただの人間に放つ代物ではないが、この状況を打破するにはこれしかないだろう。

「唯閃ゆいせん」

霊夢が目を見開く。即座に回避動作に移るが、間に合わない。

御札は消失し、約20mもの距離を詰める。

（獲った……!）

一閃が、思い描いた通りの道筋を往き、霊夢に触れる。そのまま胴体が上下に泣き別れになることを、神裂は確信した。

しかし――。

次の瞬間。

眩い光が周囲を包み込んだ。

——死ぬ。

霊夢は理解する。聡明が故に、“ああ、これは無理だな”と悟ってしまう。

十字教、仏教、神道……あらゆる術式が混ぜ込まれ、互いの弱点を適切に補い、破壊力を増す。そこに遊びや余裕など存在せず、ただただ“殺すことのみ”に重点を置いた業。

避けることは不可能。結界を張ったところで無意味。思い付く如何なる手段を用いようと、そう思考が完結するよりも速く、切り裂かれる——。

（死ぬ？ 私か？）

出来事はいつも突然起きる。理由は後になって気付く。

見通しが甘かった。相手が隠し玉を持っていないなどと言いつつ切れないというのに。

平和ボケというのは恐ろしい。あの時、御坂美琴の電撃を避け切れず、掠ってしまった時点で、感覚が鈍っていることには気付いていた。それを看過してしまったのは心のどこかで驕りがあつたから。

認めたくはないが、この街に毒されてしまつていたのだろう。自分でも気が付かぬ内に。

(……それもいいかも)

そう思つてしまう。恐怖も怒りも、哀しみすら湧かない。幻想無き世界に己が居場所は存在せず、斯様な世界で生きていても果たして何の意味があろうか。

意義も希望も無く、ただ惰性のままに生きていた霊夢は、眼前の死を容易く受け入れ、泥のように眠ることに対して何の忌避感も無かつた。

「博麗ちゃんはこんなところで燻つてる人じゃありません!」

「オマエは欲しくねエのか? 絶対的な力つてヤツ」

「それじゃあ……友達になつてください!」

「お前がどう思つてるかは知らないが……少なくとも俺はお前のことをその、友達だと思つてるからな」

短い年月ではあったが、様々な人間と出会った。己を必要としてくれる者も居たし、決して悪くない日々だったと言えよう。

しかし、所詮はそれだけ。ただ仕方あるまいと、諦観しながら霊夢は目を閉じ――。

「――いいえ。あなたの……博麗霊夢の死に場所はそこではないでしょう？」

気が付けば、勝手に体が動いていた。

禁書目録

神裂は言葉を失う。鮮烈な極彩色の輝きが迸り、空間を幻想的に染め上げる。

「唯閃」が弾き返されたと認識した瞬間にはもう遅く、放出された色とりどりの光の玉が弧を描いて全身へと炸裂した。

「がっ……あ……ッ!?!」

身を焦がすような痛み。光自体に熱量は存在しないが、膨大で高密度な魔力の塊であるが故に、恐るべき破壊力を秘める。

その美しい光景とは裏腹に、ただただ純粹な暴力だった。

幸いだっただのは、それがロシア成教の者が扱う魔術のように靈的な存在に対する絶對的な特効、そして妖怪や悪魔といった人ならざる魔性を抹消させるのに特化した攻撃であつたこと。

故に、そういう要素を持たない、あくまでも人間の範疇に収まっている者にとっては、ただの魔力弾に過ぎない。

(まずい、このままでは——ッ)

しかし、それでも、聖人である神裂があまりの激痛に意識を失いかける程の威力。たとえ人間相手であろうと致命傷と成り得るだろう。

尤も、そこに殺意があればの話だが。

(……イン、デッ……クス……！)

歯を食い縛り、刀に力を籠める。だが、もはや勢いを増すばかりの魔力の奔流を押し返すことは不可能であり、神裂は抵抗すら出来ずに呑み込まれ——。

「……………」

やがて光が晴れ、霊夢は臉を上げる。

「…………逃げたわね」

眼前の地面は抉れ、まるで隕石でも落下したかのような巨大なクレーターが出来上がっていた。

神裂の姿は見えない。跡形も無く消し飛んだ……ということは有り得ないため押し潰される前に逃走したのだと判断する。

そう、逃げられた、逃がしてしまったのだ。

「ふう………久々に動いたから疲れた」

しかし、あそこまでの実力を持つ魔術師をみすみす野放しにしてしまったことによる

苛立ちよりも先の戦闘での疲労感が勝る。

明日は筋肉痛だろう。魔力で補強しているとはいえ音速についていくなんて無茶をしたのだから。

(存外、手強かった。まさか“夢想封印”まで使わされる羽目になるなんて)

油断と慢心。この有り様はそれが招いた結果といえよう。神裂は霊夢の予想を上回る実力者だった。

第七位ナンバーセブンに比類、或いは凌駕した身体能力。そして、それに驕らない洗練された技量……魔術師としても剣士としても達人と称するに相応しい。

最初から様子見無しで臨めば、みすみす被弾してしまうような失態は無く、もっと早くに決着はついていたはずだ。

故に、霊夢は己を戒める。余裕と慢心は決して違うのだと。

「んっ。」

その時、携帯の着信が鳴り響く。

こんな時間に誰かと思いがながら霊夢は懐中から取り出して画面の宛名を見た瞬間、顔をしかめる。

『ハァイ♪、こんばんわ霊夢♪』

「……………何の用?」

仕方なく通話に出れば、女の唄うような声がある。霊夢の能力開発担当者である、あの赤髪の研究員だ。

霊夢は用件を問いつつも、大方は察していた。

『フフ、惚けちゃつてえ……随分と派手に暴れたみたいね？ 使つたんでしよう？ アレを』

「……相変わらず情報が早いわね、教授」

『上層部も気付いているんじゃない？ あなたはいつも周辺の滞空回線アンダーラインを破壊するから詳細までは分からないでしょうけど』

赤髪の研究員……以後、霊夢が呼んだように「教授」と呼称することにしよう。どうやら彼女は先程霊夢が「夢想封印」を使用したことを把握しているようだ。

口振りからして実際に見てはおらず、何らかの方法で観測したようだが……。

『それで、あれだけ不用意に使うなど念押ししたはずなのだけれど——』

「しようがないじゃない。強かつたんだもん」

『へえ？ それはそれは。あなたにそう言わせるなんて、何があつたのかしら？ また第一位とでも殺り合つた？』

「——魔術師よ」

『!!』

声はおちやらけているが、遠回しに非難する教授。しかし、霊夢が戦った存在の名を口にすると、雰囲気を一変させ、その声に好奇の熱が帯びる。

『……あらあら。驚いたわ。素敵なご客人ね』

「何が素敵よ。あんた、学園都市に魔術師は来ないって言つてたじゃない。科学との摩擦がどうのとかつて」

『ええ。そのはずだけど……何事においても例外は存在するつてことね』

悪びれもせずそう言つてのける教授に、霊夢は苛立ちを覚える。しかし、いくら責めたところで彼女がその調子を崩さないことは以前の経験から分かっていたので軽く舌打ちするだけに留めた。

「その様子からして、何も知らなかったつて認識でいい？」

『ええ。あくまでも私は科学の人間。彼らが裏で何をやってるかなんかいちいち把握してないわ』

「ふん、宗教被れがよく言う。——本当でしょうね？」

『本当よ。フッフ』

相変わらず何を考えているか分からない奴だ。教授とは学園都市へ来る以前からの決して短くはない付き合いであるが、未だに彼女のことを霊夢は全く信用していなかった。

得体が知れないのもあるが、一重に彼女が何かを企んでいることを分かっていたが故に。

『けれど、興味深い話だわ。侵入者の情報は無かったから余程隠匿に長けているのか、或いは真正銘招かれたお客さんなのかも』

「イギリス清教の、えつと……ネセサリウスとか言ってたわ。あんたなら、知ってるでしょよ?」

『勿の論よ。必要悪の教会……イギリス清教の部署の一つで魔女狩り・宗教裁判といった“対魔術師”に特化した機関よ。魔術結社とかを狩る、魔術師にとっての警察って言った方が分かりやすいかしら』

魔術師にとっての警察……成程。だから自分がその名を知らないことを疑問に思っていた訳だ。

しかし、霊夢はさも当然のような反応をしているが、科学サイドであるはずの教授が、何故こうも魔術師の情報に精通しているのだろうか。

『そういう訳だから、イギリス清教の中でも選りすぐりの精鋭が集まっているのだけれど……どんな魔術師だったのかしら?』

教授が尋ねる。もはや霊夢を咎めるよりも学園都市へ潜入してきた魔術師への興味が優先されていた。

「神裂っていう、大太刀みたいなデカい日本刀を振り回す女。セイジンとかどうの言っ
てたわ」

『——あら、Saint 聖人？ それはまた素敵ね』

「知ってんの？」

『キリスト教が信仰する救世主——即ち“神の力の一端”を生まれながらに保有している人間のこと。因子の強さによってピンキリだけど大抵は肉体的にも魔術的にも普通の人間と比べ物にもならない別格な存在よ』

「ふうん……要するに、あらひとがみ 現人神擬きってこと？」

『そうなるのかしら？ あなたの視点だと。他の神話体系で見られるデミゴッドとは少し違うみたいだけれど』

クスクスと教授は笑う。対する霊夢はその説明を聞いて道理でやたらと強かった訳だと納得する。

神の力を宿した人間……十字教が崇拜する神とやらについて詳しくはないが、八百万の神々とはまた性質が違うのだろう。

『で、その聖人様はどうしたの？』

「……………」

『もしかして逃げられちゃった？ 流石のあなたでも聖人の相手は厳しかったのかしら

『？』

返ってきた沈黙に対して見事言い当てた教授は意外そうな反応をする。

聖人はその戦闘力から、魔術世界の組織間においては核兵器に匹敵する戦略価値を持つとも言われているが、教授はそれを理解した上で博麗霊夢が本気を出せば聖人を打破することが可能だと認識していた。

噂に聞く“二重聖人”とやらなら話は変わってくるが。

「別に。少し油断してただけよ」

『あらそう。けど今後はあんまり派手にやるのは控えてちょうだい。原石とはいえ能力者でありながら魔術を扱う存在はどちらの勢力にとつても都合が悪いし、隠蔽するのも楽じゃないのよ……あなたも注目を浴びるのは嫌でしょう？』

「……そうね」

確かにその通りである。教授のように知れる奴には知られてしまっていることだろう。

曰く、学園都市と魔術師はそれぞれ“科学サイド”だの“魔術サイド”だのと云われ、不可侵の条約を結んで互いに均衡を保ち合っているらしい。

それを当て嵌めると、霊夢の存在は条約違反。両陣営が看過する訳もなく、最悪存在そのものを消し去ろうとするだろう。

でも、と霊夢は語気を強める。

「あんたの命令に従っているつもりはないから。私は私がやりたいようにやる。其処るところ理解しておくように」

そんな世界の事情など知ったことではなく、誰の指図を受けるつもりもない。何故そのような些事なことで不自由を強いられなければならないというのか。

こちらが譲歩してやる理由は更々無く、科学サイドだろうが魔術サイドだろうが敵対すると言うのであれば真つ向から叩き潰すまで。

ともあれ面倒事に巻き込まれたくないのも本音であるため一応は教授の言葉には従うが、それで調子に乗られるのも癪なので釘を刺しておく。

『……ええ。勿論よ、素敵な霊夢ちゃん』

そんな威圧にも物動じせず、教授はより愉しげに微笑む。

『それじゃあ、魔術師について何か分かったならまた教えてね？　個人的にすつごく興味あるから』

「あつそ。用件はそれだけ？」

誰が教えるかと内心吐き捨てながら霊夢は通話を切る。

「……めんどくさい」

怠そうに首を回し、ぼそりと呟く。

幻想御手に続いて、今度は魔術師。トラブルがトラブルを呼び込んでくる。どうやらこの街は霊夢に平穩を与えるつもりはないようだ。

しかし、実を言うと良かった点もあった。

(……少し思い出せたわね)

あの時、あの瞬間。死を覚悟していた霊夢は謎の声に導かれ、反射的に夢想封印を放った。

回避を怠り、被弾しそうになった際、ああやって対処するのは基本中の基本であるが、それすらも彼女は忘れてしまっていた。

忘却という事象を彼女は最も恐れ、忌み嫌う。知っていたはずのことを忘れてしまい、覚えていたという事実すらも曖昧になっていく。

それは実に耐え難いことである。故に、時折思い出す記憶の断片に少しだけ安堵するのだ。

忘れていたとしても、失われてはいないのだと。

(私の死に場所はそこではない、か……どこの誰だか分からないけど確かにそうかもね。なら、精々生き足掻いてやるわよ)

実際、霊夢は踏み止まった。あのまま終わってしまったてもいいと思っていたというのに。

——自分にとって、声の主は一体どんな存在だったのだろうか。

それすらも思い出せない。けれど、だからこそ、博麗霊夢は生き急ぐ。

彼女はこの世界に生まれ落ちたことを憂い、悲観しながらも在りし頃の幻想きおくを追い求め、渴望してやまなかった。

たとえ、その先に何も無かろうと……。

(……帰って寝よ。一応美緯に連絡しておこうかしら)

ファミレスで白井らと別れてからどれくらいの間が経ったか。既に日は落ちてしまつて辺りは暗い。

帰宅しても文句は言われなだろうが、念のため固法にメールを送つておこうと霊夢は再び携帯を開く。

それとほぼ同時だった。再び着信音が鳴り響いたのは。

「あん？　ちつ……まだ何かあんの？」

『博麗！　今ちよつと時間大丈夫かッ!』

「……当麻？」

てつきりまた教授だと思い、眉をひそめながら電話に出るが、聴こえてきたのは男の声。画面に表示される名前を確認すれば電話相手は不幸なクラスメイト、上条当麻だった。

何やら焦った様子の声。こんな時間にどうしたのかと疑問に思うと同時に、嫌な予感がする。

端的に言えば、トラブルの匂いがした。

「何？　また面倒事に巻き込まれたとか言うんじゃないでしょうね？」

『ツ……その……おっしやる通りで……』

そして、見事に的中する。

「あのね、ビリビリの時もそうだけど自分の手に余るようなことを私に押し付けてくるのやめてくんない？　私はあんたと違って無謀なヒーロー気取りでも馬鹿みたいなお人好しでもないんだから」

巻き込まれたか、或いは自分から首を突っ込んだか……上条が何かしらの事件や騒動に巻き込まれるのは半ば日常的であり、危険な目に遭っているところをたまたま居合わせた霊夢が助けてあげた回数は決して少なくはない。

そのせいかどうも頼られているような気がする。

『うっ……いつになく辛辣。もしかしなくても今ご機嫌が悪いので？』

「機嫌悪いってか疲れてんのよ。丁度さつき厄介な奴に絡まれて撃退したところ。だから今回は勘弁してほしいんだけど……」

『そ、そんなこと言わないで聞いてくれ！　実は『魔術師』っていうヤバイ奴に襲われ

て大変なんだ!』

「……………は?」

『ほら、博麗つてそういうの詳しかっただろ? 何か知ってるんじゃない? あれ? おー

い、博麗さんー?』

上条の口から魔術師という単語が出てきたことに霊夢は目を見開き、硬直する。

思えば、神裂と戦ったこの場所は自宅近隣。それはつまり上条や土御門が住まう学生寮からも近いということ。もしも神裂の仲間が付近に居たとして、人払いを幻想殺しで無効化してしまう上条が鉢合わせしてしまう可能性は大いにあった。

「……………あんたという奴は。つくづく運が無いわね」

『え? あのこと…博麗…………?』

「さっさと説明しなさい。一体何があったのかと、今どこに居るのかを」

今宵はまだまだ、長くなりそうだ。

霊夢はもはや何度目か分からない溜め息を吐き、上条の言葉へ耳を傾ける。

上条は現在、担任の月詠小萌のアパートに匿ってもらっているらしい。文面だけでは何故そのような状況になっているのか意味が分からないが、事情を聞けば概ね納得した。

「……相変わらずボロいわね」

目の前には、景観にそぐわない年季の入ったアパートが建っていた。

ここへ来たのは酔い潰れた小萌を運んできた時以来だろうか。しれっと霊夢も飲んでいたら未成年飲酒だと説教されたのを思い出す。

ぴんぽーん、とチャイムを鳴らす。

「小萌先生ー？ 博麗ですけどー」

暫し待機。しかし、何の反応もない。

「……蹴り破りますよー」

「ああ！ 待っててください！ 博麗ちゃんが蹴ったら普通に壊れてしまいますう！」
スツと足を構えた瞬間。慌てた声と共に、がちやりとドアが開かれる。

「冗談ですよ、そんなに慌てなくても」

「ほ、本当ですかあ？ 博麗ちゃんなら本気^{マジ}でやりかねないので心臓に悪いですよ……」

「……流石に失礼では？」

「いっつも問題児なのが悪いんですよ！ もう！」

現れたのは家主である小萌。普段の格好とは違い、兎の耳がついた幼児向けのパジャマを着用していた。

年相応……ではなく、見た目相応の趣味なようだ。尤も、霊夢はとうの昔から知っていたので特に新鮮味など感じる訳も無くプンスカと怒る彼女を宥めながら靴を脱いで玄関へ上がる。

「で、あの馬鹿は……」

「あ、はい。上条ちゃんなら『シスターちゃん』と向こうに居ますよー」

小萌の案内に従い、霊夢は奥の居間へと進む。そこには夏休みにも拘わらず補習を受けていたせいで制服姿のツンツン頭の少年と、その横に敷かれた布団の上で眠る修道服を身に纏った銀髪の少女が居た。

「博麗！ 来てくれたか！」

「来てやったわよ、このアホンダラ」

その姿を見た途端に顔を輝かせる上条。彼からすれば現状を打破することが可能な唯一の希望なのだから当然の反応であろう。

「それが例の？」

「あ、ああ。禁書目録だ」

——禁書目録。

明らかな偽名で上条はすやすやと寝息を立てる修道女のことを呼んだ。

「本人から直接説明してもらいたかったんだけど……叩き起こしていい？」

「ちよ、駄目だって！ こいつさつきまで重傷だったんだからな！ ってか電話で説明しただろー！」

「……しようがないわね」

重傷……先程の電話でどんな怪我をしていたか上条に問えばそれは大きな刃物で切り裂かれたようなものだったらしい。

神裂が持っていた日本刀。そして血の匂い。点と線が繋がり、事の経緯を察した霊夢は溜め息を吐く。とんでもない厄ネタと上条は関わってしまったのだ。

(ま、こいつに非は無いわね)

この広い学園都市。自宅のベランダに追われる身の銀髪シスターが引つ掛かるなんて、どんな確率だと。

そこから首を突っ込んだのは上条だが、ここまで来れば不可抗力と言う他無く、追っ手の魔術師を撃退できたのは非常に幸運であったと言えよう。

「なあ、博麗は魔術についてどこまで知ってるんだ？」

すると上条が小声で問いかける。近くに居る小萌に聴こえないようにするためだろう。その意図を汲み取り、霊夢もまた声を潜めて答えた。

「……詳しくは知らないわ。そういう連中が居て、ここそこそしてるとてくらい。関わりたいくないもの」

「そ、そうなのか……じゃあイギリス清教とか魔術結社とかは……」

「まあ、名前くらいなら。つまり……この子の所属はイギリス清教ってこと？」

イギリス清教に魔術結社。上条が知るはずでない単語。ならばそれを誰から教えてもらったかと言えばこの修道女だろう。

そして、修道女ということは教会の関係者。ローマ正教やロシア成教やらの名が出なかったということはその説明の中で彼女はイギリス清教の名前しか出していなかったということになり、そこから霊夢は推察した。

「ああ、そう言ってた」

これに上条は肯定する。

「成程……要するに仲間割れ、ってことで良いのかしらね？」

「は？ どういうことだ？」

「私もさつき魔術師と戦ってね。そいつが恐らくこの子に傷を負わせた奴なんだけど……自分のことをイギリス清教って言ってたわ」

「なっ!？」

上条は驚愕する。魔術師と戦っていたのも驚きだが、それよりも禁書目録を襲った人物が彼女が所属するイギリス清教の者というのとは一体どういうことなのだ。

「じゃあ、俺が殴り飛ばした赤髪の魔術師も魔術結社とかじゃなくてイギリス清教ってことかよ？」

「恐らくね。そいつはその子をどうするって？」

「……そういえば保護する、って言ってた。ムカつく言い方だったが」

ビンゴだ。神裂の発言とも合致する。その赤髪の魔術師とやらも彼女と同じくイギリス清教の回し者で間違いないだろう。

「じゃ、じゃあ……あいつらはインデックスの仲間だったのか？ もしかして俺って余計なことをしたんじゃない？」

「そう結論付けるには情報が足りないわよ。保護対象ってことはこの子はよっぽど特別な存在ってことだけど……何か聞いている？」

霊夢が尋ねればそういえば電話では事の経緯を簡潔に話したのみでまだ禁書目録の

特異性を伝えてなかったと上条は矢継ぎ早に説明する。

曰く、完全記憶能力の持ち主で、10万3000冊もの魔道書を脳内に詰め込んでいるのだと。

「へえ……つまり動かない大図書館、ってことね」

「……いや、それを言うなら動く大図書館だろ」

「にしても魔道書グリモア、ねえ……確か普通は読むだけで脳が発狂する代物だっただけだっただけ」

それを10万3000冊。特別な方法があるのか、それとも好奇心から何冊か読み漁っても何ともなかった霊夢のように単にそういう体質なだけなのだろうか。

どちらにせよ、禁書目録なる少女が如何に特異で重要な存在であるかは理解した。

故に、疑問が生じる。

「……きな臭くなってきたわね」

「ん？ どうした？」

「妙だと思わない？ そんな魔術師からしたら喉から手が出る程の存在。私が保護者様ならこんなことになる前に英国の総力を上げて取り戻そうとするわ」

「……………あ」

確かに。上条は漸くその可能性に思い至ったと言わんばかりに間抜けな声を漏らす。

「そ、それってつまり……!」

「ええ。連中が裏切り者の可能性もあるけど、そうなると護衛が居ないのがおかしい。意図的に学園都市に侵入させた可能性だってあるわ」

淡々と告げる霊夢。それは上条にとつてあまりにも絶望的な事実だった。

「つてことは何だよ……アイツをイギリス清教に送り込んでも、何の問題も解決しないってのかよ!」

「声がかいわよ。落ち着きなさい」

「これが落ち着いてられるか……ッ!」

ドンッ! と壁を殴る音が上条の怒りを表すように響く。

無理もない。ゴールだと思っていた場所が、実は連れて行つてはいけない場所だと告げられたのだから。

「良いから落ち着きなさい。小萌先生が聞いてるってこと忘れないだよ」

「あつ……」

「か、上条ちゃん……?」

不安そうな顔でこちらの様子を伺う小萌。その姿を見て上条も頭が冷える。

幸いにも魔術がどうのということは発言していなかったが、それでもイギリス清教と聞けばあの銀髪シスターに関係することであろうことは容易に察せられるだろう。

「……小萌先生。すべてとは言わないけど、事情は後で話すつもりです。だから今は何も言わないでくれませんか？」

「うっ……分かりました。必ず説明してください。約束ですよ？ 博麗ちゃん」

いつになく真剣な眼差ししの霊夢に小萌も只ならぬ事態だと理解し、教師として大人として事情をすぐにでも聞くべきだと思いながらも彼女の意志を尊重して部屋を出ていく。

それを確認すると霊夢は再び上条へ視線を戻す。

「ふう………つたく、気を付けなさいよ」

「す、すまん………けど、これからどうすんだよ？ 相手が組織ならインデックスを守り通

すのだっていつか限界が来る」

上条が問う。この絶望的な状況を打破する方法を彼は思い付かない。

だが、目の前の少女なら、或いは……。

「さて、ね………詳しい事情をそいつから聞くまでは何とも言えないわね。私としては赤の他人だしそのまま引き渡しても良いんだけど………あんたは納得しないでしょ？」

「当たり前だろ！」

「何でそうまでして助けたいの………つてのは愚問ね。あんたはそういう奴だものね。相手が魔術師とか関係無いか」

ほとほと呆れた様子でそう言いながらもある意味では霊夢も同類だ。口では何と云おうが、結局のところ目の前で起きていることを見逃すことは出来やしない。

一方、上条は自分は霊夢が言うような上等な人間ではないとギリツと齒軋りする。

——私と一緒に地獄の底までついて来てくれる？

そう今にも消えてしまいそうに悲痛な笑顔で問いかけてきた彼女に対し、自分は何も言えなかった。

その結果が、この有り様だ。

だからこそ、次は迷わないと決意する。

「……分かったわよ。私も手伝ってあげる」

そんな心境を知らない霊夢は、しかしその確固たる決意を理解し、あっさりと言ってのける。

魔術と科学——そして幻想を生きる巫女が交錯した瞬間だった。

板挟み

「……面倒だな」

とある雑居ビルの屋上。そこから遙か遠方にあるアパートの一室を双眼鏡で覗き見ていた男は舌打ち交じりに吐き捨てる。

男は異様な風貌をしていた。2 mを超えた長身、それに似合わぬ幼い顔立ち、派手な赤髪、丈の長い神父服、耳にはピアスを付け、目の下にはバーコードのような刺青タトゥー……明らかに堅気の人間ではない。

——ステイルⅡマグヌス。

イギリス清教・必要悪ネセサリーの教会所属の魔術師であり、先の戦闘で上条当麻に敗北した人物だ。

「どうですか？ あなたの見立てでは」

その傍らに立つ女性、神裂火織が尋ねる。

「物理的に他者を通さないのでなく、結界に踏み込んだ者を迷わせ、魔術へ耐性の無い者は人払いと似た効力で立ち去らせる結界術。単純な侵入防止に加え、気配感知、認識

阻害、使い魔による迎撃術式……神道では式神と言うんだっただけかな？ 兎に角どれもこれもが嚴重で緻密……まるで王室のセキュリティだ。突破するのは一筋縄では行かない」

上条が禁書目録を匿い、潜伏していると思われる建物。調べたところ彼の通う学校の教員の住居のようだが、そこが突然堅牢な要塞と化した。

恐ろしいまでに高度な結界が張り巡らされており、こうして外から様子を覗くことは可能だが、少しでも近付けばその場所を特定することすら困難になる。

あれだけの結界が僅かな時間で形成された。もはや天才と呼ぶのも烏滸がましい神業。ルーン魔術を扱うスタイルからすれば神道の術式は畑違いだが、それでも驚愕を隠せず、戦慄する。

「そして、仮に突破したとして、結界内に足を踏み入れた瞬間、即座に駆け付けてくるだろうね。君を撃退したつていう魔術師が」

「……………」

チラリと神裂を一瞥しながらスタイルは言う。これに神裂は無言であったが、どこか悔しそうに俯く。

彼女の身体のおちこちに打撲痕があり、特に胸部から腹部にかけては見るに堪えぬ酷い痣がある。

——その理由は言うまでもなからう。

目を疑ったものだ。殴り飛ばされた頬を押さえながら学生寮から離脱して合流すれば魔術師としてトップクラスの實力を持つはずの同僚が満身創痍の状態で這いつくばっていたのだから。

「博麗靈夢……一体何者なんだい？ 聖人^{きみ}を退けるほどの魔術師がこの街に居るなんて聞いてないぞ」

「……分かりません。調べによると、彼女は学園都市に在籍している低位の能力者とのことですが」

「はあ？ 何だいそれは……魔女狩りの王^{イノケンティウス}を破った奴は何の能力も持たないただの学生と言ったり、この街の情報網は全く当てにならないじゃないか」

呆れた様子で額に手をやるステイル。そもそも能力者に魔術の使用は不可能だ。

使うだけで血管が断裂し、最悪死に至る。況してやあれだけの魔術を行使すれば内側から木つ端微塵に破裂してもおかしくはない。

「大体君の話だと、彼女はこちらの事情を知らないはずだろう？ どうして真っ先に禁書目録の場所へ向かった？ まさか君を騙していたとでも？」

「いえ……どうやら貴方と戦った少年と彼女は学友なようです。恐らく少年の方が助けを求めたのかと」

「何？ そんな偶然があるってのかい？」

また舌打ちする。不幸だと嘆きたくなる気分だ。互いに遭遇したイレギュラー同士が、まさか知り合いだったなんて。

「くそっ……彼女があの子を悪用しないとは限らないというのに、様子見に徹するしかないなんてね……」

苦虫を噛み潰したような表情。霊夢のことを神道一派の魔術師だと認識している彼らからすればそんな人物の元に禁書目録が渡ったのはあまりにも致命的な失態だった。

見たところ干渉したり危害を加えるような素振りを見せていないが、まだ禁書目録の有用性に気付いていないだけの可能性だってある。

そして、魔術サイドにとって核兵器にも等しき戦力である聖人を真つ向から打倒する程の実力を持つ魔術師が10万3000冊の魔道書の知識をほんの一部でも手に入れたら……。

「最悪、増援を呼ぶことも視野に入れないといけませんね……」

「ああ。『期限の日』も近い。もしもこのまま尻尾を出さなければ……英国と学園都市で戦争するしかないさ」

嘆き、そして覚悟を決める。仮に二人掛かりで挑んだとしても勝てるか分からない。

それでもやるしかないのだ。

すべては、禁書かのしよ目録を守る為に――。

一方その頃。霊夢は布団の上で惰眠を貪っていた。

「だるい……」

予想していた通り全身が筋肉痛。別に動けない程ではないが、元より朝に弱いこともあつて動く気にはなれない。

(大丈夫かしら、あいつ)

あの後、結局禁書目録なる少女が意識を取り戻す様子は無く、ただでさえ狭い小萌宅

に四人で寝泊まりするのは無理があったため一旦帰ることにした。

神裂たちが攻め込んでくることも考慮して防護結界も張つてある。

イマジンブレイカー

“幻想殺し”に

関しても上条自身への影響を打ち消すのみで結界を往來することが可能なのは確認済みだ。恐らく基点に触れぬ限りは結界そのものが破壊されることはなく、そこも上条に基点の場所を教え、念押ししているので大丈夫だろう。

気掛かりと言えば、上条が無防備になつてしまうこと。 “幻想殺し”は魔術師にとつて天敵にも等しい力だが、相手とてプロ。一度敗れた以上対策はしてくるだろうし、神裂のような馬鹿げた身体能力を持つような存在には意味を成さない。

一応無闇に外出しないよう注意しているもののそれが霊夢にとつて唯一の不安要素だった。

(ハア……考えても仕方ないわね。昼過ぎに様子を見に行つてみよう。流石にその頃にはあのインなんとかつてのも起きてるだろうし……)

上条とてそれなりの修羅場は潜っているし、彼は不幸ではあるが、悪運はやたらと強い。万が一のことがあつてもどうにか乗り切れるだろう。

そんな樂觀的な判断と共に霊夢はとりあえず一切合切を頭の片隅に追いやり、再び夢の中へ――。

「……何をしておられるの？」

「あん？」

最近よく聴く甲高い声。もそもそと寝返りを打って顔を向ければ怒髪天を衝くと言わんばかりの面貌をしたツイントールが立っていた。

何故ここに？ いくら空間移動能力者とはいえ家にまで上がり込むのはどうなのかと文句を言い——かけたところで霊夢はそういえばここが自宅ではなく、風紀委員第一七七支部であることを思い出す。

「……何って……見ての通り、寝てただけだよ」

ポリポリと頭を掻きながら霊夢はそう言い、ゆつくりと身体を起こす。幸いにも二度寝をかまそうとしていたことには気付かれていない様子だ。

対する白井は声を荒らげないように耐えながらもこめかみに青筋を立てていた。

「少しは悪びれたらどうですか？ 一体何をどうしたら風紀委員の支部の床に布団を敷いて寝るといふ思考に至るのか教えてくださいませ」

「だって暑いもん、私の家。冷蔵庫の中身もパーになっちゃやし」

復旧にはまだ時間が掛かるらしい。灼熱地獄は御免被ると霊夢はそつぽを向きながら言う。

「はい？ ……ああ、一昨日の停電……あなたのご自宅の近くで発生したと聞いてもしやと思いましたが……」

「そ。どこかの誰かさんのせいだね。ほんつと、勘弁してもらいたいわ」

やれやれと言わんばかりに霊夢はぼやく。関わるのも面倒なので追及は避けるが、犯人は十中八九御坂美琴^{ピリ}だろう。

自分の能力を街中で思いつき使用したらどうなるかとか考えなかったのだろうか。

「それに関しては同情しますが……だからといって不法侵入していい理由にはなりませんの」

「別に良いじゃない。IDは美緯から貰ってるし、辞める前と変わってないなら泊まり込みで仕事するのも認められてるはずだけど？」

「ぐっ……」

確かにその通りではあるが、彼女の場合は仕事ではなく避暑地を求めて来ただけだろう。

しかし、反論したところでどうせ減らず口を叩かれるだけだと白井は諦める。

(にしても……この人の寝間着、というか私服姿を初めて見たかもしれないね)

今の霊夢は御坂といざこざがあった時と同じパーカースタイル。数年の付き合いが、巫女装束と学生服の姿しか見たことがなかったため白井としては新鮮だった。

(……結構似合ってますの。まあ、見てくれは、良いですものね)

イメージの無かった格好。それだけあの紅白の印象が強かったということだろう。

「……何よ?」

「へ? い、いえっ何でもありませんわ」

思わずジツとその姿を見つめてしまった。訝しげな視線を向けられ、白井は慌てながらもどうにかして誤魔化そうと別の話題を切り出す。

「そういえば……昨晩も原因不明の爆発が起きたとかで騒ぎになっていたみたいですね。幸いにも死傷者はゼロらしいですが……どうかしました?」

「あー……何でもないわ」

するとこれに霊夢の目が泳ぐ。白井の言う原因不明の爆発というのには心当たりがあった。間違いなくあの戦闘での被害のことだろうが、結構な騒ぎになっている模様である。

人払いを消した後、特に後始末なんてしていないのだから当然と言えば当然だが。

「で? 今日もまたレベルアップの捜査?」

「勿論ですの。明確な悪影響があると判明した以上、早急に取り締まる必要がありますの」

風紀委員が今すべき事は三つ。幻想御手レベルアップ拡大の阻止、昏睡した使用者の回復、そして幻想御手開発者の検挙だ。

しかし、捜査は難航していた。

業者に呼び掛けて例の裏サイトは封鎖したのは良いのだが、今度は希少となった幻想御手を金銭で売買する輩が増え始めている。

ただでさえ使い回しが可能で音楽ファイルであるが故に量産も容易。副作用についても公表しているが、それでも利用者は後を絶たないのが現状だ。

「ふうん……」

無駄だと思うけど。とは言わない。事実であろうとその代案を霊夢は持たないのだから。

あの脳科学者、木山春生が動きを見せれば状況は大きく変わるだろうが、それは恐らくまだ先。自身に疑いの目が向いた時か、或いは目的達成寸前になる時だろう。

（つたく……トラブルを呼び込むにしても、せめて一個ずつにしてほしいわね）

幻想御手と魔術師。脅威度で優先するならば後者だろうが、だからといって片方を放置する訳にはいかない。

むしろ事を起こした場合、より面倒なのは前者だ。霊夢の予想では意識を失った使用者たちの脳を共有させ、連結させた結果がもたらすのは――。

「じゃ、手当たり次第に現場を押さえるとしましょう。いつか手掛かりを得られるで

しょ」

「……なんか投げやりですわね」

故に、靈夢は風紀委員の方針に従う。とは言つても地道な捜査というものは苦手であるが。

しかし、やるしかあるまい。仕方なく靈夢は名残惜しさを感じながら布団から抜け出すと、おもむろにそのパーカーを脱いだ。

「んなッ!?! い、いきなり何をしているんですのッ!?!」

「え?」

突然の行動に赤面する白井。そんな反応に靈夢は頭の上に疑問符を浮かべる。

「何って、着替えないといけないでしょ」

「で、ですがこんな人前で……!」

「はあ? 見られて減るもんじゃないし、そもそも同性なのに何言ってるのよ」

「うぐっ……それは、そうですが——」

「?」

何故こんなにも慌てているのだ己は。美琴お姉様ならともかく相手はあの博麗靈夢だぞと白井はブンブンと頭を揺らして、邪念を振り払う。

その様子を見ても、よもや己に劣情を抱いているなどは露程も思っていない靈夢は首を傾げるばかり。

「とにかく! さっさと着替えて捜査に行ってくださいまし! 私は先に向かいますの

で！」

そう言つて白井は姿を消す。

「……変な奴ねえ」

取り残された霊夢は意味が分からないといった様子でそう呟き、着替えを続行するのだった。

「という訳でソレ、回収するから」

「ふ、ふざけんなこのアマ——ごはあ!?!」

某所の路地裏。霊夢はネットの書き込みにあつた幻想御手の取引現場へと向かい、回収作業にあたつていた。

無論、素直に応じる者はおらず、抵抗するのならば腕尽くで黙らせるのみだ。

「これで八個目。多過ぎでしょ、マジで」

「地面に転がる音楽ファイルの入った記録媒体？を拾い上げ、げんなりした表情を浮かべる霊夢。活動を始めてから僅か一時間ばかりであるが、既に八件もの取引現場を押さえていた。

空を自由に飛び回る彼女の機動力は下手な空間移動能力者をも凌駕する。場所さえ分かっていたら容易いことだった。

「く、糞がツ！ 女一人に何やってんだ！」

「囲め囲め！ 今の俺たちは大能力者^{レベル4}だってポコれるんだ！」

三人の男たちが霊夢を取り囲む。そして、各々が炎や氷、風といった様々な能力で攻撃を加える。

口振りからして幻想御手を使っているのだろう。その規模からして低く見積もっても強能力者クラスはあった。

「はいはい」

しかし、だから何だというのか。つい昨日聖人の相手をしたばかりの霊夢からすればあまりにもとろく、余所見をしても避けられる程に生温い。

「ぐぎゃつ！？」

「ぐぎゃつ！？」

「がはっ!？」

回避し、近付いて、殴り、或いは蹴る。そんな単調な動作を繰り返すだけで一人、また一人と倒れていく。

あつという間に、男たちは全滅した。

「さて……」

「ヒイツ!？」

チラリ、と視線を向けた先には、中学生くらいの少女が震えながら立っていた。彼らから幻想御手を買おうとしたところ値上げされ、恫喝を受けていた人物だ。

「……知らなかったのかもしれないけど、これは危険な物だし、こういう目に遭うかもしれないから今後は買わないようにね」

「は、はいいいいい！ すす、すみませえん！」

そう注意すれば少女は深々と頭を下げ、脱兎の如く逃げ出す。霊夢の容赦のない戦いぶりにすっかり怯えてしまっていたようだ。

「……えつと、次の現場はつと」

助けてやったのにあんまりな反応であるが、霊夢は然して気にすることもなく、取引についての情報が記されたメモ帳を見ながらこの場を後にしようとする。

「——凄いわね、能力者三人相手を素手で伸しちゃうなんて」

その時、聞き覚えのある声に足を止める。顔を向ければ予想通りそこには御坂美琴が

立っていた。

「……………」

しかし、大した関心を示すこともなく、霊夢はその横を素通りする。

「ちよっ!？」

思わぬ行動に一瞬硬直してしまうが、慌てて立ち去らんとする霊夢の前へと回り込んで通せんぼした。

「この私を無視するんじゃないわよっ!」

「……………何よ?」

面倒事であるのは明白なため無理矢理突破してやろうとも思ったが、その方が面倒臭くなると判断してとりあえず用件を問う。

昨日の喫茶店では大人しくしていたからあの夜のことは単に気が立っていただけかと思っただが、この様子を見る限りではそうではなさそうだ。

「別に、用があつた訳じゃないわ。たまたまこの辺を見て回ってたら、あんたの姿を見掛けたっただけ。幻想御手を回収しているんでしょ? 黒子から聞いたわ」

「……………そう。要するに冷やかしてこと?」

「え? そ、そういう訳じゃ……………」

「こう見えて忙しいのよ、あと何個かは回収しないといけないんだから」

「ツ——」

暗にお前なんかにつき合っている暇など無いのだと、そう真つ向から告げられた御坂の顔が歪む。

「ほんとムカつくわね、あんた」

「あつそ。でも邪魔するってんなら、公務執行妨害でしょつぴくわよ？　臨時でもそんなくらいの権利はあるから」

「なっ……………!?!」

やれるもんなら……と言いつけたところで口を止める。彼女の物言いは確かに腹が立つが、その内容は至極真つ当であるのだから。

「ツ……調べたわよ、あんたのこと」

しかし、そんな正論で引き下がれるほど御坂に堪え性は無かった。

「グラビティールラー無重制御”グラビティールラー”っていう原石の能力者だってことも、鬼巫女だなんて呼ばれていることも」

あの因縁の夜以降、御坂は博麗霊夢についてネットにハッキングを行ってまで徹底的に調べ上げた。

そして、彼女が自分が知らないだけで意外と有名な人物だったということを知る。都市伝説としても語られる鬼神が如き強さを誇る空飛ぶ巫女……その話の殆どが噂レベ

ルの武勇伝だが、電撃を避ける姿や能力者を素手で瞬殺する姿を見れば納得出来るような内容もちらほらあった。

「それと、無能力者狩り事件の時に風紀委員をクビになったこともね……黒子がああも目の敵にする理由が分かったわ」

「……で？」

そんな言葉に対して霊夢はだからどうしたと言わんばかりの淡泊な反応。揺さぶりをかけるつもりだったが、どうやら効果は無さそうだった。

人とはああも無関心でいられるものかと驚きながらもならば己の疑問を解決するまでだと問い詰める。

「あんたを調べようと思った理由は、その強さの秘密を知る為だった。でも調べれば調べる程、分からなくなつた……わざとレベルを低く見せているのは確定として、さつきだつて能力を使う素振りすら見せなかつたし」

“無重制御”は自身を一定の高さまで浮遊することしかできないという点から異能力者に分類されているが、使用者の少ない重力操作系の能力の一つ。

もしもそのレベルが超能力者クラスであるのなら自在に重力を操ることが可能というところでもない規模の能力者となるが、それだと爆発を防いだ見えない壁や電撃を避ける程の超反応の説明が付かない。

「でき、あんたに関する噂の中で一つ、面白い話を見つけたの」

御坂は笑みを浮かべる。それを知った時、彼女はより単純な結論に至った。

「それによると何と……巷で噂の空飛ぶ巫女さんは、実は^{デュアルスキル}多重能力者^がでしたー、って言うのよ」

多重能力者。その呼び名の通り二つ以上の超能力を持つ能力者のことであり、学園都市では特力研を始めとして数多くの実験がなされたが、脳への負担が大きすぎるため実現不可能とされている存在——。

それが実在し、そして霊夢だという。はつきり言つて眉唾物であるが、そうであるのならば納得が行く。空中浮遊も、見えない壁も、超反応も、それぞれ別個の能力だと考えれば辻褄が合うのだ。

「デュアル……何それ？」

「えっ」

しかし、霊夢は意味が分からなさそうに首を傾げる。これには御坂も予想外の反応であり、呆気に取られてしまう。

「は？ あんた、知らないの？」

「普通に知らないけど……名前からして能力が二つつてこと？ そんな奴がいんの？」

「理論上の話よ。過去に色々と実験されてたけど結局脳の処理が間に合わなくて実現不

可能だったんだけど……」

「ふうん……」

あながち間違いではない。実際霊夢は原理の違う二種類の力を使っているのだから。超能力以外の異能を知らないであればそういった結論に至るのは至極当然のことだろう。

尚、超反応に関しては能力でもなんでもない天性の才であるが。

「ねえ、本当に実現不可能なの？ この街なら他人同士の脳味噌くっ付けたり機械に繋げて幾つもの脳を共有させたりしてそんなもんだけど」

「え？」

ふと、霊夢は問いかける。御坂の望んだ答えではなかったが、結果として彼女は多重能力者の話題を出すことで霊夢の興味を引くことができた。

昔から気になっていたのだ。彼女の常識では能力は一人に一つとは限らないのだから。

「いや、どこのマッドサイエンティストよ。流石の学園都市でもそんなヤバイことしないでしょ……そもそも脳波のパターンとかが違うから意味ないし」

若干引き気味に御坂が言う。学園都市の裏を知る者が聴けば失笑するような反応だ。

「……脳波、ねえ」

つまり、その問題さえ解決すれば多重能力者とやらは実現可能……とまで行くかは知らないが、少なくとも確率は上がりそうだ。

幻想御手使用者が意識を失う理由。それが自身の脳を無理矢理改造された結果、それこそ他人の脳に変えられたのだとしたら――。

「――いけそうね」

「? 何を……」

「別に。けどまあ、有意義な会話だったわよ」

黒幕を炙り出す手段。もし御坂と会話しなければ思い付きもなかっただろう。故に、霊夢は形ばかりではあるが感謝の意を示し、背を向ける。

「あ、待ちなさ「公務執行妨害」ぐっ……」

その一言で手を出せなくなる御坂。そんな彼女の姿を一瞥すると霊夢は身体を宙に浮かせ、一気に飛び上がる。

発生した風圧に御坂は怯む。再び視線を向けた時には霊夢は空の彼方だった。

「くっ……何なのよ……!」

明らかに異能力者の出せるものではない速度でどんどん小さくなっていく彼女の姿を御坂はただ悔しげに見ていることしか出来なかった。

時刻は正午。あの後、一通り仕事を終えた霊夢は小萌宅を訪問していた。

(結界は異常無し……侵入を試みた痕跡も無いわね。ま、それくらいの知能はあるか流石に)

破られたとなれば即座に感知できるようなにはしてあるが、一応確認しておく。うっかり上条の不幸が発動して基点に触れてしまう可能性だつてゼロではない。

とりあえず昨晩から何事も無かったようだ。霊夢は一息吐き、部屋の前へと向かう。
びんぼーん。

「はいはい今出ますよー。……つて博麗か」

チャイムを鳴らせば上条がドアを開けて顔を出す。どうやら小萌は留守のようだ。

「遅くなって悪いわね、仕事が忙しかった」

「仕事？ ああ、風紀委員のことか。昨日からその腕章気になってたけど何だ、復帰した

のかお前？」

「ただの臨時よ。前に起きた爆弾魔をちよつとゴコリ過ぎちやつた罰でやらされてるの。非常に不本意だけど」

「そ、そうか……」

一年前に霊夢が風紀委員をクビになっていたことを知っていた上条はやつと復職する気になったのかと思つたが、どうやら違ふよう少しばかり残念がる。

（でも、よくよく考えれば確かに柄ではないよな。博麗が風紀委員つて……粗暴だし、血の気が多過ぎるし）

「何か妙なことを考えてる？」

「えっ!? いえいえつ滅相もございせん!」

「……分かりやすいわね。ま、どうでもいいけど」

散々な評価と共に認識を改める上条。しかし、そんな思考を表情と持ち前の直感で読み取つた霊夢が顔をしかめれば慌てふためきながら首をブンブン振つて否定する。

「で? インなんとかは?」

「インデックスな。もう起きてるぞ、こつちだ」

上条と共に居間へと向かえば、そこには安全ピンで止められた継ぎ接ぎの修道服を着た少女——禁書目録が居た。

彼女は霊夢を視認するところん、と首を傾げる。

「とうま？ この人は？」

「ああ、こいつは俺のクラスメイトの……」

「博麗霊夢よ。よろしくね」

ただそう名乗り、彼女の前へ立つ。対する禁書目録はこちらを警戒している様子だった。

当然の反応だろう。上条が連れて来ているとはいえ見知らぬ、それも紅白な巫女装束を纏った姿の人物だなんて怪しき満点だ。況してや彼女は追われている身なのだから。

「……もしかして。とうまが言ってたワキ巫女？」

「あ？」

ぼつりと呟かれた言葉。思わず霊夢は半目になり、上条へと視線を送る。

「ブフウ!! あ、いやこれは物の例えでしたね博麗さん。ぶつちやけお前を表すにはその表現が手っ取り早くて……痛っ!!」

しどろもどろになる上条の鳩尾を軽く小突いて黙らせる。

「あんまり調子に乗ってるとしばくわよ？」

「も、もうしばいてるじゃねえか……いえ、申し訳ございません」

「とうま大丈夫？ でも今のは確かに失礼かも。デリカシーが無さ過ぎるんだよ」

呻き声をあげながら踞る上条に禁書目録は心配しながらもそう指摘する。女性に対して腋巫女呼ばわりして謝らずに言い訳すれば怒られて当然だ。

これに上条は何も言えない。馬鹿正直にものを言っつてしまい、不幸に見舞われることは少なくなかった。

「ねえ……外の結界は、あなたが張ったつてとうまから聞いたけど」

禁書目録が霊夢に問いかける。寝込んでいた彼女だが、目が覚めてすぐにアパートの周りに堅牢な結界が張られていることに気付いた。

すぐに上条に尋ねれば協力してくれている人間がやつてくれたと言い、その過程で名前が出たのがワキ巫女なる呼称である。

「ええ、そうよ」

「じゃあ……あなたは魔術師なんだね」

確信を以て禁書目録は言う。霊夢としては魔術師と同じ括りにされるのは御免被りたかったが、では何なのかと問われればこれまた返答に困り、面倒なことになるので否定はしなかった。

「陰陽術と巫術、神道の呪いを織り混ぜた結界術……あんな大掛かりな術式を単独で形成するには相当な造詣の深さが無いと無理かも」

「……へえ、やつぱり分かるんだ」

「うん。伊達に頭の中に10万3000冊の魔道書を叩き込まれてないんだよ」

結界を正確に分析してみせた禁書目録に霊夢は感心する。西洋の魔術とはまた仕組みは大きく違うはずだが、記憶している魔道書の分野はかなり幅広いようだ。

「でも、そんな凄い魔術師が何でこの街に？　とうまはクラスメイトだつて言つてたけど……もしかして狙いは私？」

「ちよつ?! インデックスッ!」

疑いの眼差し。明らかに霊夢のことを信用せず、警戒の色を強くしている禁書目録に上条が慌てて割つて入る。

「博麗は決して悪い奴じゃない。そもそも呼んだのは俺の方なんだ」

「でも……」

「大丈夫だ。俺を信じろつて言つただろ？　こいつは俺が知る限りじゃ誰よりも強く、頼りになる奴だ」

上条は確固たる自信を以て言う。彼は霊夢に対して全幅の信頼を置いていた。だからこそ、今回の一件が自分の手に余るものと理解してから真つ先に彼女へ助けを求めたのだ。

対する霊夢は微妙な表情。だからといって厄介事を持ち込んでくるのは勘弁してもらいたかった。

「安心しなさい。カビ臭い本の知識なんかに興味は無いわよ。推理小説読み漁ってる方がよっぽどタメになるわ」

「……本当に?」

「ええ。この街に居る理由はまあ……色々と込み入った事情があんのよ。今は魔術なんて関わり合いたくもない、ごく普通の女子高生だと思つてちょうだい」

「いや、ごく普通の女子高生はそんな巫女服で徘徊したりしないと思うんですが」

「あ?」

「何でもございませんよ! ええはい!」

「……分かつたんだよ。確かに悪い人には見えないし、とうまがそこまで言うんだつたら信じるよ」

その説得を受け、禁書目録は顔をしかめながらもあつさり引き下がる。

それは一重に上条の言葉だからだろう。どうやら自分が居ない間に二人の間ここまでの信頼関係を築くような出来事があつたようだ、霊夢は察する。

(……相変わらずね。人誑しつて言うんだっけ? こういうの)

上条当麻とはそういう人間だ。底抜けの善性故か、不思議と他者を惹き付けて止まない。い。

彼に感化され、絆された者は多く、中には恋愛感情を抱く者まで居た。そんなフラグ

を幾つも建設するため土御門や青髪から嫉妬されている面もあったが、霊夢はむしろ同情していた。

だから、いつも損をする。不幸だと嘆きながら他者の為なら己が傷付くことすら厭わないその在り方は愚かと言う他無く、ただ呆れるしかない。

「難儀なものねえ……」

「ん？ どうした？」

「何でもないわ。——とところで、インデックス。あなたは魔術は使えるの？」

一先ずは味方だと認識してもらえたタイミングで霊夢は改めて禁書目録へ質問する。

これに上条は首を傾げた。昨日から事情聴取をするとは言っていたが、真つ先に尋ねるのがそれなのかと。

「ううん。私には魔術を使うのに必要な魔力を練ることが出来ないんだよ」

「……そ。やっぱりね」

「え？」

合点が行ったと言わんばかりに霊夢は頷く。その視線は禁書目録を見ているようで、もつと奥深くを見据えていた。

彼女はあつさり、と、正解を導き出す。

「結論から言うと、あなたが魔力を練れない理由は体質とか才能の問題じゃないわ」

「!? ど、どういふこと?」

「昨日から違和感を感じていたけれど、今確信したわ。あなたは“呪い”を掛けられている。……恐らく体内にね」

——そして、衝撃的な事実を告げた。

喪失

「の、呪いってどういうことだよっ!？」

靈夢の言葉に上条は驚きを隠せない。禁書目録も酷く困惑している様子だった。

「この子の身体には呪い——つまり魔術が施されている。それが魔力を食^{リソース}い潰しているから、端から見れば魔力が練れないように見えていたのでしょうね」

淡々と説明する。巧妙に隠されており、たとえ魔術師であっても見抜くのは難しい。靈夢が気付けたのもほんの僅かな違和感を察知したからだ。

「け、けど俺はインデックスに何度も触れてるぞ? ならその呪いなんてとつくに——」
「解けてない。ということは、やっぱり体内ね。術式そのものに直接触れないとあんたの右手は発動しないのは確認済みだし」

「……私には、どんな魔術^{のろい}が掛けられているの?」

不安そうに禁書目録が問う。初めこそ半信半疑であったが、言われてから意識すると、確かに身体に違和感があった。

「さあ? 流石にそこまでは分からないわ。何となくろくでもないような気がしたから

呪いと揶揄したけれど、もしかすると悪影響を及ぼさない、むしろあなたを守る為のモノである可能性もなきにしもあらず……何か心当たりないの？」

「……うん。分かんないんだよ。私は一年ぐらい前から記憶を失っている、から……」
「——何ですって？」

体内に直接術式を施す。そんな所業を本人に気付かれずに行うというのはいくら魔術師といえど考えにくい。

故に、霊夢は禁書目録が何か知っているかもしれないと問いかけるが、絞り出すように彼女が話した内容に眉をひそめる。

記憶を失っている、彼女は確かにそう言った。

これについて上条が補足する。禁書目録は気付いたら記憶を失った状態で日本に居て昨日の晩飯も分からないままただひたすらに逃げていたのだと。

霊夢は妙だと思った。ならば何故10万3000冊の魔道書の内容は覚えているのか。意味記憶は無事で、エピソード記憶のみが欠落している？ だとしたら、それはまるで——。

「……………」

「れいむ？」

「……………記憶を失う、それ自体もこれが影響しているかもしれないわね」

「——えっ」

「なっ!! どういうことだよっ!!」

表情を変え、ぼつりと漏らした霊夢の見解に禁書目録は顔を青くさせ、上条も目を見開く。

「考えてもみなさい。10万冊以上もの魔道書の知識を自由に扱えるような奴なんて、管理する立場からすれば危険極まりない爆弾のようなもの。私とその立場なら何らかの制限を設けて自由に動けなくさせるわ」

「……それが、魔術が使えないのと、記憶の消去だつて言うのか?」

「ええ。あまり想像したくはないけど……都合の悪いことを知られたり反意を持たれたとしても、記憶を消してしまえば何ら問題無いのだから。女の子一人に魔道書の知識を詰め込むことを強いるような連中だし、充分に有り得る話でしょ」

仮にそうでなく禁書目録を防護することを目的とした術式だとして、魔術師に襲われた際に発動しなかった時点で物理的に彼女の身の安全を保障する代物ではないだろう。

真実だとしたら、あまりにも残酷な内容。上条は握り拳を作り、その顔に怒りを滲ませる。

何故、彼女がこんな目に遭うのだと。

「だったら早くそいつを消さないと——」

「駄目よ」

「は？ 何でだよ？」

「少なくとも無いと思わせる程に魔力が注がれている術式……解呪しようとする者を迎撃する防衛装置くらいは付いてると考えるのが普通よ。迂闊に解呪してそれが働いたら大惨事でしょうが」

「ツ……だけど、このまま放置なんて出来るかよ……！」

「私も解呪するべきだと思ってるわよ。ただそれなりの準備が必要ってこと」

まずは場所。何が起きるか分からない以上、解呪は慎重に行うべきでそれを屋内で、況してや人様のアパートの一部屋で行うなんてもつての外。

加えて、“幻想殺し”で破壊するのは手っ取り早くはあるが、あまりオススメできない方法ではない。体内にあるため触れようがないのもそうだが、仮に触れたとしても無理矢理破壊された術式が暴走してしまい、禁書目録にどんな影響を及ぼすか分かったものではないからだ。

「な、成程……」

その説明を受け、上条は納得する。魔術に関してはさっぱりなためこういったことは精通している霊夢に任せた方が良さだろう。

「そうね……早くて明日、人を巻き込まない場所でインデックスに掛けられた呪いを解

く

故に、やるのは霊夢だ。

「待つて。どんな迎撃術式が発動するにせよ、その時の私は……多分だけ魔術が使えようになつてゐるんだよ。10万3000冊の魔道書に記録されたすべての魔術……それこそ神話や伝説の再現にも等しき超抜級の大魔術を使う危険性だつてあるかも」

それに待つたをかけるのは禁書目録。魔術を使用可能な己が如何に脅威であるか彼女はよく理解していた。

何せすべての知識を用いれば人の身で神の領域——“魔神”にすら至ることが可能。もしも制御出来ずに二人に牙を剥いたら……最も恐ろしい事態を想像し、身震いする。

「ふうん……確かにそれは骨が折れそうね」

だからこそ、深刻な表情を浮かべる彼女と違い、平然としている霊夢に驚いた。

「ま、大丈夫でしょ。そうならないよう最大限準備はするから」

「なっ……！ それはあまりにも樂觀的過ぎるんだよ！ 私がどれだけ危険な存在かは魔術師のれいむなら分かるはず——」

「ええ。分かつた上で言つてゐるのよ。たとえ何が相手だろうと、あなたを放つておく理由にはならない」

「でも……！——」

「それに私は見ての通り巫女よ？ お祓いは専売特許。へまなんかしないわ」

根拠が無く、無謀な考え。しかし、その目に迷いは無く、自信に満ちていた。彼女なら本当にやつてのけるだろうと思つてしまふ程に。

「……れいむは、何でそこまでして私のことを？ とうまに頼まれたから？」

もはや言つても聞かないであろうと諦め、禁書目録は純粹な疑問を投げ掛ける。

地獄の底から引きずり出してやる。そう言い、手を差し伸べた上条といい、何故会つたばかりの自分を救う為に危険を侵すことを厭わないのか。

「そうねえ……正直、最初はあまり気乗りはしなかつたわ。呪い自体もどういったものか定かではないから、明確に影響を及ぼすまでは放置するつもりだったし」

「じゃあ、何で……」

「理由は至つてシンプル」

淡々と語る霊夢。これに上条は息を呑む。困惑の色を隠せない禁書目録と違い、彼は長い付き合いであるが故に霊夢の感情の変化に気付いていた。

あの場で禁書目録が記憶を意図的に消されているという可能性を告げられた時、上条はその事実には憤慨しながらも意外にもすぐに落ち着くことが出来た。

その理由は――。

「――ムカつくのよ、人様の記憶を平気で奪うような屑野郎の好きにさせるのがね」

底冷えする程に無表情のまま、静かに、誰よりも激昂している霊夢の姿を見たからだ。

記憶を失う。即ち、忘却。

霊夢は忘れることを嫌い、また恐れていた。加えて、彼女は物心ついた時から記憶喪

失だつた。

禁書目録の話を聞いて己と重ね合わせてしまうのは当然であり、激しい怒りを覚えたのは、そういうことなのだろう。

普段の彼女から見れば意外にも程がある内面。白井黒子の名を思い出せなかつたように、それなりに親しくなければ他人の名前すら覚え、省みようともしない有り様からはとてもではないが、考えられない。

しかし、酷く無頓着なように見えて、内心そんなことすら忘れてしまっている己にいつも腹を立て、嫌悪する。

仕方のないことだつた。彼女は完全記憶能力など持たない。ただ普通に生きていくだけで古い記憶は抜け落ちていく。その中で自分にとってどうでもいい些末事などいちいち覚えていられるはずがなかつた。

だからこそ、彼女にはその至極当たり前な事実が耐え難く、やがて何もかもを忘却の彼方へ追いやり、消えて無くなるのではないかと危惧してしまう。

幻想のように――。

(……らしくないわね、本当に)

自室で黄昏ながら溜め息を吐く。霊夢のそれは元来の性質ではなく、頭の中に存在する記憶がそうさせていた。

酷く臆気で、曖昧で、儂くて。ふとした拍子に抜け落ちてしまいそうになる、ユメのような想い出。いつから存在していたかすら定かではないその記憶は霊夢にとつて唯一の奇す処であり、彼女を彼女足らしめる根幹にあるものだった。

要するにトラウマなのだ。かつて忘れてしまったように、また失うのかもしれないと思わずにはいられない。

——何て情けないのだろう。

霊夢はそんな自分に対し、そう吐き捨てる。先の独白のように、それはあまりにもらしくない。

天衣無縫の極み。あらゆる威圧にも屈せず、あらゆる重圧をもはね除け、天上天下唯我独尊とばかりに我が道を往く。

この世に生まれ落ちた時からそうであり、これからもそうあるであろう在り方。にも拘わらずただ忘れることを極度に恐れてしまうのは何故だろうか。

否、答えは分かり切っている。それだけ自分はあるの光景を渴望し、きつと——。

(とりあえず神裂相手に使った分の針と符を補充して……いつそのことタンスの肥やしになつてるの全部引つ張り出そうかしら)

そんな憂鬱な気分を切り換えようと霊夢は早速解呪の為の支度に取り掛かる。

正直、気は進まない。この学園都市においては使うまでもないと、わざわざ持ち運ぶ

のも面倒なのでしまったまま放置していた仕事道具の数々。実際、一方通行を除けば使おうとすら思わなかった。

それで今まで本当に問題無かったのもあるが、純粹に霊夢は本気を出すことが嫌いなのだ。そうなれば後が無くなってしまふことを知っているから。

けれど、それは出し惜しみや準備不足の言い訳にはならないこともまた理解していた。

一冊でさえその知識を読み解けば強大な力を有することができる魔道書。それが10万3000冊……禁書目録からは魔術師だと、上条からもその手の専門家と思われているが、実際のところ霊夢の魔術知識は一般人に毛が生えた程度。それでも桁違いの数値だということは分かる。

以前あの教授から聞かされた話だが、この世界には「魔神」と呼ばれる者が存在するらしい。それは魔術を極め、神の領域に達した最高峰の魔術師のことを指すそうだ。

すべての魔道書の力を行使可能な状態の禁書目録が顕現したとして、それに匹敵する存在と成り得るのは容易に予想出来る。霊夢からすれば神にも千差万別でどんな強さかはいまいち判断が付かないが、そう形容されるからには、やはり別格なのだろう。

加えて——それらしき存在と、霊夢は一度会ったことがある。

(……今どうしてるのかしらね、あいつ。野垂れ死んでほしいけど)

嫌なことを思い出したと顔を歪める。流石にあの隻眼露出女と同格の存在に至るとは想像したくないが……こればかりは無知であるため常に最悪を想定するしかなかった。

たとえ誰が相手であろうと己が敗北するなど微塵も思っていないが、万全を期するべきだ。

「あ、そういえばジャッジメント……は休むか。適当な言い訳考えておかないと」

即断する。禁書目録が記憶を消去される期限が不明な以上、どちらを優先すべきかは明らか。

白井たちには悪いが、幻想御手事件に関しては後回しだ。元より霊夢はあの事件に対して消極的な姿勢だったため何ら抵抗は無かった。

今も尚、使用者は爆発的に増え続けている。完全に取り締まることははや不可能であり、黒幕である木山を捕縛したところで流通が止まるとも限らない。

それこそ、昏睡状態に陥っている使用者たちが目覚めるかさえも……。

「——ん？」

そういう理由により明日からしばらく欠勤することを固法に連絡しようとした矢先に、着信が入る。

タイミングが悪いなど思いながら画面に表示される名を確認すれば、それは友人——

佐天涙子からであった。

「もしもし？ 涙子？」

『……………』

「——涙子？」

『霊夢、さん……………助けて、ください……………』

電話に出れば、実に二日ぶりに聴く彼女の声。しかし、それは普段の彼女からは考えられない程に弱々しいものだった。

そして、助けを求める言葉。どうやら緊急事態であることを霊夢は理解する。

「……………どうしたの？」

『アケミたちが……………友人が、倒れて……………私も意識がもう……………』

「！ あなた、まさか——」

『あはは……………使っちゃい、ました……………』

つい先程まで思考していたからこそ、すぐに正解へ行き着く。

佐天が、幻想御手を使ったのだと。

そこで思い出す。魔術師関連のゴタゴタのせいで副作用への危険性について伝えるのをすっかり忘れてしまったことに。

噂好きの彼女のことだ。恐らく裏サイトが閉鎖される前に、かなり早い段階で入手し

ていたのだろう。

「ツ……知らなかったの？」

『つ……はい。まさか、こんなことになるなんて知らなかった……いや、違う……初春たちが所有者から回収するって言うて……何か危険があるってことは……使っちゃいけない理由があるって、ちゃんと知ってた……なのに……！』

「……………」

『使いたかった……怖かったけど……でも、それ以上に……使いたくて……たまらなかった……私、何の力もない自分が嫌で……どうしても、憧れは捨てられなくて！』

能力が……御坂さんや白井さんのような能力が欲しかったっ！ その為に、私は共犯者を……私は……アケミたちを……道連れにしたっ！』

叫ぶように吐き出す、慟哭の混じった告白。これに霊夢は何も言えない。楽観的な理由で幻想御手の使用を肯定したのは他ならぬ己なのだから。

故に、問うことはあるとすれば――。

「……涙子。あなたにとつて能力つてのは、人生を棒に振ってまで欲しかったものなの？」

『ツ……きつい、こと言ってくれますね……霊夢さんは。分からない、頭の中ぐちゃぐちゃで、思考が回らなくて、だけど……今物凄く後悔してるってことは、そういうこと

なんじゃないですか……？ はははっ、とんでもない、半端者ですよね……」

脳裏に過るのは、喫茶店での語らい。あの時の霊夢の言葉に佐天は救われたような気がした。

けれど、何も理解していなかった。相談する機会はいくらでもあったのに、何の責任も覚悟もなく、ただ自らの欲望に従い、大切な友達まで巻き込んで――。

『……ねえ、霊夢さん』

「……………」

『無能力者^{レベル0}って欠陥品なのかな？ それがずるして力を手に入れようとしたから、罰が当たったのかな？』

絶望に満ちた問いかけ。能力に憧れ、渴望し、終ぞ得られなかった者の悲痛な嘆き。

霊夢は顔を歪める。

「……そんな訳ないじゃない。悪いのは、レベルアップをばら蒔いた奴よ」

ただ、そう答えることしか出来なかった。

生まれながらに強者であるが故に、結局のところ彼女は弱者の気持ちが分からない。あらゆる励まし^{の言葉}を投げ掛けようにも、安くなってしまうことを自覚していた。

だからこそ、言葉が見つからない。

『あはは……霊夢さんは、優しいですね……こんな、私と……友達になつてくれて……本

当に……』

——ありがとうございます。

その言葉を最後に、佐天の声は途絶え、やがて通話が切れる。

呼び掛ける暇もなく、霊夢はしばらく携帯を耳に当てたまま茫然と立ち尽くす。

一体どう答えれば良かったのだろうか。どんな言葉を投げ掛けてやれば良かったのだろうか。そればかりが頭の中でぐるぐると回る。

何ら気負うことはない。所詮は赤の他人。出会って数日程度で友人になったのも単なる気紛れ。それらしい思い出など精々シヨツピングしたことくらいだ。

そのはず、だというのに。

「……どういつもいっつも」

無意識に拳を握り締める。

かつて、霊夢は佐天が副作用を知りながらも幻想御手を使うと言った場合、自分はどうするのかと自問したことがあった。

その時は、自分は止めることはなく、それすらもどうでもいいと思うだろうと自答し、いつものように己を悲観した。

だが、どうやら違ったようだ。

何故ならば今の己はこんなにも——。

「ああ——馬鹿な子ね。あなたと私は、これからも友達よ」
そうして、霊夢は「飛んだ」。

時は流れ、昏睡状態に陥った佐天とその友人たちは発見され、白井たちの耳にも入ることになった。

皆はシヨックを受け、特に初春は彼女がそこまで追い詰められていたことに気付けなかった己の不甲斐なさから一刻も早く事件解決の糸口を見つける為に木山の勤めるA I M 解析研究所に向かった。

「そうか、この間の彼女まで……」

研究所に到着した初春はソファに座り、木山と応対する。

「私のせいなんです……」

「……あまり自分を責めるものじゃない」

初春は顔を涙でボロボロに真っ赤にしながらも、目だけはギラギラと血走っていた。明らかに冷静な状態ではない。

「落ち着きたまえ。コーヒーでも淹れよう」

「そんな悠長な！」

木山は初春の肩を優しく抑える。

「その友達が目覚めた時、君まで倒れていたら元も子もないだろう。……大丈夫。きつと最後は上手くいくさ」

微笑みながら別室へと移動する木山。初春は袖で涙をごしごしと拭き、佐天が最後まで手放していなかったお守りをギュツと握った。

「……佐天さん」

部屋に一人取り残された初春は何気なく周囲を見渡す。

その時、部屋の書棚の引き出しから一枚のプリントがはみ出していることに気付いた。

「これは……ええ？」

たまたま目に入った資料。その内容に初春は絶句する。それは幻想御手の仕組みなのではないかと御坂と白井が考察していた理論に関するものだったのだから。

「これも……これも……『共感性』についての論文……どうということ？ だって木山先生、あの時——」

「——いけない」

ガチャン、と珈琲が落ちる音が響く。後ろを振り返れば冷たい表情を浮かべた木山が立っていた。

「他人の研究成果を勝手に盗み見ては」

「……まさか、木山先生、あなたが——」

「ふむ……まあ、頃合いだろう。彼女の存在もあるし、計画を早めても良いか」

「っ、何を言ってる——」

「とりあえず……」

問い詰めようとする初春だったが、木山が白衣のポケットから取り出した物に硬直する。

それは拳銃だった。

「一緒に来てもらおうか、少しドライブしよう」

手錠を嵌め、拘束した初春を乗せた車を走らせ、木山はある場所へ向かっていった。

その最中に木山は淡々と語る。まるで自分の研究成果を発表するかのよう。

「まず、幻想御手というのは複数の脳波を同一化することで脳のネットワークを構築し、高度な演算を可能にする為のもの。——つまり、能力の向上はただの副産物……同じ脳波のネットワークに取り込まれることで、一時的に能力の幅と演算能力が上がっているだけに過ぎない。ただの一過性のものだ」

一過性。ただの副産物。そう言い切った木山に助手席に座らせられている初春は、目を見開く。

「ふ、ふざけないでください！　じゃあ、なんですか!?　あなたは沢山の人たちをぬか喜びさせる為に、こんな大それたことをしたんですか!?!」

親友の思いを弄び、親友の希望を裏切った彼女に、己の怒りをぶつける。

しかし、木山は全く動じずに、初春の方を向く事すらせずに前を向いて運転を続けている。

「落ち着きたまえ。言ったらう、レベルの向上はただの副産物だと。私の目的はもつと別にある」

「え?」

「他人の能力には興味はない。私の目的はもつと大きなものだ」

そのまま木山は言葉が続ける。あるシミュレーションを行う為に、学園都市が誇る世界最高のスーパーコンピュータ、樹形図ツリーダイアグラムの設計者の使用許可を何度も申請したが、全て却下され、代わりの演算装置として幻想御手を開発したということ。

そして、そのシミュレーションが終われば被害者たちを全員解放するということ。

「信用できません。こんな大事件を引き起こした犯罪者を、そう簡単に信じられると思いますか?」

「思わないな。なら、これを君に預けておこう」

そう言つて木山は白衣のポケットから一枚のメモリーカードを渡す。

「これは?」

「幻想御手をアンインストールする治療用プログラムだ」

「っ!」

「勿論後遺症は残らない。全て元通りになる。誰も犠牲にはならない」

「……何の臨床試験も行われていないものを安全だと言われても、何の説得力も感じません」

「はは、手厳しいな。しかし、情報処理能力に長ける君になら分かるだろう。ウイルスと
いうのは、拡散性と同じくらい、あるいはそれ以上に除去性も良くなければ意味がない。
そうだろうか？」

「……コンピュータ・ウイルスと幻想御手を一緒にしないでください」

未だに信用出来ず疑いの目を向けている初春に苦笑いを浮かべながら木山はカーナビのディスプレイに表示される文字列へ視線を向ける。

「……思ったより早かったな。君との交信が途切れてから動き出したにしては早過ぎる。どうやら別ルートで辿り着いたようだな」

「……………」

「私の研究所にガサ入れが入ったようだ。しかし、所定の手続きを踏まずに機材を起動させると、データが全て消去されるようにプログラムしてある。部屋に残していた書類は共感性性についてのものだけだし……これで幻想御手使用者を起こせる可能性は、君の持つそれだけということだ」

「なッ!？」

あっけからんと放たれた言葉に初春が驚愕を露にする。つまり否が応でも木山が渡したこのメモリカードに縋るしかないということだ。

ここで初めて木山がこちらに目を向けた。その表情は、どこか影がありつつも、優しい慈愛が込められた笑みのようにも見え……。

「大切にしまえ……ん？」

そのまま高速道路を進んでいた木山だが、突如としてブレーキをかけて停車させる。何事かと前方を見てみれば機動隊のような装備の人々がバリケードを築き、一列に立ち塞がって封鎖していた。

「……警備員アンチスキルか。上からの命令があったときだけは動きが早い連中だな」

『木山春生だな。幻想御手散布の被疑者として拘束する。大人しくお縄につくじやん！』

「……どうするんです？ どうやら年貢の納め時のようですよ」

完全武装した警備員の集団。一介の研究者でしかない木山にこの包囲網を突破できるとは思えない。

しかし、木山はどこでも落ち着き払った様子で車から出る。

「そのつもりはないよ。なに、私の脅威は彼らではないよ。私が敵対するのはこの街に潜む闇と——君もよく知っている人物さ」

「? 何のことで——」

その時、木山と警備員の間にかが降り立つ。

「ツ!? 博麗さんっ……!?!」

ふわり、と土埃が舞う。そこに立つのは鮮烈な紅白の巫女——博麗霊夢だった。

木山を除いた一同が、彼女の登場に驚愕する。

「やっと思つけた」

「随分とお早い登場だな。やはり私が犯人であることはとづくに分かつていたか。
グラビティルラー
 無重制御」

こちらのことを一方的によく知っているような木山の口振りに鼻を鳴らしながら、霊夢は大幣を取り出して彼女へと向ける。

初春は戦慄する。木山を睨む霊夢の顔は、今まで見たことのない程に冷徹なものに見えた。

「一応訊くけど投降する気は?」

「愚問だな。目的達成まで後一步なんだ。引き下がれるものか」

らしくなく好戦的な笑みを浮かべ、木山の眼が、獣のように赤く染まる。

「そ。なら、良かったわ。心置きなくぶっ飛ばせる」

同時に、霊夢は地面を蹴って木山へと迫る。

そして次の瞬間。高速道路の一部が丸ごと爆ぜた。

多才能力

——とある高層ビルの屋上。

誰かが柵の上に座りながら、喧騒に包まれる学園都市の街並みを見下ろしていた。

「♪」

足をプラプラとさせ、鼻唄交じりでその者は耳に嵌めたイヤホンから流れる音楽に耳を澄ます。

“Level Upper”

繋がれた音楽プレイヤーの画面にはそう表示されている。自身の脳波が他人のものへ書き換えられる感覚を確かに感じながら、しかし少女は愉しげな笑みを浮かべ——。

「——」
その意識を、手放した。

一方その頃。白井と御坂は病院に居た。

「お姉様！ 警備員が木山春生と初春を捕捉しました！」

つい先程。幻想御手の被害者が脳波を弄られている事が判明し、更にその脳波と一致した人物が木山春生だった。

直ぐ様初春へと連絡したが、音信不通。警備員へ通報し、現在に至る。

「本当ツ!? どこなのツ!？」

鬼気迫る表情で御坂は問う。被害者たちをずっと診察していたカエル顔の医者が語るには、幻想御手の本来の目的は使用者の能力を引き上げるものではない。同じ脳波のネットワークに取り込まれる事で、能力の幅と演算能力を一時的に上げてはいるが、それはあくまで副次的な産物たという。

その本来の目的は未だ見えないが、これだけの被害を出しているのだ。兎に角止める必要がある。

一方、白井は御坂に木山の場所を伝えながらも携帯を耳に当て、誰かに電話を掛けていた。

(~~~~~) あなたはこんな時に一体何をやっているんですのっ!?)

何度電話しても一向に応答しない相手——博麗霊夢に思わず下唇を噛む。

真つ先に木山春生へ疑いの目を向けていたのは彼女だ。否、恐らくあの時点で既に一連の事件の黒幕であると確信していたに違いない。

だからこそ、白井も木山の動向を警戒し、共感性の仕組みに気付いた時、脳波パターンを確認する前から彼女の犯行であると理解するのは容易かった。

大脳生理学というその手の分野のプロが学生二人が行き着いた推理に気付かぬはずがないのだから。

「黒子！ あれ！」

「はい？ 何です——なあっ!？」

すると御坂に肩を揺さぶられる。何事かと指差された方向へ視線を送るとそこにはテレビが設置されており、その画面に流れる映像に目を剥く。

何と、能力を使用して警備員の部隊を壊滅させる木山と、空を舞う紅白の巫女の姿が映されていた。

轟音が鳴り響く。

風が巻き起こり、無数の瓦礫が飛び交い、豪雨のように降り注いで止まない。

「
」
その中に、霊夢は居た。傷一つ無く、面による制圧攻撃を、まるで点による攻撃に過ぎないと言わんばかりに潜り抜けていた。

「そっ」

ヒュン！ と針が瓦礫と瓦礫の隙間を正確無比に通り抜けて木山の脳天へと向かう。

「！」

しかし、木山は弾くように腕を振るい、その軌道を在らぬ方向へと逸らす。

——テレキネシス
念動力だ。

「ふむ、恐ろしいな。私を殺すつもりだったろう、今のは」

「どうかしらね——」

想定内。霊夢は既に瓦礫の渦から脱け出し、間合いへと入っていた。

ぐんつと柄が伸びた大幣が胴へ向けて振るわれる。

(……………！ 先程の針は防がれるのを見越していた、単なる陽動だったか。だが——)

すると木山の身体から電流が迸る。青白い閃光が空気中へと放たれ、大幣とぶつか

り、バチイという弾ける音が響く。

エレクトロマスター
電撃使い。大幣は木山に届くことなく、放電を打ち消すのみに留まった。

これに霊夢は舌打ちしながらも動きを止めることなく、くるりと空中で一回転し、今度は後ろ蹴りを頭目掛けて放つ。

「くっ——」

木山は上腕で受け止め、しかし想像よりも重い一撃に僅かに後退してしまう。その隙を突いて、霊夢は更にもう一発蹴りを繰り出すが——！。

「！」

その前に木山の姿が掻き消える。代わりに、濁流が如き水の塊が襲う。

今度は空間テレポルト転移に水流操作。即座に後退して水滴一つすら当たらずに避ける霊夢だったが、木山の姿を見失ってしまう。

そして、背後から無数の火炎弾が飛んでくる。

「！」

完全なる不意打ち。しかし、霊夢は前を向いたまま難なくこれを避け、振り向き様に針を投げつける。

そこには転移した木山が居た。

「おっと、後ろにでも目が付いてるのかね？ 君は」

ガガガガガツと工具で釘が打ち付けられるような音と共に針は間に挟み込まれた瓦礫の壁へと突き刺さった。

「離れた所からチマチマと……」

僅かに顔をしかめ、心底面倒臭そうに吐き捨てる霊夢。その眼光は冷たく、刃のように鋭かった。

「生憎と運動は得意ではなくてね」

対する木山はそんな凍てついた視線に臆することなくそう言う。

（ふむ、大能力者相当の肉体強化を使用していたのだが……彼女の脚力はそれ以上とい

うことか？ 肉弾戦は避けた方が良いな)

先程蹴りを受け止めた上腕に軋むような痛みが走る。普通に受けていたら骨折は免れなかった。

あの大幣といい、一撃でも浴びれば戦闘不能になると考えた方が良いだろう。

故に、方針は決まる。幸いにも投擲されるあの札と針は能力で充分に防御可能であるし、数には限りがあるはずだ。

「馬鹿な……学生じゃないのに、能力者だと……!?!」

「しかも複数の能力なんて、有り得ないぞ！ どうなつてやがるんだ!?!」

一方、壊滅状態に追い込まれながらもどうにか生き残っていた警備員たちはその光景に目を疑う。

能力開発を受けていないはずの大人が、それも複数の能力を使う。学園都市の常識を覆す事態とその圧倒的な力に多くの者がパニックに陥る。

「あれは博麗じゃん？ 一体何がどうなつて……」

その中の一人、黄泉川愛穂は他の者と比べて幾分か落ち着いていたが、それでも困惑の色を隠せなかった。

何せ自分たちにとって理外の化け物を相手に渡り合っているのは、自分が勤務する高校に通う問題児だったのだから。

「……デュアルなんかね」

「違うな。私のこれは実現不可能とされるそれとは方式が違う。尤も、デュアルスキル多重能力者自体は既に実例が発見されたようだがね」

霊夢の呟きに木山は淡々とそう言い放ち、手を向ける。するとそこから竜巻が発生し、同時に火炎に包まれた。

「言うならば、マルチスキル多才能力だ」

「——どつちも似たような意味でしょ」

エアロハンド空力使いとバイロキネシス発火能力の合わせ技。視界を覆い尽くす巨大な炎の奔流に対し、霊夢は避ける素振りすら見せずに——それを叩き割った。

轟!! と二つに断たれた炎が吹き荒れ、やがて自然消滅する。無造作に振り下ろされた大幣によって引き起こされた科学的には到底有り得ぬ現象。

然れど、木山の表情は変わらない。「原石」というのはかくあるべきものなのだから。

「出鱈目だな、もはや己の強さを隠すつもりはないか。——ならばこれはどうだ?」

パチンと指を鳴らす。決して攻撃の手を緩めることはない。少しでも間隔を空ければ即座に距離を詰めてくることを理解しているが故に。

次の瞬間、霊夢を取り囲むように四方八方に無数の空き缶が出現する。

「——チイツ!!」

それを見て何が起きるか察した霊夢は即座に回避行動を取る。

ゴコツと空き缶は一斉に凹んでいき——爆発した。

虚空爆破事件の再現。それだけでは止まらず、木山は間髪入れずに更に空き缶を幾つも出現させ、連鎖的に爆発を起こしていく。

その規模は木山自身すら巻き込む程であったが、彼女は念動力で近くの瓦礫を操作して自身の目の前に壁を作り、防御しながら高速道路の下へと避難した。

「ふう……やり過ぎたか？ 跡形も無く消し飛んでないと良いのだが」

崩落する道路。爆発が止み、砂塵が煙幕のように周囲を覆い隠す。木山は透視能力クレアポイアンスを使用し、隈無く確認するが、霊夢の姿は見えない。

（どいこ…… — ツ!）

針と札が降り注ぐ。転移することでそれをギリギリ回避した木山はバツと空を見上げる。

「——やってくれたわね」

霊夢が飛んでいた。どうやら爆風に乗って遙か上空へ逃れていたようだ。

相変わらず無傷のまま、汗一つ掻いていない彼女に木山は目を見張る。

「あれすら凌ぐとは……流石は岡崎夢美のお気に入り、という訳か」

常識から逸脱した存在。木山は博麗霊夢という人物のことを知った時からそう認識していた。そして、今の戦いぶりを見たことでその見解が何ら間違っていないかったことを確認する。

(さて、どうしたものか。いつそのこと隙間無く絨毯爆撃を繰り返すしか——ツ!?)

その時、頭上に雷が落ちる。

咄嗟に木山はアスファルトの地面を隆起させて壁を作り、防御を行う。

「ちっ 防がれたッ……」

「……やれやれ。君まで来てしまったか」

視線を向けると、学園都市超能力者第三位——御坂美琴がそこに立っていた。

しかし、木山に動揺は見えない。幻想御手事件に関わっていると知った時点で彼女も仮想敵の一人として考慮していた。

「……何の用?」

一方、霊夢は思わぬ乱入者に対して怪訝な視線を向ける。

「は? 決まってるでしょ。あいつを取っ捕まえに来たのよ。というかあんだ、初春さん見なかった?」

「あー? あの子なら……」

「彼女なら向こうの車の中で眠ってもらっている。戦いに巻き込まれてしまうかもしれ

ないからね」

御坂の疑問に木山がそう答える。

「……本当でしょうね？」

「ああ、勿論だとも。私の目的は彼女らを傷付けることではないからな」

「どの口が……！」

じろりと御坂は木山を睨む。片目を赤く充血させたその風貌は以前会った時とは雰
囲気が全く異なっていた。

未だに信じられない。一介の科学者に過ぎないはずの彼女が能力を使い、これだけの
惨状を作り上げるなんて……。

「本当に、複数の能力を使ってるのね。正真正銘の多重能力者——あれが幻想御手の力
だっというの？」

幻想御手で作った約一万人もの巨大なネットワーク。それを操り、〃一つの巨大な脳
〃とすることで、理論上不可能とされた多重能力者を実現させた……と、数少ない情報
を読み取り、御坂はその考えに至った。

「博麗さん。——あんた、このことに気付いてたわね？ 何で教えてくれなかったの？」

「別に。特に理由は無いわ」

「はあ？ ふざけないでくれる？」

「私は至つて真面目よ。というか、教えたところでどうなるつてのよ」
 「ツ！ あんたねえ……！」

恐らくはあの時。御坂が多重能力者の話題を出した際に霊夢は妙に納得した様子だった。その時点で幻想御手がもたらす副産物マルヂスボル、そして脳波を無理矢理弄くられていることにも気づいたのだろう。

その推理力には脱帽するが、報連相がなつてなさ過ぎる。自分でなくとも固法や白井辺りにそれを伝えていればもつと早く真相に辿り着くことが出来たはずだ。

「——けどまあ、少し樂觀的過ぎたかもね」

「え？」

ぼそりと呟かれた言葉は、御坂の耳には届かなかつた。

「ふむ……君たちの仲が何やら険悪なのは幸運と言えようか。流石に博麗霊夢に加え、超能力者レベル5まで相手にするのは——些か骨が折れる」

木山はそう呟くと共に無造作に腕を振るう。それだけでアスファルトの路面が翻り、砕けた破片が散弾のように降り注ぐ。

「！」

霊夢は空中へと逃れ、御坂は電撃を放ち、それらを相殺する。

「そりゃ随分と見積もりが甘いわね……！」

バチバチと青白い火花が散る。御坂の前髪辺りから迸る高圧電流が槍の如く放たれた。

先程よりも電流も電圧も遥かに上。そう易々と防げるような攻撃ではないが――。

「――無駄だ」

しかし、雷撃の槍は木山に届くことはなく、彼女が展開したバリヤーのような障壁に阻まれ、そのまま離散してしまう。

「なっ」

「複数の能力を駆使して作り出した誘電力場……君の能力については十分に調べ上げ、対策済みだ。一万の頭脳を統べる私に君は勝てないよ」

「……ッ！ 電撃を無効化したくらいで良い気にならないでくれるっ!?!」

得意気に微笑する木山に御坂はこめかみに青筋を立てて、次なる攻撃を仕掛ける。

どうやらあの障壁は電気を分散させる、避雷針のような性質を持つようだ。ならばと御坂は磁力を操ることで周囲の砂鉄を一点に集め、巨大な鉄の塊を形成する。

その一粒一粒がチェーンソーのように小刻みに振動しており、触れたものをズタズタに切り裂く。

「これでもくらいなさい!」

「流石に超能力者の電撃使いともなれば手数豊富だな。尤も――」

サツと木山は手を翳す。

「手数の多さで今の私に優る者など居ないがね」

炎、竜巻、水流、電撃——様々な属性の攻撃が一斉に放たれ、砂鉄と激突し、そのまま押し返した。

「くっ……嘘でしょ……?!」

驚愕する。能力は同時に一種類しか使えない、などとは流石に思っていなかったが、精々二つか三つが限度だと予想していた。

まさかこうも多種多様な能力を一緒に使用出来るとは。しかもそのどれもが大能力者相当の威力があった。

「——惚けている暇はないぞ」

そして、砂鉄が消し飛んだ衝撃に怯んだ御坂の隙を突くように木山の横から巨大な物体が砲弾の如く射出される。

「ッ!?!」

それは警備員が保有する護送車だった。恐らくは道路の崩落に巻き込まれたもの。電磁バリア程度では防げないし、砂鉄で防御するのは間に合わない。直ぐ様電撃で破壊しようとするが、高速で向かってくるそれを対処するには、あまりにも反応が遅過ぎた。

「しまっ——」

轆かれる。そう思い、身構えた次の瞬間。ぐしゃり、と護送車の側面部が凹み、横へ吹っ飛んだ。

「へ……？」

「——何やってんのよ」

何が起きたのか、思わず間拔けな声を出してしまい、ぽかんとする御坂。視線を送ると足を突き出した霊夢がそこに立っていた。

(……ハッ!? まさか蹴ったの!? 車を!?)

啞然とする御坂。対する霊夢はそんな彼女を気だるげに首を回しながら一瞥する。

「大丈夫?」

「っ、余計なお世話よ! あんたに助けられなくなつてあんな攻撃くらい……」

「あつそ。ま、一緒に戦うつてんなら、精々足を引つ張らないことね」

「なつ……それはこつちの台詞よ!」

上から目線な物言いに御坂は声を荒らげて言い返すも霊夢はどこ吹く風。既に視線を外し、木山を見据えていた。

(あからさまにこつちが近付くことを警戒しているわね……教授の名前を口にしていただけど、^{オカルト}「夢想封印」とかは知らないようね)

そもそも木山は科学サイドの人間。ならば非科学^{オカルト}について知らないか、そこまで詳し

くないのは当然か。

遠距離に徹すれば勝てると思つてゐるようだが、それはむしろ靈夢の得意分野。〃
幕〃を張れば制圧することは容易い。

しかし、怒り心頭とはいえこんな公の場でそんなことをすればどうなるか考えられるくらいにはまだ冷静だつた。

それでもそれ以外に手がなければ迷いなく実行するつもりではあつた。

「ちよつと！ 無視すんな！」

「——美琴」

「え？ な、何よ？」

「援護してちようだい。私が突つ込んであいつをぶん殴るから、露払いよろしく」

故に、御坂の乱入してきたことはこれ以上なく都合が良かった。

簡潔にそう告げると、靈夢は返答を待たずして飛び出す。同時に木山がそれを撃墜せんと再度攻撃を仕掛ける。

「ちよ、何勝手に……ああもう……！」

悪態を吐きながら御坂は電撃を放ち、木山の攻撃が靈夢へ届く前に相殺される。非常に癪ではあるが、電撃も砂鉄も通用しない以上、それが最適解なのは彼女も理解してゐた。

「」
瞠目する木山。次なる手を打とうとするも、既に霊夢は目と鼻の先の位置まで迫っていた。

（空間転移で……いや駄目だ、間に合わん！）

あまりにも速い。辛うじてそう判断するや否や木山は回避から防御へと切り換え、瓦礫を操作して盾にしようとするが――。

「何ッ!?!」

防御自体は間に合った。分厚い瓦礫は槍のように突き出された大幣とぶつかる。

しかし、予想外だったのはその勢いが止まることなく、瓦礫を貫通したこと。

大幣はそのまま木山の肩口へ突き刺さった。

「がっ……あ……ッ」

肩口に激痛が走る。出血はしていないが、骨に輝が入ったのは確かだろう。

「ちっ……」

手応えから狙っていた胴体から軌道が逸れたと悟った霊夢は小さく舌打ちし、大幣から手を離すと瓦礫を飛び越えて木山の懐へと入り込む。

「ッ……させるか……!」

「!」

しかし、追撃を加えるよりも先に木山を中心に衝撃波が発生し、周囲一帯を吹っ飛ばす。

当然霊夢も吹き飛ばされたが、即座に体勢を整える。

「ちよ、大丈夫なのツ?!」

「……平気よ」

それを見て心配する御坂の言葉に淡々とそう返しながら霊夢は木山をその凍てつくような視線で見据え続ける。

苦痛に顔を歪め、ゼエゼエと息を切らすその姿にはもう、先程の余裕は存在していなかった。

仕留め損なつたが、かなり追い詰めた。先程のように御坂が攻撃を相殺してくれればたとえ空間転移で逃げ続けようと、いずれ捕捉することが出来る。

「流石に……君たち二人を同時に相手にするのは、無謀が過ぎたようだ。過剰な力を得てしまつて、つい全能感を感じてしまつた」

「そう。降参するなら今の内よ? このままじゃ勢い余つて殺しかねないし」

霊夢が徐に手を伸ばす。すると瓦礫に刺さっていた大幣が抜け、まるで引つ張られるかのように彼女の手心へ戻っていく。

一方、御坂は原理不明なその現象よりも彼女の発言に眉をひそめる。

「ちよつと、今殺すって……」

「あん？ 単なる冗談よ。ま、一生寝たきりにはしちゃうかもしれないけど」

何てことのないかのように、素面でそんなことを言つてのけてしまう霊夢に対し、御坂は言い知れぬ恐怖を感じた。

「恐ろしいな。だが、私がこんなところで立ち止まる訳にはいかないんだ。——たとえば誰が相手であろうと」

どこまでも淡々と、しかしながら決意と覚悟に満ちた声で木山はそう誓言し、手を翳す。

次の瞬間。空中に無数の空き缶が出現し、粉雪のように舞う。

「なつ、あれつて!？」

「またそれ？ ワンパターンね」

「私は初見なんだけど、爆弾つて認識で良いわよね……!？」

量子加速シンクロトによる重力量子爆弾。これだけの量が一齐に爆発すればとんでもない規模になるだろう。

先程それを直に体験した霊夢は厄介だと思いつつも冷静にそれを見据え、御坂は驚きながらもあの事件を思い出すと即座に対応する。

広範囲に電撃を放ち、こちらに被害が及ぶ前に爆発させていく。

「はっ　どんなもんよ……!」

(やはり超能力者は厄介。あちらから潰すのでしょうか)

霊夢は既に迫つて来ている。しかし、木山はそれの対処よりも片割れを排除することを優先した。

この距離からならば、転移も爆発もより精密な操作が可能なのだから。

「!　——美琴!　後ろ!」

これにいち早く気付いた霊夢が足を止め、バツと振り返つて叫ぶ。

「え——?」

本来なら電磁波で探知出来たはず。しかし、彼女は多少喧嘩慣れしている程度で能力を除けばごく普通の中学生の少女に過ぎない。

故に、油断してしまった。自身の背後に出現した空き缶に気付くと同時に、それは爆ぜた。

「……上手く行つたみたいだな」

砂塵が舞う中、地に伏せる御坂を見下ろしながら木山はふうと一息つく。

「君が光の世界を生きる人間で助かったよ。元より殺意があれば……単独でも敵わなかったかもしれない。ところで——」

轟!! と空を薙ぐ音と共に、背後へと回り込んでいた霊夢が大幣を振るう。

しかし、その一撃は木山の身体をすり抜けるように空振りした。

「!」

「君は光と闇、どちら側の人間なのだろうね?」

「……幻術の類いか」

同時に霞のように姿が掻き消える。空間転移ではないその現象に霊夢は怪訝そうに顔をしかめた。

いつの間にか木山は背後に立っていたが、それが本物ではないことは分かっていた。

「ご名答。偏光能力トリックアートに蜃気楼や認識障害も組み合わせている……君の並々外れた直感の鋭さについてはとても有名だが、見破れるものなら見破つてみたまえ」

別々の場所から声が屋外にもかかわらず反響して聴こえてくる。これも何らかの能

力だろうか。

辺りを見回しながら霊夢は様子を伺う。仮に木山の居場所を特定したところで空間転移や他の能力にも対応しなければならぬ。

「ここまで来るといいよもつて『弾幕』による範囲攻撃で辺り一帯を吹き飛ばすしかないが……。」

「次はコソコソと隠れるつもり？ 見た目通り陰気な奴ね」

「酷い言い草だな。より適した戦法を講じているまでさ。しかし……私もあまり時間は無駄にしたくない。どうだ、もう止めにならないか？」

「あん？」

眉をひそめる霊夢。今更退けと？ この女は一体何を言っているのだろうか。

「このまま逃亡すれば君は地獄の果てまで追つてくるだろう。私の目的はこの力をひけらかすことではなく、ある研究がしたいだけだ。事が終われば使用者たちは後遺症一つ残さず無事に解放するつもり……いや、君相手に憶測で物を言っではいけない。解放するとも、必ず」

「……『研究』、ねえ」

「無論、その後なら出頭する。君の怒りや裁きも甘んじて受け入れよう。だから頼む……ほんの少しだけ猶予を与えてくれないか」

こいつもだ。魔術師らしくなかった神裂火織と同じくこの木山という女も靈夢の知る学園都市の科学者共とは何かが違う。

そこにあるのは覚悟か、切実さか、それとも善性か。どちらにせよ、この手段は彼女の望むところではないのであろう。

しかし――。

「くだらない。何でそこまで必死なのか知らないけど、ぶつちやけどうでもいいわ。私はただムカつくからぶつ飛ばす。それだけよ」

弱者たちの夢を軽んじ、踏みにじった。靈夢は彼らの気持ちを理解出来ないし、今後も知ることは出来ないだろう。

だからこそ、これはせめてものケジメだった。

「……後でならいくらでもぶつ飛ばしてくれて構わないのだが、仕方あるまい。――私も全力で応戦するまでだ」

睨み合う両者。舞台は一对一に戻り、仕切り直し。再び熾烈な戦闘が始まろうとし――

「――そこよ、美琴」

「!?!」

ぴしり、と指差す。瞬間、木山は目を見開いて後ろを振り返るが、反応するよりも早

く気絶していたはずの御坂に抱き付かれる。

「やつと、捕まえた……!」

「っ、何……」

「この距離なら防ぐことは出来ないでしょう!? 直接電撃を味わわせてやるわ!」

「馬鹿な、何故私の位置が——」

「残念。私は常に電磁波を張っているから居場所はすぐに分かるのよ!」

してやったりと笑みを浮かべ、得意気にそう言い放つ御坂。この距離ではあのバリアで防ぐことは叶わず、能力を使用して吹き飛ばそうにも木山の持ち得るあらゆる攻撃手段よりも早く電流が彼女の身体を直接伝って放たれるだろう。

これに木山は動揺を隠し切れない。如何にして自らの位置が解ったのか。御坂ではない、己をこの位置まで誘導していたであろう霊夢に対してだ。

幻覚などとうに見破っており、あまつさえ御坂が気絶したフリをしていたことにも気付いていたというのか。

一体、どうやって——?

「勘よ。とても有名らしい、ね」

そんな困惑の表情に対し、霊夢はさも当たり前のように身も蓋もない一言を告げる。

——絶句したまま、木山は青白い閃光に包まれた。

「がっ……!!?」

(獲った……ッ! ——えっ?)

感電し、呻き声をあげる木山を見て御坂が勝利を確信した次の瞬間である。

『せんせー』

『木山せんせー!』

子供の声と姿が、頭の中に流れ込んできた。

(なに、これ……?)

『私が……教師に? 何かの冗談ですか?』

『……厄介なことになった。だが、実験を成功させるまでの辛抱だ』

『よろしくおねがいしまーす!』

『やーい、ひっかかった、ひっかかったー』

『せんせー、モテないだろ。おれが付き合ってやろうかー』

『私でも、頑張れば大能力者とか超能力者になれるのかなあ』

『私たちは学園都市に育ててもらってるから、この街の役に立てるようになりたいな』

『センサーのこと、信じてるもん。怖くないよ』

それは、木山の記憶、思い出。彼女が一人人以上もの学生を巻き込んで今回の事件を引き起こした、動機だった。

『被験体5番、7番、12番、意識レベル低下！ ダメです、これ以上……！』
 『とつとと非常用の薬液を投与しろ！ このままじゃ、被験者たちが……』

『あー、いい、いい。浮足立ってないで、記録を取りなさい。……よくやってくれた、木山君。君にはこれからも期待してるよ』

『実験はつつがなく終了した。君たちは何も見なかった。いいね♪』

老人が悪辣な笑みを浮かべる。己の研究欲を、好奇心を満たす為ならば手段を選ばず、如何なる犠牲を厭わない、人命を何とも思わない狂った科学者が居た。

御坂は知らない、この学園都市では、ありふれた悲劇の一つ。

——スクリーンに映し出されるように流れていた映像が突然暗転する。

『へえ……記憶を覗いちやうなんて。偶然の産物とはいえ超能力つてのも面白いじゃない』

声が出た。妖艶で、然れど澆刺とした少女の澄んだ声。先程のような記憶の再生ではなく、確かにこちらへ語り掛けてくる。

『胸糞悪い話でしょう？ 貪欲であるべき研究者にしては些か真つ当過ぎたわね、モルモットに情を抱くなんて。おまけに足搔いたところすべては掌の上……あまりにも滑稽で可哀想で同情しちゃうわ』

くすりと笑う。妙に芝居がかった、小馬鹿にするような物言いに御坂は眉をひそめ、

また得体の知れなさを感じた。

『——だからこそ、利用させてもらった。興味深い計画だったし、大勢を巻き込むなら、どんな形であれあいつの気を引ける』

ある意味で御坂は幸運であった。意図せぬ形で彼女は気付くことが出来たのだ。

今回の事件の切っ掛けになった街の影に潜む闇、底知れぬ悪意の数々。

『このままもう少しだけお話ししたいところだけど、生憎とまだ仕事中なの。だから、また会いましょう?』

そして——。

『——霊夢によろしくね』

まだ見ぬ脅威の干渉を。

幻想猛獣

「い、今のは……？」

遠い追憶、しかしまるで一瞬のことに現実へ引き戻された御坂は困惑する。

今流れ込んできたのは間違いなく木山の記憶。しかし、だとしたら最後に語り掛けたきた少女の声は何だったのか。

「見られて、しまったか……」

すると木山がこめかみを押さえながらふらふらと身体を起こす。どうやら御坂が己の記憶を垣間見たことに気付いているようだ。

「あの実験の正体は『暴走能力の法則解析用誘爆実験』。能力者のA I M拡散力場を刺激して暴走の条件を探るものだった。……あの子たちを、使い捨てのモルモットにしてね」

「!! 人体、実験……だ、だったら、それこそ警備員に……」

「23回、私があの子達の快復手段を探るため、そして事故の原因を究明するシミュレーションを行う為に樹形図ツリーダイアグラムの設計者の使用を申請して却下された回数だ」

忌々しげに、木山は語る。

「統括理事会が主導していた実験なんだ。上が動く訳がない。その犬である警備員もまた同様に」

「そんな……」

「……何の話をしてんの？」

唐突に進む会話。これに傍らで見ただけの霊夢は首を傾げる。

しかし、攻撃は加えない。木山は既に満身創痍であり、能力を使用する気力はなく、立つことさえ覚束ないまでに疲弊していた。

「だから、幻想御手を開発して演算装置として代用しよう……」

「ああ、そうだ！ あの子たちを救うまで……負ける訳にはいかないんだ！ たとえこの街の全てを敵に回しても！」

「ふうん……それが『ある研究』って奴ね」

大体分かった。口振りから察するに木山の目的は誰かを助けることであり、それを何らかの方法で知った御坂は動揺しているのだろう。

違和感の正体はこれか。至極当然の理由であり、実に簡単な結論であった。木山春生という人間は霊夢の知る学園都市の多くの科学者共と違って善人であり、このような犠牲を強いる手段を取ったのもそうまで追い詰められたが故だったということなのだろ

う。

で、あるとするならば――。

「関係無いわ。後で話は聞いてあげるから、大人しくぶっ飛ばされなさい」

「はっ」

「ツ……だろうな、君はそういう人間だ」

「なっ……！ 待ちなさい――」

霊夢は大幣を振り上げ、有無を言わずに木山へと殴り掛かる。慌てて御坂が止めようとするが、間に合わない。

対してもはや抵抗する力すらない木山は、その迫りくる断罪の一撃に苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

もつと、もつと力があれば――。

「ぐ、……………!?!」

その時だった。突如として木山の後頭部から何か突き破るように生え、大幣を防いだ。

「……………!」

それは半透明の、触手のような物体だった。

あれだけのダメージを受けてまだ能力が使えるのかと霊夢が舌打ちするも、とうの木

山本人も予想外だったらしく驚愕に目を見開いていた。

「これは……!!? まさか、ネットワークが暴走して……虚数学、……いや、ちがつ、なんだ、ナニカが、幻想御手のネットワークに侵入して処理を書き換え——ギツ、がああああああ!!」

脳がパンクするような激痛。木山は頭を抱えて唸り声をあげてそのまま倒れ伏してしまう。

「……あん?」

「ちよつ、大丈夫……っ!?!」

そして、孵化するように、開花するように、ソレが産まれた。

『キイイイヤ、アアアアアアア!!』

咆哮、或いは慟哭の如き産声が響き渡る。

幾本もの触手を生やした、未熟な胎児のような姿をした異形が、木山と同じ真っ赤に染まった双眸でギョロリとこちらを睨む。

「なに、これ……?」

突然現れた、理解し難い存在を眼前に御坂は言葉を失う。

「喧しい」

バシユツ!! ——と、次の瞬間、ソレの頭部が消し飛んだ。

「何なのこいつ？ 妖怪？」

たたりもつけみたいね、などと言いながら霊夢は突然現れた化け物に対して怪訝な表情を浮かべる。宛ら某エイリアンかの如く木山の脳内から突き破ってきたように見えだが、どうやら彼女自体は負傷した様子も無く生きているようだ。

ならばこれも能力か？ 出現方法からして物理的な肉体を持たぬ精神的な存在だと思われるが……これはまるで――。

「は――？」

御坂は呆気に取られる。それを行ったのは十中八九霊夢だろうが、その動きは全く見えず、何の予備動作も確認出来なかった。

「ちよつ、あんた、今何して……」

「話は後にしなさい。まだ終わってないみたいだから」

「え？」

先程の攻撃に関して御坂が問い詰めようとするが、霊夢にそう言われ、異形へと視線を向ける。

すると消し飛んだはずの頭部が逆再生されていくように修復されていていつているではないか。

「なっ――!？」

一体どういうことか。否、分かつてはいる。己がそんな感情を抱くのは、いつもあの記憶に関することなのだから。

——それを自覚した途端、腸が煮え繰り返る。

「……………ツ!!」

違う、違うだろう。私が、私の知るアレは、私の知らないアレは、あんな紛い物などではない。

「何よ今のレーザー!? 威力が桁違い過ぎる……明らかに大能力者とかそういうレベルではないわよっ!」

一方、御坂も自身の超電磁砲レールガンを遥かに上回る規模と威力に驚愕の色を隠せない。

彼女は知らないが、その単純な火力だけならば似た能力者である『第四位』すらも凌駕していた。

そして、咄嗟に回避することが出来たのは単に運が良かっただけ。もし避けていなければ一瞬にして消し炭になっていただろうと考えると背筋がゾツとする。

「——美琴。木山を回収して離れて」

「えっ」

「早くして。このままじゃ巻き添えで死ぬわよ?」

また勝手に命令して……と文句言いたくなるが、間髪入れずに死の可能性を告げら

れ、不服ながらも気絶して倒れている木山の方へと向かう。

しかし、その前に訊くことがある。

「ツ……あんたはどうすんのよー」

「決まってるでしょう。——妖怪退治よ」

そう言うと共に、霊夢は空を舞う。

あんな理外の怪物を前にしても未だに余裕の態度に、御坂は顔をしかめるも一先ず木山を肩で担ぎ上げ、電気で増強した筋力で跳躍してこの場を後にした。

それを確認し、霊夢はこの場に目撃者が居なくなつたと認識する。

——今なら、思う存分に戦える。

「……さて、あいつらを狙わなかつたってことは、闇雲に暴れているだけか、それとも——狙いは私？」

『ギヤアアツツ……』

異形は自身に近付いた御坂を狙いも追いもせず、吐き散らかしていたレーザーを止めると、ただこちらをジツと睨み続けていた。

そこで霊夢は理解する。目の前のアレは理性無き獣ではなく、確かに自我を宿しているのだと。

「どこの誰の思惑か知らないけど、それなら丁度良いわ。人外相手には容赦しないわよ」

スツと札を取り出す。それを攻撃反応と見たのか異形は再生する際に幾本にも増えた触手を振り下ろした。

——夢想封印——

しかし、それよりも先に異形の視界は、極彩色の光に埋め尽くされる。

「とりあえず、ここなら……」

一方その頃。御坂は柱の側に木山を寝かせていた。

離れた所から爆発音が響いてくる。恐らくはあの異形と霊夢が戦っているのだろう。

「う……………ん……………」

「っ！ 目が覚めたみたいね」

「……………」

「あつ、まだ起きない方が——」

すぐに意識を取り戻した木山は御坂の制止の声を無視し、或いはそもそも聴こえていないのか虚ろな目で見晴らしの良い場所へと向かう。

そして、高く昇る土煙の中から、あの胎児のような異形の姿を確かに捉える。

「ククツ、アハハハ……凄いな……凄いな……学会で発表すれば表彰ものだぞ……」

泣くような乾いた笑い声をあげ、木山はその病的に細かい手で目を覆い、柱に力無く身を預ける。

「もはやネットワークは私の手を離れた……いや、奪われたと見るべき、か」

「ツ……あれは何なの？」

そんな木山の両肩を掴み、御坂は問い質す。一刻も早くあの異形の正体を知りたかった。

「……虚数学区を知ってるか？ アレがそうだ」

木山が口に出した単語に、御坂は目を見開く。

「虚数学区？ それって都市伝説じゃなかったの？」

虚数学区・五行機関。学園都市最初の研究機関と言われ、現在の技術でも再現できない数多くの架空技術を有しており、学園都市の運営を陰から掌握しているとも噂される

ものであり、それがあの異形の正体なのだと言われても全く結び付かない。

「実在したんだ。まあ、噂のようなものではなかったがね」

ぼつりぼつりと、木山は説明を続ける。

「虚数学区とは、A I M 拡散力場の集合体だ。アレも恐らく原理は同じ。A I M 拡散力場で形成された怪物——／＼幻想猛獣／＼」とでも呼んでおこうか。幻想御手のネットワー
クによって束ねられた一人のA I M 拡散力場が触媒になって生み出され、そしてそれらを取り込んで成長しようとしているのだろう」

いやはや、あんなものが私の脳内から出てきたとは思えないな、と自嘲気味に笑う木
山に御坂は文句を言いたくなるが、その絶望に染まった表情を見ると何も言えなくなっ
てしまう。

ネットワークが手から離れた。それつまり、もう子供たちを救う為にアレを使うこと
が出来ないということ。

その絶望は、計り知れない。

「そんなの……どうやって止めれば良いのよ？」

「さて、ね……ネットワークの大元を叩けばもしかしたら……あの花飾りの少女に幻想
御手のアンインストールプログラムを託してある。それを使ってみたまえ」

「初春さんに？ 分かったわ。——けど、やけに協力的ね？」

「信用できないか？　ま、当然だろうな。正直あの子たちを助けられないのなら、このまま幻想猛獣が学園都市を破壊し尽くしてしまっても構わないとすら思っている。……が、君たち^{こども}がまだ戦っているんだ。なら、誠意を見せておかないと、あの世でも顔向け出来ない」

尤も、己が往くのは地獄だろうが。木山はもはや完全に諦めてしまっていた。

「……そう」

「さあ、行きたまえよ。こんな魂の抜けた哀れな女に構ってないで」

「……………」

正直、このまま木山を野放しにしておくのはどうかと思っただが、言葉通りこの様子じゃあ逃げる気力すらも失せているだろう。

故に、御坂は彼女に背を向け、ちらりと一瞥するとすぐに高速道路の上に居る初春の元へと向かう。

「ハア……ツイてないな、本当に」

一人残された木山は天を仰ぎながら溜め息を吐く。脳裏に過るのは、幻想猛獣が出現する寸前、ネットワークを乱し、奪い取った声。

「アレに入り込んできたのは、私の常識では計れない存在だ。既に幻想猛獣は単なるA I M拡散力場の集合体では無くなっているかもしれない。——それこそ、正しく幻想の

獣のように」

故にこそ、木山は案じる。

自分よりもずつと、過酷な運命に縛られた、あの少女のことを――。

『キイイイヤ、アアアアアアア!!』
「……しぶといわね」

特大の質量が押し潰し、細胞一つ一つを残さず破壊し尽くす。それ程の攻撃をくらいながら、異形――AIMバースト幻想猛獣は活動を続けていた。

縦横無尽に襲い来る触手を空中で避けながら霊夢はどうしたものかと思考を巡らせる。

このままではジリ貧だ。跡形も無く消し飛ばしても再生速度が遅くなるだけで疲弊した様子は無く、それどころか、再生する度に肥大化し、もはやあの胎児のような面影など残っていない、醜悪な肉塊と化していた。

「こんなキモい妖怪、確か中国辺りに居たわよね？ 何て名前だったかしら？」
『ギヤアアツツ……』

——封魔陣——

展開された無数の針と札が迫り来る触手を消し飛ばしながらその肉体を瞬く間に穴だらけにする。

しかし、幻想猛獣は動きを止めることは無い。

「これも駄目か。夢想封印を耐えてる時点で当然つちや当然だけど……ああ、面倒臭い」
手元に戻った針を再度投擲しながら霊夢は悪態を吐く。彼女の使う針は一定の距離まで飛ぶと自動的に戻ってくる仕掛けが施されているが、破壊されれば意味無いし、使う度に傷み、劣化もする。

つまりは有限。装備が尽きるのも、時間の問題だった。

しかし、そこに焦りは無い。それが敗北を意味するとは微塵も考えていないが故に。

『キイイヤ、アアアアアアア!!』

そうこうしている内に幻想猛獣も痺れを切らした。雄叫びをあげると周囲の瓦礫や

岩石が竜巻が起こつたように渦を描いて浮き上がり、勢いよく射出される。

「ツ！ やっぱり使えるのね、それ……！」

多才能力マルチスキルはそのまま保持しているようだ。逃げ場無く四方八方を囲むように放たれる岩石群を、しかし霊夢は僅かな隙間を潜り抜けて凌ぐ。

掠るだけでも致命傷は免れない。そんな状況の中でも霊夢は冷静に攻撃を避ける。範囲も速度も木山の時よりも上で殺意に満ちているが、これくらい何ら問題無かつた。

『ギエツエアアツア!!』

ならばと幻想猛獣は攻撃方法を追加する。

「寒っ!? 何? 今度は氷——?」

放たれたのは極低温の冷氣。空気中の水分を瞬間的に凍らせながら迫るそれを霊夢はギリギリで避けるも、ほんのりと肌に伝わる寒さにぶるりと身体を震わせる。

幻想猛獣の猛攻は止まらない。直ぐ様大顎を開き、その中で光が収束する。

「させないわよ」

先程と同じく長大なレーザー光線。しかし、それが発射される前に幻想猛獣は地に伏せる。

『ギイヤエツ?!』

幾重もの札が荒縄のように肉体に纏わり付き、縛り上げる。幻想猛獣は必死に抵抗す

るが、その度に札の強制力は増し、身動きが取れない。

「それといい、あの氷といい私への当て付け？　だとしたら……気に食わないわね」

同時に、それはまた希望でもある。この妖怪擬きを差し向けてきた何者かは、自身の記憶に関して何か知っているのかもしれないのだから。

しかし、期待はしない。その方が裏切られた時のダメージが少ない。

「いくら再生しようと、動けないんならどうしようもないでしょ？　それともどこぞの蓬莱人みたいに死んでやり直ししたりするのかしら？」

そう言つて悠然と見下ろす霊夢の姿を、幻想猛獣は恨めしげに見上げ、睨む。

（このまま封印しちゃう？　いや、でも——）

嫌な予感がする。彼女がその気になれば幻想猛獣の再生力を無視し、問答無用で「封印」してしまうことが出来た。

その方法が最適解であると理解した瞬間、霊夢は即座に実行しようとした。だが、その寸前で彼女の第六感が待ったをかけたのだ。

取り返しの付かないことになってしまふ。そう何度も警告してくるため霊夢は攻めあぐね、次なる策を一考する。

「——博麗さん！」

その時、自身を呼ぶ叫び声が聴こえる。声が出た方角へ視線を向けると御坂の姿が

あった。

「あー？ 戻ってきたの？」

「あの札……については後で聞いわ。それよりもアイツを止める方法が分かったの！」
縛り上げられている幻想猛獣を傍目に御坂は霊夢へ状況を説明する。

先程の木山とのやり取り。そして、初春が彼女に託された幻想御手をアンインストールするソフトを流しに向かっているということ。

「信用できるの？ それ」

「それは……多分、信じて大丈夫。あの人はやり方を間違えただけで悪人じゃないと思っから……」

「ふうん……随分と曖昧ねえ」

はつきり言つて疑わしい。しかし、どのみち他にやり様がある訳ではないし、試してみる価値はあるだろう。

「要するに、そのあんいんすとーる？ なんとらつてのを使うまで時間稼ぎすれば良いのね？」

「ええ、そう——」

『キイイイヤ、アアアアアアアア!!』

その時だった。

幻想猛獣が更に肥大化しながら暴れ狂い、拘束を無理矢理打ち破る。

「なっ!？」

「あ、やば……」

しまった、と思つた次の瞬間には幻想猛獣は発射寸前だつたレーザーを吐き散らかすように四方八方へと放つ。

「チイッ……!」

少しばかり甘く見ていた。霊夢は即座に上空へ逃れるも、御坂は反応が遅れ、気付いた時にはレーザーが間近に迫つていた。

「ツツ——舐めん、なあっ!!」

バチイ! と電流が迸る。身体から放出された極大の稲妻が衝突すると共に、レーザーは軌道を湾曲させ、あらぬ方向へ飛んで行く。

「ハア……ハア……どんなもんよ……!」

「へえ……やるじゃない」

どうにかして五体満足で凌いだ。御坂は息を切らしながらも胸を張つて笑う。

霊夢も見事レーザーを防ぎ切つてみせた彼女には感心した様子だつた。

「お返しよー!」

そして、超音速で射出されたゲームセンターのコインが幻想猛獣の眉間を穿つ。

『ギイイイイツ……』

「ツ……あんまり効いてるようには見えないわね……」

やはりと言うべきか、超電磁砲レールガンも効果が薄い。みるみる内に再生していく幻想猛獣を見据えながら御坂は顔をしかめる。

しかし、あと少しの辛抱だ。自分たちはここで時間稼ぎをすればいい。

『……キイイイヤ、アアアアアアアア!!』

「——え?」

すると突如として、幻想猛獣がずっとこちらを睨み続けていた真つ赤な双眸を別方向へと向ける。

何事かと思つたのも束の間、幻想猛獣は霊夢と御坂を無視し、その巨体を引き摺るようになして動き出す。

「あん? 急にどうしたのよ……?」

「! まずいわ! あっちには原子力実験炉があるつて警備員の人が言つてた!」

「……はっ!」

ハツと思ひ出したように叫ぶ御坂。一瞬、霊夢は呆氣に取られるもすぐに事の重大さに気付く。

そこまで詳しくはないが、原子力とは便利ではあるが非常にデリケートで危険性の高

い代物だと聞いている。

それが、もしも幻想猛獣の攻撃に巻き込まれてしまえば寛大な被害を及ぼすだろう。

まさか己を強化する為に原子力のエネルギーを取り込むのだろうか。或いは……分が悪いと判断し、発電所を人質ないし道連れにしようとしている——？

御坂はあの怪物にそんな知能があるとは思えなかったが、一連の行動からあれが確かな理性と悪意を孕んでいることを知っている。霊夢は何の疑いも無く、後者であると確信した。

「あんの妖怪擬き……!」

即座に霊夢は後を追う。肥大化したこともあつてか幻想猛獣の移動速度は自動車よりも少し遅い程度であり、追い付くのは容易かった。

そのまま追い抜いて正面へと回り込み、天へと掲げた大幣を振り下ろす。

『ギエツエアアツア!!』

構わず幻想猛獣は突撃しようとするが、自身を取り囲むように出現した見えない壁に激突し、その動きを止める。

「いい加減、観念したら？」

無駄だと思いつつも霊夢は問う。対する幻想猛獣は尚も抵抗し、氷や炎といった様々な能力による攻撃で自身を阻む結界を打ち破ろうとするもびくともしない。

それはあまりにも突然だった。幻想猛獣の周囲に幾つもの魔法陣が展開され、そこから無数のカラフルなレーザーが放たれる。

「嘘っ——!?!」

攻撃を受けながら、それも口以外からもレーザーを撃てると思っていなかった御坂は目を見開く。

ドゴオオン!!

レーザーはすべて着弾し、爆発が起きる。しかし、そこに御坂は居なかった。

「——大丈夫?」

「へ? ……なっ」

ぶわりと強風を感じる。一体何が起きたのかと視線を向ければ目と鼻の先に霊夢が居た。

というか、彼女に抱えられていた。所謂お姫様抱っこという形で。

「くくく! ちよっ、早く下ろしなさい……!」

「そんな暇無いわよ」

大量に放たれるレーザー。そのすべてを避けながら霊夢は眉をひそめる。

力を隠しているようには見えなかった。まさか戦闘途中で順応、または成長したとでも言うのか。

(本っ当に、面倒臭いわね……)

このまままた強くなられては堪ったものではない。原子力実験炉もあるし、これ以上の時間稼ぎは厳しいだろう。

本格的に霊夢が封印を視野に入れた次の瞬間——突如として幻想猛獣が苦しみ始めた。

「あ?」

「これって……!」

試しに霊夢が針を投げて身体に穴を空ける。すると先程まで瞬時に治っていたその回復速度が、明らかに低下していた。

「——どうやら間に合った、みたいね」

初春が幻想御手のアンインストールプログラムとやらを無事に打ち込めた、ということだろう。

もはや幻想猛獣は脅威ではない。霊夢は安堵した様子で溜め息を吐き、針の雨を降り注がせる。

『ギエツエアアツア?!』

「年貢の納め時みたいね。このまま……あん?」

すると先程まで獣のような雄叫びをあげていた幻想猛獣から、呻きのようなものが聴

ハ(え)てくる。

『n t s k 欲 g d t』

『d 羨 k n 苦 j p j』

『w d 遭 d n h だけ b p』

ノイズのようなそれは、徐々に言葉として、しつかりとした形を成して霊夢の耳へと届く。

『努力は積み重ねてきた……けど、幾千幾万の努力が、たった一つの能力に打ち砕かれる！……これがこの街の現実だッ……!!』

『どれだけ慕ってくれても……自分が相手の能力を超えたら、もう用無し。もう格下』
『……この街では、人の優劣がはつきりと数値化して現れる。上に上がったら、下には用無し。もう、おしまい』

『本物の超能力。それは馬鹿馬鹿しいまでに無茶苦茶で、悪い冗談としか思えない出鱈目な力。そこに行くには突破の足掛かりすら掴めない高くて厚い壁がある』

『それを目撃した、あの瞬間。それを実感した、あの日から。上を見上げず、前を見据えず、下を見続けた。……それしか、出来なかったッ』

それは、ネットワークから漏れ出した思念。被害者たちの嘆き、慟哭、この学園都市の現実打ちのめされ、虐げられ、幻想御手に手を出した者たちの怨嗟の声——。

「……………」

能力への羨望、僻み。そんなモノはこの学園都市まに来てから飽きる程聞いてきた。

しかし、何故だろうか。今まで何も感じず、くだらないと、どうでもいいと、断じていたその言葉が、まるで初めて聞くように心に響く。

脳裏に過るのは、佐天涙子の顔だった。

『居場所が、欲しかった』

同じ、結局のところ同じなのだ。動機も思想も過程すらも違えど、彼らが求めるモノは全く以て変わらない。

「……………辛いでしょうね」

どこか寂しげに笑う。欲しいものが手に入らないという意味では霊夢もまたそうであり、彼女は初めて弱者に共感した。

「けれど、私は私。その想いを他人に委ねるなんてしてはいけない。だから……………あなたたちも帰りなさい、元の場所へ」

——夢想封印 瞬——

弾幕が炸裂する。幻想猛獣は、今度こそ跡形も無く消し飛んだ。

同時に、一人の少女が病室で目を覚ます。

涙子

「……疲れた」

病室のベッドの上で窓から見える街並みを眺めながら少女——佐天涙子は溜め息を吐く。

意識を取り戻した彼女は、すぐに他の幻想御手使用者たちと共に、軽い事情聴取を受けることになる。

その後、異常の有無を確認する為に目覚めて間もない頭がボーツとした状態で流れるように色々な検査をして、つい先程晴れて自由の身となった。

結果は特に後遺症も無く、健康体。しかし、経過観察も兼ねてしばらくは入院しておかないといけないらしい。

「……………」

ちらり、と佐天は自身の両手を見る。

力を込めてみるが、ウンともスンともいわない。小さなつむじ風すら巻き起こらない。木の葉一つ、躍らせることも叶わない。

ただの無能力者レベロの手が、そこにはあつた。

(戻つちやつた、なあ……)

あの時、あの瞬間、本当に小さな風を起こせた。白井や御坂には遠く及ばない代物であつたが、それでも佐天にとっては望んで止まなかつた、念願だつた。

たとえ一時的で、後悔に塗れようと、その喜びは今もまだ残っている。

「……やつぱり名残り惜しい?」

「え?」

その時、声をかけられる。てつきり病室には誰も居ないと思つていた佐天はビクツと身体を震わせ、声がした方角へ顔を向けた。

ゆっくりと開かれた扉の先には、紅白の巫女が立っている。

「——霊夢さん」

「久しぶりね、涙子」

驚く佐天に対し、彼女——博麗霊夢はいつもと変わらぬ調子で、そう言う。

「久しぶり……なんですかね。ついさつき目覚めたばかりなのでちよつと時間感覚が可笑しくて……はは」

佐天からすれば意識を失う直前まで電話でやり取りしていた相手。まさか目覚めたその日に彼女がやって来るとは思つておらず、まだ心の準備が出来ていなかった。

一体どういう顔をすれば良いが分からず、ぎこちのない笑顔を浮かべてしまう。

「……調子はどう？ もう大丈夫なの？」

そんな佐天の傍へ寄り、霊夢は問いかける。

「えつと……特に異常は無いみたいです。退院するのはまだ先になりそうですけど……」

「そう。……良かったわ」

医者に告げられた診断結果を伝えると、霊夢はその身を屈め、そつと手に触れる。

「霊夢さん？」

「本当に、良かった……二度と起きないんじゃないかって、思ってたから……」

心の底から吐き出された安堵の言葉。それは佐天にとってはあまりにも意外で、普段の霊夢からは想像もつかない姿を前に、茫然とする。

そして、自分が思っていたよりもずっと、心配をかけさせてしまっていたのだと悟った。

「ツ……その、ごめんさい、私……」

声が震える。目頭が熱くなり、自然と零れる涙で視界がぼやけてはつきりとその顔を見ることが出来ない。

改めて自分のやってしまったことへの申し訳無さで胸が一杯になる。

「大丈夫。言ったでしょう、あなたは悪くないって……悪いのは、あなたにそうさせた全
てよ」

はつきりと霊夢は告げる。

悪くない、はずがない。自分は幻想御手の危険性を察しながら、欲望に負けて使
用し、あまつさえ友人にも使わせてしまったのだから。

「だから、泣かないで。今は戻って来れたことを喜びなさい」

「あ……」

けれど、それを否定し、受け入れてくれる霊夢の言葉は、ただひたすらに心地好かつ
た。

「——はい。私も良かったです。もう一度霊夢さんに会えて」

ぎゅつと手を握り返す。一方通行な友情だと思っていた。けれど、どうやら違ったら
しい。

互いに気付けた。故に、彼女らが本当の意味で友達になるのは、これからだろう。

「それじゃあ……事件は解決したんですね」

霊夢から事の全容を聞いた。

幻想御手をばら撒いた犯人はあのファミレスで会った脱ぎ女——木山春生だったのだという。

その木山が複数の能力を使い、警備員の部隊を壊滅させたり、霊夢と御坂が共闘したり、能力の暴走で巨大な化け物が生まれたり、最後には何と初春が活躍したりと、自身が眠っている間に随分と壮大なことが起きていたのだと佐天は驚きを隠せない。

(やっぱり凄いなあ……霊夢さんは……)

あの時、佐天は藁にも縋る思いで電話をかけ、助けを求めた。

そして、本当に救ってくれた。改めて彼女は“ヒーロー”なのだと思嘆する。

「ところで初春たちはどうしたんです？　一緒に来てないみたいですけど……」

ふと尋ねる。実のところ最初に見舞いに来てくれるのは初春かと思っていた。

「ああ、なんか事後処理とかで忙しいみたいよ。落ち着いたら見舞いに来るでしょうから安心なさい」

「あー、そうなんです。……あれ？　じゃあ、霊夢さんは？」

もしかして今回の騒動で愛想を尽かされたのでは？　と危惧するも霊夢の返答で杞憂であったとホッと胸を撫で下ろす。

しかし、同時に同じ風紀委員である霊夢は何故見舞いに来ているのかと疑問に思う。

「面倒だからバックレたわ」

「ええ……」

あつけらかなとした返答に苦笑いを浮かべる佐天を他所に、霊夢は事件が解決し、親友の意識が回復したのを知り、泣いて喜ぶ初春の姿を思い出す。

真つ先に会いに行きたかったのは彼女だろうに。そう考えると少しだけ罪悪感が湧く。

「……さつき、名残り惜しいって訊いてきましたよね」

「? ……ええ、そうだけど」

先程の光景を見て、何となしに思ったことを問うた。やはりまだ彼女には能力に対する未練が残っているのではないかと。

たとえそうであつても、霊夢は否定せず、むしろ至極当たり前のことであると肯定するだろう。

「正直言うと、その通りです。あんな目に遭つてもやつぱり能力が使えた時の感動が忘れられなくて……ワンチャン少しだけ残つてるかなー、つて期待しちゃつてました」

そう言つて寂しげに佐天は笑う。

「でも……良いんです。霊夢さんが言つてたように、人生を棒に振つてまで手に入れたものじゃありませんし……」

「……………」

だからこそ、その言葉に、心底意外そうな顔をする霊夢。力無き者の渴望や羨望は見慣れていた。この街に来てからも、恐らくそのずっと前から。

こつとも簡単に諦めが付くものではない、そう思つていたというのに、何故――。

「ほんの一時だけでも能力が使えただけラッキーだった、つて思うことにします。……まあ、憧れはそう簡単には消せそうにないですけど」

結局のところ能力は消え、自分はスプーン曲げ一つ出来やしない無能力者のままだが、それでもあの経験の中で何かが、変わったような気がした。

たとえそれが現実から目を叛けているに過ぎないとしても、今の佐天は晴れやかな気分だった。

「……そうね。いつまでも悲観し続けるばかりじゃあ、仕方ないものね」

黙って耳を傾けていた霊夢は、呟くように発する。その言葉は、果たして誰に向けた言葉だろうか。

「ねえ、涙子」

「……何ですか?」

「私にはレベル0の気持ちも、超能力への憧れつてのも分からない。だけど、望んだモノに手が届かない気持ちは……私にも分かると思う」

ぼつりと溢すように、そう語る霊夢。その眼は、窓の外の景色ではなくどこか遠くを視ているように、佐天には見えた。

懐かしむような、焦がれるような表情。そこに、いつもの超然とした雰囲気は無く、儚げで、ふとした拍子に消え去ってしまいそうな程に――。

「それは諦め切れないし、捨てられない。だって……挫折したら呪いになっちゃうもの。手に入らなければ一生、呪われたまま」

——呪い。

そう形容した霊夢の言葉は、佐天にとって思わぬものだった。

何故なら博麗霊夢という人間のことを誰よりも完璧であり、無欠で、そういう挫折とは無縁の超人的なイメージを抱いていたのだから。

しかし、彼女にもあるというのだ。どうしようもなく、堪らなく、欲しくして、手に入れようとして、それでも得られなかったモノが——。

「だからね、涙子……月並みの言葉になっちゃうけど、前を向いて生きなさい。あなたには能力以外にも大切なものが沢山あると思うから」

「前を、向いて……」

霊夢の精一杯の励ましの言葉を受け、脳裏に過つたのは両親と弟、そして初春やアケミたちの姿。

そうだ。彼女の言う通り、ずっと大切な、かけがえのないものだった。

やっと、気付くことが出来た。

「能力が無くて、みんなが居る」

なら、うじうじするのはもうやめよう。

憧れを捨て去ることは出来ない。しかし、だからといって能力だけのレベルだの固執して、振り回されることなんてないのだ。

前を向く。真っ直ぐ前だけを見て、後ろ向きな気持ちなんて吹っ飛ばしてやる。
——少しだけ、肩の荷が下りた気がした。

(前を向いて生きなさい、か……)

一体どの口が言うのか。幾つかの語らいをした後、佐天の病室から出て、廊下を歩いていた霊夢は自嘲気味に笑う。

(私はずっと昔から呪われたまま。前を向いたことなんて、一度もなかった)

とうの昔に諦めた。何もかもが色褪せて見える、この夢も希望も無き世界に生まれ落ちた運命を呪い、ただ憂い、縋るものもなく、惰性のまま生きていた。

だからこそ、佐天の姿は眩しかった。望んだモノに手が届かずとも、彼女が他にかげがえのないものがいくらでもあり、それに気付けば身を引くことが出来る彼女のことを心底羨む。

霊夢は違う。前を向けず、後ろすら向けていない。こんなにも諦観し切ってしまったているというのに、あの光景が、あの思い出が忘れられず、渴望して止まない。

その心は、幻想に囚われている。

「……度し難いわね、本当に」

「そうですわね」

「あん？」

横から甲高い声がする。振り向くとそこには……怒髪天を衝く勢いの般ツインテール若ガが居た。

「確かに度し難き存在ですの。私たちが事後処理やら警備員の事情聴取やらで右へ左へと駆けずり回ってる中、よりにちよつて渦中の人間が職務を放棄し、あまつさえ抜け駆けして佐天さんのお見舞いをしている輩なんて……」

「あー……えつと、お疲れさん？」

「しばき倒しますわよッ!？」

こめかみに青筋を立て、怒鳴り付ける白井。これに対し、霊夢は存外来るのが早かったと溜め息を吐く。

「ごめんごめん。でも別に私が居なくても問題無いでしょ？ 木山の身柄も引き渡したし」

「ただ面倒臭かっただけでしよう。それに、あなたには幻想猛獣を倒した方法とか、色々AIMバーストと訊きたいことは山程あるのですが……」

「ああ、その件に関しては黙秘するわよ。美琴にも口止めしてあるし」

結局、夢想封印で幻想猛獣を消し飛ばす所を御坂に見られてしまったが、内緒にしてくれと頼むと意外にも素直に同意してくれた。

白井の様子からしても本当に喋ってはいないようで内心安堵する。もしかた学園都市の間、それも超能力者にバレてしまったとなれば教授に何て言われるか分かったものではない。

一方、白井は聴取を拒否し、黙秘権を行使する霊夢に顔をしかめながらもそれよりも聞き捨てならない発言に注意が向く。

「み、みこっ……!!? あなた、お姉様といつからそんな親密な仲になったんですのツ!?!」
「はあ? 別にそこまで親しくはないけど……というか病院では静かにしなさいよ」

霊夢は首を傾げる。何故そのような思考回路に至ったのか。

「で、あなたが来たってことは、仕事は大体終わったって認識でいい？」

「え？ コ、コホン……ええ。とりあえず一段落しました。残りはあなたへの聴取だけです、本当に黙秘するおつもりで？ 監視カメラの映像などを調べれば一発で解ると思うのですが」

「生憎とこつちにも事情があんのよ。調べたければ、勝手に調べてくれて構わないけど」
「ぐう……」

元より霊夢が只者ではないことは明らかであり、その背景には色々な事情があるであろうことは白井も予想していたが、それでも納得が行くかと言われれば違う。

こころも頑なに隠したがるといふことは何か都合の悪い理由があるということ。白井としては彼女にそのような黒い経歴があつてほしくなく、あるべきではない。

「あなたはいつもそうやって勝手に勝手に……木山の件もあの時点では証拠が無かったとはいえ相談くらいは出来たはず。報連相という言葉を生きておられないのですか」

「失礼ね、それくらい知っているわよ。バター焼きにすると美味しいわよね」

「あ、あ、!? ——スウ……、ふざけるのも大概にしやがれ、ですの。野菜の方ではなく、報告、連絡、相談。一般常識でしてよ」

一瞬淑女らしからぬ声で怒鳴りかけるが、何とか踏み止まる。ここが病院ではなく屋外や支部ならば音波兵器と化していたことだろう。

その後もクドクドと続く説教を右から左へ聞き流しながらどうしたものかと霊夢は肩を竦める。

何せ怒っている内容は至極真つ当なため反論も出来ない。あの時は必要性を感じなかったが、木山への疑いを誰にも伝えずに敢えて泳がせたことで被害を拡大させ、佐天を危険な目に遭わせたという自覚はあるのだから。

要するに、霊夢は割かし反省しているのだ。

「まったく、少しは私たちを——」

「ああ、そういうえば、木山のことなんだけど」

「……はい?」

「目を光らせておいた方が良いわよ。あいつ自身にも、その周りにも」

思い出したように、霊夢は言う。その脳裏には、警備員に連行される間際に木山が残した言葉が過っていた。

『この場は収めよう。だが、私は諦めるつもりはない。もう一度……何度でも、やり直す。刑務所の中だろうと、世界の果てだろうと、私の頭脳は常に、私だけのものだ』

霊夢と御坂の姿を真つ直ぐ見据えながら言い放ったそれは、少なくとも負け惜しみなどではなく、己の決意と覚悟を表明しているようだった。

「どういうことですか? まさか、事件はまだ終わっていないとでも——」

「そうねえ……終わってるっちゃ終わってるけど……まあ、終わってないとも言えるわね」

ハア？ と訝しげな視線を向ける白井を他所に街の景観を見下ろしながら霊夢は思考を巡らせる。

内容は勿論、木山春生が一連の事件を起こしてまで救おうとしている子供たちについてだ。

（暗闇の四月……いや八月だっけ？ そんな名前のが昔あったわね。あれみたいなものだとして、胸糞悪い話だわ）

詳細は御坂から聞いた。チャイルドエラー置き去りを使った人体実験の被害者……おぞましいことに、この学園都市の裏では日常のように行われている。能力開発自体が、そうであるのだから。

霊夢からすれば関わりたくもない案件。けれど、知ってしまったからには見過ごす訳にも行かない。

加えて、気掛かりなこともある。あの時、幻想猛獣は明確な自我を持ち、こちらを狙ってきた。レーザーや冷氣といった攻撃の数々は、その背後で操る存在が霊夢の事情を知っているとは思えず、興味を示すのは自然なことだった。

過度な期待はしないが、それでも調べてみる価値はありそうだ。

「……また、私たちに教えられないような、良からぬ事件に首を突っ込んでいるんですの？」

一方、白井は眉をひそめて問う。要領を得ない、はぐらかすような物言いをする霊夢の態度は過去に何度か見たことがあるものだった。

こんな時の彼女は、いくら問い詰めようと自分が何に関わっているのか教えようとはしない。

「……さて、ね。直に分かるんじゃない、多分」

「聞き直らないでください。あなたは秘密が多いくせに隠し事が下手過ぎますの」

「そう言われてもねえ……」

ほら、この通り。指摘すればつが悪そうに視線を逸らして頬を掻くその姿に白井は呆れる。

霊夢は嘘を吐くのが致命的に苦手だった。かといって正直者という訳ではないが、感情がすぐ顔に出てしまうし、演じようにもそれを隠すことへの面倒臭さが優ってしまうのだ。

そんな霊夢の性質を白井も理解していた。伊達にかつて共に風紀委員として活動していた訳ではない。

（ふうん……美琴から聞いていないのね）

一方、靈夢はその様子を見て意外に思う。木山の本当の動機について御坂は彼女へ喋っていないようだ。

当然と言えば当然である。学園都市上層部が関わっているかもしれない人体実験……御坂も流石に無闇やたらと話すべきではないと判断したのだろう。

況してや木山は警備員を学園都市の犬と罵り、信用していなかった。ならば風紀委員も同じ穴の貉と言え、最悪揉み消されてしまう可能性だつてある。

それに仮に真実を知ったところで風紀委員が手に負えるような領分ではなく、不用意に巻き込むべきではないだろう。

何せこの街の悪意は底知れない。そう考えると懸命な判断であり、御坂が想像よりもずっと慎重であつたことに靈夢は内心安堵する。

「悪いけど……今の時点じゃあ私から言えることは何も無いのよ」

実のところ白井になれば木山の目的くらいなら教えても良いと思つていたが、姉妹（勘違い）である御坂が彼女の身の安全の為に口を噤むのであればその判断に委ねよう。

無知とは罪と言うが、同時にとても幸福なことでもあるのだから。

「くっ……分かり、ました」

その言葉とは裏腹に、苦虫を噛み潰したような顔で拳を握り締める。

暗に関わるなど、そう告げられた。到底納得出来なかつたが、このままいくら食い下

がったところで望んだ回答が返ってくるはずもない。

「で・す・が！　今までサボってた分の仕事はしてもらいますからね！」

「うへえ、どうせ始末書とかでしょ？　めんどいからパスで」

「お黙り！　フッフッフ！　あなたもあの始末書地獄を味わうべきですよ！」

「おたくも書いてんの……」

溜め息を吐くも、一先ず話題が変わったので良しとする。

文句を垂れつつ霊夢としても今回の事件はさっさと畳んでしまいたかった。残った子供たちを救う云々はやるべきことではあるが、現時点では後回しだった。

理由は至極単純——何事においても優先事項というものがあるのだ。ただでさえ過密スケジュールだというのに、これ以上厄介事を増やしたくはない。

(インデックスの所へ行かないとね)

あの修道女に掛けられた呪いを解く。霊夢は今最も優先すべき案件へと狙いを定める。

——某所。幻想猛獣が討伐され、木山春生が連行されたしばらく経った頃。

「あらら、終わっちゃった」

パチリと目を開け、先程まで意識を失っていた少女は身体を起こし、残念そうに呟く。「あのまま行けばもつと色んなのを再現出来たんだが……流石に野放しにはしてくれないわよね」

幻想御手を使用し、そのネットワークへ侵入して乗っ取っていた人物。どこからか木の計画の情報を仕入れ、それを利用し、データを抜き取ったのは意外にも全くの部外者だった。

「ま、良いわ。然して面白い結果にもならなかったと思うし、あいつが予想よりもずっと強かったと分かっただけでも成果はあった。文句は言われないでしょう」

それに……、と少女は目的の人物——博麗靈夢と共に戦っていた電撃使いの少女を思い出し、愉しげに笑う。

彼女の何が入ったのか。それは少女にしか分からないが、少なくとも今まで接触してきた科学側の人間の中では最も興味を引いたのは間違いない。

「うふふ。なあんだ、靈夢以外にも面白そうな奴がいっぱい居るじゃない、この街は」

しかし、今はまだ僅かに干渉することしか出来ない。一暴れするのは、まだまだ先。それまで待たされるのは非常に退屈だと思っていたが——。

「——精々楽しませてもらうぜ」

その笑みは、先程と打って変わって獰猛なものであった。

「おっと——、うふふ、私ったらはしたない」

科学と魔術は既に交錯した。

——そこに「幻想」が入り込むのは、まだ先。しかし、「その日」は必ず来るだろう。

強襲

「あ、あ、ー、しんど……」

「えっと、その、まあ……お疲れさん?」

小萌宅にて。ぐったりした様子で卓袱台に突っ伏す霊夢の前に、キンキンに冷えた麦茶を淹れながら上条が苦笑いを浮かべる。

あの後、白井と固法、ついでに先に佐天の見舞いに行かれてしまったことを嫉妬した初春らに小言で刺されながら山のような始末書の処理を命じられ、数時間もデスクに拘束された。

粗方片付いた頃にはすっかり日は落ちてしまっており、改めて風紀委員という仕事、というか労働そのものがゴミであると胸に刻んだ。

「しかし、レベルアップってのがあるって噂は青ピとかから聞いてはいたが、まさかそんな大規模な事件になってたなんてな……てつきり根も葉もない都市伝説かと」

「知らなかったの? 結構ニュースにもなってたと思うけど。ここにもテレビはあったでしょ」

「元々テレビなんてあんまり観ないし、生憎とインデックスに占領されてしまつて子供向けアニメしか映つてなくてな……」

話を聞いてからすぐにニュースを確認し、酷く驚いた。まさか二日前別れた後にそのような大事件の解決にあつていたとは。

あれから連絡が付かず、もしや魔術師に襲われたのではと心配していたが、それに關しては完全に杞憂だったようで内心ホッと胸を撫で下ろす。

「うーんつと、つまりれいむはこの街で警察みたいな組織に所属してて昨日は物凄い犯罪者を捕まえてたつてこと？」

「ええ、そういうこと。ジャックジメント風紀委員つていう自警団よ。この街に居る以上、あなたもお世話になるかもしれないから覚えておきなさい」

「じゃつじめんと？ 変な名前。審判の日にはまだ早いかも」

「……確かに変よね。私も最初は裁判所か必殺技かなつて思つたもの」

アシチスキル対能力はまだ分かるが。どうもこの街は横文字を好む傾向がある。霊夢としては長つたらしく、言い辛いためやめてほしい。

「つてな訳だから、来るのが遅くなつちやつたわ。悪いわね」

「いやいや、しようがないつて。むしろしばらく休んだ方が良いんじゃないか？ 昨日

テロリストを捕まえたばかりなんだろ？」

「私もその方が良いと思うんだよ。私はまだまだ元気だし問題無いかも」

勞う上条と禁書目録。風紀委員としての活動をこなしながら更に自分たちの問題まで解決しようとしてくれていている霊夢には本当に頭が上がらず、申し訳無くなってしまう。

「別に平気よ。大したことなかったし」

「……警備員を一人で壊滅させるような奴は充分に大した奴だと思うのでせうが」

「あんたならワンパンでできるわよ」

「うーん過大評価。右手しか範囲がないのに無敵か何かだと思つてらっしゃる？」

無茶を言うなど溜め息を吐く上条に対し、相変わらず己を過小評価すると霊夢は内心呆れる。

実際、木山はともかくA I M拡散力場の塊である幻想猛獣ならば幻想殺しで触れるだけで消滅させることが可能だろう。木山に関しても事前に能力を把握され、対策されていたらどうしようもないが、初見であればどうとでもなると霊夢は認識していた。

尤も、霊夢が上条当麻という少年の実力をこうも評価しているのは、幻想殺しのみではなく、自身の勘と負けず劣らない前兆の予知ともいえる超反応と、その中身。そして、もう一つの能力である“竜”の存在からだ。

とうの本人は自分の能力の秘密など全くと言って良いほど知らないため過大評価だ

と思つても仕方があるまい。

「こつちは準備万端よ。最悪の事態にも見据えてマジック・アイテム——こちら風に言えば霊装だつけ？　そういう系のも色々持ってきたから」

「おお、れいむ程の魔術師が持つ霊装つてことはもしかしなくても貴重な物なのかも」
霊夢がそう言うと、禁書目録が目を輝かせる。対して上条は知らない単語に頭の上に疑問符を浮かべる。

「インデックスさん、インデックスさん、その霊装とは何ですか？」

「簡単に言うと魔術を使う為の道具なんだよ。通常、自分の血管や神経に魔力を通し、身振り手振りで記号を示すだけでも魔術は発動するけどより精密な手順が求められる場合、専用の道具を用いることもある。この専用の道具のことを霊装つて言うんだよ」

例えば「剣にまつわる伝説や神話」を参考に魔術を使用する場合、実際に剣を使った方が効率が良いだろう。

それをより強力に振るうのであれば、更に専用の物にする必要がある、それが霊装というアイテムなのだ。

普通に魔術を使う場合をフリーハンドで直線を引くものだとすれば、霊装を用いる場合は定規という道具を使つて直線を引くようなものだと言えば分かりやすいだろうか。

「というか、とうまが前に壊した『歩く教会』も霊装だし、何なら前に説明したかも」

「あー、そういうやそんなこと言ってたような……」

今一ピンと来ていない上条に対し、霊夢はその聞き捨てならない発言に眉をひそめる。

「はあ？ あんたの右手、触れたら霊装も破壊しちゃうの？」

「みたいだな」

「……ここで聞いたって良かったわ、マジで」

「？」

本気で安堵する霊夢。知らなければ迂闊に触らせてしまうかもしれなかった。

「大事な霊装が壊されたら困るもんね」

「ああ、そういう……」

「ええ。とても大事なものよ。破壊なんてされたら普通にキレてぶち殺しかねないわ」

「ヒエッ」

ドスの利いた声に本気で怯える上条。基本的に霊夢は有言実行であり、本当に殺さずともそれに近い、半殺し以上な目に遭わされると思ったからだ。

無論、故意でなければ霊夢はそこまでのことはしないが、それでも頭に血が上ればどうなるか分かったものではないが故の発言だった。

「出来れば……そうね、明日には決着を付けたいわ。いつ術式が作動するか分かったも

んじゃないし、インデックスが健康な内に行いたいしね。状況によっては、手が付けられなくなるかもしれない」

解呪も決してノーリスクではない。今はすっかり元気そうではあるが、もしも体調の悪化で処置が不可能という事態になれば、いよいよを以って上条の右手に頼るしかなく、それはつまり、最悪の想定に臨むということである。

「ッ……分かった。確かに心配事はさっさと解決したいしな。インデックスもそれで良いか？」

「……うん」

二人とも霊夢の言葉に応じる。上条は今までの付き合いから、禁書目録はその優れた魔術の手腕から、彼女に一定の信頼を寄せていた。

「決まりね。準備が良ければいつでも言っただけでちようだい」

「ああ。……それで博麗。提案があるんだが」

「ん？」

「お前が来る前に話してたんだがインデックスが今日……」

「お風呂に行きたいんだよ！」

「……風呂お？」

突然の提案に首を捻る霊夢。訊けば、禁書目録も無事回復し、普段通り動けるように

もなったためずっと身体を拭くだけなのもどうかと思い、銭湯に行きたいという話をしていたのだという。

「そんなのここで……そういやシャワーすら無かったわね、このオンボロアパート」

本当に学園都市の建物なのだろうか。ここだけ時代が昭和へ逆走している。

「やっぱり駄目か？」

「そりゃ……いえ、やっぱり構わないわ」

「へ？」

怪訝な表情を浮かべられ、流石に無理かと思つた上条だが、あつさりと承諾され、目を見開く。

霊夢には、妙案が浮かんでいた。

「てつきり危険だつて止められるものか……あの追手の魔術師共もずっとここを見張ってるんだろ？」

「ええ。当然襲つてくるでしょうね」

四六時中ここを見張っている二人の魔術師たちにとっては絶好の機会。チャンス動かぬはずはなく、彼らは霊夢と上条という危険因子を排除し、禁書目録を奪還しようとするだろう。

「なら……」

「だからこそ、よ。憂いは早めに潰しておいた方が良いでしょう？　そろそろ打って出ようかと思っていたわ」

「打って出るって……まさか、あの魔術師共と戦う気か？」

「そのまさかよ」

あつけからんと言いつ放つ霊夢に、上条は驚きながらも納得する。結果は突破されていないとはいえないつまでも籠城している訳には行かず、いずれは対処しなければならない案件なのだ。

一方で不安に思う。現段階では敵がどの程度の戦力が分からず、ステイルⅡマグヌスや神裂火織以外にも仲間が大勢居るといふ可能性も考慮していたからだ。

「それに関しては大丈夫。あれ以降も見張りの数は変わってない……応援を呼ぶならとつくに呼んでいるでしょうし、少なくともこの街に潜伏しているのは神裂とあんたが戦ったステなんとかって奴の二人だけよ。仮に他にも仲間が居たとしても裏方、非戦闘員だと思うわ」

そんな心配を上条が進言すれば、霊夢は全く違う見解だったようで冷静にそう語る。

「ほ、本当か？」

「恐らくこの街に魔術師を送り込むのはそう気軽に出来るようなことではないでしょう。既に上司へ増援を要請しているとしても、それなりに時間が掛かるんじゃないかし

ら」

「なる、ほど……つまりむしろ増援が来る前に今居る魔術師は倒した方が良かったことか……」

「そういうこと。ま、私も同行するし、心配しなくて良いわ。それに……」

「それに？」

「風呂は大事よ、それはもう。ぶっちゃけ私も汗かいたからシャワーくらいは浴びたいと思つてたし、丁度良かったわ」

やはり霊夢もまた日本人。風呂に入りたいという気持ちはよく分かる。

尤も、銭湯へ辿り着く前に仕掛けてくる可能性が高いが……。

「とうま？ れいむ？ 二人とも一体何の話をしているのかな？」

「大したことじゃないわ。一緒にひとつぶろ浴びに行きましょう、って話してだけよ」
「えっ!？」

こちらから聴こえないボリユームで話す二人に首を傾げる禁書目録だったが、霊夢がそう言うとその顔を歓喜に染め上げる。

「やったー！ おっふるー！ おっふるー！」

「喜び過ぎでしょ……ハア、神社裏の間欠温泉が恋しいわねえ。怨霊が湧いてたけど」

はしやく禁書目録を見て、呆れながらも霊夢は過去を懐かしみ、くすりと笑う。

「へえー、博麗んとこの神社には温泉があるんだな。結構観光地だったりすんのか？」
その発言（怨霊云々は聞かなかったことにする）に反応した上条が尋ねる。以前に彼女が外部で本当に巫女をやっていたという話は聞いていたが、そこそこの有名な神社だったりするのだろうか。

尤も、神社なんて出雲大社とか伊勢神宮くらいしか知らないが……。

「……別に。参拝客なんて、滅多に来ない寂れた神社よ」

そう言う彼女の表情からは、笑みが消えていた。

「——博麗？」

「ん？ 何よ？」

「あ、いや……何でもねえよ……」

しかし、それも僅かな間。すぐにいつも通りの表情に戻り、そう言った。

時折彼女はこんな顔になる。いつも上条は疑問に思いながら、しかし触れてはならぬことではないかと問いかけることは出来なかつた。

（博麗……お前は一体、何者なんだろうな）

上条は彼女について何も知らない。その過去も、何故あんなにも強いのかも。魔術師だったことも少し前に知ったことだった。

けれど、確かなこともある。

彼女は嫌そうにしながらも自分を助けてくれる、“ヒーロー”のような同級生なのだ
と。

——そんな幻想を、当時の彼は抱いていた。

しばらくして、一行は小萌宅から出て、近くの銭湯へ向かっていた。

パジャマから修道服へと着替えた禁書目録は軽く弾んだ足取りで機嫌良さそうに歩いている。上条はそんな彼女の方を気に掛けながら、きよるきよると辺りを見渡す。

敵が来る、事前に霊夢からそう告げられているが故に、落ち着けなかった。

「……今の所、何も起きないな」

「……………」

「博麗？」

「——来たわね」

「!？」

そして、時刻は午後八時ジャスト。誰よりも早く違和感に気付いた霊夢が足を止め、そう呟く。

同時に、上条と禁書目録も今が異常な状況であることに気付いた。まだまだ学生が寝入るような時間ではないはずであり、大通りに車一台も、人っ子一人も居ないのはあまりにも不自然だった。

戦慄する。人が居ない、ただそれだけだというのに、こんなにも日常は顔を変えるものなのかと。

「やっぱり、のんびり湯船に浸からせてはくれないわよねえ……当麻、インデックス、離れないで」

即座に大幣を取り出す。もう臨戦態勢である霊夢に上条は身構え、禁書目録は言われた通りに傍へ寄った。

「——炎よ。kenaz PurisazNaupizGebbo 巨人に苦痛の贈り物を」

同時に、街灯のみが照らす闇夜の漆黒から、真つ赤に燃え上がる炎が生じる。

「!!」

それはまるで生き物の如くうねり、アスファルトを焼き焦がしながら迫ってくる。霊夢は片手で禁書目録を庇うように抱え込み、飛び退く。

「とうまー!」

「あん? ……ちっつ それが目的か」

禁書目録の叫びに反応して視線を送れば上条の居た場所に折れた街灯が倒れ、行く手を阻むように炎の壁が発生していた。

見事に分断された。上条には魔術は効かないから大丈夫だと判断し、禁書目録を守る方を優先したが、どうやらそれは敵もお見通しだったらしい。

「当麻! 生きてるなら返事しなさい!」

「ああっ! 何とか! けど結構やばい! そっちへは行けそうにねえ!」

炎の先に居るであろう上条へ呼び掛ければすぐに声が返ってくる。しかし、その様子からして向こうの方で攻撃を受けているようだ。

また以前彼が戦ったという炎を操る魔術師か？ 否、相手に考える頭があれば上条にぶつけられたのが誰かは明白だった。

「インデックスは無事よ！ こつちを片付けたらすぐに向かうからどうかして生き延びなさい！」

「分かったッ！ そつちも死ぬなよッ！」

僅かなやり取り。相手は十中八九神裂火織——高い身体能力による肉弾戦を得意とする彼女と上条の相性はすこぶる悪いが、それでも簡単に負けるようなことはないはずだと霊夢は確信していた。

未だに心配で気が気でない禁書目録をゆっくりと下ろし、霊夢は視線を敵方へ移す。

「不意打ちは失敗、か……まあ、分断に成功しただけでも上等つてところかな」

そして、術者が姿を現す。暗闇に溶け込むような黒いコートと神父服を身に纏った赤髪の大男。目のバーコードの刺青といい、その特徴的な容姿は上条が語っていたものと合致している。

「あんたはええと……ま、いいや。来るとは思っていたけれど、人払いを張っているとはいえ随分と大胆じゃない」

「ふん……やつと尻尾を出してくれたんだ、この機を逃がす理由などありはしないさ」
煙草を啜えた魔術師、ステイルⅡマグヌスはそう言いながらも、やはり強襲を仕掛けることは読まれていたかと顔をしかめる。

「あつそ。にしても、てつきり二人掛かりで来るもんだと思っていたのに」

霊夢としては心底意外だった。こうもあつさり分断される事態を許してしまったのは、相手にとつての最適解が一番の脅威——自分の排除であるとし、二人同時に挑んでくるとばかり思っていたからだ。

まさか上条の方を危険視したのか？ 禁書目録に施された魔術を解除されるかと思つたのであれば合点が行くが……。

「——よもや、あんた一人で私をどうにかできるとでも思つてないでしょうね？」

ぶわり、と目に見えぬ無色の魔力が放出され、炎が激しく揺らめく。

舐められるのは心外とばかりに鋭い眼を向けられながらステイルは内心冷や汗をかき、その平静を装つた態度は崩さず、逆に睨み返す。

「さあ？ どうだろうね——」

その問いにステイルは答えず、ボウ！ と掌からバーナーのように炎を出現させ、それを剣のように形作る。

それと程無くして背にしていた赤い炎の中から這い出るように巨大な何か顔を見

せた。

「ツ！ あれは『魔女狩りの王』……！』」

禁書目録がその名を呼ぶ。重油のような黒くドロドロとした人型の芯を軸に、真紅の炎が燃え盛っている巨人——その圧倒的な存在感を目の当たりしても、霊夢は表情一つ変えない。

「気をつけて、あれは本体じゃない。どこかに刻んであるルーンを破壊しないと——」
「……そりゃ面倒ね」

上条が言っていた、幻想殺しでも破壊出来なかつた魔術というのはこれのことか。禁書目録の反応から見ても間違いない。

遠隔操作、或いは自動術式。これだけの規模ならばそれなりの下準備が必要だと思われるが、どうやら彼は事前に発動していたようだ。

（ルーンってのは……確か文字とか記号とかの類いだっけ？ なら、範囲外から弾幕をぶつ放せば終わる話だけど……）

一番手っ取り早い方法を思い付き、即座に却下する。禁書目録が傍らに居る状況では、そのような戦法は取れないし、魔女狩りの王の行動範囲が人払いの術式よりも広ければ民間人を巻き込みかねない。

ならば、正面突破するまで。

「インデックス。結界を張っておいたから、そこからあまり動くんじやないわよ」
「え？ う、うん。分かったんだよ」

その領きとほぼ同時に、霊夢は地面を蹴って浮き上がり、ステイルへと向かう。

「ッ——！！」

魔女狩りの王が灼熱の拳を振り下ろす。摂氏3000℃を越える高温の炎は接触するまでもなくアスファルトを融かし、蒸発させる。

しかし、その巨体に見合うように動きは鈍く、斯様な攻撃が霊夢に当たるはずもなく、彼女は魔女狩りの王の脇を潜り抜け、ステイルの目の前に立つ。

「灰は灰に——！！」

直ぐ様詠唱するが、間に合わない。反射的に振るった炎剣も掠りもせず、カウンター気味に放たれた足刀が腹部に叩き込まれる。

「ぐあっ!?!」

吐き出された涎と共に煙草も落ちる。メキイと、何かが軋む音と共にステイルは吹っ飛んで地面に転がった。

神裂に比べてあまりにも遅く、脆い。如何にステイルが天才的な魔術師といえどそれはあくまで人間の範疇であり、魔女狩りの王に多大な魔力を割いていることもあって接近戦は苦手な部類だった。

つまり霊夢との相性は最悪なのである。

「ツ——潰せ……イノケン、ティウス……！」

しかし、彼の闘志はまだ決して消えておらず、辛うじて意識を保ちながら叫ぶ。

相手がまだダウンしていないと分かった時点で霊夢は追撃に向かっていたが、背後から飛び掛かる魔女狩りの王に反応し、距離を取った。

「……何か仕込んでたわね、あいつ」

足に伝わった違和感。恐らくは防弾チョッキか鋼鉄以上の硬度のプレートか何かを装備しているのだろう。

顔を狙えば良かったと霊夢は舌打ちする。

（土御門には、感謝しないとね。チタン合金のセラミックス板、だったか……？　神裂と渡り合うような化け物が相手だから用心に越したことはないと思つて重装備にしたけど……チョッキも着込めば良かったかな）

衝撃までは完全に殺せないとはいえこれだけの装備をしながら意識が飛びそうになる程の痛み。まともに受けてしまつていたら、死んでいたかもしれないとゾツとする。

この装備を提供してくれた協力者は個人的にいけ好かない男だったが、今回ばかりはステイルは彼に深く感謝した。

（何にせよ、僕の目的は時間稼ぎだ。神裂があを始末して合流するまでの……あわ

よくば禁書目録を回収しておきたかったんだけどね……)

そんな甘い相手ではない。それは先程の一撃と、今日の前で魔女狩りの王すらも圧倒している光景を前に、再認識する。

勝てるとは思っていなかった。けれど、まさかここまでの差があるとは。

「確かに、何度やつても再生するみたいね」

投擲された赤く光る御札を受け、上半身を消し飛ばされながら瞬時に元通りの姿に戻っていく魔女狩りの王を見据え、霊夢は呟く。

耐久力は「妖怪バスター」数発で倒せる程度。しかし、再生速度はかなりのもの。あの幻想猛獣と同等かそれ以上であろう。

——面倒なことこの上ない。

「炎よ。^{kenaz} P^{ur}isaz^{Na}u^{piz}G^{eb}b. 巨人に苦痛の贈り物を！」

「！」

荒れ狂う炎が襲う。魔女狩りの王だけでは役者不足だと判断したスタイルによるせめてもの掩護射撃だった。

「へえ……この街の連中よりは、マシな炎じゃない」

炎を魔力のこもった大幣で払い除けつつ、霊夢は小さく笑う。学園都市の能力者基準ならばまず間違いなく大能力者⁴……下手すれば超能力者⁵クラスですら有り得る火力と

熱量。流石にあの蓬萊人には遠く及ばないが、尸解仙が使っていた大火くらいはあるのではないか。

魔術師としても一級クラス。神裂火織の仲間だけあって、それに相応しい実力を有している。

「けどまあ——」

次の瞬間、魔女狩りの王が地に伏せる。

「なっ!?!」

「運が悪かったわね、こういう系はついこの間相手にしたばっつかなの」

ステイルは目を見開く。降り注いだ無数の御札が、炎に焼かれることなく、魔女狩りの王に纏わり付き、その動きを拘束していた。

「無限に再生するんなら、動けなくさせてしまえばいい……単純でしょ?」

「馬鹿なっ……魔女狩りの王の本体はルーンによる術式。実態無き虚像であるその動きを封じられるはずが——」

「いいえ、実体なんて無くても魔力がそう形作っているのなら、それは存在しているってことよ。後はそれに触れる手段を用意するだけ」

刻んだルーンを消されなければ無敵。そう思い込んでいた自身の切り札を打ち破られたことに激しく動揺するステイルに霊夢はさも当然のように言い放つ。

「そんな、ことが……」

「ま、良い線行つてたけど、私を相手にするんなら後3体くらいは召喚しておくことね」
そして、絶句する彼へ一気に詰め寄り、その右頬を拳で殴り付けた。

「いっはっ!」

抵抗する暇も無く、一瞬にして意識を刈り取られる。寸前にステイルが思つたのはまた殴られて負けたという悔恨の念だった。

「はい、おしまい」

「……す、凄い」

術者が気絶したことでゆっくりと小さく、消え行く魔女狩りの王を傍目に一連の戦闘をずっと見ていた禁書目録は予想を遥かに上回る実力差を目の当たりにして驚きを隠せなかった。

魔術は元々才能の無い者が才能ある者に追い付く為に編み出した異能であるが、結局のところその中でも才能が物を言う世界だ。

努力と研鑽を積み重ね、やがて天才を追い越し、更なる高みへと至る学問。しかし、それらをすべて無下にして容赦無く叩き潰すのもまた天才と呼ばれる人種――。

あのステイルⅡマグヌスという少年は間違いなく天才と称されるに相応しい部類だ。彼が扱う炎の術式は本来、10年間月明かりを溜めた銀狼の牙で……などというレベル

の代物であるのだから。

「? 何よ、インデックス」

——ならばそれらをまるで兇戯のように蹴散らしてみせた目の前の少女は、天才と呼ぶことすら烏滸がましい、理不尽な十二カではないか。

少なくとも禁書目録には、そう見えた。

「ううん……何でもないんだよ……」

「そ。怪我は無さそうね、さつきと当麻の所へ行きましょう」

いつの間にかステイルを簧巻きにし、額に御札を貼り付けた霊夢はそう言う。禁書目録を抱き抱えたかと思えば、そのまま肩に担ぐ。

「ふえっ!? なな、何を……」

「飛んでった方が早いでしょ? 多分死んでないとは思うけど流石に相手が悪過ぎるし、急ぐわよ」

「待って、せめてこの格好だけでも——!?!」

あんまりな体勢に恥ずかしがる禁書目録を無視し、霊夢は飛び立つ。

今宵は、まだまだ長く、終わらない。

茶番劇

——次元が違う。

対峙する女剣士に対し、上条当麻は本能的にそう理解してしまった。

（オイオイオイオイオイッ!? 博麗の奴はこんな化け物を相手に勝ったのかよ……ッ!?）

道路を粉碎しながら迫り来る衝撃。持ち前の反射神経で何とか回避しつつも悪態をつくしかない。事前に情報もたらされていなければ、今頃地べたを這いつくばっていたことだろう。

「ほう……七閃を見切りますか。やはり彼女から私の技については聞かされているのですね」

淡々と呟く神裂。その言葉通り、上条は霊夢から神裂火織という敵について聞かされている。

桁外れの身体能力を持ち、*“異能の力”*を用いずに鋼鉄製のワイヤーを操る肉弾戦が得意な魔術師。

——つまり己では、逆立ちしても勝つことの出来ない相手だということだ。

「出来れば、もう一つの魔法名を名乗る前に、禁書目録を保護したいのですが」

「また保護か。勝手なこと言ってるじゃねーよ！」

然れど、上条は一步も退かない。少しでも触れれば切り刻まれるであろうワイヤーの斬撃を紙一重でかわしながら神裂へと向かっていく。

「ただの学生にしては良い身のこなしです。場慣れもしている。しかし——」
漸く届いた上条の拳を神裂は容易く避け、その腹部に膝蹴りを浴びせた。

「うぐっ!？」

「彼女——博麗霊夢には遠く及びませんね」

今までにない威力の衝撃。上条はまるで自動車にはねられたように吹っ飛び、壁に叩き付けられる。

「残念ですが、遊んでいる暇はありません。スタイルがどこまで持つか分かりませんが、
らね……」

そう言い、神裂は背を向ける。手加減はしたものの、ただの人間相手にはあまりにも過剰な力をこめた。右手以外に能力を持たぬただの高校生である上条はその一撃を前に意識を手放す。

「待て、……………よ……………」

はず、なのだが。

「……もう十分でしょう。あなたが禁書目録の為にそこまでする理由は——「黙れよ」

上条は立ち上がった。激痛と吐き気に顔を歪め、今にも意識が飛びそうになりながらも、執念を以って神裂を睨み付けていた。

「んだよ……ロボットみてーな野郎だと思ってたのに、つまらなそうな顔しやがって……」

「!!」

「アンタ……イギリス清教なんだろう？ 博麗から聞いた。あいつは裏切り者なのかもしれねえって言ってたが……どうも俺にはそうは見えねえ」

その気になれば自分など簡単に殺せる。なのにそうせず、説得するような口振り。ステイルならいざ知らずも、上条は目の前の女が悪人には到底見えなかった。

だからこそ、ふと思ひ浮かんだ。自分たちは致命的な勘違いをしているのでは、と。
「……それで？」

「本当は分かかってんだろ？ こんなこと間違ってるって」

「ッ……」

「そんなスゲエ力があんのに記憶の無い、たった一人の女の子を切り刻んで……どうしてそんな事しかできねえんだ!？」

「私だつて! ……私だつて、本当は彼女を傷付けるつもりはなかった。あれは『歩く教会』の結果がまだ生きていると思つたから——」

ここで初めて神裂が声を荒げた。

「他に手立てなどないのです。こうでもしないと、彼女はこの世界で生きて行くことが出来ないのですよ」

「!? 何を言つて……」

「私の所属する組織名は、あの子と同じ『必要悪の教会』。インデックスは私たちの同僚にして——」

——親友なのですよ。

告げられた衝撃的な真実に、上条が目を見開く。

それと、ほぼ同時だった。

「ツ!? 人払いが……まさか、もう……!?」

突如として術式が崩壊する。起点を壊さずに問答無用で結界を砕くその不可解な現象を見るのはこれで二度目であり、神裂の脳裏に最悪の事態が過つた。

「——それから離れなさい」

そして、その予感的中する。

七閃によって切り落とされた外灯の上。月夜を背に、彼女は悠然と佇んでいた。

「博麗、靈夢……ッ!!」

あまりにも早過ぎる。彼女が現れたということは時間稼ぎをしていたステイルは敗北したとみて間違いない。

拘束されているか、始末されているか、出来れば前者であってほしいが、相手は魔術師である以上、そのような期待も出来なかった。

(もう少し……もう少しだったというのに、こんなタイミングで……!)

顔を歪め、割れてもおかしくないほどの強い力で奥歯を食い縛った。あつさりとやられたステイルを責めるようなことはしない。相手の実力は把握していたし、己が上条に對して禁書目録の友人であるという点からその殺害を躊躇していなければ、もつと早く加勢に行けたのだから。

「聞こえなかったの? 離れろって」

そんな後悔に塗れる彼女に對し、虹色の光弾と御札の大群が容赦なく襲い来る。

(ツ——!?! あの魔力弾と同じもの——いきなり仕掛けてきますか……!)

即座に飛び退く神裂であったが、光弾は着弾せず弧を描き、ホーミングするかのよう軌道を変えてその後を追っていく。

「——七閃——」

七つの不可視の斬撃が幾度も高速で繰り出され、ぶつかる。それにより光弾の幾つか

を相殺し、残りも誘発させることで消失させるも、代償に半分近くのワイヤーが焼き切れてしまう。

—— 夢想妙珠 ——

そして、間髪入れず第二陣が放たれる。

「なっ!?!」

馬鹿な、と驚愕する神裂。その規模はあの時のものよりは幾分か劣るもののそれでも魔力量は規格外の一言であり、まさか連発可能だとは思ってもみなかった。

「……ギリギリセーフ、なのかしら」

残ったワイヤーで必死に対処する神裂。いつの間にか、霊夢は上条の前へと移動していた。

「博麗……!」

「生きていて何よりだわ。後は任せて」

タイミングが良いのか悪いのか。駆け付けてきたことへの喜びと先程の神裂の発言が気になる思いが入り雑じり、複雑な表情を浮かべる上条。しかし、神裂から視界を一片足りとも外さないようにしている霊夢はこれに気が付かず、肩に担いでいた禁書目録を下ろす。

「どうまつ!?!」

傷だらけの上条を見るなり彼女は青ざめた顔でその傍へ駆け寄る。

「酷い怪我……れいむ！ はやく治療しないと！」

「待つてなさい。先にあいつを潰すわ」

恐らく治療魔術が使えるであろう霊夢へ禁書目録は懇願するが、相手が相手であるためそのような余裕など無い彼女はそう言うのと、疾風の如き速さで神裂の方へと向かっていく。

「おい……！ 少し待つて——」

「動いちゃ駄目！ 傷が開いちゃうんだよ！」

慌てて後を追おうとするも彼の容態を心配する禁書目録に止められてしまう。

「けどインデックス……あいつは……」

本当はお前の親友なのかもしれない。そう言おうとしてすんでのところまで飲み込む。今にも泣きそうな表情を浮かべた彼女にそんなことを言ってしまうと、どうなるか分かったものではなかった。

そして、既に戦闘は、彼が割って入れるような余地は無い程までに激化している。

「くっ——」

「ツレが随分と世話になったわね？ 聖人さん」

一方、霊夢は降り注ぐ弾幕の嵐から逃れんと縦横無尽に駆け回る神裂の姿を追う。

そのスピードは音を超え、踏み込む度に大地は砕け、凄まじい衝撃波が発生する。しかし、霊夢はその姿をはつきりと視界に捉えており、的確に御札を投擲していく。

(こちらに近づく素振りすら見せず、常に一定の距離を保っている……接近戦は不利と判断しましたか。それとも元々この戦術が彼女の得意分野なのでしょうか)

恐らく後者だろう。絨毯爆撃の如き弾幕を神裂は躲し、或いは刀で切り伏せて捌き続ける。

光弾のホーミングが厄介だが、速度自体はわりと遅く、こちらも遠距離魔術を放つことで相殺可能。その場合は隙潰しの御札や針への対応が疎かになってしまう。

故に、彼女は一向に攻勢に出ることは出来なかった。

(しかし、このままでは消耗するだけ……どうにか埒を明けねばなりませんね——)

幸いにも禁書目録との距離は離れている。向こうも彼らを巻き込まないようにしているのだろう。

ならば大技唯四で一気に決める。その思考に至ると即座に神裂は刀を構え、大地を蹴つた。

救われぬ者に救いの手を
「Salvare 000——！」

魔法名を名乗り、出し得る限りの全速力で空に浮かぶ霊夢へと疾走する。

その過程で数発の弾幕が掠めるが、彼女は怯まず走り続け、一気に跳躍した。

「唯閃ゆいせん」

渾身の力をこめられて放たれた神速の抜刀術。前回靈夢に死を覚悟させたその一刀は万物を、空間すらも切り裂く。

「悪いけど、それはもう視たわ」

しかし、神裂が斬ったのは、何も存在しない虚空だった。

「!?!」

「馬鹿正直に真っ直ぐ突っ込んでくれてありがとう。お礼に叩き落としてあげるわ」

避けられた、神裂がそう認識した瞬間にはいつの間にか靈夢は頭上へと移動していた。

—— 亜空穴 ——

「があっ!?!」

重力に従った自由落下と共に繰り出された踵落とし。全身全霊の奥義を放った後、それも空中で身動きの取れない状態でその一撃を無防備で後頭部に受けた神裂は真っ逆さまに墜落する。

（何がっ……全く反応出来なかった。おかしい、彼女の身体スペック自体は、聖人には劣るはずでは……?）

前回は手加減していた？ 否、あの時手を抜く必要性など無かったし、そもそも仮に

聖人を凌駕するスピードであれ、全く見えないなんてことがあるのか。たとえ光の速さに匹敵しようとも、神裂の研ぎ澄まされた反射神経はその軌跡を僅かにでも追えていただろう。

しかし、霊夢のあれはそう、その場から消えた、まるで瞬間移動したかのような――。

「ぐっ……まだ……、私は……——ッ!？」

高所から落下し、一瞬脳を揺さぶられたことで意識がぐらつくも鍛え上げられた聖人の肉体。どうにか意識を保ち、立ち上がった神裂は周囲を見て言葉を失う。

半透明な二重の結界が正四角形を作り、自身を取り囲んでいた。

「――終わりよ」

無慈悲な宣告。結界から射出されるように、四方八方から無数の弾幕が飛んでくる。

――二重弾幕結界――

法王級を遥かに超える桁外れな大魔術に驚愕しながらも即座に神裂は回避の為に動き、再び唯閃を放とうと構え――

――背中に衝撃と激痛が伝わった。

「――」

声にならない悲鳴をあげ、バランスを崩す。そこに容赦なく残りの弾幕も雪崩れ込み、神裂を呑み込む。

何が起きたのか。外側の結界から放たれた弾幕が内側の結界を介した瞬間に位置と軌道を変える。それは不規則なように見えて、事細かく規則的で原理さえ分かれば避けるのは容易いものであったが、完全に初見であり、予想外の被弾によってパニックに陥った神裂に気付けるようなモノではなかった。

(ぐあ……っ……まずい、このまま、では——)

絶え間無く降り注ぐ弾幕。いくら聖人の頑丈な肉体であろうとも耐え切ることはまず不可能であり、逃れられない。

曰く、人間は目の情報に頼り過ぎる。これをただ弾がワープするだけの弾幕だと思っ
てはいけない。その背景が裏返っている事の方が重要である。そこに気が付かないと、
いつまで経っても霊夢には遠く及ばないだろう。

ある者の言葉通り、時間経過で弾幕が止まり、結界が解かれた頃には、神裂は地に伏
していた。

「嘘だろ……」

更地になった大地。あまりにも一方的な戦いを前に、上条は圧倒される。隣で禁書目
録も愕然としていた。

(は、博麗って……こんなに強かったのかよ……)

今までも霊夢が戦っている所は何度か見たことがあり、その鬼神の如き強さはよく理

解していた。

しかし、それは基本的に高い身体能力と人間離れた体術によるもの。針や御札を投擲することはあつたものの、このような規模の魔術を駆使して戦う光景は初めて見た。

御坂や食蜂を相手にも強気になれるはずだ。超能力など正しくレベルが違い過ぎる。

あの神裂火織という規格外の怪物を、より規格外な力で真つ向から叩き伏せた。それも自分たちや周囲への被害が及ぶのを抑えるように加減した程度の力で。

思えば、自然なことだ。これだけの力があるからこそ、イギリス清教——即ち、英国そのものを敵に回すことすら厭わないのだろう。

「さて、と——」

一方、霊夢は倒れている神裂の前へ降り立つ。スタイルと同じように簀巻きにして拘束するつもりだった。

「門番の方がまだ上手よ？ 狸寝入り」

次の瞬間。思い切り腹部を踏みつけた。

「かはっ——!?!」

「ほんと頑丈ねえ……あの不良天人と良い勝負するんじゃない。どうでもいいけど」

不意を突くつもりだったのだろう。胃を押し潰され、押し殺していた息を一気に吐き出して呻き声をあげる神裂を冷徹に見下ろし、霊夢は呆れた様子で吐き捨てる。

霊夢の弾幕には殺意は存在しない。しかし、それでも当たり所が悪ければ死んでしま
うかもしれない、くらいの威力はあり、そんな代物をあれだけくらって尚も意識を保つ
ていられる神裂、ないし聖人という存在に軽くドン引きしていた。

「つ……………ぐあ……………こん、な……………ところで……………おわ……………」

「いいえ、終わりよ」

唯一残された勝ち筋すら潰された。ひゅーひゅーと掠れた呼吸をしながら神裂は悔
しげに顔を歪め、見上げるように霊夢を睨む。

対する霊夢はこれを冷徹な眼差しのまま見下ろし、その意識を奪い去らんと大幣を振
り上げた。

「待ってくれ！ 博麗！」

「——あん？」

しかし、上条がこれに待ったをかけた。

「……………何？」

ぴたりと寸前で大幣を止め、霊夢は怪訝そうに問いかける。背後で禁書目録もその行
動に困惑しているようだった。

「その……………コイツらにも何か事情があるみたいなんだ。少し話を聞いてもいいか？ 頼
む」

「はあ？ ……ま、別に良いわよ。ただ拘束してからね」

真剣な顔でそう言われ、仕方ないといった様子で霊夢は承諾し、パチンと指を鳴らす。すると無数の札が神裂へと纏わり付き、鎖のように縛り上げた。

「ぐっ……………」

「じゃ、さっさとしてちょうだい」

「ああ、すまん」

霊夢の位置と入れ替わるように、上条は神裂へと近付く。

「……………何ですか」

「アンタ……………さっき、インデックスと親友だったって言ってただろ。あれは一体どういうことなんだ？」

「——え？」

その問いかけに、霊夢は眉をひそめ、禁書目録はぼかんとする。

「それ、は……………」

一方、問いかけられた本人は口籠る。ちらりと禁書目録の方を一瞥していたことから、彼女に聞かれたくないのだろう。

「ふうん……………インデックス。少し寝てなさい」

「ふえ？」

それを察した霊夢はソツと撫でるように禁書目録の頭に手を翳す。

次の瞬間、彼女は意識を失い、霊夢の方へと倒れ込む。

「なっ おい……」

「ちよつとした呪まじないよ。害は無いし、眠ってるだけだから安心しなさい。——これで、話せるでしょ?」

抱き寄せた禁書目録を優しく地面に寝かせると霊夢は神裂へと視線を送る。

「……分かりました」

彼らに禁書目録への悪意が無いことは分かっている。故に、真実を伝えても大丈夫だろうと、神裂は静かに語り出す。

「言葉通りです。私とステイルは彼女……インデックスの親友でした」

「じゃあ、何で……」

「あの子の頭の中には、10万3000冊の魔道書が記憶されている。それは知っていますね? ……彼女の脳の85%は、それで容量を食い潰されてしまっているんですよ」

「——はっ。」

告げられた予想外の事実、上条は目を見開く。

「つまり、彼女の脳の残り容量は15%しかない。その15%で、彼女は私達と同じス

ペックを發揮しているのですから、本物の天才と言って良いかもしれませんが」

「でも、だからって何でこんな風に追い掛け回してるんだよ!」

「追い掛け回す、というのも事実とはまた異なりますね。私たちの目的は——彼女の記憶を消すこと、にあります」

そこで上条は思い出す。禁書目録の記憶が一年前から全て残っていないということ。

しかし、それは霊夢の考察だと禁書目録に施された魔術によるものだったはずだ。

「デメエ……!」

「ですが、そうしないと彼女は死んでしまう」

怒りに顔を染め上げる上条を、制するように神裂は告げる。

自分たちの行為の、正当性を。

「あ、？」

一方、霊夢は立ち尽くす。目の前のこの女は、一体何を言っているんだと。

「彼女の脳は、ただでさえ15%しか容量が残されていない。にも拘らず、完全記憶能力のせいで木の葉の枚数や道端の空き缶のようなゴミ記憶まで完全に保存してしまうのです。……そして、そのせいで一年周期で記憶を消さないと、インデックスは死んでしまう」

「っ……そんな……」

あまりにも最悪で、残酷な事実にも、上条は言葉を失う。神裂の語るそれには確かな説得力があり、それ故に気が付かなかつたのだ。

その致命的な間違いに。

「私たちは、何度も彼女の傍に居続けました。彼女が記憶を失うとしても、それでも幸せな一年が送れるようにと努力もしました」

俯く神裂。思い返すのは禁書目録の親友として過ごした日々。自分たちに向けられる笑顔と、記憶を消す寸前の泣きじやくる姿――。

「……ですが、結局最後にあるのは地獄のような別れだけ。悟ったんです。私たちが彼女を幸せにしようとする努力が、別離の苦痛をより深いものにしてているんだと」

つまりわざと敵として見られることで、記憶が消される瞬間に辛い思いをさせないようになっている。そのどうしようもなく哀れで、しかしあまりにも自分勝手な言い分の上条は怒りを覚える。

「……馬鹿じゃないの？」

すると霊夢が冷たい声質で吐き捨てた。

「ッ、何を……」

「茶番も良いところね。そんなことの為に、インデックスを殺したっての？」

「は？」

言っている意味が分からず、神裂は茫然とするも、しばらくしてそれが記憶の消去のことを意味しているのだと理解し、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「ツ……酷なことを、言いますね。確かに、私たちは彼女を殺している、ということになるかもしれませんが。ですが、そうしなければ彼女は記憶の圧迫で——」

「まずその前提が間違っているわ。記憶の圧迫で死ぬなんてある訳無いでしょ」

次の瞬間、神裂の呼吸が死んだ。

「そもそも15%で一年なら、どう計算しても六、七年しか生きられないじゃない。簡単な算数も出来ないの？」

あ、という眩きを漏らしたのは、果たしてどちらだったか。

完全記憶能力者は禁書目録以外にも居る。そんな特徴があるのであれば、それは不治の病としてもっと注目されて良いはずだ。

つまり——。

「私の知り合いにも完全記憶能力者は居るわ。そいつは短命だけれど、それでも30年くらいは生きられるし、短命の理由は輪廻に抗い、記憶を保持したまま転生するという外法を繰り返し返した副作用によるもの。ただ10万冊程度の魔道書を記憶しただけで死ぬなら、そいつはとつくにくたばってるわ」

そして、科学的な観点から見てもそれは証明される。そもそも人間の脳は思い出を司るエピソード記憶、知識を司る意味記憶、技能を司る手続き記憶の三種類に分けられており、意味記憶である魔道書の知識が、エピソード記憶を圧迫するなど、絶対に有り得ないのだ。

神裂は、告げられた事実を咀嚼する。咀嚼しなければ、到底呑み込めるような情報ではなかった。

「そんな、……いや、でも！ 実際に彼女は、インデックスは今まで何度も苦しんで来ました！ いくら理屈の上ではそうだととしても、実際に苦しんでいるということ——」

「そんなの細工されたからに決まってるでしょ。あんたらの上司様とかがさ」

神裂の言葉が、完全に停止する。

「あの術式の正体が分かった。ありやインデックスに掛けられた『首輪』ってことね」

「何、を……」

「考えてもみなさい。一年も期間があればあなたみたいに親友と呼べるような間柄ができる。それはインデックスを管理する側からすれば都合の悪い話よ。裏切られるかもしれないし、魔道書の知識を使うかもしれない……なら、どうするか」

「……………あ」

「あの子に、あんな小さな子に魔道書の知識なんて毒を押し付けて、それを良しとするよ

うな連中が、まともである訳がないでしょうが」

責め立てるように、無慈悲に言い放つ。お前たちがやっていたことはすべて無駄だった。ただ無為に、彼女の大切な思い出を葬り去って来たのだと。

「そんな……そんなの……それじゃ、私は、私たちは、今まで、何の為に……っ」

ほろほろと、絶望に打ちのめされた神裂の目から、涙が零れ落ちていく。

自分たちがしてきたことは、インデックスを救うことなんかではなかった。仕組まれたレールの上に乗せられて、勝手に努力して、勝手に絶望して、勝手に親友を傷付けて――。

とんだ道化^{ビエロ}ではないか。

「……これから、私たちはインデックスに施された呪いを解くわ」

その姿を見下ろしながら霊夢は言うと共に、神裂を縛っていた御札が剥がれ落ちていく。

「……………」

「騙されていた、つてのは言い訳にはならない。それに気付かず彼女を殺してきたあんたたちは間違いなく同罪だし、最低な屑野郎よ」

「ッ……………」

「……………」

スツと霊夢は手を差し出す。

「少しでも償う気があんのなら、ついて来なさい」

月明かりに照らされたその姿が——神裂には、まるで救世主のように見えた。

自動書記

靈夢が禁書目録の解説を行う場所として決めたのは、第十七学区のとある操車場だった。

別に人気が無く広い場所ならどこでも良かったのだが、この街には人払いの影響を受けない者が何人か居る。そういうのとの遭遇を避ける意味でもこの場所を選んだ。

「……口の中、ね」

眠りにつく禁書目録の身体を調べ、漸く靈夢は術式がどこにあるのか見つけ出す。

喉奥から見える刻印。頭蓋骨を避けて脳へ影響を与えるには最適な場所であり、加えて他人の口内をまじまじと覗き込むことなんて歯医者でもない限りまずないのだから隠蔽性も高い。

「けど身体検査くらいしなかったの？ よく見りゃ気付きそうなものだけ」

「……健康診断は、他の者がやっていましたので」

「ふうん……じゃ、そいつもグルね。あんたら全員まんまとハマられてたんだ」

「くっ……」

その背後には神裂とステイルが居た。二人とも霊夢の言葉にぐうの音も出なかった。あの後、すぐに簀巻きにされていたステイルを回収し、科学側に精通している協力者に裏取りを行った。

結果、霊夢の発言通り。完全記憶能力者が記憶の圧迫で死ぬなど真っ赤な嘘であり、科学の世界においては常識レベルの知識であるとのこと。

自分たちは、掌の上で踊らされていた。

「あの女狐め……」

ステイルは己の無知と迂闊さを呪う。あの最大主教アイクレシヨツプが信用ならないのは分かっていたことだったというのに、その言葉を鵜呑みにしてしまっていた。

「しかし、予想以上に緻密な術式ね……しっかり修復機能も備わっているし、防衛術式も兼ねている。簡単には行かないわ」

「君でも……解呪は難しいのかい？」

「ええ。少なくとも二日、いや一日と半日は掛かるわね。インデックスの記憶を消す期限は？」

「……明日の夜だ。到底間に合わない」

逆に時間が掛かるだけで解呪は可能なかとステイルはその手腕に驚きつつも一刻の猶予も無いことを伝え、舌打ちする。

これに霊夢も顔をしかめる。幻想御手事件とステイルたちとの戦闘で時間を取られてしまった。禁書目録の容態からタイムリミットまでまだ余裕があると思っていたが……。

「そんなつ！　じゃあどうしたら……！」

「仕方無い。記憶を消してから解呪を——」

「駄目よ」

— 一先ず記憶を消去し、それから解呪を行うという冷徹ながらも最良な提案を、霊夢は一蹴する。

「もうこの子を殺させるもんか。それだけは断じて許さない」

「ツ……なら、どうするつもりなんだ？」

「術式の破壊だけなら今すぐにも出来るわ。そうすると仕込まれた防衛術式が作動するからなるべく避けたかったんだけど……」

「それは……その、リスクがあるのでは？」

10万3000冊の魔道図書館に施された防衛術式。並大抵のものではないことは明白だった。

「ええ。戦闘になるわね、間違いなく。……当麻、それでも構わないかしら？」

「え？」

「負けるつもりは更々無いけど、相当激しい戦いになる。あんたにも危険が及ぶでしょうし……」一応確認取っておくわ」

「待てっ、僕たちは——」

「あんたらの許可なんて必要無いわ。邪魔するってんなら、今度こそ潰す」

「ッ……………!!」

「……………分かりました。博麗霊夢、あなたを信じます」

確かな殺気のコもった言葉。ステイルは黙り、神裂は静かに頷く。

元より彼らは「贖罪」という体でついて来た身。霊夢の手を取った時点でその方針に意見する権利など無かった。

「で、どうすんの？」

「……………でないと、インデックスの記憶が消えちまうんだろ？ そんな瀬戸際を黙って見てられるかよ」

グツと拳を握り締める上条。あの日、あの時、あの瞬間、彼女を地獄の底から救い出すと決めた時点で、覚悟は決まっていた。

「ああ、やってやるぜ博麗！ インデックスの奴を救えるってんなら何だつてやる！」

「……………そ。あんたなら、そう言うでしょうね。じゃあ、右手でこれに触ってちょうだい」

その言葉に確かな決意を感じ取った霊夢は早速とばかりに禁書目録の喉奥の刻印を

指差す。

「良いのか？ 右手を使うのは危険だって前に言ってただろ？」

「状況が変わった。どっちにしる同じ結果になるんなら、下手な解呪よりも刻印ごと一切合切消し去っちゃった方が良いと判断したわ」

霊夢の解呪ならば万が一とはいえ修復機能が働く可能性もある。そうなれば二度手間になってしまいが、上条の幻想殺しならばその修復機能ごと破壊することが出来る。

その説明に納得すると上条は意を決して禁書目録の方へと向かう。

「じゃ、じゃあ行くぞ……」

「変なこととしてみる。生まれてきたことを後悔させてやる」

「しねーよー！」

恐る恐る手を伸ばす。その背後で霊夢は大幣と札を、神裂は刀を、ステイルはカードを構え、それぞれ臨戦態勢に入った。

そして、右手が刻印に触れ――。

「うおっ!?!」

バキツと何かが碎ける鈍い音が鳴り、上条は後ろに吹き飛ばされた。

「――警告――」

そして、禁書目録は目を覚ます。

しかし、その声はもはや無邪気だった彼女のものではなく、その瞳は暗く、無機質で、光が無く、赤い五芒星が浮かんでいた。

——自動書記ヨハネのペン 起動。

「第三章第二節。Index—Librorum—Prohibitorum——禁書目録の“首輪”、第一から第三まで全結界の貫通を確認。再生準備……失敗。“首輪”の自己再生は不可能、現状、10万3000冊の“書庫”の保護のため、侵入者の迎撃を優先——」

「——先手必勝」

見たことのない禁書目録の姿に皆が衝撃を受ける中、真つ先に動いたのは霊夢。あらかじめ仕掛けていた無数の札を展開し、目の前の少女が動きを見せる前に縛り上げる。

「当麻！ もう一度あの子に触れて——」

「“書庫”内の10万3000冊により、防壁に傷をつけた魔術の逆算を開始……失敗。該当する魔術は発見できず。術式の構成を解析し、対侵入者用の特定魔術ローカルウェポンを構築します」

が、禁書目録——自動書記は止まらない。魔女狩りの王をも封じ込めた拘束を、全く意に介さずに言葉を紡ぐ。

「侵入者個人に対して最も有効な魔術の組み上げに成功しました。これより特定魔術」

聖ジョージの聖域”を発動、侵入者の排除を試みます」

次の瞬間——禍々しいオーラと共に両目に刻まれていた五芒星と同じ魔法陣が展開され、一気に広がった。

レーザーで空中に投影されたかのような魔法陣が、二つ。中途半端に重なり合うように展開される。

「ッ、っ……っ……」

まずい。何らかの魔術を発動しようとしているのは明白であり、それを止める為に霊夢は更に札を投擲する。よりスピードの速い針を使わなかったのは、その殺傷力の高さから禁書目録を傷付ける恐れがあったからだ。

故に、ほんの僅かに、間に合わない。

「自動書記が人の耳では聞き取れない“何か”を詠った瞬間、彼女の眼前に黒い亀裂が走る。」

そして——。

「!?!」

ゴッ!! と脈動するように亀裂が膨らみ、その奥から、横倒しになった“光の柱”が飛び出した。

それは周囲の札をすべて吹き飛ばし、上条へと一直線に突き進む。

上条は目を見開きながらも右手を向け、それを受け止める。

しかし――。

(な、んだ、これ……!?) 光の粒子の一つ一つが、まるで違う質になってやがるぞ!)

右手が吹っ飛ばされないう、左手で抑えないといけない。動くことなどもつての外だった。

そして、光は右手で触れ、幻想殺しが発動しているにも拘わらず止まらず、消えない。それどころか少しずつ右手を浸食していた。

一つ一つが彼女の脳内に蔵書されている魔道書の原典。10万3000にも及ぶおぞましい『違法則』の束に、幻想殺しの処理能力が追い付かなくなっているのだ。

「ドラゴンブレス竜王の殺息だと……!?!」

すぐに予想はついた。禁書目録が魔術を使用出来ない理由……それがこの自動迎撃システムの為に彼女の魔力全てを注ぎこんでしまうからだ。

ステイルは激昂する。こんなくだらない事の為に彼女は魔力を勝手に吸い尽くされていたのか。

それだけじゃない。彼女の記憶も、その生き方も、性質も、その全てが勝手に決められていたのか、あの子の意志とは関係のない所で、こんなことの為に――。

「——Fortiss931!」

我が名が最強である理由をここに証明する。殺し名であり、ありとあらゆるものから禁書目録を守ると誓った覚悟を叫び、数百枚ものカードを周囲に張り巡らせる。

「魔女狩りの王!」

出現した炎の巨人が、上条と光の柱の間に割って入った。

自動書記は上条を優先的に殺す為に眼球と連動した光の柱ごと首を振りまわすが、それに追いつがるように、魔女狩りの王も移動してそのルートを遮る。

魔女狩りの王は光の柱を浴びて鉛細工のように溶けだすが、直ぐ様再生されて人の形を取り戻していく。

「——警告、第二二章第一節。炎の魔術の術式の逆算を完了しました。曲解した十字教の教義モチーフをルーンにより記述したものと判明。対十字教用の術式を組み込み中……第一式、第二式、第三式。命名——〃神^{エリ}よ、何故私^{エリ}を見捨^レてた^マのですか^ク」

すると、光の柱が見る見るうちに血のような深紅へと変貌する。

十字教対策の術式。教祖たる〃神の子^クが最期に吐き捨^テた^タとされる、自らの信じる神への悲痛な叫び。あらゆる十字教の信仰を、根本から否定する術式だ。

その破滅の光を受けて、不死身のはずの魔女狩りの王が、再生されずに削れていく。

「チツ……!」 流石に魔導^{イン}図書館^{デックス}なだけはあるか……!」

「絶え間なく攻撃していくわよ」

——八方鬼縛陣——

霊夢を中心に無数の札や光弾が陣を形成するように展開され、それらが一齐に自動書記へ高速で射出される。

「——『書庫』内の10万3000冊により、敵性魔術の逆算を開始……失敗。対魔性に特化した神道・陰陽術に準ずるものだと思われませんが、該当・類似する魔術は発見できず。術式の構成を解析し、対攻撃者用の特定魔術を構築——」

これを再び放たれた光の柱が消し飛ばす。射線から逃れた弾幕も『歩く教会』に匹敵する防壁障壁によって防がれる。

どうやら自動書記は霊夢の弾幕を解析するもその情報があまりにも不明瞭なことから持ち得る攻撃手段の中でも最強クラスの『竜王の殺息』による力押しで退ける選択をしたようだ。

「おっと——」

迫り来る光の柱を霊夢は飛んで避ける。自動書記は首を動かし、光の柱の軌道を変えて狙い続けるが、そのスピードに追い付くことが出来ない。

（なんたらバーストの魔術版って感じね。倒すだけなら私一人でも可能だけど……インデックスに怪我させる訳にもいかないし、どうしましょうか——）

10万3000冊の魔導書に記された魔術をすべて駆使でき、組み合わせることすら可能。それは確かに脅威であるが、最大の懸念点であった「魔神」には程遠く、また自動書記の戦法は非常に単調であった。

故に、撃破は容易い。しかし、これが解呪となると一気に難易度が上がる。恐らく自動書記は守るべき対象である禁書目録が死なない限り、永遠に戦い続けるように設定されているのだから。

攻めあぐねる霊夢。一番の攻略法はやはり上条に再び触れてもらうことだろう。ここまで思考した時だった——。

「……あん？」

光の柱を避けながら、霊夢は気付く。竜王の殺息が砕いた地面や、掠めたコンテナがただ破壊されるだけではなく、無数の「白い羽」となって舞い散っていることに。

「気を付けてください！ あの羽一つ一つにドラゴンの一撃に等しい力が秘められています！」

神裂が叫んで警告する。しかし、霊夢はあまりにも唐突に生じた感情に困惑し、それどころではなかった。

（——私は、この攻撃を知っている？）

それから感じる、どうしようもない既視感。遠い、遠い、記憶——あれに決して触れ

てはならぬと脳が最大限の警告をしてくる。

——即ち、彼女が最も恐怖するもの。

「警告、第三二章第一節。敵兵——『博麗靈夢』へ『書庫』内に記録された1027種すべての『対空・撃墜術式』を行使するも効果無し。直ちに逆算を開始……失敗。作戦を『聖ジョージ聖域』の出力上昇へ切り換え、更に特定魔術『モーゼの奇跡』を発動します」

光の柱が一気に肥大化し、勢いも増す。それだけならば靈夢の動きを止めるには至らないが、自動書記はこれに加えて別の魔術も発動していた。

次の瞬間、空に『海』が出現する。

「……………」

左右に挟み込むように出現した波打つ紅い大海。かつて、ユダヤの指導者が起こした海割りの奇跡をモチーフとした大魔術。空に海が浮かぶというあまりにも現実離れした現象が靈夢の動きを阻害し、更にその波は、槍のような光弾を放つことで攻撃を仕掛けてくる。

見覚えはなく、しかしどこか違和感のあるその光景に顔をしかめながら靈夢は光弾を避け、薙ぎ払われるように放たれる光の柱からも逃げ続けるが、先程とは違って逃げ場は少なく、追いつかれるのは時間の問題だった。

「チイツ——」

「——Salveree000!」

その時、神裂が動く。彼女の操る無数のワイヤーが舞い、自動書記の足元の地面を切り刻んで砕いた。

これにより自動書記はバランスを崩し、顔を上へ向けてしまう。当然眼球と連動した魔法陣は移動し、光の柱はあらぬ方向へと飛んでいった。

「ナイスよ」

——八方龍殺陣——

先程の何倍もの数の御札と光弾が瞬時に展開され、それらが挟み込んでいた大海へと突っ込んで炸裂していく。

一見すれば水面に石を投げるに等しき行為。然れど、彼女のは石ではなくダイナマイト。大海は吹き飛ばされ、一時的にその機能を停止させる。

その隙に霊夢は片手を天へ掲げた。

すると頭上に青白く光る球体が出現したかと思えば、それはみるみるうちに巨大化していった。

——陰陽鬼神玉——

二つの勾玉が重なった、紅白の太極のような球体。それは直径10mを超えるサイズ

まで大きくなるとギョルギョルと高速回転し始める。

霊装によって再現された暴風、ないし濁流の如き“正”の魔力の集合体。次に行われる行為は、魔術によって作り出された人工的な人格である自動書記でも容易に予測できた。

——球体が、ゆっくりと落ちる。

「——」

自動書記は自身の足場を崩した神裂を無視し、体勢を立て直して光の柱をぶつける。ガリガリガリガリツ!! と光の柱が球体の表面を削り取り、穿たんとする。対して球体も霊夢から供給される魔力により瞬時に修復させながらその勢いは止まらない。

「滅茶苦茶ですな……!」

今宵は常識が何度も覆される。人の身で防ぐことすら馬鹿馬鹿しいドラゴンの一撃。それに真っ向から衝突し、拮抗しているという事実には神裂もステイルもただただ驚愕するしかなかった。

しかし、今がチャンスだった。

「上条当麻!」

「ああ! 分かっている!」

上条が全速力で駆ける。自動書記は“陰陽鬼神玉”を迎撃することで手一杯でこれ

に対応出来ない。

(……神様)

上条は、五指を思い切り広げる。

(この物語が、アンタの造った奇跡システムの通りに動いているっていうんなら——)

距離がおよそ2mまで迫ったところで自動書記はくるんと首を回し、狙いを上条へと切り換えた。

身に迫る二つの脅威。その中でも自身の術式そのものを破壊しかねない上条の排除を優先したのだ。

——夢想封印 集——

しかし、上条へ放たれた竜王の殺息は、横合いから叩き付けられた虹色の光弾によって軌道を逸らされてしまう。

「!!」

「させないわよ」

何事かと思うよりも先に自動書記の身体に無数の御札が纏わり付く。視線を向ければ、いつの間にか上空に居たはずの霊夢がすぐ真横に立っていた。

本体にダメージを与える気のないそれは先程のように自動書記にとって大した拘束にはならず、しかし今このタイミングにおいてはあまりにも致命的な隙だった。

「——まずは、その幻想をぶち殺す！」

上条が右手を伸ばす。もはやそれだけで容易く届く所まで迫っていた。

「——警、告——」

魔方陣が崩壊し、「聖ジョージの聖域」が消失する。

「最終章。第零……『首輪』、致命的な……破壊。再生、不可……」

そう呟いたのを最後に、自動書記の——禁書目録の瞳から光が戻り、糸が切れた人形のように倒れ込んだ。

——獲った。

上条は直ぐ様倒れた禁書目録を抱き寄せ、その無事を確認して穏やかな笑みを浮かべる。

その光景を見て霊夢もホツと胸を撫で下ろす。一時はどうなるかと思つたが、禁書目録の解呪は大した被害も無く、成功したようだ。

「——いや」

背筋が凍り付く。ここにきて働く第六感。本能的に空を見上げ、霊夢はそれが何なのかを知る。

あの光り輝く羽が、大量に舞い落ちていた。

「——！」

気付いた時には身体が勝手に動いていた。漸く掴み取ったハッピーエンド。台無しになんかさせてたまるかと、即座に上条と禁書目録の頭上に結界を張り巡らせ、彼らを守る。

それで一安心。とは行かなかつた。

「ッ——」

結界に羽が弾かれる音で、上条も気付く。そして、霊夢の方を見て目を見開いた。彼女の頭上からも「羽」が降り注いでいた。それもはや防ぐ術など無い距離に。

（あつ、やばつ——）

霊夢は理解していた。あの羽が単純な破壊力を持つだけの物質ではないことを。一体どういう性質を持っているのかを。

忘れていても、体が覚えている。一度それを受けて、すべてを失ったが故に——。

全力で防ぐべきだった。けれど、上条と禁書目録に注意が向いて対応が遅れた。ここ以後悔はなかつたが、他にもやりようはあつただろうと霊夢は悪態をつく。冷静さを欠いていた。どう転ぼうが、このままでは霊夢は死ぬ。

「——夢想天」

間に合うかどうかは分からないが、最後の抵抗を試みたその時だった。

ドンツと背中を押された。

「は——？」

完全に脱力していた霊夢はあっさりと突き飛ばされて尻餅をつく。

茫然としながら視線を向ければ、自分の居た場所に上条が立っていた。

「なん、で——」

「——博麗」

上条が笑う。

ふざけるな。

やめろ、やめろ、やめて——。

「ごめんな」

上条の頭に羽が、触れた。

——いつも何かに悲観していた。

初めて出会った時からずっと。何もかもが有象無象でどうでもいいと言わんばかりに、彼女はつまらなそうで、そして諦めているかのようだった。

そんな態度とは裏腹に彼女の周りには多くの人間が居た。その多くが彼女に惹かれて集った者たちだ。かくいう自分もその一人なのだろう。

けれど、彼女はいつも独りだ。心の底から笑えてなどいなかった。

自分は、一体何をしてやれるのだろうか。彼女が憂い、悲観する何かを晴らしてやることは出来ないのだろうか。

そう考えてしまうのは彼女に何度も助けられたからか、それとも――。

(……何だよ。そんな顔、できるんじゃないか)

しかし結局、自分は彼女を哀しませることしか出来なかったようだ。

こちらへ手を伸ばす彼女を見て、心苦しくなると同時に、酷く安心した。

自分は彼女にとつて、決して有象無象なんかではなかったのだと。自分という存在は、彼女の瞳の中にきちんと映っていたのだと。

それに、彼女を助けることが出来た。助けられてばかりの自分がやつと、助けたのだ。後悔が無い……と言えば嘘になる。

ここで自分が死ぬ――終わりだということとは、何となくだが、分かってしまった。

もう、彼女と共に行くことは出来ない。もう、彼女が悲観する理由を知ることが出来ない。やしない。

辛かった。本当の意味で彼女を助けることは結局出来やしなかったのだから。

ああ、それでも――。

(なあ……神様……)

もしも居るのなら、祈らせてくれ。

どうか、彼女の日々の未来に、多くの幸があらんことを――。

中道

“窓のないビル”

第七学区に存在する、学園都市の中でも一際異彩を放つ建造物。

そこに、二人の人物が居た。

「……予定とは、随分と違ったみたいだな？」

巨大なビーカーのような生命維持槽。その中で彼は培養液に浸かり、プカプカと浮かんでいた。

銀髪に緑眼。男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える、中性的という言葉を超越した容貌をした“人間”——。

学園都市統括理事長、“アレイスター”クロウリー“は無表情のまま、問いかける。

「……………」

相対する人物は、何も答えない。

「君の予定では、今回の事変で彼女……博麗霊夢は“失敗”するはずだった。あの時と違って、一切の記憶を消し去る為に」

「……………」

「しかし、結果として博麗霊夢は無傷。代わりに上条当麻が記憶を失う羽目になったが……ああ、心配せずとも上条当麻の記憶喪失の件に関しては全くの無問題だ。充分に修正が利くし、むしろ好都合と言える」

「……………」

沈黙を貫く相手に対して、まるで機械から発せられるような、無機質で感情の起伏を全く感じさせない声でアレキスターは淡々と語る。

「あれが居る中で干渉したのは失敗だったな。あの右手は、運命や因果すらも破壊する。故に、君が定め、お膳立てした未来は崩壊した。——尤も、君はそれすらも想定の内かもしれないがね」

「……………神浄の討魔」

ここで初めて、アレキスターの話に一切関心を示さなかったその人物が口を開く。

そこにどのような感情が籠められているのかは分からない。アレキスターには声どころか顔も、そもそも今対峙しているのが何なのかすらまるで霧が掛かったように上手く認識出来ていなかった。

気味が悪い。彼が他者に対してそう感じたのは、一体何世紀ぶりだろうか。

「——ふむ。興味を持つのは結構だが、勝手な行動は慎んでもらいたい。既に私の計画

プラン

は軌道から逸れている。これ以上狂わされると修正のしようがなくなってしまう」

アレイスターが警告する。目の前の存在が上条当麻に興味本位で接触されるのは、喜ばしくない。

しかし、その脅しにも近い警告が無意味なものも理解していた。学園都市統括理事長としての権威も、かつて世界最高と謳われた大魔術師としての名声も、あれには何の抑止にもならないのだから。

「……………」

故に、そんな存在がこちらに配慮してくれる程度は弁えているのはアレイスターにとつて幸運だった。

こくりと頷くと彼女が踵を返す。

「……厄介な奴に目を付けられたものだ。計画を悉くかき乱してくれる君の存在にはいつも頭を悩ませられているが、今回ばかりは同情するよ」

その存在が窓のないビルから、この世界から完全に消え失せたのを確認し、残されたアレイスターは溜め息交じりに呟く。

自身の「プラン」とは関係の無い事象ではあるものの、個人的に興味をそそられる。かの「幻想を生きる巫女」の行く末には――。

博麗靈夢にとって、上条当麻とは別に特別な人間でもなんでもない、ただのクラスメ

イトだ。

不幸だと嘆きながら、自らトラブルへと突っ込んでいくお人好しの大馬鹿者。いつか痛い目に遭うだろうとは、取り返しのつかない事態になるだろうとは思っていた。

今回がそうだったという話——しかし、少なくとも己の手が届く範囲に居る限りは、そんなことはさせないとも、思っていた。

あゝ?????は、楽園の調停者にして人間の守護者。それはこの学園都市であろうとも、どこであらうとも決して変わりほしくない。

故に、目の前で守れなかった、救えなかったという事実には彼女はとうしようもなく打ちのめされる。

佐天の時と同じ。何故こうも詰めが甘く、取り零してしまうのだ。

「結果から先に言くと、彼の記憶は『破壊』されてしまっているね?」

「……そう」

「驚かないんだね? まあ、君もほぼ同じ症状だとすれば当然と言えば当然かな?」

病院にて。以前の顔見知りであるカエル顔の医者 of 診断結果を、霊夢は嘔み締めるように聞いていた。

——上条当麻という人間は脳医学上、死んだ。

思い出を司るエピソード記憶の中枢器官をズタズタに破壊され、かつての記憶をすべ

て失ってしまったのだ。

「因みに治る見込みは？」

「ゼロと断言していいね？ 何せ脳細胞ごと死んでいるからね？ 君のように多少の

抵抗力で断片的に残っている可能性はあるかもしれないが、治療に関しては現代の医学では不可能だよ？」

「現代の医学では、ね……」

その言葉は幼少の頃から飽きるほど聞いた。しかし、彼女はつい最近思いついた、という^{こと}も理解していた。

自分と上条では状況が違うのかもしれないが、それでも不可能など、有り得ないのだ。

「……私は、あなたよりも優秀な医者を知っているわ」

「——ほう？ それは興味深いね？」

カエル顔の医者は目を剥く。自惚れではないが、冥土（ヴァンキャンセラ）帰しなんて呼ばれている自身

よりも優れた医者が存在するのだという。

厳密には医者ではなく、薬師だが。

「今はどこで何してるか分からないけど……必ず、見つけ出す」

希望的観測。しかし、あの「白い羽」を、かつて己が記憶を奪った要因を見た時から、
 霊夢は確信していた。

この記憶は、偽りなどではなく、“幻想”は確かに存在するのだと。

今この瞬間から、自らの悲願は、渴望は、己が為だけの望みではなくなつた。たとえば、それが単なる自己満足な罪滅ぼしであらうとも……。

「なんつってな。引ーつかかったあ！」

開けっ放しの病室から笑い声と怒声、それから悲鳴が響き渡る。

しばらくして、禁書目録がぶんぶんと怒った様子で飛び出し、こちらに気付くこと無く走り去っていった。

(……あいつ)

病室へ足を踏み入れた霊夢はベッドの上に居る上条へと視線を向ける。齒形が大量についたポロポロの枕を見れば何があつたかは容易に想像がついた。

よもや記憶が残っている、などという希望は抱かない。しかし、上条はどこまで行っても上条なのだろう。

「……良かったの？ あれで」

「え？」

こちらを向いた上条は困惑の表情を浮かべる。自分が誰だか分からないその反応に、霊夢は切なく思う。

分かつていたことだが、たとえば性格は変わらぬともあの同級生で腐れ縁だった上条は、もうどこにも居ない。

「えっと、君は……」

「食蜂操祈。あんたは私の内縁の夫にあたるわ」

「あ、そうですか……はあっ!？」

「嘘よ」

「嘘かよ!」

一瞬こんな美少女がっ!? と期待した喜びを返してほしい、と上条は恨めしそうな視線を送る。対して霊夢はそんな反応にくすりと笑い、そして溜め息を吐く。

「やっぱり忘れてるのね、全部」

「……すまん」

「いいえ、謝るのは私の方よ。あんたをこんな目に遭わせたのは私の判断不足のせいだから」

そう言い、霊夢は頭を下げる。彼女にとっては一人一人を死なせたも同義、いくら謝っても気が済むはずがなかった。

「あ、いや、止してくれっ。大体の話はあの手紙を読んで把握している。魔道書とか魔術とかよく分かんないけど……多分、俺がやりたくてやったんだろ? だから、食蜂? さん……君が謝ることではない、と思う」

「……そ。ま、あんたならそう言うとは思ってた。あと私の名前は食蜂ではないわ」

「そこも嘘なのかよ……」

あつさり^とと霊夢は引き下がった。上条にいくら謝罪したところで押し問答になるとは分かつていたからこそ、己の中でのみ戒める。

「……あんたは、これからずっと、隠し通していくつもり？」

「……………」

「いずれボロが出るわよ？ 今言っちゃった方が、気が楽なんじゃない？」

「……それでも、あの子だけには泣いてほしくないって、思ったんだ」

自身の右手を見ながら決意した様子で語る上条を見て、霊夢は笑みを浮かべる。

この会話に加え、先程の禁書目録とのやり取りで、充分に理解出来た。目の前のこの少年はたとえ記憶を失つていようとも、その在り方は変わっていない。

——上条当麻の気高さは、決して失われず、そこに存在するのだと。

「なら、精々頑張ることね。私も口裏くらいなら、合わせてあげるわ」

故に、霊夢は手を差し伸べる。あの時と、何ら変わらない様子で。

「——博麗霊夢」

「え？」

「私の名前よ。また新しい関係を築くのでしょうか？ 当麻」

「……おう、よろしくな。博麗」

その手を上条は迷わず取る。

(さつきだつて……君には、君にだけは謝つてほしくない、自分を責めないでくれって思つたんだ)

確かな暖かさを感じながら上条は思い返す。つい先程、霊夢を見た時に感じたのは困惑と、それを覆い尽くすような安堵――。

彼女が目の前で、この世界で生きていることへのどうしようもない程の歓喜だった。

親友？ 想い人？ 尊敬する人？ 分からない。けれど、本能的に理解した。

きつと、彼女は記憶を失う前の自分にとって大切な、かえがえのない存在だったのだと――。

(案外、覚えているのかもな俺……)

何処に、と問われれば一つしかあるまい。脳細胞が焼き切れようとも、忘れられぬモノが何処にあるとすれば。

――“心”に、決まっている。

上条の病室を後にした霊夢は屋上のフェンスに背を凭れ、黄昏れていた。

(……さて、あいつらにはどう説明しましょうか)

記憶喪失の件は隠し通すと約束した。しかし、上条の周りには察しのいい者たちが多い。特に心当たりのある一人はその手の分野に長けているためすぐに気が付くことだろう。

故に、一部の、知るべき人間にはあらかじめ真実を教えておくことにした。

たとえどんなに辛く、絶望的なことであろうと、後から知ってしまうよりはずっとマ

シだと思つたから。

「ハア……………で、何か用？」

そう問えば、二つの人影が現れる。

魔術師、神裂火織とステイルⅡマグヌスだ。

「……………あなたの存在を、然るべき場所へ報告しました」

申し訳なさそうに、神裂は言う。理解しているのだろう。それによつて彼女の平穩が崩れ去つてしまうことを。

靈夢の表情は変わらない。

「……………で？」

「イギリス清教は、あなたの処遇を決めかねています。何分イレギュラーが過ぎる」

二人が提出した報告書により、英国には波紋が広がっていた。禁書目録の“首輪”の破壊もそうだが、極東の島国に、それも科学の総本山たる学園都市に聖人を真つ向から打破する程の魔術師が潜伏していたのだというのだから。

どこの所属か、それともフリーなのか、他の宗派に気付かれているのか、学園都市は一体どこまで把握しているのか、上層部は大騒ぎだった。

「中にはあなたを捕縛して連れて来い、と進言する者も居ます。尤も、私たちでは到底不可能ですが……………」

「ふうん……そりや面倒ね。どうでもいいけど」

神裂の言葉を受け、霊夢はそう切り捨てる。教授に言われて隠してきたが、バレてしまったのなら悪びれもせず開き直るまでだ。

これにステイルが眉をひそめる。

「どうでもいい、だと？ 君は自分がどういう状況なのか分かってるのかい？ はつきり言つて今の君は戦争の火種だ。このままでは他の宗派との摩擦が——」

「それがどうでもいいって言つてんのよ」

「な、に……?」

「あんたらがどこで騒いでどう判断しようが、私には関係無い。喧嘩を売ってくるんなら、イギリスだろうがローマだろうが叩き潰してやる」

悠然とした態度で霊夢は言い放つ。その発言には一切の虚飾も躊躇も無かった。

「……本気かい?」

「ええ。勿論」

何という傲慢さ。信じられないといった様子でステイルは顔を歪める。隣の神裂も同様の反応だ。

——イカれてる。

いくら聖人を倒せるだけの實力があるうと、彼女が敵に回そうとしているのはイギリ

ス清教、延いては魔術サイド全体であり、無謀にも程がある。

しかし、彼女と敵対することで魔術サイドに甚大な被害が及ぶであろうこともまた事実。あの自動書記ヨハネのペンとの戦い、あれですら禁書目録の肉体を傷付けないように配慮していたというのだ。

底が知れない。上層部が手をこまねいているのはそういった理由もあるのだろう。

「本当に申し訳ありません。あなたは禁書目録の恩人だというのに……」

神裂が頭を下げる。元々彼女とステイルは霊夢の存在を伏せておくつもりだった。

しかし、どういう経緯かは不明であるが、一連の戦闘は既にイギリス清教に知られてしまっており、到底隠し通せるようなものではなかったのだ。

「……で、私にどうしろつてのよ?」

「幸いにも最大主教……我々の上司は、事を荒立てたくない様子でした。あなたの特性についても知られていませんし、極端な判断にはならないと思います」

私たちも全力で弁護しますから。そう言う神裂であるが、所詮は魔術師の言うことなのでいまいち信用ならない。

尤も、神裂に関しては魔術師とは思えぬ程に善性な存在であることは薄々理解していたが。

「特異性って?」

「はい。……能力者なのでしょう？　あなたは」

「なっ!？」

「……………」

気になった発言について問えば、逆にそう尋ねられた。霊夢は僅かに顔をしかめ、片やステイルは驚愕の声をあげる。

「何を言っている、神裂？　能力者が魔術を使えるはずがないだろう。況してやあんな法王級を凌駕する大魔術を……」

「確信を持ったのは自動書記の発言からです。10万3000冊の魔道書の知識を自在に組み合わせられる存在があらゆる手段を講じた撃墜術式も、宙に浮く彼女を墜とせなかつた……そこまで来ればむしろそれは魔術ではないと考える方が自然です。そして、ここは学園都市。となればこの街が生み出した異能である超能力ではないかと思いましたが」

妥当な推理に霊夢は少しだけ感心する。記憶の圧迫の話で大して調べもせず、盲目的に信じ込んでいたことからつきり単細胞な脳筋なのかと思つたが、無知蒙昧なだけでそれなりに頭は働くようだ。

しかし、困つた。よりもよつて一番面倒な連中にバレてしまった。教授の説教が怖い。

「概ね正解よ。私のは生まれついでのものだけどね」

「馬鹿な……」

啞然とするステイル。もし事実だとすれば自身が想定していたよりもよつぽど深刻な問題になるからだ。

能力者でありながら魔術を扱う。それならまだ例は居るが、反動も無しで自在に行使出来るなど前代未聞であり、科学サイドと魔術サイドの両方の領分を侵す大罪人に等しい存在ではないか。

「い、一体どういう裏技を使ったんだい？ 奴みたいに反動を再生させてる訳ではないみたいだが……」

目の前の人物が自分たち必要悪の教会にとって排除すべき存在なのを理解した上で、ステイルは真つ先に思い浮かんだ疑問について尋ねる。

協力者である男は肉体再生オートリバースという能力で魔術の反動がある程度は回復させていた。より高位の能力であれば反動すらも克服出来るだろうが、そもそも霊夢には反動を受けている素振りすら無かった。

「どう、って言われてもね。私も後から知ったのよ、この世界の常識だと能力持ちが魔術を使うと死にかけるって」

教授から説明を受けていなかったら知る機会は無かつただろうと霊夢は思い返す。

才能の無い者たちが編み出した異能……そういう意味では起源は同じなのかもしれないが、やはり魔術と魔法は違うものであり、彼らは魔法使いではなく、魔術師エンジェンなのだろう。

かといって霊夢は、そのどちらにも当て嵌まらない存在なのだが。

「簡単に説明すると、私の扱う『術』は、能力持ちが使うことを前提にされたものなの」「——は？」

またしても固まるスタイル。神裂もその発言は予想外だったようで驚きを隠せない。だが、同時に合点が行く。自動書記が霊夢の魔術を前に解析不能と結論付けたことにも。

「ふざけるな……！ そんな協定を肥溜めに掃き捨てるようなことが許されるはずが……！——」

「知らないわよ。私はただそういうものだって認識してただけだし、そもそも科学だの魔術だのと一緒にされるのは心外だわ」

「なっ……!!？」

「だってそうでしょう？ 能力持ちなんてこの街ができるずっと昔から居るつのに、ちよつと有名になったからって勝手に科学側に分類されるし、魔術師あんなたらは古臭い伝統だの骨董品だのを尊ぶくせに巫女術も陰陽術も一括りにして同列に扱い、それまであった

例外は排斥しようとする……いい迷惑よ、そっちの常識を押し付けないでくれるかしら」

とんでもない暴論に絶句する。否、一部は確かに筋は通つてはいるが、だからといって科学と魔術の二大勢力に真つ向から齒向かうなど正気とは思えなかつた。

そして、恐ろしいことに弱者の戯言ではなく、この少女には確かな実力が備わっている。

(ああ、理解したよ……君には僕たちの常識なんて全く通用しないってことがね)

忌々しげにステイルは顔を歪める。これまでの会話から察するに、彼女は自身が魔術サイドである自覚が無く、それどころか科学サイドとすら思っていない。

完全なる個人主義。十字教三大宗派の権威など意に介さず、己がルールだと言わんばかりに我道を往く秩序への反逆者……そういう意味では神裂以外の聖人たちに近いが、単に単独行動を好むだけのあれらと違って明らかに協定に反する存在な分、たちが悪かつた。

それとも彼女には彼女なりの秩序があるのか……どちらにせよ、このままでは話は平行線を辿るばかりだろう。

「……その話を、私たちに打ち明けて良かったのですか？」

「口裏合わせてくれるんでしょ？ なら、少しは認識を擦り合わせておこうかと思って」

「それは……交渉の場に立ってもらえるという認識でよろしいのですか？」

「ええ。話くらいなら聞いてやるわよ」

言動とは裏腹に霊夢は話し合いには前向きな反応をする。彼女としてはこんなことに手を煩わせている暇は無いため穏便に済ませられるのならそれはそれで良かった。

「おい神裂、本当に良いのか？ 確かに彼女はあの子の恩人だが、あまりにも……」

「はい。いくら異端といえど、彼女に悪意は存在しません。それはこれまでの僅かな語らいでもよく分かりました」

元より自分たちが初めから事情を説明していれば敵対することも無かっただろう。後から話を訊けば彼女が禁書目録を救おうとしたのは何の打算も無い善意によるものだったらしい。

そういう意味では、神裂は霊夢に対して恩義だけでなく、敬意すら抱いていた。本人は頑なに認めないだろうが、その根本は上条当麻と同じ。誰かの為に無償で戦えるような人間なのだろう。

「……そうかい。好きにしたまえ」

この返答に不満げにしながらもステイルはこれを容認する。素直でないものの内心は恩を仇で返す行為はしたくなかった。

それに、彼としても禁書目録に首輪を付け、彼女の人生を滅茶苦茶にするだけでなく、

自分たちを騙し利用し続けたイギリス清教は気に食わない。

「決まりですね。後日、最大主教との交渉の場を設けます。英国ではなく、この街で行うのでその点については安心してください」

「そ。ま、流石に英国まで来いつて言われたら面倒臭かったから助かるわ……ジャッジメントの仕事もあるし」

同意する霊夢。これに内心二人は安堵する。一時はどうなるかと思つたが、とりあえずこの場は切り抜けることが出来た。

後は最大主教との交渉の場で問題が発生しないことを祈るばかりだ。

「それでは、連絡先の交換を——」

「はいはい。電話番号とアドレスね、というかケータイ持つてるんだ」

魔術師は文明の利器とかを嫌う原始人なイメージがあつたが、流石にそれくらいは活用しないとこの現代社会で生活することは不可能か。

(さて、こいつらの上司と話ねえ……人様の記憶を平気で奪うような屑野郎を相手にするのは正直嫌だけ……仕方無いわね)

禁書目録の件で既にイギリス清教へのただでさえ悪い印象はだだ下がりだつた霊夢は内心そう思う。

この時、霊夢の立場を重んじて彼女を英国へ招いて交渉の場を立たせるという選択を

しなかった神裂は英断だった。もしもそうしなかった場合、彼女は猛烈に後悔したであろう。

何故なら博麗霊夢と最大主教、ローラースチュアートが直接顔を合わせた瞬間、魔術サイドどころか世界をも巻き込むとんでもない事態に発展するかもしれないからだから――。

最大主教

初めに感じたのは、嫌悪感だった。

とある高級ホテルの一室。周辺区域一帯に人払いが張り巡らされたそこへ招かれた霊夢は目の前に置かれた小型ディスプレイに映るそれと対峙した。

『へえ……「聖人」を打倒した魔術師というから如何に恐ろしきことかと思えば、げに可愛げがあることね』

高く澄んだ声にも拘わらずそれは酷く耳障りで雑音のよう。ベージュの修道服を纏い、地に付くほど長い宝石のような金髪を持つその容貌は美しく、しかし画面越しからでも分かる醜悪な気配に霊夢は眉をひそめる。

何だ、こいつは。若い見た目とは裏腹に、随分と長く生きているのは分かる。それ故に気配が人外に近いと思われるが、しかしそれでもこの言い知れぬ嫌悪感のままか――。

「……あんたが、アークなんたらって奴？」

『いかにも。イギリス清教最大主教、アークビショップローラー・スチュアートといふけりよ。以後お見知

りおきを』

ゆつたりと椅子に座り、寛ぎながら彼女——ローラースチュアートは悠然と名乗った。

『其方は件の魔術師、レイム・ハクレイでよろしいかしら?』

「……………」

「博麗霊夢? いかがなさいましたか?」

暫しの無言。傍らに立つ神裂が心配そうにその顔を伺う。

「…………ええ。そうよ」

この女は推定無罪。疑わしきは罰する主義の霊夢としてはとりあえずその頭をかち割ってみるべき存在である。

しかし、西の果てに居る彼女をこの場で追及しても無意味。それを行うのは実際に対面し、見極めてからでも遅くはないだろう。

そう判断し、霊夢は警戒心を抱きつつも出しかけた矛を納める。

「…………で、何その馬鹿な喋り方。ふざけてんの?」

『な、え、お、おかしいの? “日本語”とはこんな感じといふものではないければ

かしら!』

突っ込んだら負けかなとも思ったが、ただでさえ不愉快極まりないので指摘すれば、

ローラは異様に慌てふためき、より支離滅裂な言動になる。

「どうやら敢えて茶化していた訳ではないらしい。日本書紀か古事記でも読んで学んだのだろうか。だとしても似非古文調過ぎるし、相当なアホだった。」

「ねえ、どういうことなの？」

「えつと……どうやら同僚にふざけた日本語を仕込まれたらしくて……」

「……あ、そ」

意味が分からず、神裂に尋ねればそう答えられ、何とも言えない表情を浮かべる。こ
うも警戒しているのが馬鹿馬鹿しくなってしまう。

尤も、油断ならぬ相手だということは変わらない。こいつは禁書目録に記憶を消去す
る術式を組み込んだ張本人なのだから。

『こ、こほん！ では、自己紹介も済んだところで本題に入ることにするけりよ。——魔
術師、博麗霊夢の処遇について』

咳払いし、ローラは先程よりも真面目な顔をしてそう切り出す。

『実のところ結論はもう既に出ているのよ』

「！」

「……………」

告げられた言葉に驚く神裂と、話が違うとそれを睨む霊夢。まだ審議中だと聞いてい

たが、結論が出てしまっているのならば口裏を合わせたところで意味がないではないか。

「最大主教、それは一体どういうことですか？」

『先日、博麗霊夢の身元保証人を名乗る者が我々に接触し、話をつけもうたりよ。赤髪の女、と言えば分かるのではなくて？』

「なっ……」

「……教授の奴、いつの間に」

僅かに顔をしかめる霊夢。相も変わらず得体が知れない。一向に連絡が無かったのでもしかするとバレてないのかも思ったが、やはりそんなことは無かったようだ。

しかし、イギリス清教に直接交渉しに行くとは。なかなか大胆なことをしてくれる。

「で、内容は？」

『ええ。簡単に言ってしまうえば、あなたをイギリス清教ネサセリウス必要悪の教会に雇用する……これを条件に今回の一件は放免にするということけりよ』

「なっ!？」

「……成程ね」

教授が承諾したのならばまあ最悪の事態は避けられているだろうという一定の信用はあったが、かといってそれが満足の行く内容とは限らない。

そう思つてはいたが、ローラが語つた内容はなかなか衝撃的なものだった。

「な、何を言つてるんですか最大主教！ 彼女は学園都市の人間です。それをイギリス清教の一員にするなんてことは——」

『あら、何の問題が？ 報告によると、彼女はフリーの魔術師なのでしょう？ 元より必要悪の教会は実力主義。ならばあなたたちを打ち負かし、禁書目録の首輪すらも解き放つた程の実力者を戦力に加えたいと考えるのは当然につき』

さもありませんと、そう言つてのけるローラに神裂は言葉が出なかつた。

（あー、何か既視感あると思つたらあれだ、ジャツジメントに加入させられた時の展開に似てるわね。あつちと違つて永久就職っぽいけど）

一方で霊夢はそんなことを思う。面倒事を好まず、魔術師を嫌う彼女からすればその総本山たるイギリス清教に所属させられるのは望むところではないはずだが、その割には存外落ち着いていた。

『それに、これはあなた方にとって最善の結果だと思ふのだけれど』

「は……？」

『形だけでもイギリス清教の擁護下であれば他の宗派もおいそれと手出しえせず。博麗霊夢として、フリーの魔術師で居続けるよりも、後ろ楯があつた方が善きにありけるでしょう？ 望みこそせど拒む理由などなきことでは？』

「ッ、それは……」

「……そうね。悪くないとは思う」

それどころか破格の条件と言えよう。少なくとも自分と敵対する連中の中にイギリス清教は消えるし、ローマ正教やロシア成教、その他の触発された馬鹿共への牽制にもなるのだから。

故に、気に入らぬことがあるとすれば――。

「私に、あなたの配下になれと？」

鋭い視線。これにローラは全く動じず、薄く笑みを浮かべる。

『あくまでも名目上、かしら。イギリス清教としてはそこらの魔術師ならともかく、聖人を打ち負かしてしまえる程の存在を前に、敵対など真つ平御免。しかし、放置して他の宗派に出奔せしめるのも都合が悪し』

「……………」

『どうかしら？ この条件さえ飲んでくれれば、我々イギリス清教はあなたに手出しせず、学園都市で思うがままに暮らすことを容認しましょう。学園都市内の魔術絡みのトラブルが起きれば協力を要請するかもしれないけれど、それくらいは問題無きことではなくて？』

「こちらを見透かしたようにそう言うローラ。面倒事を押し付けているようにも思え

るが、元より靈夢はこの街に魔術師が来て企てを起すのであれば撃退するつもりであつたのだから、その情報を得られるのであればむしろ都合が良かった。

しかし、疑わしい。あまりにも話がうま過ぎる。

「……本当でしようね？ 後から反故にしようつてんなら、容赦しないわよ」

『勿論。これはイギリス清教と博麗靈夢の間の正統な密約であり、決して違えるつもりなどあらず。不安であれば契約書でも一筆しようかしら？』

「ああ、そう。じゃあ——契約しましょうか。あなたと」

そして、その言葉が決定打となつたのか、遂に靈夢は首を縦に振つた。

疑惑は消えていない。だが、もしもローラースチュアートの正体が自分の思うモノであるのなら、契約に叛くことはしないだろう。

たとえ予想が外れていたとしても、その時はその時。イギリス清教ごと葬り去れば解決だ。

『——ほう？』

一瞬、ローラは——否、そのフリをした何者かは固まるも、すぐに先程のように不敵な笑みを浮かべ、しかし先程よりも愉しげだった。

『では、イギリス清教必要悪の教会所属の魔術師、博麗靈夢……何卒よしなに頼もうかしら』

「ええ。よろしく。……後その日本語は早い内に直した方が良いわよ」

『……分かり申したわ』

契約成立。こうして、一時はどうなるかと思われたが、話自体はつつがなく進み、
夢は弱冠15歳にしてイギリス清教必要悪の教会へと招かれる。

——それが吉と出るか凶と出るかは、まだ誰にも分からない。

神裂火織は安堵した。

霊夢が必要悪の教会にスカウトされたのは予期せぬ出来事だったが、どうにか大事にならずに済んだ。

彼女が裁かれることが無くなったのもそうであるが、最悪イギリス清教、延いては魔術サイド全体と学園都市との戦争にも発展しかねない事態であり、そうなれば折角救われた禁書目録にも危険が及ぶためこれを避けられたのは最高最善と言えよう。

「しかし……良かったのですか？ あなたは最大主教を随分と嫌っていた様子でしたのに」

ふと、気になった神裂は今この瞬間から同僚という間柄となった霊夢へ問う。

「あら、気付いてたの？」

「はい。交渉が決裂してしまわないか冷や冷やしました。確かに彼女は信用ならない相手ではありませんが……」

資料によれば1909年から最大主教の地位に君臨する、つまり少なくとも100年以上は生きている魍魎。若く麗しい容姿とは裏腹にその内面は真っ黒で醜悪極まりない。

それでも神裂は最低限の敬意は抱いていたが、禁書目録の記憶についてまんまと騙され、彼女の人生を滅茶苦茶にしたことからその評価は地に墜ちていた。

故に、靈夢がローラースチュアートを嫌う理由はよく分かる。彼女にとって記憶を消すという行為は、その人そのものを殺すのと同義なのだから。

「まあね。勘だけど……あれは多分『敵』よ。私にとつては勿論、あんたらにとつてもね」

「……………？ それは、どういう？」

「機が熟したら教えてあげる。今の所は決して味方だと思わず、また惑わされないように警戒しておきなさい」

それは忠告だった。神裂は困惑しながらもその言い分を飲み込んで頷く。

彼女は聡明だ。自分の知らぬことに気が付いてもおかしくはない。最大主教がろくでもない存在であることは充分に理解していたつもりだったが、もしかするとその得体の知れないさは自身の理解の範疇を超えているのかもしれない。

「インデックスは、この街に残るんだっけ？」

「はい。『上』は大至急連れ戻せと命じましたが、現状は様子見……私たちもあの子をあんな目に遭わせた場所へ連れていくつもりは毛頭ありません」

10万3000冊の魔道図書館が管理から外れたというのに何故そのような寛大な処置になったのかは不明であるが、禁書目録を落ち着かせ、自分たちもそれなりに準備を整えられる期間を与えられたのは僥倖だった。

「ふうん……それで、当麻の所に居候させる訳ね」

「その方が都合が良いかと。私としてはあなたの所でも構わなかったのですが、他の宗派や彼女を狙う輩を變に刺激することになる恐れがあったので……」

「良いんじゃない？ あのと二人は仲が良いし、私も他に当てがないならまだしも、子供の世話なんて頼まれても断つてたわ」

共に暮らすことで上条当麻の記憶喪失がバレるかもしれないが、元より濃密であれ期間は短い付き合いだ。たとえボロが出ても違和感こそ覚えど感付かれることはないだろう。

それを選択したのは上条だ。ならば尊重するしかあるまい。

（ま、ハマした分の責任くらいは取つてやるわ。精々用心棒代わりになつてやろうじゃないの）

今後の方針は決まっていた。上条の本質と不幸体質が何ら変わっていない以上、本人にその気が無くともトラブルはいくらでも舞い込んでくるだろう。

いつもなら御免被るが、彼を守り切ることが出来ず、記憶喪失を防げなかった身としては見て見ぬフリなど出来るはずもなかった。

故に、己が出来得る限りは彼を守ろう。失われた記憶を取り戻す、その時まで――。

「と……ろで……博麗靈夢」

「ん？」

「……何故私たちは飲食店に？」

話が一段落したタイミングで、神裂が訝しげに問い掛ける。そう、先程からシリアスな会話をしてきた彼女たちは実はとあるファミレスのテーブル席に座り、対面していた。

「まだ昼飯食べてないでしょ？」

「それはそうですが……人目もありますし、何もこのような店じゃなくても……」

「だって外食の気分だったんだもん。それにここ、他と比べて値段が安い割に味は悪くない優良店なのよ」

あっけらかんとそう言つて霊夢。そういうことを言っているのではないと困惑する神裂を他所に、彼女は呼び鈴を鳴らして店員を呼ぶ。

「すみません。日替わりランチ一つ。あなたは？」

「え？ で、ではあなたと同じものを……」

「おっけー。それじゃ、日替わりランチもう一つと、コーラと麦酒ビールお願い。あ、一応言つとくけどそちらのお姉さんが麦酒ね」

「え……？」

「かしこまりました」

注文を承った店員が立ち去る。神裂は唐突に追加されたアルコール飲料に戸惑う。

「あの、私はお酒は……」

「大丈夫よ。私が飲むから」

「はい？」

「いやー、助かったわよ。未成年飲酒禁止とかいうクソみたいな法律のせいで大人が同伴しないと酒が簡単に手に入らなくて困るわほんと」

好物は何かと問われて霊夢が真つ先にあげるのは酒だ。如何なる食べ物もすべて酒の付属品に過ぎないと断言できるくらいには酒が好きである。

しかし、この国は未成年の飲酒を法律で禁じている。それは学園都市もまた同じであり、人口の八割が学生なのもあってか酒類の販売は少なく、また取り締まりも厳しい。

これも霊夢が学園都市を嫌う理由の一つだ。日々のストレスや疲労を吹っ飛ばすには酒を飲んで酔うのが一番だというのに。

「本当は日本酒が良いんだけどこの店じゃ麦酒くらいしかまともなのがないし、真つ昼間から居酒屋つてのもねえ……」

「……あの」

「あ、もしかしてあなたも飲みたかった？ なら、また後で頼んで——」

「——私も未成年なのですが」

神裂がそう言った瞬間、霊夢はびしりと固まる。

「え？」

「……………」

「……………因みにお幾つで？」

「一応、今年で18になります」

マジで？ と驚いている霊夢を見て、神裂は露骨に不機嫌になり、物々しい雰囲気纏う。

彼女は大人びた外見からよく年齢を間違えられる。故に、年齢に関する話題は完全に地雷であった。

「……………なんかごめんなさいね」

流石の霊夢もやらかしたと指で頬を掻き、謝罪の言葉を口にする。これが「全然そうは見えないわね」とか「普通に20代後半かと思った」などと発言していれば神裂はぶちギレていたことだろう。

神裂も霊夢に悪気が無いことを理解しているため湧き上がった怒りをどうにか鎮め、しかし霊夢と先程の店員にすらそう見られたことでやはり自分はそこまで年上に見えるてしまうのかと内心ショックを受け、落ち込む。

「因みにステイルは14歳です」

「マジで!？」

年齢は見掛けによらない。それは人間もそうでないものも、変わらないことのようにだ。

「ま、気を取り直して一杯やりましょ? これからインデックスを守っていく団結会つてことで」

「……一般論として、子供がお酒を飲むのは体に悪影響を及ぼす可能性があります。まあ、私の知り合いにも何人か嗜んでいる者も居ますし、今更とやかく言うつもりはありませんが」

「酒は百薬の長よ? 問題なんて何も無いわ」

さも常識のようにそう言つてのける姿に思わず苦笑いを浮かべてしまう。

意外な一面だ。魔術師であり、裏社会を生きる神裂としては別段未成年飲酒を咎めるつもりはないが、それでも彼女の倫理観からすればあまり好ましくない行為である。

けれど、同時に嬉しくも思う。団結会、その形容してくれたという事は彼女は少なくとも自分たちのことを仲間……とまで言うのは烏滸がましいが、共通の目的を持つ同志くらいには思つてくれているということなのだから。

「なあゝにが酒は百薬の長、ですの?」

ですの。ですの。その甲高い声と共に発せられた聞き覚えのあり過ぎる語尾

に、まるで死神の宣告を聴いたかのように霊夢は凍り付く。

そういえば、彼女は自分がこのファミレスをお気に入りとしていることを知っていた。

「げっ」

「げ、とは何ですか、げとは。何日も無断欠勤してるかと思つたら……こんな所で何やってるんですの？」

もう何度見たか分からない鬼の形相を浮かべ、白井黒子が立っていた。

「無断欠勤って、しばらく休むって美緯に連絡したはずだけど？」

「黙らっしゃい！ 有無も言わず通話を切つたくせに！ 理由も無く同意すら得ていないのであれば、無断欠勤と同じですよ！ おまけにいくら電話機を掛けてもお出になりませんし！」

「……忙しかったのよ、色々」と

自動書記との決戦の後、霊夢は事後処理のため数日ほど風紀委員の仕事を休んでいた。

しかし、説明しようにも魔術関連のことなど言えるはずもなく、どうしたものかと頭を捻らせる。

「しかも聞き捨てならないことを聴きましたの。よもや風紀委員が未成年飲酒をしよう

などとお思いで?」

「まさか。酒を頼んだのはそちらのお姉さんよ? ねえ、火織」

「は、はい。その通りです」

話を合わせる、と目配せされ、白井の突然の登場に驚きながらも神裂はそう言う。

風紀委員という単語が出た。記憶している限りではこの街の自警団だったはずだ。

ならば未成年飲酒がバレれば面倒なことになる。

「……あなたは?」

「私は……その、彼女のゆ、友人の神裂火織と申します。そういうあなたは彼女のご知り合いで?」

「古代怪獣ツインテール。身長45メートル体重1万5せ」風紀委員の同僚の白井黒子ですの。いい加減にしないとその口を縫い合わせますわよ? ……しかし、佐天以外にも友人が居ましたのね、あなた」

疑わしいことこの上無いが、事実だとすれば意外であると思う。正直霊夢が誰かと友人と呼び合えるような関係になるほど仲良くなるのが白井には想像出来なかった。

ただでさえ佐天涙子という友人が居ることが驚愕に値するというのは……。

「失礼ね。そりゃ普通は友達の一人や二人くらいは居るもんでしょ、多分」

「……そうですか」

ちらり、と白井は神裂へ視線を送る。

結んで腹部を露出した白シャツに片側が破れたジーンズ……顔付きや言葉使いや真面目そうなのにその格好は霊夢に優るとも劣らず、奇抜でクールビズにも程があった。

（類は友を呼ぶ、ですの？ 流石にこれはしよつぴかれてもおかしくない格好でしょ……）

露出同盟でも組んでいるのか。そんなことを思いながら白井は額に手をやる。

（それに、恐らく強い。上手く隠していますが、あのスキルアウトの大男よりも明らかに格上。この人の交流関係は一体どうなっているやがりますの）

常に重心を崩さず、全く無駄が無い佇まい。一目見ただけで白井は霊夢の友人だと言う目の前の女性が只者ではないことを察していた。

それこそ自身が真っ向からは勝てぬと判断したあの第七学区のスキルアウトのリーダーなどよりもずっと――。

（自宅も留守にしている心当たりのある場所のどこにも居ないから本気で心配していましたが……また、知らぬ所でトラブルに首を突っ込んでいたんですのね……）

容易に察せられる。木山の件といい、風紀委員の奉仕活動の傍ら一体何をやっているのだろうか。

ろくでもないことなのは確かだが、いくら問い詰めたところではぐらされるのは明

白。故に、白井は敢えて何も訊かなかった。

神裂火織。後で初春に頼んで調べてもらおう。

「とりあえず……今からでも支部に戻ってくださいまし。『能力者狩り』と連続『切り裂き魔』事件で人手が足りませんの」

「えー」

「さっさと来るんですの！」

往生際の悪い霊夢を怒鳴り付ける白井。それを前に神裂はどうしたものかとオロオロするばかりだった。

「ハア……分かったわよ。という訳だから、悪いけど行かせてもらおう」

「わ、分かりました。お構い無く……また何かあれば連絡します」

折れたのは霊夢の方だった。もう少し今後の方針について話し合いたかったが、最大主教との交渉という最も重要な用件はもう済んだので神裂も同意し、立ち上がって白井へついて行く彼女を見送る。

「……あ、そういえばこの店のお代は——」

気付いた時には、二人の姿は無かった。

その後、先に会計が済ませてあるなんてことはなく、日替わりランチ二食を完食した神裂は泣く泣く自腹を切るのだった。

鮮血が、飛び散る。

とある路地裏の一角。普段ならばスキルアウトたちがたむろし、犯罪には事欠かさないこの場所は、真つ昼間にも拘わらずしんと静まり返っていた。

否、つい先程までここはいつもよりも騒がしく、そして悲鳴が響き渡っていたのだ。

「……………」

死屍累々。血溜まりの上に何人ものスキルアウトが地に伏しているその光景は、学園都市だと存外見慣れた光景ではあるものの、唯一違う点は彼らが皆等しくその命を奪われていることだろう。

加えて、今回ばかりは彼らに非は無い。彼らはここで何もせず、或いは何かをしようとする前に、ただ運悪く鉢合わせてしまい、無惨にも殺された。

「……………脆い」

この惨劇を引き起こした張本人は小さくそう呟くと、死体の山には目もくれず、路地裏の奥へと消えていく。

脅威は確実に、迫っていた。

切り裂き魔

「——能力者狩り？」

あの後、久々の酒への名残惜しきを感じながら白井に支部へと連れて来られた霊夢は眉をひそめて聞き返す。

「はい。そのような事件が多発しておりますの」

「ふうん……やっぱり夏は馬鹿共がはしゃぐわねえ……」

幻想御手事件が収束し、しばらくは平穏な日々が訪れるかと思いきやまた新たな事件が起きていた。

無能力者狩りは別段珍しくもなく、霊夢が風紀委員を辞めるきっかけにもなった事件であるが、能力者狩りとは珍しい。それに詳細を訊けばターゲットは低位の能力者だけでなく強能力者や中には大能力者も含まれており、尚且つ成功させているのだから異常性は高かった。

“AIMジャマー”でも使ったのだろうか。恐らく犯人は凶に乗ったスキルアウト共。元より高位の能力者に対抗するだけの戦力のある駒場の一派は今更そのような暴

走はしないだろうし、彼らとは別グループだろう。

その推理を告げれば白井も頷く。

「私もそう思っていましたの。被害が起きたのは第十学区とその周辺が多かったことから恐らくその区域を根城としている連中かと」

「なら、そこから辺で張り込むなりおびき寄せるなりして取っ捕まえれば終わりね」

「ええ。上手く行くかはともかく、それが妥当な案ですよ」

「うーん……もう少し事態を見守ってから動いた方が良いのではないですか？」

腕に覚えのある二人がそんな作戦を練っていると、傍らでそれを聞いていた初春が悩ましげな表情でそう言った。

「そうね……正直、この事件は私も慎重に動いた方が良いと思うわ」

その提案に固法も同意を示し、対して白井は首を傾げた。

「何故ですか？」

「嫌な予感があるのよ。能力者を率先して狙うも何も、まずどうしてその人が能力者だと分かったのか、とかね」

「しかし、被害者が増え続けるようでしたら我々も動かない訳には……」

「だからこそ慎重に動かないといけないのよ。私たちが被害者になるのだけは避けな
と」

その通りだ。風紀委員までもが敗れた、なんて一般人に思われたら面子が丸潰れだ。理解はしていても納得は行かなかったのか白井はぐぬぬと顔をしかめる。

「何だ、それなら私は問題無いじゃない」

すると霊夢があっけらかんと言いつつ。

「え？ あっ……確かに博麗さんは能力使えなくても強いですもんね」

「でも、あなたって能力による推進力とかで打撃の威力を上げてるんじゃないの？ 機

動力とかも」

成程と手を叩く初春とは違い、固法は神妙な面持ちでそう尋ねる。

「はあ？ 誰から聞いたのよ、それ」

「いや単に私の考察だけ……違うの？ じゃあ、どこにそんなパワーが……」

固法は霊夢の人間離れた強さを能力による補助によるものと独自に分析していた。良い線行っていると思っていたのだが、この反応からしてどうやら違うようだ。

「そりゃ普通に霊力こめて……いや、まあとにかく別に不良共をボコるのにそんな小細工いらないでしょ。少なくともそんな方法で使ったことないし」

「そうだったの……え、じゃあ素であるの身体能力ってこと？ 細身に見えて筋肉の塊な

のかしら」

「……ゴリラですの？」

「あん?」

酷い言われ様だが、彼女らの言葉はごもつともである。何せコンクリートをぶち抜いたり銃弾を避けたりと高位の肉体強化系能力者も真つ青な馬鹿げた身体能力を度々見たことがあった。

今ではすっかり感覚が麻痺してしまっているが、普通に考えたらおかしい。

「まあ、無意識って可能性もあるけど……それじゃあ事件の取り締まりは博麗さんに任せて私たちは情報収集しましょうか」

「そうですね。私はネットの情報を漁ってみます」

「……私も、体術にはそれなりの心得が」

「囲まれたら無理でしょ」

「うぐつ……」

霊夢への対抗心からか白井は不服げだった。元より現場主義な彼女からすれば直接解決にあたれず、よりもよって霊夢に任せっきりになるのは嫌なのである。

しかし、固法が許してくれるはずもないのでどうしようもない。

「はいはい。とつとと捕まえてくるわよ」

能力者狩り。物騒ではあるが、魔術師絡みと比べれば断然楽であり、箸休めに等しい。

しばらくは楽しさせてもおうと霊夢はわりと乗り気であった。

「……それと、これはもう警備員アンチスキルが担当の事案になるんだけど博麗さんにも一応言っておくわ」

「ん？」

すると固法が切り出す。白井や初春も心なしか先程よりも真剣な顔をしていた。

「——連続切り裂き魔事件。〃学園都市のジャック・ザ・リッパー〃なんて呼ばれて世間を騒がせている連続殺人鬼よ」

始まりは三日前。とある路地裏でかなり大きな刃渡りの刃物で身体を切り裂かれたと思われる一人の女子学生の遺体が発見された。

殺人事件として警備員が捜査を担当するも程無くして同じように殺害された遺体が別の場所で見つかり、その翌日、翌々日にも同様の事件が発生した。

被害者の数は8人にも上り、その性別、年齢、学校、能力も全部別々で特に関係性は見受けられなかったが、傷口からどの事件でも凶器の形状が完全に合致したことから警備員は同じ人物の犯行だと断定。この事件を連続無差別通り魔事件だと結論付けた。

この学園都市で起きた連続殺人事件。しかも世界的に見ても優秀とされる日本警察をも上回る最先端の捜査能力を持つはずの警備員が未だに容疑者の影も形も掴めてい

ないという事実には世間は震撼し、恐怖と話題性を以て19世紀末に霧の都ロンドンに現れた正体不明の殺人鬼から取って名付けられたのが切り裂き魔——“学園都市のジャック・ザ・リッパー”だった。

(……私がインデックスの件で色々とやつてる間に、そんなイカれた奴が出てきてたのね)

路地裏を歩きながら、道理で警備が嚴重になっている訳だと霊夢は納得する。

各地に増設された監視カメラ、定期的にパトロールする警備員たち。捜査しつつもこれ以上被害者を出すまいと彼らは奮闘していた。

お蔭で普段たむろしている不良の数も少なく、カメラの死角で細々とやつている。こんな中で能力者狩りなんて蛮行を行っているのは一体どこの馬鹿なのだろうか。

(むしろ隠れ蓑になるから都合が良いのかも)

切り裂き魔の捜査に全力を注ぐ中、能力者狩りに構ってやれる程の余裕は警備員には無い。それは敵が風紀委員だけであることを意味し、能力者狩りにとって非常にやりやすいのかもしれない。

どちらにせよ、傍迷惑な話だ。

あまりにも手掛かりが少ない。犯行グループを特定するに足り得る情報が無い以上、歩き回って現行犯で取り締まるしかなかった。

故に、こうして適当な路地裏を徘徊しているのだが……。

(ま、避けられるわよねえ)

博麗霊夢、正確には「鬼巫女」の名はスキルアウトの間では有名である。

スキルアウトの団体を幾つも壊滅させるだけでなく、無能力者狩りを邪魔した報復として襲撃してきた強能力者、大能力者を含んだ集団を一方的に叩きのめし、病院送りにしたなどという逸話を聞けば、誰が好き好んで関わろうとするだろうか。

そのためただでさえ少ない不良たちはその特徴的な紅白を視た瞬間にそそくさと逃げてしまう。

偽者かもしれない。しかし、本物だったら最悪病院送り。というか彼女以外に恥ずかしげもなくあんな格好をするような奴なんていない。

そんな訳で数日後にどこかのハンバーガーショップで食い倒れる影の薄い少女はその巫女装束から鬼巫女ではと恐れられ、不良に絡まれなくなるのだが、それはまた別の話。

(これなら制服とかで変装した方が良かったかしら。……いや、絶対その方が良かったわね、次からそうしよ)

所謂囹捜査。実際それが一番手っ取り早い。尤も、目当てのスキルアウト以外が絡んでくる可能性もあるが、そこはまあ風潰しだ。

「——ん?」

その時だった。曲がり角付近で何やら騒ぎ声が聴こえてくる。

何事かと覗き込んでみると——。

「……何やってんの?」

「ん? おおっお前はっ!」

何やら一人の男がスキルアウトの集団と殴り合いの喧嘩をしていた。その男は霊夢に気付くと気さくな笑顔を浮かべ、手を振ってくる。

よく見れば、知っている顔だった。

「美緯の元カレじゃない。釈放されてたんだ」

黒妻綿流。かつて、第十学区とその一帯のスキルアウトを取り纏めていた人物であり、あの固法美緯と交際していた相手である。

「おう、久しぶりだな! 鬼巫女の嬢ちゃん!」

黒い革ジャンを着込んだ男——黒妻は再会を喜びながらスキルアウトを一人、また一人と殴り倒していく。

「くそっ! また来たぞ……!」

「能力者か? なら、あれを使い!」

「あ?」

そんな光景を眺めていると、リーダー格らしき男がそう叫び、どこからともなく黒板を爪で引つ掻いたような耳障りな甲高い音が周囲に響き渡る。

「喧しい」

「ぐはあっ!?!」

しかし、霊夢は多少顔をしかめるだけで構わず指示した男へ近付き、蹴り飛ばす。

「効いてない!!? こいつも無能力者か!?!」

「ちっ! 囲め囲めえ! 能力者じゃないならタコ殴りにしろ!」

騒然とするスキルアウトたち。成程……この音が能力者への対抗手段か。確かにやたらと耳障りで不快だが、動けない程ではないと、霊夢は些か拍子抜けした。

「あれ? 嬢ちゃん、異能力者^{レベル2}じゃなかったっけ?」

「私にあんなのが効くとも?」

「だよな! ヒュー、流石だな!」

「とりあえずコイツら全員捕まえるから、話はその後にしましょう」

「おう! 助かるぜ!」

ただでさえ黒妻が一人で圧倒していたというのに、そこに霊夢までもが加わった。

結果は誰から見ても明らかであり、瞬く間に10人近く居たスキルアウトたちは全滅してしまう。

「ちっ……外に居た連中は逃げたわね」

辺りに気絶したスキルアウトたちが転がる中、霊夢は舌打ちする。気付くのが遅れたが、路地裏の外に車を停めていたらしく、霊夢が戦っている間に不利と判断して逃走したようだ。

恐らくその車内に、能力者を無力化する音を発する何かがあったのだろう。

「ふう……いやあ、やっぱり無茶苦茶強いな嬢ちゃん」

「あんたも変わりないようね」

あの時はかなり酷い怪我をしていたが、どうやらその腕っ節の強さは変わっていないようだ。

何の装備もなくステゴゴで殺り合えば駒場にも勝てるのではないか。それが霊夢の黒妻への評価であった。

「……で、何で喧嘩してたの？」

「ああ、それは……」

「この殿方が、危ないところを助けてくださいましたの」

すると物陰から長い黒髪の少女が現れる。白井や御坂と同じ常盤台の制服を着ていたことから能力者狩りのターゲットになっていたということは容易に想像出来た。

「あなたは？」

「失礼。私、婚後光子と申しますの」

何故か扇子を片手に持った、如何にもなお嬢様。ですのですの喧しい白井といい、常盤台とやらの生徒は皆このような口調なのだろうか。

……いや、少なくとも御坂は普通だったし、もう一人の知り合いも今時風のアホっぽい喋り方だった。

「危ないところだった、ってことは能力がやっぱり使えなかったの？」

「え、ええ……先程の耳障りな音を聴いた瞬間、頭痛がして能力が使えませんでした」

「そう……」

どうやら虚仮威しではなく、本当に効果があるようだ。あれを使え、という発言からして装置か何かだろうか。

通常、能力を使うには脳内で高度な演算を行う必要がある。それが必要の無い霊夢も問題無く動けたとはいえ確かに頭が痛くなる程の音。これが普通の能力者にはより過剰に聴こえてしまうとなると、演算が妨害されて能力の使用が困難になる……素人なりに考えた推理だが、AIMジャマーなんてものが存在する以上、可能性は大いにあると言えよう。

「……あの」

「んっ？」

「こちらが名乗りましたので、そちらも名乗るのが礼儀ではなくて？」

「あー？ ……博麗霊夢よ」

名を尋ねられ、片眉を上げながらも霊夢は名前を教え、腕章を見せる。

「風紀委員の方でしたのね。危ないところを助けていただき、本当にありがとうございます。あなたも……あれ？」

「ん？」

「あの殿方は何処へ？」

先程まで居た黒妻の姿が見えず、きよろきよろと辺りを見回す婚后。霊夢も気付いて面倒臭そうに額に手をやる。

「……逃げやがったわね、あいつ」

大方捕まると思ったのだろう。今更スキルアウト同士の抗争程度でしょっぴくつもりは無かったのだが……。

とりあえず霊夢は裾から携帯を取り出して支部へと連絡する。

「もしもし？ 私よ」

『もしもし。何か情報が掴めたんですの？』

「あー、黒子？ 早速だけど現場をpushしたわよ、能力者狩りの」

『もうですか？ ……相変わらず仕事が早いことで』

電話に出たのは白井だった。

「黒子って、それにその声、まさか白井さんっ!？」

「あん? 知り合いなの? ってか同じ学校だし、そりやそうか」

『どうかさないましたか?』

「被害者がトキワダイの生徒であなただけのこと知ってるみたい。近藤峰子って言うんだけど——」

「ちよーっ! は、博麗さん!? 白井さんに言うのだけはやめていただけます!? と

いうか婚・后・光・子ですわ!」

「はあ? 何ですよ?」

「なんでもです!」

『……思いつきし聴こえますわよ、婚光子』

急に慌てふためく婚後に霊夢は怪訝な表情を浮かべる。一方、それを聞いて白井は電話越しで小さくほくそ笑んだ。

婚光子とはライバルという言葉が一番しっくり来る関係でいつもいがみ合っている。そんな彼女が詳細は分からないが無能力者にやられそうになった、ということなのだから。

『で、何があったんですの? そちらの方は一応大能力者の空力使いなのでスキルアウ

ト風情に遅れを取るとは思えないのですが……」

後で盛大にからかってやろうと思いつつ、今は報告を聞くべきだと判断し、問いかける。

「なんか変な音を聴いたら能力が使えなくなつたみたい」

『成程……他の被害者たちの証言と一致してますわね。あなたは平気でしたの?』

「ええ。耳障りだったけど動けなくなる程ではなかった。予想だと超音波か何かで演算を妨害しているんじゃないかって思うんだけど」

『音波で演算を……確かに有り得る話ですの。とりあえず私たちも現場へ向かいますので場所を教えてくださいませんか?』

「おつけー。後、美緯にも伝えといてくれない? あんたの元カレも居たからって」

『分かりましたの。固法先輩の元カレが……はっ!? 元カレえ!?!』

「じゃ、よろしく。場所は——」

思わぬ発言に驚愕する白井を気にも留めず、そのまま現場の大まかな住所を伝えると霊夢は通話を切った。

「ううっ……よもや白井さんに……恥ずかしいですわ……」

「よく分かんないけど御愁傷様」

見るからにプライドが高そうだし、能力を封じられたとはいえスキルアウトに遅れを

取ったのは相当ショックだったのだろう。況してや知人に知られたくないと言うのは当然であった。

「ま、次からは気を付けなさいよ。なんか切り裂き魔つても彷徨つてるらしいから」
そう言い、霊夢は婚后へ背を向ける。

「? あの、何処へ……?」

「逃げた馬鹿を探してくる。もう少ししたら黒子が来ると思うからそこで待つて。金剛寺さん」

「え、ちよつと……つて婚后ですわ!! 何回間違えるんですの!?!」

能力者狩りが多発しているのは第十学区周辺。黒妻が取り纏めていたスキルアウトのグループ……名前は忘れたが、蜘蛛をシンボルとしていた連中が主に活動していたのも第十学区だった。

単なる偶然かもしれないが、そうでないとすれば。黒妻は何かしら知っている可能性があるとし、霊夢はその行方を追う為に飛び立つ。

だが、今はそれよりも――。

「なつ、飛んだ……? 能力者だったのですして? あれ、じゃあ何故さつき……!」

一方、空飛ぶ霊夢を見て彼女が能力者だと知った婚后は何故あの妙な音が平気だったのかと、白井がやって来るまで頭上に疑問符を浮かべていた。

「……………」

それを、何者かが見ていた。

静かに、気配すら感じさせず、しかし確かにその身の内に殺意を宿したソレは婚後を無視し、霊夢が飛び立った方角へ目を向け、歩みを進める。

婚後、そして足下に転がっているスキルアウトたちは幸運だった。

ほんの少し、タイミングが合わなければ、彼女たちは物言わぬ亡骸に成り果てていたのかもしれないのだから。

「誰よ？ あんた」

「!!」

そして、婚後から充分に距離が取れた場所にて。その者の背後から霊夢が声をかける。

彼女はとつくに気付いていたのだ。殺意を押し殺しながら、虎視眈々とこちらを狙う刺客の存在に。

「……………」

「ふうん……見えづらい。幽霊みたいな奴ね」

その姿は、まるでモザイクが掛かっているように酷く不鮮明で、辛うじて人の形をしているのが分かる程度だった。

何かしらの方法で自身の正体が分からないように偽装している。能力によるものか、はたまた霊装か何かか……後者ならばまた魔術師絡みということになるので勘弁してもらいたい。

「あんたが切り裂き魔って奴？ まさかこんな白昼堂々と襲ってくるなんてね」

上手く隠している殺気。この距離からでも伝わってくる鼻につく血の香り。そして、その手に持つ唯一はつきりと認識できる一本の刀……状況証拠としては充分に過ぎる。

霊夢の問いに、その者——切り裂き魔は何も答えず、しかしこちらへ向けた刀の切っ先が、確かな返答だった。

「そ。なら、その化けの皮を剥がしてやるわ」

どこからともなく大幣を取り出す。それが開戦の合図となったのか、切り裂き魔は剣先を向けたままゆっくりと引き絞る。

「……………」
そして、そのまま大地を蹴り、勢いよく一気に突き出した。

弾丸の如きスピードで放たれた刺突。狙い澄まされたそれは霊夢の心の臓を穿たんと迫り——。

「……………」

寸前で踏み付けられたことで受け流され、アスファルトの地面に突き刺さる。切り裂

き魔は僅かに瞠目し、己の愛刀を文字通り足蹴にする不届き者を睨んだ。

「へえ……速いわね」

「……見事」

同時に衝撃が走り、互いに後退する。

霊夢はどこか感心した様子で、ここで初めて言葉を発した切り裂き魔と視線を交わす。

「一応訊くけど、神裂火織って名前に聞き覚えある？」

「——無い」

「でしようね」

刀を扱い、尋常ならざる身体能力という共通点。恐らく違うと思いつつも駄目元で尋ねれば律儀にも切り裂き魔はそう答えると共にこちらへ斬り掛かる。

霊夢はこれを受け止めようと大幣を振るい、僅かにそれが触れたと同時に飛び上がり、距離を取った。

（ツ——危なっ、そのまま叩つ斬られるとこだった）

そこらの刃物ならいくらぶつかり合おうと傷一つ付かない大幣が、あのままなら容易く切断されていたことを確信する。

加えて、その切れ味もあるが、純粋な膂力は遥かに上。少なくとも神裂と同等であり、

彼女よりもその業は研ぎ澄まされていた。

(……面倒ね)

接近戦は圧倒的に不利。そう判断した霊夢は早々に遠距離戦法へと切り替え、大幣をしまつて針と札を取り出す。

尤も、切り裂き魔の正体が能力者か魔術師か分からない以上、不用意に夢想封印やらをぶつ放すことは出来ないが――。

「……互いに、不自由だな」

「あん？」

そんな心情を見透かしたように、切り裂き魔は言った。これに霊夢は眉をひそめる。先程まで無言だったくせに、意外にもやたらと喋る。

その声も雑音交じりで不鮮明であるが故に、酷く不愉快であった。

「は。じゃあ、大人しくボコられて捕まってよ」

若干の苛立ちを覚えながら霊夢は針を投擲する。切り裂き魔はこれを刀を素早く振るつて難なく弾き落とす。

するとすぐに第二陣が放たれた。これも弾き落とそうと刀を構えると――今度は無数の札が切り裂き魔を取り囲んだ。

「ちっ――」

捌き切れない。即座にそう判断した切り裂き魔は一部を斬り捨てると迫り来る弾幕の隙間を掻い潜ってこれらを回避する。

「——そー！」

次の瞬間。狙い澄まされた針が一本、切り裂き魔の肩口を貫いた。

「ぐっ!?!」

激痛に切り裂き魔の動きがほんの僅かであるが、止まる。一瞬にも満たないその隙は霊夢にとって充分過ぎるものであり、即座に背後へ回り込んで針を腕や太股へ向けて投擲していく。

刀一本ではすべて捌くことは出来ない。——が、必中かと思われたそれらの攻撃が届くことはなかった。

「……もう一本持ってたのね」

もう片方の手に握られた、脇差のような長さの一振り。それで針は弾き落とされてしまふ。

霊夢は心の中で舌打ちする。出来ることならば先程の一撃で終わらせたかった。

「……不覚を取ったか」

突き刺さった針を躊躇無く引っこ抜き、投げ捨てた切り裂き魔は霊夢を見据えながら、静かにそう呟く。

そして、今度は刀を二本——即ち、二刀流の構えを取った。

「ふん……それが本氣つて訳？」

霊夢は鼻を鳴らす。その構えを目の当たりにした時から彼女は先程まで抱いていなかった妙な感覚に襲われる。

——それは確かな既視感だった。

「然り」

ゾクリ、と寒気が走った。

自身が氣圧された事実に瞠目しながら、霊夢はこの瞬間から膨れ上がった殺意へ対応する為に魔力を練り上げる。

神裂の時とは違う。慢心など捨て去った霊夢は今度こそ出遅れることなく、カードを切った。

——未来永劫斬——

——夢想封印 瞬——

無数の斬撃と、極彩色の光弾が入り乱れる。

辻斬り

ひらりひらりと、桜の花弁が舞い散る。

美しく咲き誇る、空一面を埋め尽くす花吹雪とは裏腹に春の暖かさも生気を全く感じさせない、暗く冷たい異界。

おおよそ人の住めるようには思えないその場所に、貴族が住まうような立派な屋敷があり、その先の庭園には一際大きな桜の樹が聳え立つ。

それは壮大で生命に満ち、しかしまるでその内側にある恐ろしくおぞましきナニカを覆い隠しているようだった。

「この不吉な感じ。あんまり喜ばしくないわね」

——そこへ至るまでの長い石階段にて、二つの人影が対峙している。

「みんなが騒がしいと思つたら、生きた人間だったのね」

片や空を飛ぶ紅白の巫女。片や人魂をその傍らに漂わせる二刀流の剣士。

赤と緑。黒髪と白髪。何もかもが対照的な容姿をした二人の少女たちが睨み合い、言葉交わす。

「まさかと思つたけど、ここつて……」

「昔は生きてた者が住む処よ」

「あの世？ やつぱりお呼ばれしてたのかあ」

「あなたはまだお呼びではない」

少女たちは、少なくともこの時点では敵同士だった。にも関わらず殺伐さはなく、互いに減らず口を叩き合う。

特に巫女の方には殺意すら無く、それが剣士は気に食わない様子で目を鋭くさせる。

「ともかく、あとほんの僅かの春が集まればこの^{????}が満開になる。あなたが持ってきたなけなしの春が、満開までのあと一押しをするつてもものよ」

春——彼女がそう称するそれは即ち、人が持つ生命力のことであり、それを奪わんとしているということは、少なくとも彼女の方は、巫女を殺すつもりだった。

すべては、主の悲願の為に。他者の命を奪う結果になろうとも、元より生死が曖昧な彼女に躊躇は無く、疑問にすら思わない。

「あの世で死んでも、あの世に逝くのかしら」

「あなたは地獄逝き」

「ここは地獄じゃないのね、と向けられた殺気を軽く受け流しながら呑気にそう呟く。

しかし、決して無防備ではなく、既に臨戦態勢を取っており、相手が先に仕掛けてく

るのを待ち構える。

そして、剣士はこれに応じた。

「……妖怪が鍛えたこの『楼観剣』に斬れぬものなど、あんまり無い！」

そんな何とも格好が付かない宣言と共に、戦いの火蓋は切られる。

これが初めの出会い。勝ったのは――。

「……ふ、ふふっ」

遠い、遠い遠い追憶。僅かに垣間見た臆気な断片。ふらふらと覚束ない足取りで薄暗い路地裏を歩きながら少女は笑みを浮かべる。

「知らないけど、知っている。知っているけど、知らない」

偶然見かけた時から、予感はしていた。あれと戦えば、斬り結べば何かを掴めると、この行き当たりばったりな状況を打破できるかもしれない。

結果、感じたのは懐かしさ。あの紅白巫女が誰なのかは思い出せないが、それでも知り合いなのは確かであり、同じ境遇の可能性が高かった。

故に、少女――世間から俗に切り裂き魔、学園都市のジャック・ザ・リッパーと呼ばれている連続殺人鬼は己がやってきたことは決して間違っていないのだと確信する。

「斬れば、わかる」

「なーにが斬ればわかる、だよ。バツタバツタ殺しまくっちゃって、お蔭ですつごい騒ぎになつてんじやん」

すると背後から茶化すような声がある。振り返つてみるが、そこにはほんのりと薄暗い闇のみが存在するだけで人の姿はどこにも無かった。

しかし、確かにそこには何かが存在しており、切り裂き魔は顔をしかめる。

「……死体の処理は、そちらの役目では？」

「手当たり次第に殺り過ぎて追い付かないのさ、辻斬りさん？　むしろ八人しかバレてないんだからよくやっている方だと思っただけだなあ〜」

そんな抗議の声を心底つまらなそうにしながら切り裂き魔は聞き流す。

元よりこちらから頼んだ覚えはなかった。彼女からすれば切り伏せた死体が見つかつても何も困らず、いくら騒がれようと知つたことではなかった。

むしろそれで強者が集まるのであれば僥倖。この街に蔓延っている連中は、あまりにも斬り応えの無い有象無象ばかりだ。

「役目を果たせていないのであれば無能と言う他無いでしょう。斬りたいモノを斬る……私はただ、それだけに過ぎません」

「うへー、イカれてるね。けどそんなこと言つて今回は仕損じたじやん。見てたよ」

「……………」

無能と言われ、気に障ったのか声の主がそう悪態をついた次の瞬間、凍てつく刃のような鋭い殺気が空間を包み込んだ。

「ひー、ちよ、ごめんごめんって！」

これに声の主は顔を青ざめさせ、後ずさった。死神の鎌を首元に押し当てられているような感覚に陥り、脂汗が止まらない。

視線だけで人を殺してしまいそうとは、正しくこの事なのだろう。

「……次は斬る。必ず斬る」

静かに気を昂らせ、切り裂き魔は己が刃が届かなかったかの巫女の姿を思い返す。

その有り様は、優雅に舞う二色蝶。斬り応えの無い連中ばかりかと思つた矢先に現れた極上の相手。

果たして何者だろうか。自身にとって好敵手と呼んでも差し控えない彼女に切り裂き魔は想いを馳せる。

まあ、いずれにせよ――。

「斬れば、わかる」

何度も復唱する。今までも、これからも、師の教えをただ愚直に信じ、少女は進み続ける。

その果てに、何があるとも知らずに。

「な、何なんですか、これ……」

「……戦争でもあつたじゃん？」

二人の警備員^{アンチスキル}、黄泉川愛穂と鉄装綴里。通報を受けて駆け付けた彼女らは目の前に広がる光景に驚愕する。

周囲の壁や地面のあちこちには地割れのように抉れた破壊痕が刻まれており、切り崩された建物の瓦礫が散乱するそれは宛ら爆弾テロでも起こったかのように元の路地の面影など微塵も無かった。

警備員として多くの事件を担当し、現場を訪れた彼女たちであったが、ここまでの凄惨な現場は初めて見る。高位の能力者同士の抗争でもこのような有り様にはなりやしない。

「崩落事故か？ 一体何が起きて……」

「あ、黄泉川さん！ お待ちしております！」

困惑していると少し離れた場所から男が手を振ってくる。この近辺を担当する部署の同僚だ。どうやら一足先に駆け付けていたらしい。

「被害者の子の知り合いなんですよね？　あなたもちよつと聴取の方お願いできませんか？」

「何？」

被害者……？　と首を傾げながら黄泉川が示された方角へ視線を向ければ、一人の少女が瓦礫の上にゆつたりと座り込んでいた。

「や。黄泉川先生」

その姿を見て、黄泉川は目を見開く。

「……博麗？」

そこに居るのは間違いなく自身が勤める高校の生徒、博麗霊夢。彼女は瓦礫の上に足をふらふらさせながら座っており、何食わぬ顔でこちらへ挨拶する。

「どういふことじゃん？　被害者ってのは一体……」

「えつと……なんでも例の連続無差別殺人事件……その犯人だと思われる人物に襲われたそうで……」

「はっ。」

同僚の説明に、黄泉川と鉄装は耳を疑う。

「え？　ちよ、ちよつと、待つてください、ととと、ということはじゃあまさかこれってッ
!？」

「——切り裂き魔の野郎が、やったってことか？」

愕然とする二人。この大地震でも起きたかのような凄惨な現場を、あの世間を騒がせる連続殺人鬼が作り上げたのだというのだ。

その様子を見て同僚はうんうんと頷く。彼らも最初に話を聞いた時は信じられなかったし、実のところ今現在も半信半疑なのだから。

「……じゃあ、その推定切り裂き魔はどこに行つたじゃん？」

「逃走した模様です。現在、周辺区域一帯に検問を張つて隊員を巡回させています」

「ええ。まんまと逃げられたわ。建物の崩落に乗じて、ね」

鉄装よりも先に落ち着いた黄泉川が尋ねれば同僚はそう答え、霊夢がそれに補足する。

「……そうか」

俄には信じ難い。破壊痕から能力を推察しようにも、浮かび上がった候補でこれだけの規模の破壊を行うとしたらその出力は大能力者^{レベル4}でも上澄み^{レベル5}——下手すれば超能力者^{レベル5}クラスにも匹敵する。

(相変わらず出鱈目じゃん、こいつ)

——そんな存在と一戦交えて、目の前の少女は何故こうも平然としてられるのか。

つい先程まで凶悪犯と命のやり取りをしていたにも拘わらず、その身に傷一つ無く、精々衣服に土埃が僅かに付着しているくらいだった。

「せ、先輩……この子って幻想御手事件の時にあの木山と戦ってた子ですよ？ 知り合いなんですか？」

「教え子じゃん。クラスは違うが」

「あ、そうだったんで……へっ？ け、けど先輩のこの学校って確かその、能力のレベルが低い子が通う所じゃ……」

「……色々と込み入った事情があるじゃんよ」

戸惑う鉄装に黄泉川もどう説明したものかと頭を悩ませ、そう誤魔化す。

元より霊夢が高い格闘能力を有しているのは知っていた。まだ彼女が風紀委員として活動していた頃、スキルアウトの大群はおろか大能力者の凶悪犯すらも単独で取り押さえていたのだから。

それに以前から霊夢が身体検査システムスキャンの際に手を抜いて能力のレベルを偽っているのではという話は小萌から聞いていた。

しかし、あそこまでの実力を隠していたとは流石に予想していなかった。複数の能力を操る木山を相手に互角どころか圧倒する戦いぶり。よくもまあ今の今まで隠し通せ

たと感心すら抱く。

「で、犯人の特徴は？」

「背丈は私より少し下。歳は……分からないけど見た目は私より幼かったと思う。服装は、そう、緑色の服を着てたわ。んで刀を二本持つててそのうち片方は脇差だったわ」

「刀？」

「そうそう。だから切り裂き魔よりも『辻斬り』、つて呼んだ方が良いかも」

ふむ、と黄泉川は顎に手を当てる。呼び方はどうでもいいが、凶器はかなりの刃渡りがある刃物と推測されていたため刀というのはその特徴に合致するし間違いないだろう。

しかし、まさか刀二本でこの惨状を作り上げたともいうのか。

「それと性別は……多分、女ね」

「多分？ 随分と曖昧じゃん？」

「顔を隠しててよく分かんなかったのよ、声もくぐもつてたし」

「……………」

——何か隠している。

外見で年齢について言及しておきながら一番分かりやすい性別は曖昧という僅かばかりの矛盾に対して黄泉川は不審に思った。

虚偽の供述をしている訳ではないにしろ、何かしらの情報を隠匿しているのは明らか。しかし、問い質すには根拠が少なく、誤魔化されて終わりだろう。

「ま、気を付けなさい。あなたたちが追う切り裂き魔つてのは少なくともこんくらいのことをやってのける。それに、人を殺すことに微塵の躊躇も無い……そこの不良や能力持ち相手のように対応していたら、死人は増えるばかりよ?」

そんな疑いの目に気付いていないのか、或いは気にも留めていないのか霊夢は瓦礫の山を指差し、どこか他人事のように言う。

「つ……忠告感謝するじゃん」

これに黄泉川はそう言うしかなかった。確かにこれだけの力を有する能力者ならば今のように警備員のパトロールを増やしたところで返り討ちに遭うだけなのは明白。現在よりも強力な武装で身を固めて臨む必要があった。

そして、それでも捕縛出来る見込みは薄い。どうしたものかと黄泉川は一考するも、明確な解決策は思い浮かばない。

「で? 聞きたいことはそれだけ?」

「おう。今のところはな……他に知りたいことがあつたらまた連絡するじゃん」

「そ。じゃ、私は仕事に戻るわ」

そう言い、霊夢は飛んだ。

ふよふよと飛び去って行く彼女の後ろ姿を見送りながら、黄泉川は溜め息を吐く。

殺人鬼に襲われ、一戦交えたにも拘わらずあまりにも平然とした様子に現場の警備員たちは最後まで困惑していた。

「なんか……掴み所が無い子でしたね」

「……少なくとも悪い奴ではないじゃん。ちよいと危うくはあるが」

「え？」

そう、霊夢に悪意は無く、これまでの行動を見ればむしろ“ヒーロー”と称賛するべきほどこだ。

然れど、それは偶発的なもの。単に彼女は己が欲望に忠実なだけであることを黄泉川は知っていた。

ただ思うがままに動き、己が気に食わぬモノを拒み、容認せず、看過することが出来なかつた結果である。

故に、黄泉川は危惧する。もしも彼女のこちらへの認識が変異し、明確な敵意を向けてきたら……何ともまあゾツとする話だ。

恐らく、彼女は僅かなきっかけがあればその境界線を容易く、何の躊躇も無く踏み越えてしまえるのだろう。

「……………」

一方、そんな黄泉川の心境を露程も知らない霊夢は神妙な面持ちになる。

(……あの辻斬り、一体何者なのかしら?)

無数の斬撃が襲い来るあの刹那。霊夢はその塗り潰されるように隠蔽し尽くされた貌を、ほんの僅かであるが、垣間見た。

知らない顔だ。或いは、思い出せない。

なのに頭から離れず、違和感ばかりが残る。あの剣、あの業を目撃した瞬間には、あれが己が待ち望んだモノではないかと確かに予感がしたのだ。

故に、だからこそ、記憶に無いからこそ、もしかすると、もしかするのではないかと
思ってしまう。

(期待しては駄目、今までもそうやってぬか喜びしてきたじゃない)

その影を追い求め、僅かな片鱗すら見逃さず、霊夢は探し続けた。それはこの科学の街である学園都市でも変わらず、その度に今回は、今度こそはと何の根拠も無く思ってしまう。

けれど、残ったのは、失望だけ。幻想ゆめまぼろしなど夢ゆめ、この世界の何処にも在りはしないと
いう現実を叩き付けられた。

幻想猛獣の件といい、有力な手掛かりであることには違いないが、期待すればそれだけ裏切られた時のショックが大きいことはとうに理解している。

ああ、それでもやはり――。

「んっ？」

その時、携帯のバイブ音が鳴る。

「……もしもし」

『博麗霊夢ウ！ あなた連絡も無しに居なくなつて何をやっているんですの！』

甲高い怒声が響くが、それを見越して予め画面から耳を離していたので問題無し。そろそろ白井から怒りの電話が掛かってくる頃合いだと思つていたところだ。

「悪いわね、噂の切り裂き魔とやらと戦つてた」

『……は？』

「だから切り裂き魔よ、切り裂き魔。白昼堂々襲つてきやがったわ」

何てことのないようにそう言えば、白井はただただ絶句するしかなかった。

てつきりサボっているか、勝手な行動をしていると思つていた同僚がほんの僅かな間に連続殺人鬼に襲われ、戦闘していたというのだから。

『え、その、ほ、本当に？』

「嘘吐いてどうすんの。さつきまでアンチスキルから聴取を受けていたのよ」

『そ、そうでしたの……えっと、大丈夫ですか？ 怪我とかは……』

「ええ。別に何ともないわよ。けど肝心の切り裂き魔には逃げられちゃったわ」

『なっ……あなたが?』

これに白井は信じられないといった様子で驚愕する。個人的に気に食わないものの霊夢のその優秀さは認めており、そんな彼女が犯人を取り逃がすなんて不覚を取ろうとは思ひもしなかったからだ。

「あなたたちも気を付けなさい。あれはヤバいわ。くれぐれも出くわしても一人で立ち向かうなんて真似は絶対にしないように。OK?」

そして、念を押すような忠告。取り逃がしたのは油断したから、という口振りでも無さそうだ。

彼女にそこまで言わせるとは、世間を騒がせる切り裂き魔というのはそれだけ一筋縄では行かぬ存在なのかと白井は戦慄する。

『ッ、分かりました。詳しくは支部の方で……え? 固法先輩、何か——』

『ちよつと! 博麗さん!』

すると割り込むように固法の声が聴こえてくる。いつになく取り乱した声だった。

「うん? 美緯、どうしたの?」

『どうしたの、じゃない! 先輩が居たってどういうことッ!? 先輩は死んだんじゃ

……!』

「……あつ、そういえば教えてなかったわね」

『は、はあっ?!』

明らかに冷静でないその様子に霊夢は疑問に思うも、その質問を聞くと今思い出したと言わんばかりに納得すると共に、あちやーと額に手をやる。

単純明快な話だった。固法の言う先輩……黒妻綿流は表向きには敵対していたスキルアウトたちにリンチを受けて死亡したことになっており、彼の生存を伝えていなかったのだ。

「あー、いやまあ、ごめん。実は生きてたのよ、あいつ」

『ッ!? じゃ、じゃあ本当に先輩が……?! 今、何処に……というか何で博麗さんが知ってるのよ!? 私は知らなかったのに——』

「落ち着きなさい。説明なら後でするし、何なら本人に聞いてみたら? 多分近い内に姿を現すと思うから」

『なっ……それって、どういう——』

「んじゃ、また後で」

これ以上質問責めに遭いたくはないので霊夢はすかさず通話を切る。

随分と取り乱していた。死んだと思っていた元恋人が実は生きていたということを知れば当然の反応だろう。

悪いことをしてしまったな、と霊夢は思うも同時に面倒なことになったと溜め息を吐

く。

（能力者狩りの方は、ぶつちやけると私が何かしなくてもすぐ解決しそうな気がする。問題は……やっぱりの辻斬りだけ……）

彼女の正体は何であれ、あれだけの強さに加え、未だに底を見せていないのだ。

警備員がどう頑張ったところで太刀打ちすることはまず不可能であり、超能力者の中でも対抗できる者は限られてくるだろう。

故に、霊夢もまたこの事件について独自に捜査することにした。

——そして、彼女の予想通り翌日には能力者狩りを行っているスキルアウトたちの根城が判明するのだった。

蜘蛛

——幻想的な光景だった。

迸る極彩色の輝き。無数の色とりどりの光弾が縦横無尽に、しかし確かな規則性を以て飛び交い、空間を染め上げて夢幻の世界を作り上げる。

驚愕した、絶句した、感動すら覚えた。

あれだけ脅威的であった虚数学区の化け物が、あつという間に跡形も無く消え去り、ただただ光のみが視界を埋め尽くす。

強者だとは思っていた。あの気に入らないツンツン頭の少年のように、特異な存在だとも理解していた。

けれど、見せ付けられたその力は、今まで見たどの超常よりも超常的で、現実からかけ離れていて、自身の常識やこれまでの何もかもを覆してしまふ。

原理は何なのか、どれだけの威力でどういう作用があるのか、いつもなら抱くはずのそんな疑問など頭の片隅にも無くすつ飛ばして、ただ釘付けになり、圧倒される。

目を逸らすことなど出来やしなかった。あの輝きを、ひらりひらりと空を舞うあの横

顔を。

このような感情は知らず、しかし気付くのは早かった。どうしようもなく、美しかったのだ。

「——様。——姉様。——お姉様つてば！」

「へ？」

次の瞬間。現実から引き戻される。

「どうしたんですの？ 先程からポーツとして」

「あ、いやっ、何でもないわよっ ちよっと考え事してだけっ」

「？ そうですか……」

場所は風紀委員第117支部。気が付けば、訝しげにこちらの顔を覗き込んでいた後輩に慌てて彼女——御坂美琴はそう誤魔化して頭を掻く。

（あーもう、あの日からずっとこうだわ……）

時折思い出しては先程のように物思いに耽る。それくらいには、あの鮮烈な光景は御坂の脳裏に焼き付いてしまっていた。

——博麗霊夢。木山春生、及び幻想^{AIMバースト}猛獣との戦いにおいて、圧倒的な力を見せ付けた

少女。

あの時、御坂はその力の片鱗を目撃した。

(やっぱり多重能力者……なのかしら？ あんな能力、見たことないけど)

夢想封印……と、本人は言っていたか。原理不明な未知のエネルギー弾……高電流かつ10億ボルトの電撃を受けても表面を焦がす程度だった幻想猛獣の肉体を容易く消し飛ばしたことから一発一発が相当な出力のはずであり、それを無数に展開するその規模は明らかに超能力者級。

おまけにそれらを放っている時の霊夢は瞬間移動しているかのように見えた。あの時の御坂はお姫様抱っこされていたので、はつきりとは分からなかったが。

だとすれば出鱈目にも程がある。空を飛ぶ、電撃を避けるなど力の一端ですら無かったのだと思いきらされた。

(もしかして超能力じゃなくてもっと別の……いやそんなまさか。でも、わざわざ口止めさせるってことはやましい理由……とは限らないけどそれなりに訳アリってことだし、もしかすると本当に——)

「まだ考え事してますの？ お姉様」

超能力以外のナニカ。彼女の常識からすれば考えられないことであるが、有り得ないことが有り得るのがこの学園都市。

ならば否定し切れるはずもなく、そういう可能性も視野に入れて推察し、再び思考の海へと入っていく彼女に白井が再び呼び掛ける。

「あつごめん……」

「はあ……それで、話は聞いてましたの?」

「も、勿論よ! 能力者狩りの話でしょ? 婚後さんまで襲われるなんて、許せないわ」
スキルアウトによる能力者狩り。そんな事件が横行していると聞いて、御坂は憤慨する。

大の男が大勢で女の子一人を囲むなど最低極まりない行為だ。おまけに自分の学友にまで手を出されたとなれば当然の反応だろう。

「ほんとにムカつく。折角、佐天さんが退院したつてのに……」

御坂の隣に座っていた佐天も頷く。先日、退院した彼女は御坂と共に支部へお邪魔し、今回の事件について話を聞いていた。

因みに今この部屋には御坂、白井、初春、佐天の四人が居た。

「なんか大変なことになってるみたいですねえ……殺人事件も起きてるみたいですし、怖くてもう夜道は歩けませんよ」

能力者狩りに加え、俗に“切り裂き魔”と呼ばれる連続無差別殺人事件。幻想御手事件が収束したばかりだというのに、物騒な世の中になったものだ。

「あ、そういえばその婚後さん? つて人を助けたのは霊夢さんなんですよね? 今何してるんです?」

ふとこの場に居ない霊夢の所在を佐天が尋ねると白井は露骨に顔をしかめる。

「……あの方なら、別室で固法先輩と話しています」

「話？ 何の？」

「それは、その……」

「？」

確かにいつも支部に居る固法の姿もまだ見ていないので疑問に思っていたが、わざわざ別室で霊夢と何を話しているのだろうか。

しかし、白井は言葉を濁すばかり。隣でPCを弄っていた初春も苦笑いを浮かべていた。その反応に御坂たちが首を傾げていると隣の部屋から大きな物音が聴こえてくる。

「ひゃっ!? な、何……？」

驚く一同。しばらくすると扉が開き、固法と霊夢の二人が無言で部屋から出てきた。

「……………」

「……………」

僅かに右頬を赤く腫らした霊夢とその姿を冷たい視線で見据える固法。何が起きたのか御坂たちはあつ……と察して一気に気まずい空気になる。

「……さっきのを避けなかったことは、誉めてあげるわ博麗さん」

「そ……あんたも腕を上げたわね」

「あら嫌味？ 結構思いつきりぶん殴ったんだけど」

（パーじゃなくてグーでっ!?!）

てつきり平手打ちかと思えば、しつかり拳で殴られたようだ。その割にはダメーじが多少頬が腫れた程度と小さいが、霊夢は常人から逸脱しているため考えても仕方あるまい。

会話の流れからして霊夢は固法の攻撃を避けられたにも拘わらず敢えて受け入れたようだが、一体何があつたのだろうか。

「あ、あの……」

「——あ、ごめんね皆。とりあえず揉め事は解決したから」

恐る恐る佐天が声を掛ければ、先程までの絶対零度の視線はどこへやら。固法はあつけらかんとそう言う。

「さ、さいですか……えつと、一体何が？」

意を決して問う。勇気があるというか、怖いもの知らずというのか、少なくともそのような質問など出来やしなかつた他三人は心の中で素直に佐天を称賛する。

対する固法は特に気にする訳でもなく、事の経緯を話し始める。霊夢は僅かに視線を逸らし、ばつが悪そうにしていた。

「そうね、簡単に説明すると、博麗さんが死んだと思っていた私の……その、以前交際し

ていた人が生きてたことを黙ってたのよ」

「へ、へえ……そうだったんですか。交際していた人が生きて……ええっ!? こ、こここココ交際イ!」

「も、元カレってコト!」

「あははは……私も最初聞いた時はそんな反応でした」

「……私もですよ」

衝撃を受ける御坂と佐天。生死云々以前に固法に交際相手が居たという事実には彼女は仰天していた。

「あの方曰く、能力者狩りに襲撃を受けた婚後光子を助けていた男性が先輩の元恋人だそうで……まさか死んだことになっていたのは予想外でしたの」

補足するように説明し、白井は額に手をやりながらも納得する。霊夢に言われた通りに報告した際に固法がかつて見たことがない程に動揺していた理由が漸く分かった。

死んだと思っていた恋人が生きっていると雑に告げられて取り乱さない方がおかしい。

「な、何で霊夢さんはそんな大事なことを黙ってたんですか!」

「そうよ! 一体どんな事情が……」

「——あれば、良かったんだけどね」

「え?」

「……………」

皆が靈夢に注目する。相変わらず無言で、しかしそつぽを向いて頬を搔くその姿はあまりにもあからさまだった。

まさか、いや流石に――。

「……………れてたのよ」

「へ？」

「言い忘れたのよ、単純に」

――絶句。

全員がマジかこいつという視線を向ける。如何なる事情があるのかと思えば、まさかの言い忘れ。しかもその元恋人の生存を知った経緯からして固法に問い詰められるまで普通に忘却していたということになる。

何というか、色々と最低である。

「靈夢さん、普通に最低過ぎますよ、それ」

そして佐天。思ったことをはつきりと言う。

「うっ……悪かったと思ってるわよ。でもしようがないじゃん。あの頃の私ってほら、切れたナイフみたいだったから美緯ともあんまし関わり無かつたんだもん」

「何ですか切れたナイフって。少なくとも真つ先に固法先輩に報告すべきですよね

……」

「今も充分に切れたナイフでは？　というか切れ過ぎてはやバスタードソードですの。でなきや風紀委員をクビになりませんし普通」

少なくとも白井と初春の記憶では霊夢が尖っていなかった頃なんて全く無いし、何なら現在進行形で鋭利なままである。

しかし、言い訳をしながらも素直に謝る辺り本当に申し訳無く思っており、反省しているようだ。

「にしても、よく許しましたね先輩。私なら後十発ずつは右ストレートとミドルキックをこの阿呆にお見舞いするところですが……」

辛辣な物言いをする白井。死んだと思われた恋人……それを親愛なる御坂美琴に置き換えて霊夢に「あ、ごめん。言い忘れてたわ笑」と告げられた際のことを妄想してみても想像以上に腹が立ったからだ。

尚、御坂は変な妄想をされたことを直感したのか寒気が走る。

「まあ……話を聞いたら命の恩人でもあるみたいで……怒るに怒れなくなっちゃったのよ」

「え？」

「あの人……黒妻先輩は他のスキルアウトからリンチを受けて殺されたって聞いていた

んだけど、実は博麗さんがそれを助けたらしいの」

「これまた衝撃的な事実。道理で固法が知らなかった恋人の生存を霊夢が知っていた訳だ。」

しかし、それよりも白井には見過ごせぬ事実があった。

「ま、待ってください。『他の』ということはまさか先輩の恋人はスキルアウトだったのですかっ!？」

「ええ。そうよ」

何度目の衝撃か。あの真面目を絵に描いたような風紀委員の代表、固法美偉がスキルアウトと関わりを持っていたとは思いもしなかった。

「私も昔は自分の能力に限界を感じて伸び悩んだ時があつてね。それで気晴らししていた時に出会ったのが、先輩だった」

「先輩にも、そんな時期が……」

「あれ？ でもその頃はまだ風紀委員じゃなかったんですね？ 博麗さんとは同期だと聞いていたのでつきりそれからの付き合いだと……」

「ええ。当時から博麗さんは有名人だったし、顔合わせすることは多かつたわ。先輩がリーダーをやつてたグループは特に悪い事なんてやつてなかつたから喧嘩になることはなかつたし、むしろ一緒になつて他のスキルアウトたちを止めてたくらい。だから風

紀委員で同じ部署になった時は驚いたわよ」

「へえ……そうなんですね」

「……そんな前から切れたナイフでしたのね」

鬼巫女の伝説は随分と古くからあるようだ。霊夢と固法の意外な繋がりと長い付き合いに二人は驚く。

「ま、気のいい奴らではあったわね」

霊夢も当時を思い返す。彼女にとつて塵芥に等しいスキルアウトたちの中でも黒妻綿流という男は印象に残っている方だった。

一二を争う喧嘩の強さもそうだが、単純にあの男はスキルアウトのくせに人が好く、駒場と違って陰険でもなかったので馬が合うことは多かったと思う。

それでも所詮はスキルアウト。ついこの間まで記憶から消えていたし、久々に再会しても大して感慨深いとも思わない。

「……さて、昔話はこのくらいにして捜査の方に戻りましょうか」

「はい。ネットの情報から、能力者狩りと思われるスキルアウトのグループを特定しました。被害や目撃例から見ても信憑性は高いです」

すると初春が言う。昨日霊夢がパトロール兼情報収集しても目ぼしい情報は得られなかったが、流石はネット社会。ひとえに初春がハッカーとして優秀なのもあるが、そ

ういった情報はすぐに集まるようだ。

そして、その犯行グループというのは霊夢の予想が正しければ恐らく――。

「第十学区、ストレンジの一角を根城とする『ビッグスパイダー』というグループです」

「――え？」

もたらされた情報に目を見開く固法。何せ、ビッグスパイダーという名の集団はかつて黒妻綿流が結成し、リーダーをやっていたグループなのだから。

「……やっぱり、ね」

一方、霊夢は何となくそんな予感はしていた。とつくの昔に壊滅したと思っていたが、リーダー無き後も存続していたらしい。

となれば黒妻があの場合に居合わせた理由も察するというものだ。久々に娑婆に舞い戻ったかと思えば、変わり果てたかつて自分が取り仕切っていたグループを前にして、彼は何を思ったか――。

何であれ、霊夢のやることは決まっている。

「じゃ、殴り込みと行きましようか」

第十学区。

学園都市の中で一番治安が悪い学区とされ、配送業者がわざわざこの学区を迂回して目的地に向かうという逸話すらある。

墓地、少年院、実験動物の処分場、また土地の価格が安いいため広大な土地を必要とする研究施設や原子力関連の施設などが多数存在し、特に「ストレンジ」と呼ばれる場所はスキルアウトたちの溜まり場になっており、謂わばスラムのような無法地帯と化して

いた。

そんな場所に「ビッグスパイダー」の根城があるというのは、実に自然なことであり、当初から予想はされていた。

しかし、正確な位置までは分からず、手当たり次第に探すには広大過ぎるためこれを特定してみせた初春は大手柄と言えよう。

「ふうん……ここに、ねえ」

そこへ赴いた霊夢はその以前と何ら変わらぬ荒れた風景に懐古……することは特に無く、陰鬱とした空気感に辟易しながら先へ進んでいく。

後ろには、御坂と白井も居る。

「何で制服なの？ あんた」

「変装よ、変装。ビビられて逃げられたら元も子も無いでしょ」

「……だからって何で常盤台なのよ」

「私の高校はレベル0ばかりだし。今の私たちは葱をしょった鴨なんだから」

御坂が眉をひそめる。現在、霊夢は彼女から借りた常盤台中学の制服の予備を着込んでいた。

理由としては変装と相手の油断を誘うため。いつもの巫女装束ならば警戒されるのは当然として、万が一にも備えて自身の制服ではなく、高位の能力者が在籍することで

有名な常盤台中学の制服を着用することにした。

「成程……私たちをメンバーに選んだのもそれが理由ですか。体のいい釣り餌である」と

「そういうこと。あなたたちは何を言おうとついて来そうだったから丁度良かったわ」

あまり気分の良い話ではないが、理には適っている。納得が行くかはともかく。

(……制服、似合ってますの)

所謂コスプレ。見事に着こなしているその姿を白井はまじまじと見る。後頭部の大きな赤いリボンは外していない辺り余程お気に入りなのだろう。

(あの方が常盤台でしたらきつと……いや、何をやっているんですの私は。変な妄想はやめましょう)

ぶんぶんと首を横に振る白井。そんな挙動不審な態度に霊夢と御坂は首を傾げるも、そうこうしている内に目的地に到着する。

「ここね。——ご機嫌よう」

封鎖されたフェンスを前に霊夢は一瞬だけ足を止め、そして蹴り破った。

「あ？ 何だ、テメエら……」

「ジャツジメントですの……っつてね」

「私の真似をしないでくださいましー！」

以下省略。突然のカチコミに驚くスキルアウトたちだったが、その中でリーダー格らしきいかついリーゼントの男がこちらを出迎える。

こいつも何か見覚えあるなど思いつつ霊夢は能力者狩りを止めるように警告するも交渉は決裂。そのまま実力行使に出ようとしたところで――。

「うっ!？」

「ぐっ……!？」

「あん?」

するとどこからともなく「あの音」が響き渡り、御坂と白井が苦しみ出したかと思うと、ぼたりと倒れる。

「ハッ、能力がなきや、テメエらもただのガキだな……つて何でテメエには効いてねえ!？」

平然と立っている霊夢を前に、騒然とするスキルアウトたち。

一方、霊夢はそんな彼らを気にも留めず、倒れた二人の様子を伺う。白井の方は既に意識が無く、御坂の方も何とか耐えているがそれで限界な様子であった。

AIMジャマーなど比ではない。想定よりも強い効力に何故スキルアウト風情がこんな代物を所有しているのかと疑問に思う。

「チイツ……!　こいつが効かねえつてことは大した能力者じゃねえんだろ!　痛め付

けてやれ！」

動揺しながらもリーゼントの男はそう命令すると集団の内三人のスキルアウトが向かっていき——そして蹴散らされた。

「……………は？」

一瞬にして意識を刈り取られ、地に伏せる仲間たちを見てリーゼントの男は啞然とする。

「……………ああ、思い出した。あんた、黒妻の舎弟だった奴でしょ、蛙谷とかそんな感じの名前の」

「!？」

突然そう言われ、ぴたりと硬直するリーゼントの男。そこで気付いた、目の前の少女が何者かであると。

「お、おとおおお鬼巫女……………ッ!？」

「ええ。久しぶり。ま、安心なさい、あんたの相手は別に居るから」

「は？ な、何を——」

その時だった。

何者かがこの場へと足を踏み入れる。

「よーう、久しぶりだなあ。蛇谷」

「なつ、黒妻、さん……!？」

革ジャンを羽織り、片手にムサシノ牛乳を持っているその姿は、かつての頃と何も変わりはしない。

ドツと冷や汗を掻きながら侵入者の男に蛇谷と呼ばれたリーゼントの男は自身が今の今まで騙り続けていた名を口にする。

「……来たわね、ケジメは任せるわ」

「おう。さんきゆうな、嬢ちゃん。……ところで何で常盤台の格好してるんだ？」

「囮捜査」

「なーる。じゃ、ちよいと行ってくるわ」

自分が元居た組織の後始末に来た黒妻に霊夢はあつさりと譲る。幕を下ろすべきなのはやはり彼だろう。

「な、何で、ここに……!？」

「なあに、俺が抜けた後もしつこく組が続いてるって聞いてな。しかも、随分と狡い事してるもんだから、ちよつとお仕置きにな」

その言葉に、蛇谷は顔を歪める。自分たちのやっていることを黒妻が許すはずがないと理解していたが故に。

「ち、畜生があ！ もう今の俺たちはテメエの居た頃とは違う！ 殺つちまえ野郎共オ

「！」

直後、周りから武器を持った男たちがゾロゾロと姿を表す。廃材や鉄パイプなんてものもあれば、ナイフや銃を持っているような奴らもいた。

「——さて、やるか」

すると黒妻は革ジャンを脱ぎ捨てて一気に突撃した。まずは一番近くの奴、そいつの顔面に容赦無く飛び蹴りを放つと、手放した武器をキャッチし、遠くにいる奴の顔面に投げ付ける。

着地と共に別の奴からの攻撃を避けると、襟を掴みながら腰に膝蹴りを放り、崩れた隙を突いて強引に襟を引っ張り回して近くの奴に叩き付けた。その後、別の奴からの攻撃を拳でガードすると、ボディにアツパーを叩き込み、一撃で沈めつつ次の獲物に向かう。

「ば、バケモンだ……」

「スゲエ……！」

思わず、挑む前の連中が声を漏らす。その機敏な動きは御坂も目を見張る。

対して霊夢は当たり前だと言わんばかりにその光景を眺めつつ御坂と白井を安全な場所へと移動させ、それから辺りを見回して何かを見つけた。

「……………これね」

そこにあつたのは巨大なスピーカーのような装置。あの「音」の正体であるのは明白であり、霊夢がそのコードを容赦無く引っこ抜けば音は止まる。

装置を破壊しないのはサンプルを回収して初春に解析してもらうためだ。

「ツ……………」

「大丈夫？　生きてる？」

「え、ええ……………何とか……………ほんと、何であれが平気なのよあんだ」

「さあ？」

超能力者である自分ですら立っていられず、能力の制御が利かなくなるような攻撃。それを聞いて平然としている霊夢が御坂には理解し難かった。

「そ、それよりもアイツら……………！　この御坂美琴様を虚仮にして……………！」

「自分で様とか言っちゃう？　後、それならもうとつくに片付いたみたいよ」

「えっ？」

視線を向ければ既にスキルアウトの一団は全員地を這っており、最後に黒妻が蛇谷を殴り飛ばしたところだった。

「は、はやっ!?　あの数をあつという間に……………」

これで無能力者。霊夢のように馬鹿げてはいないが、その腕っ節の強さに御坂は驚きを隠せない。

そして、先程の話から彼が固法美緯の元恋人である黒妻という男なのだろう。

「うう……」

「あ、黒子！ 起きたのね！」

「ツ……お姉様……一体何が……？」

「大丈夫。もう終わったから」

「？」

すると白井が意識を取り戻す。辺りを見回せばそこは死屍累々とも言える光景で何が何やら状況が把握出来なかつたが、御坂の言葉から能力狩りは全滅したのだと察する。

「ふう……さて、と。こいつらはこれで終わりだし、まあもう良いわな」

「ん？ 何が？」

「出頭するよ。これは、謂わばスキルアウト同士の抗争だ。それなら俺もお縄について方が良いだろ」

そう言つて黒妻は両手を合わせて霊夢に差し出す。何ともまあ潔いが、彼としては元よりそのつもりだったのだろう。

「ケジメならもう付けたんじゃない？ ……ま、いいや。とりあえず連れて行くわ。美緯もそこに居るし」

「え？ 何で美緯が……って、そーいや風紀委員に入ったんだってなあいつも。そうか……元気でやってるか」

「ええ。あの頃よりも生き生きしてるんじゃないかしら」

「あー……なら、今更俺が会うのもな」

「何でそこでヘタレんの。会いたがってんだから、さっさと行くわよ」

「ん……だな、分かったよ」

形ばかりに黒妻へ手錠を掛ける。無論、本気で逮捕するつもりなどはない。彼の今後に関しては固法と存分に話し合ってもらおうとしよう。

能力者狩り事件、これにて解決。

——見つけた。

噂の能力者狩りを斬り捨てようと赴いてみれば、つい昨日仕損じた少女の姿が。今回はあの巫女装束は身に纏っていないが、あの顔は間違いない。

「……斬る」

刀を構え、白髪の少女——辻斬りは現場へ向かおうと歩みを進め——。

「オイオイ。こいつが噂の切り裂き魔かあ？ どう見てもコスプレしたクソガキじゃねえか」

「！」

「とりま……潰れて死ね」

次の瞬間、辻斬りが居た場所が爆ぜる。

「……………」

難なく回避した辻斬りが辺りを見回せば、下手人はすぐに見つかった。

「へえ……避けたか。ま、そのくらいはやってもらわねえと困る」

「……何奴」

「よう殺人鬼。テメエを始末しに来た、観念しな」

そこにいたのは、ホスト風の遊び慣れていているような格好をした、茶髪の少年だった。

一見すると何の変哲も無い格好だが、明らかに異様な部分の一つ。少年の背中から生える、普通の人間には絶対に存在しないソレに、辻斬りは片眉を上げる。

それは天使のような、三対の「白い翼」だった。

「…………妖怪の方でしょうか？」

「ああ？ ハッ、メルヘンだの天使だの言われたことはあるが、妖怪つてのはテメエが初めてだ」

少年が笑う。嘲笑だった。

「テメエはやり過ぎたんだ。スキルアウトやそこらのゴミ共だけならともかく、暗部の人間にまで手を出した……お蔭でこうして俺に抹殺命令が下った。『上』は随分とお怒りのようだ、一体どんだけ殺したんだ？ イカれ野郎」

「……左様で」

どうでも良さそうに聞き流しながら辻斬りは刀を抜く。要するに目の前の少年は敵であり、少なくともあの脆弱な有象無象共よりは強そうであるということだ。

分かりやすい。こうして実力者と対決することになるとは……やはり斬っていれば、道は開ける。

「チツ……余程愉快な死体になりてえとみえる」

その余裕の態度が気に食わなかったのか殺気の増幅と共に、白い翼が更に肥大化する。

対峙する辻斬りは全く臆すること無く、むしろ僅かに笑みを浮かべ、刀の切っ先を向けた。

——そして、二人は衝突する。

盛夏祭

ビッグスパイダーを叩きのめし、能力者狩り事件が解決した後、黒妻と固法は数年ぶりの再会を果たした。

二人がどういう会話したのかは霊夢は特に聞いていないが、黒妻が逮捕されずに済んだことを見るに、上手く行ったようである。

これにて一件落着。霊夢としても悪い気はしていなかったが、そこでふと気付いた。風紀委員に加入させられてから、もう二週間が過ぎたということ。

「過ぎ去ってしまえばあつという間……そう思ってたのにねえ……」

「期限、伸ばされちゃったんですか？」

いつものファミレスにて。テーブルに突っ伏す霊夢に佐天は苦笑いを浮かべる。

漸く解放されるかと思ひ、浮かれた様子で落書きのような辞表を突き付けに行った霊夢であるが、固法はそれを良しとしなかった。曰く、しばらく無断欠勤していたのだからその分の空白期間は働け、と。

禁書目録に関する件のゴタゴタ。弁明する訳にも行かず、大体五日くらいだっただろ

うか。どうしようもない程の正論にぐうの音も出なかった霊夢は残念ながら風紀委員としての活動はもうしばらく続けることになった。

「あー、さっさと辞めたい」

「まあまあそう言わずに。残り五日間だけなんですから」

「たった五日、然れど五日よ。面倒臭いつたらありやしない」

「私は嬉しいですよ？ 博麗さんとまだ一緒に仕事できますから」

「そりやどうも」

その隣には初春が居る。今日は二人してパトロール中にサボタージユを決め込んでいた。

「けどやっぱり天職なんじゃないですか？ 幻想御手事件も今回の能力者狩りだって実質博麗さんが解決したようなものですよ」

「なくのが天職よ。これ以上の面倒事は御免被るわ、私は出来るだけ何もせずに亀みたいに暮らしていきたいの」

「そんなニートみたいなこと言わないでくださいよ」

濃過ぎる、あまりにも濃密な一週間だった。魔術師と戦い、幻想御手事件を解決し、それから禁書目録の解呪、そして今回の能力者狩り……能力者狩りに関しては箸休めなるかと思えば、切り裂き魔とかいう厄介者が別方向からついて来てしまった。

霊夢は呆れる。流石に事件起こり過ぎだと。加えて、彼女はこれだけではまだ終わらないという予感があり、故に一刻も早く風紀委員からはおさらばしたかった。

「機嫌直してくださいよ博麗さん。ほら、とりあえず甘いものでも食べて癒されましょうよ」

そう言う初春の目の前には巨大な苺パフェが置かれていた。最近発売された期間限定メニューである。

「好きだねえ、甘いもの」

思わず佐天が呟けば初春は得意気な顔をする。

「私みたいに頭脳労働がメインな人は、糖分を摂取しないと生きていけないんです。白井さんみたいな脳筋さんは話が別でしょうけどね」

「ふっ 脳筋って、確かにそういうきらいはあるけど……フツツ」

「ですよね！ 猪武者っていうか単細胞っていうか、あんなに始末書書かされているのに懲りずによくやるものです。脳筋さんは甘いものじゃなくて……何でしょう？ プロテインとか？」

日頃から鬱憤の溜まっているのか初春がそう毒を吐けば、霊夢は嘔き出したように笑う。

「……あ」

「なんですか佐天さん？ 一口ですか？ 仕方ないですねえ。このパフェの魅力の前では、たとえダイエツト中の人であっても手を伸ばしてしまうのですから」

「一口と言わず全部差し上げたら如何ですか？」

「いやいや、それは流石に……ですか？」

さつさと一口だけでも食べれば良いものを、と佐天は呆れ気味に鼻息を漏らす。

ギギギツと、壊れたロボットのようにならざるを返る初春の視線の先には、しかもつ面を浮かべた白井が立っていた。

「良いご身分ですね、初春？ 仕事をサボってパフェで一服とは、流石、頭脳労働がメインなだけありますわ」

「し、白井さん……」

「私のような脳筋とは立場が違いますものね」

「わあ〜！ ご、ごめんなさいい〜！」

涙目で頭を抱える初春。対して霊夢は何となく予感してたのか然して驚くこともなく、コーラを一口飲む。

「背後から現れるの好きよね、あなたって」

「……あなたもでしょ？ 博麗霊夢」

「あら、美緋から時間割を聞いてないの？ 私はまだ休憩中よ。時間になったらちゃん

とパトロールに向かうわ」

「ぐっ……なら、良いんですの」

流石の霊夢も場所を把握されている行き付けの店で堂々とサボるような真似はしない。怪しまれないよう程よく働き、程よく休むつもりだった。

無論、白井もそのことに勘付いてはいるものの現行犯ではなければ意味がないためこうして目を光らせている。

「ところでお二人。盛夏祭ってご存知ですか？」

「聖火祭？ 何、オリンピックピックかなんか？」

「あ、勿論知っていますよ！ お嬢様たちがもてなしてくるお祭りですよね！」

盛夏祭。それは普段は一般には開放されていない常盤台中学学生寮が年に一度、外部に開放される文化祭のようなイベントである。

「はい。実は、それが近々開催されました」

「へえ、そうなんですなえ」

「ま、待つて下さい、白井さん。なんでその話を佐天さんと博麗さんだけにするんです？」

話の流れるに嫌な予感がした初春だが、白井はそんなこと知ったことではない。

「良かったらいらっしやいませんか？ 招待チケットがあるんですの」

「えっ!? 良いんですかっ!?」

「ふうん……」

二枚のチケットを見せ、そう提案する白井に佐天は驚愕し、霊夢は怪訝な表情を浮かべる。

「どういう風の吹き回し?」涙子はともかく、あなたがそんなものを私にくれるなんて」「別に。能力者狩りで不覚を取った際に助けてくれたみたいなのでその礼ですの。これで貸し借り無しですよ」

「……そ。なら、有り難く受け取るとしましょうか」

能力者狩り……あの「音」で意識を失った白井を安全な場所へ運んだことだろうが、律儀なものだ。彼女としては自分に僅かでも借りがあることが気に食わないだろう。

そう納得し、霊夢はチケットを受け取る。「せーかさい」なるものがよく分からんが、お嬢様もてなしてくれるのなら結構豪勢な祭りなのだと思います。

「待ってください! 私にも是非……!」

「残念ながら二枚しか持つてませんの」

「そんなあっ!?!」

「淑女を脳筋呼ばわりした天罰ですの。さ、初春。仕事に戻りますわよ。博麗霊夢も休憩時間が終了したら速やかに働くように」

「あ、待つ……せ、せめて一口……!」

お嬢様というにも憧れを抱く初春は尚も食い下がらんとするが、白井に冷たくそう言われ、そのままずるずると引き摺られながら連行されていく。

口は災いのもと。哀れな花畑少女を見送りながら霊夢と佐天は不用意な発言はなるべく控えようと誓うのであった。

「ああ、可哀想な初春……ひとえに自業自得だけ……」

「……あいつ、ああ言ってたけど最初は飾利と涙子にこのチケットあげるつもりだったんじゃない?」

そう言いながら霊夢は初春が残したパフェを自分の方へと引き寄せる。

そして、そのまま一口。

「あら、美味しい。案外イケるわねこれ」

「おや? パフェ食べるの初めてなんですか?」

「和菓子とか茶に合うものが好きだから。それに甘党ってよりは辛党だし私」

こういうのを自ら進んで食べることはない。昔一度だけセクハラの制裁で青髪ピアスに奢らせて片っ端からメニューを頼んだことがあったが、その時は普通の食事系のメニューを網羅したところで奴の財布が空になり、デザートには手を付けてなかった。

「へー、霊夢さんって激辛好きだったんですね、意外です」

「うん？ 激辛？」

「え？」

「ん？」

互いに首を傾げる。勘違いしている者も多いが、辛党とは辛いものの好きのことを指すのではなく、古来より酒好きの人物のことを指す言葉である。

「……ま、良いや。で、このセーかさいってどこでやんの？ やっぱり北京かバンクーバー？」

「オリンピックから離れてください。常盤台中学の女子寮ですよ」

「あ、トキワダイなの？ 成程ねえ……」

「？ どうかしたんですか？」

「いや、丁度良かったと思ってるね。そういや用のある知り合いがそこに通ってるらしいから」

「おお！ それなら一緒に行きましょうよ！」

そう言いながらも僅かに顔をしかめ、意味ありげな表情をする霊夢に佐天は不思議に思う。

常盤台の知り合い……一体誰のことかは分からないが、用があると言いつつも会いたくないような、そんな雰囲気でした。

(操^{みさき}祈の奴……怒るでしようねえ……)

一方、霊夢の脳裏に過るのはある少女の姿。性格が悪く、一度能力で洗脳されかけた彼女のことはどちらかと言えば嫌いだった。

出来得ることならば会いたくはなかった。しかし、会わなければならぬ。

如何に残酷なことであろうと、彼女には、あの恋する少女には知る権利があるのだから。

最愛の人物が、すべてを忘れたことを――。

「美味い！」

そして盛夏祭当日、霊夢は目の前の料理に舌鼓を打ちながら堪能していた。

「流石はお嬢様。良いもん食ってるわねえ」

ファミレスはおろかそこらの飲食店では到底出ない高級料理店に並ぶような豪華で上品な食材の数々が存分に使われた料理がずらりと並んだ光景は圧巻の一言である。

これがバイキング形式で食べ放題というのだから驚きであった。

「予想はしてましたけど……真つ先に食べ物の方に向かいましたね……」

そんな霊夢の隣で佐天は苦笑いを浮かべる。店内に漂う上流階層が如き雰囲気を感じ、ががつと料理を食うその姿は場違いにも程があった。

彼女は別に大食いという訳ではないが、かといって胃が細いという訳でなく、食べる時に沢山食っておくという少々貧乏臭い人間だった。

「涙子も食べなさいよ。食べ放題なんだから元を取らないと」

「庶民的なのは評価高いですけどもうちよつと雰囲気を楽しみましょうよ。ほら、メイドさんですよメイドさん」

佐天が視線を向けた先には、メイド服を着用した常盤台の生徒が居る。よく見るコスプレとは違い、本格的なものであった。

「そりやお嬢様が居るのならメイドも居るもんでしようよ。ナイフとか投げてこなければ良いのだけど」

「またまたー、そんなアニメみたいな武闘派なメイドが現実に居る訳無いじゃないですか。……えっ、居ないですよね？」

「そうみたいね。私も最近知ったわ、普通のメイドはナイフなんか投げないって。代わりにあの街中でよく見る清掃ロボット？ ってのに乗るのよね」

「それも違うような……？」

どうにも価値観や常識が食い違っているようで会話が噛み合わない。片田舎で育ったらしいが、つくづく霊夢の地元が気になる佐天であった。

「うーん……あつ、あれなんかどうです？ 白いシスターさんが居ますよ。常盤台って十字教系の学校なんですかね」

「あん？」

白いシスター。佐天の言葉に思い当たる節があつた霊夢はまさかと視線を向け、思わず二度見する。

そこには涎を滴らし、目を輝かせながら料理の置かれたショーケースを見つめる銀髪の修道女が居た。

「美味しそうなんだよ……！」

「……何やってんの？ インデックス」

「うん？ あっ！ れいむっ！」

「えっお知り合いなんですか？」

修道女——禁書目録は霊夢の存在に気付くと快活な笑顔を浮かべ、ブンブンと手を振る。

「れいむも来てたんだ！ ここは凄いな！ 美味しそうな料理がたくさん！」

「あなたも来てるってことは……当麻の奴も？」

「うん！ けど、どうまったら私からはぐれて迷子になっちゃったのかも」

「そう……迷子はあなたじゃないのかしら」

まさかの人物の登場に驚く。上条が同行しているということはあの貧乏学生もどうやったかは知らないが、この盛夏祭とやらのチケットを入手していたようだ。

となると、心配である。今の上条は記憶喪失。本人はこんなお嬢様学校とは縁も所縁もないと思っっているだろうが、ここには彼の知り合いが結構多い。特に御坂辺りと鉢合わせしてしまえば面倒なことになるのは明白だった。

「あの、霊夢さん。このシスターちゃん……」

「同級生の所に居候してる子よ。名前は——」

「インデックス禁書目録なんだよ！」

「イ、インデックス？ 目次……？」

「あー、細かい事は気にしないで。ね？」

「アツハイ」

明らかな偽名を名乗られ佐天は困惑する。何らかの能力名か、もしかすると昨今のキラネームで本名なのかもしれない。自分の娘に目次なんて意味の英単語を名付ける親が居ると思いたくないが。

しかし、はぐらかす霊夢はあまり根掘り葉掘り聞かれない様子だったので恐らく自分が安易に関わるべきではない事情があるのだろうと察し、余計な詮索は避けることにした。

「それじゃ、よろしくねインデックスちゃん。私は佐天涙子」

「うん！ よろしくなんだよ！ るいこー！」

にしても巫女に修道女、加えてメイドたち……一見すると秋葉原かコミックマーケットの会場のような絵面である。

「さっさとあの馬鹿を探してあげたいところだけど……それ、食べたいの？」

「勿論なんだよ！」

「じゃ、食べましようか。食べ放題だから好きなのを好きなだけ食べちゃいましょう」

「ほんとっ!? 分かったんだよ!!」

こうしてバイキングに銀髪シスターが参戦する。彼女は霊夢らに教えられ、トングを使って皿に料理を大量に盛り付けると満面の笑顔でがつつき始めた。

のだが……。

「ええ……」

佐天が困惑の声をあげる。目の前には回転寿司かと思間違う程の白い皿の山が築かれていた。

その奥では禁書目録が料理を片つ端から食べ……貪っている。

「美味しい！ 美味し過ぎるんだよ……」

明らかにその体格ではとづくに胃袋どころか腹が丸ごと破裂しているであろう量を余すことなくかき込み、然れどその食欲は留まることを知らず、宛らブラックホールの様。健啖家とかそういうレベルではない牛飲馬食に佐天は軽く引いていた。

「……よく食うのね、あなた」

その横で黙々と料理を食っていた霊夢もこの圧巻の光景には驚くしかない。同時に、この暴食っぷりに上条の食糧事情を何となく察し、同情した。今度何か差し入れを持って行こう。

「ま、これで元は取れそうね。良かった良かった」

「いやいや。店の食糧全部食い尽くす勢いなんですけど……ほら、あつちでメイドさん

たちが青ざめてますし」

「食い尽くされることを想定していない店側が悪いのよ、うん」

無慈悲な宣告。言葉を失うギャラリーたちを他所に禁書目録はひたすらに暴飲暴食を繰り返す。このままの勢いならバイキングコーナーが空になるのは時間の問題だろう。

その有り様は、あの掴み所のない冥界に住まう亡霊姫を連想させ――。

(……あれ?)

ふとした気付き。そういえば、あの亡霊には従者が居たはずだが……それがどのような人物だったか思い出せなかった。

元より曖昧な記憶。しかし、その人物はこうも印象の無い人物だったのであろうかと、小骨が喉につつかえるような違和感を感じずにはいられない。

はて、これは一体――。

「あ！ やつと見つけたぞインデックス！」

そこで思考が途切れる。声に反応して視線を向ければツンツン頭の少年が立っていた。

「あ、とうまー！」

「お前なあ……勝手にいなくなるんじゃないよ。探し回っただろ？」

「ふんっ、とうまがいつまでも家電のセールに食いついていたのが悪いのかも。れいむが居なきや飢え死にしていたんだよ」

「それは悪かったよ……って博麗、さん？ 何でここに？」

「ふんすかと怒る禁書目録に呆れつつも謝っていた上条は同じテーブルに霊夢が居ることに気付くと驚きの声をあげる。

「呼び捨てでいいわよ。あんたの方こそ、よくチケットを手に入れられたわね」

「いやあたままたま、な……悪い。なんかインデックスが迷惑を掛けたみたいで……」

「……別に構わないわよ、そんなの」

少しばかり他人行儀な反応に分かっていながらも霊夢は寂しく思う。

「あの、霊夢さん。もしかしてこの人がインデックスちゃんの……」

「ええ。同居人よ」

「ええっ!? 男女で同じ屋根の下に……ってそれももう同棲じゃ——」

「……込み入った事情があるのよ、色々」と

禁書目録が居候している同級生が目の前ツンツン頭の少年だということを知り、まさか異性だとは思っていなかった佐天は驚愕する。

余程親しい仲でなければ明らかに非常識であるが、交際関係でないのだとしたら一体如何なる理由があるのだろうか。

「えっと、君は……」

「あつ、初めまして。自分、霊夢さんの友達やってます！ 佐天涙子と申します！」

「お、おう、これはご丁寧に。俺は上条当麻。この暴食シスターの保護者をやって博麗とは……同級生だ、うん」

互いに自己紹介する。一瞬記憶を失う前の知り合いかと思つて言い淀んだが、どうやら初対面であるようだと言上条は安堵する。

（サテンって……確か、吹寄つて奴のメールの履歴に名前が出てたな）

どうも自分はい先日までアドレス帳にあつた吹寄制理なる女学友と、博麗霊夢真人間化計画”というものを画策していたようである。その要が最近できた友人というサテンルイコなる人物であり、十中八九彼女のことだろう。

あの霊夢が友人が一人できたというだけで騒がれ、真人間化計画なんてものが立案される程の問題児であつたことに驚いたが、そもそも腋が露出した巫女服を身に纏つて街中を徘徊している時点でだいぶ風変わりな人物であることには間違いない。

「……ちよつと当麻」

「ん？」

「ここは知り合いが多いわ。面倒な事になる前にさっさと退散した方が良いわよ」

「えっ!? ま、マジで……!?!」

小声での忠告を受け、上条は目に見えて焦り出す。常盤台中学なんてお嬢様の花園に顔見知りか居るなど思いもしなかった。

そして、霊夢の物言いからして自分の記憶喪失に気付いたり、不審に思ったりする程の人物のだろうと察する。

このままではまずい。とりあえず現時点で目を付けた物を手に入れたら直ぐ様帰宅するでしょう。

「分かった。ほら、行くぞインデックス」

「あ、ま、待つて欲しいかも！ まだ腹八分目なんだよ！」

「その辺でやめとけよ!？」

そう騒ぎながら上条が引きずっていく形で二人は立ち去っていく。ついでに霊夢らも元は充分に取れたので会計を済ませて店を後にする。嵐が過ぎ去ったメイドたちは伝票を見て度肝を抜いていた。

「上条さん……意外と普通な方でしたね。霊夢さんの同級生だつて言うからどんな変じ……変わり者かと思いましたよ」

「大して訂正出来てないわよ、それ。というかああ見えて私よりもよっぽど変人よあいつは」

「ええ、本当ですかあ？ で、次はどこへ行きます？ 私は美術部とか茶道部とか結

構気になつてゐるんですけど」

「なら、茶道が良いわね。さっきの店と同じように高級品でしょうし、お嬢様が淹れた茶にも興味が一——うん？」

次は何処へ行こうかと談笑しながら廊下を歩いていると、一人の女学生が霊夢の視界に留まる。

「……博麗霊夢様ですね」

「おや、この人も知り合いですか？ 霊夢さん」

「いえ……知らないわね。私に何か？」

機械のように無表情でどこか虚ろな瞳をした女学生。少なくとも霊夢の記憶の限りではその顔に覚えは無い。

「女王がお待ちです。どうぞ此方へ」

「……あー、そういうこと」

女王。少なくともこの街でそう呼称されている人物は一人しか思い浮かばず、霊夢は目の前の女学生が何者であるかを理解する。

「涙子。悪いけど少しの間だけ一人で廻ってくれない？」

「え？」

「元々こいつのボスに用があつたの。ちゃつちやと話を済ませてくるからさ」

そう言われ、霊夢の当初の目的を思い出す。普通にバイキングを楽しんでいて忘れていたが、元々常盤台に通う誰かに用事があったのであった。

「はあ、分かりました……じゃ、御坂さんや白井さんが居ないか探して来るんで終わったらまた連絡してくださいね！」

「ええ。またね」

聞かれたくない内容なのだろうか。そう思いながらも佐天は空気を読んで霊夢と別れて廊下の奥へと進んでいく。

「……さて、行きましようか」

霊夢がそう言えば、女学生は何も言わずに背を向けて歩き出す。操り人形のようなその姿に呆れながら彼女はそれに追従する。

「驚いたわよお、まさか貴方が来るなんて」

そして、辿り着いた先に、彼女は居た。その様子からしてこの寮へ来てから何気無く行っていたアピールは成功していたようだ。

「——それで、私に用があつて来たみたいだけど、何かしら？ 博麗さん」

学園都市超能力者第五位 “食蜂操祈”。

彼女は明らかに警戒しつつも笑みを崩さず、蜂蜜色の長い髪を優雅に揺らしながら霊夢を見据える。

これに霊夢は僅かに顔をしかめ、そして彼女にぶん殴られる覚悟を決め、口を開く。

離別

超能力者^{レベル5}に死を。

そう掲げるのは自らを行き詰まり^{デッドロック}と称する集団。その正体は何かしらの理由で能力開発が頭打ちになった学生たちであり、生粋のお嬢様から不良少年まで、出自・出身・性別・年齢・所属の何もかもがバラバラだった彼らは超能力者への怨嗟で結束した。

そんな連中にかつて、食蜂操析は襲われた。

彼らが身に纏う真つ赤なヘルメット付きのライダースーツのような武装はただ食蜂一人を殺す為だけに組み上げられた兵装システムであり、圧倒的な速度で操られる前に突撃し、食蜂の能力で装着者の脳波に異常が起これば、AIが反応して自動的にプログラム動作に切り替わる。

つまりは自滅も覚悟で彼女を仕留めるコンセプト……そんな代物に囲まれ、超能力者といえど所詮は成人にも満たぬ少女には為す術が無かった。

たまたま居合わせた最近よく話をするようになった高校生、上条当麻と必死に逃げた。しかし、食蜂の致命的な運動神経の悪さが及ぼす影響は大きく、遂には全周を囲ま

れてしまう。

正に絶体絶命。デッドロックのリーダーと思わしき男は無関係な上条を見逃そうとするも彼は一步も退かず、多勢に無勢でありながら食蜂を守る為にライダースーツの集団と対峙する。

その背に守られながら、食蜂は困惑する。何故この少年は自分を助けてくれるのか。別に血縁関係がある訳ではないし、恋人だったりもしない所詮行きずりの相手だといふのに……。

「今にも泣き出しそうな女の子の側に立てりゃあ、こっちはそれで本望なんだよ」

そして、その言葉を聞いて食蜂は自分の中で一つの感情が芽生え、身体が熱くなる。それは今まで何度となく他人の頭を覗いてきた彼女をして、初めて知る感情だった。

「そうか。ならばしようがない。君とも戦わなければならぬようだ」

「元よりその気だよ」

上条が動く。デッドロックたちも一斉に構え、戦いの火蓋が――。

「喧しい。近所迷惑よ」

切つて落とされた。

ぐしゃりと天から振り下ろされた踵が上条を迎え撃とうとした男のヘルメットを陥没させる。

「……………え？」

この場に居た全員が口を開け、固まる。地に伏した男の背中の先には紅白の巫女が立っていた。

「つたく……………呆れた。あんた、また面倒事に巻き込まれてんの？」

デッドロックたちに一瞥もくれてやること無く、巫女は気だるげに首を回しながら、まるで緊張感の無い様子で上条に視線を送り、そう言った。

「博麗ツ!? 何で……………」

「あんだだけ派手に爆音鳴らしながら追い駆けっこしたら否が応でも気付くわよ」

「そうか! けどナイスタイミング! おかげで助かった!」

いち早く冷静さを取り戻した上条がその人物の登場に安堵と共に笑みを浮かべる。

彼女が駆け付けたからにはもう大丈夫だと、確信している笑みだった。

(博麗って……………あの……………?)

食蜂もその姿には見覚えがあった。彼女にとって因縁深い能力開発施設、クロインドリ才人工房

〃において度々聞いていた名だ。尤も、全く別の研究プランだったようで詳細までは知らないが……………。

「何者だ、貴様!?!」

「おのれ……………! 邪魔立てするか……………!」

「……で、何こいつら？ 最近の暴走族つてのはバイクに乗らずに自分に車輪を付けてんの？」

敵意を剥き出しにするデッドロックたち。対して巫女は特に表情を変えずに相変わらず緊張感が一片足りとも感じられない声で問う。

嘗められているのは明らかであり、リーダーを撃破されたこともあって彼らは苛立ちを募らせる。

「我々の邪魔をするなら、死ね……！」

しびれを切らしたデッドロックの一人が背中に装備された超小型ジェットエンジン2基で時速200km以上に加速しながら突撃する。腕に携行している鉄の杭のようなもの……炸薬作動式パイルバンカーで交差すれば即死は免れない。

「その言葉、そのままお返しするわ」

「がはっ……!?!」

——が、すれ違った瞬間、膝から崩れ落ちたのはデッドロックの方だった。

「はっ。」

まさかの瞬殺。リーダーの時のように不意打ちでもなく超能力者第五位を抹殺する為だけに作り上げられた武装が、超能力者でもないたった一人の巫女によって真正面から呆気なく粉碎された。

ここで彼らは漸く気付いた。自分たちが何を敵に回したのかを。もはや自分たちは狩人ではなく、狩られる獣の方なのだということ——。

「生憎だけど今は機嫌が悪いの。これ以上、私の手を煩わせるといふのなら……」

一方、巫女は何食わぬ顔でいつの間にか手に持っていたお祓い棒を肩に担ぎ、ただ冷たく何の感情の色も無い瞳で彼らを見据える。

「死にたい奴だけ、かかってきなさい」

こうして、超能力者への憎悪と怨嗟から食蜂操祈抹殺という凶行に走った集団、デッドロックは何を成すことも無く叩き潰された。

これが食蜂操祈と巫女——博麗霊夢との邂逅。もしも彼女が来なければ上条にとんでもない大怪我を負わせていたかもしれない、そうなっていたら食蜂はそのことを一生後悔していただろう。

故に、心から感謝している。上条が能力を使わなくても助けてくれる素敵な王子様であるように、霊夢もまた食蜂にとっては命の恩人にして“ヒーロー”だった。

そう、思っていたのだ。

「嘘で……しょ……っ」

声が震える。そんな人物から告げられた言葉に食蜂は耳を疑い、顔を青白くさせていた。

「何も……？　本当に何も……覚えていないの………？」
「……ええ。そうよ」

嫌な予感はしていた。目の前で普段の彼女を知る身からすれば考えられないような覇気が無く、暗い表情で俯く少女が自分に対して僅かばかりではあるものの苦手意識を持つていたことは知っていたのだから。

本人曰く、似たような能力を持つ奴を思い出すからと。その際、そいつに比べればずっとマシな性格をしているから安心しなさいと良く分からないフオーローをされたが、食蜂からすれば単にそれだけの理由で能力を知ろうとも物動じせず、対等に扱ってくれた。彼女のことは気兼ねなく接することの出来る数少ない良き友人のように認識していた。

そのため、わざわざ常盤台にまで出向いて会いに来るということは相応の用件があるのだと察することは容易である。

そして、その予感是的申した。だが、それは想定していた何よりも最悪な、信じられない、否、信じたくないようなもの。

上条当麻が記憶を喪っている。淡々と告げられた残酷な事実を思い切りハンマーで殴られたような衝撃を受け、打ちのめされる。

「た、確かなの？　勘違いだって可能性は——」

「冥土返し、だっけ？ あんたらがそんな大層な異名で呼んでいる医者が診断した結果よ。私から見ても間違いないく何もかも忘れていると思うわ」

そこに嘘が存在しないのは能力を使わなくても分かる。彼女ほど嘘が下手で分かりやすい人物は食蜂の知る限りでは存在しない。

霊夢は正直に話した。魔術師関連はある程度はぼかしつつも、上条当麻の身に起きたことが真実であると証明する為に洗いざらい説明した。

「じゃ、じゃあつ！ 他の記憶を刺激するとか、それでも駄目なら私の心理掌握で——」
 「あいつに能力通じるの？ それに、恐らくあいつの記憶喪失は私と同じ。しかも全部忘れちゃってる分、より深刻な状態よ」

「なっ……………」

今度こそ食蜂の顔が絶望に染まる。霊夢の記憶については知っている。かつて、霊夢は心理掌握で自身の記憶を呼び起こせないかと頼り、食蜂も助けられた恩を返す為に二つ返事で引き受けた。

しかし、結果は失敗。いくら最高峰の精神系能力と言えど、脳細胞ごと破壊されていると言う他無い致命的な記憶の損傷を修復することなど不可能。無いものを甦らせることなど出来やしないのだ。

つまり霊夢の発言が真実ならば、今の食蜂に出来ることなど存在しない。

「う、嘘よつ……！ そんなこと有り得ない……ッ！」

「……操祈」

「だつてっ！ だつてえ、そんな……そんなの……あんまりじゃない……ッ!!」

絶望に打ちひしがれる。自らの知らぬ所で、最愛の人間が死んでいた――。

受け入れられるはずがない。

「あつ、貴方は!!」

そして、彼女は冷静さを失う。ガシッ！ と霊夢に掴みかかり、強く睨み付ける。

「貴方はっ、何をしていたの!?! 貴方が傍に付いていながら、何でこんなことに……ッ

!?!」

「……………」

涙が止まらない。感情を爆発させ責める。それが全くお門違いなただの八つ当たりであり、おぞましい行為である事には気付いていた。

しかし、それでも止められなかった。それ程までに信じられなかった。あの博麗霊夢が上条を救えなかったことが――。

「貴方はいつも、相手が誰であろうと何てことないかのように倒してきたじゃない!

上条さんだつて、貴方の事は誰よりも信頼して、頼ってた! 彼にとつて貴方は、唯一

のヒーローだったのよ! なのに何でっ!」

幻想が崩れ去る。考えてみれば当然だ、今まで勝手に思い込んでいただけに過ぎなかったのだ。

博麗霊夢はやることなすこと全てが滅茶苦茶で出鱈目でその場に駆け付けければ何もかもを救っていく無敵の存在なのだ。

しかし、現実とは違った。所詮は彼女もただ強い力を持っただけの人間。無敵でもなければ完璧でもなく、手に負えないことも取り零すこともあり、それがたまたま上条当麻だった。

そういうことなのだろう。だからと言って、脳で理解しても感情はそれを拒絶する。

「何でなのよ……何でえっ……!!」

「……………」

その慟哭に霊夢は何を言わない。こんなことしか言えない食蜂に失望したのだろうか。現に食蜂自身も自己嫌悪に陥っていた。

「——ごめんなさい」

「え？」

しかし、暫しの沈黙の後に口から零れたのは謝罪の言葉。食蜂が茫然としていると、彼女はそのまま床に膝を突き——。

「待つ、やめてっ!」

彼女が何をしようとしているのか察した食蜂は慌ててその体を押さえ込んで止める。

「確かに私のせいよ。あいつがああなったのは、私の油断が招いたこと」

「ち、ちがつ……」

「目の前で人間を、簡単に死なせるもんかと思っていながら私は守れなかった。くだらない油断と気安さが、あなたの大切な人を死なせてしまった」

「違う！ 違うでしようっ!？」

真摯に受け止め、沈痛な面持ちでそう言った霊夢の言葉を食蜂は否定する。それはあくまで結果論であり。自分の詰責は単なる八つ当たり過ぎに過ぎないのだと理解しているのだから。

けれど、それと同時に気付いた。彼女もまた自分かそれ以上に辛いのだと。

記憶喪失を死なせたと表現したように何かを忘れてしまうという事象を何よりも忌み嫌う彼女が、上条の記憶が破壊される光景を目の当たりにした時、如何なる心境だったのか。想像を絶するものであることは明白だろう。

分かっていたので。最高峰の精神系能力者である食蜂は他者の感情に対して人一倍敏感だった。だからこそ、一見すると周囲への興味が無く、冷たいように見える博麗霊夢という人間が、その本質は穏やかで優しい人物なのであると、とつくの昔に気付いていた、そのはずなのに。

「謝るのは、私の方よ……その場に居ることすら出来なかった人間が、結果だけをみて批判する行為が、どれだけ最低なことかは自覚しているわ」

涙を指で拭い、落ち着いた声でそう言う。一度感情を爆発させたからか、霊夢の謝罪に茫然としたからか、少しだけ冷静さを取り戻すことが出来た。

「……当麻は今、記憶喪失のことをひた隠しにしている。自分の知っている誰かに知らされて、そいつが傷付くのを恐れて」

「……………」

ほつりと漏らした霊夢の言葉に、食蜂が目を見開く。

「だから真っ先に気付くであろうあなたには、事前に教えておいた方が良いと思った。

二人とも傷付くなら一人だけの方がまだマシ……って言えば聞こえが悪いけど」

「そう……なの……」

「何度か言葉を交わしたけど、何も変わっていないかったわよ。記憶が無くても、当麻は当麻。あいつは以前と変わらない、お人好しな馬鹿のままだった」

それは食蜂にとってほんの僅かな、しかし確かな救いであった。

「だから操祈……あなたが好きだった当麻はもう居ないのかもしれないけど、もし自分の心に折り合いがつけられたのなら、また……あいつに会おうと良いわ」

「……………めんない。今日はもう、一人にさせて」

ぼそりと囁くような食蜂の要求を、霊夢は黙って受け入れ、この場を後にする。
「そつ、か……もう……戻って来ない、のね……」

涙がまたぶり返してくる。湿った床を見下ろしながら彼との積み重ねてきた宝石の
ような思い出を、一つ一つ思い出していた。

痴話喧嘩だったり、自分を守ってくれたあの背中も、そして何気ない日常の一コマで
さえも、全てがかけがえないモノだった。

—— だけど、もう居ない。あの時、あの瞬間の、彼女のことを知る彼と会うことはも
う二度と無いのだ。

「あ、ああつ……うああああ……」

啜り泣く声が、ずっと響く。

彼女の初恋は今以て終わりを告げた。

覚悟はしていた。罵声を浴びせられることも、拳の一つだって受け入れてやるつもりだった。

しかし、泣き崩れる食蜂を見て、かつて見たことがない彼女の有り様を目の当たりに

して霊夢は言葉が出なかつた。

「ハア……罪作りの男ね」

いずれは彼と親しい者たち全員に伝えなければならぬのかもしれない。そう考えるだけで溜め息が零れる。

男女問わず誰もが彼の死を知れば食蜂のように、或いはそれ以上に悲しむだろう。それくらいには彼が好かれていることを、霊夢は知っていた。

これは戒めだ。己が過ちを二度と忘れぬ為の。救えた、救えなかつたの話ではない。救わなければならなかつたのだ。

何があろうと人間の味方で在り続け、必ず守ると、そう誓つたのだから。

それこそが――。

「で？ 盗み見とは感心しないわね」

「……………」

そう呟けば、校舎の物陰から御坂美琴が姿を現す。いつもの制服ではなく、ドレスのような衣装を着用しているが、恐らく成夏祭で何らかの行事に参加していたのだろう。

「…………ごめん。あんたがあいつと居るのをたまたま見掛けて、その、気になつたからつ

い」

「そ。聴いてたの？」

「ううん。何を話していたかまでは分かんなかったわ」

ばつが悪そうに俯く御坂。この返答に平然としつつも内心ホツとする。仲が悪かろうと知り合いが記憶喪失なんて知れば少なからずショックを受けるだろうと思っただらだ。

「けど……あいつが、泣くのは初めて見た。それもあんな風になんて、想像もしたことがない」

「……………」

犬猿の仲だった、あの常盤台最大の派閥を率いていた女王が突然泣き崩れた時は、幻覚でも視ているのかと思っただ。あの光景は、御坂が今まで抱いていた食蜂操祈の印象を大きく変え、彼女の能力によるものだと思っただ方がまだ信じられた。

しかし、彼女の能力は自分には通用せず、それが紛れも無い現実なのだど理解させられる。

一体何があったというのか。

「分かっている。何を話してたかなんて訊くほど無神経じゃないわ。ただ、私が協力出来ることなら——」

「無い」

「ッ……………」

「今の所は、ね。もし必要になったら教えるから、その時に頼むわよ」
「え、ええ！ 任せておきなさい」

無下に扱われず、素直に頼つてくれた。この事に御坂は嬉しく思う。

実際のところは御坂に出来ることなど精々食蜂のメンタルケアくらいであるが、霊夢がきつぱりと断らなかつたのは詰責せず、こちらに配慮してくれたことへのせめてもの礼だった。

それに、人手は多い方がいい。

「ねえ……あいつ、大丈夫なの？」

「……さあね。立ち直れるかどうかは、あいつ次第。私達は見守るくらいしか出来ないわ」

「そう……」

御坂の問いに霊夢は何とも言えない返答をする。そんな柔な人間ではない、なんて安易なことは決して言えやしない。愛する者がすべてを忘れた……その辛さは経験の無い霊夢では想像も付かないのだから。

故に、ただ信じるしかなかった。己が何か声をかけるなど烏滸がましいにも程がある。

「じゃあ、あいつ……食蜂とはいつから知り合ってたの？」

すると御坂は別の質問をする。まさかあの彼女と面識があるとは思っておらず、先程からずっと気になっていた。

「ん？ えっと、去年の夏くらいかしら？ 暴走族に襲われてるところを助けてからの付き合いになるわ」

「暴走族？ あいつが？」

ただの暴走族なら簡単に撃退出来ると思うのだが……尤も、あくまで霊夢の基準なのでその暴走族とやらもろくな連中ではないのだろう。

しかし……。

「あんたって……基本的に人助けしてるわよね。あの黒妻って人も助けてたみたいだし」

「別に。成り行きよ」

こうして聞くと、本当に佐天の言うように“ヒーロー”みたいだった。

無愛想にそう言う様は一瞬照れているかに見えたが、どうやら本気でそう思っているようだ。だが、成り行きといえど誰かを助けているという事実は凄い事だと御坂は思う。

気に食わない相手だが、あの木山春生との戦いから、御坂は霊夢に一目置いていた。

「人助け……ね」

そう言われたのは御坂が最初ではなかった。いまいち実感が湧かないが、周りがそう言うのならやはりそうなのだろうか。

霊夢に正義感はない。今も昔も、きつとこれからも。ただ目が届く範囲で悪事だの悲劇だのが行われるのが気に食わず、見過ごせぬというだけ。故に、この学園都市の裏で平然と行われている胸糞悪い事象に関わるつもりなどないし、心底どうでもいい。

「それに、いくら助けようと、肝心な所で取り零したら意味無いでしょうに」

「え？」

「何でも無いわよ。それじゃ、私はそろそろ涙子の所に戻るから」

思い出したように霊夢は言つて背を向ける。もはや成夏祭を楽しめるような気分では到底無くなつたが、帰るにしても待たせている彼女を放置する訳には行かなかつた。

「あ、待つて！ 私も行くわよ！」

それを慌てて御坂が追いかける。霊夢は去り際に食蜂の居る方角を一瞥し、この場を後にした。

（大丈夫。絶対に見つけ出してやるわ）

食蜂には言わなかつたが、霊夢は上条の記憶を取り戻すことを諦めてなどいない。たとえ可能性が限りなくゼロに等しかろうと、そのゼロに彼女はすべてを賭けるつもりだ。

彼女は正義の味方でもヒーローでもなく、人間の守護者にして幻想の調停者。
“博麗の巫女”なのだから――。

乱雑開放

曰く、深淵の王者。

曰く、怪異の頂点。

曰く、無敵の怪物。

人々はそれを、^{ヴァンパイア}“吸血鬼”と呼んだ。

魔術師がカインの末裔と呼ぶそれは世間一般に知られる通り不老不死であり、人間離れした身体能力を有し、吸血した相手を仲間にする能力を有するという。

海にも際限があるように、あらゆる生物の魔力には限りがある。生命力を魔力に変換して扱う魔術師達にとって、不滅の命を持つということは“無限の魔力”を持つということと同義であり、実在するならそれ単体が核爆弾に匹敵する程の脅威である。

しかし、その実在を^{オカルト}確認した者は居ない。理由は遭遇した者は死ぬからだ^と伝えられ、普段から非科学を大真面目に扱っている魔術サイドにおいてもその実在については懐疑的だった。

見たら、死ぬ。故に、見た者が居ない。

それは魔術師達にとって“吸血鬼”に対する一般的な常識だったが、ほんの数百年前までは違ったはずだ。

居たのだ、確かに、吸血鬼は、その昔から。それを“殺す力”が存在し、認識されているからにはそれが存在したという痕跡が間違ひなく残っている。

にも拘らず彼らは“吸血鬼”を知らず、そして知らないという事実は一切違和感を抱かない。

ある日を境に、魔術師は、人々は“吸血鬼”という存在を忘れてしまった。

「——転校生？」

盛夏祭が終わってしばらく。いつものファミレスで霊夢は佐天と談笑していた。

「はい。春上衿衣さんって言うんですけど、初春のルームメイトになったんです。今度紹介しますね」

「ふうん……この時期に珍しいわね」

「ですよー。普通は新学期の始まりに合わせると思うんですけど」

他愛の無い会話をしながら霊夢は湯呑みに入った緑茶を飲む。外は炎天下であるが、冷房の効いた店内で熱々のお茶を飲むというのもなかなか乙なものだ。

因みにこの場に居ない白井や初春は固法らと共に急遽行われた警備員アンチスキルとの合同会議へ出向いている。霊夢は残留要員、要するに留守番なのだが、白井が居ないのを良い事にこうしてサボタージユをかましていた。

「それでなんですけど明日、その春上さんと初春に白井さん、御坂さんも一緒にお祭りに行こうと思ってるんですけど霊夢さんもどうですか？」

「お祭り、ねえ……ま、特に予定なんて無いし、構わないわよ」

「本当ですか！ やったー！」

言い方からして盛夏祭とは違い、普通に屋台などがある夏祭りのことだろう。暑い中出歩くのは面倒であるが、祭り自体は霊夢は嫌いではなかった。

彼女の場合、大体主催したり屋台を開店したりする側だったりするが。

「——ん？」

その時、微妙な揺れがファミレスを襲った。物が倒れるほどの大きさではないが、カタカタとテーブルの食器が小刻みに音を立てる。

「……地震？」

やがて揺れは収まり、動きを止めていた店員らは何事も無かったように作業へ戻っていく。客もあまり驚いていないようだし、まるで慣れてる様子だった。

「最近多いですよねー」

「そうなの？」

「え？ 知らなかったんですか？」

「普段飛んでるもの。揺れなんか感じないわよ」

「いや、流石に陸に居る比率のが高いでしょ」

佐天が説明する。何でもここ最近原因不明の地震が連続的かつ頻繁に発生しており、震度やマグニチュードはまちまちだが、中には建物の一部が倒壊したり怪我人が出た事例もあるらしい。

「へえ……」

「それで、私が最近観ている都市伝説サイトによるとですね……」

「都市伝説って……隙間女とかトイレの花子さんとか？ あとテケテケ」
 「それはどちらかと言えば学校の怪談では？ って話の腰を折らないでくださいよ。なんでも現在学園都市各地で頻発する地震は実は『乱雑開放』ポルターガイストなんじゃないかって言われてるんですよ」

にやり、と怪しげな笑みを浮かべながら佐天は語り始める。曰く、今起きてるのはただの地震などではなく、霊的な干渉による怪現象だとか、別次元からの波動だとか、はたまた統括理事会が地下施設で行っている秘密実験だとか、そんな眉唾物の陰謀論をさも有力な説のように主張する佐天に霊夢は目を白黒させた。

「ポルターガイストって……不良天人ならともかくチンドン騷霊共じや地震なんて無理よ」

「てんにん？ ちんどん？ よく分かりませんが、少なくともただの地震じゃあないってことです。そもそも原因不明って時点で怪しき満点ですよ」

「あ、そう。……というか、涙子って意外とこういう話好きなのね」

「ええまあ。都市伝説マスターと呼んでくれても良いですよ？ フフン」

誇らしげに胸を張る佐天に霊夢は何とも言えない表情をする。思えば、彼女が幻想御手^{レベルアップ}を入手したのもそういう噂からだったか。

他人の趣味にとやかく言うつもりはないが、また事件に巻き込まれそうで不安であ

る。上条程ではないが、佐天もまたかなりのトラブルメーカーだと霊夢は認識していた。

「都市伝説も馬鹿には出来ませんよ。現に霊夢さんが『空飛ぶ不思議な巫女さん』っていう都市伝説なんですから。巷じゃ有名ですよ?」

「ふうん……人様を怪現象扱いはやめてもらいたいわね」

「他にもどんな能力も効かない能力を持つ男とか侍の幽霊とか喋るゴールデンレトリバーとか怪人赤黒マントとか色々——」

「え?」

「ん? どうかしました?」

「……いや、何でもないわよ」

噂も馬鹿には出来ない。挙げられた内容に幾つか心当たりがあった霊夢は余計にトラブルの原因になりかねないと心配するのであった。

「というか、そもそもこの街なら地震を起こせる能力持ちくらい一人や二人居そうなものだけだ」

「うーん……聞いたことはありませんね。そんな地震なんて自然災害を引き起こせるような能力なら超能力者でもおかしくありませんよ」

「そういうもん?」

「そういうものです」

第一位がベクトル操作などという大層な能力なのだからそれくらいは有り得るかと思つたが、地震を起こすというのはかなり凄いことらしい。

「気になりませんか？ 霊夢さん」

「……ま、確かに原因が不明つてのは気になるわね。何もなくて地震なんて起こるはずがないもの」

「ですよね！ 絶対何かの陰謀ですつて！」

「それは知らないけど」

この街の最先端の技術とやらがなかなか馬鹿げているのは霊夢も知っている。故に、そんな科学力を以てしても未だに原因が解明されていないというのは疑問であつた。

となれば非科学……魔術関連を疑うのが自然だが、そこらの魔術師では人為的に地震を引き起こすなどという規模の魔術は到底扱えず、やろうにもかなりの準備と資金が必要だろう。

或いは、原因が分かった上で隠蔽しているか。

「……そういえば」

しかし、そこで霊夢はある話を思い出す。

「ん？ 何です？」

「前に教授が言ってたわ。能力の暴走が連鎖的に起きるとその力が数倍にも膨れ上がる
ことがあるって」

「ええ？」

唐突な発言。話の流れから何が言いたいのかは理解できるものの佐天は首を捻る。

「何せ能力の暴走により地震が引き起こされるなんて話は今まで聞いたことがなかつたのだから。」

「じゃあ、この地震は誰かさんの能力の暴走が原因……ってことですか？」

「可能性としては有り得るでしょう？ 少なくとも妙ちくりんな陰謀論よりは」

「た、確かに」

その指摘に佐天は頷くしかない。今まで挙げた説の中では一番信憑性が高いと言えよう。

「えっと、木山だっけ？ あいつが助けようとしてる子供達が意識を失ったのも、能力の暴走がどうのの実験って言ってたわね……」

暴走能力の法則解析用誘爆実験。記憶の限り木山春生はそのようなことを発言していた。

霊夢が先程教授の言葉を何故急に思い出したかといえ、あの一件が脳裏に残ってい

たからだろう。禁書目録の件で後回しにしていたが、決して忘れておらず、現状打開策が無いものはいずれはどうかするつもりだった。

（何かしら関係性があるのかも……ってのは流石に早計か。ただ調べてみる価値はありそうね）

願わくは自分の知らぬところで勝手に解決してほしいが、如何せん知ってしまった手前、無視を決め込むことは彼女の性分が許さない。

それに、幻想猛獣^{A I M パーリスト}の事もある。あの辻斬りと同様に、あれは自身の記憶について何か分かるかもしれない貴重な手掛かりなのだから。

「それにしても初春達って、一体何の合同会議なんですかね？」

「さあ？」

同時刻。白井らが出向いた警備員との合同会議では、今正に霊夢と佐天が話題にしていた原因不明の地震について話し合っていた。

「以上の事から、これは地震ではなく、〃RSPK症候群〃の同時多発が原因と思われる
す」

壇上に立つ女性。長い茶髪を背中にふわりと流した彼女は、見た目からしてやり手のキャリアアウーマンという印象を受ける。

テレステイナークライフラインと初めの自己紹介で彼女はそう名乗った。

Multi Active Rescue
先進状況救助隊、通称MARと呼ばれる警備員内に常設された部署の一つ。その

隊長であるという。

「尚、この事件について霊的現象や陰謀などと言うまことしやかな噂が流れています。今回風紀委員の皆さんにも集まってもらったのは、一般生徒がこのような噂に踊らされないよう、注意を促してもらいたいからです」

その言葉と共に会議は終わり、風紀委員はネット上の噂への火消しと、パニックを未然に防ぐ注意喚起を割り当てられた。警備員についてはこのRSPK症候群の同時多発が人為的に誘発されたものだった場合に備え、原因の割り出しと容疑者の確保を命じられ、更なる会議を行うことになった。

「それにしても、RSPK症候群の同時多発だなんて……今まで聞いたこともない現象よっ。」

会議場から出てきた固法が難しい顔で呟く。後ろでは白井と初春が長時間席に着いたことで固まった身体をほぐしつつ、同じように首を傾げていた。

RSPK症候群とは、反復性偶発性念力……即ち、ポルターガイスト現象を科学的に原理を解明したものであり、一般的な能力者が能力の制御を誤り、不安定に発現させた時に発生する。つまりそれが同時多発するとなると、極めて近い場所で同時期に、何人

もの能力者が能力の制御を手放さない限り発生したりしないのだ。

奇しくもそれは、霊夢が教授から聞かされていた能力の暴走が連鎖的に起こった場合の症状と全く同じである。

(もし、あのテレスティーナさんの言う通りだとしたら……何者かが、多数の能力者を一つ所で同時に暴走させでもしている？ でも、一体何の為に?)

それに、今回の対応。もし事実だとしてM A Rは一体どうやってそれを突き止めたのか。単なる推測にしてはあのテレスティーナという女史は完全にR S P K症候群であると決め付けているように思えた。

小さな違和感であったが、それが核心に触れているということはこの時の固法は知る由もない。もしも霊夢が会議に参加していれば直ぐに気付いたことであろう。

だからこそ、彼女はここに居ない訳だが。

「ムッキイイイイイ!!」

思案していると、背後から響く甲高い叫び声に固法はびくりと体を震わせる。何事かと振り返ると白井が頭を掻きながら怒りの形相を浮かべていた。

「……どうしたのよ? 白井さん」

「あの女! またサボっていやがりますの! あれだけ通信機は持つておけと言ったのに!」

あの女というのが博麗靈夢なのは明らかであり、またかと固法は溜め息を吐く。

「いつものことじゃない。今更そんなことでキレてたら身が持たないわよ」

「そんな投げやりな！ 固法先輩は慣れ過ぎて感覚が麻痺していますの！」

「ええまあ、実際慣れたし。けどもしかしたら、もしかするけど普通に仕事してたりして」

「どうせ佐天とファミレスで駄弁つてるに決まっていますの！ 現行犯で取っ捕まえてやりますの！」

「あ、待つ……」

固法が止めるよりも早く白井は空間転移で消える。先程の会議の通りにこれから隣の学校への注意喚起、計画草案を立てようと思っていたのだが……。

「つたく……あれ？ 初春さん何してるの？」

「え？ あ、いや……あははは……」

残った初春へ視線を向ければ彼女は携帯でどこかへ電話を掛けており、固法が見ると苦笑いを浮かべるのだった。

「……佐天。あの方は？」

一方その頃。ファミレス前に転移するや否や店内へと乗り込んだ白井であったが、そこには佐天しかおらず、しかし確かにもう一人誰か居た痕跡があった。

「えっと、霊夢さんなら初春から電話が来るなり急いで出ていきましたけど」

「……は？」

佐天の返答に固まり、そして瞬時に理解する。身近な所に裏切り者が潜んでいたことに。

「初春ううう!!」

「危ない危ない。会議が終わったら飾利に連絡するよう言っておいて良かったわ」
上空にて。怒り狂う白井を見下ろしながら間髪一髪だったと霊夢は安堵する。

何度も見つかるほど愚かではない。特定されている行き付けのファミレスで堂々と寛ぐ以上、こういった根回しはしておく。

「さて、適当に時間を潰そつと。今のうちに明日の祭りの下見でもしようかしら」

尚、佐天への口止めを忘れていたので帰ったら説教をくらう未来は確定しているのだが、未だにそれに気付いていない霊夢は意気揚々とこの場を後にしようとする。

「——あん？」

その時だった。

上空で街並みが見渡せたことで彼女はある違和感に気付く。

「まさか……」

嫌な予感を感じつつ、霊夢は向かう。高速で空を飛び、辿り着いたのは一棟のビル。そのすぐ目と鼻の先に降り立った霊夢は思わず顔をしかめる。

一見すると何も不自然の無い、ごくごく普通の建物のように見えるが、霊夢にははっきりと見えていた。

ビル全体に張り巡らされた結界が——。

「やあ、やつぱり君は気付いたか。博麗霊夢」

すると聞き覚えのある男の声がある。視線を向けた先には赤い頭髮の長身の神父——ステイルⅡマグヌスが立っていた。

その口振りからして、靈夢が遅かれ早かれここへ来ることは予期していたようだ。

「……………これ、何？」

靈夢はただ簡潔に問う。目の前の男が張ったものであれば即座に叩きのめして終わりだが、そうではないのだろう。

「『三沢塾』って名前に聞き覚えは？」

「無い」

「……………ふうん。君が単に無知なだけかな？ この国でシェア率一位を誇る有名な進学塾らしいよ」

「はあ？ 要するに予備校ってこと？ 何で予備校がこんな要塞になつてんのよ？」

全く以て意味不明である。靈夢の目からはどう見ても予備校ではなく、魔術的な堅牢な要塞にしか見えない。

「ふむ……………何て説明すれば良いかな。わりとややこしい事態になつてるんだが、順を追つて説明するとね」

煙草を吹かし、面倒臭そうにしながらもスタイルは事の経緯を語り始める。

「まずこの『三沢塾』はこの街の能力開発とやらを半端に知つてしまったせいで科学崇拜とも言ふべき新興宗教擬きと化してしまつてね。ま、そこら辺は僕はどうでもいいんだけど……………」

科学崇拜。いまいちピンと来ないが、神様の代わりに科学を信仰し、物事はすべて科学によってのみ解明できるとかそういう感じだろうか。ならば能力開発によって、神ならぬ身で天上の意思に辿り着くもの」とやら掲げる学園都市も似たようなものだ。と
霊夢は思う。

どちらにせよ、気に食わない。その対極の位置に立つ霊夢にとつては嫌悪すべきものであった。

「現在はどうに潰れている。端的に言えば乗っ取られたんだ。科学被れのインチキ宗教が、真正正銘本物の魔術師……いや、パラケルススの末裔たる、チューリツヒ学派の、
錬金術師」にね」

そして、本題を切り出す。

「錬金術師、ねえ……魔術師とどう違うのかは知らないけどそいつをブツ飛ばせば解決、って話でOK?」

「話が早くて助かるよ」

ステイルは笑う。

「三沢塾に潜伏する元ローマ正教の隠秘記録官にしてチューリツヒ学派の錬金術師、アウレオルス・イザードの処刑……それが今回僕達が学園都市統括理事長から依頼された内容だ」

「統括理事長？ 学園都市で一番偉い奴だっけ？」

科学と魔術との不可侵条約なんてものが存在する時点で予想はしていたが、やはり学園都市の上層部は魔術師と繋がってしようだ。

「ああ。本来は新興宗教擬きと化した三沢塾は学園都市側で排除する予定だったんだけど、そこにアウレオルスIIイザードが占拠してしまって案件が“科学サイド”から“魔術サイド”に切り替わってしまった。そのため統括理事長は手を出せず、イギリス清教に依頼した訳だ」

「ふうん……面倒な手順を踏まないといけないのね」

「関係無く好き勝手に手を出す君が異常なだけさ。統括理事長はいつも肝を冷やされてるんじゃないかい？」

「さあ、どうでもいいわ」

アンダーライン
滞空回線……

……だったか。学園都市一帯に散布している鬱陶しい塵のような機械群でこの街を覗き見ている変態がどう困ろうが知ったことではない。

お陰で気持ちよく空を飛ぶことも出来やしなかった。

「さて、博麗霊夢……これが君の必要悪の教会としての初仕事だけど何か質問は？」

断ることは不可能。最大主教、ローラスチュアートなるものとの契約で学園都市内で魔術師絡みの事件が起きた際には協力しなければならぬのだから。

科学の総本山たる学園都市に魔術師が足を踏み入れることなど滅多に無いと思つていたので特に気にしていなかったが、まさかこのようなタイミングで現れてしまうとは。

「……今から？」

「勿論だとも。事態は一刻を争うんだ」

霊夢は溜め息を吐く。佐天には悪いが、どうやら明日の祭りには間に合いそうになり。

禁書目録の件からまだ一週間くらいしか経っていないというのに。再び魔術師を相手にしなければならぬという事実には彼女は辟易するのであった。

吸血殺し

記憶を失ってから一週間。右も左も分からないまま退院し、実は記憶喪失ではなかったように振る舞いながら過ごすのは本当に苦労したと、上条当麻は思い返す。

何しろ生活用品の場所や果ては口座の暗証番号すら思い出すことが出来ない状態なのだ。自分がどこの学校に通っているのか、というかそもそも何歳なのか、どういうサイクルで日々を過ごしていたのか、およそ生活史と言えるものを、全て失ってしまったている。

上条がまず最初にやったのは目を皿のようにして辺りを見渡して近隣の地理を頭に叩き込むこと。決して出来の良い頭ではなかったが、何度も街中を見て回ることでどうにかして自分が暮らす学区のおおまかな地理は覚えた。

幸いにも同居人である禁書目録と上条が知り合ったのは最近らしく、誤魔化すのは簡単であったが、それでも記憶喪失であることを勘付かせないよう、違和感を覚えさせてはいけない。

そんな並々ならぬ努力を惜しまず、生活にもだいぶ慣れてきた頃。参考書を買う為

出掛け、猛暑と空腹でご機嫌斜めな禁書目録を宥める為に赴いた某人気ファストフード店にて。

彼は未知なる存在と対峙する。

「……巫女？」

生憎と満席であつたため相席を希望し、店員に案内されたテーブルには、一人の少女が突つ伏していた。

その格好は紅白の巫女装束。頭髮も黒と奇しくも上条を診察したカエル顔の医者を除けば唯一上条が記憶喪失であることを知っているクラスメイト、博麗霊夢と同じ格好であつたが、霊夢の巫女装束と違い、腋は露出しておらず、スカートではなくきちんとした袴である。

つまり、少なくとも上条の知識においては一般的によく知られるごく普通の、神社の巫女の姿だつた。

(えっ? もしかして学園都市で巫女さんってわりと普通に居る感じ?)

そう誤解するのも無理は無い。現に案内した店員も目の前で突つ伏す巫女をまるで居ないものであるかのように扱いながら立ち去っていく。

……いや、あれは完全に見えないことにしているだけである。

同時に、上条の記憶を失う前から、失つてからも続く不幸によって敏感になつたア

ンテナが、警告を告げる。

（よし、帰ろう。アレに関わるぐらいならインデックスに嘯み付かれた方が——げっ!!）
上条の心情など知らず、禁書目録は既に席に座っており、クーポン券が無ければ危うく金欠になるところだったくらい大量のハンバーガーを機嫌良く満喫している。

仕方なく上条が近づくと、巫女の浜に打ち上げられたクラゲみたいに広がっていた長い絹のような黒髪が揺れ、肩がピクンツと動く。

「く……く……」

（く?）

「……食い倒れた」

「は?」

言葉の通りである。巫女は食い倒れていた。

どう反応すればいいかわからず、禁書目録の方を見るが我関せずと食事を続けている。味方があてにできないため、再び一人で巫女と向かい合う。

「えっと、何で食い倒れてるんでせうか?」

とりあえず質問してみる。すると巫女は起き上がり、ぼんやりとした顔で上条を見つめた。

面持ちも霊夢と同じく大和撫子のような美人であった。そんな美人に見つめられ、上

条の頬が緊張で強ばる。

「お得なクーポンがたくさんあったから。とりあえず1000円のハンバーガー30個ほど頼んでみた」

「そいつは、インデックスでもないのに頼み過ぎたな」

名前を呼ばれて反応したのか暴食シスターは多少は腹を満たせたこともあって一旦食事を中断し、漸く巫女の存在を認知し、問い掛ける。

「ねえ、あなたは何でそんなに食事を頼んだの？ 必要以上の暴食は大罪なのに」

上条は棚上げるなどこの破戒僧のような修道女にツツコミたくなるのを堪えながら巫女の返答を待つ。

「帰りの電車賃。400円必要だった。でも全財産が300円。だからやけ食い」

（馬鹿だ……）

要するに、帰るに帰れないのでこのような暴挙に出たらしい。上条は呆れるしかなかった。

「歩いて帰ろうとは思わなかったの？」

「……暑いから。無理。溶けてなくなる」

巫女の格好をしているくせに、精神修行が足りてないようだ。もしかすると霊夢の巫女装束は実は夏用なのかもしれない。あの露出した腋部分やスカートは通気性を考慮

した合理的なものであると考えると合点が行く……のだろうか。

となると、この巫女はうっかり衣替えを忘れてしまったということになるが、先程のハンバーガーのくだりを見るに充分に有り得ると思う。

「だったら、とうまにお金でも借りたら？」

禁書目録はここで上条に言葉のキラークラスをする。巫女がこちらをジツと見つめた。

「いや、無理だつて。上条さん、財布の中には千円札しかないし。むしろ恵んでほしい立場だから」

上条が断ると、巫女は小さく舌打ちした。

「……甲斐性無しが」

「初対面の人間に、自分のことを棚に上げといて罵倒された！ お前だつて帰りの電車賃が1000円足りねーだろ!? つーか、何だよその格好は！ 学園都市には巫女さんが居ることが普通なのかつ!？」

「私。巫女さんではない」

小さなプライドを傷付けられた上条が憤りながら興奮気味に問えば、巫女は自身の存在を全否定する。

「私。魔法使い」

「なっ……」

そして、続いた一言に上条と禁書目録は驚き、表情を変える。魔法使い……即ち、魔術師。普通なら戯言と断ずるのが常だが、二人の身近には巫女で魔術師である存在が居るのだった。

一方、そのような事情を知らない巫女は彼らのそんな反応に頭上に疑問符を浮かべる。

「魔法使いつて、本当なの？」

実は学園都市つて神道の勢力の根城なのかも、と思いながら禁書目録が問う。

「本当」

「じゃあ、学派と魔法名は？」

「……………？」

こてんと首を傾げる。その反応で上条は気付かなかったが、禁書目録は悟った。

バンツとテーブルを叩く。

「カバラ!? エノク!? ヘルメス学とかメルクリウスのヴィジョンとか近代占星術とか!
 “魔法使い”なんて曖昧な事言つてないで専門と学派と魔法名と結社名オダを名乗るんだよお馬鹿あー！」

「……でそんな事を叫ぶ時点でお前も大馬鹿だよこの暴食シスター!」

目の前の巫女が霊夢とは違い、魔術師なんでもないただのコスプレイヤーであると確

信した禁書目録は説教するように捲し立てる。

これに上条は戸惑う。とてもではないが、大々的に話していい内容ではなかった。
「???」

「この程度の言葉も分からず魔術師を名乗っちゃダメ！ 大体あなたのその格好はれいむと同じ卜部の巫女なんだからせめて陰陽道の東洋占星術師ぐらいの法螺吹かなきゃダメなんだよ！」

因みに霊夢も学派だの魔法名だのは知らなかったりするのだが、それを禁書目録が知るのはまだ先である。

「うん。じゃあそれ」

「じゃあ!? あなた今じゃあつて言った!?」

「お、落ち着けインデックス！ そんなこと公の場で話すな——つて!?」

どんどん暴露していく暴食シスターの口を上条が慌てて塞ごうとしたその時だった。

妙な視線を感じ、後ろを振り向くと、10人近いスーツの男達が、こちらを取り囲んでいた。

(いつの間に!? それに何だこいつら? 異様に感情を感じさせない……)

上条は驚く。そんな異様な集団が居るにも拘わらず他の客は誰一人何も異常に気付いていないように見えた。

明らかにおかしい。いつでも動けるように上条が警戒していると、巫女が彼らを認識するなり立ち上がり、手を差し出す。

「あと100円」

すると男達は道を譲るように一步下がり、100円を手渡す。そのまま巫女は男達を引連れて店から立ち去っていく。

その後ろ姿を上条は呆然と見送った。

「な、何だったんだ一体……」

「——さて、何なんでしょうねえ？」

「ツ!？」

バツと振り向く。つい先程まで巫女が座っていた場所に、誰かが居た。

「あむっ……うん、旨いな、これ」

全身紫色の服を着た長い金髪の少女。年齢は禁書目録と同じか少し上のように見える。

あの男達のようにいつの間にかそこに居た彼女は山積みになったハンバーガーの一つを手にとるとかじりつき、舌鼓を打っていた。

「だ、誰だ……?」

思わず席から立ち上がり、上条は問う。その横で禁書目録も同様に驚いている。何の

音も、一切の気配も無くそこに居る目の前の少女は明らかかな異常だった。

そんな間い掛けに、少女はくすりと笑った。

「私、魔法使い」

「なっ……」

先程の巫女と同様の返答。しかし、目の前の存在が語るのは法螺でもジョークでもでもないのだろう。

「うふふ、そう身構えなくていいわよ。私はごく普通の……そう、普通の魔術師なんだから」

頬杖を突き、愉しげに上条と禁書目録の二人を見据えながら少女はそう言った。

「普通の……魔術師……?」

「な、なら、学派と魔法名は?」

巫女にしたものと同じ質問。これに少女は落ち着いた様子で答えていく。

「うん? そうねえ……学派とかは特に無くって西洋全般に手を出してるわ。魔法名は 魔法と紅夢からなる存在 Magicae516よ。かつこいいでしょう?」

特定の学派に属していない魔術師は然程珍しいものではない。ステイルⅡマグヌスだって基本はルーンの使い手だが、使えろと判断すれば日本の神道だって何だって取り入れる。

「……フリーの魔術師ってこと?」

「そうなるわね。勿論、どこの結社キャバルにも属してない、あなた達の味方よ。イギリス清教を敵に回すような真似もしたくないしね」

ならば安心……とは行かない。彼女が嘘を吐いている可能性だってある。そもそもフリーの魔術師が正規の手順で学園都市へ入り込んだとは思えない。

しかし、確かに目の前の少女に敵意は存在せず、その掴み所が無い雰囲気禁書目録は相手の心情を窺い知ることが出来なかった。

(何なんだよ……嘘を吐いてるようには見えねえが、本当の事を言っているのかも分からねえ……)

一方で会話の内容について行けていなかった上条だったが、イギリス清教という単語には聞き覚えがあった。あの手紙の送り主であるステイルという人物が所属している組織だ。

ということとは味方か? 否、ステイルらとはかくとしてイギリス清教自体は禁書目録の記憶を消すことを容認、或いは推奨してきたような連中である。決して信用してはいけないと上条は依然として警戒を解かない。

「うふ、うふふふ」

対する少女は笑うだけ。こちらの警戒心など気にも留めず、言葉を紡ぐ。

「あなた……お金に困っているようね？」

「え？ あ、ああ。確かに万年金欠だが……」

「そんなあなたに、良いアルバイトがあるんだけど少し話を聞いてみないかしら？」

スツと少女はどこからともなく何やら書類の入った封筒を取り出して見せる。

「ア、アルバイト？」

「ええ。それもあなたがそれはもう、大好きな人助けよん」

「人助け……？」

何もかもを見透かすような視線。幼くも妖艶にそう告げられ、上条は戸惑う。まさか、目の前の少女とも自分は知り合いだっただのだろうか。

しかし、自分は彼女を見て最初に誰だと問い掛けた。それに対して何も反応がなかったことからつきり初対面だと思っていたのだが……。

「誰かの命を助けられて、お金も稼げる。こんなにも一石二鳥なことってなかなか無いと思うの。興味があったら引き受けてみるといういわ」

半ば押し付けるように、少女は封筒を手渡すと立ち上がり、席から離れる。

そして、恐らく隣の椅子に置いていたと思われる紫色の先の尖った鍔の広い帽子……所謂漫画や映画などで魔法使いが被っているような三角帽子を被る。

——その姿は正しく、“魔女”だった。

「それじゃあ、また会いましょう?」

そうして少女はファストフード店から消えた。まるで最初からそこに存在せず、先程までのことがすべて泡沫の夢だったかのように――。

(本当に何だったんだ……あいつ)

昼過ぎ。昼食を終えた上条は未だに開けていない封筒を見ながらファストフード店の出来事を思い返していた。

そのすぐ近くで禁書目録が一匹の三毛猫を抱いてわしゃわしゃと撫でている。つい先程見つけた捨て猫であり、飼うか飼わないか論争していた。

「スフィンクスは教会で保護するんだよ!」

もう変な名前をつけているようだ。ただでさえ家計が火の車で猫を飼育する余裕がある訳が無い。そもそも上条の学生寮がペットOKなのかすら不明なのだが……。

あまりにもごねるので根負けした上条はしばらくの食事のグレートダウンを条件に仕方無く許可した。

(金、か……)

再び視線を封筒の方へ向ける。

「むう……駄目なんだよとうま! あの魔術師、あからさまに怪しいんだよ!」

「わ、分かっていますとも。流石の上条さんもそこまで切羽詰まってねえよ!」

禁書目録はあの魔女っ娘のことをよく思っていない様子。信用出来る要素など微塵も無いのだから当然だろう。

「にゃー」

「あ、待つんだよスフィンクス！」

すると三毛猫が腕の中から飛び出し、走り出す。慌てて禁書目録はその後を追い掛ける。

「おーい！ あんまり遠くに行くんじゃないぞー！」

猫と追い駆けっこする禁書目録を見送りながら上条は溜め息を吐く。願わくは三毛猫がそのまま行方を晦ませてほしいものだ。

「……しかし、人助け、か」

少女の言葉を思い返す。記憶を失う前の上条当麻という人物はどうやらかなり頻繁に人助けを行っていたらしい。現にこうなったのも禁書目録を助けた結果だと言う。

——凄い奴だと、自分の事であるにも拘わらず、そう思わずにはいられない。いざその場面に直面した自分にそんなことが出来るかと問われると勿論だとは言えなかった。

故に、想像してみる。

(もしも……もしもだ、このアルバイトつてのをやらないと、インデックスみたいな女の子が理不尽な目に遭うってんなら……)

少なくとも許せないことであつた。ならば己は一体どうするべきか。記憶は無くとも、魂は叫ぶ。

(……別にやるつて決めた訳じゃない。けど内容くらい見ても大丈夫だろ)

そう思い、意を決して上条は封筒を開け、中に入った数ページの書類を取り出す。

「……三沢塾？」

聞き覚えは無いが、その名の通り進学塾の名前らしい。そこは科学崇拜の新興宗教と化しており、ある特異な能力者を拉致しているのだという。

いきなり物騒だなと思ひながら次のページを捲り、記載された写真に目を見開いた。

「なっ……!!？」

能力名、ディーブブラッド“吸血殺”。氏名、ディーブブラッド“姫神秋沙”。

写真に写っているのは、ファストフード店にて食い倒れていた、あの巫女さんだった。

「——吸血殺し?」

ステイルの口にしたその名に、霊夢が片眉を上げる。

「ああ。連中……カインの末裔。共を問答無用で灰に返す能力らしい。俄には信じ難いけどね」

「……実例はあるの?」

「さあ、ね……詳しいことは知らない。ただ、情報は少ないながらも英国図書館にも記載されていたし、学園都市にその能力名で正式に登録されているってことは、そういうこ

となんだろうさ」

菌切れの悪い返答。ステイルとしてもあの無限の魔力を持つ不老不死の化け物が実在しているということすら信じられないのに、それを殺す力があると言われ、酷く困惑しているのだろう。

霊夢にとつても、カインの末裔などと呼ばれた存在——“吸血鬼”を殺す力が事実であるかは重要であった。

「そ。なら、本人に直接聞いてみるわ」

吸血殺し本人は知っているはずだ。実際に殺したはずだ。でなければ自らに斯様な能力が宿っているなど分かるはずがないのだから。

脳裏に過るのは、紅い霧。

「……で、つまりそのアウレなんとかつてのは吸血鬼を誘き寄せようとしているってこと？」

「恐らく、ね。錬金術師は呪文の詠唱に時間がかかるからね、“永遠の命”はさぞ魅力的なんだろうさ。それに、無限の魔力を有すればそれこそ神の領域にだって到達するのも不可能ではない」

「ふうん……魔神、だったっけ？ 日陰者も極めれば行き着く所まで行き着くのね」

「ほう？ 流石にその程度の知識はあるんだね」

「一応ね。 ったく……そういうのは他所でやってほしいわね。 ルーマニア辺りとか吸血鬼が王様だったらしいから、そこでやればいいのに」

「吸血殺しを海外へ連れ出すのはリスキーだろう。 それと、かの串刺し公は後世での汚名であったことが既に証明されているよ」

「へー」

そんな会話をしながら二人は廊下を進んで行く。 彼らは既に三沢塾内部へと侵入していた。

「……………」

足を止める。 辺り一帯に漂うのは血の臭い。 怪訝な表情で霊夢が廊下の先を確認すればそこには西洋風の鎧を纏った騎士達が無惨な姿で床に散らばっていた。

「何こいつら?」

「施術鎧により、加護と天矢のレプリカ……おそらくローマ正教の十三騎士団だろう。 裏切り者の首を取りに僕達よりも先に突入していたみたいだね」

「……………」この様子じゃ全滅ね。 それにしても、こいつら見るからに武闘派っぽいけど、狙いの錬金術師ってのはかなりの腕前なの?」

「そうだね。 かの名高きパラケルススの末裔だし、天才と持て囃されていたよ。 まったく……騎士団はイギリス清教の十八番だというのに、下手に盗作するからそういう事に

なるんだ」

グロテスクな光景を目の当たりにしながらも、多少顔をしかめるだけで平然とした様子で問う霊夢に肩を竦めてステイルは言う。

そして、周囲を見渡す。廊下を行き違う大勢の生徒達は血塗れの現場に目も暮れず、当たり前前の日常を送っている。

「ふん……やはり、この結界はコインの裏表のようなものだね。コインの表の住人にはコインの裏にいる魔術師の姿に気付くことができず、そして一切の干渉を受けない。だから僕達には人を退かすことも、そこにあるエレベーターのボタンすら押すこともできない」

つまり侵入者からの干渉をはね除ける結界。歩く際の床からの衝撃は倍化し、動くものに迂闊に触ると一方的に引きずられ、人が押し掛けるだけで押し潰されることになるだろう。

どうしたものかと、ステイルは思考する。ここは12階建てのビルだ。歩き回るだけで普段の倍以上の体力を消耗してしまうためアウレオルスライザードを見つけ出した頃にはヘトヘトで戦えない……などという可能性もあった。

一方、霊夢は歩く衝撃が倍になることに気付いた時点で僅かに宙に浮くというズルをしていた。

「そうね……私達のことにも気付かれていますでしょうし、このままじゃ思う壺。そろそろ罅を明けないとね」

すると霊夢は大幣を取り出す。

「どうするつもりだい？」

「ちよつとした反則技をね。火織から聞いてない？ 人払いを破った時のこと」

「神裂から？ ……まさか」

ステイルは思い出す。目の前の少女は起点を破壊する訳でもなく、何らかの方法で人払いの術式を消し去ったことを。

「——私はどんな『結界』だつて問答無用で解いてしまえるのよ」

その言葉と共に、大幣を振り下ろす。同時にパキーン！ と何かが碎ける音が響き、次に幾つもの悲鳴が響き渡った。

生徒達が、騎士の死体に気付いたのだ。

「……やれやれ。本当に出鱈目だな、君は」

「騒ぎになるから避けたかったんだけど……致し方無いわ」

その時だった。

周囲の生徒の一部が急に動きを停止させ、こちらをジッと見つめる。その額には光る球体のようなものが浮かんでいた。

「……あん？」

生徒達は無表情のまま、一斉に口を開け、

『熾天の翼は輝く光、輝く光は罪を暴く純白、純白は浄化の証、証は行動の結果、結果は未来、未来は時間、時間は一律』

呪文を唱える。

「何っ!？」

「ちっ……成程。わざわざ一般人を残してたのは、単なるカモフラージュじゃなかったのね」

侵入者の迎撃の為の駒、或いは何らかの術式の生贄か、恐らくは両方だろう。錬金術師はこのビルに居る二千人もの生徒を操り、利用していた。

「多人数による詠唱……『グレゴリオの聖歌隊』のレプリカか……やってくれ……!」

能力開発を受けた人間は魔術を使えない。実際に詠唱する生徒達はあちこちから血を流し、傷付いているが、それでもお構い無しに詠唱を紡ぐ。

これに霊夢は顔をしかめ、無数の札を投げ付ける。

『一律は全て、全てを創るのは過去、過去は原因、原因は——』

「させないわよ」

札はふわりと生徒達の顔に張り付く。すると次の瞬間には彼らは意識を失い、バタバタと倒れていった。

僅か1秒の間隔さえあれば相手を煮るなり焼くなり好きに出来る霊夢からすれば生徒達の詠唱はあまりにも隙だらけだった。

「ハッ、容赦無いね」

「別にただ気絶してるだけで身体的なダメージは無いわよ」

見事な手際だとステイルは内心称賛する。ついこの前まで自分達がこのような相手を敵に回していたのかと思うとゾツとする程だ。

イマジンプレイカー
やはり幻想殺しの少年ではなく、彼女を助っ人として呼び込んだのは正解だった。

「撫然。まさかこの場所から『核』ごと我が結界を消し去るとは」

すると廊下の奥から声がする。

「ほう？ ご自慢の結界を壊されて、本人直々に僕達を消しに来たようだ」

「あら、手間が省けて何よりだわ」

姿を現したのは、薄い緑髪の男。その口振りからして目の前の彼こそが、錬金術師アウレオルス・イザードなのだろう。

しかし、霊夢は何か違和感を覚える。

「当然。このままでは計画に支障をきたす。貴様らはここで排除させてもらおう」

そう言い、男――アウレオルスはその右袖から鎖の付いた黄金の鍬を取り出し、こちらへ向けた。

秘封

アウレオルス・イズードは驚愕していた。

理由は侵入者である目の前の少女。何らかの方法で遠距離から自らが張り巡らせた境界を核ごと破壊し、そして生徒達を操って発動した「グレゴリオ・レブリカ偽・聖歌隊」を一瞬にして無力化した明らかな強者。

見た目に騙されず、最大限に警戒し、最初から一切の油断無く排除するつもりだった。しかし、今日の前で起きている光景を見るに、それすらも見積もりが甘かったと言わざるを得ない。

（啞然。まさか聖人か？ 否、この女。純粋な魔力量だけで聖人に並び立っているというのか——）

秒間10発にも及ぶ鏃の射出。僅かでも傷付けたものを純金へと変化させ、それに触れた者を高熱で火達磨にする凶悪な攻撃の猛襲を楽々と避けて迫ってくる紅白の巫女は、天才たるアウレオルスにとつても不可解な存在だった。

「撫然。実に興味深い！」

リメン・マグナ
「瞬間鍊金！」

後退しつつ、錬金術師としての知識欲を刺激されたアウレオルスは笑みを浮かべ、右袖に仕込んだ全ての鏝を四方八方へと一斉掃射する。

今度は逃げる隙間さえ無い。仮に回避したとしても、直ぐ様追撃を放つて八つ裂きにしてくれよう。

「遅い」

「何ッ!？」

しかし、自在に空を飛び、重力に縛られない動きが可能な者からすればそれは、ただただつまらない攻撃である。

縦横無尽に襲い来る鏝の嵐をあつさり潜り抜け、そのまま空気の壁を蹴るようにして即座に眼前にまで迫った。

「しまっ——」

急な接近に錬金術師で格闘に秀でていないアウレオルスに対応出来るはずもなく、顔面に掌底が叩き込まれ、彼は大きく吹っ飛んだ。

「う、があ……ッ!？」

そのまま宙を舞い、仰向けに倒れた。

「ツ……ふ、ふははは！ 依然。面白い、面白いぞ、小娘……!」

危うく飛びそうになった意識を何とか保ち、起き上がる。幸いにも腕力は聖人クラス

ではなかったようだ。もしも聖人の打撃ならば今頃気絶どころか頭が柘榴のように弾け飛んでいることだろう。

ならばやりようはある。鼻から溢れるように血が流れながらもアウレオルスは興奮気味に笑う。

「……何だ、偽物か」

対する霊夢の思考は冷え切っていた。

「何……?」

「妙な気配だし最初はもう人間辞めちゃってるのかと思っただけど……そもそも生きてすらない人形だったとはね」

先程感じた違和感の正体を理解し、興奮めした様子で霊夢は溜め息を吐く。

この態度にアウレオルスは片眉を上げ、しかし言い知れぬ恐怖を感じる。

「悄然。何だ、一体何のことを言っている?」

「自覚してないの? そりやまた、残酷なことをするわね……」

状況が理解出来ず、苛立ちを覚えながら問えば、霊夢は面倒臭そうに顔をしかめる。

そして、告げた。

「——あなたは最初から偽物の人形ってこと」

「! 何を馬鹿なことを——」

次の瞬間。霊夢は目を見開くアウレオルスの間合いに飛び込んでおり、無造作に大幣を振り下ろす。

「言つて、いる——!?!」

言葉を続けるよりも早く、アウレオルスの肉体にピシッと一筋の切れ目が現れる。

そして、鮮血と臓物が噴き出す。彼の胴体は縦に裂けていき、そのまま真つ二つに割れた。

「おっと」

即座に後退し、飛び散る返り血を一滴残らず避ける霊夢。鼻血を流していたことから分かつていたことだが、人形といえども形成物質は人体と同じ。否、これは同じように見せているに過ぎない。

この血も本物ではなく、よくできた魔力の塊だった。

「……いやはや見事だね。割り込む余地すら無かったよ」

その後ろで戦鬪を傍観していたステイルが称賛しながら拍手を送る。偽物だと分かった瞬間の切り替えの早さ、偽物とはいえ人の形をしたモノを殺めることへの抵抗の無さ……どれもが未恐ろしかった。

これに霊夢は顔をしかめ、半目で睨んだ。

「あんたは気付いてたの? これが偽物つて」

「まあね。基礎物質にケルト十字を用いた天使テレズマの力の塊だよ、あれは。恐らく本物のアウレオルスが防衛の為に作った意志を持つ魔術人形だろう」

「ふうん……悪趣味な奴みたいね」

差し詰めアウレオルスⅡダミーと言ったところか。自らが偽物だと知り、絶望する前に一瞬にして葬られたのは彼にとっては幸運なことであろう。

となると、本物は未だに陣地の奥に引き籠っているのだろうか。

「は、博麗……？」

そう思案している時だった。

「——あん？」

目を見開く。後ろを振り向くと、この場に居ないはずの人物が立っていた。

「な、に……やっつてんだ……？」

上条当麻が、茫然とした様子でこちらを見ていた。

「アハハが三沢塾……か」

霊夢達がアウレオルスⅡダミーと対峙する少し前。上条当麻は書類に示された通りの住所へと向かい、三沢塾へと辿り着いていた。

禁書目録は適当な理由を付けて自宅に留守番させている。今頃あの三毛猫、スフィンクスと戯れていることだろう。

「しかし、どうやって侵入したのか」

書類曰く、ここはもはや単なる進学塾ではなく行き過ぎた科学宗教。そして、今は魔術師に乗っ取られて要塞と化している。

魔術師の目的は吸血殺しデーブブラッド。それは吸血鬼を誘き寄せる効果を持ち、よく分からないが、魔術師は吸血鬼の不死身の力を利用して何かを企んでいる……とのことだ。

その吸血殺しが姫神秋沙……あのファストフード店で出会った巫女装束の少女だという。となるとあの黒服の男達は魔術師の手先と化した三沢塾の人間か。拉致されているような雰囲気ではなかったが、もしかすると魔術師の手により洗脳されているのかもしれない。

或いは、逃がっている最中だったのか。

（あいつはあと100円さえあれば『三沢塾』から逃げ切ることができた。その100円を貸さなかった馬鹿はどこのだいづでもねえ、俺自身だ）

無意識に拳を握り締める。上条は先程彼女のことを見逃した自分に怒りを覚えていた。

「裏口も意味無いだろうし、正面突破……しかねえな」

幻想殺しイマジンプレイカー。ありとあらゆる異能を打ち消す右手。上条の武器はそれしかなく、不安ではないと言えば嘘だった。

所詮は右手だけ。それ以外は生身で殺傷力のある攻撃を受ければたちまち死んでしまうだろう。そもそも記憶を失ってから荒事に巻き込まれることはなかったため能力自体が本当なのか、自分がどの程度の腕っ節なのかさえも分からなかった。

しかし、だからと言って、見て見ぬフリをする理由にはならず、ここで引き返す理由にもならない。

「……行くか」

故に、上条は錬金術師の巢へと足を踏み入れた。出迎えたのはやたらと豪華な玄関。これは恐らくこの塾へ入ろうと思っている者に良い印象を抱かせる為だろう。

しかし、すぐに受付か関係者が来ると思っていたが、誰も来ず、警戒しながらも恐る先へ進めば多数の生徒がエントランスを往來していた。

(……………? 何だ、意外と普通じゃねえか)

まさか騙されたのか? そんなことを思いながらもとりあえず話を聞いてみようとして上条は近くに來た生徒の一人へと声をかける。

「なあ、あんた……」

「……………」

「あ、ちよつと、おい……………」

しかし、生徒はこちらを視界にすら入れず、そのまま通り過ぎていく。その後も何人

かの生徒に話し掛けたが、その全員に無視された。

(おいおい……まさか、俺が見えてないのか……?)

前言撤回。明らかな異常である。

恐らく上条……つまり許可無く足を踏み入れた侵入者を認識させないようにしているのだろう。科学ならともかく魔術ならば、その可能性は大いにあった。

(それに今気付いたが、妙に足が重い。まともじゃねえな、ここ……)

少なくとも何かある。生徒に触れてみようかとも思ったが、不用意なことをして余計なことが起きるのは避けたいため、行き交う生徒達にぶつからないように慎重になりながら先へと進む。

(にしても……科学宗教って言うからどんなもんかと思ってたが、全然普通だな。てつきり教祖様の顔写真でも貼られているのかと思ってたんだが……)

とりあえず危険性は無さそうだと判断しつつ、丁度食堂らしき部屋へ通り掛かったその時。

生徒達が一齐に上条へと視線を向ける。

「へっ?」

上条は困惑する。今までこちらを認識していなかったはずの生徒達は確かにこちらを見ており、その目は先程まで日常を送っていたものとは違い、酷く無機質で虚ろだつ

た。

「熾天の翼は輝く光」

一人の生徒が呟いた。

「輝く光は罪を暴く純白」

それに続くように生徒達が次々と言葉を繋いでいく。

「純白は浄化の証」

「証は行動の結果」

「え？　ちよ、何だ何だ？」

まるで呪文。否、本当に呪文なのだろう。何やらまずそうな雰囲気を感じた上条は思わず後退りする。

そうこうしている内に、彼らはどんどん言葉を詠唱していた。

「結果は未来」

「未来は時間」

「時間は一律」

「一律は全て」

「全てを創るのは過去」

「過去は原因」

「原因は一つ」

すると彼らの額辺りが青白く発光し、輝く球体のようなものが浮かび上がる。

「やべっ——!?!」

同時に、上条は駆け出す。本能的に右手を使うべきではないと判断した。

「一つは罪」

「罪は人」

「人は罰を恐れ」

「恐れるは罪悪」

「罪悪とは己の中に」

「己の中に忌み嫌うべきものがあるならば」

「熾天の翼により己の罪を暴き内から弾け飛ばすべし——」

そして、光る球体が一齐に放たれ、逃げる上条の背を追尾するように追いかける。

(ふざけんなよ! あいつらは能力開発を受けてるから魔術は使えねえはずだろ!)

能力者は魔術を使えない。少なくとも禁書目録はそう言っていた。過去に自分が同じ質問をしていたことも聞いた。しかし、実際に彼らは魔術を使用してみせ、無数の球体が上条を襲っている。

幻想殺しで打ち消そうにも数が多過ぎる。二つや三つならともかくあんな大量の攻

撃は防ぎ切れない。

「くそっ……どこまで追い掛けてくるんだよ……!」

恐らく侵入者を撃滅しない限り永遠に追ってくるだろう。しかし、どうすることも出来ない上条はただ逃げるしかなかった。

そして――。

「なっ!?!」

曲がり角を過ぎた先にあつたのは、壁。行き止まりだった。

後ろを向けば、既に無数の球体が迫っている。

(まづいまづいまづいッ!? どうすりゃ――)

何か対抗策はないかと思考するよりも早く球体が襲い来る。悪足掻きとばかりに上条は右手を前へと突き出し、咄嗟に目を閉じた。

「……あれ?」

しかし、一向に痛みも、幻想殺しで打ち消した感覚も来ない。疑問に思い、恐る恐る目を開けてみると……。

「ふう……危ないところだったわね」

先程まで無数にあつた光る球体はどこにも存在せず、代わりに一人の少女が立っていた。

「ふっふっふっふっ！　こんなところで会うとは奇遇ですねトウマっちー！」

「と、トウマっちー？」

その少女は掛けている眼鏡をクイツと指で動かして、上条のことを妙な渾名で呼ぶ。やけにテンションが高いが、どうやら彼女と自分は顔見知りらしい。

「相も変わらず不幸に見舞われているようですが、この私が駆け付けたからにはもう安心っ！　何せ今日の星座占いは二位だったのだからっ！」

そこは一位じゃないのか……と思いつつも上条はキリッと決め顔をする少女を見る。彼女はそれはもう奇抜な格好をしていた。

リボンの付いたボーラーハットを被り、黒色のマントに白手袋という、マジシャンを思わせる服装。マントの裏地は赤色であり、何やら奇怪な文字が浮かび上がっていて、どういふ原理かは不明だが、常時上方方向に移動している。

マントの下は薄く鮮やかな紫色のチェック柄のベストと、同じくチェック柄の長めのプリーツスカート、インナーには白色のスクールシャツを着ていた。

彼女を表現するならばそう、*“怪人・赤黒マント”*といったところか。

「あの、えつと……」

「……そんな微妙な反応しないでいつものようにキレッキレツツコミお願いしますよ上条さん」

困惑する上条に、反応が薄いと思った少女はどこかしょんぼりとした様子で言う。急にテンションが下がったが、恐らくこれが素なのだろう。

因みに上条さん呼びになっているが、先程のトウマっち呼びは完全にノリだったりする。

「というか最近全然連絡無くて心配していたんですよ？ 会長の連絡にはワンコールで出ること。部員としての自覚をちゃんと持つてください」

「ぶ、部員……？」

「んまつ!? ま、まさか無かったことにしようかと？ それは許さないわよっあなたは我が秘封倶楽部の部員No. 2なんですから！」

覚えがなくなったただ困惑するしかない上条に対してまたもや勘違いしてプンスカと怒る少女。彼女の言い分が真実だとすると学校の部活動のことだろうか。

しかし、ヒフウクラブとは一体……？

「……あの、本当に覚えてませんか？ 結構親しい仲間なー、って思ってたんですけど」

あまりにも無反応なその様子に本気で心配し、オロオロとする少女。

「！、いや！ 覚えてる覚えてる！ えっと、ほら！ ついこの前まで俺病院で寝込んでたからさ！ ちょっとまだ混乱してるんだ！」

慌てて誤魔化す上条。その顔を見て彼女もまた自身が記憶喪失だと知れば大きなショックを受けると思ったからだ。

「な、なんだー！ そうだったんですね！ ま、まあ、この秘封倶楽部会長・宇佐見童子”を忘れるなんてそんなこと有り得ませんよね！」

すると少女は安心した様子でそう言う。幸運にも彼女は自身の名前を口にしてくれた。これでどうか話を合わせることが出来る。

「お、おう！ とところで宇佐見……はこんなところで何をやっているんだ？」

改めて尋ねる。彼女も三沢塾の生徒……なら、こちらを認識していることや先程の生徒のように攻撃して来ない理由が分からない。

ならば自身と同じ侵入者ということになるが、となると魔術師、或いはその関係者なのだろうか。

「ふっふっふっ！ よくぞ訊いてくれました！」

（あ、テンションが戻った）

「上条さんもここに居るということは三沢塾の悪い噂を掴んでいたみたいですね。流石は我が部員といったところですよ」

「あ、ああ……」

悪い噂、というのは科学宗教のことだろう。どうやら魔術師のことは知らないよう

である。

「私としては別に怪しげな新興宗教をぶつ潰す！　なんて宗教の自由を侵害するつもりはありませんでしたけど、学友が巻き込まれているとなれば話は別です」

「学友？」

「はい。姫神秋沙さんって言うんですけど」

「！」

その名前に目を見開く。何と彼女——宇佐見は姫神と同じ学校に通っているらしい。「先日、その姫神さんが怪しい男達に囲まれながらこのビルへ入っていくのを目撃しまして。流石に見て見ぬフリするのもアレなのでこうして調査していたんですよ」

「そう……なのか……」

話から察するに、彼女は魔術師のことを知らない科学側の住人。ここが魔術師の拠点だと知らずにただ学友を助ける為に足を踏み入れたということが分かった。

上条は考える。宇佐見は関係の無い一般人だ。関わらせるべきではないだろう。

しかし、もはやここまで踏み込んでいるのなら今更無事に帰せる保証も無いし、先程生徒達が魔術を詠唱して攻撃してくるところも恐らく目撃している。説明したところではないそうですかと引き下がるとも思えない。

それに、あの無数の光る球体を消し去ったのが彼女ならば能力者であることは間違い

なく、少なくとも最低限の戦闘力はあるはずだ。

「にしても、なかなかヤバイ所ですね、ここ。まさかエントランスのど真ん中に死体が転がってるとは思いませんでしたよ」

「……は？」

思わぬ発言に上条は耳を疑う。

「死体って、何の事だよ？」

「え？ ああ、私が能力で見えなくしていたので上条さんは気付かなかったんですね。実は私がエントランスに来た時にはあつたんですよ。甲冑みたいなのを着込んだ騎士みたいな人の死体が」

「なっ……」

「いやあ、ほんとグロテスクで吐きそうになったわ。何故か周りの人には見えていないみたいだし、そういう能力とか技術なんですかね？ クレアホイアンス 透視能力は使ってなかったんです

けど……あ、見えなくしていたのは私自身が見るのが嫌だったからです」

思い出したくもない、といった様子で嫌悪感たつぷりに顔をしかめる宇佐見。対する上条は改めてこの建物の異常性を理解した。

そして、宇佐見が突然死体を目撃しても冷静でいられるような人物であることも。

「なあ、宇佐見。実はだな——」

少なくともそこまで踏み込んでいる宇佐見をこの建物に潜伏する魔術師は見逃さないだろう。

故に、上条は出来る限り魔術師のことは隠しながら彼が三沢塾へ来た理由を教える。

「な、何ですって!?! 姫神さんは三沢塾に拉致されていてその三沢塾はなんかやべー能力者に占拠されている!?! そんなもってその能力者は姫神さんの能力で吸血鬼を呼び寄せて怪しげな儀式を行おうとしている!?!」

「そ、そうなんだ。だから——」

「な〜くる。まさかオカルト絡みの案件だったとは。確かに以前から吸血殺して何ぞやって思ってたけどそういう能力があるのなら吸血鬼も実在するってことなのねっ!

いや〜流石は上条さん、秘封倶楽部員としての自覚はちゃんと備わっているみたいで安心安心っ」

「え? お、おう……」

説明を聞くと更にテンションが上がる宇佐見。もしかして秘封倶楽部というのはオカルトサークルか何かだろうか。そんな上条の予想は当たっているのを知るのはまた後の話になる。

「なら、余計に姫神さんを助けないと! ついでにそのやべー能力者ってのも成敗してやるわ!」

「あ、いや宇佐見、ちよ——」

「大丈夫よ上条さん！　この私が居るからには大船に乗ったつもりでいなさい！　という訳でレッツらゴー！」

その自信は一体何処から来るのだろうか。バシバシと上条の肩を叩くと宇佐見はそう言つて先へと向かう。上条も慌ててその後を追った。

こうして、上条は心強い？　仲間を手に入れるのだった。

——広い。

しばらく建物の中を散策して、三沢塾に対して上条が抱いた感想はそれだった。

十字路を中心に建てられた1・2階建てのビル4棟で、各棟は渡り廊下で繋がっている。外から見ても建物を眺めていた時から感じていたことだが、その規模は単なる進学塾の規模を遥かに越えているように思えた。

「ネットで調べたら生徒は二千人くらい居るらしいですよ？ それだけの人数が入るなら妥当な広さ……なのかも」

その疑問に前方を歩く宇佐見が代弁する。二千人という数はもはや学校に等しく、上条は驚くと共に恐れを感じた。

何故ならそれだけの数が魔術師に操られ、敵に回るのかもしれないのだから。想像するだけで身の毛がよだつ。

「ハア……ハア……疲れた……」

しばらくし、上条は額から滲み出る汗を拭い、息を切らしながら足を止めた。こちら

を見つげ次第、あの魔術で攻撃を行ってくる生徒達から隠れながら上へ上へと進んでいたが、歩いた際の衝撃がそのまま返ってくるこの空間では実質二倍以上の距離を歩いており、その分の疲労も凄まじかった。

「おやおや。だらしないですねえ、上条さんったら」

一方で宇佐見は全く疲れた様子も無く、余裕綽々といった様子でそう言う。

「……何でそんな平気そうなんだよ」

これに上条は驚く。自分よりもか細く、華奢な身体のどこにそのような体力があるのだろうか。

「そりゃ浮いてますし」

「え?」

「だから浮いてるんですって、ほら」

宇佐見が自らの足元を指差す。それに従って視線を向けると、彼女は確かに床から数cmほど離れて宙に浮いていた。

「うおっ!?!」

「……何驚いてるんです? この私が空も飛べないなんてことがある訳ないじゃないですか」

「え、あつ、そ、そうだな!」

「?」

思わず驚きの声をあげると訝しまれ、上条は慌てて誤魔化す。どうやら宇佐見が空中浮遊できることは前の上条当麻にとつては別に不思議でもなんでもないことだったらしい。

テレキネシス

念動力だろうか。科学宗教の本拠地に侵入して怖じ気づく素振りを見せず、こうも堂々としていられる時点で、彼女が何らかの能力者であることは予想出来た話であるが、記憶喪失である上条からしてみれば超能力という科学によって生み出された異能すらもいまいち現実味が無かった。

(あつぶねえ……気を付けねえとな)

今のような会話の齟齬がいちいち発生してはいずれ記憶喪失がバレてしまうと上条は今一度話す内容に気を配ろうと細心の注意を払う。

「ところで……どこへ向かってるんだ? 闇雲に歩いてるって訳じゃないんだろ?」

「そりや勿論。とりあえず辺りを散策しつつ最上階を目指しています。大抵悪の親玉とか黒幕つてのはそこに陣取ってますからね」

「ゲームかよ」

思っていたよりも根拠が無かった。自信満々にそう言つてのける宇佐見に上条は呆れてしまう。

このまま建物の中を延々と彷徨っただけだ。余計な消耗をするだけだった。

「ま、さつきから透視して確認していますけどそれらしき人物は見つからないんですよ」
「え？」

「それに、あちこちに扉と繋がってない謎の空間があります。隠し部屋……でしょうか？　まるで秘密基地ですね」

どういいう用途があるのだろうかと宇佐見は首を傾げる。彼女は知らないが、三沢塾は学園都市特有の学習方法を盗んでくるための巨大な企業スパイの色が強く、建設時の見取り図には記載されていない隠し部屋が多数存在していた。

「透視……？」

対する上条はそれよりも前に彼女が何となしに発言した単語に引っかけかりを覚える。

「はい。得意ではないんですけどね。クレアポイアンス透視能力とかテレパス精神感応とかはこの街に来てから体得したんで……」

「……は？」

聞き間違いだろうか。記憶喪失ながらも上条がどうにか培ってきたこの学園都市の常識を覆すような爆弾発言だったような気がしたが……。

「しっかし、こつとも何も無いと退屈ですね。これだけ派手に動き回ってるんですから刺客が送り込まれてもおかしくないのに……」

宇佐見は特に気にした様子も無く、話題を変えてそうぼやく。

(ツ……まるで遊び気分だな)

好奇心の方が勝っている、とその発言について上条は思った。魔術師の存在をぼかしながら現状を説明した時もそうだ。吸血鬼という所謂オカルトの存在の関連性を知った彼女は目を輝かせ、歓喜した。彼女と自分は姫神秋沙の救出という共通の目的を持っているが、それに対する心持ちは大きく違うようである。

彼女は人の死体を見たと言った。にも拘わらず、この異様な建物内を歩くその姿はまるで学校探索のように楽しんでいるように見える。

上条当麻の倫理観はそれを許せない。それが記憶を失う前からあったのかそうでないかはともかく、少なくとも彼にとって今の宇佐見の立ち振舞いは酷く受け入れ難かった。

「なあ、宇佐見……その……」

「——おや？」

だからこそ、一旦迷いながらもその言動を疎めようとした上条だったが、宇佐見は何かに気付いたのか足を止める。

「人の動きが急に激しくなった……？ 下の階で何かあったのかしら……？」

「え？」

「ふふつ、よく分かんないけどやつと埒が明きそうで——」

どうやって分かったのか。下の階の人の流れを感じ取った宇佐見は漸く面白くなつたとばかりに笑みを浮かべる。

が、その次の瞬間だった。がしやん！ と天井から大きな音と共に何か勢いよく落下する。

「ツ!?!」

咄嗟に後退する上条。しかし、目の前に宇佐見の姿はなく、代わりに鋼鉄製のシャッターがあつた。

「ツ、宇佐見……ツ!!」

防火シャッター。本来であれば付近の火災を感知して作動するそれはまるでタイミングを見計らつたように宇佐見が通り過ぎた直後に降り、廊下を遮断した。

「マジ……かよ……」

分断された、そう理解した瞬間に上条は唾然とするしかなかった。

ただでさえ学園都市製で頑丈に作られた防火シャッターはこの結界の内においてはより堅牢なものとなり、コインの裏側に居る上条や宇佐見に破壊する手段は無い。

単なる動作不良、なんてことはないだろう。恐らくは敵の魔術師の策略。互いに孤立するという最悪な事態に陥ってしまった。

「——何してるの?」

その時である。不意に声をかけられた。

まさか生徒の一人に見つかってしまったのかと上条は慌てて右手を構えながら振り返り——。

「なっ……」

目を見開く。そこには件の巫女、姫神秋沙が無表情で立っていた。

「おーい、上条さんー？ 大丈夫ですかー？」

突然降りた防火シャッターにひやりとしつつ、宇佐見は大きめの声で呼び掛ける。

しかし、返事は一向にない。

「聴こえますかー？ 今から空間移動テレポルトでそっちに向かいますからねー」

宇佐見は落ち着いていた。彼女にとつて防火シャッターは勿論のこと如何に分厚い壁であろうと、何の障害にもならないのだから。

「厳然。これ以上、好き勝手動かれては困る」

「——うん？」

背後から呼び止められる。振り返れば、そこには一人の青年が立っていた。

緑色に染めたオールバック。純白のスーツ。そして外国人。明らかに堅気の人間には見えない、ある意味では分かりやすいその風貌に宇佐見は目を細める。

「ふん、やつぱり。そろそろ出てくる頃合いだと思つてたわ」

科学宗教の教祖、にしては若い。ならば上条の言っていた三沢塾を乗っ取つたという能力者だろうか。

何者であれ、他の生徒達と違つてこちらをはつきりと認識し、話し掛けてくる時点で関係者であることは間違いない。

「一応尋ねるけどおたくが黒幕つて認識でオーケー？」

「このビルの主、という意味ならばその通りだ。侵入者よ」

もしかすると早合点かもしれないと確認する宇佐見に、淡々とそう答え、青年はスポーツのポケットに手をつ込み、悠然と彼女を見据える。

見たところ武器らしきものは所持していない。拳銃くらいは懐中に仕込んでいそうだが、能力者を前にこうも余裕であることから察するに、彼も能力者、或いは充分な対抗手段を有しているのだろう。

対して宇佐見も動じない。己が力に、絶対的な自信があるが故に。

「間然。こちらに争う意志は無い。大人しく退散してくれると助かるのだが」

「はっ、冗談！ この期に及んでそんなこと無理に決まってるでしょう。こちとらご学友が巻き込まれてるってのを知りながら見て見ぬフリするほど冷たい人間じゃないのよ。それに」

見逃してやると提案する青年の言葉を笑い飛ばす。それではいそうですかと引き下がるのであれば、そもそもこんな場所にまで来ていない。

何よりも――。

「こんな面白いイベント事、見逃す手は無いでしょ」

それこそが原動力。先程の上条の推測は的中していた。彼女にとって姫神秋沙の救出というのは本心であるものの建前でもあり、動く切っ掛けとなったのは、より純粋な

好奇心だった。

加えて、それが吸血鬼が関連したオカルト絡みの案件だと知ってしまったえば、初代秘封倶楽部会長としては如何なる手段を用いても干渉したいものである。

「……そうか。ならば仕方あるまい。元より貴様は、踏み込んでならぬ域まで踏み込んでいる。消えてもらわなければな」

そんな態度にも青年は表情を変えず、淡々と伸べる。脅迫でも警告でもなく、ただ作業のように目の前の少女を排除するつもりであった。

「へえ？　じゃあ、どうするのかしら？」

しかし、次の瞬間。突然身体が重くなった。

「!!」

全身の関節一つ一つをまるで縛り付けられたかのようにピクリとも動かない。膝を突き、僅かに瞠目する青年。何らかの魔術かと思つたが、張り巡らせた結界は魔力を感じておらず、困惑するもすぐにある結論へと行き着く。

「瞭然。能力者か、娘よ」

「ええ。念動使サイコキネシストい……別に何の変哲もないありふれた能力でしょう？　尤も、枕詞に

最高峰” ってのが付くけどね」

スツと宇佐見は何を取り出す。能力が通用したとしても相手がどんな手札を持つて

いるか分からぬ以上、決して油断はしない。
「少しでも動いたら、頭を吹っ飛ばすわよ」

——それは大口径の拳銃だった。

3Dプリンターで製作された、樹脂を材料とした薄い水色のそれは一見すると子供向けの玩具か模造品のようにも見えるもののまごうことなき殺傷性を秘めた本物であり、とてもではないが、一介の女子高生が持つものとしては相応しくなかった。

「……………」

完全に命を握られた状況。しかし、青年に動揺した素振りはなく、少し驚いただけだった。

当然だ。ここから巻き返す手段など、いくらでも持ち合わせている。この驚きも、ただ一般人だと認識していた存在が想定外の力を有していたからに過ぎない。

「フツ……」

「?」言っておくけど、本当に抵抗しない方が良いわよ。その気になればこのまま押し潰してミンチにすることだって出来るんだから」

脅し文句。それは紛れも無い事実であり、然れど本当に実行するつもりはなかった。やるにしても精々手足を撃ち抜くなり軽傷を負わせるなりと少し痛め付ける程度のもりであった。

慈悲でも躊躇でもなく、単純にメリットが無い。少なくとも現段階では宇佐見はそう判断する。

（——甘いな）

拳銃を用いているのは分かりやすい殺傷武器で相手へ恐怖心を植え付けることが容易であることもあるが、AIMジャマー等で能力の使用を妨害された時のことを考えるのこと。

そこに一片の油断も無く、ただ、殺意だけが存在しなかった。

だが、青年——錬金術師、アウレオルス・レイザードは内心ほくそ笑む。大方自分を尋問して何かしらの情報を聞き出すつもりなのだろうが、それこそが致命的な失態だった。

言の葉を発する「口」こそが、彼の最大の武器である。

（依然。針を用いずとも発動は可能。しかし、咄嗟に反撃されてしまえば、流石に無傷とは行かぬな……）

拳銃を無力化すれば能力で、能力を無力化すれば銃で。加えて、目の前の少女の力は未知数。今この瞬間から殺す手段は両手では数えられぬ程に思い浮かんでいたが、無傷で封殺出来る可能性は低く、リスクは大きい。

故に、アウレオルスは様子を伺う。決定的な隙を見出す為に。

「このままゴゴボコにして警備員アンチスキルに突き出しても良いんだけど……幾つか質問に答えてくれたら、見逃してあげてもいいわよ？」

命を握っているつもりで、逆に握られている状況に気付かない宇佐見はアウレオルスに問う。

「……ふむ」

チャンスは、今しかない。

一考する素振りを見せつつも、アウレオルスの返答は決まっている。今は一刻を争う事態なのだ。何も知らぬ科学の住人に構ってやれるほどの余裕は存在しなかった。

「良いだろう」

お、と宇佐見は言葉の続きを促す。対してアウレオルスは笑みを浮かべ――。

「――能力を解け――」

口を開き、命じる。それは宇佐見ではなく、この世界そのものに対して。

そうして現実歪められ、彼を縛っていた不可視の力場は消失した。

「――はあッ!?!」

アウレオルスの肩が僅かに震える。それを見て聡明な宇佐見は驚愕しながらも彼の言葉通りに念力が解除された、否、自らが無意識に解除してしまったのだと理解した瞬間には指を掛けていた引き金を引く。

「ぐうつ……」

乾いた音が響いた。銃口から射出された弾丸はアウレオルスがギリギリで身体を横に反らしたことで初めに狙っていた頭部ではなく、肩口に命中する。

（嘘でしょっ!?! 発声を介する能力か何かっ!?! よく分かんないけどこのままじゃまずいっ——!）

舌打ちし、今度は喋らせないように口も含めて縛り上げようと宇佐見は念動能力を発動させ——。

「ツ——眠、れっ」

が、それよりも早くアウレオルスは苦痛に顔を歪めながら言葉を紡ぐ。

（なっ、やば……いい、意識、が——）

ばたりと、宇佐見は力無く倒れる。

「ぐ……悄然。恐るべき判断力だった」

呻き声を堪え、呟いた。銃撃を避けられたのは運が良かったからに過ぎない。一步間違えれば己は頭か胸を撃ち抜かれて生死の淵を彷徨っていたことだろう。

そもそも今現在もすぐに手当てを行わないと出血多量で死に至るであろう重傷だった。

「——治れ」

しかし、ただそう発するだけで、ごっそりと抉り取られていた肩の皮膚は、まるで時間が巻き戻されるかのように元通りになり、破けた服も修復される。

完全に無傷の状態へと戻ったアウレオルスは貧血で額に手をやりながら立ち上がり、すやすやと眠りにつく宇佐見を見下ろす。

「――目覚めよ」

そして、裾の内から取り出した細かい針を首へと突き刺してそう囁く。

「んあ……？」

「今日の記憶を全て忘れ、この場から去れ」

「――」

すると宇佐見は即座に目を覚まして起き上がったかと思えば、ロボットのような無表情でスタスタと廊下を歩いていく。

向かう先は出口。そこに辿り着いた後、彼女は覚えのない景色に困惑し、不思議に思いながら帰宅することだろう。

「間然。侵入者はまだ残っている。誰にも我が計画の邪魔はさせん……魔術師にも能力者にも、たとえ禁書目録の救い手であったとしても、だ」

立ち去る宇佐見の背中を見送り、アウレオルスは上を向く。その瞳は、決意と覚悟に満ちており、同時に狂気にも似た妄執に取り憑かれている。

救おうとしていた者は、既に救われていた。ただ一人を救う為にありとあらゆるものを犠牲にしてきた彼はそれを知った瞬間から、真の意味で何もかもを失い、絶望に沈んだ。

「我が名譽は世界のために
Honors 628」

残ったのは、その使命のみだ。

一方その頃。上条は困惑していた。

「私は自分の意思でこの場所に居る」

囚われのお姫様であるはずの姫神秋沙ははつきりとそう言い放った。拉致されてい
るのではなく、自ら進んでこの三沢塾に身を置いているのだから助けられる謂れは無い
のだと。

どういふことなのかと問えば、当初こそ三沢塾により監禁されていたが、乗っ取った
魔術師とは協力関係を結んでおり、自身の能力である吸血殺しデーブブラッドを消し去ることを条件に
協力しているのだという。

（おいおい、どうなってやがる？ 魔術師の野郎に騙されているのか？ いや、それとも
あの女の情報が嘘つばちだったのか……？）

後者の可能性も充分にある。あのファストフード店で出会った得体の知れぬ魔女っ
娘に信用出来る要素などどこにも無いのだから。

「とにかく早く帰った方がいい。ここへ来るまでに死体を見たでしょう？ 私の協力者。アウレオルスライザーは善いことをしようとしているけど敵には容赦しない。彼が警備させている『ダミー』の方は特に……」

「あ、ああ……」

道中の死体は宇佐見が何らかの方法で隠蔽していたので見てないが、頷いておく。

「じゃあ出口まで案内するからついて来て」

「え？ いやその、まだ知り合いが残ってるんだ。宇佐見董子って奴であんと同じ高校って言ってたけど……」

「……宇佐見董子？ あなの？」

「ああ、多分その宇佐見で合ってる」

「あの人……？」

宇佐見の名を口にすれば、姫神はその無表情を僅かに崩し、意外そうな反応をする。あまり親しい関係ではないのだろうか。

「……そう。なら。彼女にも見つけたら伝えておく。だから来て」

そう言い、姫神は歩き出す。上条は釈然としないまま一先ずその後ろ姿を追う。

(本当に良いのか？ これで……)

上条は頭を悩ませる。助けようとしていた人物が実は自分の意思で協力していた。

彼の行動は全くの無駄骨と言えよう。

けれども、少なくとも死人が出ているのは間違いない、見過ごして良いものかと問われれば否だ。

「なあ……そのアウレオルスつて奴はあんたと協力して一体何をしようとしているんだ？」

故に、問う。姫神曰く善いことをしようとしているのだというアウレオルスⅡイザードとやらが、人の命を奪ってまで何を成そうとしているのか。

「……………」
「頼む。教えてくれ」

その内容が果たして納得出来るものなのか。上条は見定めようと、姫神の返答を待つ。

「…………それは——」

しばらく考え、姫神が口を開いた次の瞬間。パリイン！ と硝子か何かが砕けるような音が辺り一帯に響き渡る。

「……………」

「ん…………？ な、何だ…………？」

同時に、先程までこちらを認識せず、日常を送っていた生徒たちが一斉に視線を向け

てざわつき始める。

また攻撃されるのかと上条は一瞬身構えるもすぐに様子がおかしいことに気付く。生徒たちの会話から突然現れた自分や巫女装束の姫神に普通に戸惑っているようであり、また奥の方では何やら騒然としていた。

「こりや一体……？」

「……………」

「あつ、おい……………」

この空間を支配していた魔術が解除されたのは一目瞭然だった。

何が起こったのかと上条が首を傾げていると、姫神が目を見開いて生徒たちの間と掻き分けて走り出す。慌てて上条もその後を追う。

「待てよ姫神っ！ 一体どうし……………たんだ、よ……………」

絶句する。意外と足の早い彼女を追い掛けて曲がり角を過ぎ、視界にまず飛び込んできたのは、目が痛くなる程の赤。

それが飛び散った血液だと理解した時には、臓物が飛び散り、血の海を作っていた。

「はっ！」

——男が、死んでいた。胴体を頭から縦に真っ二つに切り裂かれて。

「!!」

強烈な吐き気。胃から喉奥へ伝わる酸味に思わず口を押さえる。

初めて見た死体。しかも、人体が真つ二つにされているというあまりにもグロテスクな光景は一介の学生に過ぎない彼にはあまりにもショッキングなものであった。

「……………」

その隣で姫神も言葉を失っていた。目の前で息絶えるのは自身の協力者と瓜二つなのだから。

「嘘……………」

上条は茫然と立ち尽くす。人が死ぬという強烈な光景もそうだが、何よりも信じられなかったのは男を殺したと思われる人物である。

それは、知っている顔だった。

「は、博麗……………」

「——あん？」

病室や常盤台で見た時と同じ。姫神のものとはやはり違う、腋部分が露出した奇抜なコスプレのような巫女装束を纏った彼女はこちらに気付くと気だるげに振り返り、僅かに瞳目する。

博麗霊夢。自分が記憶喪失だと知っている数少ない人物——。

「な、に……………やってんだ……………」

「……当麻？ 何でここに居んのよ」

「あ、いやそれは……」

「ごくり、と息を呑んで問えば、逆に問われる。互いに互いがこの場に居るはずのない人物という認識だった。

先程まで死体を冷たく見下ろしていた瞳で見据えられ、上条は思わず身震いする。

「こんな、こんな人間だったのか。足元に転がる死体をまるでそれが最初から存在しないかのように、或いはそこらのゴミのように気に留めずに平然としていられるその姿が、酷く恐ろしかった。

「……ねえ、こいつが来てるなんて聞いてないんだけど？」

「いや、僕は関知していない。想定外の事態だよ」

「そんな上条の心情など知る由も無く、霊夢は隣の赤髪で神父服の少年と会話している。如何にもな風貌だが、彼も魔術師だろうか。

「……したのか」

「あん？」

「そいつを、殺したのか？」

「意を決して尋ねる。もしかすると勘違いかもしれないという、一縷の望みに賭けて。

「——ええ。そうよ」

しかし、期待していた否定の言葉ではなく、霊夢はあっさり肯定してみせた。

「ツ……………」

頭の中が、真っ白になる。

「まあ、殺したっていうのは意味合いが違うかもしれないわね。何故ならそれは人間じゃ——」

「何で！ ……何で殺したツ?!」

「……………あー、そう」

何かを察したのか、霊夢は面倒臭そうにポリポリと後頭部を掻く。

「一から説明するべきなんでしょうけど、生憎とそんな暇も無いから要約すると、それは人間ではないし、敵でこつちを殺そうとしてきたから返り討ちにした、とりあえずはそれで納得してちょうだい」

「ツ……………何だよそれ……………」

つらつらと、捲し立てるような説明。これに上条は納得出来るはずもなく、顔をしかめる。

対する霊夢もこの反応は分かりきっていた様子で、しかしだからどうしたとばかりに淡々と言葉を並べていく。

「こつちにも色々事情があんのよ。ここは危険だから早く帰りなさい……………って、そう

言ってはいそうですかと引き下がるあんたでは無いわね。しょうがない、とりあえずついで来て——」

「おい。博麗霊夢」

すると赤髪の少年が呼び掛ける。

「ああ？ 何よ？」

「そのの女」

「あー？」

指差された先へ視線を送り、霊夢はここで初めて姫神の存在に気付いた。

「あら、同業者？」

「そういうばまだ顔写真を見せていなかったね。そいつが “吸血殺し” …… 姫神秋沙だ」

赤髪の少年が告げれば、目の色を変える。

「……………こいつが？」

怪訝そうな視線。じろりと見据えられ、姫神は思わず後退りしてしまう。

「……………ねえ、あなたが吸血鬼をぶっ殺せる力を持つてるのは本当なの？」

何の力も感じない、どう見ても普通の人間であるが故に、霊夢は半信半疑といった様子で尋ねる。

「…………ええ」

姫神は、こくりと頷いた。

「——そう」

本人がそう言うのなら、そうなのだろう。霊夢は一先ず納得し、彼女へと近付く。

「！…………あなた達は。何者？」

「私は博麗霊夢。一応イギリス清教に所属している人間よ。端的に言うくと、あなたを保護しに来たわ」

躊躇無く霊夢は自らの素性と目的を明かす。

「保護？」

「そ。学園都市のトップに言われてね。アウレなんとかって奴に監禁されてるんでしよう？ 悪いようにはしないから安心しなさい」

霊夢の説明に傍らで聞いていた上条は内心驚く。彼女がイギリス清教に所属しているのもそうだが、姫神の救出が学園都市のトップが動く程の大事になっているとは思っていなかった。

「……………必要無い」

「……………何ですって？」

発せられた拒絶の言葉。予想してなかった返答に思わず霊夢は眉をひそめる。

「私は監禁されてなんていない。むしろ逆。私は自分の意志でアウレオルスに協力して
る」

「はあ……?」

「私は自分の意志でここに居る。私がここに居るのは、この忌々しい“吸血殺し”を抑
え、消し去るため。そして、アウレオルスを助けるため。彼は言った。多くの人を助け
る為に、世界をより善くする為に、私の力が必要だって」

姫神の声に、力がこもる。

「——そう。私は生まれて初めて。殺す為ではなく助ける為にこの力を使う事が出来
る」

だから保護は必要無いと、先程上条にしたように姫神は毅然とした態度で告げる。ア
ウレオルス＝イザードに協力すると決めた以上、彼女はこの場から離れるつもりなど微
塵も無かった。

「……あ、そう」

ちらりと、霊夢は赤髪の少年を一瞥すれば、彼は肩を竦めながら首を横に振った。

「生憎とこつちも仕事なんでね。君の意志は関係ないんだ」

その言葉に、姫神と上条は固まる。

「……らしいわ。悪いけどあなたに如何なる事情があらうと、無理矢理にでも一緒に来

てもらおうわよ」

「!!」

淡々とそう言い捨て、霊夢は姫神へ手を伸ばし――。

「お、おい！ 待てよっ博麗っ！」

しかし、それよりも早く上条が慌てて二人の間に割り込んだ。

「ああん？ 何よ？」

「さっきの話聞いてなかったのかよ！ こいつにも事情があるみたいなんだ！ だから、無理矢理連れて行くなんて……」

「……で？」

「は？」

「私の目的は、そいつの保護と、元凶の魔術師をぶっ飛ばすことよ。そいつが自分の能力を無くしたとかそういうのは知ったことじゃないわ」

冷淡にそう言い返され、上条は言葉を失う。霊夢からすれば姫神の言い分などあまりにもどうでもいい事象だった。

「ツ……！ ふざけんなよっ！ そんなの保護じゃなくて誘拐じゃねえか！」

「あー、そう言われたらそうだけど……こつちも仕事なのよ。雇われた以上は最低限の働きはしないとイケないし、魔術師が蔓延ってる中でそいつを野放ししておくのは個

人的にも危険だと思うの」

困ったように、霊夢は言う。ここに来て彼女は上条が記憶喪失であり、自分との面識は病室と常盤台くらいでほぼ初対面であることを考慮していないことに気付いた。失念していた。説明不足なのもあるが、過去の信頼関係が成り立っていればこうも話が拗れることは無かっただろう。

「とにかく退きなさい。どこまで事情を知ってるか知らないけど、少なくともそいつが手を組んでるっていう魔術師はろくでもない奴よ」

「ッ、そうかもしれないねえが……今さつき人を殺してた奴の言う事なんか信用出来るかよ……!」

そして、誤解を解くには、もはや遅過ぎる。上条は完全に霊夢を不審に思っており、敵対的な態度を取っていた。

如何に相手が敵であろうと、容易く人の命を奪って全く意に介していないような人間に姫神を預けるというのは無理な話である。

それだけ上条の目線から見た今の霊夢は得体が知れず、恐ろしく、無慈悲に見えた。

(あー、少しやらかしたかも)

こうなると上条は頑固なのを知っていた霊夢は、どうしたものかと頭を悩ませる。

「何だい……仲間割れかい?」

上条が記憶喪失など露程も知らない赤髪の少年——ステイル・マグヌスは、この現状に軽く舌打ちし、呆れる。

博麗霊夢も上条当麻も、己が真つ向から戦い、敗北を喫した相手であり、最大の脅威であると彼は認識していた。

故にこそ、そんな二人がこうもくだらなく醜い口論をしているのが、無性に腹立たしかった。

「上条当麻。事態は一刻を争うんだ。まだアウレオルス・イザードの奴が野放しになっている以上、君に構っていられるほど僕達は暇じゃない」

若干の苛立ちが混じった言動。この少年とも自分は知り合いだったのだろうか。上条がそう思っていると、彼は懐中から一枚のカードを取り出し——。

「! 馬鹿。待ちなさい——」

次の瞬間。炎が吹き荒れる。

「ッ!?!」

上条は驚愕し、しかし反射的に右手を突き出してその炎を消し去る。その行動を予め読んでいたステイルは隙を突くように燃え盛るバーナーのような炎の剣を作り出して振り翳す。

「なっ、しまっ——」

不意を突かれた一撃。だが、迫り来る摂氏4000℃を超える炎剣は突如として風に煽られた蠟燭の灯のように消失する。

「……………へ？」

幻想殺しによる無効化ではない。自身が触れるよりも炎が先に消失したことに上条は困惑の色を隠せない。

「——どういいうつもりよ」

そして、いつの間にかスタイルとの間に立っていた霊夢に気付き、彼女がやったことなのだと理解するが……。

自分を、助けた。つまりそういうことになり、上条は余計に困惑してしまう。

「この方が手っ取り早いだろう」

「あ？ ふざけんじやないわよ。ぶっ殺されたいの？」

先程人体を切断した恐るべき大幣を肩に担ぎ、ぎろりと霊夢は睨む。

その鋭い眼光に気圧されながらも表向きは平静を装い、スタイルは煙草をふかす。

「……………ふん、身内には随分と甘いようだね」

「ええ。だから、次から手を出さないことね。今すぐ魔術師を引退したいってんなら、話は別だけど」

二人の物騒なやり取りを他所に、上条はどういうことなのかと困惑が勝って逆に落ち

着いた脳で思考する。

(何なんだよ一体……あの赤髪の野郎は明らかに敵対的だが、博麗は違う……少なくとも最初から敵意なんて存在しなかった……糞が。さっきの光景が嘘であってほしいぜ) 確かに恐ろしかった。しかし、禁書目録とも仲が良いらしい彼女のことを、記憶喪失でありながら己が悲しんでほしくないと望んだ少女が、敵だとは思いたくなかった。

加えて、未だに自分に敵意を見せない霊夢。何か思い違いをしてしまっているのではと疑念を抱くのは当然の帰結だったものの、先程の男を真つ二つに切り裂いた光景が脳裏にちらついて離れず、立ち往生してしまう。

「ツ!!」

するとここで、姫神が突然走り出す。

「あつ! おい姫神ツ!」

「ツ!? まずい、逃げたか……!」

どうやら仲間割れを起こしたのをチャンスと見て逃走を図ったようだ。

「……無駄よ」

しかし、所詮はただの女子高生であり、歩きづらい巫女装束を纏った少女に並々ならぬ身体能力を有する霊夢が追い付くことなど造作もなく、即座に回り込んでみせた。

「……………!」

「悪いけど、大人しくしてもらおうわよ」

驚愕する姫神に、霊夢は手を伸ばし――。

「――動くな――」

次の瞬間。

まるで時が止まったかのように、この場にある全ての物質が、ぴたりと静止した。

黄金鍊成

——その気付きは、ある日突然訪れた。

完全記憶能力による脳の圧迫。あらゆる手段を尽くしても解決する手段を見出だせなかった青年は、不老不死の存在に頼ろうとした。

カインの末裔。不死であるが故に、無限の魔力を有すると云われる深淵の怪物。永遠に生きるかの者たちならば、無限に記憶を保有する手段があるはずだと。

しかし、その前に魔術ではない、科学という畑違いの学問も調べてみよう、至極当然の、しかし魔術師としては余程切羽詰まった発想に至ったのは、彼がたまたま出会った異国の科学者と親交を持ったからだろう。

「……何だと?」

ヨーロッパ南部のとある国の郊外。潜伏先のとある喫茶店の中で、青年は耳を疑う。

「もう一度、言ってくれないか?」

「記憶による脳の圧迫など有り得ない、というのが科学側の見解よ」

正直期待などしていなかった。科学を軽んじる魔術師の悪癖がまだ残っていた。

故に、もたらされた真実に、衝撃を受ける。

「そもそも意味記憶とエピソード記憶は全く種類の違う記憶なのだから、どちらかを消したところで容量が増減するなんてことはあるはずがない。魔道書を記憶する過程にオカルト非科学的な特殊な手段を用いているのなら、話は変わってくるけど……」

「いや……そのようなことはなかった、はずだ。あくまで魔道書を読むのは魔術でも科学でもない当たり前な行動の範疇。宗教防壁で防御したりするかもしれないが、その程度で脳の容量が異常に食い潰される訳では、ない」

そんな馬鹿な、と思いたかった。目の前で紅茶を啜る彼女の弁を否定出来る論理を頭の中で並べ、しかし明確に否定可能な要素は存在せず、逆にそれを裏付けるものは数多にあった。

教会が示した彼女の記憶容量を単純に計算して、六年も生きられないという矛盾に気付いてからは、それが教会が流布したデマであり、己が騙されていたことを悟った。

——何と、滑稽な話であろうか。

「啞然。では、彼女が苦しむのは……」

「何かしらの細工が施されてるのでしょうか。記憶を消し、管理下に置く為に。——酷い話ね、まったく」

カタカタと握るティーカップを粉碎しそうになる。一体どこまで彼女の人生を弄べ

ば気が済むのだ。

沸々と怒りが沸く。彼女にそのような立場を強いた挙げ句、おぞましき首輪を付けた者共に。そんなことにすら気が付かなかった己自身の愚かさに。

「……感謝する。君のお蔭で危うく徒労と愚行を重ねるところだった」

憤慨しながらも、青年は礼を述べる。願わくはこの出会いがもつと早くもたらされていれば……。

彼の絶望は深い。今までの献身も努力も、少なくはない犠牲すらも、何もかもが無駄。水泡となって消えていったということなのだから。

だが、同時に光明が差した。漸く具体的な対策や手段が思い浮かんだ。

「当面の敵は、イギリス清教ということになるか」

否、10万3000冊の魔道図書館を求めぬ魔術師など居ない。ローマもロシアも、全勢力が敵といっても過言ではないだろう。

故に、青年はまず最初に「力」を求めた。如何なる敵に対しても彼女を守り切ることが出来るだけの絶対的な「力」を。

そして、次に望んだのは安息の場所。彼女が普通の少女として、平穏に暮らせる場所は無いかと考え、駄目元で女性に尋ねてみた。

「そう。成程……」

女性はしばらく思考し、そして薄い笑みを浮かべたかと思うと、その名を口にした。「ねえ、あなた……って知ってるかしら？」

ノイズ交じりの、言葉すらかも怪しい音声。けれど、確かに聴き、知ったのだ。

かの地の存在を――。

——何が起きた。

指先一つも動かない、辛うじて呼吸のみが行える状況下で全員がその疑問を抱く。

「……アウレオルス」

この場において唯一、自由に動ける、姫神秋沙を除いて。

「間然。一ヶ所に集まってくれるとは、手間が省ける」

廊下の奥から現れた、一人の青年。何とかその姿を視界に入れた上条は目を見開く。

手には細い針。白いスーツを身に纏い、緑色に染めた頭髪を掻き上げたその容姿は、すぐそこの血の海に沈む死体と瓜二つであつたのだから。

「……………ッ！」

次の瞬間。

ガキーン!! と突如として鈍い音と共に火花が飛び散った。

「!?!」

動いたのは霊夢だった。静止していたはずの彼女は一瞬でアウレオルスへと肉薄し、しかし振り下ろした大幣を空間から湧き出るように出現した黄金の壁によって防がれ

ていた。

「ほう……無理矢理解いた、か。やはり貴様は私の想定を上回る動きを見せてくれるな。

——“幻想を生きる巫女”よ」

「……あん？」

アウレオルスは僅かに瞠目しながらもこうなることも予期していたのか悠然とそう言い放ち、霊夢は眉をひそめる。

「——吹っ飛べ」

「！」

そして、針を自身の首筋に突き刺すと共にそう呟くと同時に凄まじい衝撃が霊夢を襲い、彼女は言葉通りに、勢いよく突き飛ばされた。

「ふむ、効かぬ……という訳ではなさそうだな」

自身の力が確かに機能していることを確認しつつ、アウレオルスは冷静に観察し、分析する。

対する霊夢は壁に叩き付けられるよりも早く空中で受け身を取り、衝撃を殺すことで何とか停止させた。

「チイツ……」

予備動作が一切見えなかった。ただ言葉を発しただけで霊夢は不可視の攻撃を受け、

反応すら出来ずに被弾した。

(言霊の類い？ 厄介な力ね……)

ステイルはともかく上条すらも現在、動きを止めている。幻想殺しを無効化している……とは考えづらい。如何に対処法があるかと、こと異能を打ち消すという力においてはあの右手は絶対的だった。

となれば――。

「当麻。右腕は動かせるでしょう？ どこでも良いから自分の身体に触れなさい」

そう呼び掛ける。すると上条は一瞬困惑するも確かに右腕が自由に動かせることに気づき、手の届く範囲の自分の部位へと触れた。

同時に、びくりと跳ねるように上条の身体が動き出す。

「うおっ……動けるようになった……？」

「やっぱりね。あいつの方も触れてやってくれない？ 流石にもう、どっちが敵かってのは判断出来たでしょう？」

「……ああ、分かった」

ステイルの方を指差す霊夢。上条としては先程攻撃してきた相手を自由にするのは気が引けたが、そうも言ってられない状況であることも確かなので一先ず言われた通りにステイルの背中に触れた。

「ツ……ふん、感謝するよ上条当麻」

「感謝されている気が全くしないお礼どうも」

素直に礼を言うスタイル。しかし、その表情は屈辱的だと言わんばかりに険しくさせていた。それは上条に助けられたのもそうだが、こும்易々と敵の魔術を受けてしまった自分への苛立ちもあつた。

「……瞭然。それが当代の幻想殺イマジナリーキラーしか。些か不完全のようにも見えるが」

またもや力を無効化された。にも拘わらず想定内だと言わんばかりにアウレオルスは落ち着き払っていた。

一方、スタイルは彼の発言に驚愕する。

「待て、当代の……と言ったか？ コイツの能力はイギリス清教ちでさえ、つい最近存在を認めた能力だぞ。学園都市に侵入して日も浅い君が何故知った風な口を利く？」

「当然。今の私は十字教が知らぬことも、秘めることも知っている。必要悪ネサセリウスの教会の男よ」

幻想殺しという明らかなイレギュラーに対して、何かしら把握しているような口振り。

怪訝そうに問いかけるスタイルへ、アウレオルスは傲岸不遜に言い捨てる。

「——にしても、奇妙な巡り合わせと言えよう。よもや私の前に立ち塞がるのが貴様達

とは……運命というのはどこまでも皮肉なものらしい」

突然の眩きに全員が眉をひそめる。そんな反応を気にも留めず、アウレオルスはステイルから上条、そして霊夢へとそれぞれ視線をずらしていく。

「必然。上条当麻、博麗霊夢。出来得ることならば貴様達とは争いたくはない。
禁書目録インデックスの恩人たる貴様達とは、な」

それから、衝撃的な発言をする。

「……何だつて？」

「はあ？」

二人とも驚きの表情を浮かべる。何故そこで、彼女の名前が出るというのか。

「……成程。そういうことか」

一方、ステイルは合点が行った様子だった。

「あー？ どういうことよ？」

「彼は以前、あの子の教師役をしていた。つまり僕達より前の、彼女のパートナーだったという訳さ」

それはアウレオルス・イザードの抹殺を依頼された際にもたらされた情報。彼がローマ正教に所属していた頃に就いていた「隠秘記録官」とは、教会の為に魔術の主な傾向とその対策を魔道書として記す役職。

要は魔術の教科書作成者であり、イギリス清教側が敢えて「異端の知識」を使うことで対応しているのに比べ、こちらはあくまでローマ正教側の知識内での対応になるとはいえ、限定的ながら異端に触れることを許されている謂わば特例中の特例とでも呼ぶものであり、アウレオルスはその中でも天才と称される程の逸材であったらしい。

しかし、彼は方針の違いからローマ正教に不満を抱くようになり、極秘にイギリス清教への接触を図り、これに成功した。

そうして禁書目録のパートナーに任命され、それからしばらく後に失踪。ローマ正教からも離反し、堕ちるところにまで堕ちたのだと思われていたが……。

「まさか、君の目的は……だが、それは……」

ステイルは察した。目の前の男が何を思い、何を成そうとしてローマ正教を離反し、裏切り者のレッテルを貼られることになったのかを。

そして、何もかもが遅過ぎたということも……。

「間然。分かっているとも同輩よ。私は、間に合わなかった。彼女の救い手は私では無かった、ただそれだけのこと」

しかし、予想に反してアウレオルスは薄く笑みを浮かべ、そう言い切った。どうしようもなき事実を前に、彼は自暴自棄になる訳でもなく、受け入れていたのだ。

「……そういうこと。あんたは助けようとしたのね、インデックスを」

「!? それって……」

会話を聞いていた霊夢も納得する。ここまで聞いて察しない方が難しい。上条も理解したのか気まずそうな表情を浮かべた。

全てを擲つてでも救おうとしていた人物が、既に救われていた。その衝撃と絶望は一体如何ほどのものなのか。

「悄然。気を病む必要など無い。私は感謝しているのだ、彼女を呪縛から解き放つてくれたことに。だからこそ、彼女の味方である貴様達と敵対するのは望ましくない」

「……………」

穏やかな声。そこに嘘は無いように思える。しかし、霊夢は依然として警戒した様子でアウレオルスを見据えていた。

「なら、さっさとこの街から出て行ってくれろ?」

「……悪いが、それは出来ん。私にはまだ、やらなければならないことがある」

投降、は恐らく処刑されるであろうから不可能。故に、霊夢は暗に逃走するのを見逃してやると提案するが、やはりと言うべきかアウレオルスは断る。

禁書目録を救う為に学園都市へ赴いたとして、彼女が既に救われているのを知りながらも留まり、三沢塾を乗っ取っている時点で彼の目的が別にあるのは分かりきっていたことだ。

「そ。じゃあ、見過ごせないわね。吸血鬼を殺す力を使って何企んでるか知らないけど……どうせろくでもないことでしょうし」

「ふん……僕も同意見だ」

「……………」

いつもの第六感を以てそう断ずる霊夢。これにステイルも必要悪の教会所属の魔術師として同意を示し、上条は迷った様子で黙る。

「ろくでもない、か。フツ……塊然。よりにもよって、貴様がそう言うとはな」
対するアウレオルスは目を伏せ、一瞬だけ苦笑した。

「——姫神秋沙。ここから離れている。出来る限り遠くに、な」

「……………」

そう告げられた姫神はこくりと頷き、早足でアウレオルスの横を通り過ぎていく。

後を追う者は居ない。上条とステイルはアウレオルスに対する警戒心から。霊夢はアウレオルス本人が現れた以上、姫神の存在は後回しにして良いと判断したが故である。

「さて……こうなってしまうては、私は貴様達を排除しなければならない。如何なる存在であろうと、我が大願の邪魔はさせぬ」

気は進まんが、とアウレオルスは渋い顔をする。

「この戦力差だつてのに、随分と余裕そうだね？」 骨董屋

訝しげにステイルが問う。その実力はあの紛^ダい物^ミとは比べるのも烏滸がましいことは理解していたが、それでも錬金術師であり、研究を主とするアウレオルスに戦闘適正は無いと思われ、その証拠に身体中を霊装や武装で固めている。

先程こちらの動きを拘束した、未知なる魔術は脅威であるもの、霊夢には通じなかつた上に、こちらは三人。にも拘わらずこうも平然としていられるということは、まだ何か隠し球があるとしてもいふのだろうか。

「当然。結局のところ戦力差など、覆つてなどおらぬのだからな」

そして、アウレオルスは素早い動きで首元に針を刺した。

「——ここで起きた事を全て忘れ、立ち去れ」

「！」

言葉を発する。三人は目を見開くも、その言葉の意味を理解する頃にはもはや手遅れだった。

虚ろな表情で立ち尽くす上条とステイル。唯一霊夢だけは一瞬硬直するのみで即座に動き出し、腕を振るつて数本の針を投擲する。

「——跳ね返せ」

しかし、針はアウレオルスに届く寸前で弧を描いて軌道を変え、持ち主である霊夢の

方へと向かっていく。

即座に靈夢はこれ避けつつ、小さく舌打ちした。

(……してやられたわね)

こうも具体的な言葉すらも実現可能とは。仮に動くなと先程のように動きを止めさせれば上条がすぐに対応していただろうが、記憶そのものを忘れてしまえば無意味だった。

右手を頭に触れさせれば、恐らく解除出来ると思われるが、そのようなことをしてられる暇をアウレオルスは与えてはくれないだろう。

(さっきからあの言霊のようなのが私に効かない理由は不明。単純に耐性があつたのか、靈力の量や実力によって効力に差異があるのか……どっちにしろ——)

——喋る前に仕留める。

実にシンプルかつ最適解な戦法で靈夢は目の前の推定言霊使いを無力化せんと動く。

(ツ、速い………！　だが——)

靈夢の聖人かと見間違えう程の動きはダミーの視界を介して確認していたが、実物を見ると改めて瞠目させられる。

しかし、一瞬で距離を詰め、振り下ろした大幣は、アウレオルスの頭部に触れようとした所でボールがバウンドするように逆方向へ跳ねた。

先程の針を跳ね返したのがまだ作用していたのだ。霊夢が再び振り下ろさんとする、その隙にアウレオルスは言葉紡ぐ。

「——吹っ飛べ。音よりも速く」

そして、パァン！ と空気を切り裂くような音と共に空間は荒れ狂う衝撃波に見舞われ、霊夢は大砲から射出されたように吹き飛んだ。

「——!?」

今度はその速度が故に途中で勢いを殺し切ることが出来ず、そのまま壁をぶち抜いた。

「っ……………」

瓦礫の中で顔をしかめる霊夢。ここにきて初めてのダメージらしいダメージ。いくら事前に魔力で覆って防御してしようと、自身が音を上回る速度で飛ばされた衝撃はかなり堪えたらしい。

「銃をこの手に。弾丸は魔弾。用途は射出。数は一つで十二分」
距離は充分に取れた。アウレオルスがすかさずそう唱えれば、旧式の片手銃が出現する。

彼女自身に効果が作用しないのなら、直接的な手段で抹殺するまで。

「——人間の動体視力を超える速度にて、射出を開始せよ」

火薬が破裂する音が響く。それは引き金を引く動作無しに、視認すら叶わぬ速度で銃口から放たれた。

「！」

直ぐ様起き上がった霊夢は首を僅かに動かすことでこれを避け、弾丸がコンクリートの壁を貫く。同時に、アウレオルスは既に突き立てていた針を首から引き抜いて投げ捨てる。

「先の手順を量産せよ。十……否、三十の暗器銃にて連続射出の用意——」

唇に言葉に乗せた瞬間、アウレオルスの両手には、それぞれ十五丁ずつ剣の仕込み銃が、まるで鋼の扇のように広げて握られていた。

物理的に有り得ぬ構造。しかし、それは如何なる理屈も通用せず、言葉一つで十全に機能可能な代物であった。

「——射出せよ」

一斉に銃口が火を噴く。機関銃が如き連射。放射状に放たれた、視界を埋め尽くす程の弾丸の嵐が霊夢に襲い来る。

「チイツ——」

「——ほう。これを避けるとはな。だが、一体いつまで踊っていられる？」

飛び退くように、人間離れた動きで軌道を変えながら銃撃を回避する霊夢に対し、

感心した様子で、興味深そうにアウレオルスは問う。そもそも掠りもせず、避けられて
いること自体が可笑しかった。

人間の動体視力を上回る速度。それは正しく言葉通りであり、現代の最新式の銃をも
凌駕するスピード。実際、霊夢を以てしても視認どころか目で追うことすら難しい。

それでも尚、ギリギリ回避出来ているのは、ひとえに霊夢の恐るべき回避能力におい
て、動体視力は然して重要ではないからだろう。

つくづく出鱈目な存在だと、自分のことを棚に上げながらアウレオルスは次なる一手
を考える。

「――不粋な弾幕ね」

既の上条とステイルの姿は無い。恐らく先程の言葉通りに、支配され、三沢塾から出
ていったのだろう。

生徒が他に残っているかもしれないが、少なくとも結界が破壊された以上、この階に
留まっているとは考えづらい。

故に、霊夢は派手に動くことにした。

――八方龍殺陣――

「ッ!？」

無数の札が弾丸を弾き飛ばしながら巨大な円陣を形成する。その規模は軽く法王級

に到達しており、いつの間にか発動の準備をしていたのかと訝しみ、その実それが何の準備も儀式も必要としないものだということに気付く。

そして、驚くアウレオルスを狙って、四方八方から多量の札が飛来する。すかさず銃撃で札を撃ち落としていくも、三十もの銃口を以てしても物量ではあちらが優っていた。

「ッ……跳ね返——」

「させないわよ……！」

ならばと札の弾幕を跳ね返そうとした次の瞬間。迫っていた札が光を放ち、爆ぜた。

「ぬう……!?!」

思わぬ攻撃に言葉が止まる。暗器銃の一部も破損してしまい、生まれた致命的な隙を突いてアウレオルスへ札が容赦無く炸裂していく。

鳴り止まぬ爆音。絶え間無く続いた札の雨は、霊夢が術式を解いたことで漸く終わる。

「さて、と……これでやられてくれると助かるんだけど」

霊夢は油断無く着弾地点を見据える。

「敵然……殺意無き攻撃とは、随分とお優しいことだな。巫女よ」

そして、やはりというべきか、アウレオルスはボロボロになりながらも立っていた。

「……それでも意識を奪うくらいは威力は込めたわよ」

霊夢はアウレオールの言葉を否定しない。彼女には彼を殺す気など更々無かったのだから。

しかし、微塵の容赦もしていなかった。彼女が繰り出す殺意無き攻撃とは実際、ただ殺す気がないだけで下手をすれば意識不明の植物人間にだってなりかねない無慈悲なものである。

「依然。事前に我が身を金剛にも等しき堅牢な材質に変換していなければ、敗北は必至であつたに違いあるまい」

事前、というのはアウレオールが霊夢たちの前に姿を現す以前という意味だろう。ダミーを介してその実力を目の当たりにしていた彼は一片の油断も無く、相応の準備をしており、己の肉体を別のモノに置き換えることすら躊躇しなかった。

それが功を奏し、あれだけの弾幕を受けながら意識を保つことが出来たのだ。

「——治れ」

そして、針を突き立てる。すると身体中の痣や腫れは消え、破けたスーツは時間が巻き戻るかのように元通りになった。

「更にこの身を上位の『聖人』へ。その後、五感と反射神経を倍増させよ」

するとアウレオールの内蔵する魔力が一気に上昇し、身体もスーツ越しからでも目に

見えて分かる程に筋肉質になっていく。

言葉から察するに、聖人……あの神裂火織と同じような妖怪染みた人間へと変わった、ということなのだろう。

「……流石に出鱈目過ぎない?」

思わず霊夢は口にする。言葉というのは、こうも万能なものであったらどうか。ただ言葉を発するだけでその内容を実現させ、無から物質を生み出し、受けた傷を無かつたことにする。

それも何の反動も無しに。もはや神の権能に等しく、霊夢から見てもあまりにも理外を超越しており、とてもではないが、一介の魔術師が振るうような力ではない。

「当然。我が^{アルス・マギナ}黄金鍊成^ナは完璧にして無敵。敗ける道理など有りはせぬ」

「……あるすまぐな?」

「大いなる術。世界の全てを呪文と化し、それを詠唱完了することで神や悪魔を含む、世界の全て」を己の手足として使役する鍊金術の秘奥にして到達点……端的に言うならば、私が発言したことは全て現実になる、寸分狂わずな」

「……そりやまた、大層なことぞ」

わざわざ自分の能力を解説してくれてご苦労、とはならない。その内容が耳を疑う程に馬鹿げていたが故に。

発言が現実になる。しかも単なる言霊ではなく、世界そのものを改変するのだという。

「まあでも……それなら、やることは変わらないわね」

しかし、はつきりとしたことがある。それは黄金鍊成とやらがあくまでも言葉を起点に発動するということ。

ならば聖人の肉体を得て、難易度が上がったとはいえ何かしら喋られる前に無力化する、という当初の方針は何ら変わらない。

それに加え――。

「気付いたんだけどさ」

「むっ？」

「あんた、その針刺さないで、具体的な内容を変えるとかは出来ないでしょ」

「……………!」

表情が固まるアウレオルス。それを凶星を突かれたのだと判断した霊夢は笑みを浮かべる。

予想するに、あれは一種の精神安定を図る為の暗示のようなもの。世の理をねじ曲げ、世界を改変するというのは単なる言葉だけでなく、彼自身の認識に左右され、それこそ僅かでも疑念があれば破綻してしまうのかもしれない。

自らの肉体を吸血鬼に作り変えず、吸血殺しの力を求めているのは、そういうことなのだろう。

「ッ——銃をっ」

「させるかっの」

——夢想封印——

極彩色の輝きが視界を埋め尽くす。即座に針を突き刺さんとするアウレオルスだったが、霊夢の方はとっくの前に準備を終えていた。

迫り来る無数の色とりどりの光弾。聖人の肉体を獲得したアウレオルスならばある程度は対応可能だが、仮に発動が間に合ったとしても先程のように銃撃だけでは防ぎ切れない。

「我が身に迫る、ありとあらゆる攻撃を跳ね返せ！」

故に、土壇場で詠唱内容を変える。すると光弾は彼に命中する寸前で弾かれるように逸れて霊夢の方へと帰っていく。

「ま、そうするでしょうね」

どこぞの学園都市第一位のお株を奪うような光景であったが、霊夢はとうに予測済みであった。

「——むっ？」

眉をひそめる。跳ね返したはずの光弾が霊夢へ向かうことなく、まるで自我を持って
いるかのように弧を描いて再びアウレオルスの方へと飛来してきた。

全ての光弾が何度跳ね返されようとも、無限にホーミングし続ける。

「小癩な……」

「罅が明かない。なら、罅が明けるまで我慢比べと行きましょうか」

「依然。如何なる手段を用いようとも、黄金鍊成を有した私には勝てぬ。たとえ誰であ
ろうとな」

降り注ぐ光弾の嵐の中で睨み合う。どちらが不利かと言われれば間違いなく霊夢だ。
いくら対処しようと、アウレオルスの能力が本当に世界を改変するのなら、文字通り無
限に手段があるのだから。

しかし、勝機が無い、ということはあるはずがない。現にどういう訳か霊夢に黄金鍊
成は作用していない。

必ず何かしらの綻びがある。そう確信しながら霊夢は活路を見出さんとしていた。

「なんかヤバいことになってるわねー」

少女が呟く。彼女は少し離れた、しかしいつ巻き込まれてもおかしくはない程度には近い距離で霊夢とアウレオルの戦いをスマホで撮影しながら眺めていた。

「レイムっちがあそこまでガチでやってるのなんてね……黄金鍊成だっけ？ あの緑髪、思ってた以上にヤバかったわ」

記憶を消され、ぼけーとした様子で帰宅していく自分自身を見送りながら彼女はこの三沢塾に残った。また記憶を消されてはたまらないと姿を透明化させ、身体から生じる音を可能な限り消し去り、機を伺っていた。

そうしていれば顔見知りがかつてない程の力を見せ、殺し合いをおっ始めてしまい、

予想だにしない事態の連続に彼女は愉快そうに笑う。

「もしかしてあれが噂に聞く魔術師つてヤツ？　上条さんの口振りからして、姫神さんを狙つて来たのかしら」

そういう連中が居ることは知っていた。しかし、この学園都市で暮らす以上、無縁の存在だとばかり思っていた。オカルトサークルの者としては興味が無いと言えば嘘になるが、以前に調べた限りでは彼らもある意味では自分と同じような者達に過ぎず、長年追い求める「神秘」には程遠かった。

彼女が視たいのは、欲しいのは、単なる非科学オカルトなどではない。

もつと、根本的な——。

「危なくなつたら助けてあげよつと。ま、レイムっちが敗けるとも思えないけども」

今の彼女は単なるギャラリィ。ただ面白そうだと見物している野次馬であり、そこに何の危機感も無かった。

むしろ危機に陥るのであれば嬉々としてはしやぐ程には、刺激に飢えていた。

「それに——」

そして、彼女——宇佐見童子がここに留まる理由はもう一つあった。

「来ないかなあ、『吸血鬼』」

それは実に純粹な、願望だった。

何処かにあるのかも、ないのかもしれない。けれど追い求めて止まない“幻想”の到来を――。

自己幻像

何か忘れていている気がする。

そう思い、帰路に就いていた宇佐見董子は何とはなしに引き返し、その辺を彷徨いていた。

(うーん……そもそも何で私はこんな所に居たんだろ?)

今日一日の記憶の大半がごっそり消えている。そんな事実には違和感を覚えるのは当然であり、一体何が起きたのかと彼女は考えていた。

「……あれ?」

そうして頭を唸らせながら足を運んだのは近くの公園。そこで見たのは遊具のブランコに座る大の男二人……その内一人は赤髪に神父服という端から見ればシニールで不審者にしか見えない光景だった。

普通ならば近付こうとせず、そそくさと見ないフリをして立ち去るべきだが、もう一人の毬栗のような特徴的なツンツンヘアの方は、宇佐見は見覚えがあった。

「上条さんじゃないですかあ。何してるんです?」

「え?」

自称世界一不幸だという男子高校生。かつて、ある事件で知り合ったところを宇佐見が目をつけ、半ば無理矢理「秘封倶楽部」に加入させた人物だ。

こんなところで何をしているのか。隣の赤髪神父が知り合いだとすると、またしてもトラブルに巻き込まれているのかもしれない。

「何してるんです?」

「えつと、君は……?」

「はあ? 惚けようとしたって無駄ですよ」

話し掛ければまるで初対面のような反応。まさか自分と関わりたくなくて他人のフリをしようとしているのかと宇佐見は顔をしかめる。

「何だね。知り合いかい?」

「あ、ああ……多分」

そう言いながら上条が額に手をやる。すると次の瞬間、目を見開いて立ち上がった。

「!? 宇佐見……!」

「うわつ、吃驚した。何ですか急に」

「……お前も忘れているのか? 姫神のことは?」

「はい? 姫神って……確かうちの高校にそんな名前の生徒が居たような気がするけど」

……」

いきなり大声で名前を呼ばれたかと思えばそんなことを尋ねてくる上条に宇佐見は何が何やらと首を傾げる。

「そうか……ちよつとジツとしといてくれ」

「へ？」

すると上条は宇佐見の方へと手を伸ばす。

「え、ちよ、やつ……上条さんつたらそんな大胆な……」

ひゃー、と何をしようとしているか分からない宇佐見はよく分からない勘違いをしながら恥ずかしがる。

しかし、ポンツと頭を触れられた瞬間、全身に電流が走った。

「あー！」

端的に言えば、思い出したのだ。三沢塾での一件を。

「あんの緑髪野郎！　してやられたわ！」

「やつぱりお前もアウレオルスに記憶を消されてたのか……」

呼び起こされる完全敗北の記憶。自らが何も出来ずに無力化されたという事実。宇佐見はメラメラと怒りの炎を燃やす。

お前も、ということとは上条もやられたということなのだろう。てつきり彼の幻想殺し

はそういう精神系の能力は無条件で打ち消すものかと思つていたが、何事も例外はあるようである。

「どうした？ 何か思い出したのかい？」

「ああ。とりあえず目を瞑つて舌を出してくれ」

「？ ああ。分かつた」

恐らく同じ被害者だと思われる赤髪神父に上条がそう言うと、彼は疑問に思いながらも素直に従つてペーと舌を出した。なかなか間抜けな絵面である。

はて、普通に頭に触れば良いのでは？ と宇佐見が首を捻ると同時に上条は勢いよく赤髪神父の顎にアッパーカットを叩き込んだ。

「よくも殺そうとしてくれたな！」

「いきなり暴力ッ!？」

「がはっ……!?! — ああ、そういうことか」

宙を舞い、仰向けに倒れた赤髪神父は突然の行動に怒りを覚え、しかしすぐに納得したかと思えば、ばつが悪そうな顔をする。

「どうやらあまり仲はよろしくないようだ。」

「あらら……上条さん、この御仁は？」

「えっと、そいつは……その……」

「そう言う君は何者だい？ 見たところこの街の学生のようだが……」

「あ、これは失礼。私は宇佐見董子。霧ヶ丘女学院一年、泣く子も黙る本物の超能力者にして秘封倶楽部会長よ」

「……ヒフウクラブ？」

聞き慣れぬ単語に眉をひそめる赤髪神父。しかし、宇佐見はお構い無しに会話を続ける。

「さ、こつちが名乗ったんだからオタクも名乗りなさないな。口振りからして外部の人間みただけど？」

「……ふん。ステイルⅡマグヌスだ。一応その仲間だと思ってくれて構わない」

赤髪神父改めステイルは少し考えた後、名前くらいは構わないだろうと上条へどう見ても仲間へ向けるものではない睨むような視線を向けつつ、自己紹介する。

「おい上条当麻。こいつはどう見ても部外者にしか見えないが……」

「いや、実は……」

すると上条とステイルが宇佐見に聴こえぬよう小声で何やらコソコソと話し始める。そんな姿を不審に思いながらも宇佐見は顎に手を当てた。

（まだ三沢塾には『もう一人の私』が残っているはず……やられてないんなら、チャンスは充分にある）

この宇佐見童子、やられつばなしで終わる訳にはいかない。必ずやあの緑髪の男に仕返ししてくれようと策を巡らせる。

——その時だった。

管楽器のような音色が聴こえてきたかと思えば、三沢塾の上空に暗雲が立ち込める。

「うん？」

「な、何だ……？」

「あれは……まさか……」

何事かと思っていると、ステイルは心当たりがあるのか驚きの表情を浮かべる。

「グレゴリオの聖歌隊……ローマ正教の連中も漸く重い腰を上げた訳か」

話聞くローマ正教の最終兵器。3333人にも及ぶ修道士達をヴァチカンという世界最高の霊地に建てられた聖堂に集め、聖呪いのりを集積することにより魔術の威力を激増させて放つ「爆撃」が行われようとしていることに、ステイルは冷や汗を掻く。

「グレゴリオ……って何だ？」

「要するに、このビルごと吹き飛ばそうとしているんだよ、連中は」

「は？ ふ、ふざけんな！ だつて中には博麗や姫神、他の生徒達だつてまだ居るんだぞ

……!？」

「ちよつ、ちよちよつ、そりやまずいですつて！ とうか何、レイムっちも来てんの!？」

ステイルの説明に慌てふためく上条と宇佐見。しかし、既に手遅れであり、天上より何千何百にも束ねられた赤き火花が融合した強大な紅蓮の神槍が振り落ちる。

3333人による聖呪爆撃。それは三沢塾に直撃すると瞬く間に砕き、高層ビルがあつという間に倒壊していく。

「なっ……!?!」

——しかし、次の瞬間。

崩れ落ちようとしていた三沢塾は急にびたりと停止したかと思うと、まるで時間が巻き戻っていくように徐々に元通りになっていった。

その異様な光景を目の当たりにして、一同は言葉を失い、戦慄する。

「馬鹿な、黄金鍊成だど……!?!」

漸く、彼らは敵の力を知った。

「——あん?」

一方、アウレオルスと激戦を繰り広げていた霊夢は持ち前の直感で巨大な魔力のうねりが発生し、天から何かが降り注ごうとしていることに気付く。

そして、次の瞬間には轟音が鳴り響き、建物がグラグラと揺れる。

「ツ——!?!」

霊夢は咄嗟に周囲へ御札を張り巡らせ、巨大な結界をこの部屋一帯に展開する。このビル全域を防ぐにはあまりにも時間が足りなかった。

対するアウレオルスは一瞬顔をしかめるも、何ということはないかのように落ち着き払っていた。

「――元に戻れ――」

ただ、そう呟く。たったその一言で崩落していた建物は瞬く間に巻き戻り、万物を破壊し尽くす聖呪爆撃も無効化されるだけでなく術者へと跳ね返す。ヴァチカンは今頃大惨事だろう。

「……ちつ……一体どこの馬鹿よ」

何事も無かったことに安堵しながらも霊夢は苛立った様子で吐き捨てる。もしもアウレオルスが元に戻さなければ霊夢は無事だったが、他の生徒達は巻き込まれて犠牲になっていた。

この時ばかりは敵であるアウレオルスに感謝する。

「……油然。解せぬな」

一方、アウレオルスは理解し難い様子といった視線を霊夢へと向けた。

「貴様、何故わざわざ防ごうとした？」

「……はあ？」

突然の問い掛けの意味が分からず、霊夢は顔をしかめる。これにアウレオルスはしばらく黙り、そして得心が行った様子で再び口を開く。

「成程。幻想を生きる巫女は、未だに『天生』に至らず……という訳か」

その言葉に、霊夢の思考が停止する。

「感電せよ」

すると次の瞬間。霊夢の身体にビリッと電流が走ったかと思えば、青白い放電が彼女を包み込んだ。

「がっ……!?!」

身に纏った魔力防御を貫通した全身を駆け巡る高圧電流に霊夢は呻き声をあげ、倒れ伏す。

「ッ……なん、で……」

「当然。理解したからだ。如何に貴様であろうと、途上で不完全な存在であるのなら、我が黄金鍊成が通用せぬ道理は無し」

即死せず、意識を保つ霊夢に流石の頑丈さであると感心しながらもアウレオルスはつまらなそうに言い放つ。

対する霊夢はかなりのダメージを受けており、まともに喋ることすら儘ならなかった。

「銃をこの手に。材質は九頭蛇ヒュドラの毒矢」

手に現れた片手銃が霊夢へと向けられる。

「厳然。禁書目録の恩人である貴様は、出来ることならば殺したくはなかった。しかし、生かしておけば何をするか分かったものではない。……残念だ。幻想を生きる巫女よ」
惜しむようにそう言い、アウレオルスは確実に殺す為に頭部へと狙いを定め――。

「――待って」

しかし、それを阻む者が居た。部屋を立ち去ったはずの姫神秋沙が戻ってきたのである。

引き金を引こうとしたアウレオルスも、最後まで抵抗せんと体の底から魔力を練り上げようとしていた霊夢も、彼女の突然の登場に硬直した。

「!」

「……どういうつもりだ」

駆け付けるなり両手を広げて庇うように霊夢を背にこちらと対峙する姫神に、アウレオルスは困惑した様子だった。

「彼女はもう戦えない。なら殺す必要は無いはず」

「……厳然。以前にも言っただろう、我らが大願を成すには犠牲は必要だと。たとえ如何に綺麗事を並べようとそうでなければ何も成せん」

「でも犠牲は少ない方が良い。あなたも言っていた。より大勢の人を助けたいって」

「……………」

「お願い。これ以上……罪を重ねないで」

アウレオルスは何も言えなかった。普段の、或いは以前までの彼ならばそんな言葉に耳を貸さず、容赦なく姫神をはね除けるか彼女諸共殺していただろう。

しかし、今のアウレオルスにはそれは出来ない。彼はそこの悪党共と同じように堕ちるところまで堕ちた訳でも、救おうとしていた人物が既に救われてしまっていたことに自暴自棄になった訳でも無いのだから。

彼には確かな大義があった。

だからこそ、アウレオルスは姫神に手を出せない。彼女のような憐れで悲劇に満ちた存在こそ、かつて彼が愛にも妄執にも取り憑かれていなかった頃に純粋な理念の下、救いたかった、救うべきだと思った、無辜の民なのだ。

その躊躇が、運命の分かれ目だった。

「……………」

床が揺れる。何事かと瞠目すると周囲に無数の光弾が浮かび上がっていた。

——夢想封印——

「ぎげんじゃ、ないわよ……………」

霊夢が獯猛な笑みを浮かべる。地べたに這いつくばりながらも彼女の戦意は全く喪

失していなかった。

御札で姫神を縛ると彼女を安全な場所まで移動させ、光弾を一斉に向かわせる。

「無駄だ——消えろ！ 一つ残らず！」

しかし、光弾は霧散するように跡形も無く消失する。跳ね返しても戻ってくるのであれば、元より消し去るまでだ。

霊夢は攻撃の手を止めない。今度は頭上に天井を突き破る程の巨大な球体を出現させる。

——陰陽鬼神玉——

「ツ……無駄なことを……」

「……あんたの術式の絡繰が分かったわ」

「——何？」

「さつきまで効いてなかった私に突然効くようになって確信した。言葉のままに世界を歪める？ 詭弁も良いところね」

その言葉に、アウレオルスは意表を突かれる。

「考えたことを現実にする。それはつまり、あんたが心の底から信じていない事は実現出来ないんでしょう？」

「悄然。だから何だと言う！ 貴様には何も出来まい！」

砕けろ、という言葉と共に巨大な球体は木つ端微塵になった。霊夢のあらゆる攻撃はただの言葉一つで悉く無効化されてしまう。

しかし、霊夢は焦らない。

「——そうね。私には、ね」

次の瞬間、アウレオールの動きが硬直する。

「何……!?!」

「Ash To Ash Dust To Dust」

突然の事態に驚愕に顔を染めるアウレオール。それからすぐにどこからともなく詠

唱が響く。

「——Squeamish Bloody Road吸血殺しの紅十字!」

刹那。目も眩むような輝きと共に、アウレオールの真後ろから爆炎が顕現した。

「ぐう……!?!」

無防備に紅蓮の炎に包まれるアウレオール。しかし、即座に彼は無傷で脱け出してくる。

「今のルーンの術式はまさか……!」

「そう。僕達さ」

現れたのはステイルⅡマグヌス。どうやって記憶を取り戻したのかと思考を巡らせ、

考え得る一つの結論へ至ったアウレオルスは慌てて周囲を確認するも、遅かった。

「オラア！」

拳が、ごりつと顔にめり込む。

「ぐうツ……!?!」

真横からの右ストレートで殴り飛ばされ、炎で熱せられた高温の床と勢いよくキスをさせられるアウレオルス。苦痛に顔を歪めながら視線を向けた先には、やはりと言うべきか、幻想殺し——上条当麻が立っていた。

「大丈夫か博麗っ!?!」

「ええ。何とかね……」

「良かった、間に合ったんだな！」

「……本当。ナイスタイミングよ」

心配する上条を他所に、漸く動けるようになった霊夢はコキコキと首を回しながら立ち上がる。

「さて、と……何であんたが居るのよ、董子」

「フッフッフ！ オカルトある所に宇佐見董子ありなのよ、レイムっち！」

「……あ、そう」

何故か居て決め顔を作る超能力少女へ訝しげな視線を向けるも、戦力としては申し分

無いので一先ず看過しておくことにした。

「感謝してよね?」 その神父さんを空間移動でここまで連れて来てから上条さんもわざわざ運んできたんだから」

「さつきから視てたのは、あんただったのね」

「ありや?」 バレちゃってたか」

そう言うとうと董子の隣に空間から滲み出るかのように彼女と瓜二つの姿の少女が現れる。

「宇佐見が二人……!?!」

上条は啞然とする。先程の空間移動や念動力といい、一体幾つの能力を持っているのだろうか。

「自己幻像って奴です。影分身みたいなもんだと思ってください」

「因みに本物は私よ」

「いやいや、私が本物よ、もう一人の私」

「ま、どっちとも本物なのが正解なんだけどね。相棒」

「ややこしいからどっちか黙っててくれる?」

面倒臭そうに霊夢がそう告げると二人の宇佐見は肩を竦め、片方は彼女と同化するように消えた。

「き、貴様らあ……!!」

よろよると立ち上がったアウレオルスの苛立ちを多分に含んだ双眸がこちらを捉える。

あのパンチ一発でかなりのダメージを負っているようだ。聖人クラスまで肉体強化していたはずだが、上条に殴られた瞬間、幻想殺しが作用して無効化されたのだろう。

「行くわよ当麻。あいつのアルスⅡマグナとやらはあんたには絶対に通用しない」

「! ……ああ、分かった!」

「憤然。貴様達風情がいくら集まろうと……!?!」

すると針を突き刺し、詠唱しようとしていたアウレオルスが突然口を閉じる。否、閉ざされたのだ。

「もうさつきみたいなの失敗はしないわ。喋らせずに窒息でダウンさせてあげる」

宇佐見が手を翳す。それだけでアウレオルスは呼吸を止められ、首を押さえて苦しみのたうち回る。

「ツツ………舐め、る……なア!!」

「嘘っ!?!」

しかし、アウレオルスはゆっくりと口を開けた。どうやら幻想殺しで無効化したのは一時的なものに過ぎなかったらしく、聖人の超人的な筋力で無理矢理抉じ開けたようで

ある。

信じられない光景に驚愕しながら慌てて念力の力を強める宇佐見。その間に霊夢とステイルは即座に動き、喋られる前にアウレオルスを仕留めんと向かっていく。

「倒れ伏せ！ 侵入者共！」

しかし、即座に全員が取り押さえられた銀行強盗のように前のめりに倒れ込んだ。

「つままだ……！」

即座に能力を解除して上条が駆ける。

彼はアウレオルスが何を企んでいるかは知らない。姫神の言う通りもしかすると善行をしようとしているのかもしれない。

けれど、彼は霊夢を殺そうとした。このビルの生徒を単なる防衛機構としか見ておらず、負担も関係無く魔術を使わせていた。

如何に崇高な目的であろうと、誰かを犠牲にするのは許せないという、至極真つ当な理由の下、上条はアウレオルスを止めることを決めた。

「テメエがなんでも思い通りにできるってなら、まずはそのふざけた幻想をぶち殺す！」
「ほぎげ。所詮、貴様が無効化出来る範囲は右手のみ。触れられぬ攻撃は防げぬだろう」

距離を詰められ、突き出された拳をアウレオルスは難なく躲す。先程の一撃は不意打ちであったが、正面からならば聖人の動体視力を有する今の彼に避けられぬ道理は無

い。

そのまま凄まじい膂力で上条の頭を掴むと無造作に投げ捨てた。

「があっ……!!?」

壁に叩き付けられ、呻き声をあげる上条。飛びそうになる意識を気合いで保ち、立ち上がるも、アウレオルスは既に次の行動に出ていた。

「銃をこの手に。弾丸は魔弾。用途は射出。数は一つで十二分。——人間の動体視力を超える速度にて、射出を開始せよ」

火薬の破裂する音が響き、一瞬遅れて上条の頬を浅く切った何か背後の壁にぶち当たる。

右手を構えて凍りつくことしかできなかった上条を満足そうに見やったアウレオルスは、またしても首に突き立てていた針を投げ捨ててこう言った。

「先の手順を量産せよ。『百』の暗器銃にて連続射出の用意」

唇に言葉に乗せた瞬間、アウレオルスの両手に現れる無数の銃口。上条の背筋が凍りつく。アレが射出されたら最後、絶対に避ける事も防ぐ事もできない。

(逃、げ……ッ!)

故に、上条は射出される前に回避しようとした。無駄な足掻きと認識しながらも、とっさに横合いに転がろうとして、背後には身動きの取れない霊夢達が居ることを思い

出す。

無意識に動きを止める。彼らを一切を無視して現状、唯一目の前の錬金術師を倒し得ると思われる自分の身を優先させることは、出来なかった。

「射出を開——ッ!？」

しかし、銃口が火を噴くことはなく、いつの間にかそこら中に張り巡らされた御札がアウレオールの身体に巻き付く。

「ぬう……!？」

「動けなくても、あんたを妨害する手段なんていくらでもあんのよ……!？」

「おのれ。小癩な……!？」

直ぐ様アウレオールの御札を引き剥がそうと口を開き——。

「——イノケンテイウス魔女狩りの王!？」

ゴオオオ!! と、ステイルの叫び声が響くと同時にルーン文字が刻まれたカードが大量にバラ撒かれ、爆炎が巻き起こる。

「……ッツ!？」

上条とアウレオールの両名が驚愕する。重油のようなドロドロした身体を芯に、猛烈な爆炎を纏うその人型が表す意味は“必ず殺す”……全てを焼き尽くす摂氏三千度の炎の巨人が顕現したのだから。

「砕けよッ！」

黄金鍊成が炸裂し、言葉通りに炎の巨人が砕けて消えるも即座に復活する。

魔女狩りの王は張り巡らされたルーンを起点に何度でも再生可能。天才たるアウレオルスは即座にこの仕組みに気付くも、ならばとルーンのカードを消し去ろうとすれば、今度は周囲の瓦礫が竜巻のように渦巻く。

「ぐっ……!?!」

「エスパ―舐めんな！ チート野郎！」

瓦礫を操るのは宇佐見。高速で渦巻く瓦礫や破片は人体程度ならば触れた途端にズタズタにするが、聖人の肉体を有するアウレオルスに効果は薄い。

そう見るやどこからか転送してきた巨大な“鉄塔”をそのまま投げ槍のように射出する。

「拳を不壊に、膂力を100倍に！」

そんな豪快な攻撃を鬱陶しげにアウレオルスは拳で殴り付けて受け止めた。しかし、その隙に魔女狩りの王が突撃してくる。

「ぐ、ぐおおおおお!!? 消え去れ！ 跡形も無く！」

炎に包まれながらもアウレオルスは叫ぶ。これにより魔女狩りの王はルーンのカードごと、瓦礫や鉄塔も綺麗さっぱり消失した。

「——やっぱり、追い詰められて判断力が鈍ってるみたいね」

霊夢はほくそ笑む。明らかにアウレオルスに余裕は無く、焦っていた。それ故に、黄金鍊成の詠唱もその場凌ぎのものとなっており、だんだん粗が見えてくる。

本来ならばこの場で上条以外の人物に死ねと命じれば、少なくとも一人か二人かは仕留めることが可能だというのに。

「ゼエ……ゼエ……治、れ……」

息を切らす。身体の半分に大火傷を負ったアウレオルスは苦痛に顔を歪め、これを治療する。

しかし、その命惜しさの判断が致命的な隙を晒した。

「行け！ 上条当麻！」

「なっ!?!」

上条に距離を詰められる。反撃しようとするアウレオルスだが、それよりも早く腕に軽く触れられてしまう。

突然の脱力感。聖人の肉体が解除され、元に戻った反動で一気に動きが鈍る。

「しまっ——」

拳が下顎を屠った。脳を思い切り揺さぶられ、アウレオルスは白目を剥きかける。

（負ける……？ 私……？）

過る敗北。抵抗しようにも鍊金術師である己に戦闘適性は無く、それを補う身体強化も霊装も幻想殺しに触れられた時点で無意味な代物と化している。

反撃しようと言葉を発しようにも今にも闇の彼方へ飛びそうなこの意識では、まともな思考すらも儘ならない。

故に、敗北は必至に思えた。

（――否）

脳裏に過つたのは、笑う少女の姿。その次に彼女が自分の手を握りながら涙を流す姿。

（否、否、否否否否……！）

それから次々と思ひ出していく。己が手を汚した数。目的の為に犠牲にした命の数。（ならぬ！ 絶対にならぬ！ ……ここで終わつては……終わつてしまつたら……私が殺してきた者共はどうなるっ！ 私がい捨ててしまった、奪つてしまつた者達はただの無駄死にはないかっ!?!）

報いなければならぬ。成さなければならぬ。

残された唯一の償い……それは単なるエゴなのかもしれない、本当は首を括つて大人しく死ぬべきなのかもしれないが、それこそただ自分が無為に命を奪つただけだと証明するようで、こうでもしなければ頭がおかしくなってしまう。

後悔に塗れた人生だった。世界の為に働くと言いつつ、たつた一人の少女に尽くし、しかし何もかもが水泡に消え、見返せば血に濡れた道。どうしようもなく、間違ってしまった、度し難い最悪な結末である。

彼はもう、気付いた時には引き返せないところまで来ていたのだ。

故に、妄執に取り憑かれた錬金術師は、在るかも分からぬ「幻想」に希望を見出だす。

「——せつ、だあ、ん……せ、よ……！」

最後の力を振り絞った、魂の叫び。それは確かに届き、世界は歪められた。

ザシュ!! と鮮血が飛び散る。

「があッ……ッ!？」

上条の右肘から先が、無くなっていた。

目を見開き、一同が絶望の表情に染まる。当然だ、唯一の打開策が破られてしまったのだから。

「——あッ」

しかし、霊夢だけが別の理由で焦る。

右手が切断された、その次に起こる事象を彼女は知っているが故に。

「ク、ククク……」

不気味な笑い声が、響いた。

竜王の顎

——
イマジンプレイカー
 “幻想殺し”。

上条当麻の右手に宿る、ありとあらゆる異能を打ち消す摩訶不思議な力のこと。

しかし、それが単に異能を打ち消すだけの能力ではないことを霊夢は知っていた。

今までで二度だけ、彼女はその力の片鱗を見た。それもどちらとも毛色が違う能力であり、表向きの無効化能力含めて最低でも三種類の力があるということである。

そして、今。そんな幻想殺しの隠された力のうち一つが、解き放たれた。

（——“竜”。けど二頭だけね）

先程とは明らかに違う雰囲気。気でも狂ったかのように哄笑しながら、上条当麻はアウレオルスへと歩み寄る。

ドラゴン
 その切断されたはずの断面から見えるのは、無色透明の硝子のような鱗に覆われた“竜”の首。錯覚でも何でもなく、それは現実が存在していた。

今回は竜の方だった。それも以前のように“七頭”ではなく一頭のみ。ならば比較的マシと言える。もう一つの方の“見えない透明なナニカ”は出来ることならば相手に

したくなかったためそれが出てこなかったのは幸いだった。

(どうにせよ、迂闊には動けない。巻き添えくらったらたまったものじゃないわ)

上条本人の意識はあるにはあるようだが、ハイになっただけの上で「あの力」は、制御下から離れてしまっている。ただ暴れ狂うだけの力は近づくモノ全てを敵と判断し、善悪関係なくあらゆるモノを貪り殺すだろう。

故に、霊夢はただ様子を伺っていた。

「……何なのだ、貴様は？」

アウレオルスは問う。その声は僅かに震えており、動揺が見て取れた。ステイルや宇佐見も突然の変化に茫然と立ち尽くしている。

「まさか右手をぶち切った程度で俺の幻想殺しを潰せると思ったんじゃねえだろうア？」

「悄然。何なのだと問うている」

冷や汗が止まらない。肩口から大樹の如く生える竜の首がこちらをギロリと睨む。あれが己が恐怖心から生み出してしまった単なる幻覚や妄想であることを祈りつつ、しかしいくら精神的に追い詰められたからといって、ここまで具体的なイメージを抱くはずがないということは分かっていた。

つまりあの竜は本物。危機から脱したかと思えば、より恐ろしい何かを呼び起こして

しまったとしても言うのか。

「依然……！　我が黄金鍊成は機能している……！」

自身を奮い立たせるかのようによび。理解が及ばぬ存在に、確かに恐怖しながらもアウレオルスの闘志は消えず、迎え撃つ。

——だが、すぐにその勇敢さが如何に愚かで無謀であるかを思い知らされる。

「どういふことだ、何故効かぬ……ッ！」

信じられぬ光景に目を見開く。アウレオルスは確かに黄金鍊成を発動した。寸分の狂いもなく。

しかし、そうして放たれた魔弾も、頭上から落とされたギロチンも、感電死、窒息死、圧死といった思い付く限りのあらゆる殺害方法も、その全てを真つ向から受けているにも拘わらず、平然と佇むその姿には傷一つ存在しない。

黄金鍊成が、鍊金術の最高峰が、世界を思うがままにする大いなる術が、目の前の存在には通用していなかった。

（まさか無効化している？　右腕を切断しても尚、幻想殺しは機能しているということか？　否、それだけでない。明らかに範囲が広がっている……これが奴の真の力とでも言うのか……！）

触れもせず打ち消す。無敵かと思われた黄金鍊成の天敵に等しい存在。そして、今の

上条当麻を見て「馬鹿げている」、と思つてしまった己の想像力ではもはや彼を殺すことをイメージ出来なだろう。

憔悴しながらもそう分析し、アウレオルスは針を首に突き刺し、次なる一手を打つ。

「ならば……浮けッ！」

すると周囲の瓦礫が浮き上がる。

「一齐に射出せよ！」

着実に距離を詰めている上条に焦りを感じ、必死な形相でアウレオルスは叫ぶ。今しがた佐佐見董子と戦つていなければ思い付きもしなかつただろう。

そして、多量の瓦礫が上条へと降り注ぐ。

「へえ……考えたわね」

これに霊夢は感心する。浮かせて飛ばす、までは魔術であるが、元からある物質は消し去ることは出来ず、そして発生したエネルギーもそのままである。

しかし、今の上条の能力は、無効化が全てではなく、上述した通り全く毛色が違うものだ。

轟!!

叩き落とすかのように竜の首が振るわれ、押し潰さんと迫っていた瓦礫群は一つ残らず、消し飛ばされる。

「ツ……フ、フハハハハハハ！　今、防いだなツ！　そうだ、そうだともツ！　貴様も無敵などではないということだツ！」

そんな光景を目撃してもアウレオルスは絶望することなく、むしろ高笑いする。効果が無かったとはいえ今までのように問答無用で無効化される訳ではなかった。

抜け道がある。そう理解したからには、やり様はいくらでもある。

「……意外ね。もつと動揺するかと思つてたんだけど」

そんな光景を見て、霊夢はアウレオルスの評価を上方修正する。彼は明らかに上条当麻という存在に対して恐怖心を抱いているにも拘わらず決して退かず、ありとあらゆる可能性に賭けて抗い続けていた。

その心折れぬ精神力は凄まじく、何が彼を駆り立てるのかと思わずにはいられない。「それとも、とつくに折れてるのかしら」

何となくだが、そう思う。だとすれば彼は死ぬまで止まることはないだろう。

壊れた人間に、タガなど存在するはずがないのだから――。

「――銃をこちらへ転送せよ」

アウレオルスの周囲に出現する無数の銃口。それは今までのような魔術的な武装ではなく、警備員やどこかの軍隊の武器庫から転送したもの。黄金鍊成で生み出したものではないが故に、異能でも何でもない、ただの兵器だ。

この時、アウレオルスは己の魔術師としてのプライドの一切合切をかなぐり捨てた。「弾倉を常に転送・装填し続け、一斉射撃を開始せよ」

無数の鉛弾が、現代兵器の暴力が上条を襲う。普段の上条ならば一瞬で蜂の巣にされるが、今の上条は幻想の頂点たる「竜」であり、純粹な暴力の化身。当然とばかりに有効打にはならず、しかし確実に彼の進行を妨害していた。

「更にダイナマイトを転送。点火し、連鎖的に爆破を繰り返せ」
すると上条の頭上に幾つものダイナマイトが出現し、爆発する。

それだけでは終わらず、更にもう一度、爆発する度にダイナマイトがどんどん追加されていき、幾重の連続爆破でビル全体が揺れた。

「無茶苦茶な……！」

爆風に顔を手で覆いながら、ステイルが思わず呟く。霊夢もまた、驚いていた。術者本人の精神が安定さえしていれば、「竜」の力を解き放った幻想殺しを相手にこうも戦えるとは。

黄金鍊成。改めて出鱈目な力である。

「——先の動作を永続せよ」

尚も爆発は続く。個人に向けられるには明らかなオーバーキルであるが、アウレオルスは確実に殺す為にダイナマイトの転送と起爆を止めず、ビルはまるで大地震でも起

こっぺているかのようによれ続ける。

いくらあの竜が無敵に等しい強さであろうと、本体である上条ごと消し飛ばしてしまえば……。

「ッ!?!」

そう思っていた次の瞬間。爆炎の中から竜の顎アキトが大きく開いて飛び出す。

「——離れよっ!」

咄嗟に叫ぶ。対象は上条ではなく、自分自身。吹っ飛ばされるようにアウレオルスは後退する。

「があっ……!?!」

しかし、僅かに遅れ、片腕を噛みちぎられてしまう。

「ク、ククク……ハハハハハ……!」

爆煙の中から現れた上条は相も変わらず狂ったように笑っていた。その身体は多少ボロボロではあるものの、未だに健在だった。

——化け物。

身震いする程に恐ろしい。アウレオルスには、もはや目の前の少年が同じ人間には見えていなかった。

「ぐう……おのれ貴様……ッ!」

腹立たしげに睨む。ちぎれた腕は黄金鍊成で即座に治療し、元通りになるものの痛みは継続していた。

上条への恐怖からか、幻想殺しの効力が働いているのか、黄金鍊成が上手く機能しておらず、半端な結果になるようだ。

（だが、奴は着実にダメージを負っている。このまま消耗させるか、それとも早期に決着を……む？）

そこでアウレオルスはあることに気付く。

「貴様、もしかや暴走しているのか？」

思わず呟いた問いに、上条は答えない。相も変わらず不気味に笑うのみ。その有り様はおおよそ理性があるようには感じられず、力に振り回されているように見えた。

それを見てアウレオルスは上条当麻が実のところ竜の力を制御出来ておらず、暴走状態にあると推測する。

（——まずいわね）

気付かれた、霊夢は内心舌打ちする。如何に強力な力といえど、制御下に置いていない、単に暴れるだけの力など付け入る隙はいくらでもあった。特にアウレオルスのような強者ならば。

だからこそ、さっさと倒してほしかったのだが、こればかりはアウレオルスが冷静

さを取り戻すのが早過ぎた。

それでもアウレオールの勝率は低いが、このままずっと竜の力を解放していれば、上条の身が危うい。ただの人間が長時間使用し続けられるような力ではないのだ。

「……厳然。どうやら単に魔術を殺す力ではない、相当危険な力を秘めているようだ。尚更ここで始末する必要がある。『ソレ』が禁書目録^{インデックス}へ牙を剥く可能性がなきにしもあらず——」

最悪この場から逃亡して一からやり直すという身も蓋も無い作戦も考えていたが、上条の暴走がいつまで続くか分からず、もしも一生暴走し続けるなんてことがあれば、この街に居る禁書目録にまで危害が及ぶ可能性がある。

故に、放逐する訳には行かない。ある意味では、アウレオールは逃げ場を失った。勝利か敗北の二択しか選べなくなつた訳であり、前者以外を選ぶ理由などあるはずがなかった。

「禁書目録の守り手は博麗霊夢一人でも充分。そして、我が大願が果たされればそれすらも不要」

僅かに顔をしかめ、しかし悠然と言い放つ。理不尽に記憶を奪われていた教え子が、やっと一生覚えていられるパートナーを殺すことに何の後ろめさも心苦しさも無いと言えば嘘になる。

けれど、それでも、彼は自らの目的を邪魔する者には容赦しない。それこそ、たとえ禁書目録が相手だったとしても――。

そう、決めたのだ。あの話を聞いた時から。

「悪いけど、別に守り手になつたつもりはないわよ」

――夢想封印――

次の瞬間。光弾の豪雨が、横合いから降り注ぐ。

「ッ!? まだ邪魔立てするか――跳ね返せッ!」

見上げれば上空には霊夢が居た。不意打ちにも拘わらずアウレオルスは即座に対応する。元より霊夢らが介入してくることを考慮していないはずがなかった。

「――動くな」

そして、跳ね返ってくる光弾を避けようとする霊夢の動きを封じる。

「ぐっ……」

完全に硬直した霊夢。今までのように黄金鍊成を無理矢理解除しようもするも指一本すらも動かせず、そのまま光弾が炸裂し、撃墜された。

「ッ……自分の攻撃をくらったのは初めてよ」

頭から床に叩き付けられながらも霊夢は即座に立ち上がってアウレオルスへと駆ける。

「——地に伏せよ」

しかし、眼前まで迫り、大幣を振り下ろさんとしたところでアウレオールの黄金鍊成が間に合い、不可視の力によって地面に這いつくばる。

「ちっ——」

「愚かな……今更貴様風情が出てきてどうなる。貴様に黄金鍊成が通じなかったのは、単に私が貴様を計りかねていたからに過ぎぬ。未だに不完全な貴様など恐るるに足らない」

「……さつきから、随分と知った風な口を利くじゃない」

「当然。充分に調べた。貴様が記憶喪失などでなければ、私は吸血殺しを頼る必要など無かったのだがな」

「ああん……？」

何かしら知っているのだろうとは思っていた。『幻想に生きる巫女』と、己の事を知った風と呼んだ時点で。幻想猛獣、あの辻斬りに加えてこれと、こうも具体的な手掛かりが連続すれば期待するなと言う方が無理があるだろう。

だからこそ、結び付かない。その言い分だと霊夢の代わりに吸血殺しを利用しようとしているということ。しかし、両者に関係性など全く無く、どういう意図があるというのか。

吸血殺しを利用するであれば、呼び餌に「吸血鬼」を誘き寄せようとしているのだと思っただが……。

「あまねく秘匿を破り、世の歪みを正す。そうして真実は暴かれ、「幻想」は舞い戻る。楽園への道と共に」

「——はっ？」

唐突に囁いた言葉。それに疑問に苛まれた霊夢の思考は停止し、目を見開く。

それは彼女にとつて、あまりにも核心に触れ過ぎていた。

「依然。やはり何も知らぬか。言っただであらう、よりにもよつて貴様かと」
つまらなそうに言い捨て、アウレオルスは己の首筋に針を突き立てる。

「終わりだ、幻想に生きる巫女よ。いずれ来たりし「楽園」の為の、犠牲となるがいい」
死刑宣告にも等しい言葉。そこで思考を引き戻された霊夢は顔をしかめ、しかし次の瞬間にはにやりと笑みを浮かべる。

それは諦めか？ 否。

「はっ どういうことか知らないけど、良いの？ 私にばっかり構つてて」

「何？ ——ッ!!」

ハツとして視線を向ければ、上条が、竜が、すぐそこまで迫っていた。

慌てて後退しようとするアウレオルス。しかし、それよりも早く何かがその足首に絡

み付き、躓いてしまう。

「何ッ!?!」

それは床に張り巡らされた札と札が繋がって作られた紐。続いて別の紐が針を突き立てようとする腕を縛り、拘束する。

誰によるものかは明白だった。アウレオルスは腹立たしげに霊夢を睨み付ける。

「きさ、まア……!」

いつ仕掛けられたのか。タイミングを考えれば先程こちらへ近付いた時。初めからこのつもりだったのだ。

そうこうしている内に、上条は目と鼻の先まで辿り着き、こちらを見据える。

「――」

アウレオルスは顔を青ざめさせ、そしてすぐに怒りを露にし、口を歪める。

「何故だッ!?! 何故よりも! よりもよつて貴様達なのだッ!?! 貴様達こそ、本当に待ち侘びているはず――」

慟哭にも似た叫び。それは心の底から出たものであるが、説明を放棄した己が自業により、その意味を理解出来る者はこの場に居らず、ただ殺意に満ちた凍てついた眼光が貫く。

「ひいひい……ッ!?!」

「ふう……間一髪ね」

竜の顎が虚空を喰らう。地面に転がり、口から泡を噴いて気絶するアウレオルスを見下ろしながら霊夢はホッと胸を撫で下ろす。

寸前で黄金鍊成は解除された。上条への恐怖心がピークに達し、精神が不安定になっ

たからだろう。動けるようになった霊夢は即座にアウレオルスを殴り飛ばした。

あのまま竜に噛み付かれていれば、どうなっていたか分かったものではない。仮に生存していたとしても致命的な後遺症が残っていたかもしれない。

それは困る。霊夢にとつてアウレオルスは貴重な情報源であるし、何よりも上条の手を汚すのは忍びなかった。

「ちよつ——レイムっち?！」

宇佐見の悲鳴に近い叫びが響く。上条の肩口から生える竜の首は尚も暴れ狂つており、標的を霊夢に変えて彼女へ襲い掛かっていた。

「——お座り」

——陰陽鬼神玉——

しかし、次の瞬間。頭上から降下してきた巨大な「陰陽玉」が竜の頭を床へと叩き伏せ、押し潰す。

ぎやあぎやあと雄叫びをあげて竜は跳くが、陰陽玉はその度に力を増し、ひび割れて砕かれそうになつても即座に修復されて元通りになつていく。

この陰陽鬼神玉の肝は遠隔から供給される霊夢自身の魔力。故に、幻想殺しの作用でいくら破壊されようとも霊夢が魔力を供給している限りは半永久的に修復することが可能。

つまり竜がこれを打ち破るには、霊夢の魔力切れを待つしかなかった。

「さてと……当麻。まだ意識があるのなら、さっさと返事をしなさい」

そんな竜を横目に霊夢は上条へと近付き、何ということはないかのように呼び掛ける。

「博、麗……?」

「もう大丈夫よ。そいつは気絶してる」

あれだけ笑っていた上条はこちらへ顔を覗かせる霊夢を見るなり正気を取り戻した様子だった。そして、促された方角を一瞥すればアウレオルスが間抜け面を晒して倒れ伏している。

「……そう、か。よかつ——」

ホツと胸を撫で下ろし、そのまま上条はフラリと倒れ込み、霊夢はそれを身体で受け止める。

竜の姿も霧散するように消え、視線を落とせば確かに切断されていたはずの右手が、まるで蜥蜴の尻尾のように新しく生えていた。

終わった、ということだろう。

「——董子」

「え? あつ、はい。な、何でしょう?」

唐突に呼び掛けられ、呆然としていた宇佐見は思わず敬語で反応してしまう。

「こいつの看病よろしく。あんた、治癒系統の能力も使えたでしょ確か」

「ま、まあ一応一通りは……と、というかレイムっち。その、上条さんって人間ですよ？ 実は宇宙人か何かだったり……」

「……少なくともこいつは人間よ。真正正銘ね」

普通の人間はドラゴン召喚したり切断された腕が生えてきたりしないと思うのだけど……と、疑問に思いながらも宇佐見は床に寝かされた上条へと駆け寄り体調を見る。

幸いにも命の別状は無かった。意識を失ったのは疲労と失血による貧血だろう。

「……終わった、のか？」

一方、ステイルは未だにあれだけの激戦が漸く終わったのだという実感が薄かった。

しかし、倒れている哀れな男が先程までの戦いが終結し、我々の勝利であることを証明していた。

アウレオルスライザードは敗北した。死んでおらず、気絶しているだけですぐにでも息の根を止めるべきであるが、どうにもそんな気分にはなれなかった。

同情だろうか。自分と同じように大切な人を救えなかった側の存在で、それでも何かを成そうとしていた男に対して何も思うところがないと言えば嘘になる。

(しかし、あの竜……差し詰め「ドラゴンズノ顎」と云ったところか。単に魔術を打ち消すだ

けの力かと思えば、もつと恐ろしいナニカを隠し持っていたなんてね)

得体の知れない奴だと、ステイルは上条当麻への警戒度を引き上げる。

味方であれば心強い……とも言えない。博麗霊夢と違い、制御不能な力というのは敵味方どちらに居ても厄介極まりなかった。

(神裂には伝えておこう。最大主教や他の連中に教えてやる義理は無い)

アウレオルスが漏らした幻想殺しの情報。恐らくあの女狐もイギリス清教上層部も、まだまだ隠していることがあるようだ。

つくづく己が無知であると思ひ知らされる。

「博麗霊夢。無事かい?」

上条と並んで最大の功労者に問う。見た目は満身創痍。あの自動書記ヨハネのペンとの戦いでも傷一つ負わなかった彼女が、だ。それだけで今回の相手が如何に恐ろしく脅威的な存在だったかが窺える。

「ええ。何とかね」

「流石の君も、黄金鍊成はきつかったみたいだね」

「……そうね。認めたくはないけど、死にかけた。もう二度と戦いたくないわ」

素直に霊夢はそう言う。今回勝てた要因は黄金鍊成の術者がアウレオルスだったから。その一言に尽きる。

もしも彼が冷静沈着で、より残忍な発想が出来るような人間だった場合、今頃霊夢らは物言わぬ肉塊と化していただろう。

「さて、と……あんたはどうすんの？ 一緒に来てくれると助かるんだけど」

すると霊夢は遠くで黙ってこちらを見ていた姫神へと問い掛ける。

「……アウレオルス」

姫神は見据えるのは倒れる錬金術師。多くの人々を助ける、世界を善くする為に吸血鬼に会う必要があると、自分を必要としてくれた存在。

ただ姫神が救いたかったのは、彼が救おうとしている多くの人々ではなく、まるで何かに追われるように、誰よりも手を汚すことを嫌いながら手を汚してまで望みを果たそうとしているアウレオルス自身だった。

そんな彼が敗北したことで理解した。己は結局、「魔法使い」にはなれなかったのだと。

「一応死んではないわよ。そんなに気になる？ まあ、話を聞くにあんたにとってはそのいつは悪い奴じゃなかったみたいだけど……」

「……彼は怖い人間だった。目的の為なら手段を選ばない。でも優しい人間だった。あの人達と。私が殺してしまった吸血鬼の人達と同じ」

「へえ……やっぱり会ったことあるのね、吸血鬼に」

アウレオルスの間人性などはどうでも良く、霊夢の興味はそこにあった。吸血殺しと呼ばれている以上、前例があるはず。つまりは吸血鬼と実際に会ったことがあるということ。

予想通り、姫神は出会っていたのだ。吸血鬼と、魔術師すら實在に懐疑的な、
“の側の存在と——。 ” 幻想

「どんな奴だった？　吸血鬼は」

「……変わらない」

「え？」

「吸血鬼は。普通の人間と変わらない」

「——」
姫神はそう言った。しかし、それは霊夢にとって耳を疑う一言だった。

「笑ったり泣いたり出来る。私達とんなら変わりのない人達……それが吸血鬼と呼ばれている人達。映画や漫画のような怪物ではない」

「……違う」

思わず口にする。視線を向ければ霊夢は俯いており、その表情や心情は姫神には窺えなかったが、ただ自分の返答が彼女にとって望むものではなかったことは察せられた。

「私の知る吸血鬼は、怪物よ。血を吸い、身体を自在に変化させ、そこらの妖怪よりもずっと強い。傲慢で、我が儘で気分屋で子供っぽくて、見栄っ張りで憎たらしい奴——」
消え入りそうな、泣きそうな声。姫神は何か聞き取るも、彼女の言い分は否定よりも願望のような気がした。

ただ、本当に彼女は知っているのだろう。姫神が会った普通の人間と何ら変わらない吸血鬼とは違う、お伽噺に登場するような吸血鬼を。それも特定の個人だ。

「……それは。知り合い？」

「さあ、ね……今や名前すら思い出せない。あんたの言う通り本質は人間と変わらないのかもしれないわね、あいつも」

寂しそう、だと思った。この時の彼女は先程までの圧倒的な強者だとは思えない程に、弱く見えた。

彼女は一体、『吸血鬼』という存在に対してどんな希望を見出だしていたのだろうか。

「……とりあえず私の用は済んだ。後の処遇はそいつに任せるわ。ま、あんまりにも悪い扱いするってんなら止めさせるから安心なさい」

「……うん。分かった」

ステイルを指差しながらそう言い、霊夢は倒れ伏すアウレオルスの方へと向かう。

疑念

「もしかして彼の身体ってファンタジー？」

「知らないわよ」

興味深そうに問い詰めてくるカエル顔の医者をばつさりと切り捨てつつ、霊夢はベッドの上で眠る上条を見下ろす。

これまでの例から特に後遺症は無いことは分かっていたが、念のため病院まで運んだ。容態としては擦り傷等の軽傷のみで今は貧血と疲労により意識を失っているが、明日にでも目を覚まして退院出来るだろう。

(とりあえずあの「竜」に関しては口裏合わせて幻覚ってことにしておいたけど……)

上条当麻のもう一つの力……ドラゴンストライク竜王の顎についてステイルと宇佐見に説明を求められた霊夢だったが、彼女も以前に見たことがあるというだけであり、とうの上条本人もよく分かっているいなかった様子なのでお手上げである。

ただ分かっているのは、あれが右手が切断・破壊された場合に発生すること。竜とはまた違う姿で現れる場合もあり、それが別々の能力なのかはたまた同一のものなのかは

不明。

そして、上条当麻はこれを制御出来ていないということ。そのため記憶喪失の彼に下手に教えるのはどうかと思い、ステイルらには上条が竜王の顎の事を自覚していないという体で説明し、あれがアウレオールの誇大妄想により黄金鍊成が暴走し、生み出された幻覚ということにしようとして提案した。

あれ程の力がまだほんの片鱗に過ぎないことにステイルは驚愕すると共に恐れを抱き、もしこの事が知られて禁書目録目当てでなく、上条も狙ってやって来る魔術師が出てくるかもしれない可能性を考え、この提案に頷く。

霊夢としては望ましい結果だ。ただでさえ上条当麻という男は巻き込まれ体質でこの街の特質もあつて意図的にも偶発的にもトラブルに巻き込まれやすいのだ。これ以上面倒事を起こされては堪ったものではない。

「ところで君の方は大丈夫なのかい？ 僕としては短期間でも良いから入院してほしいんだがね？」

「別に平気よ。ちよつと感電しただけだから」

「生きてるのも不思議だし動いているのも不思議だよ？ 君もファンタジーな身体をしてるみたいだね？」

「ええ。そうよ」

「あつさり肯定するね？」

強がりでも何でもなく、本当のことだ。先の戦闘で決して少なくはないダメージを負ったが、入院するまでもなく、一週間……否、三日もあれば全快出来る程度である。

(それにしても……アウレオルスの奴、一体何を企んでいたのかしら)

結論として、あの後アウレオルスを搜索したが、見つからなかった。

殺されたのかもしれないし、連れ去られたのかもしれない。あの有り様を見れば、前者の方が可能性は高く、現にステイルも錬金術師アウレオルスⅡイザードは死亡したと判断し、上司にそう報告した。

だとすれば下手人の目的として有力なのは口封じ。アウレオルスが何らかの情報を漏らすことを嫌った、ということだろうか。

どちらにせよ、霊夢は貴重な情報源を目の前でみすみす失う羽目になった。

姫神の証言によれば、アウレオルスには他に協力者が居たらしい。実際に見た訳でないが、時折彼が連絡を取っているのを見たことがあるそうだ。

あの高出力の“レーザー光線”のような攻撃を放った下手人はその人物の可能性が高く、遙か上空からアウレオルスを狙い撃ちし、ビルを貫通して地下の岩盤まで届く程の魔術を使ったことから複数人、或いは余程高位の実力を有する魔術師だと見てイギリス清教は捜査している。

尚、アウレオルスの計画について尋ねたが、詳細までは教えてもらっておらず、ただ吸血鬼を「呼び水」に何か別のモノを呼び寄せようとしていたのだという。それが女神や自分がかつて救えなかった人物……恐らく禁書目録の事だろう。そんな救われるべき人間でありながら救われぬ悲劇に見舞われた者達やその他大勢の人々を救うことに繋がる時、アウレオルスは本気で語っていたとのこと。

因みに女神の処遇についてだが、今まで通り学園都市に留まることになった。吸血殺しに関しては特殊な霊装で抑えることが出来るらしく、イギリス清教も脅威だとは思わなかったようで特に拘束することはせず、女神自身もその霊装を譲り受けることで納得したようだ。

——— どうだろうか。

霊夢は考える。アウレオルスの嘯いた「楽園」というのが、やろうとしていた事が、霊夢の想像するものだったとして、それが人々の救済に繋がるかと言えば疑問に思わざるを得ない。

更に先の計画があつたのか。それとも「楽園」というのは、己が知るそれとは全く関係無かつたのか。

いくら考察しようとも、アウレオルスが生きていなければ、答えを知る術はもはや無いだろう。

(……探そうにも、手掛かりは無し。ネセサリウスにも期待できそうにないし、どん詰まりね)

協力者、そうでないにしても何らかの情報を持つているかと思われる人物。あの「レーザー」は恐らく幻想猛獣が放つたものと同じ。恐らくと曖昧な表現を用いているのはあの時感じた既視感や懐かしさが無く、かといってアレのような紛い物とも言い切れない、どこか不透明な違和感があったから。それが何かは霊夢にも分ならず、喉元に小骨がつかえるような妙な感覚が気持ち悪かった。

具体的な解決案としては、そいつを見つけ出して捕まえるのが一番手っ取り早いですが、霊夢が上空を確認した時には既にそこには誰もおらず、姿を捉えることさえ叶わなかった。

故に、行き詰まる。霊夢として出来ることは何も無く、歯噛みすることしか出来ない。「……機嫌が良さそうだね?」

「あん? どこがよ?」

するとカエル顔の医者突然そんなことを言い出す。明らかに苛立っている霊夢にかけるには相応しくない言葉であり、露骨に顔をしかめる。

「少なくとも前に見た時の君は何もかもを諦めていたように見えたからね? ここ最近はどうでもないようだが、何か心境の変化があったね?」

「……………」

そうだろうか、そうかもしれない。カエル顔の医者とは短くはない付き合いだが、特に親しい訳でもない。しかし、どうやら彼は霊夢のことを思っていたよりも見てくれており、その心情を読み取っていたようである。

確かに今の霊夢は半ば自暴自棄だった以前と比べれば希望を見出だしている。それもこれも、今まで否定され続けたのが嘘のように、彼女の魂に刻まれた朧気な「記憶」を補強するような、確信させるような事象ばかりが起きるからだ。

そうして幾度も裏切られてきた。期待外れな情報に踊らされ、嫌喜びさせられた。けれど、きつと、今度こそ……そう思わずにはいられない。

霊夢が目指す先は、その先にしかなく、だからこそ渴望し続けるのだ。

「おーい、レイムっちゅー」

上条のことをカエル顔の医者任せ、病室を後にした霊夢。帰路に就く為に廊下を歩いてみると背後から宇佐見が話し掛けてくる。

「……………あいつとの話は終わったの?」

「うん、今さつきねー。とりあえず色々口止めされちゃったわー」

草臥れた様子でぼやく宇佐見。あいつというのはステイルのこと。科学サイドでありながら魔術師絡みの事件に巻き込まれ、共闘までしたことは問題視されるものの彼女

の存在無しではアウレオルス相手に勝利出来たかと言えば怪しく、ステイルとしても一時的とはいえ共闘した間柄の者を処断するのは気が引けた。

しかし、ただ放免する訳には行かず、同僚と相談した結果、魔術については他言無用とし、科学側の協力者として活用するという事で落ち着いた。

加えて、霊夢と違い、彼女は純然たる能力者であり、また相応の立場があった。それこそ一端の魔術師程度ならば倒してしまってもおかしくはない程の。

「そう。ま、これに懲りたら厄介事に関わるのは止めることね。でない、いつか本当に痛い目を見るわよ？」

「はい善処します。でも怪我の功名って奴ね。あのイギリス清教ともコンタクトを取ることが出来るなんて、むしろラッキーかも」

「ハア……相変わらずね、あんたは」

忠告するも全く懲りていない様子目の前のお惚け少女に霊夢は辟易する。

宇佐見董子。自分と同じ「原石」である彼女は超能力者のくせにオカルトマニアな上に好奇心旺盛・怖いもの知らずという迷惑極まりない質であり、おまけに半端に強いため上条程ではないが、騒ぎを起こしたりどこからか厄介事を持ち込んでくるが多かった。

ここ最近では鳴りを潜めていたが、まさか今回の事件に参戦してくるとは。つくづく霊

夢はトラブルメーカー共と縁がある。

「それにしても、いつの間にイギリス清教の魔術師と仲良しこよしになっちゃったのよレイムっち？　流星はこの私が見込んで秘封倶楽部のメンバーに任命しただけはあ
るわね」

「別に仲良くしてるつもりはないし、そのなんたら倶楽部つてのに加入した覚えもない
んだけど？」

知らない内に怪しいオカルトサークルのメンバーに加えられていることに霊夢は顔
をしかめる。科学サイドの宇佐見が何故か魔術師について知っている理由はどうでも
良かった。恐らく『教授』辺りに聞いたのだろう。

「カミジョーっちの方も随分と面白い事に巻き込まれてるみたいね？　私の知らないと
ころでよろしくやっちゃって羨ましいことこの上ないわ」

「……何が言いたいの？」

「いやあ、ちよつと私も交せてくれないかなーって……駄目？」

「嫌よ。あんたなんか関わったら、余計に面倒になる。デメリツトしかないじゃない」
「わーお辛辣」

ケラケラと笑い、肩を竦める宇佐見。そう言われることは分かっていたようだ。

対する霊夢もこれで宇佐見が止まる訳が無いことは分かり切っているので目を鋭く

させ、釘を刺すように言葉を紡ぐ。

「どうせ好きなようにやるんでしょ？　なら、私の知らないところで勝手にちようだい。また面倒事を起こすってんなら……分かるわよね？」

「はいはい分かっています。もうー、おっかないんだから」

じろりと睨まれ、顔を反らしながらも宇佐見はそう言い、そそくさと立ち去って行く。

そんな後ろ姿を霊夢は見据え、鼻を鳴らすと彼女もまた反対の方角へ向かい、この場を後にするのだった。

予想外の収穫だった。

病院の廊下を進みながら宇佐見は鼻歌交じりにほくそ笑む。

（ほんの好奇心で三沢塾に乗り込んだ訳だけ……この街で魔術師と出会えるなんてね。死にかけたけど、イギリス清教なんて一大勢力とパイプ……とまでは行かないけど関わりを持つことが出来た。これでもういちいち知らないフリをする必要も無くなっただってことね）

科学と魔術の摩擦。そんなものは彼女にとって至極どうでもいい事柄であるが、かといつて下手に動いて不可侵条約とやらを破ってしまった際のリスクについては深く理解している。

かつて、己が迂闊さにより痛い目を見た彼女はその時と違ってある程度は慎重になっており、故に今回の件でイギリス清教必要悪の教会の協力者という立ち位置になれたのは僥倖だった。

（お蔭様で私の計画も一段階進められる。上条さんの右手についてはネックだけど、逆に利用することも出来そうだしまあ良いか）

宇佐見にとって上条当麻は最大の障害と言える。理由は右手に宿る幻想殺しにあるが、単なる無効化能力の他にあんなものまで秘められているとは思ってもよらず、警戒度を引き上げた。

しかし、同時に惹かれるものがあった。事もあろうにそれが“ドラゴン”であったことも拍車を掛け、利用しない手は無いかと思考を巡らせる。

霊夢が想像に反し、彼女はただ好奇心のままに好き勝手動き、自らの欲求を満たしている訳ではなく、確固たる目的があった。

(けどあのステイルって奴、意外と鋭かったわね)

宇佐見は思い返す。己の処遇が決まり、今後の方針についての話し合いも終わった後、あの見た目に反して自分よりも年下らしい少年神父は唐突に問い掛けてきた。

『君があの時使用した能力……自己幻像ドッベルゲンガだったかい？ あれはどちらかと言えば僕達の使う魔術に似ているような気がしたんだが……』

肝が冷えた。尤も、似てる部分ごく一部で正確なプロセスは微妙に違うため知らぬフリをして誤魔化すことである場は取り繕うことが出来た。

しかし、今後は彼らの前で“自己幻像”を使用することは控えた方が良いだろう。ステイルの推測の通りあれば超能力よりも魔術に近い。

霊夢は“教授”に釘を刺されて尚、その辺に無頓着であったが、宇佐見はそれが如何

にまずいことであるかは理解していた。

(自重するつもりは無いけどねー)

この学園都市に来てからある程度は緩和されたとはいえ元より宇佐見は超能力者が故の全能感により他者を見下し、己を特別視する傲慢な性格。そんな人間が何かに縛られたり抑圧されたりするのを蛇蝎の如く嫌うのは当然だった。

だからこそ、彼女は止まらない。

(科学サイドと魔術サイド……:そんなくだらぬ線引きで争つてる連中にいずれ、そう遠くない内に見せてあげるわ。一片の混じり気も無い、本物の非常識^{オカルト}って奴をね)

思い描く企て。それを知る者が知れば、口を揃えてこう言うだろう。

——結局、宇佐見董子はどこまでも宇佐見董子なのだ。

たとえ覚えていなくなろうと、生き方が変わろうと、きっかけや動機が別物であろうと、彼女がやることは変わりはない。

時は少し遡り、昨晩のこと。霊夢らが上条を病院へと運んでいるのと同時刻。学園都市某所にて一棟のビルが倒壊した。

「……斬り損ねた」

暗く、外灯のみが照らす路地。まるで爆破解体でも行われたように崩れ落ちるビルの中から出てきた少女はフラフラと覚束ない足取りで歩みを進める。

その身はボロボロで片腹は赤黒く滲んでおり、ポタポタと滴る血が道路に血痕を作っていく。本来なら絹のように白い頭髮も、土埃等でくすんでしまっていた。

「傷が深い……どこかで治療しなく、ちゃ……」

長い死合だった。こうも長引くとは互いに予想外であり、挙げ句に両者決着が付かず

に撤退するという不本意な終わり方であった。

納得は行かないが、あのまま増援を呼ばれた状態で戦闘を続けようものならまず間違いないく負けていた。もつと早く本気を出していれば戦況は変わったかもしれないが、今更どう言ったところで仕方あるまい。

戦闘中に尻尾を巻いて逃げるのはこれで二度目。屈辱を味わいながらも、少女は次こそあの白い羽の男を斬ると誓う。

しかし、その前にどこか潜伏場所を探さなくては。傷の治療もそうだが、このままではすぐに追手が来る。

「ッ……………」

そんな少女の意思とは裏腹に次第に視界はぼやけていき、意識が薄れて行く。

元より無理をして戦ってきたのだ。先日の紅白巫女に続いて今回の戦闘で存分に力を振るってしまった今、彼女は既に限界に近かった。

(不覚……………こんな、ところで……………)

ばたり、と倒れる。

そのまま少女の意識は途絶えた。

「えっ人が…………!?　だ、大丈夫ですかっ!?」

暫くして。それを見つけたのが追手ではなく、全く無関係な女子中学生だったのは、

実に奇妙な偶然だった。

妖夢

カルト宗教によるテロ事件。

アウレオルス・イザードが三沢塾においてもたらした被害は、表向きにはそういう事になった。

通常なら誰に知られることもなく、秘密裏に処理されるはずだったが、霊夢が結界を破壊したことで死体を目撃した生徒達がパニックになり、その内の何人かが警備員に通報。加えて、高層ビルの一部が破壊されるなど、もはや隠蔽し切れる被害ではなく、それでも必要悪の教会側と学園都市上層部で事後処理と隠蔽工作に駆け回り、些か無理があるもののそのようなカバー・ストーリーでどうにか収拾が付く。

事件を解決したのは事前に情報を得ていた学園都市の対テロの特殊部隊ということになり、現場に駆け付けた警備員の中には疑問に思う者も居たが、いくら異議を唱えようと学園都市上層部の意向には逆らえない。

そして、これに一役買ったのが……。

「サボっているのかと思ったら、テロリストを鎮圧してるって……どういふことなのよ」

「そんなの私が知りたいわ」

支部にて。呆れ果てる固法に対し、うんざりした様子で霊夢はソファアームに座って頬杖を突いている。

こうなった理由は辻褄合わせ。霊夢としては自分の名前など出してほしくなかったのだが、生徒達の中に彼女の姿を目撃している者が居るのと、結果的にこうも騒ぎが大きくなったのは霊夢が後の事を考えずに結界を破壊したからであり、それくらいは我慢しろとスタイルに半ば無理矢理押し付けられてしまった。

サボり扱いで叱られることはなかったが、これはこれで面倒臭い。たった一日で人知れずテロリストと戦っていたという少々無理がある設定を誰も疑わないのはひとえにあの博麗霊夢なら不思議ではない、という認識があるからである。

「まったく……せめて連絡くらいはしなさい。丸一日音信不通でみんな心配していたのよ？」 初めは怒ってた白井さんもだんだんオロオロし始めて気が気じゃないって様子だったし」

「ふうん……で、他の面子はどこに居るの？」

初春はともかく白井もかと意外に思いつつ、霊夢は問う。自分が来た時には既に二人の姿は無かった。

「外回りよ。それから初春さんの学校に転校した子の引っ越しの手伝いをやってるって

さ。暫くしたら戻ってくると思うけど」

「引越し? ……ああ、そういや転校生がどうのつて涙子が言ってたわね」

確か春上衿衣……という名前だったか。ファミレスでの会話を思い出す霊夢。まだ会ったことはないが、どうやら錬金術師と戦っている間に白井らとも交流を深めているらしい。

「あら、博麗さんも知っていたのね」

「ええ。名前だけだけど。今晚、そいつを交えてお祭りに行くつて約束しているからそこで初顔合わせね」

「お祭り? 花火大会のこと? そういえば今夜だったわね……でも」

固法が難しい顔をする。

「博麗さん……実は急遽警備員から捜査への協力要請があつて、それに参加してほしいのだけど……」

「え? どういうことよ?」

「どうやら第十二学区の方でスキルアウト達による“複数の学校への襲撃予告”があつたらしくて念のため周辺を警備することになったの。本来なら警備員の管轄なんだけど今色んな事件が立て続けに起きて人手不足だから風紀委員からも人員が欲しいつてこつちにも話が回つてきたのよ」

「襲撃予告、ねえ……」

スキルアウトとやらはそんなテロリストめいた連中だっただろうかと疑問に思う霊夢だが、駒場や黒妻、能力者狩りをしていた連中と、よくよく考えればひとえにスキルアウトといっても多種多様なのでそういう連中が居るのも不思議ではないだろう。

それにしても、なかなかのタイミングでしかしてくれたものだ。

「初春さんと白井さんにはもう午後からは非番でいいって言っちゃってるし、私達も他の仕事があつて人手が足りなくて……お願い出来ないかしら」

仮に初春と白井を代わりに、と言つても佐天は彼女らも誘つているので意味はない。

「それつて、お祭りには間に合わないの？」

「うーん……時刻は予告されなかつたみたいで不明だし、交代人員は手が空いた人が補充されるまで来ないらしいから終わるのはかなり遅くなるかも」

「ええ……こちらで学生でボランティアよ？ 夜遅くまでコキ使わないでほしいつての」

「本当にごめんなさい！」

「……ま、そういうことなら仕方ないでしょうね。涙子には悪いけど」

平謝りしながら頼み込む固法に、彼女が悪い訳ではないと霊夢も理解しているので渋々了承する。

「ありがとう。……にしても、一緒に花火大会に行くだなんて、随分と仲良くなってるみたいね?」

「……それが何よ?」

「いえ、ただ意外だったわ。あなたが佐天さんと友達になるのもだけど、こうして上手く付き合っているのも」

改めてそう思う固法。どういう経緯でそのような関係性になったのかは以前聞いたが、それでもあの霊夢が誰かと、それも佐天のような人物と友人関係に至るなど全くイメージがつかなかった。

加えて、その性格から噛み合わないだろうなと思っただけに、こうも真つ当に友人をやれているのが心底意外であった。

「そう? よく分かんないけど」

これに霊夢は首を傾げる。彼女はそもそも友人が居たという記憶が存在しないため、佐天との関係が上手く行っているのかも、それが一般的な友人関係として正しいのかも知る由が無かった。

「ふふ。じゃあ、何で佐天さんと友達になろうって思ったの?」

「……前にも言ったでしょ。ただ、あの子が友達になりたいって言ったから、友達になつてやっただけよ」

二度も同じ質問をするなど靈夢は眉をひそめる。

「ふうん……本当にそうかしら」

「はあ? ……私自身が言っているんだから、それ以上でもそれ以下でもないでしょうが」

訝しげな視線を向けながら困惑する靈夢を見て、固法はくすりと微笑む。

彼女は安心していた。単なる気紛れだとしても、あの孤高の道を進んでいた靈夢に、友人が出来たということに。態度も以前よりも若干軟化しているように見え、特に幻想御手事件後は顕著だ。

自分達では彼女に何もすることが出来なかったが、もしかすると佐天ならば……と、期待してしまうのは当然の帰結であろう。

(友達になりたいって言ったから、か……もしかすると、その通りなのかもね。私はあなたと友達になろうだなんて言えなかった。だから単なる元同僚としか認識されていない。そう考えると佐天さんって凄い人だと思うわ)

少しだけ羨ましかった。思えば、固法や当時の同僚らは博麗靈夢に歩み寄ろうとしなかった。彼女自身が他者を寄せ付けなかったのもあるが、心のどこかで無意識に彼女には孤高の道こそが相応しいと、自分達とは違う世界に住む人間だと、切り離してしまっていたのだろう。

彼女は誰よりも人間離れしながら、誰よりも人間らしいことを知っていたというのに。

「んじゃ、早速行つて来ましようかね。場所は？」

「ええ。集合場所は——」

「ええ？ 本当ですか？ はい……はい。分かりました。いやいや、それならしようがないですよ、また今度どこか遊びに行きましようね！ はい、それでは……霊夢さん、来れなくなっちゃったみたいですよ」

ファミレスにて。電話でやり取りしていた佐天は同じテーブル席に付く初春、白井、御坂、そして春上に霊夢が花火大会に来れなくなったことを伝える。

「ドタキャンですか？」

白井が眉をひそめる。

「えっと、なんか襲撃予告で警備がどうのとか……」

「襲撃予告？ ……ああ、そういうえば固法先輩が言っていましたの。スキルアウト共が学校への襲撃予告をしており、風紀委員にも協力を仰いでいる、と。うちの支部にも要請が掛かりましたのね」

佐天にそう言われ、なら仕方無いなと思いつつ、いくら怠惰とはいえ適当な理由で約束をすっぱかすような人間ではなかった事に内心ホツとする。

しかし、タイミングが悪い。昨日の三沢塾のテロといい、現在警備員と共同で捜査しているRSPK症候群の同時多発といい、こうも立て続けに事件が起こるとは……物騒

な世の中になったものだ。

「まあ、常日頃サボっているからその皺寄せが来たのでしよう。あのサボり魔はそうやって働かせておけば良いのですの」

「そんなこと言ってますけど白井さん、なんか残念そうに見えますよ?」

初春がそう言えば、白井は露骨に顔をしかめる。

「は、はあ? どこがですの。何故私がああワキ巫女が来なくて残念がるので? 頭がお花畑なだけでなく、目まで節穴になってしまわれたのですの? もし冗談のつもりでしたら全く笑えませんので、もう二度と言わないでくださいまし」

「ちよつと辛辣過ぎませんか? 流石に泣いちゃいますよ?」

日頃のぞんざいな扱いに対する些細な仕返しのもりで揶揄したが、想定以上の口撃をされて涙目になる初春。それを見て御坂と佐天は苦笑いし、春上は知らない名前が出て困惑する。

「れいむさん……なの?」

「あ、私の友達。初春達と同じ風紀委員ですごくクールで美人で超強い人なんだ!」

「その紹介だけ聞くとまるで完璧超人ですね……いや、実際その通りではあるんですけど」

「協調性皆無でいい加減で面倒臭がりて極端で常識知らず、が抜けてますわよ佐天。そ

のような偏った紹介では春上さんが勘違いしてしまいますの」

「あんたはよくそんな悪口をすらすら言えるわね……」

そんな四人の会話を聞き、春上はその霊夢なる人物が癖が強いのだなということは理解する。

「本当は花火大会で紹介するつもりだったんだけどな」

「そういえば……佐天、あなたは神裂火織さん、という方をご存知で？」

「かんざき……かおり？ いえ、知りませんけど」

急に知らない名前を出され、困惑する佐天。何か自分と関係のある人物なのだろうか。

「そうですね……この前に博麗霊夢とこのファミレスで一緒にいましたの。あの方はお友人だとおっしゃっていたのでもしかしたら佐天ともお知り合いではないかと思っただけです」

「へえ……霊夢さんのお友達ですか？ なら、私と知り合った後に友達になったんですかね？ 霊夢さん、私が初めての友達だって言っていましたから」

「……でしょうね。私もあの方に友人が出来るなんてとてもではありませんが、信じられませんの」

厳密には、彼女の事を友人だと認識している者は多いのだろう。しかし、肝心の彼女

自身はきつと、彼らの事を友人だとは認識していない。

だからこそ、佐天が霊夢の友人になったというのを聞いた白井は当初信じられなかった。かといってその場凌ぎで誤魔化す為ならば彼女は精々知り合いや顔見知りと表現する程度でそのような嘘が咄嗟に出ると思えず、後に確認すれば事実で非常に驚いた。

それが佐天が直接友達になりたいという意志を伝えたからということを知り、納得が行く。そうでもしなければ、彼女と友人にはなり得ない、ということである。

「あれ……っ？　ってことはですよ、もしかして私達って博麗さんに友達としてカウントされていない……っ？」

白井がそんな自身の考察を皆に伝えると、初春が震え声でそう呟く。

「勿論ですの。恐らくあの方に対するあなたの認識は元同僚から友人の友人、そしてまた同僚に戻っただけに過ぎませんの」

「そ、そんな……」

結構仲良くしていたと思っていた初春はそのあんまりにもあんまりな事実にはショックを受ける。

「ちよつと流石に言い過ぎでしょ……って、言いたいところだけど。あの人らしいっちやらしいわね」

一方、あの鉄橋で有象無象を見るかのような冷たい視線を向けられたことを思い出しながら、然して驚きもせず御坂はそう言つて頷く。

「む、じゃあ御坂さんは良いんですか？」

「じゃあ何も、私は博麗さんのこと友達だと思つてなんかないし」

「へっ？」

躊躇いの無いその言葉に初春は呆然とする。以前、初対面で半日ほど一緒に遊んだだけで自分達を友人認定した御坂の反応とは思えなかつた。

「あの人と私はライバルよ、ライバル」

「はい？ ライバル……ですか？」

「そ。好敵手^{ライバル}」

自信満々にそう言い放つ御坂。これには白井や佐天も寝耳に水で何故そうなったのかと困惑の色を隠せない。

自分達の知らない所で何かあつたのだろうか。

「お姉様……あの方が何か粗相でも？」

「ん？ あー、ちよつとね。どちらかと言えば粗相したのは私の方だけだ」

ついカツとなつて電撃を飛ばしたのは自分の方だったので御坂がばつが悪そうだった。

「はあ……まあ、よくよく考えればズケズケと遠慮無く物を言うあの方と意外と喧嘩っ早いお姉様が揉め事を起こすのは不思議なことではありませんが」

「ちよつと、喧嘩っ早いってあんたね……」

それにしても、異能力者^{レベル2}を超能力者^{レベル5}がライバル認定するというのは端から見ればなかなか異常なことであるが、霊夢の規格外つぷりを知っていれば納得ではある。

後にこのライバルというのに別の意味合いも含まれるようになることをまだこの時の白井は知る由も無かった。

(……でも、確かにきつかけはそうなのかもしれないけど、今の私達は形ばかりの友達ではないはず)

二人のやり取りに苦笑いしつつ、佐天は考える。当初から霊夢は彼女なりにこちらへ歩み寄ってくれてはいた。今思えば、あれは友達になると言った手前、最低限の義理を果たそうとしていたのだろう。

そんな微妙な関係性が明確に変わったのは、幻想御手事件の後……昏睡状態から目が覚めて病室で対面した時。

あの時、あの瞬間、博麗霊夢と佐天涙子は単なる知り合いでも口先だけの友人でも無い、もつと特別な関係になれたのだと、何となしに思ったのだ。

たとえそれが世間一般で言う友人関係とはかけ離れたものであったのだとしても、単

なる思い違いであったのだとしても、佐天にとつて今の霊夢との関係はとても好ましく、非常に喜ばしかった。

「ふうん……私も会ってみたいなの。その霊夢さんって人に」

「はい！ 今度また紹介しますね！」

そんな皆の反応を見て春上も興味を抱く。それぞれの反応が多様多様であるが、共通して彼女達四人がこうも注目して止まない霊夢とは、一体どのような人物なのだろうか。

「けどそつかあ……霊夢さん、来れないのかあ……」

「はい。本当に残念です。佐天さん一緒に行くの楽しみにしてましたもんね、花火大会」

「それもあるんだけど……」

「え？」

「あ、ううん、何でもない」

和気藹々とする中、一人神妙な面持ちでそう呟く佐天に初春は首を傾げるも、笑って誤魔化される。

（あの子について出来れば直接会って相談したかったんだけどなあ……）

その憂いに気付く者は、誰も居なかった。

“混じり者”とは、常に異端である。

況してやそれが人と、人ならざるものであれば尚更のこと。人であると同時に人ではなく、それらはどちら側にとつても異質であり、異様であり、異常であるが故に、恐れ疎み嫌うのだ。

そして、彼女はそこの中においても単なる混種とも違う、ある意味この世の理から逸脱した、一際異端な存在であった。

「た、ただいまー」

佐天涙子は恐る恐るドアを開ける。あの後、ファミレスを出て今話題のクレープ屋へ行ったりゲームセンターで遊んだりと春上と親交を深めた彼女は夜の花火大会まで時間があるので浴衣に着替える為に一時帰宅していた。

「…………どうも」

独り暮らしであるが、実家に居た頃の名残ですっかり習慣付いた言葉に、今回はきちんと返事が返ってくる。

ドアを開けてすぐのリビングのソファーには、一人の少女が座っていた。

「えっと…………私が居ない間に何かあった？」

「いえ、特には」

荷物を置き、尋ねればそう返すのみ。沈黙に包まれる気まずい雰囲気佐天はぎこちのない作り笑いを浮かべるばかり。

何故こうなってしまったのか。そう自問し、己の短絡さが招いた結果であると即座に導き出す。

先日の夜、帰り道で見つけた負傷者。血塗れの少女を前にパニックになり、何を血

迷ったか病院ではなく、すぐ近くの自宅へと連れ込んでしまった。そのまま救急車なり警備員なりに通報すれば良かったのだが、そうするよりも早く目覚めた少女に刀を向けられる。

思えば、少女が堅気の人間ではないことは明らかだった。

レプリカではない本物の真剣を所持しており、良く見れば怪我した部位以外に付着した血は誰かの返り血……と、気付ける要素は多々あったにも拘わらず何もかも見落としていた佐天は己の迂闊さを呪う。

——匿え。

冷たい刃を首筋に当てられ、そう詰められれば領くしかあるまい。

敢えなく佐天は自宅で彼女を看病した。こっそり通報しようにも妙に勘が鋭く、そういった素振りを見せただけで殺気を浴びせられる。尤も、それでも先程のように普通に外出を許してくれるのでチャンスは幾らでもあったのだが、それがかえって怖くて結局何も出来なかった。

「……改めて、礼を言います」

「へ？」

長い沈黙を破り、眩かれたのは感謝の言葉。

「あのままでは野垂れ死にするか、追手に始末されていたでしょう。命の恩人にするよ

うなことではないことは分かっているのですが……本当に申し訳ございません」

そう言い、少女は表情を曇らせる。一晚過ごして、落ち着いたのだろうか。感謝どころか謝罪までされるとは思っていなかった佐天は呆気に取られてしまう。

意外と、悪い人間ではない……のか？ 期待違反理論、或いはストックホルム症候群という奴か。佐天は目の前の少女を恐れてはいたが、敵意や警戒心といったものは既に削がれていた。

「あ、いやえつと……その、大丈夫。何か事情があつたのよね？ 警備員に通報されたくない理由が」

「……はい。現在、お尋ね者の身なので」

「お尋ねつ……えつと、因みにどういう罪で？」

今更ながらここまでズバズバ質問してしまつて良いのだろうか。言つてしまつた後に後悔する。

「……………」

「あつ、言いたくないなら別に大丈夫だからっ」

むしろ逆知りたくない。あの状況からして少なくとも傷害罪、暴行罪以上の重犯罪だろう。

「……そうですか。ありがとうございます」

それが気遣いだと認識した少女は礼を言い、そして安堵する。

告白するのは憚られた。己が当たり前のようにやった事は、この街においては大罪に値するらしい。それを知ってしまったえば、如何に善良な人間といえど、自らを追い出そうとするに違いないのだから。

(それにしても……)

改めて佐天は少女の姿を見る。

年は自分よりも少し下くらいだろうか。色素の抜けた、絹のような白髪^{アルビノ}。ワンポイントになっている黒いリボン付きのカチューシャ。今は一度入浴して自分の服を貸し与えているが、その前までは緑色のベストとスカートを着用していた。

異質だと、その風貌を見て佐天は思った。肌も頭髮と同じく白く透き通っており、しかし外国人かと問われればその顔立ちには日本人のもので凛々しく、整っていた。

加えて、彼女の周囲に感じる僅かな違和感。それが何なのかは分からないが、これらの要素により佐天は目の前の少女が自分らとはかけ離れた存在のように思え、どうしようもなく惹かれる。

「何者なんだろう?」

故に、そう思わずにはいられない。

「何者……ですか」

「あつ、いやそのっ」

やばい。口に出てしまっていたかと慌てる佐天。余計な詮索はしないと誓ったばかりだと言うのに。

「……………」

ふむ、と彼女は考える。己は一体何なのかと。

同時に思う。己が何であるかなど心底どうでもいいと。彼女が知りたいのは、それではない。

然りとて、命の恩人であり、現在進行形で多大な迷惑を掛けてしまっている目の前の少女がそれを知りたがっているのであれば、答えてやるのが道理だろう。

しかし――。

「……残念ながら、私も私自身が何者であるか分かりません。数日前から記憶が無いので」

「えっ？」

記憶が無いと、何気無しにそう語る少女に佐天は目を見開く。

「気が付けば、この地に立っていた。何も知らず、何も分からず、ただ忘れてしまつていく」ということだけは何となく理解出来た。ここが己が居るべき場所ではないということも」

あまりにも衝撃的な内容に絶句する。それが事実ならば彼女は記憶喪失で右も左も分からない状態でこの学園都市に放り出され、今まで生きてきたのだという。

そして、怪我を負い、血塗れで路上に倒れる状況になるような何かに巻き込まれている。本人は自らをお尋ね者と称していたが、そのような壮絶な境遇に身を置く彼女の心境は想像も付かない。

「しかし、幾つか覚えていることもあります。磨き上げた剣術、顔すら思い出せぬ師の教え、それから……」

少女は言葉を紡ぐ。きつと、それこそが、今こうして自己を構築し、己を己足らしめている要素なのだろう。

「——『魂魄妖夢』」

そして、遂にその名を口にした。

「こんばく、ようむ……?」

「はい。恐らくそれが私の名前……だと思えます。己が何者であるかという問いにおいて、私が答えられるのはそれだけです」

「魂魄妖夢……妖夢ちゃん、ね。私は佐天涙子。えつと、改めてその、よろしく」

唐突に名前を告げられ、一瞬困惑するも佐天はすぐに笑みを浮かべ、自身も名乗り返す。

巻き込まれ、脅されている立場であるにも拘わらず佐天は彼女にも相当な事情があるのだと理解し、何と歩み寄ろうとしていた。

それは呆れ返る程のお人好しさが故か、或いは上述したようにストックホルム症候群に陥り、彼女に対して感情移入してしまっているのだろうか。

自分でもよく分からないが、それでも佐天は目の前の異質な少女のことが目を離せず、心を奪われていた。

あの日、博麗霊夢と出会った時のように――。

「……変わった方ですね、あなたは」

対する少女……魂魄妖夢は、そんな佐天の対応に目を剥き、不思議に思う。

しかし、これだけは言える。

――出来得る事ならば、彼女を斬るような事態にだけは、なつてほしくない。

不和

とある研究施設。

学園都市においても最先端の科学設備に囲まれたこの一室に、現在拘置所に収容されているはずの幻想御手事件の主犯、木山春生は居た。

「……私を呼びつけて、一体何をするつもりだ？」

以前にも増してやさぐれた面持ちで死んだ魚のような眼を向けた先には、白衣を着込んだ赤い髪の女性がデスクチェアに座っている。

霊夢が「教授」と呼んでいる人物だ。

「——岡崎夢美」

「そう警戒することはないわ。ちよつと協力してもらいたいだけよ、木山先生」

「そう言い、教授は優雅にティーカップに注がれた紅茶を啜る。

「協力、だど？ 冗談はよせ、私風情が君に協力出来ることなど精々雑用くらいだ。そんなことの為にわざわざ釈放してくれたというのか？」

不審な眼差し。木山からしてみれば当然の反応だと言えよう。何せ目の前のこの女

は、木山が専門とする大脳生理学という分野においても遙か先を行く超天才なのだから。

否、そんな言葉すら烏滸がましいとさえ思える程に、岡崎夢美という科学者は理外の存在だった。

「あら、私はそれなりにあなたのこと評価してるわよ？ 幻想御手に多才能力、なかなか

良い発想だと思おうわ」

「第八位」……真正正銘本物の多重能力デュアルスキルや世界最大の原石、それから博麗霊夢のような「イレギュラー」を飼っている君が言うと、嫌味にしか聞こえないよ」

「まあ。飼っているなんて人間きが悪い。特に最後のなんて飼ひ慣らせるのはよっぽどの化け物よ」

心外とばかりに教授は肩を竦める。その言葉に以前戦った霊夢の姿を思い起こし、内心木山は同意した。

しかし、学園都市の頂点たる超能力者レベル5。教授が担当し、手中に収めるのは末席の二人であるが、彼らは未知数な「原石」であるが故に、解析不能とされ、順位が下げられているに過ぎない。

——だからこそ、そんな怪物二人を差し置いて教授が手を焼いているという博麗霊夢は異常な存在であった。

「それと、あなたを釈放させたのは私じゃないわ」

「……何だつて？」

木山は眉をひそめる。突然の釈放。それからすぐに連絡が来たことから、てつきり彼女は教授が自分を釈放させたのだと思い込んでいた。

「では、誰が？」

「さて、誰でしょう？　ま、そのうち向こうから接触してくるんじゃないかしら？　それよりも……私はあなたの力を必要としているの。協力してくれると言うのなら、報酬は弾むわよ」

「ふん……金なら別に……」

「ノンノン。私もあなたへ協力してあげるわよ。例えばそう……あなたの教え子であるチャイルドエラ置き去りの子供達を目覚めさせる、とかね？」

「……………」

木山が瞳目する。教授はその心情を見透かしているかのように微笑んだ。

「……あの子達の事を、どこで知った？」

「単なる成り行きよ。あの事件で興味深い存在が現れたから改めてあなたについて調べた過程でね……知ろうと思えば、いつでも知り得たわ」

「君が興味を引くような対象……そうか。幻想猛獣のことだな」

「ご名答。正確には、それに干渉した存在だけけれど」

霊夢を監視するついでにその光景を觀賞していた教授にとってその出現は予期せぬことだった。具体的には虚数学区・五行機関の不完全体——幻想猛獣が発生すること自体は想定内ではあったのだが、謎の第三者の介入によりあのような形に変質するとは思わなかった。

早い内にアンインストールプログラムにより幻想御手のネットワークから切り離され、霊夢に撃破されたから良かったもののあのまま放置していれば恐らく「ヒューズカザキリ」を上回る怪物と化していただろう。

「ふむ……私はてつきり、あれは君の差し金だと思っていたのだがな」

一方、木山は意外そうに呟く。

「あら、それは何故?」

「……大した理由はない。あれに干渉してきた存在は、完全に私の理外の存在だった。そんな馬鹿げた存在は君くらいしか候補が無かっただけさ」

「誉められているのか貶されているのか知らないけれど、あなたの私に対するそれは過大評価よ」

きよとんとする教授。自覚がないのかと呆れつつ木山が説明すると、クスクスと笑い出す。

「私も、あなたも、それ以外も、所詮は只人。世界は広く、我々が知りもしない脅威と驚異に満ち溢れている。今回はそれが片鱗を見せたに過ぎない……私もあなたも、まだまだ井の中の蛙大海を知らずつてことなの」

「……それは、知りたくもない事実だな」

「あら、研究者らしくない」

愉しげに、まるで希望に満ちているかのようにそう話す教授とは対照的に木山は渋い顔をする。自分と彼女とではそれこそ見ている世界があまりにも違い過ぎた。

加えて、今の木山は一介の研究者以前に一人の教師。彼女にとって最も優先すべきは研究や知識ではなく、愛する教え子達であった。

「話を戻しましょう。どう？ 勿論、前払いとして先にあなたの目的に協力してあげるわ」

その言葉に木山の瞳が揺らぐ。あまりにも魅力的な提案だ。彼女の頭脳と研究成果があればもはや樹形図ツリーダイアグラムの設計者など必要無いだろう。子供達を目覚めさせることなど兎戯に等しいのかもしれない。

しかし、目の前に居るのはあの「木原」の者達に並び立つとされる個人であり、ある意味では彼らよりも悪名高く、尚且つ異端扱いされる危険人物である。

「……何をすればいい？」

「ウフフ、素敵。契約成立ね」

故に、それが悪魔の誘いであることは理解しながらも、木山はとうの昔に悪魔に魂を売る覚悟は出来ていた。

「じゃあ早速だけど説明を——」

「——教授」

嬉しそうに教授が言葉を続けようとしたその時、自動ドアが開き、誰かが入ってくる。「どうかした？　今取り込み中なんだけど」

「例の件について報告しようかと思いましたが。アウレオルスⅡイザードは未だに消息不明。機器を使用しても、少なくともこの街には彼の生体反応は見つかりませんでした。死亡したか、連れ去られたと考えるのが妥当かと」

入ってきたのはセーラー服の上に白衣を着た金髪の少女。助手と思われる彼女の発言に教授は神妙な面持ちでと顎に手を当てる。

「そう……それは残念。黄金鍊成アルスⅡマグナのデータはもう少し回収しておきたかったのに、霊夢も下手を打ったわね」

「アウレオルス……？　誰のことだ」

聞き覚えのない名前、そして博麗霊夢の名前も出てきて気になった木山が問う。

「古い友人よ。別に気にしなくていい。今回とは全く関係のない話だから」

しかし、教授はそう言って話を切り上げる。余計な詮索はするなど、暗に言われているような気がした。

「じゃあ、ちゆり。調査はもう切り上げてくれて構わないわ。元の仕事に戻ってちようだい」

「了解しました。それでは」

助手が退室する。それを見送ると教授は再び木山へと視線を向けた。

「さて、と……タイミング悪く横槍が入っちゃったけど、改めて話の続きをしましよるか」

「……ああ」

険しい顔をしつつも、木山は耳を傾ける。その内容が何であれ、彼女は応じるだろう。たとえこの街の全てを敵に回しても救うと。そう誓ったのだ、その為ならばたとえ何であろうと利用するし、逆に利用されたって構わない。

「ふふふ。あなたにも教えてあげるわ。私が描く、より良い、素敵な未来への道筋を――」

——そう嘯く教授の姿は、まるで夢見る少女のようであった。

霊夢は苛ついていた。

例の襲撃予告された学校の警備は異常無く終了した。そう、つまりはガセネタ、悪戯の類い。襲撃なんて一向に起きることなく、ただただ無駄な時間を浪費しただけで終わったのだ。

「あー、だるい。ふざけんじやないわよ」

「ひつ、す、すみません……」

一日中警備させられた挙げ句、徒労に終わってしまったという事実にもぶちキレ。そんな霊夢に怯えた様子で眼鏡を掛けた警備員……鉄装綴理が平謝りする。

「まあまあ。何も起きなくて良かったじゃんよ」

その隣で黄泉川が苦笑いを浮かべつつ、宥める。これに霊夢は鼻を鳴らし、手に持つグラスを口へと近付けて中の液体を飲み干す。

現在、彼女らが居るのはとある居酒屋のテーブル席。例の警備終了後、苛立つ霊夢を見かねた黄泉川に誘われ、たまたま同じ区域を担当していた鉄装も交えた三人で打ち上げをしていた。

「良かないわよ。ただでさえ私の予定を潰されて腹が立つてるのに……怒りをぶつける相手が居ないのが一番もどかしいわ」

「そりゃそうだが……」

「大体信憑性のある情報じゃなかったの？ 天下のアンチスキル様が踊らされて、情け

ない話じゃないの」

「はは……そのはずだったじゃん……」

霊夢の指摘に一瞬間をしかめる黄泉川。それは警備員を馬鹿にされたことへの不快感ではなく、彼女と同じく警備員……その上層部への不信感だった。

少し前に部下に調べさせたが、襲撃予告の出所は不明。確かに筋のある情報だと聞いていたのに、結果はこの有り様。果たしてこれは偶然かそれとも……。

「ちよ、ちよつと先輩」

「ん？」

「あの子、普通に日本酒飲んでますけど学生ですよ？ 未成年ですよ？」

「ああ、この事は秘密じゃん」

「ひ、秘密って……ヤバイですよ流石につ!？」

「大丈夫、大丈夫。あ、でも小萌には言うなよ。殺されかねないじゃんよ」

おろおろとする鉄装にそう言つて黄泉川はグラスに並々と注がれた日本酒をなかなか良い飲みっぷりで嗜んでいる霊夢を前に笑う。

教員で警備員という立場にも拘わらず黄泉川はある理由から霊夢の飲酒については肯定こそはしないが、ある程度は見逃しており、特にこういう宴会の席の時などは許可していた。そんな彼女を見て鉄装はやはり破天荒な人だと思うと共にバレたら普通に

処分もののためどうかバレないでくれと周囲を警戒し始める。挙動不審で逆に怪しいが。

「ところで博麗……お前、ここ最近随分と暴れてるらしいじゃん？」

「……あん？」

突然そう言われ、霊夢はグラスを口元へと運ぶ手を止める。

「この前の三沢塾のテロ騒ぎ……実際のところどうなんだ？」

「……別に」

成程。飲みに誘った本当の目的はそれか。黄泉川はちらんぼらんに見えて意外と切れ者だ。あの隠蔽し尽くされた事件に対して違和感を抱き、疑問に思っても不思議ではない。

面倒であると、霊夢は内心毒づく。

「そうはぐらかすつてことは、やっぱり何かあるじゃん？」

「………だったら？」

これに対し、霊夢は表情一つ変えず平然と言い放つ。元より腹芸は苦手なのだ。その場凌ぎにすらならない嘘を吐くのは時間の無駄であり、黄泉川もそれを理解していた。

しかし、上層部が隠蔽している以上、当事者である彼女から聞き出すしか方法はなかった。

「教えてくれ。あれが単なるテロなんかじゃあないことは分かっているじゃん。うちの所の特務部隊が出たって記録も、まるで後から付け足されたようだったじゃんよ」

死傷者多数、挟られ、大穴が空いたビル、事件についての記憶が無いと証言する犯人グループ、取って付けたようなカバーストーリー……あまりにも不可解な点が多過ぎて、黄泉川以外の警備員のメンバーも皆あの事件に対して疑問を持っている。

「……知ったとして、黄泉川先生に何が出来るのよ？」

にも拘わらず彼らの多くが声をあげないのは警察組織といつても所詮は学園都市上層部の犬であり、その命令には逆らえないから。

故に、事件の詳細を黄泉川に教えたところで彼女に出来ることなど存在せず、血迷って世間に公表してしまえば首を切られることは明白だ。

霊夢からすれば教えてやるメリツトが無く、そもそも今回の事件は魔術師絡みなので話せるはずもなかった。

「ッ……………」

簡潔明瞭で、鋭く容赦の無い一言を投げ掛けられ、黄泉川は押し黙る。確かに彼女が事件について知りたいのは、上層部の陰謀を暴いてやるという気概よりも、単なる自己満足に近かった。

「ま、どんな風に勘繰っているのか知らないけど一つ言えるのは、あの事件自体は解決し

ている。これだけは確かだから安心しなさい」

「……ああ、そうかい」

その言葉に嘘はないということを理解した黄泉川は一先ずそれで納得する。納得するしかあるまい。

「なら、仕方ないじゃん。折角の酒の席を辛気臭い雰囲気にしちまつて悪いじゃん」

まるで先程までのやり取りなど無かつたかのように気分を切り替えて黄泉川はそう言う。と日本酒の瓶を手を取つて霊夢のグラスへと注ぐ。

一方、隣で会話を聞いていた鉄装は未だに困惑している。

「ええ。私にとつては久々の酒なんだから。今日は日を跨ぐまで飲み明かしましょう」

「おっと、深夜徘徊は許さないじゃん」

「何で飲酒はOKでそれは駄目なのよ」

「というか風紀委員の方は大丈夫じゃん？ 誘つた私が言うのもなんだが、あんまり帰りが遅いと叱られるじゃんよ？」

「平気よ。美緯には仕事が終わつたらそのまま帰つていいって言われてるし、黒子も飾利も非番で花火大会に行つてるだろうから」

流石にこの時間帯では花火も打ち終わつて帰宅している頃合いか。彼女らもまさか警備員と飲み会をしているなどとは、夢にも思っていないだろう。

「花火大会？　　そういうや今夜そんなのあったじゃん」

「ええ。本当は私も一緒に行く予定だったんだけど……」

「今回の仕事を押し付けられた、って訳か。そりや災難だったじゃんよ」

「あー、思い出すだけで腹が立つわ」

挙げ句、無駄足だったのだ。憤慨しながら霊夢は乱暴にグラスの酒をまた飲み干す。もしも襲撃予告をした張本人が目の前に現れたとしたら、ノータイムで再起不能にするに違いないであろうくらいには殺気立っている。

（しかし……今は酔いが回っているのもあるだろうが、荒々しさは昔と全然変わっていないじゃんよ……また問題を起こさなきゃ良いんだが……）

臨時的にはいえ風紀委員に復職したと聞き、少しは角が取れたのかと思ったが、やはり根本は変わってはいないなと黄泉川は判断する。

酒が入ると人は素が出やすいというが、霊夢は特に酔った際に感情的になる。この百面相のように喜怒哀楽がころころと変わるその姿こそが、彼女の本来の姿なのだろう。

そして、基本的に感情を優先する。それでいて合理的に物事を判断し、無駄を嫌い、常に最適解を好む。一見すると矛盾しているように思えるが、その実これらは両立可能で、だからこそ、その絶対的な正しさは暴走してしまふ。

一番の問題はそこに規則や法律を度外視していること。善悪と賢愚の基準を己の中

でのみ設けている彼女はその気になればルールなど平気で破るし、暴力や犯罪が最適解だと理解すれば、躊躇わずにこれを実行する。その結果がかつて風紀委員をクビになった原因である無能力者狩りに対する過剰なまでの暴行であった。

やはり危うい存在だと、黄泉川は依然として霊夢を警戒し、その動向を注視していた。三沢塾の事件が必要以上に気になった要因でもある。

「———そういえば」

ふと、霊夢がある場所へと視線を送る。

「あなた、誰なの？」

そして、おもむろにその先に居る鉄装を指差し、そう尋ねた。あまりにも唐突な発言に、二人はぼかんとする。

「……………えっ!? 今更っ!?」

一足先に再起動した鉄装が目を剥いて叫ぶ。

「何だ、まだ自己紹介してなかったじゃん？」

「い、いえっ、現場で会った時に皆で自己紹介したはずですけど……」

「そうなの? 普通に聞いてなかったわ」

「酷いっ!?!」

実は名前を全く把握されていなかったことにショックを受ける鉄装。この巫女は先

程からずつとこの眼鏡は誰なんだろうなーなどと内心思いながら飲んでいたというのか。

「こいつは鉄装綴理。私の後輩じゃん。ほら、自己紹介しろって」

「え？ あつ、はい、えつと……黄泉川先輩と同じ部署の……」

「そんなことよりも」

「そんなことツ!?」

「あー？ 何よ、酒が足りないんじゃないの？ ほら、飲め飲め」

「あ、いやっ私はある……」

「ああつ!? 私の酒が飲めないってのっ!?」

「ヒイツ!? せ、先輩この子おっさんみたいな絡み方してきます〜!」

「あつはつはつはつ! 結構酔ってるじゃん博麗!」

威圧しながら一升瓶を突き出してくる霊夢に涙目で悲鳴をあげる鉄装。そんな光景を見ながら黄泉川は大笑いする。

三人の飲み会は、深夜零時過ぎまで続いた。

(……あれ？ 私なんかやらかした？)

翌朝、特に二日酔いもなく意気揚々と支部へと赴いた霊夢は重苦しい空気に襲われる。

出迎えたのは、腕を組み、あからさまに不機嫌な様子でソファーに座っているツインテール。固法と初春は外回りに出ているのか居ない。

遅刻はしていないはずだ。まさか昨晚飲み会に行っていたのがバレた？ どうであれ、面倒事の気配を感じ取った霊夢は恐る恐るドアを閉めて退散しようとする。

「……博麗霊夢」

したところで、白井がこちらを見て名を呼ぶ。

「……………何？」

「少々相談したいことがありますのですが、よろしいでしょうか？」

相談。どうやら己が原因で不機嫌になっていた訳ではなかったようである。

内心ホツとするが、あの白井が自分に相談とは珍しいこともあるものだと思う。

「……………別に構わないけど」

それはそれで面倒臭そうな内容である可能性があるが、下手に断つて余計に怒らせるよりはマシだろうと霊夢は頷く。

「ありがとうございますの。……………実は先程、初春と少し揉めてしまいました」

「……………飾利とあなたが？」

そして、向かいのソファアに座って対面した霊夢に、白井はぼつりぼつりと静かに語り始める。

事の始まりは昨晚の花火大会の最中に起きた原因不明の地震……………乱雑解放。ポルターガイスト どうやら佐天の都市伝説と名前だけは合致していて少し驚く。

それに関して件の転校生、春上衿衣が何かのトリガーになっている可能性があると言井は予想した。というのも乱雑解放が発生した時、春上が近くにいた事に加え、その予兆であるかのように様子が可笑しくなったのだという。前回の合同会議にて乱雑解放

は何者かが引き起こしているのを聞いていた彼女は春上の書庫バンクを調べ、彼女の能力である精神感応テレパスが特定条件下では本来の強度を超える数値の能力を発揮すると記されていた点から、白井は春上に疑いの目を向けた。

しかし、それを聞いた初春は「春上を疑っているのか」と反発して喧嘩になり、今に至るらしい。

「ふうん……」

「それで……今回の件について、あなたはどのような見解ですの？」

白井が尋ねる。何やら霊夢の顔色を伺っているようだったが、当然霊夢は気付かない。

「見解、といってもねえ……確かにその説明通りなら春上って子を疑うのは妥当なんじゃないかしら」

「！ や、やはりそう思いますの」

「ええ。疑わしきは罰する。故意にしろそうでないにせよ、関わっている可能性が捨てきれないのなら、調べるのが普通でしょ」

「おっしゃる通りですの！ なのに、あの花飾りは公私混同してがなり立てて……」

するとどうだろうか。霊夢がその姿勢を肯定すると、白井は顔を明るくさせ、初春への怒りを不平不満を口にする。

「まあ、友達が疑われる、つてのは良い気分はしないでしょうけれど……だからこそ、きちんと調べてその疑いを晴らしてやるつてのが筋だと——」

「そうですよ！ あなたならそうおっしゃつてくださると思つていました！ 友達であれば目を逸らすよりも、疑いを晴らす事に尽力するのは当然でしょう！」

「え、ええ……」

食い気味にそう言われ、霊夢は何故こうもテンションが高いのかと戸惑う。

白井としては普段のように面倒臭がることもなく相談に乗つてくれただけでもプラス評価なのに、彼女なら自分と同じ姿勢のはず……と密かに期待し、実際その通り100点満点の回答が返つてきたのだ。喧嘩した後、己の一体どこが悪いというのかと鬱憤を溜め込んでいたところに、常日頃から複雑な感情を抱いている霊夢が肯定してくれたのだから喜ばずにはいられなかった。

「……で、あなたはそれを飾利に言つたの？」

「——えっ？」

「だから、その友達であればなんたらかんたらつてヤツ」

ああ見えて意外と頑固なのだろうか。しかし、だとしても初春は真つ当な道理を説明して認められないような人間ではないと思つていた霊夢は気になつて問う。

これに白井はハツとしたかと思えば、途端にばつが悪そうな顔をする。

「……いえ。言つてません」

「ふうん……そりや言わなきや分らないわよね普通は。思慮が浅いつて言つたらそれまでだけど、私やあなたのようにそう簡単に割り切れるような人間ばかりじゃないのだし」

「ぐつ……ですが……」

「ま、どつちが悪いにせよ、このまま喧嘩したままつてのは嫌なんですよ？　なら、一度互いに頭を冷やして話し合つてみることにね」

ぐうの音も出ない。霊夢の言つていることは至極真つ当で合理的。反論する余地など無かつた。

しかし、あろうことか霊夢に諭されたという事実が受け入れられず、わなわなと震える。好きや嫌いが行つたり来たりする、難しい年頃なのだ。

「にしても、ポルターガイストねえ……」

一方、やはりと言ふべきか白井の心境など気付くはずもなく、霊夢の興味は二人の喧嘩の原因となつた事件へと移る。

まさかあの合同会議で地震について話し合つていたとは。吸血殺し事件のせいですつかり失念していて、今更ながら詳細を聞いた。

内容自体は大方予想していた通りで、やはり能力者の暴走によるもの……それが白井

の疑惑通りに春上が原因だったとして、彼女が単独で行っているとは考えづらい。
木山春生の件もある。色々ときな臭い事件だと、霊夢の直感は訴えていた。

「ちつ……感付かれるのも、時間の問題か」

一方その頃。支部から離れた別の場所で一人の女が不機嫌そうに顔を歪め、霊夢と白井の会話を盗聴していた。

滞空回線のシステムを応用した盗聴機。特殊な材質により電撃使いにも感知されない優れ物である。

これまでの会話も、風紀委員の動向も、全て筒抜けだった。

「やはり最大の障害はこいつ……博麗霊夢か。どういう訳か奴には『キャパシティダウン』も効かねえみたいだし」

『第三位』の介入までは問題無かった。彼女にはキャパシティダウンが通用するし、対抗兵器も用意してあるからどうとでもなる。

しかし、あの怪物……博麗霊夢は違う。解析不能、桁違いの戦闘力を有するアレは女の計画の何もかもを滅茶苦茶にしかねない危険因子だった。

所詮は異能力者だと侮りはしない。そうやって完膚なきにまで叩き潰された連中を何度も見てきたが故に。

「まあいい……既に手は打ってある。わざわざ相手をしてやる必要なんてねえだろ」

次の瞬間、女——テレステイナーⅡ木原Ⅱライフラインは凶悪な笑みを浮かべる。

そして、彼女によりある指令が下された。

駆動鎧

白井は初春ときちんと話し合うことにした。場所は御坂と佐天が設けてくれるらしい。

一方、霊夢は世間を騒がせる乱雑開放事件について独自に調べ始める。

大規模な地震を引き起こす程の能力の暴走。白井の推察通り春上が何らかのトリガーになっていたとして、彼女単独によるものとは思えず、更にそれが第三者、それも悪意ある者による介入の結果だとすれば、その裏にはもつと大きな陰謀が渦巻いていると霊夢は考えていた。

加えて、未だに推測の域を出ないとはいえ以前に関連性を疑った過去に木山春生が携わっていたという暴走能力に関する研究も無関係とは言い難く、幻想猛獣に干渉した存在についての情報も得られるかもしれない。

故に、霊夢は動く。第六感がもたらした不確定なその推理は、彼女の中では確信にまで至っていた。

春上の能力についての調査や乱雑解放の原因究明などは初春達がやってくれるだろ

うと彼女らに任せ、拘置所に居るであろう木山との面会に向かったのだが……。

(……どうなつてんのよ、一体)

結論から言うと、木山春生は秘密裏に保釈されていた。当初は面会謝絶と受付に言われたが、怪しんだ霊夢が警備員の知り合いに調べてもらったところついこの前保釈されたらしい。

誰が保釈金を支払ったのかは守秘義務として伏せられてしまつたが、一人もの学生を昏睡状態に追いやり、警備員の部隊を壊滅させた犯罪者がたつたの数週間自由の身。十中八九まともな理由ではないだろう。

木山の頭脳や研究成果を欲した者によるものか。それとも彼女に共犯者が居たのか。どちらにせよ、釈放させたからには彼女に何かをやらせようとするはずだ。

であれば、今回の乱雑開放事件も――。

プルルルッ

「ん?」

その時、携帯電話の着信音が鳴り響く。宛先を確認すれば知らない電話番号だった。

「……もしもし」

『あつ、もしもし。博麗さん?』

「……どちら様で?」

『私よ私。御坂美琴。佐天さんにあなたの番号教えてもらったのよ』

「美琴？ 何の用よ？」

聞き覚えのある声だと思つたが、相手は御坂だった。霊夢としては何かと勝負を挑もうとしてくる彼女に自分の電話番号を知られるのはあまりよろしくなく、顔をしかめる。

あまり勝手に人様の電話番号を教えないう、佐天に釘を刺しておかねば。

『聞いたわよ、黒子と初春さんの件。あんたが取り持つてくれたんだっけ？ ありがとう

ね。お蔭で仲直りできたみたい』

「……別に。ただ一言アドバイスしてやっただけよ」

どうやら無事和解したようだ。元よりきちんと話し合えば解決するはずの話なので当然の帰結である。

『それと、話は変わるんだけど……あなたにも知っておいてほしいことがあるの。春上さんのことよ』

すると御坂は切り出す。これこそが本題とばかりに。

『彼女の幼い頃からの親友……今は別の施設へ移動して離れ離れになってるらしいんだけど……アルバムで見せてくれた顔がそっくりだったの。あの時、木山の記憶で見た、置き去りの子達の一人に』

「……何ですって?」

思わぬ事実に霊夢は片眉を上げる。それはつまり、不鮮明だった木山春生と乱雑開放事件の繋がりが、確かに存在しているという証明なのだから。

春上の書庫バンクに記載されていたという、特定条件下ではレベル以上の結果を出すというのも、その親友が関係しているのだろう。

『それと、木山の奴も——』

「保釈されてるんでしよう? さっき知ったわ」

『……そう。つてことは、やっぱりあんたも何か関係があると思って調べてるみたいね』
「ええ。因みに保釈金を払った奴のことは?」

『それは分からなかったわ。ハッキングしても、元からデータそのものが削除されてるみたいで復元も出来なかったわ』

「ふうん……」

ナチュラルに犯罪行為ハッキングをしているのをスルーしつつ、霊夢は思考する。特に怪しいのは木山が保釈されたという事実を隠蔽していた警備員だ。知り合いはその理由は知らないとのことだったが、それこそが上層部、或いはもつと上の権力が絡んでいることの証明に他ならない。

データすら削除する徹底ぶりは守秘義務云々以前の問題であり、まるで身内にも知ら

れたくないように思えた。つまり敵は、警備員全体ではなく、その一部の勢力を掌握下に置いていたのだろう。

これならば先日行われた合同会議に出席しておけば良かった。警備員の中で誰が怪しいか目星を付けられたというのに。

「……この事は誰かに？」

『いいえ。まだ誰にも言っていない。一応テレステイナーさんっていう信頼できる警備員の人には伝えようと思ってるんだけど……』

「そりゃ良かったわ。そのテレなんたらとやらに言う前に知らせてくれて」

『え？』

「この事は、誰にも言わないようにしなさい」

『は、はあ？ 何ですよ？』

危なかった。よりにもよって警備員に言うかと思うものの、誰しもが霊夢のように察しが良い訳ではない。そもそもハッキング経由で情報を得た御坂は木山の保釈が隠蔽されていることを知らず、そして現段階ではまだ治安維持組織である警備員側が怪しいなどと露程も思っていないのだった。

「誰が聞いているかは分かかったもんじゃないでしょ。また木山が黒幕、とかだったら話が早くて助かるんだけど、どうも他に居る気がしてならない」

『……その根拠は』

「——勘よ」

『勘つて……あんなね……』

「私の勘は当たるの。とにかく犯人が木山であろうがなからうが、その目的がはつきりするまでは他言無用よ。味方かと思つたら実は敵……つてのは木山の件で懲りたでしよ？」

『それは……』

いくら何でも疑い深過ぎるのでは、とは思ふものの実際に木山に關しても靈夢は初めから彼女を怪しみ、犯人だと断定し、そしてそれはぐうの音も出ない程に正しかった。

もしかすると彼女は言葉にしていなくて、また既に正解に近い、或いは到達しているのかもしれない。それならばここは素直に従つておくべきだとも思うが、己のプライドは納得行つておらず、複雑な心境である。

(……そもそも、木山が助けようとしている子達は今どこに居る?)

一方、靈夢は顎に手を当てる。ふと思ひ浮かんだ疑問。意識不明といえど、身寄りの無い置き去りは実験体^{モルモット}としてはまだまだ充分に利用価値がある。そんな存在を学園都市のイカれた科学者連中が放つておくはずがない。

木山は教え子達を目覚めさせる為に幻想御手事件を引き起こした。普通ならば目覚

めさせるよりもまずは教え子達を安全な場所へと救いだそうとするはずだ。

つまり木山は既に教え子達を掌握し、匿っているということ。そして、それを欲する者が居るのだとしたら――。

かつん。

「……あん？」

拘置所からの帰り。何かが壁に跳ね返り、ころころと霊夢の足元まで転がってくる。何だと霊夢が視線を向けると、同時にそれは爆発した。

「!」

手榴弾。咄嗟に飛び退いて回避した霊夢は距離を取って着地する。

『何っ!? 今の音っ!』

「……どうやら敵襲みたいね」

『は? どういうこと――』

向こうで一体何が起きているのかと戸惑う御坂。対する霊夢は顔をしかめ、一体何事かと辺りを見回そうとすれば無数の鉛弾が嵐のように飛び交う。

「ちっ……忙しないわね……」

遅れて銃声が鳴り響いた時には既に霊夢の姿は無く、すぐ近くの建物の屋上へと移動していた。

そして、彼女は襲撃者達を見下ろす。

『目標。損傷無し。攻撃を続行せよ』

『どうやって避けやがった？ 空間移動か？』

『言っただろうが。ただの小娘ではないと』

数は20人程度。ゴツゴツとした鋼鉄の装甲……所謂駆動鎧バワードスリーブを身に纏っており、全員がフルフェイスで顔を隠している。

武装は各人ごとに微妙に違い、サブマシンガン、アサルトライフル、ガトリング銃、果てにはロケットランチャーと戦争でもしに行くような装備であり、とてもではないが、個人のみを襲う為に差し向けられたとは思えない。

『ちよつと!? 博麗さんっ!?』

「喧しいわね、生きてるわよ」

『あ、良かった……じゃなくて今の音って銃声よねっ!? 何が起こってるのっ!?』

「だから敵襲よ敵襲。なんたらスーツとかいうんだっけ？ ロボットみたいな見た目をした連中がいきなりぶつ放してきたわ」

『えっ!? な、何ですってっ!?』

襲撃を受けている。そんなことをあっけらかんと、冷静にそう説明する霊夢に対し、御坂は驚愕を隠せない。

「ま、問題は無いわ。ちよつくら片付けてくるから、その間に木山の所在について調べておいてちょうだい。他に黒幕が居るとしたら、奴が向かうのはそこよ」

『は、はあ？　ちよ、待ちなさ——』

「んじゃ、よろしく」

そう言つて通話を切る。言葉通りに今から調べてくれれば帰る頃には判明しているだろうし、そうでなくともまあどうとでもなるだろう。

「さて、と……どこのどいつか知らないけど、白昼堂々派手にやってくれるじゃない」

銃口が一齐に向く。しかし、霊夢は一切臆してない様子で大幣を取り出して長槍くらのサイズにまで伸ばす。

襲撃される心当たりは多過ぎる。最悪なパターンとして、いよいよをもつて学園都市側が博麗霊夢という異分子を排除しに来たのかもしれないが、だとしたらこの程度の戦力ではなく、もっと大勢で来るだろう。

タイムリングからして木山の釈放に関係している者の差し金だろうか。彼女の保釈を知り、嗅ぎ回っている己を目障りと判断した……と、いったところかと霊夢は推察する。

『——射て』

そう考えている内に、リーダー格と思われる人物が号令し、再び銃撃が開始される。

銃声と共に、迸るマズルフラッシュ。あつという間に蜂の巣にされるであろう弾幕に

対し——靈夢は空気を蹴り、真っ直ぐ突っ込む。

『なっ……正気かコイツッ!?』

明らかな自殺行為。しかし、そのまま穴だらけの挽き肉と化すと思われた靈夢は気が付けば全く無傷の状態で見前にまで迫っていた。

「まずは一人」

そして、正面の襲撃者の顔面に膝蹴りをくらわせる。

『がッ……!?!』

メキイと生身で鋼鉄を攻撃したとは思えない鈍い音と共に駆動鎧はぐにやりと首を曲げ、追撃とばかりに振り下ろされた大幣により地面に叩き付けられた。

ガシヤン、と襲撃者は倒れ、小刻みに痙攣したまま動かなくなる。

『——ッ!?! ば、馬鹿な……!?!』

最新鋭の駆動鎧がたったの二撃でダウン。信じられぬ光景に襲撃者達に波紋が広がる。

「二人目」

『はっ——!?!』

くるくると回転させ、その勢いそのまま振り上げられた大幣が呆然とする襲撃者の一人の横腹を殴り付けて吹っ飛ばす。

『ぐおっ!?!』

『チィッ——この化け物め、死ね!』

「失礼ね、人間よ」

襲撃者が発砲。霊夢はこれを容易く躲し、一瞬にして接近すると掌底を腹部に叩き込む。

「三人目」

『ッ——舐めんなッ!』

「あん?」

しかし、襲撃者は吹っ飛ぶことも意識を失うこともなく、そのまま腰部分に格納されていた近接ナイフを振り下ろす。

即座に後退してこれを避けた霊夢は意識を刈り取れなかったことに眉をひそめる。よく見れば先程吹っ飛ばした者も意識は保っており、戦線復帰していた。

「へえ……意外と頑丈なのね」

科学の進歩は著しい。一年もすればそれ以前のものとはガラクタ同然になるなんてことはザラだ。

以前相手にした似たような類いのものよりもずっと高性能な駆動鎧に霊夢は感心する。

『ハッ！ どうだ、この兵器は対能力者用の……』
「なら——」

もつと威力を籠めるまで。轟!! と再び接近して叩き込んだ掌底は駆動鎧の鋼鉄の装甲をべこりと凹ませ、振り抜くと同時に吹っ飛ばしてもう一人へと叩き付けた。当然、吹っ飛んだ襲撃者はびくりとも動かない。

「——改めて、二人目」

霊夢の打撃は純粹な筋力によるものではなく、魔力による強化。普段は極限まで手加減しており、本気になれば聖人である神裂にすら大きなダメージを与える程の威力を誇る。

こうして生身の人間に対しては過剰と思える程にまで出力を上げれば、この通り。駆動鎧の装甲による衝撃緩和を無視して意識を刈り取るなど訳なかった。

『お、おいつ!! 大丈夫かつ!!』

「ま、死んではないわよ。……多分ね」

『ツ、テメエ……!』

倒れた仲間の身を案ずる襲撃者に対し、そう言えば激昂した様子でライフルの銃口を向ける。

その瞬間、霊夢は裾に仕込んだ針を一本投擲した。

『なっ!?!』

引き金を引くと、ライフルが破裂する。吸い込まれるように銃口へと入り込んだ細かい針により、暴発を引き起こしたのだ。

思わぬ事態に襲撃者が怯んだ隙に、霊夢は背後に回り込んで容赦なく延髄へ回し蹴りを繰り返す。

『ぐ、は……』

「はい、これで三人目」

倒れ伏す駆動鎧を踏みつけ、霊夢は淡々と呟く。

『――』

襲撃者達が固まる。何なのだこいつは。事前に聞かされてはいたものの、実際に目の当たりにしてみるとその出鱈目さに戦慄する。

ものの数分で三人も無力化された。その事実恐怖し、戦意が削がれていく。

『ツ……臆するな! 我々の目的はそいつの足止めだ! とにかく時間を稼ぐんだ!』

しかし、リーダー格がそう怒声を上げると、他の襲撃者の面々も己を奮い立たせ、武器を構えてこちらへ攻撃を仕掛けてくる。

(……足止め?)

銃撃の雨の中を舞うように避けながら霊夢はその発言に首を捻る。どうやら予想と

は違い、己の排除そのものが目的ではないようだ。

しかし、足止めとは一体……。

(何を企んでるか知らないけど……ソッコーで終わらせた方が良いみたいね)

そう言うものの科学サイドの人間相手に夢想封印等は使えず、針はともかく御札の方も魔術的なものなので使うことは出来ない。

今更な気もするが、面倒だからと非科学の力をひけらかし、余計に面倒な事態になるなど馬鹿馬鹿しい話だ。

要するに、絶賛縛りプレイ中という訳である。

『ちよこまかと……おい！ ランチャーを使い！ 飽和攻撃で仕留める！』

一方、このままでは弾を無駄に消費するだけだと判断したのかりーダーがそう指示するとロケットランチャーを装備した襲撃者達が照準を霊夢が居る方向へと合わせ、一斉に発射し始める。

銃弾よりも大きく、しかし遥かに遅い弾頭。そもそも兵器に疎く、銃器は辛うじて分かるもののロケットランチャーなど見たこともなかった霊夢は後ろから煙を上げながら飛来してくるロケット弾に首を傾げながらも容易く回避するが――。

「なっ――」

自身の背後。着弾した瞬間に爆発したのを見て目を見開く。

「ちよつと、……なんもん、街中でぶつ放してんじやあないわよ」

そう悪態をつく霊夢。襲撃者達は再装填したロケットランチャーを構えることで返答する。

ここは拘置所の近くであるため人気があまり多くないとはいえ、それでも時刻はまだ昼間なのだから人々の往来は普通にある。にも拘わらずそんなのお構い無しとばかりにロケット弾を撃ち込み始めた襲撃者達は、一般人を巻き込むことに対して何ら抵抗が無いということ。

霊夢に当たらなかつたロケット弾は周辺の道路や建物を次々と破壊していく。案の定、突然の爆発に通行人達はパニックになっている様子だった。

「——やめなさいっての」
このままでは大惨事だ。直ぐ様、霊夢は投擲した針を飛翔するロケット弾に命中させる。

強い衝撃を受け、着弾前に起爆するロケット弾。そんな神業に等しき荒業でどうにか被害を一時的に食い止めたのを確認すると霊夢はロケットランチャーを装備した襲撃者の一人へ接近し、大幣を振り下ろしてその装甲を引き剥がしながら地面へと叩き付ける。

無論、一撃で気絶。そのまま他のロケットランチャーを持つ者へ攻撃しようとする――

―が、それよりも先に銃撃され、距離を取った。

「ッ――」

ロケットランチャーを装備していない者は間髪入れずに銃撃してくる。霊夢は銃弾の雨とロケット弾の両方を対処しなければならないだけでなく、周囲への被害にも気を遣わなければならない。

舌打ちし、上空へと飛翔する。空ならば何もなく、被害を抑えられると考えたからだ。ついでに射程外へと逃れられるのなら良いのだが――。

『逃げたぞー！ 追えっ！』

「……でしようね」

当然、元より相手が霊夢である事を知って襲撃してきた者達だ。対抗装備は用意しており、背中に装備したジェットパックで飛行し、追ってくる。

「けど……これである程度は派手に動けるわね」

この高さならば被害は抑えられる。それでも流れ弾で被害が出る可能性があるのだからそれは出来る限り避けたいところだが……。

「――とにかく、こつちから攻めるとしましょうか」

敵の殲滅が優先。そう判断した霊夢は追ってくる襲撃者達へと向き直り、最前列の者に向かって踵落としを繰り返す。

『ごがつ!』

そのまま撃墜。流れるように大幣を振るい、後ろに続く二人の装甲を叩き壊していく。

更に全方位へ針を投擲し、それは距離を取っていた襲撃者達の一部の駆動鎧の関節部分へと突き刺さる。

『ぐう……ッ!?!』

『く、くそっ! 動けねえ……!』

刺さった部位の回路がショートし、動きを止める一部の襲撃者。その後、ジェットパックにも針を突き刺して破壊し、駆動鎧が機能停止した者達は次々と真つ逆さまに落下していく。

あのような鉄の塊の中に居る人間がこの高さから落ちたら大怪我は免れないが、霊夢は然して気にしていなかった。

簡単に人の命を奪えるのだ、奪われる覚悟も持ち合わせているのが道理だろう。

(今ので……十人目くらいかしら? 流石に数が多過ぎるわね。それに動きが悪い)

既に半数を撃破しながらも霊夢は顔をしかめ、内心悪態をつく。想定ではもつと多く撃破していたつもりだったが、手加減云々以前にアウレオルス戦でのダメージが意外と尾を引いており、コンディションが最悪だった。

そんな状態でこうも無双しているのだから、化け物と呼ばれても仕方あるまい。
プルルルッ

「……………」

その時、またしても着信音が鳴り響く。

御坂がかけ直してきたか？ と、戦闘中にも拘わらず霊夢は何ら躊躇い無しに携帯を取り出して宛先を確認する。

予想に反して画面に映る名は、佐天涙子。こんな時にと思いながらも霊夢は電話に出る。当然銃撃は続いていたが、携帯片手に余裕で避けていく。

「もしもし？ 涙子、悪いけど今取り込み中——」

『霊夢さん！ 大変なんです！ み、御坂さんが木山先生と……………！』

「……………」

銃声が鳴り止まない中、応答するなりこちらの言葉を遮って告げられた言葉に、霊夢は耳を疑う。

既に事件は、大詰めを迎えていた。

「ツ……何なのよっ!」

大丈夫なんでしょうね? と、御坂は霊夢の身を案じる感情と通話を切られたことへの腹立たしさから顔をしかめ、乱暴に携帯をしまふ。

「木山の居場所、ね……実のところもう調べはついているのよね」

深呼吸し、感情を落ち着かせた彼女が視線を向ける先にあるのは病院。幻想御手事件の際にも足を運んだ、あのカエル顔の医者が経営する病院である。

霊夢に電話を掛ける前から、御坂は既に木山捜索に乗り出しており、ありとあらゆる施設をハッキングしてその所在を掴んでいた。

「! あの手は……」

そして、病院の前に停車した派手なスポーツカー。ドアが開いて降りてきたのは。

「木山……!」

木山春生。調べた情報通り、理由は不明であるが、彼女はこの病院を往来しているようだ。

何を企んでいるのか。御坂は病院へ入ろうとする木山の後を追い――。

「……居るのだろうか? 御坂美琴」

しかし、木山は足を止めて彼女の名を呼ぶ。何故か気付かされていたようで御坂はギクツと身体を硬直させる。

「久しぶりだな。息災で何よりだ」

「……あなたの方こそ」

以前と何ら変わらぬ姿。意識不明の教え子達を助けたという事情があつたとはいえず大事件を引き起こし、死闘を繰り広げた相手に御坂は警戒心を解かない。

「ここへ最初に来るのは博麗霊夢の方だと思つていたのだが……まあいい。ついて来たまえ」

「え？」

「私が何を企んでいるのか、知りたいのだろうか？ 私としても君を引き込めるのなら、好都合さ」

そう言つて病院へと入つていく木山。何やら心の内を見透かされているようで気に食わないと思ひながらも御坂はその言葉に従つて歩みを進める。

そして、数分程歩き続けて辿り着いたのは薄暗い病室の中、ガラスで仕切られた別室からの光だけが部屋を照らしていた。その奥の別室を覗き込み、御坂は驚いた様子で隣の木山へと尋ねた。

「この子達は……」

「——私の教え子達だ」

ベッドの上で眠る子供達。御坂が記憶で見た姿と瓜二つで、少しばかり成長していた。

まさかこの病院で匿われていたとは。それはつまり——。

「久しぶりだね？」

この病院の院長でもあるカエル顔の医者もまた、木山の協力者ということになる。

彼がこの件に関わつた理由は、余りに単純。幻想御手事件の契機となつた木原幻生が行つた「暴走能力の法則解析用誘爆実験」の被験者すべてを救うこと。

置き去りの子供達の事を聞いた彼は、〃医者の本分〃として子供たちを救うことを決意し、全員を一つところに集め、病状の詳細を知る木山の保釈金を払いもした。

そして、彼らの口から語られた内容に御坂は目を見開く。

「この子供達を救う段階に至って問題が発生した。この子たちの意識が覚醒に向かうと、RSPK症候群の同時多発が引き起こされ、地震に極めて似た震動が起きてしまう」

「え？ それって……」

「そうだ。君達が乱雑開放と呼ぶ、あの現象だ」

結論から言うと、今回の乱雑開放事件を引き起こしていたのは木山だった。

そうなると春上が乱雑開放が発生する度に苦しんでいた理由が分からなくなるが、恐らく彼女の親友だったという少女、枝先絆理が鍵を握るのだと思われる。

「本来ならそうならないようにする為のプログラムの開発に〃フーストサンプル〃という、あの実験の際に作られた〃体晶〃^{オリジナル}の原典が必要だったのだが……その問題は解決した」

「え？」

「ある人物の協力のお蔭でね。研究は著しく進み、もう何の心配も無くこの子供達を目覚めさせることが出来る手段を用立てることに成功した」

「それって、つまり……！」

「ああ。乱雑開放はもう起きない」

断言する木山。彼女としてはファーストサンプルが手に入らないのであれば、たとえ乱雑開放を引き起こしてでも教え子達を覚醒させるつもりだったが、あの元大学教授は約束通りに協力し、より安全な方法を示してくれた。

一方、御坂も木山が嘘を吐いていない様子なのでとりあえずはその言葉を信用するが……。

（あれ……？　木山を保釈したのがリアルゲコ太……じゃなくて、この医者で木山は子供達を救おうとしていてその目処が立った……ってことは別に悪者とか居ないハッピーエンドじゃないこれ？）

厳密には実験の首謀者である『木原幻生』が野放しになっているが、彼は今回の事件とは無関係だ。

（今回ばかりは博麗さんのアテが外れた……ってことなのかしら？）

すべては杞憂だった。となると、今現在霊夢が襲撃を受けているのはまた別の問題なのだろうか。所々疑問が残るが、とにかく無事に事件が解決しそうであると御坂は一安心する。

「残念だけど、そういう訳にはいかないわね？」

突然の闖入者に全員が部屋の入り口へと振り向く。

そこには、リクルートスーツを纏った外国人の女性と、紫色の駆動鎧を着込んだ一団が姿を現していた。

「テレスティーナさんっ!?!」

先進状況救助隊の隊長にして付属研究所所長。友人の危機を救ってくれた彼女の事を御坂は信頼していたが、その登場には驚きを隠せない。

「……誰だ、君達は?」

「『先進状況救助隊』隊長、テレスティーナです。申し訳ありませんが、この子達は我々が預からせていただきます」

「何?」

「心配はいりません。我々『先進状況救助隊』には専門の研究機関が併設されています。子供達は我々の下で覚醒へと導けるでしょう」

「一体何の権限があつてそんなことを……」

「既に統括理事会の許可も得ています。——連れていけ」

テレスティーナの命令と共に、駆動鎧の隊員達がずかずかと入り込み、子供達の居る別室へと迫る。

「ッ、やめろ……!」

これに木山は立ち塞がろうとするが、多勢に無勢であつという間に取り押さえられて

しまう。

「ちよつと待つて！ その、この子達はもう目覚めさせることが出来るって……」

「あら、それは確証があるのかしら？」

「そ、それは……」

「なら、私達の研究機関の方が安全は保証されているわよ。如何なる理由であれ、木山春生は幻想御手事件主犯……警備員として、信用することは出来ないわ」

尤もな意見だ。それこそ実際にその記憶を垣間見た御坂と違い、テレスティーナ達からしてみれば木山が本当に子供達を救おうとしているのかどうかすら疑わしいのだから。

——しかし、どうしようもない違和感に襲われる。

(……あれ?)

そこで御坂は霊夢の言葉を思い出す。他に黒幕が居るとしたら向かうのはここである。そして、彼女を襲撃したのはその際のなんとらスーツ、ロボットみたいなどいう言葉から察するに駆動鎧を装備した連中であろう。

まさか——。確信には至らずとも、御坂はテレスティーナへの不信感を募らせる。

「ツ……ふざけるなッ！ またお前達は……私の元からこの子達を奪うのかっ!」

「何度も申し上げますが、これは既に決定したことです。貴女一人が抵抗したところ

で被験者は全てこちらで保護させていただきます」

木山の言葉を封殺し、テレスティーナは淡々と事を進めていく。

「統括理事会が主導していた実験なんだ。上が動く訳がない。その犬である警備員もまた同様に」

いつかの木山の言葉を思い出す。

彼女をそこまで追い詰めたのは？

子供達をこんな目に遭わせたのは？

——そうだ。この街の組織が信用出来るなど、何故言い切れる。

「……………!!」

御坂の動きは早かった。木山や子供達を巻き込まないように、最小限の電圧で駆動鎧を無力化させようと放電する。

「——やれ」

だが、致命的な敗因はその行為がとつくにお見通しであったこと。

耳障りな騒音が鳴り響くと、広範囲に放たれた電撃は瞬く間に消滅し、御坂は頭を押さえて蹲る。

「ぐうっ……………!!?」

キャパシテイダウン。それもビッグスパイダーの連中が使っていた物よりもずっと

高性能な代物であった。

「はー！ テメエと博麗霊夢の通話はずつと盗聴してたんだよつ！ こうなることは予測済みだつーの！ バーカアツ！」

動けず苦しむ御坂を思い切り蹴り飛ばし、テレスティーナは愉悦に顔を歪め、その下劣な本性を露にする。

「がつ……お、え、つ……う……」

硬いヒールの先が腹部に突き刺さり、御坂は涎を滴しながら悶えて床を転げ回る。

テレスティーナはその姿を嘲笑しながら見下ろし、胸元から取り出したマールチョコを数粒口の中に入れて噛み砕く。

「つたく……おい、何人やられた？」

「六人です。『木原』隊長」

「ちつ……腐つても超能力者^{レベル5}つてことか……」

一瞬の放電にも拘わらず黒こげになった数人の隊員を見てテレスティーナは舌打ちする。

「ツ!? 待て! 『木原』だと……!?」

隊員の発したテレスティーナの苗字に木山が反応する。何故ならその名は――。

「そくよお? 私の名前は、テレスティーナ『木原』ライフライン。お前の恩師の『木

原幻生”の孫娘よ。ぷつ、ぎやははははははは！

「……………ツ!!」

ゲラゲラと嗤う目の前の女の正体を知り、漸く木山にもすべてが見えた。子供達が自分の大事な教え子達が、今また”木原”に狙われているのだと。

「にしても……まで面倒な根回しだったぜ。博麗霊夢の奴のお蔭で計画を何段階も前倒しにする羽目になった上に、奴の足止めまでしなくちゃなんねえんだからな」

愚痴を溢すように、否、実際に愚痴のつもりなのだろう。彼女はそう暴露する。

初めは合同会議への不参加。その次は偽の襲撃予告。そして今回の駆動鎧の襲撃。どれもこれもが乱雑開放事件から博麗霊夢ただ一人を遠ざける為のテレスティーナの策略だった。

「木原隊長、収容準備が整いました」

「そうか。なら、さっさとつれて行け。あの糞巫女が包囲網を突破する前にずらかるぞ」
そう言い、運ばれていく子供達。その姿を木山も御坂もただ見ていることしか出来ない。

「……………るな」

「ああ？」

「ふざける、な……………！ 木原ア……………！」

その時だった。木山の瞳が、充血したように赤く染まった。

同時に、彼女を取り押さえていた駆動鎧が宙を舞う。これに負け犬の遠吠えだと思っていたテレスティーナはその笑みを崩し、目を見開く。

「なっ……テメエ、何でそれを使えるっ!？」

「祇めるなよ、学園都市と事を構えるのに、何も用意していない訳がないだろう!」

多才能力マルチスキル。幻想御手の副作用であり、また最大の研究成果でもある多重能力擬き。

しかし、もはや幻想御手の使用者は存在せず、木山はそれを使えないはずだった。況してや今はキャパシティダウンにより能力は封じられるはずなのに。

「チイツ……お前達! 足止めしろ!」

想定外の事態にテレスティーナは腹立たしげにしながらもそう命令し、自分達は子供達を連れて逃亡を図る。

「っ、待て……!」

当然木山は追おうとするが、駆動鎧達が立ち塞がる。

「邪魔を、するなア……!」

即座に木山は大能力者クラスの念動力で駆動鎧を押し潰し、はね除けるが、すぐに別の駆動鎧が向かう。

そして、テレスティーナと少数の駆動鎧達は子供達と共に、出口まで続くエレベー

ターの中へと入っていった。

絶対能力

テレステイナーナの離脱後、木山は立ち塞がる駆動鎧を多才能力を駆使して撃滅し続け、病室は戦場と化していた。

「ハア……ハア……逃がすものか……!」

息を切らしながら最後の駆動鎧を吹っ飛ばし、木山はテレステイナーナを追おうとする。たとえ自動車を使われていたとしても、まだ距離はそこまで離れていない。空間移動テレポートを使えば、追い付くことは容易いだろう。

「ごはっ……!?!」

しかし、能力を使用しようとした途端、溢れるように吐き出された鮮血。喀血と肺の苦しみから木山は前のめりに倒れ込んでしまう。

「大丈夫かい？ その能力、どうやらかなりの負担があるみたいだね？」

どうにか巻き込まれずに済んだカエル顔の医者が駆け寄る。充血していた眼は元に戻っていたが、代わりにまるで三日三晩飲まず食わずだったかのように痩せこけた顔立ちになっていた。

「けれど、君は幻想御手はもう使つてないはずだよ?」

「……ああ、厳密に言えば、これは多才能力マルチスキルではない。自身の人体配線を改造し、他者の能力の噴出点へとする技術に幻想御手のシステムを組み込んだゲテモノ科学……前者はオリジナルではなく、『恋査』という物を参考にしているらしいが、詳しいことは知らない」

「!…つまり君は……」

「四割ほどは人間ではなくなっている。尤も、その程度ではこの通り長く持たないみたいだが」

そう言つて木山はシャツの襟を引っ張り、胸元を見せる。そこからは肉肌ではなく、硬い金属のプレートが覗いていた。

「……それで良いんだね? 君は?」

「ああ。お蔭様で、もう表立つて服を脱ぐことは出来ないが……これ程の力を得た代償としては些細なものだと言えよう」

実質的なサイボーグ化。そこに何の躊躇も無い。それどころか子供達を救うことに繋がるのならば人体のすべてを機械や得体の知れぬパーツに置き換えたつて木山は良かった。この程度の改造で済まされているのはあくまで自衛目的であるのと、これの施術をした『教授』の善意によるものだった。

対するカエル顔の医者は深刻な表情を浮かべる。精密検査など無くとも彼は一目見て木山に施されたそのの、あまりの歪さを理解したが故に。

恐らく一般的な人間としての生活はもう、期待出来ないのだろう。

「どういう、ことよ」

すると横から声がある。視線を向ければ、御坂が腹を押さえ、壁に半身を預けながらも立っていた。

木山が暴れた影響でキャパシテイダウンも壊れ、動けるようになったようだ。

「無事だったか、良かった」

「ええ。何とか、ね……それよりもさっきの話、本当なの？」

「ああ。本当だとも」

キャパシテイダウンをくらい、テレスティーナに痛め付けられて動けない中、木山が多才能力を使用して駆動鎧の一団を殲滅していたのは見えていた。

てつきりまた幻想御手を利用したのかと思ったが、今の木山の身体の状態を聞いて驚愕すると共に、子供達を救う為ならば自らを改造することも辞さないその覚悟に戦慄した。

「君が気を病むことでは無いよ。これは私自身が望んだこと……こうまでしたというのに、あの子達をみすみす奪われる羽目になってしまったがね」

木山の顔が歪む。己の不甲斐無さが招いてしまった結果だと、彼女は後悔にさいなまれる。

「つ、何言ってるの！ まだ諦めるには早いでしょ！ 皆でテレステイナ……あいつから子供達を助けるわよ！」

そう励ます御坂。霊夢や白井、他の風紀委員達にも声をかけ、全員で救出に向かえばまだ間に合うはずだと。

「……分かった。しかし、一刻を争う事態だ。奴は計画を前倒しにすると言っていた。その計画とやらが私の想像するものだとすれば、あの子達だけではなく、もっと大勢が危険な目に遭う」

「……その計画って？ あいつは子供達を使って一体何を企んでいるの？」

御坂は尋ねる。テレステイナが乱雑開放事件を捜査していたのは、木山の教え子達を確保する為なのは理解出来たが、そうまでして意識不明の置き去り達を手に入れようとした理由が分からない。

単なる実験動物目的にしては、あまりにもリスクが高いように思えた。

「……奴が本当にあの『木原幻生』の孫だとすれば、恐らく祖父の研究を引き継いでいるのだろう」

「……………！ あの実験を主導してたマッドサイエンティスト……」

邪悪な笑みを浮かべる老人の姿が脳裏に過る。あの狂った男が、あれだけのことをしておきながら未だに野放しにされているという事実は御坂としては許せない話だった。

「かつて失敗した『能力体結晶』の完成……能力を強制的に暴走させることで新たな段階へと進める……成程。乱雑開放、それに精神感応を用いれば、確かに理論上は可能なかもしれない」

聡明な木山は速やかに計画の全容を暴く。一方、御坂は理解出来ずに首を傾げる。

「——神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの」

「え？」

「暴走能力による『絶対能力者』への到達……それこそが、テレステイナーナⅡ木原Ⅱライフラインの目的だ」

時は少し遡り、風紀委員支部にて。

「……本当にすみません。白井さん」

頭を下げ、初春は自身の思慮の浅さを心底恥じた。先程面と向かって話し合い、白井

が春上のことをただ頭ごなしに疑っていた訳ではないことを知り、己が如何に未熟であるかを再認識させられたのだ。

まだまだ目の前の同期には敵わない。同い年なのに、何故こうも違うのだろうか、その顔に悔しさを滲ませる。

「もう終わった話ですの。私も言葉足らずでしたの……初めから説明していれば、そもそもこのようにいざこざが起きるはずもなかったのですから」

対する白井はそう言いつつ、今回の件について己の中で戒める。霊夢の助言通りきちんと話し合えば、問題は呆気無く解決した。

それがまるでまだ彼女には到底敵わぬのだと言われているようで、そしてきつとその通りなのだろう。

(……自分の愚かさに呆れますの。もう憧れなんて捨てたつもりだというのに、気が付けば背中を追ってしまっている)

深い溜め息を溢す。博麗霊夢を超えようとしている時点で、未だに彼女に憧れているのを認めているようなものである。

結局のところ己はあの頃と何も変わっていないのではなからうか。

「まあでも仲直りしてくれて本当に良かったです。二人とも変に頑固なところがありましたからねえ」

一方、二人の対話の仲を取り持っていた佐天はうんうんと腕を組んで頷く。

互いに意地を張っているのは明らかだったので霊夢の弁の結果、白井の方が歩み寄る姿勢を見せてくれたのは幸いだった。

「じゃあ、心機一転して、皆で春上さんの疑いを晴らしましょうよ!」

「お姉様もそうですが、あなた方は一般人なのですが……」

「まあまあ。そんな固いこと言わずに」

調査を再開。やはり春上の能力が何かのきっかけに触れて乱雑解放を引き起こしている、と見て間違いは無さそうであるが、彼女自身が自覚して起こしている訳ではない以上、彼女を探しても何も出ないだろう。

説明すべきは、何が引き金となっているか。

「黒子! 居るっ!」

その時だった。電子ロックが解除され、御坂が唐突に乗り込んできた。その隣には、木山が彼女の肩を借りて立っていた。

「お、お姉様ッ!?! それに……木山春生までっ!」

「どういう状況です!?!」

「(ぎょ、ぎょ)めん……! 説明するからちよつと待って……!」

つい数時間前まで一緒に居た友人が鬼気迫る表情で思わぬ人物と共に現れたことに

困惑する一同。それに対して御坂は急いで来たため息を切らしており、呼吸を整えようと胸に手を当てて落ち着かせる。

とりあえず二人はソファアに座らされ、コーヒーとお茶が差し出された。

「実は……」

そして、御坂は病院で起きた一件について語る。

「そんな……あのテレステイナーさんが……」

「まさか、警備員の部署の一つがそのようなことを……」

俄には信じ難い話に驚きを隠せない。木山が幻想御手事件を引き起こした本当の動機についてはこつそりと白井は聞かされていたが、テレステイナーがそのおぞましい非人道的な実験を主導していた人物の孫娘で、しかもその研究を引き継いで置き去りの子供達を拉致し、実験を続けようとしているとは。

この街の闇は深い。分かっていたことではあったが、何と酷い話なのだろうか。

「とにかく、春上衿衣……だったか。彼女も狙われている。速やかに保護してほしい」「わ、分かりましたの！」

木山の言葉に従い、白井は春上へと連絡する。また初春も直ぐ様PCを開いてテレステイナーと子供達の所在を特定せんとしていた。

「あ、そうだつ、霊夢さんにも連絡を……！」

よく分からないが、かなり大変な事態になっているという事は理解した佐天は自分
に出来ることを考え、この場に居ない霊夢にこの事を伝えようと電話を掛ける。

「！ 忘れてた!! 博麗さん襲撃受けているんだったわ!」

「えっ?」

「何?」

「どういうことですか?」

しまったと手を叩き、思い出したように発言する御坂に、視線が集まる。

「木山先生の所へ行く途中で電話してて、その最中に襲われたみたいなの。恐らく相手
は駆動鎧……テレステイナーの仲間よ」

「……成程。あの木原の女め、彼女を脅威とみて真っ先に潰そうとした訳か」

妥当な策だ。幻想御手事件においては木山は己が失敗した時に備えて霊夢に子供達
の事を知らせる為に敢えて気取らせたが、そうでなければ同じように隠蔽か足止め
に徹底するだろう。

「そ、それで、どうなったんですか?」

「途中で切れちゃったから分からない。大丈夫だとは思いますが……」

あの霊夢のことだから遅れを取るようなことはないと思いたいが、相手は武装した警
備員の部隊で駆動鎧を装備している。

一抹の不安が生じるのも無理はない。

「……………あ！ 繋がった！ 霊夢さん！ 大変なんです！ み、御坂さんが木山先生と……………！」

と思っていれば霊夢はすぐに着信に応じ、佐天は慌てながらも状況を説明しようとする。

一先ず無事であることに安堵しつつ、御坂は白井へと視線を向けた。

「黒子。春上さんは？」

「いえ。それが音信不通でして……………」

一向に電話に出ない春上。嫌な予感がする。

「！ 皆さん、これを見てください！」

すると初春が目の前のディスプレイ画面を指差す。そこには、春上が駆動鎧を装備した男達に連行され、車で移送される姿が映っていた。

そして、車には“MAR”と記されている。

「これはっ……………!?!」

「春上さんが体調不良で入院した病院近辺の監視カメラの映像です。時刻は三十分前のものですがこれは……………」

「くっ……………遅かったか……………！」

既に根回しされていた。三十分前だというのなら今頃研究機関に運び込まれているだろう。何もかもが後手に回ってしまっている現状に御坂達は歯噛みする。

もはや一刻の猶予も無い。こうなってしまうては打開策は一つ、テレスティーナが何らかの実験を起こす前に彼女の居場所を突き止め、そこへ直接攻め込んで子供達を助けるしかない。

それはあまりにも、危険な行為であるのは明白だった。

「……上等よ。やってやるわ」

そして、御坂は立ち上がる。

ここまで虚仮にされた挙げ句、大切な友人が危険な目に遭っているのだ。

堪忍袋の緒が限界に達した彼女のその言葉に首を横に振る者は、誰も居なかった。

「——そういうこと」

一方その頃。電話越しから御坂達の会話の内容を聞いた霊夢はここで“足止め”の意味と、己がまんまと策に嵌まり、敵の目的が達成されんとしていることを理解する。

してやられた。しかし、このタイミングで気付けたのは幸いだった。

「なら、遊んでいる暇は無いわね」

空気を蹴り上げ、一気に推進する。まだ襲撃者は半数以上残っているが、相手にするだけ時間の無駄だ。

『！ 止まれ！』

『逃がすものか……！』

その行く手を襲撃者達が阻まんとする。

「邪魔よ——」

ガシャン！ と、すれ違い様に霊夢はこれを瞬く間にスクラップにし、無理矢理突破していく。

(……………？ 数が増えている？)

しかし、その先でまたしても立ち塞がる駆動鎧に眉をひそめる。

そもそもかなりの速度で飛行しているため追い付けるはずがなく、そこで霊夢は己が向かう先から襲撃者達がやって来ていることに気付く。

『やった！ 増援だ！』

『つてことは計画も大詰めつてことか。後少いで隊長がやってくれる……い！』

増援。それもかなりの数。その事実飛び交う鉛弾を避けながら霊夢は舌打ちする。

「その君！ 止まりなさい！」

「……………あん？」

拡声器を使った声。下を見てみれば警備員の部隊がこちらへ対能力者用の武器を向けていた。

そう、この駆動鎧達はMAR所属。通報を受けて駆け付けた警備員の目に映るのは別部署とはいえ同じ組織に属する部隊が一人の能力者と交戦している光景。霊夢の方が

凶悪な犯罪者で襲撃者達はこれを鎮圧しようとしているのだと誤解してしまっても不思議ではない。

間が悪いことにロケットランチャーといった明らかに過剰な武装をしていた者は、既に霊夢が全滅させてしまっている。これすらも敵の思惑なのだろうか。

「ああもう……面倒極まりない……!」

悪態をつき、霊夢は更に速度を上げる。次々と導入されていく駆動鎧を即座に撃滅しながら突き進む。

どうにか間に合えば良いのだが――。

テレステイナは焦っていた。

博麗霊夢さえ足止めすれば、後は問題無いと思っていた。しかし、蓋を開けてみると木山春生が多才能力を保持したままというあまりにも想定外な事態が起こっているではないか。

お陰で多くの人員が潰された。計画の完遂の為に、貴重な戦力は無駄に出来ないというのに。

「実験動物風情に肩入れしちまうお花畑ゴミ女が……ヒヒツ、だが、もうすぐだ。もうすぐで証明できる。私の研究が、私の存在が正しいってことをよなあ……！」

こんなチャンスはもう二度と無いと、思わずにはいられない。

暴走能力の法則解析用誘爆実験の被験者である置き去り達の確保に加え、春上衿衣と

いう特殊な精神感応能力の持ち主の発見……どれもこれもこれもがテレステイナにとって
は天の導きとしか言い様が無い程の幸運であった。

だからこそ、今更引き下がる道理などある訳がない。たとえ破滅しようとも、この実
験だけは完遂してみせる。

「隊長！ 追手が来ました！」

「ちい……もうかよ」

顔をしかめるテレステイナ。現在、彼女らは高速道路を超大型トレーラー車で移動
していたが、相手側も馬鹿ではなく、居場所を突き止められてしまったようだ。

「んで、どこのどいつだ？」

「第三位と木山春生の他5名。うち二人は常盤台の制服を着用していることを確認しま
した。加えて、警備員の車両が数台こちらへ向かっています」

「ほお……流石に糞巫女は居ねえが、結構な団体様じゃねえか。なら、しっかりと歓迎し
てやらねえとなあ」

警備員には統括理事会から圧力が掛けられているはずだが、どうやら情報を掴んだ一
部の馬鹿は我慢ならないらしく、御坂達に協力している。

尤も、そんな連中の武装などが知れる。第三位や他の高位の能力者に対してもこ
ちらにはキャパシティダウンがある他、切り札を用意していた。

多才能力を有した木山春生も単独ならば、脅威とは言えない。

「命令はただ一つ。全力で潰せ。私も出る、不確定要素は残らず潰しておかないとな」
獐猛な笑みを浮かべながらそう言つて部下達を向かわせ、テレステイーナも正面にある紫色に塗装された巨大な人型のコックピットに乗り込んだ。

特製の駆動鎧。対超電磁砲を想定し、テレステイーナが「木原」としての頭脳と技術
を全て注ぎ込んだ彼女の切り札の一つ。

『さあ！ 最終決戦と行こうぜえ！ ヒヤハハハハハハハハ！』

そして、起動した先端科学の結晶が、鋼鉄の扉を突き破つて外へ出る。

彼女は信じて疑わない。

絶対能力者の誕生をさせ、
“天上の意思”に辿り着くのは己であると――。

天上の意思

高速道路の上では、壮絶な戦闘が繰り広げられていた。

子供達を乗せた超大型トレーラー車を守るように囲んだ大型車両からぞろぞろと現れた30人近くの駆動鎧の部隊。それと対峙するのは上層部の命令に歯向かって駆け付けた一部の警備員達と御坂と風紀委員のメンバー。

「おーっほっほっほっ！ 他愛無し！ この私の敵ではございませんね！」
「無駄口叩いてないで手を動かしてくださいまし！」

そして、突風を巻き起こし、駆動鎧を蹴散らしながら高笑いするのは常盤台中学の能力者、婚后光子。何故彼女がこの場に居るのかと言うと、MARに春上が連れ去られた時、実はその現場にたまたま居合わせており、不審に思った彼女は御坂に連絡すると共に、問い詰めて今回の事件の詳細を知る。

すると婚后は自分も協力すると言い、当初は無関係の者を危険な目に遭わせることを躊躇う御坂だったが、今は猫の手も借りたい状況であるとしてその提案を承諾する。当然白井は猛反対していたが、木山からも説得されて渋々頷いた。

結果としては大正解だった。大能力者の空力使いである婚後の戦闘力は勿論のこと、実家が大手の航空会社の彼女は財力に物を言わせてヘリコプターまでも用意してくれ、御坂達はテレスティーナ達に追い付くことに成功する。

「撃て撃て！ 撃つて撃ちまくるじゃんよ！」

警備員を率いる黄泉川が叫ぶ。御坂から話を聞いた彼女は憤慨していた。MARもテレスティーナも以前からきな臭いとは思っていたが、まさかここまで真つ黒だったとは。

対能力者用のショック弾や盾など持ち出せるだけの武装しか持つてきていないが、それでもやるしかあるまい。それに数や装備はMAR側が優っているものの戦況は超能力者に加え、大能力者を二人擁する警備員側が優勢である。

このまま押し切れるかに思われたが――。

『つたく――役にも立たねえカス共だなあ？ こんなクソガキ共なんざ、とつとと縛り上げてケージにぶち込むだけなのによお！』

次の瞬間。閃光が迸り、警備員の車両が宙を舞う。

「なっ……」

御坂と白井は絶句する。その光景に酷く見覚えがあつたからだ。

『どうだあ、超電磁砲？ こいつはテメエの能力の完全コピー。中々の威力で、チビっち

まったんじやねえか？ ヒヤハハハハ！」

トレーラーの鋼鉄の扉を突き破って現れた紫の駆動鎧から響くのは、テレステイナーの声。全員が視線を鋭くする中、彼女は巨大な駆動鎧の上から、その変型して開いた傘の骨のようになった左腕を見せびらかす。

もはや隠す必要などないと言わんばかりに本性を全開にして悦に入るその様子に、曲がりなりにも同僚で面識があった黄泉川らは驚愕するが、構わず言葉を続けた。

『にしても、テメエらには感謝しなきゃいけねえよなあ……お蔭であのクソジジイが残した実験動物共が手に入った。おまけに、あの春上とか言う、私の長年研究してきたテーマにぴったりの能力者まで見つけてくれたんだからよお！』

「春上さんをどうするつもりなんですか！」

春上の名前が出たことで、車の陰で戦闘を避けていた初春が飛び出す。

これにテレステイナーは嘲笑しつつ、ガラスの容器を取り出して見せる。その中には赤い結晶体のようなものが入っていた。

『あのガキの精神感應能力を使って、こいつと共振させるのさ。あのジジイが私から抽出した、最初の暴走能力者の脳内分泌物、通称 “ファーストサンプル” とな』

「！それが、“ファーストサンプル” だど?！」

木山が動揺する。子供達を安全に目覚めさせる為に必要だったモノ。どうしても行

方が分からなかったが、テレスティーナが持っていたのか。

そして、御坂達も思わぬ事実には驚きを隠せない。『私から抽出した』、という発言はつまり、彼女もまた木原幻生の実験を受けていたということ——。

『こいつとあのガキの能力を組み合わせることで、あのガキは私の長年の研究テーマそのものとして生まれ変わる。漸く……漸くだ、私の理論が正しいことが立証されるんだ』

「……絶対能力者の作成」

『ほお？　そこら辺は理解してるみたいだなあ』

その言葉に全員が息を呑む。絶対能力者。それは学園都市の設立に関わる永遠のテーマ。研究者にとっては、確かに求めるべき先なのかも知れない。

しかし、そうして息を呑んでいた全員が次に信じられない言葉を聞いた。

『そう、LEVEL-6！　　神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの！　あの春上とか言うガキは、今回の実験であるガキどもの『頭の中の現実』を使って、生まれ変わるのさ！　——まあ、その過程でガキ共が暴走状態のまま覚醒すりや、この用済みの街も消し飛ぶがな』

まるで自分の研究を学会に発表するように、愉しそうに語るテレスティーナが最後に呟いたその言葉に、警備員は即座に行動を決定。ありつたけの弾丸を巨大駆動鎧へと撃

ち込む。

彼らは子供達の身を案じて上の命令を無視した者。これから多くの子供が住む街を消し飛ばすと聞いて、許せる訳が無かった。

『バアアアアカ！ テメエらゴミ共が、これから栄光を手にする私の邪魔をしようなんて、百万年早えんだよお！』

そんな豆鉄砲など効かぬとばかりにテレスティーナは再びコックピットへと入り込み脚部のホイールを走らせ、その巨大なアームで警備員達を薙ぎ払う。

「やめなさいっての！ あんたの相手は私よ！」

御坂が車の上に磁力で張り付き、電撃の槍を放つ。青白い稲妻は真っ直ぐ巨大駆動鎧へと命中するが――。

『んな攻撃が効くかよッ！』

びくともしない巨大駆動鎧。やはりと言うべきか、電気に対して強い素材で作られているようだ。

「！ なら、レールガンで……！」

直ぐ様コインを取り出す、そこで気付く。この距離からではテレスティーナへ届く前にコインが融けて無くなってしまうことに。

『あはあ、レールガン！ 確かにそいつは馬鹿げた火力だが、射程がたったの50mなの

は知ってんだよお！　そんでもってえ！』

巨大駆動鎧が左腕を向ける。するとその先端のアームが射出された。

「ツ!?!」

『こいつはなあ！　テメエをぶち殺す為に作ったんだ！　勝てる道理なんて粉微塵もねえんだよ実験動物ちゃんよ！』

掠りでもすれば肉体をこっさり削り取るクローアーム。どうやらテレステイナはレールガンの射程外から悠々と攻撃し続けるつもりなようだ。

これに御坂の顔が歪む。現状を打破する方法については思い付いた。要はレールガンの限界射程を伸ばせば良いということ。

けれど、彼女の理性は語る。果たして本当にそれが可能なのだろうか。

『ヒヤハハハハハハハハ！　レベル5も所詮は実験動物の中では上等なだけの話！　レベル6になれなかった役立たずの玩具に過ぎねえんだよ！』

「ツ——ふざけん、なあ！」

その迷いは、迫り来るクローアームとテレステイナのその罵声により消えた。

ゼロ距離で最大火力の電撃を放ち、クローアームを真正面から破壊。破損したアームが空高くを舞っていく。

これにテレステイナは舌打ちするも、即座にもう片方のクローアームも構える。武

装はまだまだ沢山ある。このまま戮り殺してやると悪辣に嗤う。

「——黒子オ！」

御坂が叫ぶ。すると婚后光子と共にMARの駆動鎧を相手にしていた白井は即座に反応し、振り返る。

「あの残骸を私の前まで持って来て！」

「！——仰せのままに！」

一瞬困惑するも御坂の命令だ。従わぬ理由などあるはずもなく、白井は空から落ちるアームの先端まで転移するとそれに触れて御坂の眼前まで転送させる。

何をするつもりなのか、テレスティーナは怪訝な表情を浮かべるもある予測に辿り着き、目を見開く。

『デメエ、まさか……！』

「こんな奴に良い様にやられてちやあ……あいつらに一生勝てるかつつの……！」

脳裏に過るのは二人の姿。片や紅白の巫女、片やツンツン頭の高校生。どちらも心底ムカつく奴で、心底強い。

そんな奴らに勝つ為に、限界を越えないで一体どうしようというのか。

「これが、私の——全力だああああ!!」

閃光が迸り、轟音が鳴り響く。

弾かれるアームの残骸。コインより遙かに巨大でありながらそのスピードは同等かそれ以上であり、余波で何もかもを吹き飛ばしながらそれは巨大駆動鎧へと向かい――

「ちく、しよおうがああああああああああああああああああああ!!」

テレスティーナは見誤っていた。御坂美琴の全力を。過去のデータなど、いくらでも超え得る可能性を秘めているのだということ。

極太の一閃が空間を走り、巨大駆動鎧を容易く消し飛ばして天高くへと伸びて行く。皆が改めて驚愕する。

あれが、学園都市超能力者第三位。常盤台のエース、最高峰の電撃使い、レールガン超電磁砲
“なのだ。”

「やった……い！」

超巨大なレールガンはテレスティーナの乗る巨大駆動鎧を撃破するだけでなく、その勢いのまま付近に居た駆動鎧達も大勢巻き込んで倒した。

白井達の方も見てみれば、あれだけ居た駆動鎧の一団は既に全滅しており、黄泉川達が身柄を拘束していた。

これにて一件落着……とは行かない。早く春上と置き去りの子供達を助けなければ。

「——糞が。死ぬかと思つたぞ、クソガキ」

「ッ!？」

しかし、突如として甲高い耳障りな音が鳴り響き、御坂は頭を押さえて膝を突く。御坂だけではなく、白井や婚后達も同じような状態に陥る。

「ッ、キャパシテイ……ダウン……」

「念のため持ち込んでいて正解だったな。初めから、こうすれば良かったんだが——」

駆動鎧の残骸の中からテレスティーナが這い出てくる。その顔色は悪く、満身創痍であったが、相も変わららず獰猛で下劣な笑みを浮かべていた。

「ッ——まだ生きていたのか……!？」

この中で問題無く動ける木山が急いで車から出て念動力で取り押さえようとするが——。

「させるかよッ! クソアマア!」

しかし、次の瞬間。翳した木山の右腕が内側から弾け飛ぶ。その一部は機械であり、肉片の他に金属の部品が散らばった。

「がああああッ!？」

「ジャミングしたんだ。私の予想通りだったな、キャパシテイダウンが効かない時点で気付くべきだった……薬味のババアが協力するとも思えねえし、技術流出か、それとも

どこぞの誰かが支援したのか？ どっちにしろ、これで多重能力擬きは使ねえだろ」

実のところ一か八かの賭けではあったが、己の推測が的中していたことにテレスティーナは高笑いし、木山を蹴り飛ばす。

「かはっ……」

「木山先生……！」

駆動鎧の脚力で蹴られた木山はそのまま意識を失う。対してテレスティーナは嘲笑しながらも、随分と苛立っている様子だった。

「ここまでやってくれるとは思わなかったよ。実験動物も少しはやるようだ……ヒッ、だが、それももう終わりだ」

テレスティーナは変形した左腕の銃口を動けない御坂へと向ける。

「何だよ、あんただだって犠牲者じゃない……」

「あ？！」

御坂がそう言いながら、立ち上がった。

「ファースト・サンプルを抽出された……つてことはあんたも実験台だったんでしょ？

お祖父さんに能力を暴走させられて、なのにつ——」

「犠牲なんかじゃねえよ。権利を得たのさ、私から生まれた、ファースト・サンプルによつて……絶対能力者^{レベカ}を生み出す権利をなあ！」

一瞬テレスティーナは顔をしかめるもすぐに元の笑みを浮かべ、宣言する。

完全にそう信じて疑っていないとばかりの反応に説得は無意味なのかと、御坂の顔が歪む。このままでは自分だけでなく白井や初春達も殺されてしまう。どうにか能力を使用しようと必死に抵抗するがそれよりも先にチャージが終わり――。

「――ぐああっ!?!」

その時だった。

ヒュン! と一本の針が飛来し、銃身を貫く。それによって穴が空いたレールガンは破損し、チャージ途中で暴発して弾け飛んだ。

何が起こったのか、テレスティーナは左腕に伝わる高熱に苦痛の表情を浮かべ、そしてある人物の存在に気付いた。

「博麗……霊夢……ッ!!」

自分達の真横の位置。山のように積み上げられた駆動鎧の残骸や瓦礫の上から、紅白の巫女は悠然とこちらを見下ろしていた。

「チイツ……化け物め……あの包囲網を、もう突破して来やがったのかよ」

石橋を叩いて破壊しかねない程の人員を割いたつもりだったが、それが杞憂どころかまだまだ不足だったという事実でテレスティーナは啞然とする。

よりにもよって戦力の大半を失った、ここに来てのイレギュラーの介入。もはや計画

は破綻したに等しく、それはテレステイーナにとって受け入れ難い事実であった。

「……ギリギリ間に合った、って認識で良いのかしら?」

あの女が度々電話で名前が出てきたテレ某なのだろう。こちらを見て明らかに動揺する彼女を、霊夢は冷徹な視線で見据える。

「ツ、動くんじゃねえ! 一歩でも動いたらこいつらをぶつ殺すぞ!」

叫ぶテレステイーナ。レールガンは破壊されたが、当然予備があるし、駆動鎧のパワーならば人間一人捻り潰すことなど容易い。

しかし、そんな悪足掻きに対し、霊夢の反応は冷ややかなものだった。

「じゃあ、試してみる? あんたが先に殺すか、私が先にあんたを叩きのめすか」

「……は?」

「私は出来るわよ。あんたが指一本動かすよりも早く、あんたを叩きのめしてやることくらい」

何てことのないかのように言う。一切の揺らぎのない口調で発せられたその言葉は、全くハツタリでもなんでもなく本気で言っているのだと理解させられ、テレステイーナは動揺する。

そして、次の瞬間には霊夢が目の前に立っていた。

「ツ!?! ——があつ!?!」

反応した時には既に遅し。抵抗する暇も無くテレスティーナは巨大な力によって叩き伏せられ、そのまま大地とキスする羽目になる。

「ほらね？ 出来たでしょ」

「……………ッ!？」

あまりにも一瞬のことに、テレスティーナはただただ困惑するしかなかったが、自身が地べたに這いつくばり、霊夢に足蹴にされていることを理解するとその顔に怒りを滲ませる。

超スピード？ 瞬間移動？ 分かりきっていたことではあるが、書庫の^{バンク}データとは違い過ぎた。空中浮遊以外の能力を持つているとしか思えず、一体どれだけ理不尽な存在だということのか。

「畜、生が……………」

「あら？ 他の奴よりも頑丈なのね」

テレスティーナがまだ意識を保っているのを見て霊夢は意外そうに呟く。

彼女の纏う駆動鎧はけばけばしい紫色の見た目だけでなく、性能も段違いなようだ。かといつてどうなるという訳でもないが、また妙な行動に出られても困るので霊夢は今度こそ意識を刈り取らんと更なる一撃を見舞おうと大幣を振り上げる。

（糞、糞、糞糞糞糞糞糞オ!! どうする、どうする、一体どうすりゃいいっ!? この私が

こんなところで終わるってのかつ!? ちげえだろ! 見返してやるんだ! あのクソジジイを! 私の存在価値を否定した何もかもを……!!」

そのとてつない執念が、或いは腐っても科学の申し子たる「木原」が故か。

僅かの刹那の中でテレスティーナは脳味噌をフル回転させ、打開策を導かんと高速で思考する――。

パリン! と、何かが砕ける音が響く。

「!?」

舞い散る赤い破片。頭部を狙ったはずの大幣はテレスティーナががばりと起き上がったがために大きく外れ、彼女が翳した腕へと当たり、在らぬ方向へと捻じ曲げる。

その手に握られていたのは、赤い結晶体。先程御坂達へ見せたファースト・サンプルだった。

あろうことか、テレスティーナは計画の要であるはずのそれを霊夢に破壊させた。そんな意味不明な行為に一同が驚愕する中、霊夢は首を傾げながらも再び攻撃しようとし――。

「? ——ッ!?!」

ピタッと、霊夢の動きが停止する。

砕かれたファースト・サンプルは破片となり、そこからどんどん細かくなって塵と化

す。それは空气中を漂い、迂闊なことに霊夢はこれを吸い込んでしまった。

「な……」

「——ギ、ギャハハハハハ!! ざまあみやがれ! プランBって奴だ!」

直ぐ様異変は起こり、霊夢は顔を歪めて膝をつく。その様子を見て複雑骨折した腕の痛みなど忘れてテレステイナは歓喜の表情を浮かべる。

最後の最後に行った悪足掻きが実を結んだ。既にどう転ぼうが、計画は破綻してしまっているが、それでも何もかもを台無しにしてくれた憎き存在に、一矢報いることが出来たのだ。

「ファースト・サンプルを直接投与したんだ! 運が良けりや絶対能力者になれるかもしねえが、どっちにしろ負担によってテメエの肉体は崩壊する!」

「ぐっ……ファースト……?」

それはテレステイナが万が一自身の計画が破綻した時の為に用意したサブプラン。別の能力者にファースト・サンプルを使用し、その能力を暴走させる。予定では自身の計画を邪魔する御坂美琴……そして博麗霊夢に投与するつもりであり、予定通り決行した。

学園都市の裏で蔓延る“体晶”のオリジナルであるそれを高位の能力者に、それも超能力者クラスに使えば、ほんの一瞬でも絶対能力者に至る可能性がある。かつて

ツリーダイヤグラム
樹形図の設計者には絶望的な答えを出されたその理論を彼女は躊躇い無く実行に移す。

失敗しても構わない。上述したようにこれは計画を破綻させた存在への憂さ晴らしなのだから——。

「このままでもくたばるだろうが、もう許さねエ……死にやがれ想定外！」
イレギュラー

そう叫んでテレステーナは肩部の収納スペースから取り出したのは大型の散弾銃。ショットガン
一発で人体をズタズタの蜂の巣にするその銃口を霊夢へと向け、微塵の躊躇も無く引き金を引く。

「博麗さん……!!」

御坂が止めようとするが、キャパシティダウンの影響はまだ続いているし、たとえそれが無かったとしてもこのタイミングでは間に合わない。

そして、乾いた銃声が響く。その次の光景を予測してしまい、思わず御坂達は目を伏せる——。

「——は？」

しかし、銃声の次に聴こえたのは弾丸が肉を抉る音でも、人が倒れる音でもなくテレステーナのその間抜けな声。

恐る恐る目を開けてみれば、霊夢は健在のままそこに立っていた。

「何が……今のは……すり抜け……？」

茫然とするテレステイナ。確かに当たったはずだ、避ける素振りどころか霊夢は動きもしなかった。

にも拘わらず彼女は全くの無傷で、着弾したのは後ろの壁。理解不能な、有り得ない光景を前に、テレステイナは動揺を隠せない。

（どういうことだ？　これではまるで銃弾がすり抜けたような……そんな馬鹿な話が——!?）

すると突然テレステイナの顔が固まる。

「ま、まさか……グラビティルーラーテメエの無重制御は、空中浮遊ってのは、重力操作ってのは……そういうことなのかッ!？」

聡明であるが故に、テレステイナは戸惑いながらも即座にある結論に辿り着き、しかしそれは科学者にとつては、あまりにも信じ難いものだった。

だが、もしもそうであるとすれば、説明が付く。付いてしまうのだ。

「——懐かしい感覚ね」

一方、霊夢は立っていた。今しがたまでしていた歪んだ顔ではなく、涼しげな表情を浮かべ、コキコキと気だるげに首を回す。

「なっ……?!?　暴走してねえのか……?!?」

またしても驚愕させられる。強制的に何倍も出力を引き上げられた　“未知の領域”

に脳や身体が耐えられるはずがなく、暴走しない訳がない。

しかし、実際はどうだ。霊夢は最初こそ苦しんだように見えたが、今は暴走した様子も無く、出力が大幅に上がった能力を平然と制御下に置いていた。

単純な話として、彼女にとって今の状態は「未知の領域」ではなく、既に到達している。「既知の領域」であり、ある意味戻った状態なのだが、そんなことを知る由もないテレスティーナは訳が分からず、混乱し、そして理解する。

「さて、と……よくもやってくれたわね？　ま、多少は感謝するわ。お蔭でまた思い出せた」

——この少女に常識は通用しないのだと。

「ヒ、ヒヒツ……けひひっ」

笑う。ただ笑う。笑うしかなかった。

霊夢が歩みを進め、先程のように大幣を振り上げ、テレスティーナへと迫る。

（ああ。糞が。もう終わりかよ。けどまあ……最後の最後で面白れエモンが見れた）

そこに恐怖はなく、狂喜に満ちている。絶対能力者の作成には失敗したが、より恐ろしい事実を知れた。己の復讐は成せるだろうと彼女は喜びに打ち震える。

（ヒヤハツ、ヒヤハハハハハハ！　ざまあみろクソジジイ！　テメエの計画は必ず破綻する！　私のように全部台無しにされるんだ！　この女がこの街に、この世界に存在

する限り絶対になア！)

それは確信だった。

博麗靈夢という存在が自分の予想する通りなのであれば、木原幻生の掌に収まるような存在であるはずがない。必ずやあの老骨は身を滅ぼす結果になる。

“神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの”。

木原幻生はそれを絶対能力者であると提唱し、多くの科学者もそう思っている。統括理事長のアレイスターが何を考えるのかなど知りもしないが、それでもその過程に絶対能力に近い何かがあるのだろう。

けれど、テレスティーナは思うのだ。

ああ、これだ、これが、これこそが、正しく“天上”の――。

ゴツという頭部の衝撃と共に意識が暗転する寸前。テレスティーナが見たのは、無慈悲で妖しく、そして美しい二色蝶の姿だった。

マネーカード

「ひよひよひよ……超能力者の能力は、いつ見ても心躍るものがあるがね」

他に人の気配の無い部屋で、モニターの画面とにらめっこをしている白衣の老人男性が一人。彼の頭の生え際は半分以上後退しており、前頭部の左側には特徴的なシミがあり、そしてその瞳には狂気を孕んでいた。

「だが、これでは絶対能力者には届かん」

失望……というよりは、とうの昔に諦めていて、今更失望するまでも無いと言った風に溜息混じりに吐き捨てる。

「だけど『博麗霊夢』君か。以前から気になっていたが、やはり面白い存在だね」

切り替わった映像に映るのは、最新鋭の駆動鎧の軍勢を一方的に蹂躪する紅白の巫女。枠外の原石にして最大のイレギュラー。

出来得ることならばテストティーナを打倒する場面も観たかったが、残念ながら映像には残っていないかった。まるで妨害されているように、博麗霊夢の映像記録はその暴れっぷりとは裏腹にあまりにも少なかった。

何故かは大体予想が付く。恐らく彼女の能力開発担当が関わっているのだろう。博麗靈夢に干渉しようものなら、研究機関ごと叩き潰す異端の科学者……その思考回路は科学の申し子たる「木原」の一人である男にも理解が及ばなかった。

「現状最も可能性があるのは一方通行君の他には彼女くらいだね。ただまあ……あまりにも不確定要素が過ぎるが。アレもどうせなら僕のお下がりの置き去りなんて使わずに博麗君を使えば良かったというのに……まあ、アレにそんな度胸は無かったという訳か」

実の孫娘をアレ呼ばわりしながら男、「木原幻生」は笑う。愉しそうに、老人とは思えぬ、子供のような笑顔で。

そして、いつの間にかモニターの画面はまた切り替わっていた。

——「絶対能力進化計画」——。

でかでかと映し出されている、自身がかつて書き上げた論文のタイトル。これこそが幻生が掲げる研究であった。

「科学の発展は犠牲無くしては有り得ん。よつて、あの惨めな出来損ないは落第だ。アレはもはや「木原」の名を冠するに値しない」

それから程なくして、全ての電子記録や警備員の捜査記録から、テレステイナーのミドルネームの「木原」の二文字は省略あるいは抹消され、テレステイナーライフライ

ンの表記に統一されるのだった。

「ふうん……何も知らないみたいね」

そして、木原幻生は気付いていない。己の命運が既に握られている状況だということ
を。

暗闇の中、誰も居ないはずの部屋ではしやく幻生を端末の画面越しから赤髪の女――

“教授”は頬杖を突き、つまらなさそうに見下ろす。

「残念ね。こんな素敵な光景が観れないなんて」

興味を失ったとばかりに教授は端末の電源を切り、遊び終えた玩具のようにその辺に
放り捨てると手をスライドさせるように自分の前に翳す。

すると空間から滲み出るようにホログラムの画面が出現し、そこには博麗霊夢の姿が
映し出されている。

いつもと変わらぬ、しかし決定的に何かが違う。既に教授はこの映像を何度も何度も
食い入るように観ていた。

「テレステイーナ……だったかしら。元モルモットの木原になんて全く期待していな
かったのだけれど、これはこれは……思わぬ成果だわ。ふふ、戸惑いこそが人生。いつ
でも気付きというのは思いもよらぬ所から来るものなのね」

徹底的に扱き下ろした幻生と違い、教授の方はテレステイーナを称賛する。

当て馬にすらならない、木山春生に恩を売る過程で軽く処理されて終わるだけの有象無象の塵芥のはずだったが、意外にも超能力者や聖人、錬金術師を差し置いてこれまでの誰よりも「彼女」の力を引き出した。

それも魔術の側面ではなく、科学の側面を。尤も、どちらともそこに属するかと言えば、些か疑問ではあるが、教授には関係の無い話だ。

体晶による能力の暴走など一時的なものに過ぎないかもしれないが、それでも「無重制御」の真髄、その片鱗を露にさせたことは偉業に等しい。

「ウッフ素敵。とっても、とてもとても素敵。やっぱり知ると見るのでは違うわね……」
「アレイスター」の方はこれを知っているのかしら？ 滞空回線頼りなら無理でしようけど」

彼女は非常に機嫌が良かった。あの片田舎の集落で博麗霊夢を見つけ、この街に引き込んでから早数年。とある少年ただ一人の為だけに存在するこの街の環境ならば順当に成長していくかと思えば、待っていたのは停滞だった。

あまりにも役不足。霊夢に落ち度があるとすれば、ひとえに強過ぎたことだろう。

だからこそ、今回の進展は教授にとつて実に喜ばしいことなのだ。そこらの魔術師をけしかけるだけではこうはならなかった。

「さて、これなら多少早めても問題無いわね。『董子ちゃん』の方も色々と動いている

みたいだし……いずれこの街を更なる混沌が襲う。それまでに霊夢には頑張ってもらわないと」

とても、とてもとても愉しそうに、待ち遠しそうに教授は笑みを浮かべ、くるくると椅子を回す。

「科学の発展は犠牲無くしては有り得ない……そうね、何事にも犠牲は付き物。けれど、何もかもを世界すらも犠牲にしたところで発展するとも限らず、そして発展した先に何かあるかと言えば、何も無い。ただ腐り落ちていくだけよ」

絶対能力者、天上の意思、神浄——この学園都市が、あの“人間”が成そうとしている事象に興味が無いと言えば嘘になるが、所詮は些末事に過ぎなかった。

彼女が求めるのは別のモノ。

「?????」

ぼろりと囁かれたその言葉は、雑音混じりでまともに聞き取れるようなものではなかった。

テレステイナーナ^{II}木原^{II}ライフラインは逮捕され、世間を騒がせた乱雑開放事件^{ホルターガイスト}については解決した。

置き去りの子供達も無事に救出され、一番の問題であつた昏睡状態からの覚醒も既に木山は安全に覚醒させる方法を用意していたようで問題無く目覚めることが出来た。

春上は漸く親友と再会し、木山も悲願を達成し、久々に教え子達の声を聞いて涙を流していた。彼らは再び学園都市の闇に巻き込まれぬよう黄泉川ら警備員が責任を持つて保護し、今は経過観察のためしばらく入院するも、退院した後は普通に学校に通えるという。

まだ問題は幾つか残っているものの、こうして事件自体は大団円で終わった。

それから数日後。霊夢はと言うと……。

「祝！ 任期満了！ 風紀委員退職！」

「いえーい」

いつものファミレス。昼下がりにこうして佐天と駄弁るのも日課になりつつあった。

今朝、漸く期限が過ぎて霊夢は風紀委員という職から解放された。固法や初春からは名残惜しようにされるも、やはり労働は糞なので躊躇無く辞表を渡した。

因みに白井は終始不機嫌そうにこちらを睨んでいた。別れの挨拶をすればプイッとそっぽを向かれた。まるで子供のような反応に困惑したが、どうせまた会った時は鬱陶しく説教してくることだろう。

「うーん……でも何だか勿体無いですねえ」

「え？ 何がよ？」

「だって絶対天職じゃないですか？ 幻想御手事件に能力者狩り事件、そしてこの前の乱雑開放事件……あんな短い期間にこんなにも大事件を解決するだなんて」

「あー？ あなたまでそんなこと……第一そんな“短い期間”にこうも事件が起きてんのよ？ ずっとやってたら過労死するでしょうが」

何度も言うが、労働は糞である。ほぼボランティアとなれば尚更と言えよう。タダ働きなど真つ平御免だった。

「それにポルターガイストとやらは殆ど蚊帳の外だったわよ。ただあの変なメカメカ軍団をボコってたら勝手に解決してたわ」

「霊夢さんが駆け付けなきゃ危なかったって聞きましたよ？ 私もキャパシティダウンを破壊しようとして動いてましたけど間に合うか分かりませんでしたし……」

「ああ、あの時見ないなと思ってたらそんなことしてたの。あなた」

どうやら佐天も現場に居たらしい。御坂達とは別行動していたのだろうか。

風紀委員である初春はともかく、戦闘力皆無であろう彼女があのような危険な現場に赴くのは流石に無謀ではと霊夢は注意する。

「あははは……確かに思い返してみると一歩間違えれば足手纏いでしたね。結局何も出来ませんでしたし。でもボディーガードとして居候……じゃなくてっ、ルームシェアしてる子がついて来てくれて襲ってくる駆動鎧をバツバツと斬り倒してたんで全然大丈夫でしたよ！」

白井と初春にもこっぴどく叱られたと後頭部を搔く佐天。一方で霊夢は彼女にルームシェアする同居人が居るといふ話は初耳だったため意外そうにする。

それに駆動鎧を倒せるということは高位の能力者の可能性が高い。となると、同級生という訳ではないようだが……。

「それにしても——」

「うん？」

「木山先生……どこに行っちゃったんですかね」

ふと、佐天が咳く。子供達が目覚めた二日後。テレステイナに吹っ飛ばされた腕の治療のため入院していた木山春生は失踪した。

しかし、何者かに拉致されたという訳ではなく、本人の意思によるもの。事前にカエル顔の医者には子供達を頼むという旨の話をし、彼の口座に子供一人一人が成人後も問題無く暮らせるくらいの多額の金が振り込まれたらしい。

突然の失踪に御坂らは困惑。霊夢としてもここにきての重大な手掛かりの喪失はアウレオルスライザードの一件を思い起こさせ、あまり気分は良くなかった。

これで振り出しに戻る……と、言いたいところだが、幸いにも木山には彼女の教え子達という繋がりが残っており、その居場所についても見当はつく。

（『岡崎教授』、ね……何を企んでいるのか知らないけど、今後は目を光らせておかないとね）

脳裏に過るのは、日本人とは思えぬ、しかし染めたにしては色鮮やかな深紅の髪にこれまた真っ赤な衣装を纏った、宗教被れの科学者。霊夢の能力開発担当であり、彼女をこの科学の街へと引き込んだ人物……木山は彼女の下に居るのだろうと霊夢の化け物染みた第六感告げている。彼女ならば多才能力を再現することも容易いだろう。

以前から「教授」が何らかの企てをしており、その計画に己を組み込んでいることに霊夢は気付いていたが、あまりにもどうでも良く、看過していた。

あの日、学園都市という博麗霊夢にとつて苦痛でしかない場所へわざわざ足を運ぼうと思つたのは、あの胡散臭く、気が触れているとしか思えない彼女に「何か」を感じたからだ。それは期待外れな結果だったと悲観していたが、今こうして「手掛かり」が舞い込んでくる状況を見るに、やはり正解なのかもしれない。

どうであれ、時間はまだある。教授の企みについては何となく自分の不利益にはならないような気がしているので再び尻尾を出すまでは直接問い質したりといった真似はまだしないつもりだった。

情報は得たのだ。焦つたところで糠喜びで終わってしまったては骨折り損。そうならぬよう過度に期待せず、のんびり気儘に探そうと霊夢は考える。

けれど、出来得ることなら、少女のうちにとは思うが――。

「ま、そのうち見付かるでしょ。黄泉川先生も辻斬り逮捕のついでに搜索するつて言つてたし」

「そうですかねえ……ん？ 辻斬りつて何です？」

「ん？ あー、切り裂き魔のことよ」

霊夢がその口になると、佐天が僅かに瞠目する。

「あ、ああ……切り裂き魔のことですか。まだ捕まっていないんですねー。最近めつきり音沙汰ないのでもう学園都市から逃げたとか高位の能力者に返り討ちに遭ったとか色々噂されてますけど……」

思えば、未だに野放しな切り裂き魔。てつきりすぐにまた闇討ちしてくるかと思えば、霊夢は思っていたが、その気配は無く、新たな被害すら出ていない。

ただ、奴はまだこの街に居る。それだけは確信を持って言える。

「へえ……そういえば霊夢さんは戦ったんでしたよね？　切り裂き魔と」

「ええ。まんまと逃げられたけど」

「……さつき辻斬り、って呼んでましたけど何か理由があるんですか？」

「え？」

「あ、いえつ、ちよつと気になって」

「別に大した理由なんてないわよ。刀をブンブン振り回して襲ってくるんだから切り裂き魔というよりも辻斬りでしょ」

「！　刀……ですか」

「？」

切り裂き魔についてやたらと尋ねてきたかと思えば不審な態度を見せる佐天に、霊夢は眉をひそめる。

「涙子……あなた……」

「え？ な、何です？」

「ジツと見つめてくる霊夢に露骨に動揺してそわそわし始める佐天。明らかに怪しいが……」。

「……また首を突つ込もうつてんじやないでしょうね？ やめなさいよ。あいつ、見境無しって訳じゃあないみたいだけれど、下手すりゃ怪我じゃ済まないわよ」

「わ、分かつてますって。流石に私もそんな自殺行為みたいなことしませんよ」

「どうだか……ま、夜は出歩かないってのは当たり前として、危ない目に遭いそうになつたらすぐに連絡してちょうだい。駆け付けるから」

佐天の並々ならぬ好奇心の強さはこれまでの関わりでよく分かっている。加えて、無能力者であることへのコンプレックスや自分も役に立ちたいという意識も強い。これに更に元々の行動力の高さが相まってトラブルメーカーの誕生である。

宇佐見董子も似たようなタイプであるが、曲がりなりにも高い実力を兼ね備える彼女と違い、本当に力の無い一般人なので霊夢は危なっかしくて目が離せない。

（ハア……私の周りにはどうしてこう、面倒事を呼び込む奴ばっか集まるのかしら）

漏れる溜め息。しかし、そういう意味では風紀委員を辞められたのは僥倖だった。

佐天経由で関わる可能性はあるものの仕事ではないのだから自ら進んで捜査するよ

うなことは無くなる。尤も、上条当麻という特大の疫病神が居るため多少楽できるくらいだろうが……。

「りよ、了解です。くれぐれも気を付けます。あ、そういうえば霊夢さん！　こんな話知ってます？」

すると佐天が話題を変える。これまた露骨ではあったが、霊夢としてもそこまで口煩く言うつもりはないので追及はしない。

「何？　また変な都市伝説でも拾ってきた？」

「お、ゴ名答！　流石ですね！」

都市伝説。これも何となく宇佐見堇子を連想させた。実のところ彼女は超が付く程のオカルト趣味ではあるが、都市伝説について言及したことは記憶にある限り一度も無い。にも拘わらず霊夢は都市伝説を聞くと真つ先に思い浮かぶのが宇佐見であった。

「じゃーん！　見てくださいこれ！」

「……何それ？」

すると佐天が自慢気に見せてきたのは数枚のカード。見覚えのないそれに霊夢は首を傾げる。

「マネーカードですよ、マネーカード」

「マネー？　お金なのそれ？」

「その通りです！」

学園都市内で流通している電子貨幣制度の一つ。一般的な電子マネーと同様、金額を予めチャージしておき、会計の際に提示して利用するものだ。

どうやらここ数日、第七学区のあちこちでこのマネーカードが封筒に入った状態では撒かれていた事案が発生しているらしい。主に人通りが少ない路地にて発見され、金額は千円くらいから多いものでは五万円を超えるという。

「ふうん……わざとお金を捨てるだなんて、罰当たりな奴が居たものねえ」

「ですよね！ きつと金持ちの道楽ですよ！ 私達が犬のように探し回って拾ってるのを見て嘲笑ってるんです！ いやーほんとありがとうございます！ ブルジョア万歳！」

「プライド無いわね」

天を仰いで感謝する佐天に霊夢は呆れつつもそのテンションの高さに納得する。

一般的な低位の能力者にとつて金銭面は死活問題なのは上条を筆頭とした貧乏学生を見ていれば分かることであり、特に頻繁に洋服などを買う佐天は日頃からかなり金欠なのは容易に想像が付く。

そんな彼女らにとつては今回のマネーカード騒動は大イベントなのだろう。

「霊夢さんも一緒に集めましょうよ。小遣いはいくらあつても困りませんよ？」

「……確かに金はあるに越したことはないけどねえ」

佐天の誘いに霊夢は難色を示す。そもそも特段彼女は金銭に執着しておらず、ちまちま拾い集めるといふ作業への面倒臭さが勝っていた。

無論、この現代社会の中で生きてゆくには何よりも金が必要不可欠であるということ、裕福ではない養父に育てられた霊夢は嫌というほど理解しているが、時は金なりという言葉があるように、わざわざ時間という人間にとつては有限かつ貴重な代物を割いてまでマネーカード拾いに興じる必要性は感じられなかった。

「えー、霊夢さんはお金に困ってないんですか？」

「そうね。流石に食つてく分には問題無いわ。たまに酒——こほん、食事したりとか本買ったりとか色々なことに散財して無くなることはあるけど」

異能力者^{レベル2}として登録されている霊夢の学園都市からの支援金は決して多くはない。持ち前の貧乏性と養父との生活で覚えた節制により何とか遣り繰り出来ているものの基本的には自堕落に好きなように生きてるので定期的に金欠に陥る。

要するに、上条や佐天ほどではないが、霊夢も金を持っていないかった。

「……本？ 霊夢さん、本を読むんですか？」

「ええ。結構読むわよ」

「へえ、意外ですななんか」

「どういう意味よ」

「言いかけた女子高生が決して飲まぬような代物とおぼしき発言を聞き流しつつ、イメージとはかけ離れた趣味が判明して驚く佐天。そんな反応に霊夢は失礼ねと顔をしかめる。

そう、こう見えて霊夢は読書家なのだ。

「どんなの読むんですか？」

「そうね……基本的に小説、特に探偵とかが活躍する推理物が好きね」

「はえー、これまた意外です」

しかし、恋愛小説等よりはずつとイメージは湧く。見た目だけなら剣と魔法のファンタジー物とかを読みそうではあるが。

推理小説。日本だと江戸川乱歩や横溝正史。海外だとコナン・ドイルやレイモンド・チャンドラー、アガサ・クリステイ等々。有名どころしか知らない佐天が思い浮かぶのはこれくらいであり、またあまり読んだことはない。彼女が読むのは主に漫画やゴシップであるし、最近は電子書籍もあるため紙の本自体を手取る機会が少なくなりつつあった。

「ハマっちゃうとずつと読んでしまうのよね。気付いたら三日三晩読み明かして危うく飢え死にするところだった事もあったわ」

「え……」

「んで、そこからずっと寝てたら不登校扱いになって先生とかが騒ぎ出して本当にだるかった。思えば、あれが風紀委員にぶち込まれる切っ掛けだったかしら」

「の、のめり込むタイプなんですね……」

あつけらかんと言う霊夢。その予想を遥かに上回る読書好きっぷりに佐天は若干ド
ン引きしてしまう。

「犯人を予想するのが楽しいのよね。意外な展開だったりするし、的中することもあれば外れることもある。そういうのは面白くて、なかなか良い暇潰しになるわ」

流石の霊夢も実際に会うことも出来ない文字や数枚の挿絵の中にのみしか存在しない推理小説の内容に関しては持ち前の勘が上手く働かず、かといっていつものように片っ端から怪しい奴を潰していくような行為も出来ない。

故に、提示された断片的な手掛かりや台詞、登場人物達の人間関係から動機や犯行の方法を推理・考察し、その読みが当たっているかどうかと読み進めていく感覚はとても新鮮で楽しめた。

「へえー、私も読んでみようかな、小説」

「あらそう？　じゃあ今度オススメの奴を何冊か見繕ってくるわよ」

「本当ですか！　ありがとうございます！」

も拾いましたし」

「ふうん……それっていくら？」

「大体10万円くらいですかね」

「じゅっ……本当に？」

驚きの金額に霊夢は目を見開く。そんなに拾えるものなのか。

「……少し舐めていたわね」

「おお？ やる気になっちゃいました？ 流石の霊夢さんも日本銀行券の魅力には敵い

ませんか」

「じゃあ、一緒に探して二人で山分けて話でどう？」

顎に手を当て、一考したかと思うと霊夢がそう提案する。それはつまり方が一少しか見つからなくても現時点で佐天が拾っている十万の半分である五万は最低保証されるということ。

なかなか狡い奴である。

「勿論です！ 一緒に成金の仲間入りを果たしましょう！」

そして、そんな霊夢の策略になど気付かず、二人で一緒に探すという部分への嬉しさから佐天は快諾する。

(……にしても)

何故マネーカードをばら撒いているのか。単なる善意や物好きの犯行なら良いが、場所が路地裏なのもあって何らかの思惑が絡んでいるのかもしれない。

例えばそう、マネーカードを拾わせることで人の通らない場所を探っているとか、逆に人が居ない場所を潰しているのだから——。

(ま、どうでもいいか)

だとしたら何になるのかと言えば、何にもならない。もはや風紀委員ではない霊夢には微塵も関係無い話だった。

「あ、それと霊夢さん。もう一つ変な噂が流れてるんですよ」

すると佐天が思い出したように口にする。

「——この学園都市に自分そっくりな人間……『ドツペルゲンガー』が現れるみたいなんです」

霊夢の知らぬうちに、新たな物語が幕を開けようとしていた——。

偽者

『“最強”のその先に興味はないかね?』

いつものように、身の程知らずの馬鹿共を蹂躪した帰りに何処ぞの研究機関の使いだと思われる黒服の男はそう問い掛けてきた。

無視して立ち去るつもりだった。学園都市のイカれた科学者共の犬の話など、早急に切り捨てるのが得策だと。関わりたくもなかった。

しかし、足を止めてしまった。

『君は現在“学園都市最強”などと呼ばれているそうだが、その最強は無能なスキルアウト達が気軽に挑める程度のものでしかない。先程も絡まれていたようだが……この先もそんなことを延々と繰り返すのかね?』

黙して語らない。それに対し、男は自分の感情を見透かしたように笑みを浮かべ、言葉が続ける。

『“最強”から“絶対”へと昇華すれば、その退屈な日々も変わると思うが……』

くだらない、と切り捨てることは出来なかった。男の言っていることは正しく真実で

あり、現に馬鹿共は何千、何億回繰り返そうと結果は変わらないというのに、飽きずに挑んでくる。

それはこの「最強」の称号が単なる飾りに過ぎないからではなからうか。

彼は理解していた。己が最強であつても、無敵ではないことを。否、今となつては本当に最強であるかでさえ不明瞭だつた。

己を傷付けたあの紅白の巫女は、まだ全く本気など出していなかったのだから。その事実を知られてしまえば、挑みに来る馬鹿共は更に膨れ上がるだろう。

あの女以外に己に対抗し得る存在が居ないとも限らない。そう考えると、恐らくこのままではこの闘争に明け暮れる日々はいつまで経つても、それこそ死ぬまで永遠に終わらないのではと思わずにはいられず、辟易する。

ならば更なる段階ステージへと登り詰めれば。例えばそう、挑むのが馬鹿馬鹿しいと赤子でも分かる程に、そもそも挑もうと思うことすら許されない程の絶対的な力があれば、この現状を打破することが出来るのではないか。

男の言葉は、天恵のようであつた。

『改めて提案しよう。我々の計画に乗る気はないか？
アクセラレータ 一方通行』

思い出される古い記憶。己にまだちゃんとした日本人の名前があつた頃。力を手にすれば、誰も傷付けることはないと思つていた、そう信じていた純粹無垢で愚かだつた

時代。

しかし、現実は違った。逆に多くを傷付けた。最強程度では駄目だった。であれば、なるしかあるまい。

無敵の存在に。『絶対』とやらに。

そうすれば、きつと——。

「チツ……くだらねエ事を思い出した」

脳裏に過つたあの日の光景。一方通行は舌打ちし、苛立った様子で路地裏を歩いていた。

最近九千回を越えた『実験』の帰り。もうすぐ折り返し地点といったところで一方通行は微塵の疲労も溜まっていないが、それでも内心溜め息を溢す。

(この調子で、本当に絶対能力者⁶とやらになれるンだろうなア?)

あの話に乗った結果、一方通行は二万体系ものクローンと戦闘し、殺害するという気が遠くなる実験を続ける羽目になっている。

最初の頃は立っただけで勝手に死んでいったが、今ではそれなりに戦いが成立していた。しかし、結局のところ彼の反射を破るには至っていないので一方的な蹂躪には変わらず、いまい変化を感じていなかった。

残り一萬弱で絶対能力に進化する程に己を追い詰めるのが出来るのかと不安にな

るのは当然だろう。

もしも、二万の命を奪っておいて、それがすべて無駄だったとしたら――。

(……馬鹿か。アイツらは人形だ。生きてるフリをした、血と糞尿の詰まったただの肉袋だろオが)

最初の個体を殺したのは、ほぼ事故みたいなものだった。その際、研究員から詳細は聞いた。

妹達シスターズ。元々は量産型能力者計画レデイオノイズというので超能力者第三位の量産を目的に製造され

たが、最終段階でオリジナルの1%にも満たない欠陥品であることが判明し、計画は頓挫。そのまま廃棄されてしまうところを絶対能力進化計画レベル6ソフトへと流用されて今に至る

……とのことだ。

つまり、ただ殺される為だけに生み出された存在だということ。つくづく哀れだなと思いつつも一方通行としては躊躇無く殺せるので助かる。そもそも人間扱いをしていないので殺すという感覚にさえならない程に麻痺してしまっていた。

現に彼女らは一切の感情を見せず、一方通行に殺される事が自分達の生きる目的だと微塵も疑っていないのだ。その姿は心底気味が悪く、とてもではないが、同じ人間だとは思えない。

だからアレは人の形をした作り物だと。そう思うことにした。

「面倒くせエなア……」

最初の方は一日で百人以上も相手にしていたが、最近はこれまでの戦闘パターンを学習し、性能も上がって一日数人ペースとかなり遅い。少なくとも実験完遂には残り一年以上は掛かりそうである。

気長にやるしかあるまい。一先ずコンビニへ寄って缶コーヒーでも買ってから夜間からの実験まで自宅で寝るとしよう。

「多分ここに……あ、あつたあつた」

「——あん？」

角を曲がった時だった。聞き覚えのある声がして視線を向けると、これまた見覚えのある、というか忘れるはずの無い紅白が体を屈め、自販機の下回りを覗き込んでいた。

「……何やってんだテメエ？」

「あん？——って、アクセラじゃん」

理解の及ばぬ行為に困惑しながらも思わず問い掛ければ、紅白は何ということのないように体を起こしてこちらへ視線を送る。

「しばらくぶりね」

「オイ腋巫女……遂に小銭を拾い集めるまで落ちぶれたンじゃねエだろオナア？」

「失礼ね。ま、お金を拾ってるのは正解だけど」

「ハア？」

「なんでもマネーカードって奴が、最近あちこちにばら撒かれてるらしいの。結構稼げるのよ？ もう10万ちよいも集まったし」

そう言つて紅白が——博麗霊夢は先程拾つた一枚のカードを見せる。これに結局金じゃねエかと一方通行は呆れた様子で頭を搔く。

唯一己に傷を付けた女が、こうも情けない行動をしている姿など見たくはなかった。

「……くだらねエ」

「あー？ そりや金持ちの第一位様にとつちやどうでもいいんでしようけどこつちは死活問題なのよ」

「前のファミレスの時もそオだが、金に困つてンならとつとと真面目にシステムスキャン身体検査受けりや良いじゃねエか。テメエなら大能力者レベル4は固いだろ」

シンプルに能力の強度が上がれば豊潤な支援金が貰える。理由は知らないが、霊夢が能力のレベルを偽っているのは一方通行はおろか誰の目から見ても明らか。それで金銭に困っているのだと言うのならば自業自得と言えよう。

「嫌よ、面倒臭い」

しかし、そんなまじごうことなき正論で指摘すれば彼女は面倒の一言で切り捨てる。彼女にとってはその程度のことなのだろう。

「……相変わらず理解出来ねエ思考回路してやがる」

何を考えているのやら。その不可解な行動原理に一方通行は考えるだけ無駄だと判断した。

「ふん、そう言うあんたは何やってんの？」

それに対して霊夢は鼻を鳴らし、不意に問い掛ける。

「……テメエに教える義理はねエよ」

気が付けば、自然とそう口にしていた。実験の帰りだと、正直に言つて余計な詮索をされたり、介入されたりしたら堪ったものではないから……だと、思う。

或いは単純に彼女に実験のことを知られたくなかったからかもしれない。だとすれば虫酸が走る話だと一方通行はまるで他人事のような反応を見せ、顔をしかめる。

今更外聞など気にしてどうするのだ。己にそんな権利など、あるはずもないというのに。

「あつそ。何やってんのか知らないけどマネーカード、いらなんだつたら拾わずに置いといてよ。」

「誰が拾うかよ馬鹿が」

対する霊夢は然して興味が無いようで問い詰めてくるような真似はせず、あつさりと会話を終わらせ、踵を返す。

当然の反応だった。質問したこと自体が単なる気紛れ。彼女からすれば一方通行が何処で何をしているかなど、至極どうでもいい事象なのだから。

「つたく……何がマネーカードだ。良いよなア、アイツはいつも気楽そうで……心底ムカつきやがる」

去つて行く後ろ姿を見据えながら、一方通行は溜め息と共にぽつりと溢す。

嫉妬。羨望。そう形容すべき負の感情が殺意と共にドス黒いモノとなつて渦巻く。

博麗霊夢は明らかな強者だ。それこそ学園都市最強の一方通行に比肩し得るかもしれない程の実力を秘めており、これを隠そうともしていない。

だが、何もかもが対極だった。あれはいつだったか、一方通行は自分に傷を負わせた少女が送る日常的一幕を偶然目撃した。

あの奇怪な巫女装束ではなく、学生服を着た彼女は多くの人間に囲まれながら登校していた。学友だと思われる彼らの目にはかつて一方通行を前にした人々のような恐怖や畏怖の感情は無かった。

その何気ない登校風景は、一方通行にとって酷く眩しく、輝いて見えた。彼女の居る場所こそが、世界の中心であると錯覚してしまう程に。

分かっていたことだ。しかし、改めて思い知らされた。彼女は光の世界を歩き、一方通行が二万の命を奪つてまで欲し、焦がれている「平穩」を、「普通」というものを享

受しているのだと。

故に、彼はありとあらゆる全てに憎悪を向ける。何故あのような少女ですら持ち得る“普通”を、自分は得ることが出来なかつたのかと。

『——お互い不自由ね』

けれど、いつしかのファミレスでの会話が脳裏に過り、煮え滾っていた激情はすぐに冷める。

確かに彼女の周りには大勢の人間が居た。多くを惹き付け、多くに囲まれていた。一方通行が何よりも欲し、追い求めている場所に立つ彼女はいつもつまらなそうな顔をして——常に“独り”だった。

憧れた。誰よりも自由だと思った。こんなにも恵まれているのに、そんなにも得ているのに、現状に何の不満があるのだと吐き捨てたかつたが、それもまたあの笑顔を覚えてしまったからには、何も言えなくなつてしまった。

満ちてないからこそ、不満。だからこそ、博麗霊夢という少女はいつも何かに憂い、悲観している。

きつと、彼女にとって“普通”というのモノは望むものではないのだろう。ならば彼女は何を欲し、彼女と自分では一体何が違うというのか。

一方通行には、つくづく理解出来なかつた。

(案外……なつちまえば、分かるのかもなア)

本当に、本当に何となくだが、そう思ってしまった。

(いつか思い知らせてやるよ……オマエも太刀打ち出来ねエような…… 絶対的な力
“ っつて奴を——)

心の中で改めて決意する。

どうであれ、自分の望む世界の中心に彼女は存在していた。

その世界が、その居場所がどうしようもなく欲しい。叶える為には、やはり力が、無敵に等しい神のような絶対的な力が必要なのだ。

故に、手に入れる。どんな手を使ってでも。

そして、この日の夜。一方通行はいつものように開始された実験で彼が今まで殺してきたクローン達の“オリジナル”と対峙することになるのだが、それはまた別の話。

邂逅の時は、近い。

より血の臭いが濃くなっていた。

彼は、今も現状を打破しようと足掻いているようだ。一方通行の有り様に一体何をしているのやらと霊夢は溜め息を吐いて路地裏を進む。

無敵の力。あの日ファミレスで語っていたそれこそが目的なのだろう。どうやら一方通行にとつてそれは己の手を汚してまで欲するものらしい。

それが何なのか霊夢は知らない。真つ先に思い付くのはテレステイナーが目指していた、学園都市の理念でもある絶対能力者^{レベル6}とやらだろうか。

果たしてたかだかワンランク上がるだけが、そこまで崇高なものなのか。かつて教授

は「天上の意思」などと言っていたが、霊夢には今一ピンと来ていなかった。

要するに、人の身で「神」の領域に至ろうとしているに過ぎない。そういう意味では科学も魔術もやっていることは何ら変わらなかった。

「難儀なものねえ……」

それが一方通行にとつて望む結果になるかと言われれば、そうはならない可能性が高い。結局、彼を動かしているのは彼を利用する科学者、延いてはこの街そのものの思惑なのだから。

しかし、だからといって霊夢はこれに対して何をするつもりもない。忠告は既にした。これ以上何か言ったところで無駄。わざわざ自ら進んで関わる気など更々無かった。

「そつちはどう？」 涙子

故に、一応心に留めておきながらも然して気にする訳でもなく佐天へ電話を掛ける。

より効率良く拾い集める為に二人はそれぞれ別の場所を搜索していた。

『はい！ 大漁ですよ！ 私つてもしかしてこういうの探す才能があるのかもしれないません！』

「そりゃ良かった。私の方も結構拾えたわ」

電話越しから聴こえるはしやく声。その反応に霊夢も笑みを浮かべる。

現時点で十数万近くの利益。この調子で拾い集めていけば、たとえ御札と針を補充したとしてもそれなりに余裕が出来るどころかお釣りが来るかもしれない。

『あつ、そういえばさつき御坂さんに会いましたよ。一緒にマネーカードを探してたんですけど気付いたら居なくなっちゃいました』

「……美琴が？」

その言葉に、霊夢は引つ掛かりを覚える。

「あいつつて、あんなナリだけどトキワダイのお嬢様つて奴でしょ？ マネーカード集めとか興味無いと思うんだけど」

『あ、あんなナリつて……言い方悪いですよ。けど確かにレベル5ですもんね。うーん……何か買いたい物でもあったんですかね？』

些細なことであるが、少しばかり気になった。霊夢の問いに言われてみればそうだと佐天も首を傾げる。記憶が正しければブランド品にも興味が無いと発言していたはずだし、元よりそのようなイメージも無い。

では、何故――。

(……ま、どうでもいいか)

対して最初に疑問を投げ掛けた霊夢はそんな投げやりな反応を見せる。ただ気になっただけで御坂がどういう意図でマネーカード探しに参加したかなど特に興味があ

るはずがなかった。

自分のように単なる気紛れかもしれないし、そもそも後で本人に直接問い質せば良い話である。

「——は？」

しかし、次の瞬間。霊夢は足を止める。

「……涙子」

『はい？ 何です？』

「美琴と会ったのはいつ？ 結構前だったりする？」

『え？ いえ。本当についさつきですよ』

「……つてことは、まだその近くに居るってことよね」

『？ 多分そうだと思いますけど……』

では、己が視たのは何だったのか。

視線の先にあるのは路地裏の外。大勢の通行人が行き交う人混みの中で、霊夢は確かに目撃した。

御坂美琴と、瓜二つの姿を——。

佐天と自分の位置はあまり離れていないが、近くもない。こんな短時間で移動するにはそれなりの速度で走るくらいであるが、にしても不自然だった。

ならば他人の空似……と、断言するにはあまりにも似過ぎている。かといって本人かと言えば、それはそれで違和感を拭えない。

原因は目撃した人物の「眼」。チラリと僅かにしか見えなかったが、それでも霊夢にはどこか光の無い虚ろなあれが普段の御坂のモノとはかけ離れているように感じた。

つまり、そこから導き出される答えは、先程聞いた都市伝説の名が、霊夢の脳裏に過る。

「……ドツペルゲンガー？」

因果か、はたまた運命か。この街に潜む「闇」に、幻想を生きる少女は巻き込まれて行く。

望もうが、望むまいが。

鍛冶屋

御坂美琴と瓜二つの人物と出会うという世にも奇妙な体験をした翌日、霊夢はマネーカード探しを中断してある場所へと向かつていた。

「……………へ来るのも久しぶりね」

第九学区。工芸や美術関連の学校が集まる学区であり、伝統芸能からホログラム技術まで、全ての分野の芸能が収まるその場所の中でもかなりの僻地に、それは建っていた。

“多々良刃物店”。

達筆な字でそう書かれた看板を掲げた、こじんまりとした古い和風の建物。初めて来た頃から全く変わっていない景観を一瞥すると霊夢はガラガラと引き戸の扉を開けて店内へと入る。

「いらつしやいませー。何かご入り用で……………つて、霊夢じゃん！ 驚いた！」

「……………久しぶり」

鮮やかな水色の髪に髪色と同じく青い右眼と違い、充血したように赤い左眼。霊夢と同年代か少し上だと思われる容姿をした女性がカウンターに立ち、笑顔で出迎えた。

「こう見えて、この多々良刃物店の店主である。

「久しぶりー！ 背少し伸びた？」

「……あんたの方は変わりないみたいね」

ケラケラと無邪気に笑う店主。彼女と霊夢は学園都市に来る前からの付き合いであつた。

「早速で悪いんだけど……封魔針の修繕と製作を頼みたいわ」

「あー、だろうと思つてた。霊夢がうちに来る理由つてそれくらいだもんね……えつと、その、代金の方は？」

すると店主は口角を僅かにひくつかせながら恐る恐る問い掛ける。

「全部は払えないからツケで」

「や、やつぱりー！」

霊夢の扱う針は、彼女が特注で製作したものであり、そこらの名刀並みの価値がある。故に、マネーカードを集めてもまともに支払えるような価格ではなく、元より霊夢はツケること前提であつた。

さも当然のように言つてのける霊夢に対し、店主は大変ご立腹な様子でぶくうと頬を膨らませる。

「あのね？ この前のツケだつて返してもらえてないんですけど？ しかも五十本近く

作ったはずなんですが？　ですがー？」

「全部使い果たしたわ。それに、少しは払うわよ。ほら、これ」

そう言つて霊夢はマネーカードを換金して入手した札束を差し出す。

「うーん……これでも二割行くかどうか……」

「何よ？　あんたは私に恩があるんでしょ？」

「うっ、それはそうだけど……私にも生活があるんです。このままじゃひもじい思いしちゃうの」

「んなこと知らないわよ」

「お、鬼だ……鬼が居る……」

「失礼ね、れつきとした人間よ。で、やるの？　やらないの？」

「もうー、分かり申した。やりますよ、やりや良いんでしよう」

渡された金額は正直はした金であるが、かつて魔術結社に拉致されかけた所を助けられた霊夢に対して恩義があるのもまた事実なので涙目になりながらも店主はその札束を受け取り、了承する。

「因みに今回はどれくらい？　前と同じ五十本？」

「そうね……多めに百、いや二百くらいお願い出来る？」

「に、二百う!？」

思わぬ数に店主は目を剥く。

「そ、そんなに必要なのっ!? な、何でっ!?」

「……魔術師絡み、って言えば納得出来る?」

「! 魔術師って……え? 連中この街にも居るの? だったら私も危なくない?」

「西洋の魔術師。あの連中とはまた別の一派よ。それにあんたのことも気取られてないから安心なさい」

「そ、そうなの? 良かったー」

ホツと胸を撫で下ろす店主。わざわざこの学園都市へ移転したのは魔術師への隠れ蓑にする目的もあったからだ。

「じゃ、よろしく」

「あつ、いや、ちよつと待ってよ! 二百本もなんて無理よ! 私だつてこう見えて忙しいんだから! 移転しても外部のお得意様は注文してくるし!」

「何だ、繁盛してるじゃない。ひもじいってのは嘘だったの?」

「いやいや! 包丁とか鋸とかと封魔針じゃあ値段が違い過ぎるわよ! 普通に赤字だから!」

「とにかく頼んだわよ。期限は別に決めないけど出来る限り早くね。どうせ何本かは作り置きしてるんでしょ? 今はそれを貰うわ」

「やだ、この巫女さん全く人の話を聞かない」

とほほほ……と肩を落とす店主。ただでさえタダ働きどころか大損こくレベルなのに二百本もの、それも簡単には作れない特注の針をワンオペで製造というブラック企業も真つ青な仕事量である。

霊夢の無茶振りは今に始まったことではないが、流星に今回ばかりはあまりにも酷過ぎた。

「ううっ 分かったわよ、持ってけドロボー！ ついでに驚けー！」

かといって断り切れるはずもなく、観念した店主はカウンターの奥の方へと行くと大きめの重箱くらいのサイズの木箱を持つてくる。

「とりあえず『百本』あるわ。またいつかは頼んでくると思ったから沢山作っておいたんだけど……」

「あら、良かったじゃない。仕事量が半分まで減って」

「それでも前回の倍だよお……」

特に驚いた様子も無い霊夢を見て、彼女が最初から自分がこのくらいは作っているのだろうと予想していたことを察する。

やり口がまるでインテリヤクザだ。そんなことを口にすれば恐ろしい報復が待っているに違いない。

「……今、失礼なこと考えてるでしょ？」

「ふえっ!? い、いやっ? な、何の事かなー?」

「……分かりやすいわね、ほんと」

ぴゅーぴゅーと下手な口笛を吹いて誤魔化す店主に霊夢は呆れた様子で頭を搔く。

「ま、本当に赤字で首が回らないってなったら教授を頼れば良いじゃない。あいつ何故かめつちや金持ってるし」

「うーん……私、あの人のことはあんまり信用してないから。マッドサイエンティストって奴? 多分ナチュラルにわちき達のことモルモットかなんかだと思ってるよあれ!」

「……そうね」

純真無垢で誰の言葉であろうと信じてホイホイついて行くようにしか見えない店主であるが、こういうところは妙に察しが良い。

確かに教授は店主のことも研究対象として見ている。理由は彼女が誇る天才的な鍛冶の技量。魔術や非科学的な要素を特に用いずに、封魔針レベルの代物を製作することの出来る一般人など彼女の興味をそそらない訳が無かった。

そう、一般人。彼女は「人間」である。少しサプライズが好きで古風な雨傘を愛用し、日本人のくせに地毛が水色で、鍛冶がやたらと上手いだけの、ただの人間なのだ。

れつきとした、一切の混じり気の無い。散々、何度も何度も調べたからこそ、霊夢は確信を持って言える。

たとえ、それが受け入れ難い事実であろうと――。

「……悪いわね、迷惑かけて」

「へ？」

唐突な謝罪に店主はぽかんとする。

「急にどつたの？　悪いものでも食べた？　明日はゲリラ豪雨？」

「……あんたねえ」

「あつ、ごめんごめん。ちょっと吃驚したただけだから」

困惑しつつも店主は霊夢へ笑いかけた。

「そりや無茶振り過ぎて困ることはあるけどね。結局、私がやりたいからやつてるんだ。

じやなきやとつくに縁を切っているよ」

「――」

「霊夢に色々と事情があるのは分かってるし、針だって誰かを守る為に使うんでしょ？

私を助けてくれたように。道具だつてきつと、そうやって使ってもらった方が嬉しい

だろうし、それを作る私としても職人冥利に尽きるつてモンよ」

えっへんと胸を張り、満面の笑顔でそう言う店主に霊夢は目を見開く。

自分はそんな上等な人間ではない。この幻想無き世界の有り様を悲観し、半ば自暴自棄気味で、己が思うがままに好き勝手やっているだけだと、そう言おうとして、しかし何も言えなかった。

ああ。何故こんなにも――。

「……ありがと」

どうにか絞り出した言葉は、それだけだった。

時刻は夜21時過ぎ。

学園都市某所にある操車場。そこではつい先程まで『第九九八二次実験』が行われており、凄惨な光景が広がっていた。

「本日の実験、しゅーりょー」

地面に突き刺さるひしゃげた機関車。そこから溢れていく血をつまらなそうに見下ろしながらこの現場を作り出した張本人、一方通行は^{アクセラレータ}おどけた様子で呟く。

前よりはよく動いていた。地雷を踏ませるなど奮闘した方だろう。尤も、9981回分の戦闘経験を^{ラーニング}学習しておきながら、その程度だとも言えるが。

(しかし、今回の奴は妙だったなア……ダセエ缶バッジなんかを大事そうにしやがって……)

『……これは、ミサカの物です、とミサカは所有権を主張します』

実験開始前。気になった一方通行の問いに、彼女は常盤台の制服のサマーセーターに

付けた子供っぽいそれをまるで宝物のように包み込むように握り締めながら、いつものように可笑しな喋り方でそう言った。

何故だろうか。それを見た瞬間に無性に腹が立った。あんな物を彼女達が自分で買ったとは到底思えない。そのような機会があるはずがないし、そもそも発想にすら至らぬだろう。

ならば……誰かに貰ったのか。実験関係者か、それとも。どちらにせよ、あのような存在にそんな物をくれてやるような人物が居るのか。

そして、それを大事そうにする彼女の顔は――。

（チツ……人形風情が生意気にも人間様ごっこかア？　これが俺に対して情を誘う作戦だつてんならなかなか大したモンだ）

実際には怒りを増幅させただけであるが。その推測に思い至った時点で、一方通行は目の前のクローンを徹底的に殲り殺すことにした。

左足を千切り、内臓をシェイクし、最後は適当に飛ばした機関車の下敷きにする。ペしゃんこに潰された様を見ることが出来なかったのは残念だが、少しはスッキリしたのでよしとしよう。

「ハア……帰りにコンビニでも寄って……」

と言った次の瞬間。青白い閃光が、アクセラレータの背後にあるコンテナを焼き尽く

した。

「ああアアアアアアアアアアアアアア!!」

「あん?」

バチバチともはや聴き飽きた、しかし何度も聴いてきたそれらよりもずつと力強い音だった。突然の奇襲に一方通行は驚くも、直撃したはずの彼には傷一つ無い。

「今日の実験はもう終わりなんじゃねエのか?」

振り返ってみれば、そこに居るのは先程潰した少女と瓜二つの顔。しかし、生気すら感じさせない辛気臭い無表情とは違い、その形相は怒りに染まっていた。

予定とは違うし、何か可笑しいなと思いつながら一方通行が問いかけてみると返ってきたのは返答ではなく、極大の電撃、そして巻き上げられた砂鉄の旋風だった。

「ほオ……磁力で砂鉄を操ってンのか」

自身を円柱状に覆う砂鉄。チェーンソーのように高速振動しているため掠りでもすれば大惨事だろう。

一方通行に対しては、全くの無意味であるが。

「!?」

平然とした様子で砂鉄の中から出てきた一方通行に驚愕する目の前の少女。今まで潰し、これからも潰すであろうクローン共とは一線を画す能力の規模に、一方通行は漸

く彼女の正体に気付く。

「そうかそうか……何かと思っただらオマエ、*「オリジナル」*かア」

クローンの大元。学園都市第三位 *「超電磁砲」* 御坂美琴……表情こそ似ていないが、あまりにもそっくりな顔立ち。同じ人間でも環境によって顔や身体の作りは変わるものだと思っていたが、殆ど誤差が無かった。

一方通行は獐猛な笑みを浮かべる。思わぬハプニングであるが、殆ど惰性になっていたこの退屈な実験に対し、良い刺激になる。

何せ、同じ超能力者レベル5と会うのは初めてだ。

「何で……何でこんな計画に加担したの？」

「あ——？」

「それだけの力があって……無理矢理やらされてる訳じゃないんでしょッ!？」

彼女——御坂は顔面蒼白になりながらも尋ねる。これに対して一方通行は眉をひそめ、しかし納得した。

確かにクローンとはいえ自分と瓜二つの姿をした人間を殺されて良い気分はしない。そもそも人間のクローンの製造は違法であるイカれた研究者共が許可を取っているとも思えないし、この実験は彼女の望むところではないのだろう。

「こんなイカれた計画に協力する理由は何ッ!? あの子に恨みでもあったワケッ!？」

「……………」

ふむ、と一方通行は考える。このまま正直に言ってしまったても良かったが、折角の超能力者。もしかするとあの紅白巫女のように自身に危機感を思い出させてくれるかもしれない。

闘わないのは、勿体無いと思ってしまう。ならばここは敢えて怒らせてみるのも一興か。

「——嬉しいから」

「……は？」

そうして口にした返答に、御坂は茫然とする。

「意外とストレス解消になるンだけ？　ンで、こんな嬉しい事を悠々自適に繰り返してたら絶対能力者になれるってンだから、これ以上お得な事はねエよなア？　ま、そつくりサンをぶつ殺されまくるオマエには同情するがよオ……」

自分でもなかなかの名演だと思う。実際には飽き飽きしているし、雑魚のスライムを何千匹潰したところで何も感じないのだが。

そんな一方通行の弁に、御坂は激情に駆られてゲームセンターのコインを取り出して彼へと向ける。

一瞬何をするつもりなのかと一方通行は疑問に思うも、それは次の瞬間に迸った橙色

の閃光によって解決した。

「——それが噂に聞くレールガンって奴かア」

轟音が鳴り響く。御坂の背後から。

渾身の超電磁砲は、あっさりと跳ね返され、彼女の真横を通り過ぎていった。

「なんだ？ もう終わりかア？」

目を見開き、放心状態となる御坂に大したものだと感心していた一方通行はあれが彼女の切り札であったことを察し、失望する。

同じ超能力者ならもしかすればと思ったが、所詮はこの程度かと。

（やっぱりあのイカれ腋巫女はイカれてんだなア……あんなのが他に居てたまるかかっての）

改めて、一方通行はそう認識する。オリジナルがこれでは二万回目の実験での個体もあまり期待は出来ない。

分かったところで引き返せるはずもないのだが。一方通行は内心溜め息を吐いた。

「——」

第一位と第三位。二人の超能力者が対峙している最中だった。

ひしゃげた機関車の底から、何かが這い出てくる。音も無く呼吸すらも感じさせないそれに、一方通行も御坂も気が付かない。

気付ける訳がなかった。つい先程確かに死んだはずの人間が再び動き出すなんてことは有り得ないのだから。

「……………」

左足が無いにも拘わらずむくりと立ち上がった「ソレ」は一方通行と御坂が繰り広げる激しい戦闘を一瞥すると彼らから背を向ける。

ふと、自分の手に何かが握られているのに気付く。視線を送ればそれはデフォルメされたカエルのキャラクターがプリントされた缶バッジ。殺される為に作り出された人間未満の少女が初めて手に入れた、大切な宝物だった。

「……………」

しかし、ソレは僅かに首を傾げるもすぐに興味を失った様子で放り捨てる。

そして次の瞬間には、跡形も無く消えていた。

——それから程無くして、「ミサカ9982号」の遺体が現場から紛失したと、関係者らに通達されるのであった。

居候

桜花が舞う。

広大な庭園に悠然と聳え立つ、満開に咲き誇る桜の大樹。色鮮やかなそれは見惚れる程に美しく、しかしずっと視ているとまるで魂を引き抜かれてしまいそうな程に妖しかった。

ひゆうひゆうと季節外れな冷たい風が吹く。雪のように舞い落ちる花卉が肌に当たる。春とは思えぬ肌寒さなど気にも留めず、視界を埋め尽くす辺り一面薄桃色のその光景を前に、まるで心を奪われたかのように、茫然と立ち尽くしていた。

しかし、視線の先にあるのは桜ではなく、大樹のすぐ下に立つ、一人の少女である。酷く夢げで、薄幸で、ふとした拍子にそれこそ桜が散るように消えてしまいそうで、故に目を離すことは出来なかつた。

「――」
すると少女が振り向く。こちらへ微笑みかけるその顔は靄が掛かったように不鮮明だというのに、何故か分かつてしまう。

己は確かに、彼女のことを知っているのだと。
けれど、同時に違うのだとも思った。

「願はくは 花の下にて 春死なむ」

囁くように、詠うように。

美しく、優しく、そして恐ろしく。少女が口にした言葉の意味は――。

「……………」

暖かい布団の中、魂魄妖夢は目を覚ます。

とても長い夢を見ていたような気がするが、覚えてはいない。本来夢というものは記憶に残らないものであるが、寝付きが悪かったのか妙な不快感が残っていた。

身体を起こし、ふかふかの布団に名残惜しさを感じながらも脱け出して背伸びするなどして軽くストレッツチする。それから洗面し、身嗜みを整えて向かう先は台所だった。

「おはよー、妖夢ちゃん」

「…………おはようございます」

数十分後。キツチンで作業をしていると寝間着姿の佐天がまだ完全に開き切っていない目を擦りながら現れる。

「うーん！ 良い匂い！」

「丁度出来上がったところです。どうぞお召し上がりになってください」

そう言つて視線を向けた先のテーブルには鯖の味噌煮、大根の味噌汁、おひたし、金平牛蒡と定食屋のメニューにも匹敵する出来栄えの品がずらりと並んでいた。

「おお！ ありがとう！」

寝惚けていた佐天であるが、それを見るなりテンションを上げ、席へ着く。

「早速いただきます！ う、うまあああああああい！ こりやもうプロ級の腕前だよ

!

鯖味噌の身を箸で解して口へ運び、舌鼓を打って大絶賛する佐天。そこらのファミレスなど目ではない。朝からこのようなクオリティの食事が取れることに感動すら覚えていた。

「……それはどうも。喜んでもらえて何よりです」

少しばかり大袈裟ではと思う反応に妖夢は照れ臭そうに頬を掻く。先日、せめてもの恩返しとして冷蔵庫の中の残り物で何とはなしに調理してみせたのだが、それがあまりにも美味しく、瞬く間に専属料理担当に任命され、今に至る。

妖夢としてもここまで喜んでくれるのだから悪い気はしなかった。

「それにしても、妖夢ちゃんがこんなに料理が上手なんてねえ……私も自炊の腕には結構自信あったけど上には上が居るんだなーって思ったよ」

「ええ。私も自分にこのような才能があるとは思いませんでした」

てつきり剣術しか能が無いと、自己認識していた妖夢はプロ級だと称される程の料理の腕が体に刻み込まれていることを心底意外に思う。

「記憶喪失だもんね。もしかしたら料理人だったりしたのかも？ それか調理師学校に通ってたとか」

ギリギリ中学生といった年齢的に違う可能性の方が高い。そもそも刀をブンブン振

り回している時点で料理人なんて大人しい肩書きではないだろう。

「……そうですね。案外、このように誰かに振る舞っていたのかもかもしれません」

そんな佐天の推測に同意を示す。料理を作り、誰かに食べてもらうという行為に対して彼女は妙な懐かしさを覚えた。自分は過去にも似たようなことをしていたのだろうか。

剣を振るうことは好きだが、料理が好きかどうかと言われればそうでもない。ならば必要であるからこそ学んだのだと考える。己が必要無いことを無意味に学ぶような人間だとは思えないが故に。

「……フフツ」

それを見て佐天が微笑む。本人は気付いていないが、今の妖夢はいつものような無表情ではなく、どこか安らかな表情を浮かべていた。

（やっぱり話してみると全然悪い子じゃない。きつと、人を斬つてたのも何も分からなかったから、なんだろうなあ）

彼女は純粋な子だ。些か天然で倫理観が欠如しているが、それはまともな情操教育を受けていない幼子のようなものであり、何が駄目で何が悪であるかすら曖昧になるような環境下に身を置いていたのだろう。

加えて、記憶喪失だ。全く知らない場所で、ただ一人右も左も分からない状態。訳が

分ならず混乱し、不安で一杯になるに決まっている。

そのような状況下で悪意や脅威に晒されてしまえば、過剰に力を振るってしまっても可笑しくはあるまい。

何も知らずに大罪を犯してしまった悲劇の少女……佐天はすっかりそんなイメージを抱き、同情や憐れみの目で妖夢を見ていた。

それは決して真実ではなく、幾分か勘違いや都合の良い解釈が含まれた結果なのだが、時には知らない方が幸せなこともある。現にこうして佐天は妖夢に対して完璧なコミュニケーションを成し遂げ、打ち解けられているのだから。

(でも……このままズルズルとこんな関係が続けても駄目、だよね……)

その一方で佐天は心の中でうーん、と唸りながら頭を悩ませる。彼女とて現状は何よりも打破すべきだということとは理解していた。

(どうにかしないとって思っても私一人じゃあ……かといつて皆に相談しても妖夢ちゃんか本当に「切り裂き魔」だったら豚箱行きは確定だし……)

恐らく人を殺すな、傷付けるなときちんと説得すれば妖夢は応じてくれることだろう。しかし、そうしたところで過去の罪が消える訳ではない。

世間を騒がせた連続猟奇的殺人鬼。杞憂であつてほしいが、切り裂き魔の音沙汰が忽然と無くなった時期は妖夢を拾った日付からと合致しており、駆動鎧を刀一本で容易く

倒したその強さと刀を使用していたという霊夢の証言からもほぼ間違い無いと思われる。

（というかこれ、分かってて匿ってる私も罪に問われるんじゃないや？ や、やばいかも……）
今更になって自分が相当にまずい立場に居ることを理解し、冷や汗を流す佐天。しかし、打開策は思い付きそうになかった。

現状最も信頼できる存在である霊夢も、切り裂き魔こと妖夢の事をかなり危険視しているようであり、もしもこの事実を知ってしまったら、戦闘に発展する可能性がある。妖夢も妖夢で一度敵対した霊夢の事をどう認識しているのか分からず、安易な接触はあまりにもリスクが高い。

一体どうしたものか。

「……そういえば、今日もまた集めるのですか？ マネーカードとやらを」

そんな佐天の考えなど知る由もない妖夢はふと気になったのか問いかける。

「え？ あー、うーん……どうしようかなあ。初春達には危ないから止めろって言われているんだよねえ……もう結構集めたし」

マネーカードの投棄は貨幣の遺棄には当たらないため違法行為としては裁けず、警備員や風紀委員も動いていなかったが、噂が広まった影響で拾得者同士のトラブルが発生したり、スキルアウトの縄張りに迷い込んで絡まれたりと被害が発生してしまっている

らしい。

そのため初春や白井も駆り出されており、調査を行っているようだった。流石の佐天もスキルアウトに襲われるリスクを顧みずに拾う程愚かではない。

「ふむ……しかし、お金となる物を故意に落とすとは、随分と罰当たりな人が居るものですね」

「だよねえ。霊夢さんも同じこと言ってたよー」

妖夢は金銭には特段執着していないが、それでも流石に価値あるものだということくらいは理解している。だからこそ、佐天がわざわざそれを拾い集めに行くのも納得出来たし、それらをばら撒いている者の思考がいまいち分からなかった。

単なる義賊気取り、であれば良いのだが。

「……霊夢さん、ですか」

随分と親しいようだ。他に彼女が口にする名前は初春、白井、御坂。誰かは知らないが、以前に駆動鎧を峰打ち（佐天の要望）で切り捨てていた際にちらりと見た面々の中に居たのだろうか。

類は友を呼ぶ。彼女の友人なのだ。きっと、悪い人間ではない。

「うん。あ、霊夢さんといえば……マネーカード探しした後から様子が変だったな」

ふと思いついたように佐天は呟く。

「変、ですか?」

「うん。なんか急に『ドッペルゲンガー』のことを詳しく知りたいって言うてさ……それまで全つ然興味無さそうだったのに」

「どっぺる……何です?」

首を傾げる妖夢に佐天は説明する。マネーカードとは別にドッペルゲンガーという自分や他人にそっくりな人物が出没するという都市伝説が最近になって広まっていると。

「といっても情報自体はあんまり無いんだよね。超能力者のクローンとか、他人の姿をコピーする能力者だとか、はたまた二人に分身する能力者だとか、そんな都市伝説は眉唾レベルで以前から存在してたんだけど……ここ最近、その類いの話が一部界限でやたらと広まって活性化してて……」

しかし、調べたところで有力な情報は出ない。というよりも目撃例が書き込まれたことは何度もあるにも拘わらずそれを見た者は少なく、いくらネットの海を遡っても見つからない。

書き込みをいくら消してもすぐにコピーペーストされて拡散される昨今のインターネット社会。そんな中で一切の形跡が消えているのは、あまりに不自然で陰謀論を語る者からそもそもそんな書き込みなど最初から存在しなかったのではと懐疑的な者にま

で別れ、軽く論争が起きている。

佐天としては前者の方が面白そうではあるものの後者派。彼女も書き込みそのものは見たことがなかったからだ。

「はて。くろーん、とは？」

またまた出てきた聞き慣れぬ単語について妖夢は問う。

「えつと……私もそこまで詳しくないからざっくりな説明になっちゃうけど、生物の細胞を培養して増殖したりして、その生物と全く同じ遺伝子構造をした生物を造り出すこと……かな？」

「……つまり全く同じ生き物を別に生み出す、ということですか？」

「こそ。それがクローン」

「何と……そのようなことが可能なのですか」

「うん。実際に羊とか犬とかのクローンは実現してるみたい。人間の方は法律で禁止されてるけど」

妖夢は驚く。細胞だの遺伝子云々の話はよく分からないが、要するに特定の個人と全く同一の生命を創造するということ。彼女からすればあまりにも常識外れな所業であり、この街の科学技術とやらも侮れないと感心する。

「成程。しかし、何故人間の製造は禁止なので？ 色々と便利だと思いますが」

「えー？ そりや倫理的にアウトだからじゃない？ ほら、生命の冒流って言うの？

人間が人間を簡単に生み出せてしまおうって事になったら、そのクローンの人権はどうなるんだってなるし、人間そのものの価値も暴落しかねないじゃん？」

「……左様で」

純粋な疑問に対して佐天はざっくりと説明するが、今一ピンと来ない様子の妖夢。工的に人間を造り出せれば、戦闘員や労働力に困らないし、便利ではないかと。

「そもそも人権とは何ぞやといった段階である彼女には些か難易度の高い話であった。

「まあ、確かにそんなに人間が増えてしまったら、冥界は大変そうですね。幽霊が溢れ返ってしまいそうですね」

「め、冥界？ な、なんか面白い観点してるね妖夢ちゃん……」

まさかこの世よりもあの世のことを心配するとは。至極真面目な様子でそう言う妖夢にやはり変わった子であると佐天は苦笑いする。

「あ、そうだ。妖夢ちゃんは どうする？ もし自分そっくりのドツペルゲンガーに出会ったら」

「……ふむ、そうですね」

顎に手を当て、妖夢は思い浮かべる。もしも目の前に自分と瓜二つの人物が現れたら。

しかし、答えは分かり切っていた。

「――是非とも斬り合ってみたいです」

同じ姿。同じ力。同じ技。己が片割れにも等しき存在。なればこそ、試してみたくなるもの。自分自身と闘ったことなどあるはずがないのだから。

鍛練にはもってこいだ。そんなことをナチュラルに思考して真顔で言つてのける。

「ええ……」

佐天は普通に引いた。

「……………」

それからも他愛のない話を続け、佐天は友人達に会いに外出した。

一人部屋に残った妖夢は食器の片付けを終えると椅子に腰掛け、ふうと一息つく。

「……………そろそろ出てきたらどうです?」

そして、唐突に虚空へと問い掛ける。

「——やっぱり気付いてたかい」

すると山彦のように響いて声が返ってくる。弾むような、女の声だった。

妖夢はその声の主の事を知っていた。記憶を失い、右も左も分からず混乱しながらこの見知らぬ街を奔走していた頃に出会い、利害の一致から協力関係になった相手である。

「いやあ、元氣そうで何より。あの『第二位』に襲われた時は流石に死んだかと思っただけど、いやはやなかなかどうして……あんた、想像以上にやるじゃないか」

「……意外ですね。てつきり既に見捨てられていいのかと思っていましたよ」

「まさか。こう見えて面倒見は良い方なんだ。偶然現れたあの嬢ちゃん拾わなかったら、きちんと回収してたさ」

「どうだか……」

嘘は言っていないが、その『回収』というのはいつもやっている死体処理と変わらな
いのではないかと妖夢は眉をひそめ、疑わしげな視線を向ける。

彼女は声の主のことも、その裏に存在する誰かも微塵も信用していなかった。

「うちのボスはあんたの事を気に入っているのさ。だからこそ、悪目立ちする物騒な
趣味も看過して隠蔽してやっていた。それが祟って一部の連中が危険視して刺客を送
り込んだみたいだけれど……」

刺客。あの白い六翼の少年は、どうやら単なる尖兵に過ぎないらしい。

『第二位』などと呼ばれているみたいだが、ということはあの紅白が『第一位』な
か。実力的に見ると、そう考えるのが妥当ではあるが。

どうであれ、脆弱で張り合いが無さ過ぎる連中ばかりではないようで、安心する。

「……………」

「ま、今後は控えてよ。『統括理事会』やら『暗部』やらに目を付けられるのは色々と面倒だからね」

「……分かりました」

「おや？ 随分と素直じゃないか」

あつさりと了承する妖夢に対し、声の主は意外に思う。以前の自分に自分は斬りたいものを斬るだけで知ったことではない、とでも言われると思っていたからだ。

一体どういう心境の変化があつたのかと首を傾げるも、思い当たる節があり、にやりと笑みを浮かべる。

「へえ……もしかして、あの嬢ちゃんに感化されちゃつたのかい？ 佐天ちゃんだっけ

？ 面白い人間だよね」

「……………」

ギロリ、と鋭い眼光で妖夢は声の主を睨む。彼女に手を出せば殺すと言わんばかりに。

「ちよつ、タンマタンマ！ 落ち着いて！ 別に取って食うつもりなんてないさ。無関係な奴を巻き込むのは本意じゃない」

「……なら、彼女の名前を出さなくてもらいたい」

「あー、はいはい、悪かったよ。つたく……随分と入れ込んでいるみたいだね？」

強烈な殺気にビビりながらも、思っていたよりも情を抱いているらしい妖夢に、声の主は呆れた様子だった。

「……そのつもりはありません。ただ彼女はこのような得体の知れぬ私にも優しくしてくれた、善い人です。巻き込みたくはありません」

刃を向けられ、脅迫されたにも拘わらず怯えること無くこちらへ歩み寄ってきた佐天という少女に、妖夢は酷く戸惑った。

無警戒、お人好しが過ぎると言ってしまうばそれまでであるが、この街を奔走してから初めて触れた優しさと温かさに無慈悲な辻斬りであった妖夢の心は僅かに溶かされ、心地好さを感じたのだ。

故にこそ、そういう意味でも妖夢は佐天に恩義を感じ、恩人として敬うのである。

「善い人、ねえ……それを言ったら、あんたが無差別に斬り殺した連中の中にだって、あの子と同じかそれ以上の善人が居たと思うけど？ ほら、アンチスキルだっけ？ この街の自警団の連中も居たでしょ。それなのに善い人だから今更巻き込みたくないだどうのつてのは矛盾してるし、虫が良過ぎるんじゃないかい？」

嫌味ではなく、純粋な疑問。妖夢がこの街へ来た初めに行った殺人は不幸な行き違いと誤解による半ば事故のようなものだった。

しかし、それ以降は違う。中にはたまたま現場に居合わせた通行人や凶行を止めよう

と立ち塞がった警備員すらも彼女は躊躇無く殺めている。

「……そうですね。彼らには、悪いことをしてしまいました」

対する妖夢はその言葉を受け、思うところがあるのか僅かに俯く。

「何だ、その程度かい？ 取り返しのつかないことをしておいて」

「ですが、斬ってしまったものは仕方ありません」

今一な反応に片眉を上げれば、あっさりと言つてのける妖夢に少しは葛藤や後悔は無いのかと、声の主はつまらなそうに肩を竦める。

佐天と共に暮らしている姿を見る限りではああ見えて意外と良識のある人物かと思つていたが、やはりこれまでの所業が表すように人の命を何とも思わない、無慈悲で血も涙もない人種だったのだろうか。

「それに、冥界は意外と気安い場所です」

「……はあ？」

そして、続けた言葉に耳を疑う。

「善人ならばきつと極楽へ招かれるはずですし。地獄に落ちるのであれば、そもそも悪人だったということ。裁かれて然るべきでしょう」

彼女は今、何と言つた？ 一切の躊躇いも無く、さも当然のように淡々と語る妖夢の姿は、恐ろしいことに至極真面目にそう考え、発言しているようだった。

それも単なる狂人の戯れ言などではなく、圧倒的な死生観の違いによるもの。国や民族の文化の違いを更に広くしたようなものと説明すれば良いだろうか。妖夢にとつて、死ぬということは本当にただその程度のことなのだろう。

だからこそ、最低限のブレーキすらも壊れている。否、そもそもブレーキなど初めから存在しないのだ。

「——は。やっぱイカれてるね、あんた」

声の主は面白可笑しそうに笑う。この現代社会においては狂人、破綻者と断じられるであろう、あまりにもかけ離れた歪な在り方。

どうであれ、この少女は佐天涙子に対して相応の情を抱いているのは間違いない。

狂犬に首輪……というには危うく、脆弱に思えるが、それでもその感情も、その思想も、噛み付かれるリスクを考慮すればどこまでも利用出来る。

「何はともあれ大人しくしといてくれるなら助かるよ。今、この街では色んな思惑が渦巻いて混沌としているからね」

「……混沌、ですか」

「ああ、そうさ。その中には、うちらのような外様や流れ者も何人が居て、警戒する者、排除しようとする者、利用しようとする者、傍観に徹する者……多くの勢力がそいつらの動向に注視している。そもそも未だに気付かれていないような、得体の知れぬナニカ

も紛れ込んでいる……正直、嫌気が差すよ。こんな仕事ほっぽりだしてとつとと帰りた
いくらいさ。ま、そんなことしたら殺されちゃうけど」

「……………」

うんざりした様子の子の声の主。彼女の語る内容は妖夢には正直よく分からない。ただ
彼女らがやたらと慎重なのは理解出来た。

「とりあえず今はまだ様子見。あんたを含めて既にスタートダッシュを切った気の早い
連中も居るには居るみたいだけどね」

「……そうですか。至極どうでもいいですが、手を組んだ以上はそちらの方針に従いま
しょう」

「そうかい。——んじゃあ、早速だけどボスから“依頼”があるんだ」
すると声の主が切り出す。どうやらそれが本来の目的だったようだ。

「……走狗になった覚えはありませんが？」

怪訝な表情を浮かべれば、対する声の主は肩を竦める。協力関係を結ぶに至った際の
契約の内容は守ってくれなきや困るとも言いたげに。

「して、内容は？」

それは妖夢も分かっているのでそう促す。協力関係を結んでいる以上、ある程度の義
理を果たすのは当然というもの。

「この街の上層部がある。『実験』を主導しているんだけど……どうも不確定要素が紛れ込んでしまったみたいでさ。ほら、目には目を歯には歯をつけてあるじゃん？ それに伴って協力してくれってさ」

「……実験？」

「あ、余計な詮索はしないでよ。お上の連中はそれはもうご執心みたいで下手に刺激して爆弾が起爆したら色々と面倒だ」

「……要するに？」

どうせ己に依頼するくらいだ。血生臭いものなのだろうと、妖夢は当たりを付ける。であれば、このままこの家に留まり続ける状況は駄目だろう。

「至ってシンプルさ——その『実験』を妨害する連中の排除だよ」

告げられた依頼に、妖夢は何も答えず、ただ刀を手に取ることで返答した。

「ただいまー。妖夢ちゃん、特に何もなかったー?」

時刻は正午。友人らと別れ、帰宅した佐天は玄関の扉を開けて妖夢の名を呼ぶ。

しかし、いくら待てども返事は無い。

「あれえ?」

首を傾げながらも靴を脱ぎ、部屋へと向かうも、やはり妖夢の姿は無く、キッチンには味噌汁が鍋に入ったまま残置されており、テーブルの上には肉じゃががサララップ

で密封された状態で置かれていた。

恐らく妖夢が昼食を作っておいてくれたのだろう。だが、肝心の彼女の姿が見えないのは一体どういうことか。

「……………どっ行っただろ」

外出したのだろうか。玄関の鍵は閉まっていたが……と、ふと窓の方へ視線を向けてみると半分だけ開いており、そこから吹く風がひらひらとカーテンを揺らしていた。

——その日、妖夢が帰ってくることはなかった。

妹達

ドツペルゲンガー。

それは自分と瓜二つの存在のことを指し、これを視た者は命を落とすという。肉体から靈魂が分離・実体化したものとされ、古くから神話や伝説などで語られ、人々から死の前兆であると信じられた。

特に18世紀末から20世紀にかけて流行したゴシック小説作家たちにとって死や災難の前兆であるドツペルゲンガーは魅力的な題材であり、自己の罪悪感の投影として描かれた。

医学においては自己像幻視という幻覚の一種とされており、統合失調症などが関係していると考えられている。

そのようなありふれた、古臭い怪現象がこの科学の最先端たる学園都市において今頃になって都市伝説として噂されるということは、何かしらの切っ掛けがあるからに他ならない。

——それが、あの御坂美琴と瓜二つの人物であると霊夢は結論付けた。

単に双子の姉妹か、或いはよく似た親戚である可能性もある。しかし、それならばすぐに話題になるはず。上述したように都市伝説になるには今更が過ぎるし、本人や白井達からそのような話を聞いたことはない。

そんな折に佐天にドツペルゲンガーについて詳しく訊けば、有力な情報がもたらされる。

(クローン、ねえ……要するにレベル5を製造して量産しようつてことね。この街の連中がやりそうなことだわ)

火のない所に煙は立たぬ。ピンポイントで超能力者^{レベル5}である御坂であったことからしても、霊夢は関連性を疑わずにはいられなかった。

「で、そこんとこ実際どうなの？ 董子」

「へえ……レイムつちがその噂を聞き付けるなんてねー」

巷で話題のお洒落なカフェのテラス席にて。頬杖を突いて座る霊夢の正面には、眼鏡の少女——「宇佐見董子」が新メニューのカフェオレをスマホで撮影している。

三沢塾で身に付けていたトレードマークでもある帽子やマントは着用しておらず、こうして見るとごくごく普通の文学少女のように見えた。

ドツペルゲンガーと聞いて、初めに霊夢が連想したのは彼女の事だった。

宇佐見が保有する数ある異能の一つ。その中でも特異であるその名は、読んで字の

如く「自己幻像」ドツベルゲンガー
オカルトと彼女自身が呼称している、どちらかと言えば魔術に属するであろう怪奇——。

「けどさあ、何で私に訊くの？　まさか同じドツベルゲンガーだからって理由？　だったら、流石に安直過ぎるわ。私の自己幻像とは何ら関係ないもの」ドツベルゲンガー

急に呼び出されて何事かと思えば。霊夢の思考を読み取った宇佐見は怪訝な表情を浮かべ、呆れた様子で首を横に振る。

「だってあんたでしょ。噂を広めてるのは」

しかし、これに対して霊夢の表情は変わらず、冷たい声色のまま言い放つ。

質問ではなく断定だった。

「は——？　いやいや、何の事やら——」

「惚けても無駄よ。さっさと白状なさい」

鋭い眼で見据えられ、宇佐見は言葉に窮する。やがてそんな脅しのような物言いに肩を竦め、溜め息を吐く。

それは先程のような呆れではない。

「こっわ。何で分かるのよ」

わざとらしく肩を震わせる。実のところ宇佐見は呼び出された時点で察してはいた。化け物染みた天性の第六感。ここまで来ると気味が悪い。単なる勘だと彼女はいつ

も言うが、未来予知やテレパシーの類いの方がまだ信じられる理不尽さである。

「認めるのね」

「ええ。認めないとレイムっち、実力行使に出るでしょ？　というか元から別に隠すつもりなんてないし。あ、でも噂そのものとは本当に無関係だからね？」

そう言つて宇佐見は先程までクレープを撮影するのに使用していたスマホをポケットから取り出して画面を見せる。

そこにはとある都市伝説サイトの掲示板が映し出されていた。

「たまたま偶然知つて、広めた方が都合が良かったからSNSとかで拡散しただけ」

宇佐見は元から存在していた「超能力者のクローン」についての噂話と、埋もれていた、或いは削除された目撃例を電子の海から探し出し、ドツペルゲンガーという名目で掘り起こしたに過ぎない。

理由はごく単純。それがひとえにドツペルゲンガーと限りなく類似性があつたからだ。

それ以外の思惑など是在りはしない。

「だけど、どうやら何か結構やばい案件だったみたいでさー。上層部が火消しに廻り始めたの。大慌てで手当たり次第に書き込みを削除したり、端末ごと破壊しようとしたりして、とても滑稽だったわ」

プクク、と笑う宇佐見。そんなことをしたところで隠蔽し切れるはずもなく、むしろ噂が事実であることを証明するようなものだというのが、

否、確かに今まではそれで何とか出来ていたのだろう。所詮は噂であり、具体的な目撃例自体も少数だったのだから適当に火消しを続ければやがて風化して収束していった。

しかし、今回ばかりは違った。何せ噂は特定の個人により意図的に広められようとしており、その元凶は隠蔽しようとする学園都市側の反応を面白がり、ハッキングなどお構い無しに流布を続け、時には成り済ましすらしてドツペルゲンガーという都市伝説をネットに根付かせた。

「ふうん……で、出処や信憑性は？」

その様子をつまらなそうに見つめながら霊夢は問う。

「ふふ。わざわざ上層部様が出張って火消しに必死な時点でお察しじやない？ 私としては噂レベルで浸透させといった方がメリットあるから、特に根掘り葉掘り暴こうとはしてないわ」

学園都市にとって幸いだったのは、宇佐見が核心に近い部分に触れておきながら然して興味が無く、その秘密を暴こうとしなかったことだろう。

真相が何ら変哲の無い、ただのクローン、それもオリジナルの劣化品であることも拍

車を掛けた。裏でただのクローンを製造して実験に用いているだけなど面白味に欠ける。

「暴く者」を自称する彼女であるが、それはジャーナリストという意味合いではないのだ。

「にしても、意外ね。てつきりレイムつちは興味無いからわざわざ動くようなことなんてしなれないと思ってたのに」

これまでの関わりから、博麗霊夢という人間は明確に実害を被らない限りは自発的に行動するようなことはしないと、宇佐見は分析していた。

故に、このクローンの件も知ったところで介入するような真似はしないと推測していたのだ。

「……そうね」

これに霊夢は同意を示す。噂が事実であると知っても、この街ならば普通にやりそうなことなので別段驚きはない。むしろクローンの製造など、霊夢の知る限りでは暗闇の五月計画やら暴走能力の法則解析用誘爆実験とやらと比べれば実害が無い分まだマシと言えよう。

故に、勝手にやつてろと言う他無かった。

「どういふ風の吹き回し? あ、風紀委員だから見逃せないってのは無いよね? もう

辞めてるはずだし。ちよつと前まで復帰してたみたいだけど」

「……その件に関してどこで知ったかは突つ込まないでおくわ。私だつて好きでやってんじやないわ。でも実際に視ちやったから、多少なりとも気になつちやうのよ」

「視ちやった？ ……あ、そゆこと」

一瞬小首を傾げるも、すぐに察して納得する。

「そりやラツキーなのかな？ 私も実物は見たことがないし。つてことは相手があのだ第三位の超電磁砲レールガンつてことも把握している訳ね」

「ええ。とりあえず、あんたの知つていることを全部吐きなさい」

「えー？ 何の見返りもないのはちよつと……ああ、嘘嘘。冗談だつて霊夢パイセン。洗いざらい話しますよ、はい」

ごねたかと思えば、霊夢が僅かに険しい表情を浮かべた途端に呆気なく陥落する宇佐見。仮にここで霊夢と敵対したとしても彼女には勝算があつたが、この段階で戦うのはあまりにもリスクが高く、不利益しか被らない。

対して霊夢も宇佐見の実力は現時点で“未知数”であり、油断ならぬ相手であると認識していた。

何せ彼女は知らぬ内にも、確かに成長を続けているのだから――。

「今、何とおつしやいました？」

その時である。

聞き覚えのある甲高い声が横からする。視線を向ければやはり見覚えのあるツインテールが立っていた。

「……あんたはさあ。私のストーカーか何かなの？」

果たしてこの展開は何度目だろうか。少し驚きながらも霊夢は面倒臭そうに溜め息を吐き、彼女へと向き直って問い掛ける。

白井黒子がその大通りを通つたのは本当に、単なる偶然であつた。

いつもの風紀委員としての巡回。マネーカードの件もあつて普段よりも拡大した範囲内にあるそのカフェは数人ではあるものの行列が出来てくらしいの人気店。たまたま歩いている最中に視線に入り、そのテラス席に見覚えが有り過ぎる、誰であるか一目瞭然な紅白の存在を発見した。

あのファミレスではなく、こういつた雰囲気の人気店に来るような人間だと思つていなかったため少し驚く。恐らくは相席している人物に誘われたのだと思われるが……。
(誰ですの？ あの方は)

眼鏡を掛けた少女。一見すると地味めであるが、端正な顔立ちをしているのが分かる。着用しているのは董色のチェック柄の制服……この近辺の学校名は大方掌握している白井であるが、かなり特徴的なデザインにも拘わらず記憶する限りでは全く見覚え

がなく、どこの学校の生徒かは分からなかった。

友人……かどうかは不明であるが、少なくともこうして流行りの店に一緒に来ている時点で仲が悪かったりするような関係ではないだろう。以前会った神裂のように白井の知らぬところで交友関係は意外と深いのもかもしれない。

別に声をかけるつもりはなかった。彼女はもう風紀委員ではないし、テラス席とはいえ客ではないのに話し掛けに行くのは些か非常識なようにも思えたからである。

しかし、素通りしようとしたところ。眼鏡の少女の口から「第三位の超電磁砲^{レールガン}」という単語が出たのが聴こえてきた瞬間、気が付けば声をかけてしまっていた。

「……あんたはさあ。私のストーカーか何かなの?」

「なっ?!」ち、違いますの! たまたま巡回している最中に目に入っただけですの!」

溜め息交じりに吐き出された言葉に対し、白井は心外とばかりに声を荒げる。事実であるが、動揺したせいか言い訳しているかのようだった。

「そ、それよりもっ!」先程あなたレールガンとおっしゃっていましたが、お姉様がどうかしたんですのっ!」

「お姉様? えっと、どちら様で?」

問い詰められ、眼鏡の少女——宇佐見は困惑する。お姉様というのは超電磁砲の事だろうか。常盤台中学の制服を着ていることから恐らく信奉者の一人であり、そう呼ぶこ

と自体には納得出来るが……。

「し、失礼しましたっ！ こ、こほん。私、白井黒子と申します。お姉様……御坂美琴の後輩ですの」

「ああ、あなたが風紀委員のテレポーター。噂はかねがね聞いているわ」

やってしまったと若干顔を赤くしつつ、白井が自己紹介すれば宇佐見は納得した様子で手を叩く。

しかし、噂と聞いて白井はひきつった笑みを浮かべる。以前に逮捕した犯罪者が「捕まったが最後心も体も切り刻んで再起不能にする最悪の腹黒テレポーター」などという不名誉な呼びび名を口走っていたのを聞いていたからである。

因みに霊夢は知つての通り「鬼巫女」とシンプルな異名であるが、それ故にもはや人間扱いされておらず、台風とか怪物とかそういう類いの如く恐れられている。

「私は宇佐見董子。東深見……じゃなくて、霧ヶ丘女学院一年、ついでに秘封倶楽部会長よ。今後ともよろしく」

「ヒフウ……？ それに、霧ヶ丘女学院ですの？ かしながら制服が……」
返された自己紹介に白井は眉をひそめる。

霧ヶ丘女学院。単純に能力開発分野だけなら常盤台に肩を並べる名門学校であり、常盤台が汎用性に優れたレギュラー的な能力者の育成に特化しているのならばこちらは

奇妙で、異常で、でも再現するのが難しいイレギュラー的な能力者の開発のエキスパートである。

当然白井も知っているが、制服のデザインは宇佐見が着ているものとは全く違うものだと言っていた。

「ああ、これは前に通ってた学校だよ。デザインが気に入っててさー」

「そ、そんなんですの……」

何てことのないかのようにあっけらかんと言う宇佐見に、そんな理由で許可が下りるのかと疑問に思いながらも白井は頷く。

少なくとも制服の改造は可能だと思われる。何故なら白井の知り合いの霧ヶ丘女学院の生徒には上半身は裸にサラシを巻いて上にブレザーを羽織っただけ、下は冬服のミニスカートに金属ベルトという痴女としか思えない格好をした人物が居るのだから。

あれが許されているのなら宇佐見など可愛いものだろう。

「そ、それで……先程の話なのですが」

「うん？ あー、あれを聞いてたの？」

「そうですよ。盗み聞きしてしまった形になって申し訳ありませんが、一体お姉様について何を話していたのですか？」

「何を、ね……」

ちらり、と宇佐見は霊夢へと視線を送る。風紀委員という立場の白井に親愛なる御坂美琴が関わる学園都市の裏で行われているおぞましい実験を教えるべきか否か。彼女には判断しかねる。

「……別に大した話はしてないわよ」

そして、霊夢はただそう言う。当然話せるような内容ではないし、そもそも判別するだけの情報を得ようとしたところで白井が乱入してしまった。

霊夢からすればとんだ邪魔が入った気分である。

「ツ、そう誤魔化さないでくださいまし！」

投げやりな返答に白井が顔をしかめる。

「誤魔化してない。第一ズカズカと店のゾーンに入ってきて何かと思えば……別にお姉様って言ってもあんたと美琴とは姉妹でもなんでもないんだし、いちいち気にする必要なんて無いでしょ」

実に紛らわしい。さも当たり前のようにお姉様などと呼んでいるが、白井の呼ぶお姉様というのは単に慕っているが故の呼び方であり、本当に姉妹という訳ではない。それを御坂のそっくりさんについて調べる過程で霊夢は知った。

今更が過ぎる気がするが、それだけ霊夢は興味が無かったということである。

「ツ……それは……そうですが……」

その指摘に白井は押し黙る。確かにその通りであり、普段の彼女ならばこうも過剰に反応することはなかっただろう。

しかし、白井には引き下がれない理由があった。

「お願いします。お姉様、最近様子がおかしいんです。夜遅く出歩いて、いつも疲れた顔をしていて……とにかく、知っていることがありましたら教えてほしいんですの！」

「……美琴が？」

あの鉄橋で上条と痴話喧嘩していた時もあり遅い時間帯であったし、別に不自然には思えない。

しかし、タイミングがタイミングだ。今しがた御坂美琴のクローンかと思われる人物について話していたところ。そして、この噂が御坂自身の耳に入っても不思議ではなく、何かしらの形で関わっている可能性もなきにしもあらず。

「理由を尋ねても教えてくれませんか……何か大変な事を抱え込んでいるのは一目瞭然ですのに……」

俯く白井。彼女にとって御坂が心配なものもあるが、何よりも自身を頼ってもらえなかったことがショックだった。

「……………」

「靈夢には弱音のようにも聴こえた。そんな姿を自身に見せる程に白井も思い詰めているようだ。」

しかし、仮に御坂の抱える「大変な事」が靈夢の予想通りのものであるのならそりや教えられなくて当然である。

「本当にお願ひします。心当たりがあるのなら、教えてください」

「……悪いけど、あいつが言わないんなら、私からも教えられない」

頭まで下げて懇願する白井に対し、靈夢は冷たく言い放つ。無情な対応にも思えるが、恐らく御坂は彼女らを学園都市の闇に巻き込まないようにしているのだ。その配慮を己が判断で台無しにしてしまう訳には行かない。

「ッ……分かり、ました……」

白井は頭を下げたまま歯噛みする。ここままでして突き放されたのだ。靈夢は明らかに御坂が何に関わっているか知っているが、これ以上何も語ろうとはしないだろう。

敬愛する人の助けになれない己の無力さに、どうしようもなく打ちのめされる。

「なら……もう一つ、お願いがあります」

「あん？」

すると白井が顔を上げ、切り出す。

「——もし、あなたが何か知っているなら、どうかお姉様を、助けていただけませんか？」

他人に委ねるなど白井にとっては耐え難いこと。けれど、それしか道がないことを理解し、意を決して彼女は霊夢に頼み込んだ。

「……………」

本当は悔しくて仕方ないであろうに。その姿は、霊夢の知る白井からは考えられず、思わず呆気にと取られてしまう。

「……あまり期待はしないでよ」

「……………」

霊夢はただそう呟くだけだった。これに白井はばあ顔と顔を輝かせる。

期待するなど言ってるだろと霊夢は呆れながらも口にはせず、ぼりぼりと後頭部を掻く。

「——ありがとうございます」

これまた珍しい感謝の言葉。明日は槍でも降りそうであると、霊夢は思うのであった。

「お人好しだなー、レイムっちはー」

「茶化すんじやあないわよ。ったく……また面倒事が増えちゃった」

白井が立ち去った後、愉快げに笑みを浮かべる宇佐見に対し、霊夢は不機嫌そうに顔をしかめる。

「そんなこと言っちゃってー。追い返さなかったことは、わりと気に入ってるんでしょ？」 黒子ちゃんのこと」

「……うっさいわね」

別に嫌いではないが、かといってあんな説教臭くて喧しいツインテールのどこに気に入る要素があるというのか。

あれは泣き落としに近いものである。

「さっさと教えなさい。そこから美琴の動向も推理しないといけないんだから」

「おっけー。けどその前に、ちよつとだけ条件出している？ 今回の件、私にも一枚噛ませてよ？」

「はあ？」

宇佐見の提案に霊夢は眉をひそめる。クローンの件を今の今まで放置していたことから、この件には彼女の食指は動かなかつたと判断していたが……。

「いやあ、レイムっちに第三位まで直に関わっていくとなると、なかなか面白くなりそうだと思うね。それに、本格的に介入するってんなら、私の情報源は有益でしょ？」

「ハア……分かったわよ」

「やった！ 言質は取ったからね？」

この調子ならいつまでもごね続けるだろう。霊夢は面倒げにしながらも了承する。

足手纏いは御免であるが、宇佐見はトラブルメーカー気質なのを見て見ぬフリをすれば戦力としては充分に過ぎる。

「——それと、ついでに第三位が裏でコソコソやつてることについても心当たりがあるわ」

すると宇佐見が新たな情報を伝える。恐らく一枚噛ませてくれなければこの情報は教えてはくれなかつただろう。

「………続けて」

「予想は付いてると思うけどまあクローン絡みよ。彼女は自分のクローン……妹達シスターズだなんて呼ばれてるそれらを使ったある“実験”を阻止する為に関連施設を片っ端から破壊して廻っている。ほら、ニユースとかで製薬会社が襲撃を受けたとかやつてるじゃん？ あれの犯人、第三位だから」

どうやらクロローンの製造だけでは終わらぬ話のようだ。それにわざわざクローンを
用いるということはその実験はろくな内容ではないことが窺える。

それも御坂が公にせず、破壊という手段を用いてまで止めようとする程の——。

「その実験つてのは？」

「そりゃ決まってるでしょ。この街お馴染みの倫理観ガン無視の冒流的実験よ。内容はなかなか吹っ飛んでいるけど正直、ガツカリしたわ。こんな実験が成功するなんて信じてる学園都市にも、天下の第一位様にも」

「………何ですって？」

冷淡に、心底つまらなさそうに語る宇佐見。対して霊夢は驚いた様子を見せる。

その名が出てくるとは、微塵も思っていなかったが故に。

「——絶対能力進化計画。第一位に二万人もの妹達シスターズを虐殺させてレベルアップを目論む、何ともまあイカれた実験よ」

ここで漸く、霊夢は知った。

あの男の語る “無敵の力” とやらが何なのかを——。

潜入

その噂を聞いたことがない、と言えば嘘になる。

いつ頃からだったのだろうか。そんな変な話を自分が耳にするようになったのは。

ある日、いつもの通りに常盤台に登校したら、同級生から「常盤台と真逆の方に歩いてるのを見た」とか。

ある日、歩いてたら、たまたま別の学校の誰かが超能力者レベのクローンの噂を口にしてるのを偶然耳にした。

ある日、ゲームセンターで遊んでいたら、またクローンの噂を聞いた。加えて、軍用兵器として量産されるとか。

それに私は、くだらないと見切りをつけて興味の無い振りをしてきた。根も葉もない噂、所詮作り話、構うだけ時間の無駄であると、そう思うことによつて蓋をしてきた。

そうして頭の片隅へ追いやり、すっかり忘れていた頃に、またその噂を聞いた。ドッペルゲンガーなどと呼ばれているらしい。

『御坂さんはどうします？ 自分のドッペルゲンガーが現れたら』

友人に問い掛けられ、言葉に詰まった。そんなこと、考えたくもない。

『——あなた、オリジナルね』

あのギョロ目の女にそう言われた瞬間、心臓を鷲掴みにされた気分だった。

目を逸らして見て見ぬフリを続けてきたものが、すぐそこまで忍び寄っているのを感じ取った。

『ミャー、と鳴く四足歩行動物がピンチです』

そして、自分と瓜二つの少女と出会い、その噂が紛れも無き真実であると知った。

『これは……お姉さまから頂いた、初めてのプレゼントですから』

無表情で、変な喋り方で生意気な奴だったけど、少なくとも悪い奴ではないと思った。猫とじやれて、一緒にアイスを食べて、お気に入りの缶バッジをあげて、端から見たらまるで本当の家族のようで……。

短い関わりの中で、確かに理解した。たとえ試験管の中から生まれたクローンだろうと、この子はきちんと生きているのだと。

『さようなら、お姉さま』

また会える、そう思ってた、しかしそれが、最期の言葉だった。

『改めましてエ、一方通行だ。^{アクセラレーター}よろしくなア?』

あの夜、己が如何に無力かを思い知らされた。

自分のことを姉と呼んだあの子を虫けらのように殺すことを、嬉しいなどと宣ったあの男に何も出来なかった。全力を尽くして、敵討ちどころか傷一つ付けられず、ただただ嘲笑されて――。

『ミサカは単価十八万円の模造品です。作られた身体に、作られた心。スイッチ一つで生産できる、実験動物ですから』

あの子達はそう言った。自分達は殺される為に生まれてきたのだと。迷い無く、表情一つ変えず、何の感情も無いかのように。

――違う。間違っている。

止めなくては。これは私の責任だ。幼い頃の私が浅はかな行動でDNAマップを提示したからあの子は生まれ、殺されている。

つまり自分が殺したも、同然ではないか。

「これは……!?!」

襲撃した実験に関係した研究施設。少しでも何か情報を得る為にそのPCをハッキングした際に、私は驚くべきデータを発見した。

報告事項

???そもそも本実験を開始するに至った理由は、『ツリーダイアグラム』の予測演算の結果、

我々の最終目標である『絶対能力者』⁶へと到達する者は一名のみであると判明したからである。しかし、この予測演算に入力したデータは最上位の超能力者⁵のみであり、大能力者⁴以下については端から見込み無しと含めていなかった。

??これに対し、一部の研究メンバーからは『原石』等も含めれば検証の余地はあると提唱され、議論の末、再度演算の許可が下りた。

??その結果、新たな候補者が浮かび上がった。

一方通行以外に、絶対能力者⁶へと至る可能性のある存在。それはつまり、この実験にも深く関わっているかもしれないということ。

私は夢中になって読み進め——。

??候補者の名は、『博麗霊夢』。

「は——？」

言葉を失う。

そこに記されていた名を見た瞬間、がっんとハンマーで思い切り殴られたような衝撃が頭に走る。

??候補者の能力である無重制御は稀少な原石であるものの異能力者に分類されており、研究価値は低いと結論付けられていたが、今回の結果を見るにそれは浅慮であつたと言わざるを得ない。

??候補者を樹形図の設計者が何故、他の超能力者を差し置いて絶対能力者に辿り着ける者であると演算したのかは不明。何かしらの不具合ではという意見もあるが、具体的な時間割まで算出したため可能性は低く、恐らく身体検査に不備があつたと思われる。

??候補者を暫定的に九人目の超能力者に指定しようという動きもみられるが、解析不能な第七位と第八位以上の特異性から却下されている。大能力者に指定する具申については現段階で保留されている。

??その特異性、異常性を考慮し、メインは一方通行への二万体の妹達を用いた戦闘実験として、無重制御を絶対能力者へ進化させる研究プログラムも並行して稼働する予定である。

報告者：

「なに、これ……博麗さんが……この実験に……う？」

有り得ない。そう思いながらも、私は確かにこの胸に疑心を抱いていた。

だからこそ、あんな事が起きてしまったのだろう。

暗部組織。

それは学園都市の闇の一端。非常に高い科学技術と生活水準を有する一方で、その裏では生命倫理や人権倫理を無視した非人道的な研究及び戦闘兵器の開発が進められているこの街では、更に非合法的闇取引を行う業者や犯罪組織なども密かに暗躍している。

故に、風紀委員や警備員とは違い、暗殺または破壊工作といった表沙汰に出来ないような任務を請け負う暗部組織が多数存在していた。

(……超暇ですね)

気だるげに壁に凭れる、フード付きのパーカー姿の少女。まだ良くて中学生くらいにしか見えない彼女もまた、暗部に身を置いていた。

名を、絹旗最愛という。

(フレンドは既に例の電撃使いと超戦闘しているみたいです。調子に乗って返り討ちに遭わなきゃ良いのですが……)

彼女の所属する暗部組織、“アイテム”は統括理事会直属の実行部隊。その主な業務内容は、統括理事会を含めた学園都市上層部や暗部組織の監視や暴走の阻止。

そして、学園都市にとっての不穏分子の削除・抹消も担っている。

今回の仕事は、ある製薬会社を襲撃するであろう正体不明の侵略者インベーターの排除。正体不明といっても少なくとも大能力者以上の電撃使いだということは判明しているし、依頼主は誰か把握している様子であると、上司である“電話の女”は言っていた。

はつきり言って下っ端がやるような内容であるが、わざわざアイテムに依頼されている以上、どうせろくでもない思惑があるのだろう。手出しは標的が施設内に侵入してきた時のみ、素性は詮索しないというオーダーをわざわざ出しているのも不可解だった。

この事にリーダーは腹を立てていたが、絹旗は特に文句は無い。報酬は羽振りが良いし、何よりもゴミ掃除など実に「らしい」仕事だと思った。

(しかし、私ら以外の暗部も使っているみたいですし、たかだか電撃使い一人相手に超過剰ではないですか?)

元々絹旗は他の構成員とは別行動する予定だった。襲撃者がどちらの施設を襲うかは不明であるし、協力者が居る可能性もあるからだ。

そうしようとしたところで、他の施設には別の暗部組織を配置しており、自分達アイテムの持ち場はこの製薬会社のみであることを告げられた。

故に、現在この場には絹旗らアイテムの正規メンバー全員に加え、下部組織の人員まで集結しており、絹旗は地下の管制室で警戒及び補充人員として待機している状況である。

大能力者とはいえ一個人に向ける戦力とは思えない。まるで別の何かを警戒しているような――。

(……考えても仕方ありません。どちらにせよ、麦野が負けることなど超有り得ないのですから)

そんな疑念を抱きながら絹旗は任務失敗の可能性など微塵も考えていない。

当然であろう、自分達のリーダーに勝てる相手などかなり限られる。何せこの学園都

市で序列第四位に君臨する強者なのだから――。

ジリイイイイイ!

「! 何です……?」

その時だった。ドゴン、と上の方から大きな音がしたかと思えばけたたましい警報が鳴り響く。

「だ、誰かが入口を突破したみたいですよ!」

施設内では戦闘になっても警報が鳴らぬようにその手のシステムは切っているはずだが。何事かと首を傾げていると一緒に居た下部組織の男が報告する。

これに絹旗はきよとんとする。確かに入口のセキュリティはいつも通り機能しているが、まさか真正面から堂々と侵入してくるとは。

「超正面突破とか、一体どこの馬鹿が……は?」

監視カメラの映像を確認し、絹旗は目を見開く。

一瞬のこと。そこに映っていたのは紅白の巫女が破れたシャッターの裂け目を通して抜けて内部へと入っていく姿。巫女がカメラの方を一瞥した次の瞬間には映像はブラックアウトし、砂嵐状態となる。

それから他の監視カメラの映像も次々と暗転していく。突然の事態に戸惑う下部組織の男達。絹旗もまた訳が分からないといった様子で頭を掻いた。

それは男達とは違い、この現象に対してではなく侵入者に対するもの。

「ツ……超超、超意味不明です。何故あの人がここに……!？」

見間違いでなければ……否、彼女の姿を自分が見間違うはずがない。

だとしたら一刻を争う事態だ。絹旗は考え得る限りで最悪な展開に陥つたのだと理解し、上で本来の標的と戦闘しているであろう仲間達へ連絡を試みる。

鬼

巫

女、襲来——。

彼が裏で血生臭いことをやっていることは、何となく察してはいた。

かつては漂わせていなかった濃厚な血の臭い。それはそこらのスキルアウトを痛め付けて再起不能にしたでは済まないような行為を彼が何度もやっていることを意味しており、あの澱んだ眼は、既に一線を越えてしまっている者のモノだった。

しかし、霊夢はこれを看過した。彼が自分の知らぬ所で何をしようが、どうでもよかつたが故に。

(けどまさか……殺してる相手が美琴のクローンだったとはね)

それも二万人。宇佐見が言うには現段階で既に一万近くは殺害済みらしい。霊夢からしてもまともではないと言わざるを得ない内容である。

あまりにも馬鹿げた実験。果たして彼は、一方通行は本気でこれを成せば絶対能力者

とやらになれると信じているのだろうか。

霊夢はそうは思えなかった。決して親しい訳ではなく、たった数度しか会ったことはないが、これまでの関わりの中で抱いた一方通行という少年に対する人物像から考えると、些か違和感があつた。

或いは、ああ見えて、そんなものに縋るくらいに、彼は追い詰められていたのかもしれない。

(そんなに不良共が鬱陶しかったのかしら？ どうであれ、良い迷惑だわ)

かといって責める気は特に起きなかった。今まで知らぬ存ぜぬを通してきた己が今更とやかく言う権利は無いだろう。

だが、結果的には美琴を介して霊夢を面倒事に巻き込んだ形になる。クローンを目撃し、白井から御坂の事を頼まれた以上、もはや関わらぬという選択肢は存在せず、一方通行と敵対する可能性は大いにあつた。

(……めんどくさい)

これに尽きる。何でこうなつたかと言えば、元を辿ればクローンを作り、一方通行に実験を持ち掛けた科学者連中共が原因に違いあるまい。

科学の発展だの天上の意思だのと宣い、人を実験動物扱いし、平気で遊ぶ、まるで自分達が神にでもなつたかのように振る舞う様は、神などではなく野蛮な獣の如き有り様

である。

好き勝手やるのは結構だが、頼むから巻き込まないでくれと。いくら霊夢がそう思おうと、そのような愚者共が蔓延るこの街に居る以上、否が応でも関わることになってしまう。

だからこの街は嫌いなのだ。

「……で、ここに美琴が居るの？ 董子」

『うん、間違いないよー。誰かと交戦しているみたいだけど……施設の護衛か何かかな？』

時刻は夜。表向きには製薬会社として扱われている研究施設のシャッターで封鎖された入口の前で、霊夢は宇佐見と通話していた。

一足先に御坂は侵入しているようで宇佐見曰く誰かと戦っているようだ。単なる警衛ならば彼女が苦戦するとは思えないが、業を煮やした上層部が刺客を送り込んできた可能性もある。

その手のプロが複数人で、或いはテレスティーナのように対抗策を用意すればいくら超能力者と言えど、敗北する可能性はゼロではない。加えて、御坂は命のやり取りなど経験は無いはずなのだから。

『私も別口で潜入しようと思ってるけどレイムたちはどうする？』

「決まってるでしょ、コソコソするのは性に合わない。——正面突破よ」
そう言うと共に、シャッターが吹っ飛んだ。

鳴り響く警報を気にも留めず、霊夢は針を投擲して監視カメラを破壊しながら悠々と建物の中へと入っていく。

『うわあ……後のこと何も考えてないでしょ。いや、考えた上でどうでもいいってこと？ 夢美さんに怒られても知らないからねー？』

「何で私があいつに気を遣わないといけないのよ。それじゃあ、そっちはよろしく」

苦笑いを浮かべる宇佐見にそう言つて霊夢は通話を切る。御坂の詳しい居場所は分からないが、目的はこの施設そのものの破壊なのだ。適当に道なりに進んでいけばそのうち会えるだろう。

「……………」

その姿を、遠くから御坂美琴と瓜二つの少女が無言で見据えていた。

アイテム

(面倒なことになったわね……)

ラフな半袖に短パン姿。キャップ帽を目深に被った少女——御坂美琴は顔をしかめ、舌打ちする。

皆に黙って夜な夜な「実験」に関係している研究所を潰して回って数日。遂に残り二つという所まできて、今夜中に終わらせるつもりで意気込んで潜入したのだが、そこで待ち伏せられ、襲撃を受けた。

それも今までのような警備ロボットではなく、明らかに手慣れたその手のプロとしか思えない連中。実験を運用する「敵」がいよいよ焦って刺客を差し向けてきたのだと御坂は理解すると共に安堵する。

何故ならこうして止めようとしてくるといふことは、己がやっていることは確かに効果的であることを証明しているのだから。

「まったく……見つけたならすぐに報告して私らが来るまでは足止めに徹しろって言ったのに。先走って振り返りにあっちゃやうなんて、ボーナスに目が眩みすぎよ」

「ご、ごべえん……」

「大丈夫。私はそんなフレンドを応援してる」

しかし、状況はすこぶる悪い。目の前には三人の姿があった。

つい先程まで戦って無力化した、口八丁で御坂に苦戦を強いた爆弾使いの金髪白人の少女。それから彼女を尋問しようとしたところで正体不明の緑色の閃光で鋼鉄の壁をドロドロに融かしながら攻撃してきた長い茶髪で大柄な女性と、気だるげな表情をした体操服姿の少女――。

ここにきて増援。それも茶髪の方は明らかにヤバそうな雰囲気を漂わせていた。

「で、アンタが噂のインベーターで……」

こちらへ視線を向けた女の言葉は最後まで続かなかった。御坂が磁力を操り、引っぱがした筒状のパーツを投げたからだ。

「――合ってるわね」

しかし、それは対象にぶつかる前に崩れ落ちていく。

（なっ、防がれた……いや違う、消し飛ばされた？ 一体どうやって――）

思考する最中、目の前から殺気を感じて視線を向ければ緑色の閃光がプラズマのように入り、レーザーとなって放たれる。

鋼鉄の壁に大穴を空けた攻撃と同じ。驚きながらも咄嗟に御坂は磁力を用いて適当

な柱へと自分の身を動かすことでこれを回避した。

幻想猛獣AIMバーストのレーザーとはまた性質が違う。見てくれこそあれのような派手さはないが、下手に防御しようとするれば丸焦げでは済まないだろう。

御坂は冷や汗を掻きつつも、適当に近くにあつた通気口の蓋や天井の部品を同じように磁力でぶん投げていく。

「へえ……?」

回避されたことが意外だったのか茶髪の女は感心した様子で自分の前に円形のエネルギーを形成し、容易くそれらを防いでみせる。

「ッ……………」

「器用な真似するのね。壁に張り付いて逃げるなんて……蜘蛛みたいな女ね」

こちらを見据えて余裕の笑みを浮かべるその姿に、御坂は歯を食い縛った。数的に状況はこちらが圧倒的に不利なのに加え、あのレーザー女は少なくとも大能力者^{レベル4}以上の力を持っている。

「滝壺、使つときなさい」

出方を伺っている御坂を見据えながらも茶髪の女はそう言ってポケットから取り出したタブレットケースのようなものを体操服の少女へと投げ渡す。

滝壺……それが名前ようだ。彼女は自分に向けて飛んでくるそれを両手で受け取

りながらこくり、と頷いた。

そして、ケースから三つほど小さな錠剤を取り出し、それらを口に放り投げ、一気に嘔み砕く。

「——っ!!」

ドクンッ! と、体が脈動する。

「……………?」

様子が変わった。先程までの眠たそうなものとはかけ離れた、大きく開いた眼でこちらを迷いなく見据える彼女に、御坂は異様な危機感を覚えた。

あの錠剤……少なくとも無意味なものであることは有り得るはずがなく、恐らく彼女の能力を補助する薬物か何かに違いない。

(こんな奴ら……三人も相手にしてられない)

ただでさえあの爆弾使いとの戦闘で消耗しているのだ。これ以上能力を乱用してガス欠になっては元も子もない。

そう結論付けた御坂は本来の目的である施設の破壊を優先することにし、近くに転がっている窒素ガスのパイプに電撃を叩き込む。

するとパイプが破裂し、プシューと勢いよくガスが漏れ出して空間に充満する。

「はっ! 目眩ましのつもり? そんなことしたって……うん?」

直ぐ様、茶髪の女はレーザーを薙ぎ払うように放ち、ガスを吹き飛ばすが、既にそこに御坂の姿は無かった。

「……逃げ足が早いことで。——滝壺」

「大丈夫。目標のA I M拡散力場は覚えた」

そう答えながら滝壺は、御坂が逃走した方向へ視線を向け、その位置をしつかりと捉えていた。

（——あいつ、もう終わりね）

二人の淡々とした会話を他所に、爆弾使い——フレンジーセイヴェルンは既に自分達の勝利を確信した様子で笑みを浮かべる。

麦野沈利。超能力者第四位であり、攻撃力に関して

はトップクラスに位置するであらう

「原子崩し」。

滝壺理后。相手が地球の裏側に居ようが、どこまでも追跡する能力、

「能力追跡」。

相手の位置を常に特定し、

「粒機波形高速砲」でピンポイント狙撃して障害物ごと焼き尽くす。アイテムが誇る超能力者と大能力者の最強タッグ。たとえどんな能力者であつても、この二人から逃げられるはずがない。

「さて、誰だか知らないけど、後はじわじわと追い込んでいくだけ——あ？」

いざ狙撃を実行しようとしたその時、突如として警報が鳴り響く。

「何？ 警報は切ってるんじゃない……」

『麦野！ 至急応答願います、麦野！』

「——ん？ 絹旗？ どうしたのかしら、何か問題でも？」

それと程なくして通信端末から聴こえてくる管制室で待機させている仲間の切羽詰まった声。タイミング的に十中八九この警報と関係あるだろう。

茶髪の女——麦野は訝しながらも表面上は落ち着いた様子で尋ねる。

『二人目のインベーターです！ しかも知っている顔でして、少なくとも私一人では対処出来ない相手です！ 超増援お願いします！』

「……何ですって？」

仲間……絹旗の実力はよく知っている。戦闘力に関してはアイテムN.O. 2であり、常に冷静な判断力と真面目さから麦野は彼女のことを高く評価していた。

そんな彼女が下部組織の連中込みで無理だと断言する程の相手。誰であるか語らなかつたということは、アイテムとしてではなく個人的に面識のある相手だろうか。

「落ち着きなさい。残念だけどこっちはまだ戦闘中。フレンダもまだ戦線復帰できてないし、しばらくは任せることになるわ」

『ッ、そうですか……』

「終わり次第、すぐに向かうわ。それまで足止めしといてちょうだい。それくらいは出

来るでしょ?」

『……分かりました。やれるだけやってみますが、超急いでくださいよ、頼みますから』
自信無さげな言葉と共に通信が切れる。

そこまでの相手だというのか。ここにきての新手と仲間の不甲斐無さに麦野は内心苛立ちを覚え、悪態を吐く。

「フレンド? 聴こえてたでしょう? 動けるようになったら絹旗の所へ向かいなさい」

「うい……」

まだ舌が痺れて上手く喋れないのが発声練習しながらこくりと頷くフレンド。正直、装備の大半を消費した状態で絹旗が匙を投げるような相手と戦うなど真っ平御免であるが、拒否すれば殺されかねないのでYES以外の返答など無かった。

一方その頃。

真正面から堂々と侵入した霊夢は自身の直感を頼りに通路を進んでいた。

「……………あん？」

曲がり角に近付いたその時。二人の男が飛び出すように姿を現したかと思えば、拳銃を霊夢へと向けてくる。

既に引き金には指が掛かっていた。

「ここは警備に破落戸を雇っているのかしら」

「なっ——」

しかし、次の瞬間には霊夢は通り過ぎており、男達は発砲することなく倒れ込んだ。

風貌からして常勤している警衛ではないだろう。あんな内容の実験を主導しているだけあつて、堅気ではない後ろ暗い連中を動員しているようだ。

「面倒だから、さっさと全員で掛かってきてくんない？」

「——超囃にもなりませんか」

ばごんっ！ と、振りかぶった拳が通路の壁にめり込む。背後からの奇襲を何てことのないように躲した霊夢はそのままくると回し蹴りを繰り返す。

しかし、顔面に向けられたこれに刺客は反応し、片腕で受け止める。

「！……へえ」

刺客の正体はパーカーを着た幼い少女。その容姿と防がれたことに霊夢が意外そうにしていると、相手はすかさず拳を突き出す。

少女の細腕で放たれたそれを霊夢は受け止めようとするが、先程の壁にめり込む程の怪力を思い出し、回避に切り替え、振り抜かれた腕を掴み取る。

「ッー」

そして、ぐるんつと背負い投げを繰り出して床に叩き付けた。そのまま関節を捻って決めようとするが、何やら目には見えない薄い膜のようなものが覆っており、腕そのものには触れられておらず、上手く動かない。

「ちっ——」

仕方なく腕を放し、その顔を思い切り踏みつけんとするが、拘束から逃れた少女は横へ転がってギリギリで回避し、勢いのまま起き上がる。

間髪入れずに足刀を繰り出すも、これも後ろへバク転することで避けられてしまう。

「——やるわね」

そう小さく呟き、霊夢は針を投擲する。

「——光栄です」

そして、その声はきちんと少女に届いており、彼女もまた淡々とそう返すと、ひびが入る程の力で床を蹴り、飛来する針などお構い無しと言わんばかりに真つ直ぐ駆け出す。

「！」

針が少女の眉間に刺さ——らない。肌に触れる前に何かにつつかり僅かに拮抗するも弾かれてしまった。

少女は肩を前へ出し、そのまま全速力でタックルする。

「しかし、霊夢は動じることなく、ひらりと受け流すように少女の背後に回り込み、カウンター気味に横合いから腹部へ掌底を叩き込む。

みしり、とぶつかっただのは先程同様膜で腹部自体には触れていないのにも拘わらず骨が軋む音がした。

「かはっ——」

呻き声をあげ、壁に叩き付けられる少女。しかし、即座に受け身を取って起き上がって霊夢から距離を取る。

「ッ……本当に、生身の一撃だとは超思えませんか」

ハアハアと息を切らしながらも、その闘志は消えていない。

フアイティングポーズを取り、こちらを真つ直ぐ見据える少女に対し、霊夢は小首を傾げる。

「……どこかで会ったかしら？」

あの怪力、能力だと思われる空気のような無色透明な膜、それに戦闘スタイルにも、妙な既視感を覚えた。

対する少女——絹旗は僅かに顔をしかめる。

(……覚えていませんか。ちよつと残念ですが、まあ仕方ありませんね)

彼女にとっては己もまた有象無象の一人。仄かな期待を直ぐ様捨て去り、絹旗は靈夢の動きに対し、如何に対応しようか思考を巡らせる。

（超早くしてください麦野。やっぱり私一人では荷が重いどころではありませんよ——）

一分にも満たぬ攻防でこちらはダメージを負い、相手は針一本使わせただけで全くの無傷。軽い仕事だと思っていたのに、一転して過去に類を見ない高難易度任務である。

つくづく運が無いと、絹旗は心の中で嘆きながら増援を待ち侘びる……。

こちらの位置を特定されている。

次々と放たれるレーザーの猛攻から必死に逃げながら、御坂は悪態を吐く。

あの体操服の少女は透視能力クレアホイアンスか読心能力サイコメトラ、或いはそれに準じた能力の持ち主なのだろう。それも狙撃の精度からして座標レベルでこちらの位置を掌握していると思われる。

このままではジリ貧だ。どうしたものかと御坂は打開策を見出そうとするも、そんな猶予など与えぬとばかりにレーザーが床を貫通して迫る。

（範囲外に逃げる？ いや、もしもこの施設全体が範囲なら体力の無駄。なら——）

ガクン、と一瞬身体に力が入らなくなった。

(!?) やば……能力使いすぎて——?)

ここにきて溜まっていた疲労が一気に噴き出した。足がふらつき、前のめりに倒れそうになる御坂。何とか踏ん張るも、同時に足下の床が熱される。

(しまっ——!?)

御坂が目を見開くと同時にレーザーが彼女を飲み込まんよと床と天井を一直線に焼き尽くす。

「……………?」

死んだ。思わず目を瞑って身構える御坂。しかし、いつまで経っても体が焼ける痛みも消し飛ぶ苦しきも訪れず、気が付けば床の熱も感じない。

恐る恐る臉を上げると、レーザーが通ったと思われる大穴が空いていたが、自身はそこから5 mほど離れた位置に移動していた。

覚えのある感覚。これは、もしや空間移動テレポルト——?

「ッ、まさか、黒子——」

「ふう……ギリギリセーフ、だったわね」

真つ先に思い浮かんだのは後輩の姿。有り得ないと思いつつも辺りを見回せば、やはりと言うべきか別の人物が立っていた。

「どうやら私の方が一番乗りだったみたいね。一応確認するけどあなたが常盤台のレールガンちゃんでOK？」

そう問われ、御坂は自身の正体を見抜かれていることに驚く。

ボーラーハットを被り、内側で矢印が謎の原理で常時移動しているマントを身に纏った、マジシャンを連想させる装飾過多な眼鏡の少女……その風貌は見るからに怪しいが、助けてくれたことから敵ではない……はずだ。

「……あんたは、一体？」

「宇佐見董子。このまま立ち止まってたらまた狙われるし、あなたを手伝いに来たのだけ言っておくわ」

それだけ言うと少女——宇佐見はクイツと指先で眼鏡を動かし、つい先程レーザーが飛んできた方角を見据える。

——さあ、反撃開始だ。

愉しげに、彼女は嘯いた。

「目標、北西5メートル先へ移動」

「——また外した？」

こくりと頷く滝壺に、麦野は顔をしかめ、腕をクルクルと回し調子を確かめながら顎に手を添える。

立体に動ける、というだけではない。こちらの攻撃を事前に察知しているのか、或いは——。

「大丈夫？」

「……うん。全然平気」

フレンドと滝壺の声に視線をそちらに向ける。そこには少し疲れの色が見えた滝壺がおり、彼女は麦野の視線に気付くと心配をさせまいと手を振って笑顔で答える。

滝壺の能力追跡は便利ではあるが、「体晶」によって能力を意図的に暴走させることで発動する無理筋な代物であり、負担が大きく使用には限度があった。

(相手の移動距離は少しずつだが狭まっている。追い詰めてるのは間違いないわ。……これ以上滝壺に無理はさせらんないか。これだけやられても逃げない、ということはないとしてもここを破壊しなければならぬ事情があるということ)

ならばいつそのこと目的地で待ち構えていれば、相手は必ずそこを通る。相手は満身創痍で冷静さを欠いているのだから落ち着いていれば負ける可能性はまずない。

(——けれど、そんなもの私の性には合わない)

故に、次なる一手を打とうとフレンドへと声を掛けようとしたその時である。

麦野達の頭上に、大量の何かが出現した。

「なっ——!?!」

それは道路標識やガードレールといったこの建物にあるはずがない物質の数々。重力に従い、自分達を押し潰さんと落下するそれらをすかさず麦野は能力で消し飛ばす。

「つ……フレンド、滝壺、大丈夫?」

「う、うん……何とか……」

二人には怪我はない様子だが、突然の奇襲に麦野は苛立った様子でどこのどいつだと下手人の姿を探す。

そして、すぐに見つかった。

「へえー、見たこともない能力ね」

いつの間にか正面に立っていた二つの人影。片方は先程まで追い回していた蜘蛛女であるが、もう片方の眼鏡の女は知らない。

先程の攻撃は恐らくこの眼鏡の方。空間移動系の能力者だと思われるが……。

「——座標移動か？」

「残念、不正解ー。結標先輩とは同じ学校ではあるけど」

触れもせず、あれだけの数の物体を転移させた規模の大きさからその系統でも最高峰とされる座標移動ではと麦野は当たりを付けたが、即座に否定される。

（仲間が居たのね。あれが絹旗の言っていた二人目のインベーター？ だとしたらあいつ、もうやられちゃったの？）

空間移動で逃げられた可能性もあるが、そもそも絹旗は侵入者に対し、自分では手に負えないと断言していた。となると最悪の場合、目の前で緊張感無く能天気そうに笑う目の前の女は、絹旗をこの短時間で撃破する程の実力者ということになる。

ただのテレポーターだとは思わない方が良いだろう。麦野は警戒を最大限に高める。

「ちよつと！ 何で戻って来たのよ！ 折角逃げたのに——」

「あれ？ そうなの？ けどさー、わざわざ逃げずに全員纏めて倒しちゃった方が楽じゃない？」

「ツ、それが出来たら——」

苦労はしない。そう続けるよりも先にレーザーが横切る。

「随分と舐められたものね？」

明らかにこちらを軽んじている発言に、麦野はこめかみに青筋を浮かべていた。

対する少女——宇佐見はあくまで余裕の表情。

「怖いなー、あんまり怒ると小皺が増えるよ？」

「——ぶち殺す」

軽々とラインを越えた宇佐見の煽りに麦野はレーザーの嵐で返答する。

「ちよつと——怒らせて、どうすんのよツ!!」

大半が宇佐見の方を狙っていたが、自分の方にもレーザーは飛来する。避けきれないと判断した御坂はやけくそ気味に電撃を放ち、レーザーにぶつける。

そして、レーザーはぐにやりと曲がって在らぬ方向へと逸らされた。

「ツ!!」

これに麦野は驚愕に表情を染める。

彼女の原子崩しは本来 “粒子” 又は “波形” のどちらかの性質を状況に応じて示す電子を、その二つの中間である “曖昧なまま” の状態に固定し、強制的に操ることができる能力だ。

操った電子を輝く光線として放出し、絶大なる破壊を撒き散らす。それがあのレーザーの正体である。

そんな基本的に防御不可能で最強の攻撃力を誇る自身の能力を曲げる、などという芸当ができるのはかなり限られているはず——。

(やっぱり……受け止めてはつきりしただけど、恐らくあのレーザー女……根つこの能力は私と同じものだわ)

一方、御坂もある結論に至り、思案する。

「おっとつと——あんなに怒るだなんて、凶星だったのかしら？ それとも沸点が低いのかな？」

特に無傷の状態で姿を現す宇佐見。どうやら空間移動でレーザーを回避し切ったようである。

「あんた……！ さつきから、一体どういうつもり……!？」

「どうどう。ミコトっちもそうカッカせず。同じ超能力者同士仲良くしようぜ？」

「ミ、ミコトっちって……は？」

有無も言わず空間移動でこちらへ連れて来た挙げ句、相手を怒らせて暴れさせる宇佐見の行動に相手が命の恩人だとしても何を考えているのかと御坂は抗議するが、その返答の内容に一瞬思考が停止する。

それは麦野達も同様だった。

「今、何て？」

「え？ あ、そゆこと」

そういうえ言つてなかったと宇佐見はぼんと手を叩く。

「改めて自己紹介するわ——」

笑みを浮かべ、彼女は麦野達へ何気無しに扇ぐように手を翳してみせる。

次の瞬間——目の前の世界が一変した。

「ハアツ!？」

コンクリートの地面が翻る。破片が津波のように捲り上がり、麦野達を飲み込まんと襲い掛かった。

それは正しく高位の念動能力^{サイコキネシス}。信じられない光景だった。空間移動能力者ではな

かったのか。

啞然とする御坂に、フッフッフツと宇佐見は得意気に笑う。

「私は宇佐見董子！ 秘封倶楽部会長にして、学園都市“第八位”で——“真正正銘の

超能力者“よ!”

そして、帽子の鏝に触れ、気取ったポーズを取りながら彼女は高らかにそう名乗った。

超常操作

——第八位。

その存在が明るみになったのはつい最近。ついこの間まで七人しか居なかつた超能力者^{レベブル5}に突如として組み込まれた幻の八人目。

メディアへの露出が多く、広告塔にもなっている御坂美琴は別として第六位を筆頭に色々と謎めいている超能力者の面々の中でも特に詳しい情報が無く、中には学園都市が確かに第八位というポストを用意し、認めているのにも拘わらずその実在を疑う者まで居る程だ。

それだけ第八位は表舞台に姿を現したことがなく、しかもその能力が デュアルスキル “多重能力者”であるという、どこから流れたかすら不明な噂がこれに拍車を掛けていた。

二種類以上の能力を扱う。学園都市の多くの科学者達がかつてそれを実現させる為に躍起になって研究し、そして不可能であると断言された。

仮に本当だとして、何故他に類を見ない存在が全くと言って良いほど発表されず、姿すら現していないのか。そのような第一位でもおかしくはない存在が何故第八位とい

う末席に居るのか。

そういった不可解な理由が故に、第八位の存在は半ば都市伝説のような扱いだった。

「第八位……ですって……!?!」

自らがそうであると名乗った宇佐見に、御坂はその表情を驚愕に染める。

八人目の超能力者が現れたという話は彼女も耳にしていた。学園都市がその存在を公に認めている以上、実在こそするのだろうとも思っていた。

「それに、今の……多重能力者……」

「ありや? あんまり驚かないのね」

期待していた反応ではなかったのか少しばかり残念そうに小首を傾げる宇佐見。御坂は既に木山の多才能力マルチスキルや霊夢の力を目の当たりにしているので今更複数の能力を扱う光景を見ても、然して驚きはなかった。

しかし、それでも信じられぬ光景ではある。これまで学園都市で培ってきた常識を覆すようなものなのだから。

二つの能力、それも大能力者クラスレベル4の空間移動テレポルトと念動能力サイコキネシスをいとも容易く行使し、目の前の少女は殆どの者から眉唾物だと思われる噂の全てが紛れも無き事実であることを証明してみせた。

「正式名称は、PSIコントロール“超常操作”P.S.1。その名の通り、この街が“超能力”と定義する事象の大

半は扱える程度の、素晴らしい能力よ」

そう言い、宇佐見はさも当たり前のように掌から風の渦を、プラズマを、炎を、青白い電流を交互に発生させてみせる。

二種類どころではない。多才能力は幻想御手レベルアップの被験者達と脳波を共有することで複数の能力を駆使していたが、彼女の超常操作とやらの場合は超能力者に認定されていることから、少なくとも全く同じ仕組みではないのだろう。

「……その第八位が、何で私のやつてることを知ってて、手を貸そうとしてんの？」
「うん？ そりゃあ——」

今一番の疑問を投げ掛ける。宇佐見とは当然面識は無く、御坂が夜な夜な研究施設を襲っていることなど本来は知る由が無いはず。こちらに協力してくれるようだが、現段階ではそのどこか他人事で群がってきた野次馬のような態度も相まって信用することが出来なかった。

その問いに宇佐見が答えるよりも早く、緑色の閃光が空間を切り裂きながら横切る。「テメエが第八位、だど？ まさか、本当に多重能力者だったつてのか……」

「お、生きてたんだ。まあ、殺さないように手加減はしてたけどさ」

ほぼ無傷な状態で瓦礫の中から姿を現す麦野。どうやらあのレーザーと同質のエネルギーを周囲に展開することで防いだようだ。

これに宇佐見は意外そうな反応をする。単にレーザーを撃つだけではなく、それなりに応用が利く模様。一体どういった能力なのだろうか。

「フレンダ、滝壺、無事かしら？」

「な、何とか……死ぬかと思っただけ」

「……うん」

背後に居るフレンダと滝壺も守られていたようで土埃で衣服は汚れているが、特に怪我等は見受けられない。

流石は“超電磁砲”相手に動員される暗部組織、といったところか。

「で、どうする？ こっちは天下のレベル5サマが相手な訳なんだけど……今なら見逃してあげてもいいけど——」

「あ？ 最下位の分際で粹がるなよ。たかが末席に入れただけではしゃいでるクソガキが」

先程とは打って変わって荒々しい口調。その様子にフレンダは麦野がかなりキレていることを理解し、内心戦々恐々していた。

（……しかし、まずいわね。フレンダもあの蜘蛛女との戦闘での疲労が残ってるし、滝壺にもかなり負担が掛かっている。フレンダはともかく、滝壺は足手纏いになりかねない）

あの癩に障る第八位を八つ裂きにするのは確定事項だが、問題は電撃使いの女も居ること。先程の「同じ超能力者同士」という発言、そして自身の原子崩しを防いでみせたことから、麦野はその正体に行き着く。

もしも彼女の素性が予想通りなものだとすれば、きついなんてものではない。

「うーん……じゃあ、仕方ないわね。元より言ってみただけだし。にしても——」

一方、宇佐見はいつもの調子で肩を竦め、しかし顔は全く笑っていなかった。

「——最下位呼ばわりは、聞き捨てならないね」

次の瞬間、無数の瓦礫や残骸が出現し、宇佐見の周囲をくるくると旋風のように渦巻く。

「！」

「ぶっちゃけ順位なんてどうでもいいんだけどさ。この街が自分らの無能さを棚に上げた結果、雑魚扱いされるってのは、流石に腹立つでしょ？」

それらが大砲のように一斉に射出される。麦野は即座にレーザーで焼き払うが、空間移動により次々と補充され、絶え間無く降り注ぐ。

「チイツ……！」

「さて、おたくがスタミナ切れするのが先か、地球上のゴミが無くなるのが先か。答えは明白よね？」

更に量が増える。麦野はレーザーを拡散させ、広範囲に放つも、一向に勢いが弱まることはなく、それどころか増すばかりである。

その姿を宇佐見は余裕の表情を浮かべていた。今の発言でナチュラルに度外視していたように、彼女にとっては念動能力も空間移動も乱用したところで大した負荷にはならない。

「！ 危ないッ！」

「ん？」

御坂が叫ぶ。すると同時に小型の黒いミサイル弾のようなものが宇佐見の死角から現れ、爆発する。

「隙アリ、な訳よー！」

いつの間にか麦野から離れ、別の場所に移動していたフレンドがガッツポーズを取る。

携行式対戦車ミサイル。その威力はフレンドの持つ武装の中でもトップクラスであり、流石の超能力者もそんな代物を死角外からくらえれば、ただでは済むまい。

「あー、吃驚したー」

「嘘おっ！」

しかし、爆煙の中から宇佐見は無傷で現れる。よく見ればその周囲は薄い硝子の壁の

ようなものでドーム状に覆われていた。

「！ バリア、か……！」

「ええ。定番でしょう？ んじゃ、爆発には爆発で返しましょうか——」

パチン、と指を鳴らす。何をするつもりかと麦野は眉をひそめるが、次の瞬間、彼女の前方の風景がピンぼけ写真のようにぼやけていく。

まるで空間そのものが歪んでいるかのように——。

「！ むぎの……！ そこことても大きいA I M拡散力場が……！」

「ツ!？」

誰よりも早く異変に気付いた滝壺が柄にも無く大声をあげて伝える。

麦野とフレンドは疑問に思うよりも先に動き始め——。

「念動爆破、サイコプローションつてね」

空間が、爆ぜた。

フレンドの爆弾の比ではない規模の大爆発が連鎖的に起こり、建物全体を揺らす。

「ツ……無茶苦茶な……」

こほこほと舞う土埃に咳き込みながら御坂は宇佐見の戦いぶりに唾然とする。あまりにも規格外な念動能力。空間移動の精度も白井並みかそれ以上。多重能力者なだけではなく、純粋な能力の出力のみでも超能力者クラス——。

超能力者の順位は単純な強さではない。しかし、少なくとも御坂はともではないが、彼女が自分より順位が下だとは思えなかった。

「あんた……！ あいつらはどうなって……まさか！」

「ん？ あー、ちよつとやり過ぎちゃったかも。けど向こうは殺そうとしてきてるんだからしょうがない？」

「そ、それはそうだけど……」

あのレーザー女は生きているかもしれないが、爆弾使いや体操服の少女がこの大爆発から逃れられるとは考えづらい。

故に、御坂は最悪な結果を予想して指摘しようとするも、宇佐見の言い分に同意してしまう。同じ立場だとして、手加減していられる余裕が自分にあるとは思えなかった。

「それに、あつちはまだまだやる気みたいだし」

爆煙の中からレーザーが突き抜ける。宇佐見は自分から少し離れた位置にバリアを展開してこれを防ごうとするが、レーザーはバリアにぶつかると僅かに拮抗しただけで呆気無く貫通した。

「ひえー、やばい威力ね」

空間移動で避け、宇佐見はぼやく。あのレーザーを防御するのは困難だろう。つくづく恐ろしい能力であり、原理が気になる。

（視覚強化しているとはいえ見てから防げる時点で光速のレーザーではなく、防いでみた感じ、純粋な熱量によるものでもない……ミコトつちが屈折させられたし、もしかして同系統の能力かも？）

——となると、絡線は“電子”か。

そこでふと宇佐見は思い至り、驚いた表情を見せる。

「操った電子の粒子と波形を曖昧な状態に維持することで膨大なエネルギーをビームみたいに射出する……そんな能力があるってのは、聞いたことあるんだけど——もしかしてご同輩だったりするかしら？」

「テメエに同輩扱いされたくはねエが……だったら、どうする？」

「別に？ レベル5にまで殺し屋させてるなんて、つくづくどうしようもない街だなあって」

反吐が出る。能力の特徴から刺客の正体を察した宇佐見はつまらなそうに、服が所々破け、ボロボロになった麦野を見据えた。

あの爆発を凌ぐのには苦労したのか息を切らしながらも、獰猛な獣のような眼光でこちらを睨んでいる。

（糞がツ……フレンドはともかく滝壺の方はもうお釈迦になったとみていいな。あのクソアマ……裏の人間ではないと思ってたが、こつちが死ぬことに何ら頓着していねエ

……！)

思わず悪態を吐く。標的があの第三位、常盤台の超電磁砲レールガンというのも予想外だったが、第八位まで乱入してくるなど割に合わないにも程がある。

現に数少ない正規メンバーを二人も失った。いくら麦野といえど、単独で超能力者二人を相手取るのは不可能だった。

離脱すべきか？　しかし――。

「……ふうん」

その様子を見て、宇佐見は何か思い付いたのか悪戯っぽく笑う。

「ま、ビーム撃つだけの一発屋じゃあそんなもんか。あつ、因みにおたくを倒したら順位って入れ替わったりする？　やっぱりビームおばさんや根性馬鹿より下は心外っていうか――」

小馬鹿にするように言えば、ブチツと血管が切れる音が響く。

「あ、あ、あ？」

露骨な挑発。しかし、ただでさえ相当に苛立っていた麦野の理性はあっさりと沸騰する。必ずやあの生意気な小娘を八つ裂きにしてやると。

二対一。それも両者共に同じ超能力者。圧倒的に不利であることは重々承知の上で、ここまで虚仮にされて引き下がれるものか。

これに宇佐見は愉しげに、笑った。

「——ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」

「やってみな、五番手さん」

第四位と第八位。原子崩しと超常操作。マルチタウナー P&S1コントロール

今一度、二つの強大な力がぶつかり合う。

(何なのよ、こいつら……!)

一方、第三位こと御坂はいつの間にか蚊帳の外であり、混沌を極める状況に内心毒づく。

同時刻。絹旗は宇佐見が起こした大爆発によって研究施設が揺れるのを感じ取った。

（！ 何ですか？ 地震？ 麦野達の方で何が――）

「気が逸れてるわよ」

「ツ!!」

パァン!! と拳と拳がぶつかり合い、空気が裂けるような轟音が鳴り響く。

——オフエンスアーマー窒素装甲。

“暗闇の五月計画”によって生み出された、絹旗最愛が所有する能力であり、空気中の窒素を自在に操ることが出来る大能力者。

圧縮した窒素の塊を制御することにより、自動車を軽々と持ち上げ、弾丸を受け止めることすら可能。それを纏った拳による一撃は鋼鉄をも粉碎する。

そんな威力に真つ向から打ち合い、然れど霊夢は涼しい顔で絹旗を攻め立てていた。

「くっ——」

未だに霊夢は無傷なのに対し、絹旗は何発か攻撃をもらっており、意識が飛びそうになるのを何とか堪えている状況だった。

このままダメージが蓄積すれば敗北は確定的。しかし、いつまで待っても増援が来る気配はない。

「今です……！」

その時、真横から乾いた音が複数鳴る。事前に待機させていた部下の男達が一斉に霊夢へ向けて銃撃したのだ。

当然、近くに居る絹旗にも流れ弾が撃ち込まれるが、窒素装甲によつて防がれるため何ら問題無い。これに霊夢は鬱陶しげに顔をしかめ、しかし飛来する弾丸を当たり前のように視認し、的確に避けていく。

「——」

だが、僅かであるものの銃撃に気が逸れる。絹旗はそのあまりにも一瞬過ぎる隙を好機とみて勝負に出た。

「！」

腰を捻り上げ、脚を突き出す。そのままぐるんつと身体を真上へ一回転させ、遠心力から蹴りを放つ。

——昇天蹴。

「パクリ？」

見覚えのあるサマーソルトキック。繰り出された殺人的な蹴りは、ギリギリのところ
で身体を捻らせた霊夢には当たらなかつた。

絹旗が空中で致命的な隙を晒したところに霊夢は容赦なく回し蹴りを叩き込む。

「ぐあつ——」

脇腹に一撃。吹っ飛ばされ、廊下を転げ回つた絹旗は肋骨が軋む痛みにも声にならない
悲鳴をあげた。

下部組織の男らは彼女を助けようと更なる銃弾を撃ち込もうとするが、既に霊夢は彼
らに接近しており、一瞬で無力化する。

「さて、もう仲間は——」

が、次の瞬間。何かが叩き付けられ、破裂する音と共に白く冷たい煙が辺り一帯を覆
い尽くす。

視線を向ければ絹旗の姿は無く、代わりにあつたのは破損した赤い筒。設置されてい

た消火器、偶然そこにあつたそれを絹旗が破壊したようだ。

目眩まし。向こうの視界も塞がるため無意味な悪足掻きだと思われるが、相手が戦闘を放棄したのであれば話は別だった。

「――逃がす訳ないでしょ」

尤も、霊夢にそのような小細工は通用しない。

「ツ!?!」

全速力で廊下を疾走する絹旗の背中を踏みつけ、顔面を床にスライディングさせる。普通ならば摩擦で顔が削れ、あつという間に紅葉おろしであるが、空素装甲によつてダメージは無い。

即座に起き上がる絹旗だったが、次は首根つこを掴まれ、乱暴に叩き付けられる。

「かはっ――」

地面にひびが入る。苦痛に顔を歪める絹旗を、霊夢は悠然と見下ろす。

「……頑丈な奴ね」

「ツ……………ここまで、ですか……」

仕切り直そうとしたが、やはり失敗した。まだまだ抵抗すること自体は可能だが、状況を打開することは不可能だろう。

ならば、もはや戦闘を継続することに意味などない。

「——超降参です」

あつさりど、溜め息と共に絹旗は両手を上げ、そう告げる。先程までの闘志が一切消え失せたその姿に霊夢は呆気に取られた。

「何？　もう終わり？」

「はい。これ以上やつても勝ち目なんてゼロなので。……相変わらず、超強いですね。霊夢さん」

自分相手にかなり食らい付いていた絹旗のその態度に拍子抜けし、些か残念そうにする霊夢だったが、今度は親しみの感情を向けられて困惑する。

しかし、全く見覚えがないと言えば嘘になり、恐らく彼女と自分はどこかで面識があつたのだろう。

「……やつぱり、知り合いなのね。さっきの動き、私を参考にしていたでしょ？」

「その通りではあるんですが、そもそも根本的な戦い方自体、あなたから超教わつたものですよ」

「はあ？　……あつ」

絹旗の弁に怪訝な表情を浮かべ、然れどすぐに霊夢は思い出す。自身の記憶の中に彼女と特徴が合致する人物が居ることに。

それは、自分が少しだけ関わつた、学園都市の“闇”——。

「そのやたらと頑丈な能力、超超喧しい喋り方……もしかして——」

「……思い出していただけましたか」

絹旗の顔が僅かに明るくなる。

「——海鳥ちゃん？」

「全然違エ!!」

「うわっ」

ドゴオ! と拳が床にめり込んだ。うっかり素の口調が出てしまっている。

霊夢は普通に吃驚した。

「断じて違いますよッ! あんな掌から噴射するしか能のねエ超クソ野郎と一緒にしな

いでくださいイ!」

「あ、最愛ちゃんの方?」

「そうです! いやというか、何で超私じゃなくてよりもよってアイツの名前が真っ

先に出るんですかッ!」

「ええ……だつて、あんた達ニコイチみたいなものだと思つてたから……」

「超ッ! 心外ですッ!」

クールさから一転して荒れた口調で喚く絹旗。同じ生徒の中でもよりによって一番嫌いで犬猿の仲である相手に間違えられたのだ。キレるのも当然と言えよう。

「ごめんごめん。にしても、久しぶりね。少し背が伸びたかしら？」

「……はい。お久しぶりです。霊夢さんも超お変わりないようで」

会うのは「暗闇の五月計画」が頓挫して以来。互いに風の噂で健在なのは知っていたが、こうして実際に会うと懐かしく思う。

「でも何で最愛ちゃんがこんな所に？　もしかして実験に関わってたりすんの？」

「実験、ですか？」

「ええ。ほら、ナンタラの八月？　十二月計画って奴に関係しているかなーって」

「『暗闇の五月計画』です。どっちの月も掠りもしてませんよ……」

学園都市最強である一方通行アクセラレータの演算パターンを参考に、各能力者のパーソナリティを最適化、能力者の性能を向上させようという実験。

一方通行の精神性・演算方法の一部を意図的に植え付けるという、個人の人格を他者の都合で蹂躪する非人道的な暗部らしい計画である。

絹旗もその実験で用いられた多くの置き去りの一人。霊夢がわざわざその名を出したということは、彼女の言う実験とどうの昔に頓挫したその計画とは何らかの関連性があるのだろう。

「その実験とやらが何のことが知りませんが、私がここに居るのは警備として雇われたからです。だから正面突破してきた霊夢さんに死兵覚悟で突っ込んだ訳ですが……」

「ああ、そういうこと。そりや悪かったわねえ」

あつさりと謝罪する霊夢。暗部であることや侵入者の抹殺が目的といった物騒な話
は意図的に伏せた。尤も、問答無用で銃撃してきたことから勘付かれていますかもしれな
いが、指摘してこないということは彼女にとつてはどうでもいい些末事なのだろう。

「……因みに私の顔に免じて超引き返してもらえたりとかは？」

「あー、無理ね。私もやらないといけないことがあるの」

そしてまたあつさりと断られる。これに絹旗はがつくしと肩を落とす。

「そこを何とか出来ませんか？ 任務失敗すると上司から超折檻されるんです」

「そう言われてもねえ……そんなに怖い上司なら組織ごと潰すなりしてあげようかしら
？ ほら、教授の所に行けば悪いようにはされないんじゃない？」

「勘弁してください。というか『教授』ってあの赤髪の人でしょう？ あんな超やばい

人の実験動物とか人生超終わりですよ」

「流石に言い過ぎじゃ……ないわね。一理あるかも」

あつけらかなと言つてのける霊夢に彼女ならば本気でやりかねないと絹旗は内心戦
慄する。

彼女の下へ行く、というのも選択肢としてはアリだ。絹旗はこう見えて霊夢のことは
結構リスペクトしており、実験の頃から慕つてはいた。

しかし、それでも一度得た「居場所」を手放す理由にはなりはしない。

(幸いにもあちらに敵意は無いみたいです。ここは話術を駆使してどうにか麦野達に来るまで超時間稼ぎをしなければ……！)

かつての知り合いとの対面に霊夢は先程まで放っていた冷たい敵意を微塵も感じさせていない。

元より絹旗が隙を見て襲ってこようと対処出来る自信があるのだろう。実際その通りであるが、最初から勝ち目がないことを理解し、あくまで増援を待つ絹旗にとっては非常に幸運なことであった。

「……………!!」

悲鳴と共に、血飛沫が舞う。

空間が凍り付く。底冷える殺気に、二人の顔が一気に強張る。バツと殺気を感じた方角へと顔を向ければ先程霊夢が無力化した下部組織の男らが血溜まりの海に沈んでいた。

「……………騒がしいと思えば」

かつんかつん、と廊下を歩く音。曲がり角から顔を出したのは、白髪の剣士だった。

下手すれば自分と同じ年かそれ以下の幼い少女の面持ち。だが、絹旗はその姿を視認した瞬間、ゾクリと背筋が凍り、多量の冷や汗を流す。

白髪の剣士は彼女らへ視線を向け――。

「ッ――」

寒気を感じ、本能的に後退する絹旗。それとほぼ同時に先程まで絹旗が立っていた場所に白髪の剣士は居た。

鞘から刀を抜いて。

「なっ――!?!」

ブシュ! と鮮血が飛び散る。回避したつもりだったが、薄くではあるものの胸部の皮膚がぱつくりと切り裂かれていた。

これに絹旗は驚きを隠せない。空素装甲には、最大の特徴として一方通行の演算パターンを参考に最適化された自動防御能力がある。

一方通行の持つ「反射」を擬似的に再現したもので攻撃を受けた際に本人の意思に関係なく空素の壁が自動展開されるため、あらゆる方向からの攻撃に対応できる上、絹旗本人が全く気付いていない不意打ちの銃撃ですらも防ぐ、まさに装甲と呼ぶに相応しい非常に優秀な防御能力を誇る。

にも拘わらず絹旗は傷を負った。それはつまり――。

(空素装甲ごと――斬った?)

「……ほう」

一方、刀を振るつた白髪の剣士は意外そうに、僅かに眉をひそめる。

「少々見縊っていた。胴体を泣き別れにしたつもりだったが、存外やる」

ただそう言い、その姿がぶれる。

「あ」

反応すら出来ぬ速度。既に目の前では肉薄した白髪の剣士が刀を振り上げていた。

死ぬ。ただそれだけは如何なる思考よりも先に理解し、絹旗はその顔を恐怖に染め上げ――。

ガキーン！ と、刀と何かがぶつかる。

「私を無視するなんて、良い度胸ね」

「……先に邪魔者から始末しようと思つたまで」

いつの間にか絹旗との間に霊夢が割って入っており、大幣で刀を受け止めていた。

鏑迫り合いの中、相変わらず不透明な、不自然なまでに霞がかつて曖昧な顔を、霊夢は瞳の中に捉える。

「今度こそ取つ捕まえてやるわ。辻斬り」

「――次こそは、斬る」

互いが睨み合う刹那。無数の御札と斬撃が舞い、衝突し合う。

こうして、再戦が幕を開けた。

人鬼

宇佐見董子は失望していた。

こんなものかと。原子崩し^{マルチダウナー}。粒機波形高速砲と呼ばれるその威力は確かに脅威であり、掠りでもすれば致命傷と成り得るだろう。

しかし、言ってしまうばそれだけ。無数の瓦礫が嵐のように舞う中で怒り狂いながらレーザービームを乱射する麦野を宇佐見は内心つまらなく思いながら見据える。

傍目から見れば互いに有効打が無く、拮抗しているように見えるが、その実宇佐見が念動能力^{サイコキネシス}のエネルギーを送る相手を瓦礫から麦野本人へと変えるだけでいとも容易く終わってしまう。

そうしない理由は、単に同じ超能力者との対決という貴重な体験を早々に終わらせたくなかつたからに過ぎず、試しに煽ってみたりもしたのだが……。

（これなら念力を無理矢理突破してくるあの根性馬鹿の方がまだマシね……ミコトつちも消耗しているようだし、そろそろ終わらせちゃおっかな）

御坂は平常を装っていたが、よく見れば肩で息をしており、連日の施設襲撃とフレン

ダとの戦闘でだいぶ消耗している様子だった。

出来れば全快の状態の彼女の實力も見ておきたかったが、致し方あるまい。

「ツ……糞がツ……余裕ぶつこいてんじやねエぞゴラ。ア、ツ?！」

「アハハ。そつちは随分と余裕無さそうじやん。焦つてんのが丸分かりだつての」

「~~~~~!! ぶち殺してやる阿婆擦れがア!」

「おお吠える吠える。お里が知れるわー」

レーザーの勢いが強まる。こちらを汚らしく罵る麦野に宇佐見は肩を竦めつつも、愉快と言わんばかりに更に更に火に油を注ぐ。

「——うん?」

が、その時。建物が僅かに揺れる。

「おや? 地震かしr——ツ!?!」

咄嗟に後退する。それとほぼ同時に目に見えぬ鎌鼬のような何かか宇佐見の居た場所を横切り、床と壁に深い切り込みを作った。

「あつぶなつ……何なの——」

そして次の瞬間。

壁が、

床が、

天井が、

一瞬のことだった。それまで視ていた景色全てがひっくり返り、まるで切断されたかのようにバラバラになって崩れ落ちていく。

「「ッ!?!」」

全員が驚愕し、圧倒的な破壊に巻き込まれる。もはや戦闘をしている場合ではなかった。

「——人智劍」

——天女返し——

至る場所から無数の楔のような斬撃が発生し、波状に襲い来る。

その中心には、白き影。

「——ッ!!」

風が過ぎ去る。ほんの数瞬遅れて霊夢は真横を通り抜けたそれに気付き、振り返った。

全く目で追えない。その瞬間的な速度は神裂火織の唯閃を遥かに凌駕する程であり、霊夢は先程から彼女——魂魄妖夢の姿を捕捉出来ていなかった。

にも拘わらずこうして掠りもせず、無傷な状態を保っていられるのは、ひとえにその恐るべき第六感があつてこそ。己が直感のみにただ従つて彼女は目に見えぬ殺人鬼の猛攻を掻い潜る。

——二重弾幕結界——

「！」

二つの結界が妖夢を閉じ込める。同時に四方八方から光弾がその位置を細かく変えながら降り注ぐ。

——現世斬——

そして、それら全てが切り払われる。

向かってくる光弾を目にも留まらぬ速さで空間ごと切り刻み、妖夢は地面を蹴り上げ、恐れることなく突っ込んでいく。

「へえ——」

初見で対応された。驚くよりも先に霊夢は感心する。

純粹に強い。その並々ならぬ剣技、脅威的な身体能力、種族の差という圧倒的なアドバンテージを振り翳すその姿は、以前の邂逅において微塵も本気を出していなかったことを証明していた。

——然りとて、本気を出していなかったのは霊夢も同じこと。

——夢想封印 集——

結界を叩き斬られると同時に、霊夢は更なる一手を打つ。彩鮮やかな光弾がホーミングし、不規則ながらもその全てが妖夢ただ一人を狙って向かう。

「断迷剣——」

対する妖夢はその手に持つ刀の刃を緑色に発光させ、肥大化させる。

——冥想斬——

無造作に刀を振るう。それだけで光弾は一つ残らず真つ二つになり、妖夢はその間に割つて入る。それと共に、刃は緑色から青色の光へと変化し、更に大きく、更に長くなつていた。

霊夢の素つ首に届く程に。

「ッー」

——迷津慈航斬——

ブオン!! と、殺意に塗れた長大な刃によつて範囲内にある全てが薙ぎ払われ、切り裂かれる。ガクンと上体を仰け反らせ、ギリギリのところ回避した霊夢は直ぐ様迫り来る刃から逃れんと宙を舞う。

「……ちよこまかと」

一向に攻撃が当たらない。そんな状況に若干の苛立ちを覚えつつ、妖夢はこちらから距離を取る霊夢の後を追う。

その足は地面から離れ、確かに浮いていた。

「当たり前のように飛ぶのね」

やはり彼女は、そういうことなのか。少しでもズレれば命は無い。その大きさからは

考えられない速さで振るわれる斬撃の数々を避けながら霊夢は仄かな期待を抱く。

故にこそ、必ずや目の前の剣士を引つ捕らえ、聞き出さなければならぬ。

——夢想封印 散——

今度は光弾ではなく、無数の赤い御札が霊夢を起点にただただ散らばる。

「! そんなもの——」

構わず妖夢はこれを切り払い、突き進む。

「でしようね。じゃあ、これは?」

しかし、視界を埋め尽くす御札の嵐を抜けた先に霊夢の姿はなく、真後ろから声がする。

「ッ!?!」

いつの間に。妖夢が瞠目しながら振り返れば、すぐ目と鼻の先に霊夢は居た。

「ッ——」

振り向き様に刀を振るうも、近過ぎる。刃が霊夢に届く前に手首を掴まれ、グツと捻られてしまう。

合気道の要領。腕力の差など意味を無さず、とはいえ一時的なものなので霊夢は即座にもう一方の手に握っていた大幣を振り下ろす——。

「くっ——」

すかさず腰の小太刀を抜いて大幣を受け止める妖夢。しかし、その時点でがら空きとなった胴体を霊夢は見逃さない。

「！」

くるんつと身体を捻った勢いと共に繰り出された踵落とし。妖夢は小太刀を握った方の腕を無理矢理動かしてその一撃を受ける。

「吹っ飛び……なさい！」

破れかぶれの防御で防げるようなものではなく、そのまま妖夢は勢いよく吹っ飛ばされ、ドゴオン！ と壁へと叩き付けられた。

「ッ……おのれ——」

思い切り背中を打ち付けるも、ダメージ自体は殆ど無い様子で僅かに顔をしかめ、妖夢は即座に起き上がるが——。

その時には既に霊夢が眼前に降り立つ。

「——」

——陰陽宝玉——

手を翳されると共に、出現したのは己の身の丈程もある球状のエネルギー体。これまで使つてみせていた「陰陽鬼神玉」よりもサイズこそ小さいが、その分発生までが早く、妖夢が回避動作を取るよりも先にそれはギョルギョルと高速回転し。

——大砲の如く射出された。

「ぐう——ッ!？」

打ち出された輝く球体は妖夢に激突し、地面を抉り、壁を粉碎していく。

「これで倒した……訳はないか」

何枚もの壁をぶち抜き、球体と共に妖夢の姿は見えなくなった。然りとて、霊夢は土煙に包まれた大穴を油断無く見据える。

「ん?」

すると手元から着信音が鳴り響く。

「……何?」

『ちよつとレイムっち! 一体何と闘ってんのよつ!？』

電話に出るなり聴こえてくるのは宇佐見の悲鳴に近い声。これだけ派手にやれば当たり前であるが、どうやらこの戦闘に気付いているようだ。

「あー、悪いけど取り込み中よ。そっちはどう? 美琴とは会えた?」

『え? え、ええ。さつき合流したけど——』

「そ。なら、そっちは任せた。また連絡するからそれまでよろしく」

『あ、ちよ——』

戸惑う宇佐見に対し、有無を言わず電話を切った霊夢。彼女らの安否も気になる

が、それよりもまずは目の前の敵だった。
ふわりと宙に浮き、自らが空けた大穴の中へと向かう。

「ち、畜生が……」

怒りと困惑で、麦野沈利は頭がおかしくなりそうだった。

突然の崩落に無傷とは行かず、降り注ぐ瓦礫は能力で防いだものの、足場も崩れたのでそのまま落下してしまった。

服は先程以上にボロボロであり、もはや辛うじて布が残っているだけの状態だった。加えて、頭を打ったのか額からポタポタと血が滴り落ちている。

明らかかな満身創痍。それでも尚、健在でその闘志を絶やさないのは彼女の能力に依るものではない純粋な身体スペックの高さと、暗部として幾度も修羅場を潜り抜けたが故なのだろう。

（あの糞第八位も超電磁砲の野郎も居ねエ……巻き込まれてくたばったか？ 馬鹿言うな、必ず見つけ出して血祭りに上げてやる……！）

一体何が起きたのかは知らないが、ここまで虚仮にされたのだ。逃げるなどという思考は一欠片も無く、ただ彼女は己をこんな目に遭わせた連中への報復しか考えていなかった。

——ドゴオン!!

「!？」

その時だった。何か鉄筋コンクリートの壁をぶち抜き、麦野の真横を通り過ぎた。驚きながら視線を向ければ、そこには緑の服を纏った白髪の少女が壁に叩き付けられている。

（——やはり強い）

小さなクレーターが形成される程の衝撃を受けながら少女——妖夢に目立った外傷は無く、片膝を突きながらも彼女は改めて狙った獲物の強大さを認識する。

あの時、一瞬にして背後に回り込まれた。単純に彼女のスピードが己よりも……という訳ではないだろう。

（……速さという次元の話ではない。あれは正しく瞬間移動だった）

当初からおかしな部分があった。明らかに避けられぬはずの攻撃も平然と避けていて疑問に思っていたが、今ので確信へと変わった。

零時間移動。即ち、レポートであり、この学園都市に蔓延るそれらとは違い、寸分の誤差も無く行われる、真正正銘の空間転移——。

それを、あの紅白の巫女はやってのけている。だとしたら恐ろしい話だ。

音より速かろうと、光より速かろうと、彼女はその意思一つで追い付いてみせるのだから。

「ふ、ふふ……相手にとつて、不足無し」

だからといって何も変わりやしない。むしろ逆にそうでなくては切り応えがあるまい。

妖夢は獯猛な笑みを浮かべる。

「——おい」

「む?」

「何だ、お前……?」

声をかけられ、漸く麦野の存在に気付いた妖夢は水を差されたような気分になったのか若干顔をしかめながら視線を向ける。

(!? 本当に何なんだこいつ? よく分からんが、とにかくヤバイ……!)

これに麦野はびくりと身体を震わせる。ただ視認されただけだというのに、心臓を握られているような感覚に陥る。本能的に、目の前の少女が異常な存在であるということを感じ取っていた。

「……ああ、あなたは。『アイテム』とやらの頭目ですね」

「は?」

対する妖夢は思い出したように呟く。

「あなた方の雇用主とは協力関係にあります。あなたのことは事前に写真を見せられ、

危害を加えるなど言われていました」

淡々とそう語る。あの声の主がたとえ敵対したとしても決して殺すなど伝えてきた二名の人物の内の一人。面倒だと思つたが、破ればもつと面倒なことになると思い、一応覚えていた。

周りのことなど気にせず、範囲攻撃で建物を切り刻んでいたことから、つい先程まで記憶からすつぽりと抜け落ちていたようだが。

「増援……つてこと？ 何も聞いてないけど？」

これに麦野は訝しみながらも、一先ず敵ではない、ようなので内心安堵する。ここにきて新手、しかもこんな見るからにヤバそうな奴が相手など流石に御免被る話だ。

多少落ち着いたのか、口調も元に戻っていた。

「さあ？ 何らかの意図があるのでは？」

「ちつ……流石に隠し事が多過ぎるわね。最初からこんな得体の知れない仕事、安請け合いするんじゃないわ」

内出血するほど下唇を噛む麦野。軽い気持ちで臨んだ仕事だったが、最悪としか言い様が無い。

もはやフレンダと滝壺の生存は期待出来ない。絹旗に関してもこんな状況でも一向に連絡が無い辺り、やはり宇佐見か何者かに倒されたと見て良いだろう。

「つまりアイテムは全滅。おまけに自らも満身創痍……見積もりが甘かったと言われればそれまでだが、実に割に合わず、もしも依頼主がこの展開を想定していたと言うのなら、相応の報いを受けさせなければならぬ。

「ふむ……見たところかなり傷を負っている様子。早急にここから避難した方が……？」

その時だった。一瞬フラツと妖夢の体がよろめく。

「ツ……………!!」

「? どうしたのかしら?」

首を傾げる麦野。そもそもコンクリートの壁をぶち抜いてクレーターまで出来るくらいに吹っ飛ばされているのにミンチにならず平然としていたことが可笑しいのだが……。

(こんな時に……流石に暴れ過ぎた。これ以上はまずいと思うけど……かといって、手加減してられるような相手ではない)

体にガタが来ている。本来の彼女ならば有り得ないことだが、ある事情によつて妖夢はこの街で力を存分に振るえない状態だった。

今の今までそのような心配など必要の無い有象無象ばかり相手にしていたが、あの白い羽の少年や巫女といったある一定のラインを超えた強者相手にはそうは行かない。

「ねえ、聞いて——」

「死にたくなければ、ここから離れてください」

「……はあ？」

刀を握り直しながらそう言われ、麦野は片眉を上げる。

「安心してください。侵入者、及び『実験』の邪魔をする者共は、私が一人残らず始末します。奴を相手にあなたを巻き込まぬよう配慮するのは難しい」

「……………あ？？」

何を言っているんだ、こいつは？ この第四位の超能力者^{レベル5}、麦野沈利に尻尾を巻いて逃げろと言うのか。しかもまるで自身を足手纏いだと言っているようではないか。

「ッ！ ふざけ——」

「——む、もう来ましたか」

「は？」

すると妖夢は麦野から視線を外し、彼女が吹っ飛んできた壁に空いた穴の方へ顔を向けた。

同時に、そこから御札と針が雨のように降り注ぐ。

「なっ!?!」

「ちっ——」

妖夢は幾つかを切り払いつつ、回避する。麦野も突然の奇襲に驚きながらも能力で防壁を展開してこれを防いだ。

視線を向けた先には、紅白の巫女が悠然とこちらを見下ろしていた。

（刀持った侍女の次は……巫女服？ 次から次へと、一体いつからここはコスプレ会場になったのかしら）

内心そんなことを思いながらも、実際には心底笑えない状況である。口振りから察するに、この巫女は先程まで妖夢と戦闘していた。

つまり、この惨状を作り出した張本人である可能性が高いのだから。

「……あん？ 一人増えてるじゃない」

一方、霊夢は麦野の存在に眉をひそめる。新手、なのだろうか。予想出来るのは、絹旗の仲間やここへ侵入する前に宇佐見が言っていた御坂と戦闘していたという相手だが……。

どちらにせよ、二対一となれば面倒極まりない。

「二応訊くけど、あれも侵入者インベーターってことでOK？」

麦野が問い掛ける。

「ええ。その通りですが、あなたでは——」

「おい……さつきから、あまり舐めるんじゃないぞ？ この私をな」

すると麦野の周囲に発光する物体が10個以上も漂う。相変わらず自身を足手纏い扱いるサムライガールは心底ムカつくが、それよりもまずは明確に敵と判明している巫女擬きを抹殺すべきだろう。

これに対し、妖夢はほう……と僅かに感心する。一つ一つにかなりのエネルギーが収束していた。

「——死ね」

「!」

殺意に塗れた号令と共に、レーザーが一斉に射出され、霊夢を消し炭にせんと襲い来る。

「攻撃してきたってことは、敵って認識で良いわよね?」

——が、それら全ては掠りもしなかった。

「あ——?」

避けられた。それも涼しげな、何も感じていないような顔で。

麦野は思わず呆気に取られ、そして気付く。霊夢の周囲にも自分と同じように発光する何かが生じ、フワフワと浮かんでいることに。

その数は、20、30——50を優に超えていた。

「……………ッ!?!」

「悪いけど、遊んでる余裕は無いの」

——夢想封印——

一片の容赦も無く、鮮烈な光が、ゆっくりと降り注ぐ。

「ツ、糞があああああああああああああああああア!!」

地団駄を踏み、狂ったようにレーザーを撃ちまくる麦野。しかし、それは幾つかの光を掻き消すだけで圧倒的な質量を止めることは叶わない。

やがて光は迫り、視界を埋め尽くす。

「ヒッ——」

思わず上擦った声が出る。それは何の絡繰も無い、純粹なる暴力。麦野はただただ愕然とし、顔を青くさせる。

久々に思い出したのだ。圧倒的な力に為す術無く叩き潰される、恐怖というものを——。

「——さて、続きをやりましょうか」

「言葉に及ばず——」

光に飲み込まれていく麦野に一瞥もくれてやることなく、霊夢は既に回避していた妖夢を見据え、彼女もまた刃の切っ先を向ける。

闘いは、まだまだ続く。

雷轟

「——ハハハね」

霊夢と妖夢が激戦を繰り広げている中、どうにかあの崩落から逃れることが出来た御坂は当初の目的地である施設の最上階に辿り着いていた。

そこは既に無人であったが、様々な機材が敷き詰められている。

「これを破壊すれば……といっても、こんな有り様じゃここも放棄するしかないでしょうけども」

だからといって放置はしない。やるならば徹底的に、だ。バチバチと青白い火花を迸り、機材が次々と爆発していく。

「終わったー?」

燃え盛る爆炎を静かに眺める御坂。すると部屋の外で待っていた宇佐見がやって来る。突然の崩落に混乱している中で無傷で済んだのは、ひとえに彼女の空間移動があったからであった。

「ええ。これで残りは後一つ……もうすぐあのイカれた『実験』を、止めることが出来

る」

爆弾使いとレーザー女の襲撃にその途中で突然起きた崩落、予期せぬ事態が多発し、散々な目に遭い、一時はどうなるかと思つたが、目的完遂まで後少しという段階に御坂は頬を緩ませ、そして改めて気を引き締める。

「……果たして、それはどうかしらねえ」

ぼそりと宇佐見は呟く。

「え？」

「ううん、何でも無い。それよりも早く脱出しましょう？　ここ、いつ倒壊しても可笑しくないし」

小声でよく聞き取れなかつた御坂に、宇佐見は間髪入れずに誤魔化す。

上層部が主導している実験なのだ。いくら施設を潰したところで引き継がれるだろう。しかし、彼女が必死でやっていることが全くの無駄であるという残酷な真実を教えややるつもりはなかつた。

それは何も、御坂を傷付けたくないという優しさによるものではない。

(だって、実験を止めさせる方法なんて、それこそ学園都市の有能な科学者を一人残らず皆殺しにするか、一方通行を倒すかくらいしか無いもの)

先んじて妹達を処分するのは論外。そして、この二択の中で比較的現実味があるのは

後者だが――。

(ベクトル操作、物理もそれ以外も何でも反射とかいうチート野郎、どうしろつてのよ)
第一位。同じ超能力者の面々すら見下し、こと万能さにおいて「未元物質」を勝手にライバル視している宇佐見だが、最強の名を欲しいままにするあの白髪の少年の実力は認めていた。

(魔術の側面から攻めればいけるかもしれないけど……そうして上層部の連中や魔術サイドに睨まれてまで助けてやる義理は無いし)

実際に対面したことこそないが、そのデータは何度も読み込んだ。そうして己の如何なる超能力も彼には通じないであろうということを理解した。

故に、乗り気にはなれない。このまま残りの施設も潰し、それで全てが終わったと思いついてくれるのならその方が有り難かった。

(ま、そこはレイムっち次第か)

少なくとも一度関わった以上、博麗霊夢は妥協はしないだろう。

一体どう思い、どういう考えに至り、どういった結果をもたらすのか――。

宇佐見の愉しみは、そこだった。

「う、うん……そうね」

御坂は少し不審に思うも、彼女の言う通り今優先すべきなのはこの施設からの脱出で

あると思ひ至る。

未だに崩落は続いている。何が起きているのかは知らないが、早急に逃げなければ……。

——その時だった。

「ツッ!」

轟音が鳴り響くと共に、衝撃が走ったかと思えば、一瞬にして電灯が消え、周囲が真っ暗になる。

「ちよっ……今度は何?」

「い、今のつて……まさか、落雷?」

困惑する宇佐見に対し、御坂の方は能力が故に、その感覚に心当たりがあった。

雷が落ちた。この施設の真上に。

しかし、天気予報は晴れだったはず。学園都市の気象予報は滅多に外れることがなく、それに通常の雷よりもずっと強い電圧だった。

(偶然……?)

そうであるはずだ。もし人為的なものだとして、落雷を起こせる電撃使いは、己しか居ないのだから——。

然れど、そんな考えは再び発生した雷鳴と建物ごと揺らす衝撃により、否定される。

刀と大幣が衝突し、火花が迸る。

崩落する建物など気にもせず、空中を舞いながら霊夢と妖夢は切り結ぶ。

「ッ——」

「——」

妖夢は顔をしかめる。あの伸縮自在な大幣……何らかの防護術式が施されているようだ。己が名剣ならば容易く切断できるはず。しかし、実際には傷一つ無く、彼女は斬撃を弾いてみせていた。

驚くことに、斬撃を真つ向から受けず、寸前で受け流すことで大幣が切断されることを防いでいるのだ。

僅かでも位置やタイミングがずれば死。にも拘わらず霊夢は恐れどころか一片の迷いすらなくこちらに肉薄していた。

何という胆力、何という神業であろうか。

（しかし、ずつとは続けられまい。戦況はこちらが圧倒的に有利。本来ならば——）
刀を弾く。同時に、霊夢はふらりと宙を舞う。

そして、背後から光弾が姿を現す。

—— 夢想妙珠 ——

「!」

不意打ち気味に放たれた数発の光弾は、しかし即座に切り払われる。

その隙に、霊夢は背後へと回り込む。

—— 封魔陣 ——

—— 迷津慈航斬 ——

結界と共に展開される御札と針。これに妖夢はしゃらくさいと言わんばかりに妖力を纏った巨刃で結界ごと切り裂く。

流石にこれは受け流せない。霊夢は迫り来る刃から逃れ、距離を取って再び針を投擲する。

（何を考えている？ 先程からちよこまかと……そんなこと続けても埒が明かぬ事はあちらも理解しているはず）

一体どういうつもりなのかと、針を弾きながら妖夢は疑問に思う。客観的に見れば霊夢側は長期戦が不利なのは明白であり、故にここいらで攻勢に出て決めに来ると予想していた。

しかし、実際には真逆。霊夢の動きはどことなく消極的で、戦いを長引かせようとしているように見える。

「まさか、気付いているのか？」

思わず口に出す。すると霊夢はこれに笑顔を返した。

「やっぱり、『タイムリミット』があるみたいね？ 何となくそんな気がしてたわ」

「——」
何気なしに発せられたその言葉に妖夢は瞠目し、そして体内の妖力を極限まで練り上げる。

空気が変わった。どうやって、などという思考は即刻切り捨てる。知られてしまっている以上、こちらは一切のアドバンテージを失い、ありとあらゆる手段を以て、目の前の巫女を葬らなければならない。

「——六道剣」

「……………!」
来る——。

相手が全身全霊で向かってくることを察し、霊夢もまたこれを迎え撃たんと構えた。勝負は、今ここで決める。この時点で両者の思考は完全に一致する。

「——ッ!?!」

しかし、幕を開けようとしていた全力での激突は建物を揺らす雷轟によつて中断され

た。

「……なに？」

「……………」

両者の動きがぴたりと静止する。意識が向いているのは突然の落雷ではなく、それと共に現れたナニカに対して――。

「……………」

いつからそこに居たのか。こちらへ視線を向ける一つの人影。その顔に霊夢は目を見開く。

それは確かに見覚えがあるものであり、然りとて決定的に違う。

「……美琴、じゃないわね」

御坂美琴と瓜二つの容姿。けれど、身に纏う異様な雰囲気は明らかな別人であることを示している。であれば、その正体について思い当たるのはただ一つ。

だからこそ、霊夢は困惑の色を隠せない。

――果たして、クローンというのは、オリジナルを超える力を持っているものなのだろうか。

「……………」

バチツと電流が走る。

次の瞬間だった。眩く光ったかと思えば、霊夢は反応するよりも先に吹っ飛ばされた。

「ッ——!?!」

正しく雷撃の槍。寸前で防いだが、まともに受ければ人体が瞬時に蒸発するであろう熱量であり、衝撃は殺せずに数m程仰け反った。

御坂美琴が使っていたものと同じ技。しかも一切手加減されておらず、無意識レベルの防衛本能すら皆無なその出力は遙かに上を往く。

「はっ」

にたりと、そいつは笑った。その愉しげな、獲物を狩る獣のような笑顔は、街中で見た無感情なものとはかけ離れていた。

そして、その身を青白く発光させ、爆発するように放電する。

「!」

——封魔陣——

広範囲に放たれたそれを避ける術は無く、霊夢は結界を展開して防ぎ、相殺する。

それを見た彼女——便宜上電撃使いと呼ばせてもらう——はより一層笑い、更にその電力を解き放たんとする。

「——邪魔をするな」

すると、いつの間にか電撃使いの背後に立っていた妖夢が刀を振るう。急に現れた正体不明の人物に対して霊夢を真っ先に攻撃したことから一瞬味方かと思うも、明らかにこちらを巻き込んできた。

所構わず殺意を振り撒くその様子を見てまともな手合いではないと判断。霊夢との戦闘に水を差されたこともあり、危険分子を抹殺せんと動く。

「!? チィィ——ッ！」

対する電撃使いは気付かれずに背後に回り込まれていたことに驚きながらも自身の身長は何倍もの高さまで跳躍することで斬撃を避け、稲妻の如き速さで壁に張り付いた。

「!」

その身体能力は妖夢や聖人クラスには劣るものの人間の限界を凌駕している。体細胞の電気信号を操作して肉体のリミッターを外し、筋力やスピード・五感・動体視力などの身体能力を強化する——天衣装着ランベイドレスという出力だけならレベル5級と評される能力と類似した原理を、しかし一切の負担を考慮せず極限までやってのけていた。

「死ねい！」

初めて発せられたまともな言葉は、短く簡潔な殺意。それからすぐに、十もの雷撃の槍が妖夢を消し炭にせんと放たれる。

「——笑止」

その超人的な動きは、しかし妖夢からしてみれば大したものではなかった。いくら肉体を強化しようとして、それはあくまでも人間の延長線上でしかない。

種族の差は、そんなもので埋まるはずがなく、そして妖夢には劍術という業までもが備わっているのだ。

「ッ!?!」

目を見開く。まるで伝説や伝承の如く、10億ボルトに匹敵する極雷が真つ二つに切り裂かれ、それとほぼ同時に妖夢がすぐ眼前まで迫る。

右腕が、宙を舞う。

「! 避けられた——」

首をはねるつもりだったが、この剣速に反応するとは。しかし、片腕を腕いだ、次はそう上手くは行くまいと妖夢は直ぐ様追撃せんとするも、刃を向けられながらも相手の表情は変わらず、笑ったまま。

そして、無いはずの右の拳で妖夢は殴られた。

「なっ——」

驚く妖夢。咄嗟に刀身で受け止めるも同時にバチバチと放電し、弾け飛ぶように勢いよく吹っ飛ばされる。

手応えはあった。確かに斬り落としたはず。つまり切断されてから今の瞬間で新しい腕が生えたということ——。

細胞分裂を促進させたことによる肉体再生。それは肉だけではなく骨すらも生成し、身体の欠損を瞬時に再生させる。

本来の天衣装着の能力者は、急激な細胞分裂で負傷が回復の速度を上回ると痛みで意識を刈り取られかねないため、無意識に防衛本能が働いていたが、彼女の場合はそれは完全に度外視されていた。

「知り合いの見た目で化け物みたいなことしないでくれる？」

ゴリツと骨が軋み、肺が押し潰される。霊夢が横合いから足刀を叩き込んだのだ。

「かはっ……!?!」

叩き付けられると同時に壁に輝が入る。手加減無しの一撃を無防備に受けた電撃使いは踞り、地面をのたうち回っていた。

(ダメージは受けている。痛みを感じてないって訳じゃあないみたいね。けれど、能力の規模に明らかに肉体が追い付いていない……まさか、最初から捨て身のつもりだったの?)

怪訝な表情を浮かべる霊夢。至極当たり前の話として、普通の人間が高压電流を纏って平気なはずはない。故に、御坂やその他多くの能力者は自身に被害が及ばぬように調

整し、防護しているのだが、それでも限界はある。一定のラインを超えれば制御が利かず、自爆してしまう。

目の前の御坂美琴のクローンだと思われる少女は正しくその状態だった。よく見れば最大に近い出力の電熱に肌を僅かに焼かれてしまっており、常に肉体を再生し続けている。こんなことをしていて、身体が持つはずはないだろう。

肉体への影響をまるで考慮していない。いくらクローンでそのような教育がされていなくても、己自身の能力なのだからある程度は自然と理解出来るだろうし、そもそも生存本能によって抑制される。

だからこそ、霊夢は疑問に思う。彼女だつて己の制御から離れる程の力を無闇やたらと振るい翳すなんて愚かな真似はしない。

(そういう風に作られているのかしら？ 二万人も居るんだから、わざと籠を外しているとか……)

有り得ない話ではないだろう。御坂美琴のクローンの運用目的は一方通行と戦闘させ、彼に殺害させること。使い捨ての死兵なのだから後の事を一切考えないようにさせている。

そう推測するのが自然だったが、それでも霊夢は違和感を拭い切れなかった。

(——どうであれ、襲ってくる以上は倒すしかないわね)

死なれるとまずい。出来ることならば彼女が能力の使い過ぎで自爆する前に無力化したいが……。

「どうやら共通の敵みたいだし、敵の敵は味方ってことで、共闘でもしてみよう？」
すると霊夢は妖夢が吹っ飛ばされた方向へ視線を向け、提案する。最終的に倒すといえ単体でも手こずるといふのに二人まとめて相手にするのは面倒であると考えた。

返ってきたのは、飛ぶ斬撃だった。

「……くだらない。どうせ最後には死合う仲だろう。何も変わりはない。お前も、この面妖な輩も、ただ斬り捨てるまで」

「あっそ」

血の気の多いことで。駄目元だったので然して気にする訳でもなく、霊夢はただそう返す。

その瞬間、辺りが薄暗くなる。

「!!」

見上げれば、そこにあるのは黒い塊。室内にも拘わらず雷雲が発生していた。

それも単なる自然現象のそれではなく、膨大なエネルギーが暴れ狂い、禍々しく渦巻いている。

「ハハア……」

その真下で彼女は獰猛に笑う。喧嘩を売った相手が無類の強者と認識し、然れど上等であるとその眼をぎらつかせ、二人を睨み付けた。

「——やってやんよ！」

雷霆が降り注ぐ。

同時に、彼女は若干緑掛かった頭髪を靡かせ、突貫する。

一方その頃。施設の外は騒然としていた。

度重なる轟音。切り崩されていく建物。挙げ句に原因不明の落雷による周囲一帯の停電。いくら人氣の無い深夜と言えど、何事かと騒ぎになる。

そんな中、駆り出された幾つもの暗部組織や裏に通じる警備員の部隊は先んじて現場へ赴き、これの隠蔽を死に物狂いで図る。

失敗は許されない。何せ、統括理事会のトップ直々の命令なのだから。

「——随分と混沌としているな」

その有り様を少し離れた場所で眺めている二人——否、正確には一人と一匹。

「いやあ、恐ろしいですね脳幹先生。何なんです？ あの御坂美琴の姿をした化け物は？」

「博麗霊夢や切り裂き魔については尋ねないのかね？」

「えー？ それは前に何度も訊いたけど教えてくれなかつたじゃないですか」

「なら、今回も察しが付くだろう。残念ながらアレについても今はまだ教えられん」

——木原脳幹。

悪名高き「木原一族」の一員にして、演算回路を取り付けられたゴールデンレトリバーという、本質的に血縁に縛られない木原の中でも一際異色の存在だった。

「ただ言うなれば、アレは我々の領分では計り知れない存在だ。君も不用意に関わろうとは思わないことだ」

時期が来れば教える、そう言つて再び関心を施設の中へと向ける脳幹に彼の弟子、木原唯一はむつと片方の頬を膨らませ、不貞腐れた態度を取る。

どうせまた統括理事長と秘密の共有をしているのだろう。師であり、偉大な御方であると尊敬して止まない脳幹が、あの男か女か子供か老人かも分からぬような変態に素直に付き従つているという事実を彼女は快く思つていなかった。

「もしかして今回の件も予期していたことだったりしちゃいますか？」

「まさか。ここのも気の早い連中が居るといふことなど、全く以て想定外だったとも。あれが妹達の死体に移るといふこともな」

そもそも、どう予想しろと言ふのか。

イレギュラーに続くイレギュラー。実験の関係者も、暗部も、今何が起きているのか全く理解しておらず、訳が分からないまま奔走している。

そのような状況下で、木原脳幹、そして統括理事長アレクスター・クロウリーは事の

詳細を把握していた。

「連中があつた狭い建物の中で留まつてくれているのは幸か不幸か……我々はここで事態を封じ込めなくてはならない。最悪 “A. A. A.” を投入する必要があるかもしれない」

正しく最悪の事態だ。あのゲテモノ兵器の存在を明るみにするには、あまりにも早過ぎる段階。挙げ句に秘蔵のそれがスクラップになつてしまえば、堪つたものではない。

かといつて、このタイミングで埒外の化け物の存在を世界に知らしめるのはこちらにとつてもあちらにとつても望むところではなく、来るべき時が来るまで徹底的に隠し通す必要がある。

「共倒れが理想だが、是非とも勝利してもらいたいものだ。 “幻想の巫女” には」
既にアレイスターが当初思い描いていた展開シナリオから大きく外れている。今回も計画プランの内容を修正していくことになるだろう。

そういった事態の中心には、いつも博麗霊夢の姿があつた。

正しくイレギュラー。制御の利かぬ爆弾そのもの。しかし、脳幹は彼女の事を危険視することはなく、むしろ興味深く思つていた。

「さて、どうなることやら」

だからこそ、これからもまだまだ無数の失敗を重ねていくであろう友人を憂いながら

も、純粹に知りたい。

彼女の行く末が、どういったものなのかを。

混沌

——面倒極まりない。

入り乱れる雷霆と斬撃の猛威を潜り抜けながら、霊夢は腹立たしげに舌打ちする。

場は、混沌を極めていた。熾烈なる乱入者はより高出力の雷撃をお構いなしに解き放ち、辻斬りの方はそれに対処しながらも隙あらばこちらへ攻撃を仕掛けてくる。

加えて、両者共に単独でも手こずるような相手。ほんの少しの油断が命取りになりかねない。

「六道剣——」

——念無量劫——

次の瞬間、まるで時の流れが遅くなつたような感覚に陥る。

妖夢を中心に、八芒星を描いた剣閃から楔のように斬撃が繰り出され、広範囲を切り刻んでいく。

その中で妖夢は高速で動いており、こちらへと突っ込んでくる。

「ッ——！」

どういう絡繰なのか。遅くなっているどころか実際には速くなっている。上半身を仰け反らせてギリギリ回避するも、前髪が数本舞い落ちた。

即座に体勢を整えること無く一瞬で背後へと移動して大幣を振るうが、その時には既に妖夢の姿は無く、空振ってしまう。

(あいつ……「垂空穴」にも徐々にだけ対応していつてる。つくづく厄介な奴ね)

恐るべき適応力。戦いの中で成長しているのかと思う程に、妖夢の動きはつい先程よりもずつと洗練されている。

霊夢の攻撃を完全に見切るのも、時間の問題だろう。

そんな霊夢の危惧など知るはずもなく、知ったところでどうでもいい電撃使いは、無数の雷の矢を不規則な軌道で降り注がせる。

「鬱陶しい……わねッ！」

これを札と針で相殺しつつ、避ける。同時に、耳元でビリツと電流が走る音が聴こえた。

「！」

「にい——ツオラア！」

認識するよりも早く拳が振り抜かれた。これを霊夢は避けるも、続け様に繰り出され

た回し蹴りは躲し切れずに二の腕で防ぐという選択を取る。

そして、雷を纏った爆発的な威力を秘めるその一撃で彼女は吹っ飛ぶ。

「ツ、くっ——！」

壁を一枚ぶち抜く。電撃使いはそれでは止まらず、稲妻のような動きで吹っ飛んでいく。霊夢へと追い付き、追い打ちを仕掛ける。

「——痛いわね。少し、痺れたじゃない」

が、ミンチにしてやろうと落とした雷撃は地面にクレーターを作るのみ。

気が付けば、吹っ飛ばされていたはずの霊夢は彼女の背後へと回り込んでいた。

「ッ!?!」

電撃使いは目を見開きながら振り返る。これに霊夢は大幣を頭部へ容赦無く振り下ろす。

「があっ……!?!」

鈍い音が響く。殺さぬよう加減しているとはいえ後遺症が残るかもしれないくらいの力を込めた。

くらり、と電撃使いの足がふらつく。そのまま霊夢は動きを止めずに、がら空きとなった腹部に掌底を叩き込む。

「かはっ——」

脳が激しくシェイクされた状態で体内の空気と胃液を一気に吐き出される。

常人ならば即座に意識を失い、最悪死にかねないが、電撃使いはその顔を苦痛に歪めながらも踏み留まっていた。

そして、その身が青白く発光する。

「ツッ・チイ——」

即座に飛び退く霊夢。程無くして大規模な放電が周囲を焼き焦がす。

爆炎の中で電撃使いは片膝を突きながらも、健在と言わんばかりに血走った眼でこちらを睨み、笑う。ダメージは確かに蓄積しているはずだが、一向に倒れる気配は無かった。

（まだ動けるの？ 流石にあれ以上やったら死ぬわよ？ 骨を折るくらいだったら再生されちゃうし……あー、ほんと面倒臭い！）

そのしぶとさに霊夢はうんざりする。聖人である神裂やそれと同格な妖夢のような頑強な肉体ならいざ知らず、先程の大幣による一撃より強く殴ると常人ならば頭蓋骨が陥没してしまう。

こちらに殺意が無いことを理解しているのか電撃使いの獰猛な笑みの中に嘲りがあるように思え、余計に苛立ちを覚える。

「……存外、甘い。舐められたものだ」

一方、妖夢の方も自分を相手にしている時と比べて手心を加えていることには気付いており、電撃使いを殺せない理由があるのだと察する。

三つ巴の闘いの中でそのような愚行は普通はしない。つまり己を相手にしておきながら、まだもう一方を相手に手加減出来る程度には余裕があるということ。

無性に腹が立つた。

「——人智剣」

最高速で頸をはねる。電撃使いごと霊夢を葬り去らんと刀を構え——。

「ッ……!?!」

そこで異変が起きた。平らなはずの地面で踏み外す。力が急速に抜けていくのを肌で感じ、動揺する。

遂に限界が来たのだ。

「こんな時に——ッ」

「——そりゃ幸運ね」

そして、その致命的な隙を霊夢が見逃すはずもなく、次の瞬間には眼前にまで迫っていた。

「ッ!! しまっ——」

——昇天蹴。

くると繰り出されたサマーソルトキックが顎を蹴り上げる。

「がっ!？」

伝わる衝撃はあつという間に脳まで到達し、妖夢の意識を飛ばさんとする。

（——ここで決める!）

そこで終わらせるつもりなど更々無く、霊夢は続け様に大幣を槍のようにから空きとなった胸部目掛けて突き出す——。

ガキーン!!

しかし、寸前で防がれる。

「ッ——舐め、るなあッ……!」

クロスさせた二刀の面が大幣を受け止める。魔力を込めた昇天蹴程度では妖夢の意識を奪うには至らず、そしてその脅力はダメージを受けた直後でも霊夢が繰り出した渾身の一撃を防ぎ、更に押し返す程であった。

力負けた霊夢は数m程吹っ飛ばされる。

「チッ——」

絶好のチャンスだったのに、と歯噛みする霊夢。ダメージは着実に与えられているが、やはり化け物染みた強靱な肉体と体幹を崩すには、まだまだ時間が掛かりそうだ。

しかし、この戦闘にも漸く終わりが見えてきた——。

「おの、れ……」

対する妖夢は息を切らし、口元を拭う。既に彼女は限界に到達しているはずだが、ここまで来て時間切れで終わってたまるかと意地で身体機能を維持していた。

このザマではもはや逃走は不可能。ならば最後まで暴れ、そして必ずや眼前の巫女を斬つてみせると覚悟を決める。

「——愚か者めが！」

すると次の瞬間、頭上が光り輝いたかと思えば、雷轟が鳴り響く。

「が、があっ……………?!」

こちらを無視するなど言わんばかりに放たれた広範囲の落雷。先程よりも明らかに動きが鈍っていた妖夢は反応が遅れ、直撃してしまう。

「くっ——」

10億ボルトの落雷。堪らず妖夢は片膝を突き、然れど感電しながらも下手人である電撃使いを睨み付ける。

「亡霊風情が——」

「……………ツ?!」

これに嘲笑していた電撃使いはたじろいた。己の雷撃を受けたにも拘わらず消し炭にならず、元の肉の形のまま意識を保っていられるとは思わなかったが故に。

「もはや一刻の猶予も無し。纏めて切り捨てる……!!」

そして、彼女は更に驚愕させられる。何と妖夢は感電を物ともせず動き出したのだ。

その貌は、正しく人鬼が如く。

—— 未来永劫斬 ——

「ッ——」

地面を蹴り、駆け出すと共に無数の斬撃が範囲内にある何もかもを細切れにしている。

死に体とは思えぬ業に電撃使いは舌打ちし、迎え撃たんと電気を溜める。

「——ええ。速攻で終わらせましょう」

同時に、霊夢もまた勝負を決める為に動く。

—— 夢想封印 瞬 ——

霊夢の姿が掻き消える。同時に、四方八方から展開される無数の御札、針、光弾——それらが一瞬にして室内を埋め尽くす。

「ッ!!」

圧倒的な質量と面による絨毯爆撃。それが暴風雨の如く二人を飲み込まんとする。

「——上等」

そして、相對した妖夢はこれに迷うこと無く突っ込んで行く。

初めて奴と対峙した時に見たものと同じ。高速で移動しながら大量の光弾を展開していく技。その速度はあの時と違い、瞬間移動しているかの如き——否、実際に瞬間移動しているのだろうか、言ってみればそれだけ。

それに翻弄される己ではない。妖夢は既にその反則的な速さに適応しており、弾幕を切り払いながら靈夢の姿を追う。

(恐らく動けるのは残りほんの数瞬。ならば、そこに全身全霊をかける——！)

闘気が、妖力が、練り上げられる。停止した僅かな間に弾幕が彼女を覆い尽くすが——

————春風斬————

次の瞬間には、弾幕は一つ残らず切り刻まれて消滅。大海を割るが如く空に巨大な道が作られ、妖夢はそこを一直線に突き進む。

「!!」

瞠目する靈夢。気付き、対応しようとした時には既に刃が首筋に触れていた——。

血飛沫と共に、素っ首が宙を舞う。

——獲った。

「なっ——」

妖夢は確信し、然れどすぐに手応えの無さに気付いて愕然とする。

首無し状態の霊夢の姿が、霞のように消えた。

(幻だとツ!? 馬鹿な、一体いつから——)

——博麗幻影——

「最後まで隠しておいて正解だったわね——」

背後から声がする。

「ツ——」

妖夢が反応するよりも先に霊夢は彼女の背にソツと触れ——。

「これで、本当にお仕舞いよ……!」

同時に、途方もない衝撃が妖夢を押し潰さんとする。

「があ……っ……!?!」

押し当てられた太極を形取る球体が一気に肥大化する。

それは凝縮された「正」の魔力。人ならざる魔性全てが嫌悪する猛毒に等しき聖なる力は、混種たる故に効力こそ薄い、それでも効かぬ道理など無く、焼かれるような激痛が全身へ襲う。

陰陽宝玉と同じであり、しかし遥かに巨大なエネルギーの塊が激突する——。

「ぐ、ぐうっ……これしき、で……!」

然れど、妖夢は踏み止まる。無防備な背中を受けながらもどうにかして抗わんとした。

一度ならず二度までも。そのようなこと、決して認められるはずがない。

——陰陽飛鳥井——

そして、その諦めの悪さにトドメを刺すかの如く霊夢はこれをサッカーボールのように思い切り蹴り上げた。

「ぐ、あ——」

致命的な後押しに、拮抗が崩れる。蹴り飛ばされた陰陽玉は妖夢を天高く押し上げ、軌道上にある何もかもを粉碎していく。

「……流石にやった、よね？」

フウと一息吐く。天井を何枚もぶち抜いて吹っ飛んでいったため妖夢の姿は視認出来ないが、あの一撃を無防備に受けて尚、戦闘を継続可能とは思いたくはなかった。

相手が元々不調な様子だったからこそ活路を見出させたが、もしもそれが無かった場合戦闘はもつと長引いただろう。

となると、消耗していたのは己の方だったかもしれない。霊夢は顔をしかめる。

「どつちにしろ、取っ捕まえて色々と吐かせないといけないから確認しに行きたいんだけど——」

背後の瓦礫の山が弾け飛ぶ。

「まだあんたが残ってるのよねえ……」

「——ハッ」

弾幕をくらい、瓦礫に埋もれていた電撃使いはボロボロになりながらも未だに健在で笑みを浮かべている。

しかし、これで一対一。見たところ妖夢と比べれば実力は数段劣るであろう彼女単独ならば生け捕りも難しくはないはずだ。

「それにしても……顔も能力もそっくり同じだなんて、クローンつてのは随分と凄い代物なのね。あんたらを二万人も殺すつてなれば、一方通行^{アイツ}がその気になる気持ちも分かるんでもないわ」

「……………?」

少しばかり余裕を感じ、ふと呟く。いくら御坂本人と同等かそれ以上の力を有しているようと、所詮は「雷を操る程度の能力」であり、それでは一方通行の「反射」を破ることは不可能だろう。

だが、殺される度に学習し、成長すると仮定すれば、もしかすると、もしかするかもしれない。

霊夢からすれば馬鹿げた実験であることには変わりないが、これだけの力を見せ付け

れば、一方通行に期待を抱かせるには充分に過ぎる。

一方、これに電撃使いは笑みを止め、怪訝そうに小首を傾げたかと思えば、露骨に顔をしかめた。

「チツ……何だ、気付いていないのかよ」

「……あ？」

「充分な力を取り戻していると思つていたのだが……あの『半人半霊』は勘付いていたといふのに、鈍いにも程があるだろ」

額に手をやる。そこには僅かな呆れと明らかな苛立ちが混じつていた。

「……」

そして、続けて発せられた言葉は酷くノイズ雑じりで聞き取れず、霊夢は眉をひそめる。

急にペラペラと喋り出したかと思えば、意味が分からない。

「……やはり、理解出来ねえか。アテが外れたか？ あの御方の考えに間違いは無いとはいえ、奴に乗せられてカチ込んだのは、失敗だったな」

「はあ？ ……さつきからブツブツと、何言つてんのよ？」

何故だろうか。妙な胸騒ぎがする。

「知らぬなら、知らぬままでいいとも。こちら側でないのであれば——死ねい、愚か者め

が」

次の瞬間、青白い火花が迸り、雷撃の槍が地面を抉り取った。

「!」

咄嗟に横へ飛び退いて回避するも、既に大量の雷矢が上空に展開されており、それらが一斉に豪雨の如く降り注ぐ。

「馬鹿ね、愚か者はそつちよ——」

——夢想封印——

しかし、それらは霊夢に当たる寸前に解き放たれた光弾によって掻き消される。

「ッ!?!」

同時に、どこからともなく無数の御札が周囲を漂い、鎖のように彼女の四肢に纏わり付いて縛り上げた。

「あんた一人なら、どうとでもなる。再生を過信してるか知らないけど、色々とおざなりね」

「! こんなもの——」

すぐに放電し、拘束を無理矢理解こうとするが——。

「無駄よ」

「があっ……!?!」

靈夢が片手で印を結べば札が発光し、痺れるような痛みが全身を襲う。

元より聖人すらも押さえ込める程の拘束。逃れようと暴れれば暴れる程、その縛りは強まり、動きを封じ込める。

「グウウツ……おの、れ……!」

「さて、と……大人しくしてもらおうよ? あんたからも色々と言えないといけないし」

何やら知った風な口振り。そもそも御坂のクロードとして、何故強襲を仕掛けてきたのか……疑問は尽きない。

靈夢はソツと撫でるように彼女の額に手を翳す。

「ツ——」

「ま、しばらく眠ってもらおうから」

かつて禁書目録に施した他者を眠らせる呪いまじな。脳震盪や酸欠による気絶が厳しいのであれば、拘束した状態でこういった類いの術をゆつくりと行使すればいいと考えた。

その予想は的中しており、あれだけ殺気立っていた電撃使いは徐々にではあるが、脱力していき、その瞼も落ちていく——。

「——えっ?」

その時だった。

背後から声がする。何奴かと靈夢は振り返ると——そこに居たのは現在目の前で拘

束している人物と瓜二つの顔をしていた。

「……………美琴？」

いつもの常盤台の制服ではなく、ラフな格好をしているが、その目付きで霊夢はクローンではなくオリジナル本人であると判断する。

宇佐見も一緒に居るはずだが、姿は見当たらない。一体どこへ行ったのだろうか。

「……………」

「ん？ 何よ？ さつきから黙って……………あ」

彼女は顔を青くさせており、どうしたのかと霊夢は首を傾げるも己の状況を客観視し、すぐにその理由を察した。

「あー、そういうこと。前にもこんなことあったわね。まったく、何でも間が悪いのかしら……………」

アウレオルスⅡダミーを殺した場面を目撃した上条の事を思い出し、頭を掻く。拘束している電撃使いへ注意を向けつつ、誤解される前に弁明しようとするが――。

「――何ですって？」

そこで気付く。電撃使いの首がだらんと垂れ下がっていることに。

嫌な予感かした霊夢は咄嗟に顔に触れて首を持ち上げてみれば、それは虚ろな目をしており、冷たかった。

(死んでいる……?!? 一体どういうこと。さっきまでピンピンしてたじゃないの——)
呼吸はしておらず、脈拍も無い。既に事切れているその姿に、霊夢は目を見開く。それは電撃使いの死に対してでもあったが、何よりも死んだ理由が全く分からなかったからだ。

少なくとも霊夢は相手を死に至らしめる程の攻撃は加えていない。そもそも再生能力を有し、あれだけしぶとかつた存在がそう簡単に死ぬとは思えなかった。

(能力による負荷? それとも自殺? いや、この感じ——こいつ、まさか最初から……?)

つい先程死亡した訳ではない。死体の様子からそれに気づき、霊夢は余計に困惑する。

ある種のゾンビ。否、激戦を繰り広げた電撃使いは確かに生命力に満ち溢れていた。少なくとも肉体そのものは生命活動を維持していたはず。だが、それは既に死体だったのだから有り得ぬ話だ。

一見すると矛盾だらけだが、霊夢はこれを解決する手段があることを知っており、思考の末に一つの答えを導き出す。

単純なことだ、つまり何かが彼女の魂の役割を代行していたということ——。

(ああ、気付いてないって、そういうこと……!! そりゃ滑稽ね、餅屋が餅相手に見当違

いなこと宣つてたんだから)

ここで漸く電撃使いの正体を理解した霊夢は納得すると共に、荒々しく悪態を吐く。彼女らしくない姿であるが、それだけ全く見抜けなかつた己の節穴つぷりが許せず、腹立たしかつた。

霊的^{エーテル}身体や精神的^{アストラル}身体などと呼ばれるそれらへの対処は、他ならぬ霊夢の専売特許であるというのに。肉体無き、或いは肉体に縛られぬ存在。この世界にも事例は少ないが、存在自体はしていることは知っていたが――。

(これならそつち方面の結界も張つとくんだった。まだそう遠くへは行つてないはず。今から探せば――)

直ぐ様周囲を見回して見つけ出さんとする。この死体に憑いていたナニカの目的は不明だが、少なくとも野放しにして置いて良い存在ではない。

一方、御坂は茫然と立ち尽くしていた。

違う、嘘だ、何かの間違いだ、そんなことは有り得ない――と、思考でぐちゃぐちゃになる脳内で必死に否定しながらも、目の前に広がるその光景は「あの夜」の事を彼女に連想させてしまう。

地面に突き刺さる機関車、千切れた足、そしてその前に立つ――。

「……………そう……………なのね……………アンタも、関わっていたって訳か……………ッ！」

「はあ？ 待ちなさい、誤解よ。落ち着いて——」

人体など容易く消し炭にしてしまうような、鉄橋での電撃の比ではない明らかに異常な威力を問答無用で放ってきた。

あまりの激昂ぶりに若干困惑しながらも弁明しようとするれば、二発目の雷撃が有無を言わず真横を通り過ぎる。

「……………そう。会話する気は無いってこと」

肌を撫でる電熱に、霊夢は顔をしかめる。その鬼気迫る表情を見て、今の彼女には何を言おうとも聞く耳を持たぬのだろうと判断した。

「ハア……………儘ならないものねえ」

溢れる溜め息。上条の不幸が伝染ってしまったか、或いはこうなることすらも何者かによって仕組まれていた事なのか——。

どうであれ、思い付く限りで最悪な展開と言えよう。脳裏に過るのは白井の顔。助けってくれと頼まれ、引き受けながらその助けようとした相手と敵対する羽目になってしまふなど笑い話にもなりやしない。

「少し頭を冷やしなさい。正直、今はあなたに関わっている場合じゃあないのよ」

その反面、霊夢としてはそれどころではなく、冷たく言い放つ。電撃使いはもう逃げ

ているだろうが、倒した辻斬りの方も放置したまま。早くしないと戦線復帰するか、逃走する恐れがあった。

漸く見つけた手掛かり。苦勞して倒したというのに、逃がしてしまつてはすべてが無駄になる。かといつて目の前で激昂する御坂を無視する訳にも行かないだろう。

「——上等よッ！　これ以上、あの子達を殺させはしない……ッ！」

そして、御坂はその言動を挑発と受け取り、より熾烈な雷撃を繰り出さんとする。靈夢もまた物理的に説得して鎮圧する為にこれと対峙し、迎え撃つ。

二人は致命的に、すれ違つていた。

超電磁砲

——やはり強い。

分かつてはいた事だ。幻想猛獣やテレスティーナとの戦いの際にその圧倒的な力を嫌というほど見せ付けられたのだから。

(でも——)

しかし、それでもあの一方通行かいつと比べれば、まだ希望が見えた。

「流石のアンタも雷速に対応するのはきつみたいね……ッ！」

銃弾はおろかマシンガンの連射すらも視てから避ける、あまりにも人間離れた動体視力と反射神経。御坂は知らないが、音速で動き回る存在とも互角以上に戦える程である。

けれど、雷速と音速では圧倒的な差がある。秒速にして最大200 km。光速には遙かに劣るもののそのスピードは本来であればただ放電するだけで必中必殺の一撃となるのだ。

(ツ——しんどいわね……電気を操る。シンプルだけど厄介な能力なこと)

故にこそ、雷撃を当たり前のように掻い潜っているように見える目の前の少女は完全に己の常識から外れた理外の存在なのだが、実のところそう容易なものではない。

御坂はそう予想し、事実それは当たっており、霊夢は顔をしかめる。

瞬間的な速度は妖夢よりは遅い。しかし、先程の電撃使用との戦闘からも分かる通り霊夢から見ても雷速というのは純粹に速く、予備動作である雷光を認識した時点で既に攻撃はこちらに届いているので実のところほぼ視えていない状態。つまり動体視力ではなく、それ以外の五感、直感をフル活用して回避を行っていた。

幸いなのは雷撃を放っている御坂自体の反応速度は常人レベルなのに加え、あの電撃使用と比べてリミッターが外れておらず、身体強化も電気ショックによる気休め程度なこと。

尤も、あれのような爆発力こそ無いが、その分力押しだけでなく、工夫が見受けられる技巧派のように感じられ、こちらはこちらで面倒な相手である。

(さっさと終わらせたいんだけど――)

バチバチと電流が迸る。同時に霊夢は僅かに横へずれ、ほぼ同時のタイミングで雷撃が通り過ぎていく。

その瞬間にすかさず針を投擲した。

「！」

狙い済ました針は雷撃と雷撃の間を潜り抜けて真つ直ぐ飛んで行く。

「ふん……そんなもの——」

しかし、御坂には届かない。周囲に常時展開している電磁バリアによって弾かれる。

「——ま、でしようね」

「ツ!?!」

白井が扱う物よりも長く太い針。一体どこにしまっているのかと片眉を上げる御坂であるが、ほんの少し目を離れた隙に霊夢の姿は消えており、背後から声がする。

反射的に振り返れば、彼女は目と鼻の先まで接近していた。

「なっ——」

ドンツ、と銃弾の軌道をも逸らせる程に強固な電磁バリアが力づくで突破される。いつの間に、という疑問を抱く暇すら与えずに突き出された掌底に御坂は目を剥き、咄嗟に両腕でガードするが——。

「ぐうっ……!?!」

自動車にはねられたような衝撃に骨が軋む。衝撃を殺せずに大きく吹っ飛ばされた御坂はコンクリートの床を転げ回り、苦痛に顔を歪めた。

「ツ……!?!」

高速移動か、或いは空間移動に準ずる何かか。どちらにせよ、常時展開している周囲

の生体電気を感知するレーダーが反応すら出来ぬ程に瞬時にこちらへ接近する手段を持つているようだ。

加えて、駆動鎧を装備した精鋭部隊を真正面から制圧してしまふ馬鹿げた身体能力。接近戦は避けた方が良いだろうが、かといつて遠距離では幻想猛獣を消し飛ばした原理不明のエネルギー弾がある。

むしろ霊夢にとつては、遠距離戦こそが本領なのかもしれない。

「だとしても……ッ！」

追撃を行おうとした霊夢だが、辺りが薄暗くなつたことに気付いて動きを止める。見上げてみれば、大量の砂鉄の塊が頭上に黒い雲のように集結していた。

そして、それらが一齐に槍衾のように鋭い形状に変化し、雨のように降り注ぐ。

「！」

こちらを串刺しにせんと猛スピードで迫り来る砂鉄の塊。その最中にも雷撃が放たれており、砂鉄を伝導して拡散して霊夢を襲う。

「チツ——」

器用な真似をする。体を捻らせて回避しながら距離を取れば、それを見越すように砂鉄は舞い上がり、霊夢を中心にドーム状となつた。

「——捕まえた！」

砂鉄のドームは霊夢を取り囲むとすぐに収縮して彼女を押し潰さんとする。

一粒一粒が高速振動し、触れた瞬間にミキサーのようにグチャグチャに切り裂かれるだろう。加えて、内部で放電させることで発生した高熱でこちらを蒸し焼きにしようともしていた。

その殺意に満ちた二段構えの攻撃を即座に察した霊夢はこの場から逃れんと上方へと飛翔する――。

が、次の瞬間。橙色の閃光が轟音と共に砂鉄の壁を突き破った。

「ッ――!?!」

コインが射線上の全てを撃ち抜き、燃え尽きる。最大出力で放たれた超電磁砲――レールガン霊夢はギリギリで躲すも余波による風圧で吹っ飛ばす。

直ぐ様、空中で体勢を整えれば、無防備な所に四方八方から雷撃の槍が飛来してくる。

「――いい加減にしなさいよ」

――夢想封印――

しかし、触れる寸前で乱れ舞う無数の光弾が雷撃を掻き消した。

「……………!」

「さつきから、本気で殺すつもりなの？ 何をどう勘違いしてるのか知らないけど、そこまで思い切りの良い奴だとは思わなかったわ」

不機嫌そうに首をコキコキと回し、霊夢は言い放つ。あれだけの猛攻の中で未だに無傷で健在な様子の彼女に対し、御坂は悔しそうに身体を震わせる。

こちらの手札を大半見せてやつと、幻想猛獣戦で見せたエネルギー弾を引き出せただけ。先程飛んできた針も、急所を狙つておらず、全ての攻撃に殺意を感じられなかった。それはつまり霊夢にはこちらを殺す気が一切無く、全く本気になつていないということ。結局のところ目の前の少女もまた、怪物だった。

勝敗は目に見えている。ただでさえ御坂は連戦に続く連戦で疲労困憊だというのに。「ええ。本気よ。本気でなきや、あんたには勝てないでしょうが……」

しかし、それは退く理由にはならない。バチバチと威嚇するように放電しながら御坂は霊夢を睨み付ける。

「……そう」

対する霊夢の眼は、冷めている。盲目でなければ、その気高さは尊ぶべきなのだろうが――。

「なら、訂正してあげる。本気だろうがなからうが、あんたは私に勝てない」

光弾が、御坂へと向かっていく。

「ッ!!」

これに御坂は雷撃を身に纏うように放つ。雷撃は光弾を消し飛ばして相殺し、押し留

める。

「ふん……そんな攻撃じゃ私は——ぐっ?!」

どうやら光弾は雷撃で充分に防御可能な模様。御坂はほくそ笑むも相殺した次の瞬間には光弾が炸裂して爆ぜ、驚きの表情を浮かべる。

防がれたにも拘わらず霊夢は構わず光弾を撃ち続けていた。

(ツ……!!? まさか物量でごり押すつもりツ!!?)

シンプル且つ最適解。御坂の能力の厄介さと諦めぬ意思を理解した霊夢は形振り構うことなく、最速で無力化する方法を選んだ。

焦った御坂は砂鉄も操作して壁を作るも勢いは止まるどころかどんどん増していき、気休めにしかならない。霊夢はこれを見据え、作業のように光弾を撃つ。

(まずい、このままじゃ対応し切れな——ツ)

光弾が覆い尽くし、視界が真っ白になる。

……

……

……

およそ一分弱。それだけで充分だった。バチバチと高音を鳴らし、周囲を照らしていた雷撃は次第に弱々しいものとなり、やがて光弾が炸裂する音のみが響くようになる。

「……少しは頭が冷えたかしら？」

ガトリング銃の如く絶え間無く降り注いでいた光弾が止み、土煙が晴れると、御坂は地に伏していた。

応答は無い。無論、死なぬようにはした。かといって下手に手加減も出来なかったのも無事とは言い難いが。

後遺症が残っていないければ儲け物だろう。勘違いとはいえ敵対した以上、そこまで配慮してやる義理はなかった。

(さて、こいつを手当てする前にあの辻斬りを簀巻きにしないとね——)

そんな思考をしつつ、霊夢は心底げんなりした、といった様子の表情を浮かべ、自嘲する。

白井に頼まれた、御坂美琴の支援という最初の目的は何処へやら。本人と敵対し、挙げ句の果てに戦闘不能に追い込むというもはや本末転倒な展開。こんなことになるなど予想だにしていなかった。

然りとて、一先ず優先すべきは先程吹っ飛ばした妖夢の方だ。それは私的な理由であるが、凶悪な連続殺人鬼を取り逃がしてしまうという危険性もあり、端から見ても真つ当な行動と言えよう。

故に、霊夢は這いつくばる御坂から背を向け、この場を後にしようとする。

「……………」

しかし、すぐに足を止めた。

「待ち、なさ……い……ッ」

「……………ハア」

荒れた吐息の音が聴こえる。溜め息と共に振り返れば、御坂はガクガクと膝を揺らしながらもそこに立っていた。

「往生際が悪いわね。もう立ってるだけで精一杯でしょうに」

「ハア……ハア……うる、さいつ……！ 負けて、なるもん、か……ッ！」

意識を保つことすら困難なはず。もはや彼女は執念だけで霊夢と対峙しており、震える手で握るコインを翳し、満身創痍の肉体とは対照的にぎらついた、闘志に満ちた鋭い目つきで睨み、視界から離そうとしない。

その姿を見て霊夢は呆れ、しかし嫌いにはなれなかった。彼女がそうまでする理由を理解しているが故に。

「意地張ってどうすんのよ。これ以上やつても無駄なのは、流石のあんたも分かっているでしょ？」

「ッ……………！」

「単なる勝ち負けの話だけじゃない。あんたがレベル6ナンタラとかいうのを止めた

いつてのは知ってる。なら、私を相手にしてたつてしようがないでしょうが」

一連の行動に思う所があったのか。ここにきて論すような物言いをする霊夢。これに御坂は顔をしかめるも、激情に駆られるようなことはなかった。

まともに抵抗する力が残されていないこともあつてか、頭に完全に血が昇つていた先程とは異なり、ある程度ではあるが、落ち着きを取り戻していたのだ。

だからこそ、彼女は口を開く。

「……ここでもハッキングしたデータに書いてあつた。あんたが……一方通行と同じ、絶対能力者に至る可能性がある候補者だつて」

「はあ? ……私が?」

言うまでもなく初耳である。そもそも身体検査は真面目に受けていないはずだが。

どうやら御坂が自分を敵と判断した要素の一つに、それがあつたようだ。いくら知り合いと言えど、そんなことを知り、矢先に妹達の死体を拘束する姿を見てしまえば、早とちりしてしまうのも無理は無いだろう。

「知らないわよ、そんなこと。私がここへ来たのは黒子に頼まれたからよ。あんたを助けてほしいって」

「黒子が……? ツ……悪いけど、まだ信じ切れなない。じゃあ、何であの子を——」

妹達を殺した、それが勘違いだったとして何故死体を拘束していたのはどう説明する

のかと、御坂は問い質そうとし——途中で黙り込んだ。

「——は？」

「あん？」

ぴたり、と硬直する御坂。その視線は霊夢ではなく、別の方向に釘付けになっていた。
「……………」

その視線を追った先には、先程まで冷たい死体だったはずの、少女が立っている。
光無き、虚ろな眼で、ジツとこちらを見据えながら。

「——！　また戻って来たっていうの？」

霊夢は驚きながらも即座に大幣を構える。既に逃走していたと思われていた、あれに取り憑いていた存在が戻ってきたのかと思ひ。

しかし、すぐに先程までとは雰囲気は全く違うことに気付く。まさかまた別のナニカ
が取り憑いたとでも言うのか。

「……………こい」

すると死体は嗤った。ぐにやりと不気味に顔を歪めて。

御坂は寒気を感じた。少なくとも自分が知る妹達は、そのような顔は決してしない。

一方、霊夢は今度こそ逃がすまいと周囲に札を投げて展開し、結界を張り巡らせ、不
審な動きをしたら即座に対応できるよう、目の前の死体の姿を注視する。

「！」

しかし、次の瞬間にはその姿を見失う。辺りが白く濃い煙に包まれたのだ。

煙幕。別方向への対応が疎かになっていた。直ぐ様、霊夢は死体の居た場所へと札を投擲するが――。

「……消えた？」

煙幕が晴れた先に、妹達の姿は影も形も無く、消えていた。

結界で閉じ込めていたはず。仮に出られたとして、この短時間で素敵範囲から逃れることなど相当なスピードが必要であるし、そのような素振りも見られなかった。

特に結界が突破された様子すら無い。本当に、ふとその場から消えてしまったかのよう――。

「何なのよ、一体……あの子は、確かに死んで――ッ」

訳が分からない。目の前で起きた己の理解から外れた出来事に御坂は茫然とする。

ただでさえ満身創痍で疲労が溜まりに溜まった肉体を気持ち一つで無理矢理立っていた彼女は情報が処理出来ず頭の中がパンクしそうになっていた。

「本当に、何が……」

故に、遂に限界を迎え、ふらりと御坂は倒れ込んだ。

「！ 美琴――」

霊夢はこれを抱き止める。顔を見れば、彼女は既に意識を失っていた。

「……………このどいつか知らないけれど、やってくれるじゃない」

吐き捨てるように霊夢は呟く。先程の電撃使用はその正体に気付いていなかったが故の失敗。しかし、今回はそれを加味して万全な対処をしたつもりであった。

にも関わらずまんまと逃げられた。己の詰めの甘さに霊夢は腹を立て、険しい表情を浮かべる。

朧気な記憶。それが次第に鮮明になっていく。

春霞の中、花弁と共に袖を垂らし、蝶のように舞う紅白の影。優雅で美しく、幻想的な少女は、同時にまた奇妙な存在でもあった。

その瞳に宿る光からは刺すような闘気が感ぜられるが、しかしその一方で何も見えないかのような無関心さが同居している。

この無関心さに虚無感や頹廢感は毫も無い。限りなく奔放な、それでいてあらゆる干渉を拒絶する気高さ。周りの空気から浮き上がるような、侵し難い神聖さ。喜びも悲し

みもまだ知らない、嬰兒のような純粹さ。それらが一片の混じり気も無く入り乱れ、共存している。

二律背反。一見すると矛盾に塗れた在り方。その実陰陽と善悪のどちらにも属さぬ完全なる中立を往く存在。そのようなあまりにも超然とした、不可思議な人間を視たのは、初めてだった。

ああ、そうだ。忘れられるはずがなからう。あの日、あの時、あの瞬間、確かに思い知らされたのだから。

——己は、また敗けたのだ。

「ッ……おの、れ……」

少女は歩く。刀を杖代わりにしながら、今にも意識が飛びそうな死に体で。

「こんなところで……私は……ッ」

何と不甲斐無きことか。挙げ句の果てに、尻尾を巻いて敵前逃亡しているという無様極まりない有り様だった。

けれど、終わる訳には行かなかつた。まだ始まってすらいないというのに。己が何者であるか、何を成す為に生きているのか、それすらも知らず、ただ彷徨うだけの幽鬼。

だからこそ、知ろうと、知りたくて、知る為にこれまで斬ってきたのだ。

「……ささま」
??????

からんと刀を落とす。既に限界を迎えていた肉体は、遂に彼女の制御下から離れてしまふ。

ぽつりと漏れた、誰かも知らぬ名前。果たして誰のものであったかと思ひながら少女は意識を手放し――。

「……………」

どれくらい時間が経つただろうか。柔らかな肌と布の感触と共に目覚める。

「……」

「――あ、起きた？ 妖夢ちゃん」

前から聞き覚えのある声が聴こえ、視線を向ければすぐ目の前に艶やかな黒髪の後頭部があつた。

そこで漸く妖夢は自分が背負われて運ばれていることに気付く。

「……………佐天さん？」

「いやあ、吃驚したよ。突然居なくなつちやつたと思つたら道路に倒れているんだもの」
そう言つて笑いかけてくる佐天に、妖夢は戸惑いを隠せない。

彼女に拾われるまでに封鎖していた連中や追手が来なかつたというのもそうだが、一度ならず二度までも助けられるという偶然に心底驚いた。

「……………すみません。私は――」

「別に良いよ。言いたくないなら言わなくて。ただあんまり危ないことはしないでね？
心配しちゃうから」

「……本当にすみません」

こちらの血生臭い事情を察し、知りたくて仕方無いであろうに何を問わないという氣遣いを見せる佐天に申し訳無さで一杯になる。

やはり己は、どこまで行っても半端者なのだろう。不甲斐無いと思いながら、しかし佐天の背中に心地好さを感じてしまっていた。

ああ、この感覚は――。

「……少し思い出したかもしれない」

「え？」

思い出した。それはつまり、自分の記憶ということだろうか。

不思議に思いながらも佐天は耳を傾ける。

「私に親の記憶はありません。そもそも居たかすらも分からない。ただ、私には……仕えている、*“主”*が居て、もしかすると、こうしてくれていたのかも、しれません」

曖昧だが、それでも確信に近い思いがあった。

脳裏に過るのは、大きな桜の樹――その下で微笑む、着物を着た誰か。

どこの誰なのか、名前すらも思い出せない。けれども、彼女はきつと、自分にとって

大切な存在に違いない。

胸が透くような思いが、それを証明していた。

「……そっか」

佐天は笑顔を浮かべる。妖夢の安堵の声を聴いて、記憶喪失で何も分からぬまま彷徨っていた少女に、光明が差したのだと思うと、まるで自分の事のように嬉しくなった。この時に吹いた風は、真夏の夜にも拘わらず、まるで春風のように、穏やかだった。

思惑

御坂美琴の襲撃から数刻後。研究施設は完全に崩壊し、ここまで来ると隠蔽工作はもはや不可能であり、通報を受けて駆け付けた警備員が雪崩れ込み、混沌と化していた。

「ッ……………う?」

そこから離れた、表向きは廃ビルとして扱われているマンションの一室で彼女——麦野沈利は目を覚ます。

「()は……………」

「意識を取り戻しましたか。麦野」

「絹旗? 確か私は……………——ッッ!!」

名前を呼び掛けられ、視線を向ければ、そこに居たのはソファーに腰掛け、上着を脱いで自身の胸元に包帯を巻いている仲間の一人。

麦野は一瞬困惑するも、そこですぐに思い出した。意識を失う寸前の事、あの紅白の巫女に完膚無きまでに叩きのめされたということ——。

「……………状況は? あれから一体どうなったの?」

「防衛目標は文字通り完全に崩壊。電撃使いを含め侵入者は一人残らず現場から超逃亡しました。私も危うく失血死するところでしたが、どうにか止血して麦野達を見つけ出して一番近いアジトまで運び込んで今に至る……という感じですよ」

「ツ……そう。つまり任務は失敗ってこと」

顔をしかめる麦野。言い訳の出来ない体たらく。しかも絹旗が救出しなければ今頃瓦礫の下敷きになっていたことだろう。

そして、恐らく残りの仲間はどう……。

「フレンドと滝壺なら無事ですすよ」

するとその思考を読み取った絹旗が言う。彼女は初めに麦野達を見つけ出して、と言っていた。

「！ 本当？」

「はい。二人とも別の部屋で眠ってます。命にも超別状ありません。下部組織の連中はほぼ全滅したので補充しなければなりません……」

「そう……ナイスよ、絹旗。本当に助かったわ」

そう言い、麦野はホツと胸を撫で下ろす。てつきり死んだ、或いは再起不能に陥ったものだと思っていた。あれだけの被害の中、メンバー全員が五体満足で助かったのは奇跡としか言い様が無い。

少なくとも絹旗が救出してくれなければ実際にならなっていたことだろう。改めて感謝する。

「ッ……………」

起き上がろうとすれば身体が痛む。見たところ軽度の打撲のみで目だった傷は無かった。

(どういふことだ……?)

自分は確かにあの光に為す術無く呑み込まれた。原子崩しメルトダウナーを相殺する程の攻撃をまともに受けてこの程度で済んでいることは異常であつた。

(まさか、殺すつもりじゃなかつた……? いや、単にあのエネルギー弾が人体への影響が極端に少ないだけかもしれない)

だが、もしそうだとしたら、何と屈辱的なことか——そう思うと同時にあの光景が甦り、戦慄する。

こちらを見ているようで見ていない。取るに足らぬ有象無象を見下ろす冷たい瞳。あれに殺意など存在しておらず、ただ目の前で集る虫を払うが如く何気無しに理不尽なまでの暴力を行使したに過ぎない。

その結果、麦野は為す術無く地に伏せた。思い出すだけで、身震いしてしまう。

(ふぎけるなよ……! ……この私が……!)

下唇を噛み、血が流れる。

気付いてしまった。この第四位が、麦野沈利が、敗北し、惨めに生き残って抱いた感情が怒りでも屈辱でもなく、途方もない安堵感であることに。

生きてて良かったと、殺されなくて良かったと、本気で思っている。そんな己自身の不甲斐無さに腸が煮え繰り返そうだった。

「……空を飛ぶ紅白のコスプレ女」

「……………」

唐突に呟かれた言葉に絹旗は無言で視線を向ける。それだけで彼女が誰の手によって気絶した状態でコンクリートの上に這いつくばっていたのかを悟った。

「そいつにやられたわ。あれが貴女の言っていた、顔見知りのインベーターかしら？」

「……はい。その通りです」

言葉遣いこそいつも通りだが、内心怒り狂っていることを察しつつ、絹旗は頷く。

（そうですか……麦野は負けましたか。予想していたことですが、超とんでもなが過ぎますね、あの人は）

別段驚くことはない。麦野の原子崩しならば霊夢の扱^{オカルト}う非科学を突破し、仕留めることも可能だが、そもそもいくら必殺の技を有していようが当たらなければ無意味なこと。絹旗としてはアイテム全員、少なくとも自分と麦野で同時に掛かれればどうにか勝機

を見出させる……と、考えていた。

それでも絹旗の目測が甘い説もある。博麗霊夢という絶対強者の底など計り知れるはずがないのだから。

「何者なの？ あいつは」

「……私も詳しくは知りません」

その問い掛けを予期していた絹旗はそう前置きしてから言葉を続ける。

「名前は博麗霊夢。経歴上は原石の異能力者ですが……そんな訳がない超馬鹿げた強さなのは麦野もご存知の通りです」

「原石、ね……あの第八位と同じか」

天然の能力者。超能力者^{レベル5}の中にもそれは二人ほど存在し、その一人があのも力つく第八位だ。

原子崩しを相殺する程のエネルギー弾を無尽蔵に撃てるような怪物が異能力者扱いなのは笑ってしまうが、一体どういった理由で偽造しているのだろうか。表向きは別の能力なのかもしれない。

「あの人と出会ったのは、まだ私が『暗闇の五月計画』の実験動物^{モルモット}だった頃……別の研究機関から招かれたあの人とは、何度か一緒に実験を受けた間柄です」

「暗闇の五月計画、ですって？」

思わぬ経緯に驚く。裏の人間で知らぬ者は少ない狂気の実験の一つ。それに関わっているのだとすれば、裏の世界にどっぷりと浸かっていることになるが……。

「じゃあ、あいつも第一位の思考パターンを埋め込まれているってワケ？」

「いえ、どちらかと言えば、あの人のデータを超参考に私達の能力の強度を向上させるのが目的でした。『共同研究』のようなものと、担当の超糞野郎は言っていましたね」

説明しながら絹旗は思い出す。彼女と共にカリキュラムを受け、過ごした期間は短いものであったが、それでも昨日の事のように鮮明に記憶に残っていた。

空を飛ぶ。たったそれだけの能力だというのに、絹旗も黒夜海鳥も、他の被験者が総出で掛かっても傷一つ付けられなかった怪物。実際には学園都市においても理外の力を有していたのだが、少なくとも自分達との訓練では一切使用していなかった。

ある者は憧れ、ある者は慕い、またある者は畏怖した。その圧倒的で理不尽な『力』を思うがままに振るう姿はいっしか他に縋る物の無い実験体の子供達にとって目指すべき指標となり、一種の希望、そして絶望にもなっていた。

力こそが全て。この世界の不変とも言える理を、博麗霊夢という存在そのものが証明しているように思えたのだ。

「実験が潰れてからは会う機会はありませんでしたが、その存在は暗部の中でも一部の人間には知られているようで名前や『鬼巫女』なんて異名は何度か聞きました。一応

表の人間のはずなんです、裏も表も関係無く平気で関わり、大暴れして超しつかちやめつちやかかにしていくので超危険人物扱いされています」

「そうなの？ 私は聞いたことないんだけど」

「……はい。彼女に関する情報は超少ないです。不自然な程に」

それこそ面識のある絹旗でなければ博麗霊夢Ⅱ鬼巫女という図式には結び付かないであろう。

不可解極まりないが、それはひとえに彼女の能力開発担当であるあの“赤髪の女”が裏で動いているからだと言旗は認識していた。

「ふうん……成程、ね。ありがとう絹旗、それだけ知れば充分よ」

「……麦野、その、やっぱり——」

「何？ 顔見知りだから殺り合いたくないって？」

「いえ、そういう訳では……」

「冗談よ。ま、別にこつちから居場所を特定して凸しておつ始める気は無いわ。リスクが高過ぎるし……こつちからは、ね」

博麗霊夢。確かにその名前、覚えた。己をここまで虚仮にした報いは、いつか必ず受けてもらう。

そう決意し、殺意を滾らせる麦野の様子を見て、絹旗は内心溜め息を吐く。

(触らぬ神に祟りなし。霊夢さんとは出来得ることなら、超敵対したくないのですが……)

麦野が目の敵にしている以上、その願いは恐らく叶うことはないのだろう。しかしながら霊夢よりもアイテムという居場所を選んだのは他ならぬ絹旗自身。

ならば精々付き合おうとしよう。たとえこの先が地獄で共倒れしようとも……。

宇佐見董子は興奮していた。

実のところ彼女は博麗霊夢VS御坂美琴の現場に居合わせていた。少し遅れてから御坂の後を追いかけて、そこで視たのは何故か激昂しながら雷撃をぶちかましている御坂と、それを相手にする霊夢。そして、その傍に転がっている妹達の死体——。

一体どういう状況なのこれ？ と、彼女は酷く困惑した。状況証拠から考え得るのは霊夢と戦っていたのは今は冷たくなったクローンであり、それに対して御坂が怒り狂って今に至る……ということであるが、妹達の性能は精々異能力者^{レベル2}程度の欠陥品のはず。この建物を崩壊寸前に追い込む程の力など有していないし、霊夢の攻撃によるものではないのは一目瞭然だ。

そもそも霊夢がクローンとはいえ安易に人を殺すとも考えづらく、何かしら誤解があるのではとも考えた。例えば、戦っていたのは全く別の存在で妹達は巻き込まれただけではないかと。

然りとて霊夢は無慈悲な時は本当に無慈悲で冷酷なため完全に言い切れない。どう

であれ、ここに来て仲間割れなどあんまりにもあれな展開。とりあえず戦いを止めるべきであるが、自分が割り込んだところで場が収まると思えず、それにこのなかなか見ないマツチアツプをもう少しだけ見物したいという邪な気持ちもあった。

そんなこんなで迷っていると、戦闘は意外にもあつさり終わる。電気と磁力を操り、多彩な攻撃を仕掛ける御坂に痺れを切らしたのか霊夢が光弾を連射し、圧倒的な物量によるごり押しで叩き伏せたのだ。

そのえげつなさにドン引きしつつ、宇佐見は未だに立ち上がる御坂を見て流石にまづいと判断し、仲裁に入ろうとした。

——その時だった。横たわっていた死体がむくりと重力に逆らうように起き上がったのは。

正に未知との遭遇。目にした瞬間から宇佐見は予感し、理解した。あれが自分が追求め、暴かんとしている秘密オカルトそのものであると。

死霊魔術ネクロマンシーか、それとも霊的存在スピリチュアルか、はたまた全く別のナニカか。床に空いた穴の中へと消えていったソレの思いもよらぬ介入は探究心と知識欲を大いに刺激し、歓喜させる。

「——で、今更ノコノコと出てきて、どういうつもりか説明してくれるんでしょかね？」
「いやあ、めんごめんご。ちよつと出遅れちゃって……」

「あ?」

「誠に申し訳ありません!」

そして、御坂が気を失った後に意気揚々と姿を現した彼女は現在。霊夢に胸ぐらを掴まれ、詰責されていた。

未だにおどけた様子の宇佐見に対し、霊夢は完全に目が据わっている状態で睨み付けている。

「ちよ、本当にごめんって! マジで悪かったって思ってるから!」

胸ぐらを掴み上げる力を強めれば必死で謝罪する宇佐見。あの状況では自分が割って入ったところでどうにかなったとも思えないが、そんなこと言ってしまうば普通に殴られる。

それに結果論になるが、そもそも事前に宇佐見が霊夢が来ていることやその理由を話していれば誤解されるのは変わらないとはいえあそこまで拗れることはなかっただろう。

「……チツ」

霊夢は軽く舌打ちし、手を離す。

「つたく……お蔭でとんだ無駄骨だったわ。辻斬りも亡霊も取り逃がすし」

「辻斬り? よく分からないけど亡霊ってのはもしかしなくてもミコトつちのクローン

の事よね？ やっぱりあれお化けが取り憑いてたんだー」

「……ま、あなたには隠してもしょうがないか」

はしやぐ宇佐見に対し、霊夢は呆れつつもこれまでの経緯を説明する。最初は辻斬り……あの連続殺人鬼の切り裂き魔と戦っていたこと、そこに乱入してきたのがあの死体に憑依した亡霊であること。その強さはオリジナルの御坂にも引けを取らない程であること。最後に動いていた死体の中身はまた別個体であり、いずれも正体不明であること。

色々とんでもない情報の数々に宇佐見は驚愕する。自分が第四位と遊んでいる間に随分と激闘を繰り広げていたようだ。

特に建物を切り崩したのが最近世間を騒がせている切り裂き魔だったと聞いた時は耳を疑った。単なる猟奇的殺人鬼にしては足取りが掴めず、只者ではないとは思っていたが、まさか霊夢と渡り合うような化け物だったとは。

（ふむふむ……レイムつちがやたらと取り逃がしたことを悔やんでいるし、その切り裂き魔つてのも面白そうな事情を抱えてそうね）

何となしに予想する宇佐見。切り裂き魔が科学サイドか魔術サイドか、或いはそのどちらでもないのかはともかく、少なくとも基本的には他者に無関心な霊夢が妙に気にするような存在のようであり、興味が尽きない。

「……楽しそうね？ 董子」

「ええ、とつても！ 前の錬金術師といい、こうもオカルト絡みの話が立て続けに起こるなんて。流星はレイムっち、そういうのを呼び込んでくれるねえ」

「……………」

本当にこいつは。相変わらず能天気で野次馬根性丸出しの宇佐見に霊夢は呆れる。

しかし、現時点だと彼女の情報網は色々と便利だ。もうしばらくは協力してもらおうことになるだろう。

「ハア……じゃあ、また実験とやらについて何か分かったら教えてちょうだい」

「かしこまりー。あ、そういえばミコトっちには会いに行ったりするの？」

溜め息を吐き、踵を返す霊夢に対して宇佐見が問い掛けた。

あの後、気絶した御坂を病院まで運び込んだ。幸いにも単なる疲労によるもので立った外傷も無く、早ければ明日にでも退院可能らしい。

因みに彼女の寮への連絡は院長であるカエル顔の医者任せた。押し付けたとも言えるが。

「……会いに行つてどうすんのよ」

また面倒事になったら困る。彼女自身色々シヨックを受けてそうであるし、誤解を解くにしてももう少し時間を置いておいた方が良さだろう。

少なくとも霊夢はそう判断し、今日のところは帰宅することにした。

「ふうん……分かった。ま、ある程度ほかしつつ、事情は説明しておくよ。じゃあねー」
内心あれだけ痛め付けたし、会いづらいのだろうなと察しながら、そのまま去つていく霊夢の後ろ姿を見送る。

「さて、と……この感じだと近い内に絶対能力進化計画も潰えるだろうし、こつちも早めに準備しておこーつと」

残された宇佐見もまたそう呟いて笑い、闇の中へと消えていった。

「随分と派手に暴れましたねえ……」

学園都市某所にあるバーにて。

照明が適度に暗く、軽快なジャズが流れる落ち着いた雰囲気空間。しかし、そこに普通ならば存在するはずの店員らしき姿は無く、客席に二つの人影があるのみだった。

「ふん……コソコソするのは性に合わん。それよりも貴様、私を向かわせたくせになかなか危ない橋を渡ったな？ 実によく馴染む容れ物だったが、わざわざ回収することもなからう」

グラスを片手に呟かれた言葉に、もう一人が不機嫌そうに眉をひそめながら問い掛ける。

「あら、だって勿体無いでしょう？ この季節だとすぐに腐ってしまうのですし、貴重な

資源は再利用しません。今の時代の最先端はエコロジーですわよ」

と言つても、残り一万近く存在するようだが。

「……成程。貴様の収集品の一つに加えるという訳か。相も変わらず悪趣味な奴だ」

「まあ酷い。私めの価値観が一般化するのはいつになるのやら。よよ」

「なつてたまるか。気色悪い」

クスクスと笑い声が静かに響く。

「——それで、どうでした？　かの巫女様のご様子は？」

「どうもこうも、貴様の見立て違いだ。彼奴、私の正体に全く気付かなんだ。『力』の方は一級品だったがな」

いくら強かろうと、あの体たらくでは期待は出来まいと、心底失望した様子で吐き捨てる。それに対して片割れは浮かべた微笑みを崩さない。

「あらあら、それは残念。まあ、それなら仕方ありません。気長にやるとしましょう」

「……知つてたな？　貴様」

「さて、どうでしょう？」

バチツと閃光が迸る。人体を跡形も無く焼き尽くさん勢いの電流は、しかし次の瞬間には店内に何の傷も残すこと無く、消えていた。

「まあいい……千年以上も待ったのだ。また待つ羽目になつても構わんとも。久々に気

持ちよく暴れたしな」

「ウフフ。そう思うと、気が短いのか長いのかよく分かりませんわね、^{?????}さんは」
 誰も呪わず、崇らず、変わり果てることもなく待ち続け、守り続けたその執念深さには感心させられる。

だからこそ、彼女に目を付けた。

「ですが、どうかご安心してくださいませ。もう何年も待たずともその時は来ますとも」
 今回は単に焚き付けたに過ぎない。お膳立ては元より他の連中がしてくれる。自分達はただそれを傍観しつつ、面白半分に干渉し、最後に勝ち馬に乗れば良いだけ。

何ら心配することは無いのだ。あの少女の実力はよく知っている。既に十数年もの時間を無駄にしているようだが、まだ時間は充分にあるし、もしものことがあれば自らが導くとしよう。

「ふん……だと良いがな」

楽しいげな表情を浮かべる目の前の女が何を企んでいようとどうでもいい。己の目的さえ果たせれば彼女はそれで良く、その為ならば喜んで身を捧げる。

その点においては二人は共通の目的を抱く同志であり、誰よりも信用出来ぬこの外道を、唯一手放しで信じられた。

「次はどうする?」

「そうですねえ……しばらくは様子見しても良いかもしれません。この街も面白い事をしていてみたいです。夥しい死の経験による魂の昇華……とも言いましうか。実に興味深い話だわ」

「……………？ よく分からんがきつと、ろくでもない話なのであろうな」

水面下で、様々な思惑が渦巻く。

その果てに何があるのかは神のみぞ知る——否、きつと神にすら分かるまい。

無意味

病室で目覚めた御坂美琴を待つていたのは、般若と化した寮監による説教だった。

運び込まれた病院側が彼女の寮へと連絡しない道理は無く、流星にそうなれば白井も誤魔化すことは不可能であの超電磁砲が深夜徘徊した挙げ句に怪我して入院というのは常盤台側でちよつとした騒ぎになった。

幸いにも厳しい罰則こそ無かったが、数時間に及ぶ説教の末、しばらくの奉仕活動を言い渡されてしまう。白井にも何があつたのかといつも以上に心配され、かといって事情を説明出来るはずもなく、罪悪感で御坂は大変居心地が悪かった。

(でも……これで終わったんだ。本当に)

残り一つの研究所は完全に無人だった。それはつまりあの実験に関わる全ての研究機関が撤退したことを意味しており、もうクローンを製造することは出来ないということ。

——実験は中止されるはず。御坂は途方もない安堵感で有頂天になっていた。

無論、気掛かりは残っている。意識を失う寸前に視た、死体であつたはずの妹達が突

如として動き出す怪現象。まだ疲労により視ていた幻覚と言われた方が納得が出来る。(それに……宇佐見さんの話が本当なら……私は何てとんでもないことをしてしまったのよ……)

脳裏に過るのは霊夢の姿。見舞いに来た宇佐見童子曰く、彼女は白井に頼まれ、どういう経緯か実験のを知って自分を助ける為にあの製薬会社に乗り込んだのだという。

もしそれが真実ならば、御坂は完全なる勘違いで彼女を実験に関わる悪人だと決め付け、あまつさえ命を奪おうとしていたことになる。

否、そもそも彼女が実験の関係者で、妹達の一人を殺したのだとして、それで本気で殺そうとすること自体がおかしい。そんな人として至極当たり前なことさえ思い至らぬ程、頭に血が上って冷静さを欠いてしまっていた。

相手が自分よりも格上だから良かったものの、もしもあのまま殺害、もしくは一生涯の怪我を負わせていたら……そう考えるだけで背筋が凍る。如何に己が恐ろしいことをやろうとしていたのかと今になって理解したのだ。

(合わせる顔が無い。確かに冷たい人かもしれないけど、そんなことする人じゃないって分かってたはずなのに……)

つくづく自分が嫌いになる。すぐにでも謝罪したいという思いとは裏腹に、その足取

りは重かった。

「おい動けこのポンコツ！ 動けっつてんだよコラ！」
「？」

その時である。寮監に言い渡された奉仕活動の帰り。燦々と降り注ぐ日光に晒されながら歩いてきた御坂が聴こえていた大声に反応してその方向へと視線を向けた。

すると見覚えのあるツンツン頭が自動販売機の前で嘆いていた。

上条当麻は思い悩んでいた。

三沢塾でのアウレオルス・レイザードとの死闘から数日。世間では原因不明の地震や警備員のある部隊がテロを起こしたやらで騒がれている中でいつもならずつからかんのアパートの郵便ポストにそれは入っていた。

“バイト代”と雑にネームペンで大きく書かれた分厚い封筒。その中身は上条が月々貰っている学園都市からの支援金の何倍もの金額であり、驚きのあまり顎が外れそうになる。

思い当たることは一つ。あのハンバーガーショップで会った魔女っ娘の言っていたアルバイトとやらの報酬だろう。

まさか本当に貰えるとは思っていなかった上条はその金額もあつてか慌てて封筒をタンスの奥へと隠すようにしまう。部屋に居た禁書目録はその挙動不審っぷりに疑問を抱くも、然して気にすることなくスフィックスと戯れていた。

(やっぱり博麗に相談した方が良いよなこれ……)

普段の自分の不幸っぷりからは考えられない、まず無縁であろう幸運。普通ならば跳

び上がる程に嬉しいはずだが、上条の表情はひきつっていった。

実は魔女についてステイルは勿論、霊夢にも教えていないのだ。というのも、その存在を思い出したのがそもそもポストの中の封筒を見た瞬間であった。

人が縦に真つ二つになったりビルが消し飛んだり切断された右手からドラゴンが生えてきたりと衝撃的な出来事の連続で自分が三沢塾へ行く事になった原因であるあの少女のことなど頭の中から抜け落ちてしまっていた。

(しかし、本当に何者なんだあいつ？ あのステイルって奴は俺が来るのが想定外だった、みてえな反応してたし……)

少なくともステイルの仲間という訳ではないだろう。フリーの魔術師……自らをそう称していたが、それも実際はどうなのか怪しい話である。

改めて上条はうーむと思考するも、手掛かりがあまりにも少なく彼の頭脳では結局正体不明であることしか分からなかった。

「——は？」

そして現在。大金を手にした幸運の反動か、早速とばかりに上条は不幸に見舞われた。

猛暑の中、喉が渴いたなど彼は近くにあった自販機で飲み物を買おうと紙幣を挿入したのだが……。

「つかしいなー。故障かー?」

ボタンを押しても全く反応しない。一瞬フリーズするもすぐに釣り銭レバーをガチャガチャと引いてみたが、挿入口に吸い込まれた紙幣が戻ってくる気配は無かった。

「嘘だろおい。あれが上条さんの財布の財産だったんですけど」

例のバイト代はタンスの奥深く。万札一枚だけ財布に入れておいても良かったと思うが、もし落としてしまったらと思うと持ち歩く度胸が無くていつも財布の中身は最小の金額だった。

「おい動けこのポンコツ! 動けっつんだよコラー!」

ドンドンと叩くもうんともすんとも言わない自販機。思い切り殴ろうとしたが、そんなことをしてしまえば警備ロボットがやって来る。かといってこのまま泣き寝入りするなど出来るはずもない。

「——何やってんのよ、あんた?」

どうしたものかと頭を抱えていると、横から声がする。

「うん?」

振り向けば、短い茶髪の少女が呆れた様子でこちらを見ていた。

(誰だ? えつと……この制服は確か常盤台中学の……え、お嬢サマ!?)

少女が着る制服には見覚えがあった。世界でも有数のお嬢様学校。この間、盛夏祭と

いう大規模な学祭にも禁書目録と共に行ったことがあったため記憶喪失の上条が知る数少ない学校の一つであった。

「? 何よ、じろじろ見て。ほら、買わないならどいたどいた」

「え? お、おう、すまん」

訝しげな視線を送る少女。思わずジツと見つめてしまった上条はそそくさと横へ退く。

「……あー。その自販機な、金を呑むっほいぞ」

「え? ああ、知ってるわよ」

第二の被害者を生まぬ為に忠告すれば少女は既に知っていたようであり、上条は首を傾げる。まさか金を飲み込ませるのが目的という奇特な人物ではあるまい。

「ちえいさーっ!!」

「!?」

するとどうしたことか。いきなり自販機の側面に掛け声と共に強烈な回し蹴りを繰り出す。勢いでスカートが捲れ上がって中身が露になるが、短パンを穿いていた。お嬢様らしさは皆無である。

突然の暴挙に上条が絶句しているとゴトゴトと缶ジュースが幾つか出てきた。少女はそれを当たり前のように手に取っていく。

「ははーん。ひよつとして、あんたも呑まれた口？」

「え？ な、何のことでしょおか？」

分かりやす過ぎる反応に少女はぷぷつと笑う。

「やっぱりね。けど、そりや運が良いかもね」

「……はあ？ どこかだよ」

「このポンコツに呑まれた分だけ吐かせてやるってことよ。どうせ前みたいに不幸だーって喚いてたんでしょ」

「え？」

はて、その口癖を知っているということはどうやら彼女と自分は以前から知り合いだったらしい。当然覚えは無く、そもそも常盤台のお嬢様に知り合いが居るなど思いもしなかった。

そこで思い出す。そういえば盛夏祭の時にも霊夢が言っていた。常盤台には知り合いが居るから気を付けろと。彼女がそうなのだろうか。

「それで、いくら呑まれたの？」

「あ、えつと……それは……」

吐かせてやる。つまり自販機に飲まれた金を取り返してくれると豪語する少女に内心マジで？ と思っていると金額を尋ねられた。

普通ならば別に答えるのを憚れるような質問でないにも拘わらず上条は何やら躊躇している様子である。

「に、にせんえん……」

「は？ 二千円？」

頭に疑問符を浮かべるが、僅かに思考した後、閃いたように口に出す。

「ま、まさか、二千円札？」

少女の言葉に、バツが悪そうに表情を曇らせながらゆつくりと首を下に動かす上条。それは学園都市で、というか外部でも殆ど見ないであろう幻の紙幣だった。

「——ぶ、あつはははははっ！ 今時二千円札って！ まだ絶滅してなかったんだ！

中途半端な金額だったから、一瞬考えちゃった！ そりゃそんなレアなお札来たら自販機だつてバグるわよ！」

腹を抱えて笑い始めた少女を尻目に上条はぎゃーと言いたげに頭を抱えて掻く。その通り、だからあんまり言いたくなかったのだ。

「いやー笑った笑った！ それじゃ、その二千円札をこの御坂美琴さんが取り返してあげるから！」

「因みにどーやって？ さっきみたい蹴るのか？」

あの勢いですつと蹴りまくったら普通に警備ロボットがすつ飛んでくると思うのだ

が……。

それと、少女の名は御坂美琴というらしい。少なくともアドレス帳には無かった名前である。

「いいえ。流石にやったことはないんだけど……ま、何とかなるでしょ」

「そう言つて御坂は自販機に掌を添える。刹那、バリバリッ！ と雷が流れる音が響く。

ガラガラと滝のように溢れ出てくる缶ジュース。自販機本体は小刻みに震え、プスプスと煙を出していた。

上条の顔が真っ青になる。

「おつかしいわね、手加減したつもりなのに。けどこれ二千円以上じゃないの？ これでオツケー？」

首を捻りながら缶ジュースを手に取つて上条へ視線を向けると、既に彼は全力ダツシユで逃げ出していた。

「つておーい！ 待ちなさいつて！」

「ボ、ボクには関わりの無い事です！」

両手で缶ジュースを持てるだけ持つて御坂はその後を追う。

とんでもねえ奴と出会した。改めて上条は己の不幸を呪うのであった。

「不幸だ……」

草臥れた様子で上条は嘆く。追い駆けつこの末、流星にここまで来れば安全だろうと二人は公園のベンチで休憩していた。

「ほら、元々あんたの取り分でしょ」

隣に座る御坂が缶を一本投げ渡してくる。端から見たら完全に共犯者である。

（きなこ練乳……？ 嫌がらせか？）

何とも甘ったるそうな製品名である。他にもヤシの実サイダーだのカツサンドドリ
ンクだの、学園都市の飲料は何故こころも冒険したがるのだろうか。

「つたく……いちいち逃げ腰過ぎんのよね、あんたつて！」

「あん？」

唐突に、ジュースを飲んでいた御坂が呆れた様子で語り始める。

「学園都市でも八人しか居ない超能力者。この超電磁砲レベル5の御坂美琴を打ち負かす程の力があるくせに自販機にお金吞まれて半泣きだわ不良共に追い掛けられて街中逃げ回るわ……どーゆー了見よ」

（そんなこと言われても……この右手じゃあ自販機とか不良の集団とかどうにもならねえし。それにレベル5つて……こいつが？）

能力者のトップ。上条の知っている能力者と言えば霊夢と宇佐見くらいである。霊夢はほぼ魔術師みたいなものであるから除外するとして、少なくとも目の前のビリビリ中学生は宇佐見と同等かそれ以上の能力を有しているということになる。

そして、そんな相手を自分は負かしたと。

「あんたは私に勝った事を、もつと誇示するべきなのよ。でないとならば私に申し訳が立たないでしょうが」

それとも私なんて眼中にないってこと？ と不機嫌そうにそっぽを向く御坂。対する上条は困惑するばかりだ。

（ガチでやり合ったのか？ 俺が？ 中学生の女の子相手に……？）

そのようなことを自慢できるはずがなからう。普通に人として最低である。

それに仮に事実だとして、アウレオルス戦で見せた宇佐見の能力の規模を見るといくら幻想殺しがあるかと勝てるビジョンが見えない。不意打ちでもない限り普通に念力で操られた瓦礫の山に押し潰されて終わりだろう。

と言ってもそんな彼女が逆立ちしても勝てないアウレオルスを殆ど記憶に無いとはいえ倒せたのだから、相性というのは馬鹿に出来ないし、御坂を負かしたというのもそうやって上手く噛み合った結果なのかもしれない。

単なるラッキーパンチ。であれば、ますます誇る気にはなれなかった。

(しかし、レベル5とも知り合いとか……本当にどういふ生活を送っていたんだ？ 前の俺は……)

「？ 良いからジュースでもお飲み。美琴センサーの手渡しなんて、ウチの後輩なら感激で卒倒してるわよ？」

「はあ？ んな食品衛生法ギリギリのを貰って喜ぶ奴が居るのかよ」

「……居るのよ、色々。女子校はねー」

上条のツツコミに微妙な表情を浮かべ、苦笑いしつつ御坂は言う。脳裏に過るのはその後輩だけでなく、その他多くの常盤台生たち。

「私が学校で何て呼ばれてるか教えてあげよつか？ 引いちゃう「お姉様〜!!」——げっ」

噂をすれば何とやら。甲高い声に御坂が振り向くとやはりと言うべきかツインテールの少女が手を振りながらこちらへと走り出していた。

「おねえ〜さま〜!!」

そして、そのまま御坂の懐へと勢いよくダイブする。突然のことに上条は目が点になった。

「ちよっ……黒子！ やめっ く、くつつくな！」

「あああ！ やっとお会いできましたわ〜！」

「毎日寮で会ってるでしょうが!」

「ぐへへ……良い香りですの——ん?」

おっさんのような笑みを浮かべながら御坂の抱き心地を堪能していた少女——白井黒子だったが、そこで上条の存在に気付いて視線を向ける。

「お、お姉様……そうですの? そういうことですか?」

「はあ?」

「私に内緒で頻繁にお出かけしていると思つたら……よもや殿方と密会をツ!」

「違うわつ!」

シヨックを受けた様子で固まる白井。しかし、すぐに再起動してサツと上条へと素早く接近する。

「初めまして殿方さん。私、美琴お姉様の『露払い』をしています白井黒子と申しますの。——お姉様にちよつかいを出す気なら私を通してからにしてくれませんか?」

上品に自己紹介されたかと思えば、次の瞬間には高圧的に睨まれながらそう言われ、うわあと引いてしまう上条。これが常盤台中学。皆の憧れの的であるお嬢様の実態だと言うのか。青髪ピアス辺りが知つたらさぞやガツカリ——するどころかあの変態ならそれはそれで喜びそうである。

「だ・か・ら! 違うって——」

勘違いして好き勝手言ってくれる白井に怒って電撃をお見舞いしようとした御坂だったが、視界に入った人物に動きを止めてしまう。

「何してんの？ 白黒」

「ああん？ 決まっていますの。お姉様に近付くこの不届き千万な類人猿に断罪を——
えっ？」

聞き覚えしかない声。白井もまた御坂のように動きを硬直させ、ギギギと壊れたブリキ人形のようにゆっくりと後ろを振り返る。

そこには予想通り、紅白の巫女がこちらを訝しげに見据えていた。

「は、はははははは博麗霊夢……!?!」

「ごきげんよう。で、どういう状況なのこれ？」

露骨に動揺する白井に対し、霊夢は特に気にする訳でもなく問い掛ける。

たまたまこの公園に寄れば、たまたま知っている顔が知っている顔と共に騒いでいたから何事だと思い、声をかけたのだ。

「……………」

「？ 何よ、固まって」

「……………」

「……………」

一方、霊夢は今までの説教以上の音波攻撃を受け、訳が分からないといった様子で耳を塞ぐ。別に白井が御坂のことを慕っているのはお姉様という呼び方やその雰囲気からして何となく察していたので気にはしていない。

あのように過剰なスキンシップを取るのには意外な一面ではあったが。

「ち、ちがつ……違いますの……」

「え？ 何が？」

「違うんですのおおおおお!!」

ここちらの顔を見ることなく、涙目になりながら白井は走り去るように背を向け、ヒュン！ と空間移動でこの場から消える。

「……だから何が？」

意味不明。そんなに嫌だったのか。ただ御坂に抱き付く姿を見られたくなかったにしても些か過剰過ぎる反応に霊夢は呆気に取られる。

(黒子があんなになるなんて……これは今後使えるかも……)

一方、御坂はあの白井が霊夢に対してはまだ恥じらいという感情が残っていたのかと驚愕していた。

次からは白井の痴態があまりにも目に余るものであった場合、霊夢の名前を出してみようと思うのであった。

「…………急にどうしたんだ？ あの子」

「さあ？ 知らないわよ。少なくとも身に覚えは無いわね」

先程までこちらを睨んでいた少女が霊夢を見た途端に奇声をあげて涙目で逃げ去っていくという事態に頭上に疑問符を浮かべる上条。とりあえず面倒なことにならずには済んだが……。

「あ、当麻。何かあいつにガン付けられてたように見えたけど、またお得意の不幸でトラブってんの？」

「お得意って…………まあ、そんな感じだ。自販機に金を吞まれた挙げ句、レベル5に絡まれて、そしたらそいつをお姉様だなんて呼ぶ奴にいちやもん付けられちゃってさ」

「何それ。相変わらずねえ」

相変わらず。そう言われ、上条は苦笑いするしかない。この数週間で理解していたことであるが、やはり上条の不幸っぷりは日常茶飯事で周知の事実であったようだ。だからこそ、記憶喪失という最大級の不幸に見舞われるのも納得と言えよう。

「というか、また当麻に絡んでたの？ 美琴」

すると霊夢は御坂へと視線を向ける。思い出すのはあの鉄橋での事。特に今の上条は記憶喪失であるから、余計にトラブルになりそうではあったが……。

「！ あつ、博麗さん…………その…………」

対する御坂はしどろもどろになりながら目を泳がせる。どうやらあの時の一件が完全に勘違いであることを理解しており、負い目があるようだ。

霊夢としては助かる。まだこちらを敵視されていては面倒極まりないのだから。

「別に良いわよ。お互い、間が悪かったのだから。気にしないでちょうだい」

「……………ごめんさい」

（……………えっ!? 何この雰囲気!?)

急に気まずそうな空気になったかと思えば俯いて謝罪する御坂。事情を知らない上条はオロオロと戸惑う。

「それより……………随分と沢山買ったじゃないの。それ」

指差すのはベンチ周りにある大量の缶ジュース。確かに今日は暑いが、にしても買い過ぎであり、先程から気になっていた。

「あ、うん……………良かったら飲む?」

「え? 別にいらな……………いや、やっぱ貰うわ。お詫びとして、ね」

「! ありがと……………」

これで許すからこの話はもう終わりだと、暗にそう告げる霊夢に御坂はその寛大さに感謝する。

「……………いや、これ元は上条さんのお金」

「あーん？ 何よ。私が居なきや吞まれて終わりだったでしょ」

「……出所は訊かないでおくわ」

そう言つて霊夢が手に取つたのはヤシの実サイダー。

「……旨いか？ それ」

「他のと比べたらマシな味よ。前に飲んだカツサンドドリンクとかいう泥水は、二度と買うかつて思つたけど」

「お、おう」

確かにヤシの实のジュースというのは南国とかで売られているしそれをサイダーにしただけならばココナッツ風味のサイダーということで普通に飲める……のかもしれない。少なくとも他の色物どころかゲテモノレベルなのに比べるとマシだろう。

「そういうえばインテックスは元気にしてる？ 飢え死にさせてないでしょうね」

すると霊夢は何気なしに問う。

「失礼な。元氣リンリンだよ……お蔭様で上条さんの家計は火の車でこの一週間ずつともやし生活でございます」

「ハア……そりや大変ねえ。ま、あいつも加減してると思うわよ。あの食いつぶりを見た感じ本気だったらあんた三日で破産してらるろうし」

「……マジで？」

「マジ」

「こわ」

確かに盛夏祭の時やハンバーガーを山のように喰らう怪物がそれよりも圧倒的にカロリーの低いもやし炒め数皿程度で満足するはずも無し。

あれで遠慮しているというのか。恐るべし暴食シスターである。

「というか、イギリス清教あに食費請求してないの？ 普通そこら辺は工面するのが道理よね？」

「え？ ……た、確かに」

「……今度言っておくわよ」

まさかただの学生に一人一人を養ってもらうのに何の資金も提供していないとは。一応自身が属している組織の非道……というよりもケチさに霊夢は呆れる。

ステイルと神裂の二人は禁書目録と友人だったのだからその健啖家っぷりも知っていると思うが、単純に食費について考慮するのを忘れていただけなのだろう。彼らがわりと考え無しなのは禁書目録の記憶消去に何の疑念も抱かなかった時点で分かっていたことだ。

（インデックス……？ ペットでも預かっているのかしら）

どう考えても人名ではないその単語を聞いて、御坂は上条がペットを預かり、飼い主

が餌代を払っていないのではと推察する。

「じゃあ、もう行くから」

そう言うと共に霊夢が宙に浮く。

「何だ、急いでののか？」

「急ぎって訳じゃないけど少し野暮用がね。また何かあつたら連絡してちようだい……」

二人とも、ね」

「おう、じゃあな！」

「え、ええ……分かったわ」

そのまま空を飛んでこの場を後にする霊夢。それを見送りながら上条はまるで嵐のようだったな……と、思うのであった。

「……あ、しまった。博麗に魔女っ娘のこと相談するの忘れてた」

完全に失念していた。どのみち魔術絡みの話なので御坂が居るこの場では話せないとは思うが……。

「ねえ……」

「はい？」

「前から気になってたんだけど、あんたと博麗さんってどういう関係なの？」

ふと唐突に御坂が尋ねる。そういえばあの鉄橋では問い詰めたものの結局教えても

らっていなかった。

「どういう関係って……そりゃ……」

「そりゃ？」

「……ただのクラスメイトだよ。多分」

「はあ？ 多分って、何それ」

何とも言えない微妙な返答に眉をひそめる御坂。ただのクラスメイト……にしては随分と親しげに見えた。同性ならともかく異性であそこまで親しいと色々と勘繰ってしまう。

だから何だという話ではない。このツンツン頭が誰とどういった関係であろうと御坂には無関係な話だ。無関係、なのだが……どうにも胸がざわつく。

「そうだ、御坂……だったか？ お前は博麗と知り合いみたいだが、お前から見たあいつはどうなんだ？」

「え？ どうって……何でまた急に？」

「いや、少し気になってな……」

一方、上条は訊き返す。彼は博麗霊夢という人物についてあまりにも知らないことが多い。クラスメイトと言っても、彼女と学友として過ごした日々の記憶はもう失われているのだから。

アウレオルス戦後、入院していた際に見舞いに来た彼女はアウレオルスⅡダミーの件について自分の記憶喪失を考慮せずに誤解させる物言いをしてしまった、と謝った。

少なくとも前の上条当麻は、あの現場に居合わせても霊夢を敵視しない程度には信頼関係を築けていたらしい。けれど、あの時の彼女の姿はあまりにも冷徹で——恐ろしく感じた。

だからこそ、上条は知りたかった。霊夢が一体どのような人間なのかを——。

「そうねえ……一言で言い表すならば掴み所の無い人よ。いつも淡々としてて、他人に冷たいのには実はそうじゃなくて、けどやっぱり冷たい……こうして言葉に出すとよく分からぬ人ね、あの人」

思い返すと御坂自身も霊夢の事をよく知らない。木山やテレスティーナの一件、佐天や初春、白井もなんだかんだで信頼していることから決して悪い人間ではないのだろう。

しかし、あの鉄橋での無関心な眼。そして敵対する者に向ける無慈悲さと冷酷さ。——彼女の事を好敵手と認識しておきながら実のところ何にも知らず、だからこそ誤解して敵対してしまった。

「それに自由気まままで着飾らず、自分の考えを絶対に曲げずに押し通る……そして、そんな在り方を貫けるだけの“力”を持つてる」

「ちから、か……」

「ええ。圧倒的な力。私が手も足も出ない程の……絶対的な——」

もしも自分にその力があれば、一方通行を倒して、もつと早く実験を……否、そもそもあのような悲劇は、起きることはなかったのではないか。

脳裏に過るのは、あの幻想的な美しさ。

「——つてあんたが訊きたいのはそういうことじゃないわよね。えつと、そうだ、私がある人と初めて会ったのは……」

まず出会いから説明しようと、御坂が口を開いたその時であった。

「——お姉様？」

声が入る。常盤台では聞き慣れ過ぎた呼び方。またかと二人は視線を向け、眼を見開く。

「あ、あんた……」

「えっ!? み、御坂二号ツ!?」

「二号ではなく妹です。と、ミサカは間髪入れずに答えました」

ゴーグルを着けた、御坂と同じ顔をした少女がそこに立っていた。

そして、御坂は思い知る。

実験は終わってなどいない。自分のやってきたことが、すべて無駄であったというこ

とを――。

多角ス・パイ

上条らと別れた後、霊夢は何処へ向かう訳でもなくブラブラと歩きながら考えていた。

絶対能力進化計画——あのイカれた実験を如何にして潰すべきなのかを。

宇佐見の言っていた通り、御坂は先日の関連施設襲撃で本当に全てが終わったと思っ込んでいる。少し考えれば学園都市上層部が関わっている実験がその程度で止まるはずがないと解るはずだが、恐らく重度の疲労や睡眠不足で神経を磨り減らし、正常な思考が出来ていないのだと思われた。

それについては霊夢は都合が良かった。あのまま突っ走ればいずれ破滅していたであろうし、足手纏いとまでは言えないが、彼女の存在は枷になると思っていたから。

確かに御坂は強い。第三位の超能力者という肩書きは伊達ではなく、学園都市において指折りの強者だ。

しかし、それでも第一位には遠く及ばず、彼女もそれが分かっているからこそ、真つ向から挑まず施設襲撃という妨害を選んだ。

つまり居たところで何が出来る訳でも無し。ならば霊夢は単独で今回の一件に臨み
たかった。宇佐見に關してはあくまで情報提供者に過ぎない。

「けれど……どうしたものかしら。アクセラをゴコつたところで、実験が止まる訳では
ないでしょうし」

一方通行と戦う。それは考え得る限り最悪の事態であるが、同時に最も手っ取り早い
手段でもあった。

勝つ自信も勿論ある。が、たとえ一方通行を倒したところで上層部は構わず実験を強
行するかもしれない。何せ絶対能力者を生み出すというのは、学園都市にとっては何よ
りも優先すべき悲願そのものなのだから。

四肢を折つたところで、クローンなど彼は指一本も使わずに葬るだろう。ならば再起
不能にまで追い込むか、それとも抹殺——は、流石にそこまでするのは憚られた。

白井への義理として今回動いた霊夢であるが、かといって一方通行とも知らぬ仲では
なく、少なくとも嫌いな人間ではなかった。

「——本当に、面倒臭い」

何故よりもよって一方通行なのか。何故よりもよって御坂美琴のクローンなの
か。知らぬところで勝手にやってくれていれば良いのに、それが運命の巡り合わせで何
も知らず、ただ御坂を心配した白井に頼まれたことで霊夢が関わる羽目になった。

見て見ぬフリは出来ぬ。クローンとはいえ人の命が使い潰されている。ならばどちらにせよ、動くしかあるまい。そのような己の性分にうんざりしながら霊夢は溜め息を吐く。

「ねえ……あんたはどう思う?」

薄暗い路地裏。その更に奥の闇の中へと霊夢は唐突に問い掛ける。

「——元春」

「……いつから気付いていた?」

「それはどっち? コソコソと付け回していたことか、それともあんたが魔術師だって
ハコ?」

「……………」

姿を現したのは、髪を金髪に染め、地肌に直接アロハシャツを着用したサングラスの男。

——土御門元春。

霊夢と上条のクラスメイトであるが、その顔に普段のおちやらけた軽薄そうな雰囲気は微塵も感じられない。

「……両方だ」

「前者については最初から。後者についてはちよくちよく探るような眼をしてたから何

となく。それに土御門つて安倍清明の血統でしょ？　もしかしたらなくとは思ってたわ」

あつげらかんと言う霊夢に土御門は渋い顔をする。彼としては気取らせるような素振りは一切見せてないつもりだったのだが、多角スパイと呼ばれる程にまで培ってきた演技力も、目の前の少女の目を誤魔化すには至らなかつたようだ。

「……参つたにやー。博麗つち相手だと必死で演じていたのが馬鹿馬鹿しくなるぜい」
「あ、口調戻つた。そつちのふざけた喋り方の方が好きよ、私は」

「そりやどうも。なら、俺がイギリス清教ネセザリウス必要悪の教会所属つてのも知られちまつてたり？」

「え？　それは初耳だけど……ああ、成程。火織が言っていた現地の協力者つて、あんたのことだったの」

「そういうことですか」

物々しい雰囲気から一転。いつものふざけた口調で土御門は自らの正体を明かす。

これに霊夢は別段驚くことも気にすることもなく、逆に納得する。魔術絡みだとして今日まで接触して来なかつたのは必要悪の教会経由で情報を入力していたからだろう。

「ねーち……神裂火織との戦闘、禁書目録の『首輪』の解除、三沢塾での錬金術師事件……どいつもこいつも聞いた時は肝を冷やしたぜい。特に神裂と博麗つちがおっ始め

るなんて、想定すらしていなかったからにやー」

「あつそ。で、今頃になってわざわざ接触してきた理由は何？」

また魔術絡みの案件でも持ち込んできたのかと、霊夢は面倒臭そうに顔をしかめながら問う。そんな思考を読み取ったのか土御門は肩を竦め、首を横に振った。

「今回は魔術サイドではなく、科学サイドの人間として博麗つちに接触を図ったんだにやー」

「ふうん……そつちにも内通しているんだ。ま、能力開発つてのを受けてるのだから当然か」

そういう人間が居るとは予想していた。というか、居ない方が不自然である。

「——今すぐに絶対能力進化計画から手を引け。さもないと統括理事会、いやこの街全てを敵に回すことになるぞ」

「……あん？」

再び口調に遊びが無くなる。語気を強めて言い放たれたその内容に霊夢は眉をひそめ、そして脅しとしてはあまりにも無意味なそれを鼻で笑う。

「は。何を言い出すかと思えば……」

「それに、イギリス清教としてもお前と第一位が衝突するのは避けたい案件だ。何せ奴が相手ならば十中八九魔術を使用するだろう？」

「そりゃあね。私はあんたらと違つて秘密主義でも何でもないし、必要ならば好きに使うわよ」

これまでは面倒事を避ける為になるべく魔術の類いは使わないようにしていたが、相手が一方通行であれば話は別。ある程度は本気を出さないと勝負にすらならない。

「それにより科学と魔術の摩擦が起こつてしまい、最悪戦争に発展するかもしれない。ならばこれを回避しようとするのは当然の帰結。お前だつて、そんな事態になるのは望んでいないはずだ」

「あー、成程。一理あるけど……知つたことじゃあないわね」

ばつさりと言夢はその主張を切り捨てる。ピクリ、と土御門の片眉が動く。

「私が気を遣つてやる道理がどこにあんのよ。そこら辺はあんたらがどうにかしなさい。得意なんでしょ？　そういう根回し」

「……だからこうして根回ししている訳なんだが」

「あら、じゃあ不得意だったのねごめんさい。本気で私を止めたいのなら力づくしか無い訳だけど、今から殺り合う？」

「……………」

相変わらずの傍若無人っぷり。冗談めかした言い方であるが、彼女がその気になれば土御門はあつという間にボロ雑巾にされるだろう。

それは能力開発を受ける前。陰陽博士として最高位であった頃だとしても変わりはない。自分達が念入りな下準備を行って漸く実現可能な大魔術をたつた一枚の札のみで行使し、あまつさえそれを連発する程の膨大な魔力量を有する怪物。

以前に土御門はそれを目撃したが、己が操る術と同じとは到底思えなかつた。実際、パツと見ただけでも陰陽術だけではなく、卜部の業や東洋の巫術シャーマニズムが織り混ぜられた闇鍋状態であり、もはや独自の体系と言つても過言ではない。

彼女の前では土御門を含めた現存する全ての陰陽師が等しく塵芥。全盛の平安にすらあのような馬鹿げた陰陽師が居るかと言われれば怪しいだろう。そもそも陰陽師とは遠く離れた見えない所からコソコソ式神を打ち、自身の周りに陣を張つて姿を隠す。平安にて陰陽が恐れられたのはその力の強さではなく、卑劣で陰湿な「禁忌うらぎり」である。

対する霊夢の扱うそれは圧倒的で純粹なる暴力そのもの。ただただ相手を真つ向から叩き潰すのに特化した術だつた。土御門が自負する陰陽道からしてみれば邪道であつたが、同時に陰陽博士たる己を唸らせる程の精度と緻密さを兼ね備えた術式の数々……そこには幾重もの改良や創意工夫を垣間見ることが出来た。

そうまでして何と戦うつもりなのか。それについて土御門はある予想をし、しかし馬鹿馬鹿しいと思い、考えないようにした。

かつて、平安の陰陽師の一部はかの安倍晴明を筆頭に、その陰湿さに似合わぬ強大な

力を有していた。それは人間相手ではなく、より恐ろしい伝説上の怪異に対抗する為であつたという。

結論から言えば、そんなもの存在しなかつた訳だが、彼女の扱う術は正しく卑怯さも狡猾さも全く通じないような理外のナニカを倒す為に編み出されたかのような――。

「あ、因みにあつたりする？ アクセラと戦わずして実験を止める方法って」

一方、そんな土御門の心境など知るはずもない霊夢は思い付いたように尋ねる。

「……俺が教えるっても？」

「あんたの危惧する摩擦とやらを防げる穏便な提案をしたつもりなんだけど？ 私としてもあいつとガチンコ勝負するのは普通に嫌なのよ」

実に傲慢な物言いであるが、どうやら彼女は譲歩してやっているつもりらしい。

確かに統括理事長の意向に叛くことになるものなので霊夢が満足し、最小限の被害になるのであればそちらの方が良いだろう。

実のところ彼女をこれ以上説得出来る気はしなかつた。仮に上条や吹寄などの学友、友人の佐天を人質に脅せばそれこそ博麗霊夢という聖人クラスの化け物が学園都市で暴れ回る事態に陥ってしまう。

「……樹形図ツリーダイアグラムの設計者、というのに聞き覚えは？」

「いえ、無いわね」

「別名超高度並列演算処理器^{アブソリュートシミュレータ}。学園都市が誇る世界最高のスーパーコンピュータで、表向きは完全な天気予報を行うために作られた代物になってるが、主目的は学園都市における様々な研究の予測演算だ。例の実験にも当然使われている」

「ふうん……ハイテクねえ」

で、そのなんか凄いらしいコンピュータがどうかしたのかと霊夢は続きを促す。

「つまり実験はそのスパコンに依存している。そいつをハッキングするか破壊すれば……計画自体が破綻するかもしれない」

「へえ……成程ね。で、そいつはどこに？」

そう尋ねれば、土御門は上を指差す。

「その性能故、様々な組織に狙われているからな。安全確保のため人工衛星“おりひめ1号”に搭載されている。つまり宇宙にあるということだ」

「宇宙うく？ そりやまた面倒なこと……」

然れど、不可能ではない。以前に成層圏到達ギリギリまで飛んだことがあるが、そこからは息が苦しくて断念した。きちんとした対策をした上で臨めばもつと高く飛べるだろうし、場所さえ分かっていたらば広範囲に弾幕を張って撃ち落とせるかもしれない。

「——それに、この案には重大な問題がある。肝心の“おりひめ1号”がつい先日から行方不明なんだ」

「……………あ？」

そこで土御門が思わぬことを口にする。

「丁度お前達が自動書記ヨハネのペンと戦闘をしている時間帯だ。突然おりひめ1号の反応がロストし、樹形図の設計者も行方知れずになったらしい。他国や外部組織に盗まれたんじゃないかって裏では大騒ぎになっている」

ドラゴンブレス 竜王の殺息で破壊されたのではとも考えたが、ならば残骸が残っているはずであるし、そもそもおりひめ1号と自動書記の居た座標が食い違っており、恐らく違うと思われる。

「ふざけないですよ。じゃあ意味無いじゃない。そのナントカつてのが無くなったって実験は普通に続いているんだし」

「ああ。何が言いたいかって言うと、そんな俺が思い付く限り唯一残された手段も失われたってことだ」

「……………あつそ。期待して損した」

呆れた様子の霊夢。どうやら一方通行を戦うことはほぼ確定のようだ。

「ただ希望が無い訳ではない。言つたらう？ あの計画は樹形図の設計者に依存しており、内容も予測された演算結果に基づいている。実験が尚も続いているのは記録が残っているのを参考にしていただけに過ぎない」

「……成程ね。つまり人力では修正出来ない程の想定外の事態に陥れば、続けるのが困難になるってこと」

それは良いことを聞いた。一方通行を倒したところで実験が続行する懸念があったが、そうとなればただイレギュラーな行為で引つ掻き回すだけで実験が中止される可能性も出てきたという訳だ。

「有益な情報ありがと。元春」

「礼には及ばん。俺としては、最悪な展開に至らないという確証が無いからやめてもらいたいんだが……何故そうまでしてあの実験に拘る？ 知ったところでクローンの虐殺など、お前には何ら関係の無い事象だというのに」

クラスメイトという身近な立場から博麗霊夢という人間を監視・分析してきたが、一向にその思考や行動を読み取れないでいた。

矛盾しているのだ。面倒事を嫌うくせに、面倒事に関わることを躊躇わない。他人に無関心なくせに、他人を助けようとする。

では上条当麻のようにヒーロー気質なのかと言われれば、それもまた違う。彼女の中には基準となる善悪や賢愚の他に、ある種の線引きがあるように感じられた。

「確かにそうね……けれど、いつも小うるさい後輩が珍しく頭下げてきたんですもの。請け負ってやるのが人情ってモンじゃない？」

実際、白井が頼み込まなければたとえ一方通行が御坂のクローンを虐殺しているなどと聞いても動くこととは思わなかっただろう。

二万の命を虐殺すると聞けば胸糞悪い話である。だが、そのクローンというのは謂わばただ殺される為に生み出された存在。宇佐見曰くクローンを人間として扱うかはそもそも製造が違法なため議論が必要らしいが、霊夢は人権など興味は無く、ただ生物学上、そして個人の在り方として人間かどうかというのを重要視する。

霊夢はまだ死体以外の妹達と言葉を交わしたことは無く、その辺はまだ判断しかねた。然りとて、数え切れない程の置き去りチャイルドエラーや何も知らぬ子供の人生を踏みにじり、消耗品の如く犠牲にしてきた他のおぞましい実験よりはずっとマシに思えた。

故にこそ、一方通行自身が承知の上でやっているのなら自分の知らぬところでどうぞご勝手にと、霊夢は手を引いていたに違いない。

そうはならなかったのは、上述したように白井の頼みを達成するには御坂の実験を止めるという目的に協力する必要があるから。

つまり単に巡り合わせが良かっただけ。

「……………」

これに対して土御門は言葉が出ない。動機というにはあまりにも小さく、単純。しかし、そこに嘘は無く、本気でそう言っているのだと理解出来る。

たったそれだけの理由で、学園都市を敵に回せるというのか。彼女にとつてそれは面倒であるものの後輩に頼まれたのであれば渋々やってやろうかと思えてしまう程度の、些末事なのだろう。

己が納得出来るだけの確かな理由さえあれば、博麗霊夢という人間は微塵の躊躇も無くやってのける。何よりも厄介なのが、それを成せるだけの力を有していること。だからこそ、まるで天災の如き危険人物なのだ。

「あ、そうだ二元春」

唐突に霊夢が名を呼ぶ。

「………何だ」

「インデックスの食費とか生活費諸々、しつかり当麻に送つときなさいよ」

「………ああ、分かった」

むしろ送つていなかったのか……と土御門は脳筋思考な同僚二人に呆れながらも頷く。

「それじゃ、そういう訳だから。あんたには悪いけど、私は勝手にやらせてもらうわよ。

隠蔽と後始末はよろしくー」

軽く手を振りながらそう言い、霊夢は背を向けて歩き出す。

F a i l e r e s s 2 5

“背中刺す刃”を魔法名

に掲げる者に対してあまりにも不用心であるが、彼女においては例外であり、そこに微

塵の隙も存在しない。

これに土御門は思わず溜め息を吐いてしまう。何を言おうと、きつとこの女は止まらないのだろうなど。

「頼むから、出来る限り穏便に済ましてくれよ？ さもないと、俺は刺し違えてでもお前を止めなくちやならない」

その言葉に対する返答は無く、霊夢は姿を消す。残された土御門は未だに険しい表情を浮かべていた。

リスクも承知の上で接触した訳だが、多少はマシなルートに誘導出来たのだろうか。統括理事長は「博麗霊夢を絶対に関わらせるな」と命令を出したが、イギリス清教としてはそれを強行して霊夢と敵対してしまえば本末転倒。

故にこそ、土御門は安牌を取った。事を荒立てぬよう根回しするのは骨が折れるだろうが……。

「しかし……俺が止めなくとも、『アレイスター』の奴がどう動くかな」

その呟きは、闇の中へと消えた。

（意外と話が分かる奴で良かったわ。これで拗れて、ぶつ飛ばしてはい終わりです済むよ
うな相手ではないし……）

力こそこちらが上であるが、全く油断ならぬ相手。そんな印象を抱かせた土御門。し

かし、彼は実に有益な情報をもたらした。

ならば話は早い。実験に介入し、何もかも滅茶苦茶にすれば良いだけのこと。思い立ったが吉日とばかりに霊夢は動き始める。

(まずはどこで実験が行われるかだけ……董子の奴に訊けば良いか。さつさと片を付けてみましょう)

この前装備を補充しておいて良かった。あの辻斬りと亡霊との戦闘でかなり消耗してしまつたが、まだまだ余裕があり、一方通行と闘うには充分な量である。

早くて今夜中に終わらせる、と霊夢は息巻く。あまりゆつくりしていればその間にもクローンは殺されるし、御坂が実験が終わっていないことに気付くかもしれないのだから。

一先ずは今日行われる実験のスケジュールを特定させようと、霊夢は宇佐見に連絡する為に携帯を取り出す。

「……それは困る」

「!!」

その時だった。

背後から、声がある。くぐもつた、とてもではないが言語とは認識出来ぬはずの、そもそも生物の鳴き声であるとも理解不能な雑音。

然れど、それは確かに、意味ある言葉として脳に直接訴えかけられるように、無理矢無理解させられた——。

(ツ、何なの、こいつ——)

霊夢は振り返る、と共に全力で飛び退く。いつの間にか、一切気取られること無く真後ろに立っていたナニカから、少しでも距離を取る為に。

見ずとも分かる、気付かぬ訳がないはずの、しかしその瞬間まで悟ることの出来なかつた圧倒的な存在感。寒気がする程の得体の知れぬ雰囲気。己が誇る研ぎ澄まされた第六感が全力で警告する。

——こいつはヤバい、と。

そして、この異様なまでの危機感二度目。脳裏に過るのは、隻眼の少女の姿だった。

「——」
即座に結界を展開。完璧なまでの防御姿勢を取り、いつでも迎撃可能なように相手の一挙手一投足を見逃さない。

そうして視界に捉えたソレの姿に、眼を大きく見開いた。

「……………*γπ#イ、dπ……………」

ソレが動くことはなかった。

ソレが何かすることはなかった。

ただソレはたった一言。電池切れ寸前の壊れかけの玩具のように、電波の悪い古いラジオから発せられる音声のように、理解不能な、意味があるのかさえも怪しい途切れ途切れの声をソツと発した。

しかし、それに対する霊夢の反応は無。迎撃することも、声をかけることも、疑問に思うことすらなく。

その一言を最後に、空間は静寂に包まれる。

「……………」

かつん、かつん、と靴が鳴る音が響く。それはだんだんと遠ざかっていく。初めから、何事も無かったかのように。

違和感

御坂美琴は絶望していた。

あの後、まだ実験は終わってなどおらず、自分のやってきたことが何もかも無為であつたことを知つた。

だからこそ、今度は実験の根幹を担うコンピュータ——ツリーダイアグラム樹形図の設計者へのハツキングを試みた。

藁にも縋る思いで、たとえ暗部に堕ちるとしても、友達と永遠の別れになるとしても、己の人生を捨てることになつても構わないと覚悟を決め、衛星からの情報を受信する施設へと乗り込んだ。

——けれど、それすらも無意味だつた。

樹形図の設計者は既に存在していない。施設はとつくの昔に放棄され、一日に来る数百件もの申請は処理されずに放置されていた。

つまり計画を引っくり返す、最後の手段がなくなつてしまつたという事実。それに加えて、樹形図の設計者が無くなつても、実験は計画通りに続いている——。

「ああ……」

どうしようもない現実^ニに打ちのめされる御坂に、追い打ちをかけるように眼前のモニター画面に映る、赤黒く染まった茶色い毛髪。

死んでいく。

また死んでいく。

今この瞬間にも、殺され続けている。残酷に、ゴミのように。

自分のせいで――。

「どうすれば、いいのよ……」

考える、考える。

否、本当は分かっているはずだ。唯一残された手段。それは何よりも単純で手っ取り早く、そして御坂には到底不可能なこと。

一方通行アクセラレータの打倒に他ならない。

そして、御坂はある可能性に思い至っていた。自分では一方通行には勝てないが、他の人物はどうだろうか。

脳裏に過るのは圧倒的な強さを見せ、自分すらも打ち負かした紅白の巫女。きつと、自分が頼み込めば必ず応じてくれるだろう。現に研究所の襲撃の際には助けに来てくれたのだから。

彼女ならば、もしかすると――。

(でも、もし駄目だったら?)

相手は学園都市最強。ベクトル操作というあまりにも理不尽で絶対的な能力。突破する手段など思い付くはずがなく、いくら彼女が強くても勝てるイメージなど湧かなかった。

死んでしまうかもしれない。あの妹達みたいに、ゴミのように。それなのに、自分の都合で巻き込むことなど出来るはずがなかった。

もう、打つ手は無いのだ。

(ああ……私は……何でも無力なんだろう)

あまりにも無様なその有り様に、御坂は嗚咽と共に膝をつく。

「……………ふうん」

そんな憐れな少女の姿を見て、力無き弱者の嘆きを聞いて、
“魔法と紅夢からなる存在”は酷くつまらなさそうにしていた。

そこに秘める感情は、果たして――。

「お、このキャベツお得ね」

近所のスーパー。冷房の効いた野菜コーナーにて霊夢は買い物カゴを片手にここ数日の食事の材料となる品物達を吟味していた。

服装はいつしか見せたパーカーにホットパンツ。以前は普通に巫女装束で来店していたため大きく注目を集めていたが、現在はそのようなことはなく、また顔見知りの店

員や主婦からはむしろ普通の格好をしていることに酷く驚かれ、その成長・進歩に感動すらされている。

(しかし……何でかしら。昨日何してたか全然思い出せない)

どうにも曖昧な記憶。違和感自体は朝起床した時からあった。

こうして食材を調達する中でも何気無く昨日の事を思い出そうとするが、呼び起こされる光景はあまりにも不鮮明で歯抜けなもの。

(あー、昨晩飲み過ぎた？ それとも暑さで頭やられた？)

覚えていないということは所詮その程度のことなのかもしれないが、元より物事を忘れる感覚が嫌いなこともあって、霊夢は喉元に小骨が引つ掛かっているような、言い知れぬ不快感に苛まれていた。

それに、そもそも忘れてるのが重要なことではないなど、思い出さねば証明出来ぬのだから。

「あれ？ 霊夢さん？」

すると隣から声をかけられる。振り向くとそこには黒髪セミロングの少女が自分と同じように買い物カゴを持ってこちらを見ていた。

「涙子じゃない。奇遇ね」

「そうですね。霊夢さんもこのスーパー使っているんですね」

「ええ。たまに」

意外そうにする佐天。霊夢の方もまさか同じスーパーを使っていたとは思わなかった。

彼女も案外近くに住んでいるのだろうか。

「霊夢さんも自炊するんですねー。しかも殆ど割引商品を……」

時刻は夕方。丁度惣菜等がセールになる時間帯であり、それを見越して佐天はスーパーに來た訳だが、どうやら霊夢も同じ理由なようだ。

何というか、庶民的である。

「そりゃ節約しといて損は無いからね。ま、流石に当麻みたいにもやしぽつか買うのは御免だけ」

「当麻? ……あ、上条さんでしたっけ? あのインテックスさんと一緒に住んでるって言う」

「そ。凄い貧乏なのよあいつ」

「へー。大変ですね……私もレベル0なんで気持ちは分かります。いっつも金欠ですから」

下の名前で呼んでいるんだ……と一瞬思っても霊夢は恐らく誰に対してもこんな感じであるし、他意は無いのだろう。

「……にしても、そう言うあなたは随分と買い込んでいるのね？」

「ちらり、と買い物カゴの中身へと視線を向ける霊夢。そこには一人暮らしの女子中学生が買い込むにはあまりにも多くの食材が敷き詰められていた。

「あ、ええまあ……買溜めしてるのと、今度友達が泊まりに来るんでその時用ですね」

「ふうん……確かに備えあれば憂いなしとは言うけど、暑いし腐らせないようにね。急に停電して冷蔵庫の中身がパー、なんてことあったしこの前」

「勿論、気を付けますよ」

「そう言つて笑いつつも、内心ドキリとする佐天。実際には自宅で匿っている妖夢の分も含まれているから買う量がこんなにも多かつた。

しかし、まさかあの会話の通じなさそうな辻斬りが佐天に匿われているなどとは夢にも思っていない霊夢は疑問には思うも特に気にすることはなかつた。

「そういうえば聞きました？　ここ最近あちこちの製薬会社や研究機関が襲撃されているって話」

「襲撃？」

「はい。ニュースでもやってました。何でもき、筋ジスト……ナンタラっていう病気関連の所ばかりが襲われているとか」

「……へー」

初耳である。何ともまあ物騒な話だが、ここ学園都市では然して珍しくもない事件であり、大した反応は示さない。

「白井さんから何か聞いてたりしません？」

「別に。というか、私はもうジャツジメントじゃないんだからそういう話は入って来ないし、興味も無いわよ」

「ですよねえ……すみません。少し気になっちゃって」

白井という名を聞き、そういえば昨日彼女がやけに慌てふためいていたことを思い出す。結局、あれは謎のままだ。

しかし、何だろうか。もっと前にも会い、話したような気もする。

「……………」

「?」 どうかしめました?」

「……………いえ、何でもないわ」

——何かが、おかしい。

そんな確かな違和感を感じながらも一先ず頭の片隅に置いておく。いくら記憶を漁ろうとも、霊夢はその正体について分かる気がしなかった。

「それじゃあ、また今度一緒に遊びましょうね!」

「またね。夜道には気を付けなさいよ」

買い物を終え、スーパーの前で別れる二人。霊夢はレジ袋片手に帰路に就く。

霊夢は気が付かない。先程から言い知れぬ気持ちの悪さを抱えているにも拘わらず、それを躍起になって解決しようとせず、ある意味ではその違和感や不自然さを受け入れてしまっているという、あまりにもらしくない自らの行動に。

そうして、何の変哲の無い一日が終わった。

(……おかしい)

翌日、特にトラブルも無く平穏な一日が過ぎた。風紀委員と魔術師絡みで板挟みになつていた彼女にとっては久々であり、充実していた。

そのはずだというのに、違和感は相も変わらず残っており、まるで胸に凝りがあるような不快感が続く。

やはり、おかしい。

ここまで来れば如何に鈍臭くても異常な事態に陥っているのは明白。それは分かっている、分かっているのだが……。

「——おかしい」

「何がおかしいんですか?」

場所は変わり、いつものファミレス。

テーブル席には神妙な面持ちで頬杖をつく霊夢と向かい合う佐天と初春の三人が居

た。

佐天の誘いを受けて集まった彼女達だが、霊夢は珍しく出された食事にも殆ど手を付けず心ここに在らずといった様子だった。

「……何でもないわ。ただ最近どうも調子が悪くてね」

「えっ!? 博麗さん、どこか悪いんですかっ!?」

大袈裟に驚く初春。怪我や病気とは無縁としか思えない目の前の超人美少女が不調を訴えるなど余程のことだと思つたからだ。

「別に体がどうつてんじゃあないわよ。ただ違和感というか何というか……とにかく妙な感覚で参つてるわ」

上手く言語化出来ないその感覚に辟易する霊夢。いつもと違い、露骨に機嫌が悪そうなその様子に二人は心配する。

「大丈夫ですか? もしかして今日は誘わない方が良かったですかね?」

「平気よ。むしろ気晴らしになると思つてただけど……」

緑茶を啜る。多少気は紛らわすことは出来たが、それでもふとした拍子にムカムカした状態に陥り、苛立ちすら覚えた。

かといって、原因も分からぬ霊夢ではどうすることも出来ない。

「心当たりはないんですか?」

「無いわね、特に」

「えー」

色々の原因を考察する佐天らだが、本人に心当たりが無いとはつきりと言われてしまえばお手上げである。

この時点で霊夢はここ数日の記憶が曖昧なことなどすっかり頭から抜け落ち、ただただ違和感のみが残っており、そして彼女はこれに気付くことはない。

「ま、気にしないでちょうだい。ちよつと神経質になつてるだけでしようし」

「そうですか……でも何かあったらいつでも相談してくださいね！ 出来る限り力になりますから！」

「わ、私も！ 任せてください！」

「……ありがと。助かるわ」

以前のように頭の片隅に追いやる。これ以上、解決も出来やせぬことに悩ませ続け、貴重な時間を無駄にしても仕方あるまい。

今回もまた、霊夢はそのような己のらしくなさをさも当然のように受け入れてしま

う。
「あ、そうだ。ジャツジメントの方はどうなの？ 飾利」

「え？ そうですね……少し前までは謎の研究所襲撃事件で忙しかったですけど、最近

は落ち着いてきてます。私も今日は非番ですし……」

話題を変えようと霊夢が問えば、初春はそう答える。件の襲撃騒ぎも基本的に警備員の担当だったので風紀委員は別段大きな仕事はしなかった。

「ふうん……襲撃つてのは、一昨日に涙子が言つてた奴ね。そんなに酷かったの？」

「はい。それはもう……最後に起きた事件なんて、建物ごと崩壊してますから。詳細は良く知りませんけど」

「というか初春。今日はサボりじゃあないんだ。なら、前みたいに白井さんが乗り込んでは来なさそうね」

「ちよっ!? あの時のことをほじくり返さないでくださいよもう! ……あ、白井さんと言えば今回誘つたんですけどなんか様子がおかしかったですね」

「……あの白黒が?」

ふと初春は思い出す。今回は非番でやましい理由など無いので当然白井も誘つていだが、ここに来てないということとはつまり断られたということだ。

「最初は御坂さんが元気になったこともあって乗り気だったんですけど博麗さんも来るって聞いた途端に合わせる顔がー、とか言い出して挙動不審になって……まあ、御坂さん絡みだと大体挙動不審ですけどあの人は」

そのままそくさと逃げ去ったので問い詰めることは出来なかった。霊夢関連で何

かあったのは間違いないが、あんな態度を取るのは初めてのパターンであった。

「えー？ 霊夢さんったら、知らない所でまた喧嘩でもしたんですか？」

「してないわよ。けどそうね……それに関しては心当たりはあるかも。前に会った時に顔を合わせるなり慌てふためいて逃げてったからね。理由は分かんないけど」

「ええ……」

一体どうしてそんなことになったのかと困惑する佐天。あの白井が霊夢を相手に嘯み付くことはあれど、逃げ去るなど考えられなかった。

「あ、そうだ。確かあいつ、美琴に抱き着いてたわ。オネエサマーって」

「あつ……」

「美琴相手にはあんな感じなのね、あいつ」

しかし、何気無しに呟かれた言葉に初春はすぐに理由を察してしまふ。

一方で佐天の方は白井が自分達に対して普段の痴態や奇行を隠そうともしていないので、いまいちピンと来ていなかった。

（あの人にもちゃんと「恥じらい」があったんですね……）

意外に思うも、相手が霊夢ならば納得である。いつも敵視して事あるごとに嘯み付いているが、何だかんだで白井は霊夢をリスペクトしており、そんな相手に対しては見栄を張りたいし、羞恥心を覚えるのが普通だ。

対する霊夢はこれに気付いている素振りはない。彼女からすれば白井が抱く感情など知る由も無いし、そもそも自分に向けられる感情に微塵も興味が無いのだろう。

「にしても……ええ、そうだった、美琴にも会ってたんだわ私。それに当麻とも」
「？」

曖昧な記憶が僅かに引き出され、今頃になって思い出す。同時に、今の今までそれを自覚すらしていなかった己の異常さに気付く。

まさか、意図的に記憶を操作されている？ 十分に考え得るその可能性を脳が本能的に否定していること自体が、その証明ではなからうか。

一昨日か、或いはそれ以前か。己の身に何かがあったのは明らかだった。

「……専門家に訊いてみるのが一番ね」

「はい？」

「悪いわね涙子、飾利。ちよつと用事が出来たから今日はもうお開きにしましょう」

「え？ ちよ、霊夢さん——」

自分が頼んだ分の代金をテーブルに置き、霊夢は思い立ったが吉日とばかりに席を立つ。
つ。

そして、そんな突然の行動に戸惑う二人に背を向けて足早に店から出ていく。

「……ふむ、流石と言うべきだろうか」

“窓の無いビル”にて。ピーカーの中で逆さまに浮いている男、アレイスターはその

姿を観測しながら感心した様子で呟く。

「あれも末恐ろしいな。心理掌握メンタルアウトとは原理も次元も違う、因果の逆転による改変。本来ならば何も感じることも無く、忘却……否、無かったことになるはずだというのに……」

しかし、言ってしまうえばそれだけ。不審に思っただけでも無意識に正解に辿り着くのを避けている。漸く動き出したところで具体的な解決策の無い現状では事態を把握するのにまだまだ時間が掛かるだろう。

今頃、土御門元春や宇佐見童子が困惑している顔が目には浮かぶ。かといつて彼らがその疑問を問うことはない。

何故なら彼らにとつても博麗霊夢が実験に関わらないというのは都合が良く、また彼女に干渉した手合いが居るのだとすれば、それを敵に回すメリットなど無いのだから。

「協力感謝する。これ以上、あの実験に博麗霊夢が介入するのは避けたかった」
「……………」

相対する「彼女」は何も答えず、ただただ沈黙していた。これにアレイスターは特に気にすることもなく、言葉を続ける。

「疑問に思うのは当然だな。君達からしてみれば、絶対能力進化計画レベル6ソフトなど、あまりにも回りくどく、低レベルな児戯だろう。——こちらとしても、あれは元より失敗することが前提な、謂わば「隠れ蓑」に過ぎない」

絶対能力者の誕生は、学園都市の総意にして悲願であるはず。しかしその実情は、アレイスターが「プラン」の為に利用した隠れ蓑であり、量産型能力者計画の取り潰しから、この実験が失敗することまで既に織り込み済みだった。

その説明を聞き、然りとて「彼女」の疑問は解決しない。失敗して構わないのなら、何故不確定要素で危険視しているはずの己を使つてまで実験への介入を阻んだというのか。

「単純な話だ。オリジナルの心中か、はたまたどこかの正義の味方によつて実験が破綻するのは構わないが、『博麗霊夢が一方通行と衝突すること』……これによつて起こり得る不確定要素だけは、何よりも排除しなければならぬ」

予測するようにアレイスターは語る。表情どころか姿形も認識出来ないのだから本当に単なる予想であり、また喋ることもないので当たっているかどうかすら分からないが。

「……………」

合点が行つた。

その弁が果たして真実であるか、それとも実験を破綻させる存在について巫女ではなく、別の人物であつてほしいのが本音か……どうであれ、随分とあの巫女の事を警戒しているようだ。

ならばさつきと始末してくれば、「彼女」としても助かるのだが。それによるしつぺ返しが如何に痛いか、理解しているのだろう。

実に用心深く、慎重な男である。

「……………」

興味が失せたのか「彼女」は踵を返す。この場から消え行くその後ろ姿を一瞥し、アレイスターは静かに目を閉じ、思考の海に沈む。

(すべてが終わるまで、日常を謳歌していれば良いものを……)

これで一安心、とは行かなかつた。何せ相手はあの博麗霊夢なのだ。常識からも常識からも浮いている少女を想定通りに動かすことなど到底不可能なのだから。

現に「彼女」の干渉を受けながら違和感を感じ、動き始めている。これは普通ならば有り得ないことであり、そしてかの巫女は普通ではない。

また不確定要素はそれだけではなく、「幻想殺し」の方が実験について知るのも時間の問題だろう。こちらに関しては何しろ望ましいことだったし、博麗霊夢に干渉したのはこの為とも言えよう。

実験は潰える。それは確定事項だ。

故にこそ、アレイスターが重要視するのはその過程。かといって目的はそれではないのだから、同時にどうでもいい事象でもあった。

どうであれ、彼の「プラン」は進む。如何なる障害があろうと、絶対に。
ただ、それが思惑通りであるかどうかは、また別の話であるが――。

闖入

餅は餅屋に。

自らの記憶に違和感を覚え、己が身に何か起きたかもしれないと思い、加えて自身の手では解決出来るようなことではないと理解し、ならばその手の専門家に頼るべきだと判断した。

心当たりのある人物は一人しか居ない。そういう訳で彼女は常盤台中学を訪れていた。

「ハア……アポ無しで凸られても困るんですけどお？」

そして、招かれたのはとある一角。常盤台に存在する一大派閥の一つが占領する区画だった。

その派閥のトップ、超能力者第五位の食蜂操析は連絡も無しにいきなり学びの園へ足を踏み込んだ霊夢を見据え、溜め息を溢す。

教師から紅白の巫女が自分に用があると言っていると報告された際には飲んでいた紅茶を危うく嘔き出しかけた。

「悪いわね、急ぎの用だったの」

対する霊夢はそう言いながら全く悪びれておらず、湯呑みに入った緑茶を啜る。因みに当初は紅茶が差し出されたが、普通に拒否して緑茶を要求した。流石にティーカップに緑茶はあれだと思い、配下の縦ロールの少女が慌てて茶道部から湯呑みを取り寄せた。

とてもではないが、急いでいる様子は見受けられない平常運転っぷり。こちらは盛夏祭で上条の記憶喪失について告げられた際の一件が未だに尾を引いてどんな顔をして会えば良いのやらと悩んでいたというのに……。

「うん、流石はオジヨウサマ。良い茶葉を使ってるじゃない。あなたもなかなか結構なお点前で」

「あ、ありがとうございます……」

「……それで、何の用かしらあ？ まさかまた上条さんの身に何かあったとかいう笑えない話じゃあないでしょうねえ？」

茶を淹れた縦ロールを誉める霊夢に自分も暇ではないのだとさっさと本題へ行くよう促す。

嫌味つたらしく言うも、内心ドキリとしていた。何せ最初は近場の喫茶店に移動しようとしていたのだが、その際にあまり聴かれたくない話だと言われ、この場所に移した

のだ。

食蜂の能力を使用すれば十分に秘匿出来るが、それでも用心を重ねたのだろう。つまりそれだけの話題であり、決してや相手が博麗霊夢なのだから多少なりとも緊張する。

「私、洗脳されてるかもしれないわ」

「ぶっ!?!」

そして、世間話でもするかなのような声質で発せられたその一言に、今度こそ紅茶を噴き出してしまおう。

「(っ)ほっ(っ)ほっ……は、はあっ!?!」

噎せながら目を剥く食蜂。聞き間違いかと思うも、その理由ならば彼女が自分の元へ訪れた理由にも合点が行く。

「(っ)最近の記憶がどうにも曖昧なの。妙な感覚があるし、頭の中を弄られてるかも」

「い、弄られてるって……あなたが？ 確かなの？」

「確証は無い。本当に何となく、よ」

平然とそう言う霊夢だが、食蜂は縦ロールが慌てて取り出したハンカチを受け取って口元を拭いながら、信じられないといった様子で彼女を見る。

まさか自分のことを疑っているのか？ 否、それならばもつきつい物言いをするし、疑った時点で問答無用で叩きのめそうとしてくるだろう。

「何となくって……」

「あんたから見て何か分かることはない？　こういう系の能力のトップなんでしょ？」
「そう言われても……流石の私でも見ただけで分かるようなものではないわよ？　それに、私の洗脳力でも抵抗してみせるあなたを洗脳しちゃう手合いが居るなんて、普通に信じられないんだけどお？」

一度、食蜂は霊夢に能力を使用したことがある。その際に起きた惨事は思い出したくもないが、能力自体は確かに効果はあった。

しかし、彼女はすぐに自身が何かされたということに気づき、食蜂に忠実になるように記憶を操作したにも拘わらず抵抗してきた。ならばと意識を停止させて無力化しようとするれば本能のみで殴り掛かってくる。

電磁バリアで干渉を防いでいる御坂やそもそも効かない上条とは違い、なまじ効いているのだから化け物染みているように感じられた。実は人間ではなく、霊長類によく似た別の生命体と言われた方がまだ納得出来る。

以上の事から、そんな規格外な精神耐性を誇る霊夢を洗脳、しかも確証が無いと言わしめるまでの精度で干渉するということはつまり学園都市において最高峰の精神操作系能力者である己を遥かに上回る能力だということである。

疑わしく思うのも当然だった。

「……言っておくけど、私は弱い方よ。そういうの」

すると霊夢はまた信じられぬ事を口にした。

「巫女つてのは本来、自らの身に神霊や精霊を宿す……所謂トランス状態になって神託を下したり祭事を行ったりするの。故にこそ、その身は良くも悪くも憑依されやすいようになつていて、それ故に精神の干渉を受けやすい。だからぶつちやけ苦手なのよね、あんたの事も」

「そんなスピリチュアルなこと言われても困るわあ……」

完全に科学側の人間である食蜂からすれば霊夢の語る巫女の特性とやらなど何の根拠にもならない妄言だ。

しかし、薄々は理解している。霊夢の扱う力には己にとって常識となつている科学では説明が付かない何かがあることは。

「そうね……見て分からないのなら、直接頭の中に入つてみるのはどう?」

「え?」

霊夢の提案に食蜂は目を丸くする。つまりそれは霊夢に心理掌握を使用してみろということ。

「い、良いの?」

心理掌握で調べるといふことは己が生まれてから今に至るまでの記憶を、脳内にある

全てを隈無く見られ、知られてしまう。

普通の人間ならば忌避することであり、それは博麗霊夢もまた例外ではないはず。

「ええ。背に腹は代えられないわ」

しかし、それを理解した上で霊夢は提案した。自らが感じる違和感の正体が分かるのであれば、それくらいは些事であると言わんばかりに。

「うーん……確かに何も分からない以上、それが唯一の打開案なんだけど……」

正直不安しかない。それで痛い目を見たことはある食蜂はそのトラウマから合意の上とはいえ霊夢に能力を使うことを躊躇していた。

「安心なさい。私も何度か受けて慣れてると思うし、問答無用で襲い掛かったりなんてしないわよ。今回は私自身が受け入れているし」

「慣れるとかそういう次元でどうにかなる私の洗脳力じゃないはずなんだけど……まあ、分かったわ。干渉する内容とか強度とかなるべく影響が少ないようにチャンネルを設定すれば、どうにかなると思うし、そこは私の手腕力が試されるわね」

しかし、不服ながらも頷く。本当に洗脳されているのかとか、疑わしい要素は多々あるもの他ならぬ霊夢の頼みなのだ。かつて彼女に命を救われ、未だにその恩を返せていない食蜂に拒否する権限など存在しなかった。

「……帆風、いつでも対処できるよう構えておきなさい」

「か、かしこまりました。女王」

縦ロール……帆風潤子にそう命じる。天衣ランペイジドレス装着という身体強化系の大能力者である

彼女は食蜂の配下の中では唯一霊夢ともある程度は戦える実力を有していた。

「じゃあ、早速お願いするわ」

「え、ええ……行くわよ」

ゆつくりとりモコンを向ける。ボタンを押した次の瞬間に襲い掛かってくるかもしれない。

二人に緊張が走った。

「えいっ☆」

そして、ボタンを押す。

「」

霊夢が硬直する。命令は自分の干渉に抵抗するなという非常に単純で出来る限り霊夢の意に反しないもの。やはり能力は問題無く作用し、食蜂は急いでその脳内を覗く。

（よし、とりあえず最近の記憶を遡りましょうか……——何ですって？）

ものの数秒。即座に霊夢の数日間の記憶を読み取り、その情報に目を見開いた。

昨日の情報は問題無し。けれど、それ以前から異常が起きた。

存在しないのだ。曖昧どころの話ではなく、墨で真っ黒に塗り潰されたように記憶自体

が消えてしまっており、部分的には残つてはいるものの無理矢理継ぎ接ぎされた状態でもう無茶苦茶だ。

怖気が走る。それは過去の霊夢や上条が経験した記憶破壊とも違う、未知なる十二力。

(博麗さんの言う通り……というか、普通は自己矛盾で廃人になっていてもおかしくない。こんな状態で確認が無いレベルの違和感で済むなんて、それ自体が異常が過ぎる。どういう理屈してるのよ……!)

認める他無い。霊夢は間違いなく何かしらの干渉を受けており、それは食蜂が誇る心理掌握を凌駕する代物。

そして、恐らくは塗り潰されている部分こそが下手人が隠匿しなかったことだろう。

(……これ以上は調べても無駄そうね。成果は得たし、能力を解除して——は?)

その時だった。

塗り潰されていた記憶が、存在しなかったはずのそれが徐々に浮かび上がって行く。突然の事態に戸惑う食蜂。そんな彼女を他所に真つ暗な闇にフラッシュが照射されるように、みるみる内に記憶は甦り、場面は薄暗い路地裏へと変わった。

そこには、一人の女性が佇んでいた。

「……^{思い出せ}忘れ去れ……」

呟かれたその言葉が誰に向けられているかは言うまでもない。言葉の意味こそ真逆であるが、食蜂は彼女こそが霊夢の記憶を奪った下手人であると理解した。

しかし、何故急に記憶が――。

「ハッ――!?!」

そして、現実へと引き戻される。目の前では霊夢が額に手を当て、踞っていた。

「ちよつ……博麗さんっ!?!」

「――平気よ」

慌てて駆け寄る食蜂に対し、すぐに霊夢は立ち上がる。顔をしかめているが、落ち着いている様子だった。

「……ありがとう。操祈」

「へ?」

「お蔭で思い出すことが出来たわ」

「あ、いや……私のお蔭、なのかしら……?」

札を告げられても食蜂は当惑するしかない。自分は単に記憶を読み取っただけに過ぎず、霊夢の記憶が甦ったことに関しては何もしていないのだから。

「ええ。あんたのお蔭よ」

実のところ食蜂の心理掌握では霊夢に施された細工に対してどうすることも出来ない

かった。よつて事態を解決したのは、霊夢本人に他ならない。

原理としてはこうである。心理掌握から干渉を受けた彼女は無意識にその影響下から逃れようと能力を使用した。テレスティーナの一件でのことは決して一時的なものではなく、取り戻した力は容易くその領域まで到達して精神も肉体も浮くことで心理掌握だけではなく、既に定められていた因果からすらも脱したのだ。

（ああ最悪。まんまとしてやられたわ。あの女、何者なのよ……）

この事実には霊夢は悪態を吐く。干渉をはね除け、記憶を取り戻したのはあくまでも偶発的なもの。たまたま本能で能力が発動したに過ぎず、場合によつては今も記憶を失つたまま……否、その可能性の方が高かつただろう。

思い出せた実験を潰すという目的。既に二日も時間をロスしており、あの女の狙いが単に足止めならばそれは十分に成功したと言える。

「——もしもし董子？」

己が失態を恥じ、霊夢は即座に行動する。この間にも一方通行は実験と称してクロンを殺し続けているのだらう。これ以上無駄な犠牲を出させる訳には行かない。

それに、御坂の事も気になった。二日もあれば流石の彼女も実験が終わつてなどいいことに気付いていることだらう。研究所襲撃が無意味だと知つた彼女が何を仕出すか分かつたものではなく、自らの身を滅ぼす選択を取る可能性も充分にある。

それはあまりにも笑えない展開だ。故に、霊夢は今夜中に終わらせると決めた。

——しかし、彼女は知らない。

あの日、公園で上条と御坂と別れた後のこと、それから今日に至るまで起きた出来事を。

事態は既に、予期せぬものとなっているのだ。

昔、ある事件が起きた。

その事件の主犯は強盗や殺人などの凶悪犯ではない。たった一人の、二桁にも満たぬ子供だった。

しかし、その事件の鎮圧のために兵隊、戦車、戦闘機、ありとあらゆる武力が総動員された。

理由は至ってシンプル。その子供に対抗するために、軍隊が必要最低限だったからに他ならない。

戦後続く平和国家。武力ではなく防衛力と位置付けられているはずの形ばかりの軍隊。国民を守るための武力が一人の子供に向けられる。その光景は果たしてどれだけ異様であつただろうか。にも拘わらずその場に居た人間は一樣に自分達の行いを正当化するし、それで世間を納得させるだけの危険性が、恐ろしさがあの子供にはあつた。

更に救われぬのは、その子供には何の悪意も無く、起きた事件は事故に過ぎなかつたということだ。

あれから何年経ったか。事件のことを覚えていている者はもう殆ど居ない。

——けれど、子供は、彼は、はつきりと覚えていた。

あの怒声も、悲鳴も、怯える顔も、キヤタピラの駆動音も、鳴り響く銃声も、向けられる殺意も、何もかもつい昨日の事のように思い出せる。

故に、彼は人から遠ざかった。接触するのを、関与するのを酷く恐れた。

何故ならあの時あの瞬間、思い知ってしまったのだから。他ならぬ己自身が証明してしまったのだから。

この力は、万能でも無敵でもなく、況してや絶対でもない。

ただ周りを傷付け、挙げ句に世界を壊してしまう、壊してしまうだけの力なのだ。

「笑える話だよなア……本っ当に」

そして、今も彼は誰かを傷付け、壊そうとしている。今度は故意に、確かな悪意を持ち、殺意を以て一万もの命を虫けらのように奪っていた。

誰も傷付けぬ為。その矛盾の極みを行く有り様に自分自身でも笑ってしまう。

実際のところ、笑い話にもならない。

「なア……オマエら全員繋がってんだろ？ 前回ネタばらししてやったんだから、ちつたア楽しませろよなア」

目の前で転がるクローン少女に、アクセラレータ一方通行はポケットに手を突っ込み、呆れた様子で

吐き捨てる。

先日、体内の血液を逆流させて惨殺した際にベクトル操作について長々と高説を垂れてやったというのに、相も変わらず彼女らは己の反射を破るに至らず、こうして地べたを這いつくばっていた。

今回もまた、初撃で勝負は付いた。いくら能力の理屈が解つたとて、そう容易く破られるようではこの学園都市の頂点には立っていないのだから、この結末は必然である。

しかし、既に実験は折り返し地点。にも拘わらずこの体たらくでは、もたらされる結果にも不安が生じるのは必然と言えよう。

とはいえ、今更引き返すことも投げ出すことも出来るはずもなく、だからこそ一方通行はうんざりした様子で人の形をした肉袋を冷たく見下ろす。

「ッ……………」
対する妹達はこれに何も答えず、苦痛に表情を歪めながらも実験を続行しようとする。

「チツ……………」

その様を一方通行は心底軽蔑し、憐れむ。

殺される為だけに生み出された存在。それしか知らず、その狂った科学者共が定めた存在理由を信じて疑わず、自ら死に行く愚者。

ただの人形だと、連中は言った。

全く以てその通りだと思う。こんなモノ、そこらの機械マシンとどっこいどっこいの、単なる糞尿の詰まった肉皮の袋に過ぎない。

『これは、ミサカの物です、とミサカは所有権を主張します』

そう断じた瞬間、いつぞやの実験で磨り潰した人形の言葉を思い出す。オリジナルが突撃してきた時の実験だったからよく覚えてる。

あれは演技だったのだろうか。だとして、以降の個体が似た行動を取らぬようなそのような作戦が一方通行には無意味だと判断したからか、それともあの個体が特別で、そして本当に――。

(くだらねエ……)

思い至った思考を即座に切り捨てる。

(あれはただの人形、人間じゃない。だから殺してオーケー……そう勝手に定めて、正当化するのは他ならぬ俺だろうがよオ)

仮にあの時見た妹達の表情が本物だったとしてどうなる。ただどうしようもない屑が、もつとどうしようもない屑にグレードアップするだけだ。

否、この場合はダウンが適切か。あの最初の実験の時から、動かなくなつた肉塊を目の当たりにした時から、墮ちるところまで墮ちる覚悟は決めた。

或いはそれは、己は所詮はそんな人間であるという、諦観だったのかもしれない。

「おい……」

「——あん？」

その声に、足を止める。

自分と目の前の人形以外には誰も居ないはずのこの場で聴こえるはずのない男の声に振り向けば、そこには確かに何者かが立っていた。

「……は。この場合、実験つてのはどうなるンダア？」

そこに居るのは一人の少年。まさか一般人が紛れ込んだとしても言うのか。己を睨む少年を前に一方通行は目を見開き、そしてすぐに面白可笑しそうに笑って妹達に尋ねる。

「何を、やって……？」

彼女もまた、酷く驚いている様子だった。もしかすると顔見知りなのかもしれない。

「つたく……間抜けにも程がある」

実験中は周囲一帯が封鎖されているはず。それに警備も少なからず居ると思うのだが、オリジナルの時といいあまりにもガバガバ過ぎると一方通行は呆れる。

同時に彼はこの予想外の状況にどうするべきか悩んでいた。ここは立ち入り禁止なので回れ右してくださいと親切に告げるのは柄ではないし、かといって無視して妹達を

バラしてスプラッターな光景を作る訳にも行かないだろう。

そう考えるとなかなか面倒な事態であり、困惑してばかりで返事をしない妹達にイラつく。

「……離れろよ」

が、その思考もぼそりと、しかしはつきりと告げられたその言葉に停止する。

「あア……？」

聞き間違いかと、一方通行は眉をひそめ、すぐにそれは怒声で否定された。

「とつとつと御坂妹から離れろつて言つてんだ！ 聞こえてねえのか三下……ッ！」

この時、彼は信じられないものを見た。

思つてもみなかったのだ。あんな人形を大真面目に救おうとし、あまつさえ自分に挑んでくる人間が存在しているなど――。

「へエ……何者だ、オマエ」

自然と口角が吊り上がる。目の前に居るのは何も知らない一般人という訳ではなかった。

実験を妨げる為に現れた闖入者。こちらへ敵意を向ける、まごうことなき“敵”であり、超電磁砲の乱入以来の変化の到来に一方通行は愉しげに笑い、喜んで売られた喧嘩を買う。

かくして、ヒーローは駆け付けた。

第一位

上条当麻は憤っていた。

あの日、偶然目撃した血塗れの死体。姉とは違つて無感情で独特な喋り方をする変な妹……まるで全身から血が噴き出したような惨たらしいその姿は、今でもはつきりと思ひ出せる。

『御坂美琴おねえさまの体細胞から作り出されたクローン……妹達シスターズですよ、とミサカは答えます』

自分達をそう呼称した、瓜二つの容姿をした軍用ゴーグルを着けた少女達。当たり前のように、何てことのない事かのように自分達が殺される所業について「実験」と言った。

こうして上条は知つたのだ。この学園都市の裏で行われている、おぞましいことを。ただ命がゴミのように奪われているだけでなく、一人の女の子が泣いていることを。

だからこそ、上条はここに来た。自らを犠牲にして実験を止めようとする御坂を制止して、その際にポロポロになりながらも駆け付けた。

悲劇を終わらせる為に――。

(やつと、一発……！)

ゼエゼエと息を切らしながら上条は先程振りかぶった自身の右手を見る。

一方通行は強かった。自分が予想していたよりもずっと、化け物のような存在だった。

鉄骨を弾丸のような速度で飛ばし、コンテナをダンボールのように潰す。粉塵爆発まで起こしてきて、何度も死にかけた。

正直言うと、驕りがあった。ありとあらゆる異能を打ち消す右手。相手が能力者ならばいくらでも勝ちようはあると。だが、そのあまりにも現実離れした力を見てしまうと愚かな思い上がりだったと思ひ知らされる。現に今この瞬間まで触れることさえ叶わなかった。

故に、これは運が良かったというだけ。しかし、それでも確かな有効打だった。

勝負は、ここからだ。

(つ………き？ 何で月なんか見てんだ………？)

視界に広がる夜空。一方通行は困惑し、自分が地面に手を付いたことに気が付いた。

(俺が、仰向けになってるからか………？ じゃあ、何で俺は地べたに寝転がってんだ？) 目を動かすと、無謀にも挑んできた最弱の男が平然と立っている。

(!? あいつ………目の前に居たはずがいつの間………いや、そもそも何故奴は五体満足

で立っていられんだ?)

存外しぶとく抗った男について興が乗った一方通行は相手を愉快的死体にする為に血液や生体電気を逆流させてやろうと触れたはずでは——。

(痛エ……痛て……エ?)

ここで漸く一方通行は異変に気付く。

(は? 痛てエ? 痛み……だとツ!?)

頬に走る激痛。困惑しながら自分の顔に手を添えると、血がべつとりと付いた。

「なっ……なんだコリヤああアツ!」

理解が及ぶと共に絶叫をあげる。

信じられなかった。目の前の息が切れてゼエゼエ言ってる三下に自身が殴られたという事実が。

(ふ、ふざけんな! またこの俺が……この一方通行が……しかもあんな三下にツ!)

脳裏に過るのは、紅白の巫女。しかし、あれに殴られた時とは違い、今の感覚はまるで反射自体が機能していないように感じられた。

それこそ有り得ない話だ。直感による引き戻しによる打撃でも己の理外の力でもないのならば——。

(まさか……両手に反射を集中し過ぎて全身の反射を切っちゃったのか?)

思い付く仮説。あまりにも間抜け過ぎるが、そうとしか考えられない。大体あの巫女のような化け物がそう何人も居てたまるか。

「面白れエ……ハハハ……イイぜ。最っ高にイイねエ。愉快に素敵にキマっちゃったぞ、オマエはア！」

己の間抜けさへの苛立ちと、無能力者風情に殴られたという事実への屈辱が入り交じりながら、狂ったように啜う。

つまらない闖入者かと思つたが、存外楽しめる。今度こそ殺す為に一方通行は地面を蹴り、高速で近付いて右手を伸ばす――。

「あ?」

しかし、血液の流れを逆流させるように設定されたはずの右手は、パシッと軽く跳ね除けられた。

――そして、握り込んだ拳が叩き込まれる。

「ゴッがアツ!?!」

鼻っ柱をへし折られた。めり込んだ拳が、反射が全く機能していないことを証明する。

そこから上条は理解不能の事態に動揺する一方通行に隙を与えずに怒涛の勢いで拳を叩き込んでいく。

（ち、違う……?!） 反射の「膜」を貫通してやがるツ！ まぐれでもねエ……こいつはあのイカれ巫女と同じ、俺の能力を突破する手段を持つてやがったのか……!!）

考えてみれば当然だ。今まで挑んできたのが考え無しの馬鹿共ばかりだったから疑問にすら思わなかった。普通はそうでなければ、一方通行に挑むなどという無謀極まりない行為をするはずがない。

加えて、この男は他の連中とは違って圧倒的な力を見せ付けたにも拘わらず一步も退かず、立ち向かってきた。その時点で警戒するべきだったのだ。

「ツ……いい、いい加減、にイ……！」

だが、この程度で――。

「――しやがれエー！」

思いつき踏み込む。それだけで地面はめくり上がり、周囲のものを吹っ飛ばす。

「おわっ――!?!」

咄嗟に後方へ飛び退く上条。猛攻が止んだことで一方通行はふらつきながらもポタポタと流れる鼻血を拭う。

「糞がツ……ボコスカ殴りやがって……！」

脳震盪で意識が飛びそうになったが、何とか持ち堪えて立つ。今にも倒れそうになるのを能力を使ってどうにか補強している状態だった。

耐える。こいつに弱みを見せてはいけない。

「……少しは痛みが分かったか？」

「あん……？」

「妹達だつて精一杯生きてきたんだぞ」

上条の口にした言葉に一方通行は目を見開く。

「全力を振り絞つてみんな必死に生きてんだ！　なんだつてテメエみてえなのに食い物にされなきゃなんねえんだ！」

何を言っている。

思わず固まってしまう。その言葉の意味が、一方通行には全く理解出来なかった。

（生きてる？）

勝手に視線が動く。上条の背後に居る、倒れて何も出来ない、今回の実験で殺すはずだった相手の姿を。

あんな、あんなものが生きているだと――。

「笑えない冗談だなア……コイツらは人形だろ？　生きてなんかエ模造品だ」

「！……本気で言つてんのかコラ」

「ああ、一万体も殺したんだ。保証するぜ」

上条は理解した。その何を当たり前のことをと言わんばかりの口調で、目の前の狂人

が、大真面目にそう言っているのだと。

「機械みてエに何の感情も持たず、馬鹿の一つ覚えに実験だからって、それが使命だからって、存在理由だからって進んで使い潰されにいく……そんな連中、果たして本当に生きてるって言エんのか？ 少なくとも俺は思わねエ」

何一つ疑っていなかった。彼は本当に妹達が何の感情も抱かない、殺される為だけに作られた人形であると認識しているということを否が応でも理解させられてしまう。

拳を握り締める。

怒りに染まる。許せなかった。

「ちげえよ……全然ちげえ……！ 何の感情も無いだと？ アイツらは人間だ、俺達と同じように生きて、同じように笑って泣く、まごうことなき人間なんだよ……！」

上条は知っている。自分と会った妹達が子猫を可愛がっていたことを。猫と別れる際に名残惜しそうにしていたことを。大量の缶ジュースを運ぶのを理由も無く手伝ってくれたことを。

感情が無いなど嘘だ、人形などと口が裂けても言えない。

彼女は確かに生きているのだと、確固たる信念を以て言い放つ。

「……そオかよ」

一方通行もまた理解する。こいつにとっては妹達は人間であり、命を懸けてでも救う

だけの価値があるということ。

オリジナルといい、あんな人形にも居るといふのか。守ってくれる奴が、救おうとしてくれる奴が。

己と違って――。

狂った連中に無責任に生み出された、劣化の、欠陥だらけの模造品……そんなものさえ自分がどうしようもなく欲しているモノを持つている。

度し難い、全く以て度し難い。

「で？ サンドバッグにしかならねエ肉袋を生きてると信じて疑わねエオマエは一体どうするんだ？」

ならば手に入れるしかあるまい。相手が人形だろうが、真正正銘の人間だろうが、一切合切関係無く踏みにじつてでも、絶対の存在になつてみせる。

そうすれば、きつと――。

「決まつてんだろ。――テメエをぶつ飛ばして、そのふざけた幻想をぶち殺す！」
上条が踏み込む。再び一方通行の顔面に拳を叩き込む為に。

「ッ――」

しかし、振り抜いた一撃は空を切つた。

「ッ!？」

一方通行の姿が消えた。どういふことかと上条が目を見開くと背後から殺気を感じる。

反射的に飛び退けば、細い足が杭のように突き刺さってアスファルトを砕く。

「なっ——」

回り込まれた。全く目で追えなかったが、状況からそう判断して困惑する上条。これに構わず一方通行は更なる攻撃を繰り返す。

「オラァー！ 死に晒せェー！」

巨大な瓦礫が浮き上がり、砕かれて無数の礫となって襲い来る。

「ッ——」

宛ら散弾銃のように広範囲のそれを、完全に回避することは出来ないと察した上条は、しかし構わず突っ込んで一方通行へと接近する。

予想通り何発かが身体を掠めて出血するも、グツと痛みを堪えて殴り掛かった。

「アハッ」

しかし、当たらない。一方通行は能力を利用した高速移動で上条の攻撃を的確に回避していく。

まるで攻撃がどこから、どのタイミングで来るのかを察知しているかのように。

「……………!!」

——どういふことだ。

相手は学園都市最強。ありとあらゆる戦いを一撃で終わらせてきた奴が、喧嘩のやり方など知っているはずがない。

そう思い込んでいたが、相手は自分の見立て以上に冷静な様子だった。

「なア……さつきから、なんで右手しか使わねエンだア？」

唐突に、一方通行が疑問を投げ掛ける。

「もしかして、反射を無効にするのはその右手だけだったりするンじゃねエのかなア？」

寒気が走った。

本能的に上条は攻撃を止め、折角手に入れた間合いを捨てて後方へと引き下がる——。

「ッ!？」

同時に、途方もない風圧が上条を襲う。

「ぐあっ——!？」

その風圧は上条の身体を軽々と浮かせ、ひしやげたコンテナに叩き付ける。

「成程なるほどナルホドねエ！　なんだ俺が調子に乗って近付かなきゃとつくの昔に勝ってたってコトかア！」

ケタケタと嗤う一方通行。既に彼は上条の能力が如何なるものか分析し、見抜いていた。

恐らくは右手のみが範囲のあらゆる能力の無効化。だからこそ、副次的に起こした瓦礫や風圧までは無効化することは出来ない。

そして、上条の能力はそれだけ。遠距離攻撃は持ち合わせていないのだろう。

「くっ……」

「頑丈だなア。だが……もうテメエを近付かせるつもりはねエ。当たらなきや意味ねエンだろ？ ソレ」

そんな一方通行の状況把握能力の高さに上条は戦慄する。既に形勢は逆転し、最初の時のような蹂躪が始まろうとしていた。

見通しが甘かったと、言わざるを得ない。

「大方反射を突破されたことへの動揺と俺の格闘経験の無さに賭けるつもりだったんだろオが……生憎とこういうのは初めてじゃあねエし、テメエごときの動きに翻弄されてたら『アイツ』には一生勝てねエンだよ、三下ア」

博麗霊夢との戦闘後、一方通行はこちらの絶対防御を突破してくるあの化け物を如何にして対処するか来る日も来る日も考えた。全てを『反射』だけで片付けてきた一方通行は初めて自分の能力を『工夫』するという思考に至った。

奴の攻撃を再度演算し、反射へ適用させるのがベストだが、それにはあまりにも情報が足りず、リスクも大きい。

ならばどうするか。思考の末に、そもそも当たらなければいいという結論に行き着き、何百、何千回も脳内でシミュレーションし、能力を磨くことで反射とはまた別のシステムを構築した。

ただ避けるのでは駄目だ。博麗霊夢の動きを、一方通行は目で追えず、反応出来ないのだから。

故に、編み出したのが「自動回避」。常時展開されている反射の「膜」を切り替え、事前に予測して設定した一方通行に害を与えるであろう運動が一定の距離まで接近した際に自身の場所をランダムに移動させる。

まだまだ粗削りな部分はあるが、頑丈ではあるものの動きは霊夢と違って常人レベルの目の前の男には充分に有効だった。

「ンでもってエ——」

そして、次に考えたのは攻撃手段。こちらの攻撃を全く意に介さずに自由に空を飛び回るあの少女を如何にして捕らえ、仕留めるか。

——この空そのものを支配すればいい。

「ッ!？」

「ッ……………」

圧倒的な強者を前に気丈に振る舞い、彼女は一方通行を止めようとし、その眼を見て絶句する。

つまらなそうに、興が削がれたような、こちらに微塵も興味が無いと言わんばかりの表情。すぐに顔の向きを戻し、再び風を操作し始めた。

御坂は理解する。今の一方通行には自分など眼中に無く、空に渦巻いている恐ろしい力を振るうことしか頭に無いのだと。

当然だった。御坂の能力など一方通行に通用するはずがないのだから。

(そんな……………一体どうすれば……………このままじゃ……………！)

ちらり、と吹き飛ばされ、身体を鉄柱に打ち付けて倒れ伏している上条を見る。

幸いにもまだ生きているが、重傷のはず。すぐに治療しなければ危険な状態かもしれない。自分を、妹を助ける為に命を懸けてくれた彼を、一刻も早く助けないと――。

その時、爆発音が響く。

「あア——?」

一方通行が僅かに反応する。自分が操る暴風に巻き込まれて何かが誘爆したのかと思えば、少し離れた場所に何かが飛んでいることに気付く。

(あれは確か……………「六枚羽」、だったか?)

H S A F H——11——通称「六枚羽」。

第二三学区・制空権保全管制センターより発進する、学園都市最新鋭の無人攻撃ヘリ。機体の左右に機銃やミサイルなどを搭載するための六枚の「羽」を持ち、回転翼の補助動力として二基のロケットエンジンを搭載、最大速度はマッハ2.5に達する。

そんな学園都市が誇る超兵器が二機、上空を飛行していた。まさかこの区画を巻き込む規模の攻撃を仕掛けようとしている自分を危険視した連中によつて差し向けられたのか。否、だとすれば出動があまりにも早過ぎる。

加えて、爆発音の正体は六枚羽がその機銃やミサイルといった武装を惜しみ無く使用し、何かを攻撃している音であり、一方通行に対するものではなかった。

——そして、疑問に思っていると、次の瞬間。高速回転していたプロペラが一つ残らず爆発する。

「何……?」

制御を失い、フラフラと墜落していく六枚羽。一機だけでも外の戦場ならば一方的に蹂躪し、制圧するであろう最新鋭の兵器が、あつという間に二機とも破壊された。

「なんだ……? 一体何が起きていやが——」

「——つたく、あんたって奴は」

困惑する一方通行は、その声に今度こそ演算を止め、嵐が一時的に収まる。

思わず向けた視線の先は倒れている上条。その前に、一人の少女が片膝を突いてしゃがみ込んでいる。

「——ッ!?!」

一方通行は、驚愕する。その姿に見覚えがあつたが故に。

「はく、れ……………い……………」

「応急処置はしたわ。しばらく寝てなさい……………その間に全部終わらせておくから」

そう言つて少女——博麗霊夢は上条を優しく寝かせ、ゆつくりと立ち上がる。

そして、その瞳が一方通行を見据えた。

「！ク、クク……………なんだなんだよなア!? お次はテメエが相手つてコトかア!?」

対する一方通行は数瞬呆気にとられるも表情を一転。狂気に満ちた笑みを浮かべる。

このタイミングでの博麗霊夢の登場は思わぬものであつたが、ある意味では待ち望んでいたものだった。

「……………随分とテンションが高いわね、アクセラ」

「相変わらずスカした顔しやがつてよオ! そうだなア! 自分でも最高にキマツちまつてるつて解る! コンなに爽快な気分は初めてだア! この一方通行が一度ならず二度までも地べたに這いつくばるなんて屈辱を味わわされたつてのによオ!」

狂気としか言い様が無い振る舞いを見せる一方通行に対して、霊夢はどこまでも冷め、淡々としていた。

「やっぱりこんな糞みてエな実験よりも、テメエやその三下……圧倒的な『未知』こそが！俺を新たな段階へと引き上げてくれる！」

歓喜。純粹な歓喜。

考えてみれば当然の帰結。一方通行に足りなかったのは、経験なのだ。それは多種多様な方法で欠陥品のクローンを地道に処分することではなく、危機的状况に追い込まれること。

敗北するかもしれない。前回の博麗霊夢との戦闘も、今回の上条当麻との戦闘も、一方通行にその危機感を抱かせた。

その度に彼は強くなる。自分でも実感し、だからこそ喜ばしい。感謝すらしていた。

「——美琴、当麻を頼むわ」

そんな一方通行の言葉に言葉を返すことなく、霊夢は先程から茫然としていた御坂を呼び掛ける。

「えっ……」

「あいつは私が相手する。あんたじゃ無理なのは分かってるでしょ」

「ツ……分かったわ」

あんたじゃ無理。そんな容赦の無い言葉に反論したくなるも、自分が居たところでどうしようもないのは、まごうことなき事実なのでグツと呑み込む。

たった一人で一方通行と戦おうとしている霊夢のことが心配ではあるが、今自分に来ることは倒れている上条を保護して彼女が戦いやすい場を作ることだけだった。

「死なないでよ、博麗さん」

そう言い、御坂は生体電気を操作して自身の身体能力を極限にまで引き上げ、上条へと近付くと肩に担ぐ。

(あつ……)

そのまま急いでこの場から離れようとした時、近くで妹達——ミサカ10032号も倒れていることに気付いた。御坂は直ぐ様彼女の方へと向かって同じように回収する。二人も運ぶのはきつかったが、そうも言ってもらえない状況であろう。

離れていくその後ろ姿を確認し、霊夢は改めて一方通行と対峙する。

「さて、と——」

「話は終わったかア？　　なんでかと思えば……オリジナルと知り合いだったとはなア」

霊夢が現れた理由。それを彼女と御坂の会話から察し、納得する。

一方通行の知る霊夢は赤の他人のクローンが何万、何億体殺されようが、自分には関係無いのだから知ったことではないはず。しかし、その大元が顔見知りでしかも止めよ

うとしているとなれば話は別だろう。

何ともまあ、巡り合わせが悪いことだ。尤も、今の一方通行にとつては好機と言う他無いが。

「あら、律儀に待つてくれるなんてね」

「雑魚共を気にして負けた、なんて言い訳されても困るからなア……あ、あの粗大ゴミ相手にしてて疲れてる、つてのはナシだぞ？ 何なら休憩タイムやろうかア？」

「お気遣いどうも。準備運動にもならなかつたから安心してちようだい。ついでに言わせてもらおうと、多少疲れていたとしてもあんたの相手くらいなら然して問題無いし」

「は。言つてくれるじゃねエか」

大言壮語、などとは言わない。目の前の相手は一方通行が、己以外のすべてが脆弱な土塊にも等しい有象無象ばかりだったこの世で、初めて“強敵”と認めた存在なのだから。

侮りはしない。嘲りもしない。ただただ全身全霊で叩き潰すのみ。

「二応訊しておくけど、今からでも止める気はない？ レベル6ナンタラつてのが本当は無意味だつてのは薄々分かつてるでしょ」

「あん？ 興が冷めるようなこと言うンじゃねエよ。ま、テメエをぶつ殺した後なら結果次第で考えてやらンでもねエが……というか、今更引き返せるとでも思つてンのかア

「？」

駄目元の提案に一方通行はそう切り捨てる。ここで止めたところで彼には何も残らない。

むしろマイナスだ。散々蹂躪し、鬨り、遊び、壊し、殺してきた妹達。そいつらの犠牲が本当に無駄で無意味なものになり、ただ己が手を汚したという事実のみが残ってしまふ。

手遅れなのだ、何もかも——。

「そ。——じゃあ、やるしかないわね」

次の瞬間、空間が震える。

「……………ッ!？」

目を剥く一方通行。霊夢が一気に放出した膨大な魔力が彼を飲み込んだ。

それに物理的干渉は無く、然りとて未知なるベクトルが故に反射が上手く効かぬそれは確かに一方通行の肌身に触れた感覚を与える。

ぶるり、と身震いする。既に霊夢は先程までとは全く違う。その目の色を変え、凍てついた戦意を以てして、こちらを射抜く。

「——アハアッ！ そうだッ！ そう来なくつちやあなアアッ!!」

愉しげに笑い、一方通行もこれに応える。

再び風力を操作してトルネードの如き暴風を発生させ、その過程で巻き起こされた無数の瓦礫が砲弾となつて霊夢を襲い掛かる――。

――夢想封印――

霊夢もまた、出し惜しみをしない。色とりどりの光弾が暴風雨の如く渦巻き、暗夜を照らし、幻想的な軌道を描きながら触れるもの全てを打ち砕いていく。

最強とイレギュラー。

これにて座興は終い。この学園都市で他に並ぶ者の居ない二人の対決が、今ここに幕を開けた。

絶対

「へえ……これも反射出来るようになったんだ」

瓦礫も暴風も何の妨げにならず、瞬く間に光弾に飲み込まれた一方通行は、しかし平然とした様子で佇んでいる。

これに霊夢は感心した様子で呟く。予想はしていたが、やはり既に夢想封印のベクトルは解析され、反射に組み込まれているらしい。

「は。当然だろうが。この一方通行に同じ攻撃は二度と通じねエ」

あの三下の右手は別だが。そんな言葉を飲み込み、一方通行は得意気に笑いながら風力操作を続行し、大気を圧縮していく。

(チツ……ここの風速は100m以上だつてのに、余裕綽々といった様子で飛んでやる。奴の飛行に風の流れは関係ねエってことかア?)

内心毒づく。一方通行の見立てではまず霊夢の厄介な飛行能力を妨害するつもりだったが、大型台風以上の風速が支配するこの場でも霊夢はまるで微風の中を泳いでいるかのように上空に浮かんでいた。

それが書庫バンクに記述された通りに重力操作、反重力によるものだとして、ここまでの安定性を維持出来るものだろうか。

(まあいい……ちまちました攻撃はどうせ当たらねエし、プラズマでこの周囲一帯ごと消し飛ばして仕留める)

空気を一点に集め、圧縮させることで高エネルギーのプラズマを生み出す。その温度は約1万度にもなり、一方通行が有する攻撃手段の中では最高火力である。

その気になればこの街を、否、世界すらも滅ぼせるだけの力。それを霊夢一人に對してぶつけるのはあまりにも過剰に思えるが、先の戦闘で上条を甘く見た結果、危うく戦闘不能に追い込まれたことから一方通行は一切の油断も遊びも無く、目の前の敵を葬り去ることに決めた。

「———。なら、これはどうかしら?」

——— 夢想封印 ———

再び極彩色の光が乱れ咲く。

「あア———?」

その行動に一方通行は訝しげに眉をひそめる。当然の如く光弾は先程同様に跳ね返り、霊夢へと向かう。

「何のつもりだア? 舐めた真似するンじゃねエよ。二度と通じねエって言っただろオ

が——」

聞こえていなかったのか、それとも目眩ましのつもりか。どちらにせよ無意味な行為に一方通行が呆れていたその時だった。

一発の光弾が炸裂し、軟質のボールが勢い良くぶつかったような痛みと衝撃を与える。

「……ッ!?!」

「成程ね——こつちなら通じるってこと」

それから次々と伝わってくる衝撃。一部の光弾に対しては反射が上手く機能していなかった。

「ッ——テメエ、まさか……!?!」

動揺し、しかしすぐに理解する。霊夢は光弾を、一方通行が反射するように設定した物とはまた仕組みの違うモノに組み替えて、攻撃したのだ。

（おいおいおい……!?! 流石にそりやあ出鱈目が過ぎるだろうがよオ……!?!）

種明かしすれば簡単な手品だが、実際にはそう単純なものではない。火薬の種類を変えたところで銃弾や爆弾なものには変わりないように、多少仕組みを変えたところで一方通行の反射の壁をすり抜けることは至難の業。

だからこそ、一方通行は再認識する。自分が相手にしているのは、正しく理外の存在

なのだと。

(にしても……まさかまたここでやり合うことになるなんてね)

今回、実験が行われていたこの操車場は奇しくも禁書目録の解呪を行った場所と同じであり、ヨハネのペン自動書記との激闘を思い出す。

周りに配慮せずには暴れる場としては正に最適である。

(あの時と違つて実験とやらに関わつてる連中がどこかで見てるかもしれないけど……ま、隠蔽は“教授”に任せて存分にやらせてもらいましようか)

相手が相手であるため手加減出来るような余裕があるはずも無し。故に、霊夢は今頃大慌てで事態の收拾を図っているであろう赤髪の研究員に心無い謝罪をしつつ光弾の量を倍以上に増やし、夜空を埋め尽くす。

その光景は、宛ら満天の星々のようであった。

「チイツ——」

鬱陶しげに一方通行は地面を蹴つて跳ぶ。光弾の嵐から抜けようと加速し、手動による演算へと変える。

パターン自体は誤差レベル。面倒ではあるもののオートマからアナログに切り替えれば、充分に対処は可能だった。

だが——。

(これと併用して風力操作はきつい。もう少しデカくしたかったのだが、しようがねエ……！)

スローするように腕を振り下ろす。それだけで上空で蠢いていたプラズマが一気に放出され、膨大な熱量となって降り注ぐ。

「！」

大地が焼かれ、焦がされ、融かされ、一瞬にして蒸発する。

つい先程まで戦場のような容貌だった操車場は、この世の終わりかと思間違う地獄と化した。

「ヒ、ヒヒツ……こりやスゲエ、本っ当にスゲエなア！ この程度の圧縮でもこんなになっちゃうのかア！ 全力でやったら本当にこの区画丸ごと消し飛んでただろうなア！」

爆心地で唯一無傷で残った足場に立ち、一方通行は笑いが止まらない。

周囲の酸素まで吹っ飛んで危うく酸欠で意識が飛びそうになるが、そんなことは些細な問題であり、己が手でこの地獄を創り上げたことへの達成感に満たされ、打ち震えていた。

最強も、無敵も、絶対も要らない。

この力さえあれば――。

「派手にやったわね」

——博麗彈幕結界——

次の瞬間、四方八方から札と光弾が降り注ぐ。

「ッ——!?!」

一方通行は即座に回避行動を取る。同時にそれが視覚的情報とは全く違う変則的な軌道を描いていることを素早く見抜き、分析と解析を行いながら周辺を見渡す。

まさか、あの攻撃をくらって生き延びて——。

「!」

「あ、避けられた。気取られてるようには見えなかったけど……」

自動回避が作動する。前方へと飛び退いた一方通行が視線を向ければ、槍のように伸ばした大幣を構える霊夢の姿があった。

生き延びたどころか、傷一つ負っていない。

「デメエ、どうやって——」

「予め結界を張つといて良かったわね。あの勢いじゃ美琴達を巻き込みかねなかったし」

「結界イ……?」

そこで一方通行は気付く。融けたコンテナの中には中途半端に半分だけ原形を留め

ているものがあつたり、焦土と化したクレーターが不自然に途絶えていることに。

そして、張り巡らされた無色透明な壁。これだけの要素があれば否が応にも気付かされる。

「まさか……防いだ、つてののか？ プラズマを？」

「押し留めた、つて言った方が適切かしら。まともに防御してたら普通に消し炭になつてたわよ」

あつけらかんと、そう言つてのけた霊夢は空気を蹴り、一方通行へと迫る。その間にも弾幕は絶え間無く展開され、降り注いでいく。

「火力はなかなかだったわよ、さっきの。でも、あんなので私を落とそうつてんなら、地底の鴉みみたいに連射して一気に叩くことね」

「チイツ！ ふざけてンじゃねエぞ糞アマがア！」

面による制圧射撃。こちらに回避する暇も与えずに消耗させるという意図なのは明白であり、ならばと一方通行は自身の周りに小規模の竜巻を取り囲むように発生させ、風の防壁を形成する。

「しやらくせエ！ 結界だかなんだか知らねエが、まとめてぶつ壊すッ！」

竜巻が薙ぎ払うように弾幕を相殺していく。出し惜しみする必要は無い。学園都市全体の風を支配する一方通行は自身の脳が活動する限り実質無限に等しいエネルギー

を自由自在に操ることが出来るのだから。

面にはより圧倒的な面。いくら常識が通用しない相手であれど、その能力は彼女自身の有する未知なるエネルギーから発生したもののは間違いなく、その大元がカロリーであれ生命力であれ体内から生成されている以上、必ず限りがあるはず。札や針だつてそうだ。

つまり消耗戦ならばこちらに分がある。とにかく今はこの攻撃を凌ぎ、隙を見てもう一度プラズマで焼き払う。

「ふうん……相変わらず出鱈目な能力ね。けどまあ……」

「あん？」

「いや、まだマシンだなあつて」

その様子を見据えながら霊夢は呟く。

ベクトル操作——恐らくそれもあくまで付属的なものであり、本質はまた違う能力なのだろうが、あの『アルス・マグナ黄金鍊成』という理不尽とすら思える馬鹿げた力と比べると一方通行の力は強大ではあるが、まだ大人しい方だろう。

故にこそ、霊夢は安堵する。あのような手合いとは二度と戦いたくなかった。

——そして、一方通行の足下が発光する。

「なつ——」

「——あんたの欠点、それは飛べないこと」

弾幕の中に紛れ込ませていたのか。いつの間にか地面に散乱していた札が地雷のように炸裂し、一方通行を襲う。

「ハッ！ 誰が飛べないってエッ!?!」

すると一方通行は難なく飛翔する。風を操れる時点で空中飛行など造作も無いこと。背中を噴出点に発生させた四本の竜巻がまるで翼のようにはためいて霊夢へと向かっていく。

「ええ。それでいいわ」

これに霊夢は動じることなく、むしろ当然といった様子で応戦する。
戦いというものは、同じ土俵でなければ酷くつまらないものなのだから。

——夢想亜空穴——

竜巻がドリルのように高速で渦巻き、肉を抉らんと迫った次の瞬間、霊夢の姿が消失した。

「ッ!?!」

一方通行は目を剥き、ほぼ同時に後頭部に衝撃を受ける。

「グッ——」

反射は中途半端ではあるものの機能している。この痛みは前回は経験したことが

あった。

自動でベクトルを逆向きに行っていることを逆手に取り、放った打撃を寸止めの要領で反射の直前に引き戻すことで内側に反射させるといふ荒業。一方通行本人ですら、能力を逆手にとっているらしいのが何となく分かる程度で、それが実感としてどういうものなのかも現実的に本当にそんなことが可能なのかもさっぱり分からない。

一方通行の特徴、計算式、自分だけの現実を全て把握した上で、光さえ弾く反射の僅かな保護膜に触れるか否か、コンマ単位のタイミングで行う微妙な手足の返しの動作によつて成立する……のだが、霊夢は何とこれを己が直感のみで行使していた。

後頭部に思いっきり打撃を受けて意識を保つていられるのは、前回くらつたことを考慮して設定を調整したからだと思われる。威力は減衰し、今は不完全なものであるが、あの博麗霊夢のことだ、そう長くない内に適応してくるだろう。

それよりも今は――。

(空間移動……いや、今なら分かる。3次元から1次元への特殊変換とは根本的な原理が違エ……！ 文字通りの「瞬間移動」ってことか。多重能力擬き――毎回さも当然のようにこちらの固定観念を破壊してくれやがる……！)

視界に捉えた途端に消え、全く別の場所に現れ、また消えては現れる。まるでスキップでもするかのように気軽に零時間移動を繰り返しながら霊夢は一方通行を翻弄する。

もう一度プラズマを作成しようとするが、複雑な風力操作やアナログでの演算の片手間で行うには脳への負担が掛かるし、かといってどちらかを止めれば霊夢の猛攻に耐えられない。

そして、恐らく霊夢もそれを理解しているのだろう。

「糞がツ……ちよこまかと……!」

風が暴れ狂う。こちらの防壁を空間を飛び越えて突破してくるといふのなら、その隙間すら無くしてしまえばいい。

「ツ——?」

すると霊夢は顔をしかめる。完全に虚を突いた鳩尾を狙った踵落とし。今までにない精度で引き戻しの攻撃を成功させたが、それは一方通行の意識を奪うには至らず、鋼鉄を蹴ったような衝撃が返ってきた。

「この感じ……最愛ちゃんと同じね」

謂わば圧縮空気の鎧。たかが空気と侮ることなかれ。押し潰された空気が元に戻ろうと発生させる反動エネルギーは自動車すらも軽々と持ち上げ、圧力が音速を突破すれば付近の人間を粉微塵にし、アスファルトの道路が掘り起こされる。

それは奇しくも絹旗最愛の能力である窒素装^{オキシステイマー}甲と原理がほぼ同じだったが、一方通行の纏うその硬度は彼女の能力を凌駕していた。

「なかなか考えたじやない」

「舐めんな、これだけだと思つてンのか」

「！」

次の瞬間、一方通行の周囲の空氣が一気に薄くなる。

「ここからは俺も一か八かの賭けだ。——水蒸氣爆発つて、知つてるかア？」

空間が、爆ぜる。

火山噴火の如く炎が天に立ち上つた。先程上条に対して行つた粉塵爆発とは比べ物にならない規模であつた。

（ツ——危ねエ。即興でやつてみたが、空氣を纏つてて良かったな。下手すると酸欠になつちまう）

空氣を構成する成分である酸素・水素・窒素。その内の酸素と窒素を引き寄せ、周囲の空氣の比率の大部分を水素に変えた上で一気に圧縮することで多大な圧力をかけた。

結果、水蒸氣爆発が起きたという訳だ。風の操作とは違い、とても複雑な演算が必要以上に半ば自爆に近く、爆風で周りの酸素が吹つ飛んで酸欠になる危険性すらあつたため一方通行は無事に成功したことに安堵する。

加えて、酸素を奪つたのだから当然そこに居た靈夢は酸欠状態に陥るはず。そんな状態での爆発から逃げられるとは到底思えないが——。

「ごほつごほつ……危ないことしてくれるわ。窒息したらどうすんのよ」
「……ハア。そこは死んどけよ、人間として」

爆煙の中から咳き込みながら姿を現す霊夢。恐らく瞬間移動で逃げたのだろう。相変わらず無傷であるが、その袖口の片方が焼け焦げていた。

ここまでして、漸く土埃を付けただけ。その人外つぶりに一方通行は呆れるしかない、思わず溜め息を溢してしまふ。

酸欠というのは、ただ息苦しくなるのとはまた訳が違う。普通は低酸素の空気を一息吸っただけで苦しむ間も無く、コロツと意識を失うものなのだ。

だというのに。

「敢えて言わせてもらうぜ。化け物が」

「——失礼ね、人間よ」

そう、二人は人間。端から見ればどう考えても化け物としか思えない力を有しているかと、彼らが人間だということはその身のデオキシリボ核酸が証明してくれる。

尤も、人間足らしめる要素がそれだけしかないとも言えるが。

「で？ もう打ち止めかしら？」

「馬鹿言うンじゃねエ。幾らでもあるンだよ、テメエを殺す手段は——」

爆発がある程度は有効なのは分かった。他の生物同様に呼吸が必要なのも分かった。

一つ一つは大したことが無い。精々強めに押された程度 of 感覚。だが、光弾の時とは違って逃げ場は無く、今の一方通行は反射し切れないダメージを絶え間無く受け続けている状態だった。

(糞がツ……!? なんなんだこりやアツ!? ンなことが出来るならンで最初から……いや、それよりも早く脱出しねエと——)

軽くパニツクに陥りながらもどうにかして風を巻き起こし、自身を結界の外へと吹き飛ばす。

そうして空中に身を投げ出された一方通行は背中から地面に落ちて転がった。

「ツ………、の——」

——陰陽鬼神玉——

激痛から解放された余韻に浸る暇も無く、周囲に影が落ちる。

「——は？」

見上げれば、直径百m以上はある巨大な球体が重力に従ってこちらへ落下していた。その距離は既に、一方通行が手を伸ばせば届く位置まで迫っている。

「ギ、ギげんなアアアア!!」

反射は発動する。しかし、逸らすだけでは到底受け止め切れない面積であり、そして受けた衝撃をそのまま跳ね返されても陰陽玉は破壊されること無く、竜巻で挟らんとし

でも修復が損傷を上回って一方通行を押し潰さんと落ち続ける。

——圧死。

そんな末路が脳裏に過る。久しく感じていなかった死の恐怖に半ば狂乱状態になりながら一方通行は生き延びようと全力で抗う。

「ごっ、がア……ッ……」

そして、この瞬間。

地球の自転が五分ほど遅くなった。

陰陽玉が炸裂するように砕け散る。

廻る廻る景色が変わっていったこの操車場だが、もはやその面影は無く、地獄どころか奈落の底のような巨大なクレーターが出来上がっていた。

「ゼエ……ゼエ……」

その底で、一方通行は這いつくばっていた。

一か八か、地球の自転エネルギーを利用してこの地盤そのものを射出し、自分は下へと逃げた。

死に物狂い。周囲への影響など微塵も考えていなかった。ただ生き延びる為に必死だった。今更この街で、国で、世界でどんな被害がもたらされていようと、知ったこと

ではなかった。

(ア…………ツ…………右腕の骨と…………肋も何本かやられたか? はやく、ここから離れねエと…………)

生を実感する余裕さえ無い。ヨボヨボと、まるで老人のような足取りで一方通行は歩く。

ただ立つことでさえバクトル操作を用いなければ儘ならない有り様であり、その惨めと言う他無い姿は学園都市が誇る最強の超能力者からはあまりにもかけ離れていた。

「なんか少しだけ周りがゆっくりになったような気がしたんだけど、何したの?」

そして、死神が舞い降りる。

「ツ………………………」

「生きてるみたいで何より。悪いわね、あのプラズマってのをまたやられるのも厄介だし、ちよつと殺すつもりでやったわ」

淡々と、しかしどこかホツとした様子でそう言い放った霊夢に、一方通行は愕然とし、そして理解した。

彼女が先程の攻撃を最初に行わなかったのは、自身を殺してしまう可能性があるから。彼女が一度殺意を見せた途端に己はこうして襤褸雑巾のような有り様と化す程度の存在なのだ。

「――殺ス」

それを屈辱に感じるよりも先に、頭が真っ白になった。

大地を蹴り、砕かれた破片が砲弾の如く高速で射出されるが、霊夢には掠りもしない。

「……往生際が悪いわね」

そんな悪足掻きに霊夢は呆れた様子でそう呟くと大幣を構え、一步、また一步と一方通行へと近づいていく。

その動きは酷くゆっくりに見え、処刑人を彷彿とさせた。

「!!」

思わず後退りする。もはや格付けは完了したと、分からされてしまう。

(糞、糞、クソがア！　　なんで勝てねエツ!?　　どうすりやあ殺せるツ!?　　ここで負ける訳にはいかねエンだよオレはア！)

思考を巡らせる。しかし、考え付く限りの手段を行使するよりも先に目の前の化け物は動き、ここまで消耗した一方通行はこれを打開する術を持たない。

完全に詰んでいた。一方通行の明晰な頭脳はこれを理解していたが、感情がこれを認められずにいた。

(なるんだ！　　ならなきやいけねエンだよオ！　　最強のこの先、
“絶対”に!!　　そうすれば――)

——そうすれば、何だ？

この能力はいつか世界を敵に回し、世界その物を壊してしまうかもしれない。

脳裏に過る。過去の光景。誰も彼もが自分を化け物を見るかのような目で、恐れ、殺そうとしていた。

だから、人との関係を断ち独りで生きてきた。傷付けなくても済むように。何も壊さないでいられるように。

だが、無駄であつた。

『最強』のその先に興味はないかね？』

絶対的な力が欲しかつた。最強の座を狙う馬鹿共が、挑む気すら起こさなくなるような、無敵の存在になれば、きつと——。

『気にする必要はない、彼女達は人工物でしかないのだから』

そうすればいつか、誰も傷付けなくても……。

『妹達だつて精一杯生きてきたんだぞ』

また、あの輪の中に——。

モルモット
実験動物、複製の^{クローン}人形、己が立つのはその屍の山の上であり、その手は真つ赤に染まつていた。

(あア……何やってんだ、俺は)

本末転倒。分かつていたはずだ。その上で後戻りは出来ない、今更引き返してどうするのだと切り捨てたのだろう。

ただ、怖かったのだ。口車に乗って騙された挙げ句、ここで止めて、ただ己が無意味に手を汚して、大勢の命を無駄に奪ったという事実を受け止める勇気が無く、目を逸らしていただけに過ぎない。

——本当に、度し難い、救いようがない屑だ。

(俺が、本当に欲しかったのは……)
違和感。

(なんで……なんで俺はアイツで満足しなかったんだア……？ 居たじゃねエかよ、すぐそこに)

今正に迫っている少女。彼女こそが、一方通行が追い求めて止まなかったモノではないのか。

(アイツとなら——)
嫉妬していた。羨望していた。

己が持ち得ないモノを持つている彼女のことを、そんな感情を抱いている己自身にも腹立ち、鬱陶しくて仕方がなかった。

けれど、心のどこかで「安らぎ」というものを感じていたのを今頃になって気付く。

一方通行の反射を突破し、その力を微塵も恐れず、敵意すらも抱いていなかった彼女は、正しく同じ目線で手と手を取り合える「対等な相手」ではなからうか。何故気が付けなかったのか。否、とつくの昔に分かつていたはずなのに。違和感。

（——ああ、そうかア）

疑問は氷解する。こちらへ迫り行く彼女の顔を見て。

その瞳に、一方通行の姿など映っていないかった。

（そういうことかよ。そりゃ対等じゃねエよなア……オマエの方が、圧倒的に強い）

博麗霊夢は無敵ではない。

博麗霊夢は絶対ではない。

けれど、一方通行よりは一段階上のステージワンランクに居る。この己の惨めな有り様が何よりの証拠だろう。

彼女の周りは大勢の人間が居た。

多くに愛され、慕われ、一方通行が持ち得ない何もかもを得ていて、一方通行が欲する何もかもを有している。

誰よりも自由な奴だと思っていた。

（なのにアイツは独りだ）

その眼は誰も見ていない。誰も愛さず、誰も慕わず、好悪も賢愚も関係無くただ同じように見据え、そこに立つだけ。

『——お互い不自由ね』

そして、いつも何かを諦め、悲観している。

一方通行が少しでも手を伸ばせば、彼女は快くその手を取るだろう。暴力には暴力を返すように、友愛には友愛を返すに違いない。

しかし、それで一方通行の孤独感が埋まろうと、彼女はずっと孤独のまま。

(随分と柄にもねエゴと考えてたんだなア……アイツの横に立ちたいなんてよオ……)
美しく、妖しく。

何も尊ばず、誰とも並び立つことのない孤高の存在。もしも同じ所に来たら、超えることが出来たら、彼女は何を思うのだろう——。

彼女にとって孤独とは苦痛ではなく、実際には何も感じていないのかもしれない。余計なお世話だと突き返されるかもしれない。たとえ自分が絶対とやらに至ったところで何も変わらずに悲観しているかもしれない。

けれど、もしも、もしかすると。隣に理解してくれる人間が居たら、少しは気が楽になるかもしれない。

エゴに塗れた願望。根底にあつたのは、そんなくだらないモノだった。

その幕切れがこのザマならば、本望だろう。他ならぬ彼女の手によつて断罪されるのなら――。

(ふざけんな)

それは都合が良過ぎる。

結局、彼女は独りのままではないか。諦観し、悲観し続け、窮屈に思いながらそれでも渴望して、この生き辛い世界で、彼女は一体何処へ向かえば良いというのだ。

孤独で居ることの辛さは分かつているはずだ。そんな己が、この一方通行が、あろうことかたつた一人の少女に、唯一の理解者になつてくれるかもしれない相手に対して何も出来ずに見放すというのか。

否、そんなことあつていいはずがない。自覚したからこそ、一方通行は奮起する。力だ。

もつと力を。

(絶対なんて大層なことは言わねエ。ただ、アイツと対等に、共にあれるだけの力を――)

彼は、*“星”*に手を伸ばした。

「ツ!?!」

霊夢の眼が、驚愕に見開かれる。

バキツと、振り下ろした大幣が折れた。今までにない精度の引き戻し。寸分の狂いも無かつたにも拘わらず。

反射ではない。それとは全く質の違う、もつと暴力的なナニカ――。

「――i h b f 絶 t q n――」

「なっ――」

先程まで死に体だったはずの相手の変容。それに対して霊夢は反応するよりも先に、見えざる力によって為す術無く吹っ飛ばされる。

第二ラウンドが、始まろうとしていた。

黒翼

「何よ……これ……？」

御坂美琴は愕然とする。目の前には、地獄としか形容出来ない光景が広がっていた。幾度も何かが爆発し、轟音が鳴り響いた。戦いの範囲はどんどん広がっていき、その度に被害が及ばないであろう位置まで逃れたのだが……。

「一体、何が起こってるのよ……！」

隕石でも落下したような巨大なクレーター。そこがつい先程まで操車場だったと言われても誰も信じないだろう。たった二人の能力者同士の戦闘で起きたものとは思えない有り様だった。

あまりにも次元が違い過ぎる。一方通行も、博麗霊夢も自分相手には微塵も本気など出していかなかったのだと思いきや知らされてしまう。

（さっきまでと違ってやけに静かね……戦闘が終わった？ 博麗さん、大丈夫なんですようね……？）

しかし、己が実力不足を嘆いている余裕は無く、ただただ霊夢の安否を心配する。

「うつ……」

その時、隣で寝かせていた上条がピクリと動く。

「！ 目が覚めたの？」

「み、御坂……」

「良かった……じゃなくてっ、無理に動かないで！ 傷が開くわよ！」

ゆつくりと身体を起こす上条。霊夢の手によつて傷自体は塞がっていたとはいえかなり血を失っていたはず。その状態で意識を取り戻す頑丈さに驚きつつも、御坂は無事なその姿に安堵する。

「確か俺は……そうだ、博麗！ あいつは……！」

「あの人は今、一方通行と闘っているわ。あっちの方で——」

状況を説明しようとした次の瞬間。大穴から何かが凄まじい速度で飛び出して言葉を遮った。

「ツ！ 今度は何っ!?!」

視線を凝らせば、ロケットのように天高く打ち出されていたのは人影。

そして、その姿は——。

「——博麗さんっ!?!」

悲鳴に近い声で御坂は叫ぶ。

やはりと言うべきか、戦いはまだ終わってなどいなかった。

「ツ——やってくれたわね」

途中でどうにか押し留まる。あの勢いのままであれば、危うく宇宙の彼方まで吹っ飛ばされるところだった。

全身の骨が軋む。問題は無いにせよ内臓にもダメージが入っている。寸前で結界を張ったが、その程度では衝撃を殺し切れることは出来なかったようだ。

ちらりと根本から折れ、単なる木の棒と化した大幣を一瞥する。

(修復は無理ね。この前、補充したばかりだったのに……)

長年連れ添ったソレを何の感慨も無く放り捨て、霊夢は穴の底に居る一方通行を見下ろす。

背中から噴出するように生えている、一對の禍々しい「黒い翼」。それ自体が一方通行の出力する力そのもの。学園都市風に言えば、「AIM拡散力場」という奴なのだろう。

(成程。ベクトル操作つてのは……片鱗に過ぎなかった訳だ。あれが、あれこそがあの能力の本質なのね)

その力は、もはや科学よりも魔術オカルトに近い。霊夢からすれば神力にも近いように思えた。

(けれど、制御し切れていない)

一方通行の顔を見る。そこに理性は無く、ただ本能のままに暴れ狂っていた。

暴走状態。宛ら上条当麻の右手が損傷した際に現れるドラゴンやその中身のように。その強大な力を一方通行は制御することが出来ておらず、それが噴射の黒翼の不安定さにも現れている。

それは果たして幸か不幸か。どちらにせよ、一方通行は敵と認識した存在を屠らんとする為に、その神が如き力の片鱗を存分に振るう――。

(――来る)

一方通行が一步、足を踏み出す。それとほぼ同時に第六感が全力で警告する。

踏みしめるだけで一帯の地面が陥没し、黒翼を起点に不可視の力が空間を歪ませながら遙か上空を漂う霊夢に一瞬にして接近する。

「ッ――」

――夢想封印 瞬――

寸前で霊夢は転移した。そして、降り注ぐ無数の光弾が荒れ狂う力とぶつかり合う。

(やっぱり、追ってくるわよね)

どうやって認識しているのか、瞬間移動する霊夢を即座に感知して黒翼が超音速で追尾する。夢想封印に関しても波状に発生する力場によって相殺されているようだ。

否、むしろ押されている。ならば弾数を増やすまで。

「――i h b f 殺 w q――」

ノイズ混じりの、言葉かすら怪しい言語。獰猛な笑みを浮かべたその顔には、純粹なる殺意と闘争本能のみが存在していた。

「つたく……自分の力に振り回されてんじゃないわよ、最強」

夜空を埋め尽くし、まるで奔流する荒波のようになねり幾千幾万の光弾が巨大な塊となつて一方通行を飲み込む。

その魔力は無尽蔵だと言わんばかりの、拡散させればこの学園都市全域を飲み込まんとするであろう圧倒的な物量。当然一つ一つがパターンを変えており、反射対策が為されている。

「s q 無 h――」

――が、そんな制圧攻撃の中を一方通行は構わず突き進む。

「!」

黒翼が生き物のようになねり、届く範囲の全てを無に帰す。上空で行われたその余波は地上にも影響を与え、台風の如き突風が巻き起こって街路樹は倒れ、ビルの窓ガラスが次々と割れ、人々は戸惑う。

そんな恐ろしき一連の行動は迎撃というよりは予備動作であり、黒翼が裂けるように

して無数の黒い羽のような断片が出現し、機銃の如く放たれる。

「チイツ——」

貫通力が高いのか。羽の散弾は光弾を容易く貫き、尚も勢いは弱まらない。

もはや周りの被害を気にする余裕は無い。霊夢は瞬間移動を交えつつ最大速度で飛行し、回避に徹する。満遍なく放たれたそれら一つ一つに膨大なエネルギーが秘められており、まともを受ければ炸裂して全身が断裂してズタズタになるだろう。

「はっ……さつきよりも芸が無いんじゃない？」

——陰陽鬼神玉——

隙を見て、霊夢は次なる一手を打つ。先程と同様に巨大な陰陽玉を形成し、押し潰さんとする。

「——gh壊agy殺f………ッ!!」

これに対して一方通行は一步も退くことなく、喉が潰れんばかりの絶叫をあげながら腕を振り上げる。その動作だけで自由落下していた陰陽玉に黒翼と不可視の力が衝突し、せき止められた。

損傷した傍から魔力が供給されて再生する陰陽玉。しかし、拮抗しているように見え、これ以上進むこと無く、逆に増幅していく力によって徐々に押し上げられていく。

「へえ——」

ドラゴンブレス
竜王の殺息すらも押し留めた陰陽玉の再生速度を破壊速度が上回り、陰陽玉に罅が入る。

その罅は、どんどん広がっていく――。

「こりゃ、ちよいとまずいかも……ね!」

そして、陰陽玉が砕け散った。

出鱈目な出力。この時点で少なくとも攻撃力に関しては霊夢の有するあらゆる攻撃を超えているのが確定する。先程まで使っていたプラズマや竜巻といった派手な攻撃を使わなくなったのは、暴走しているからというのもあるが、単純に破壊力と殺傷能力に関してはそのらと比べ物にもならないから。

恐らくあの黒翼そのものが幻想殺しても打ち消せないレベルのエネルギーに満ちているのだろう。

「なら、二個目はどうすんの?」

「ッ!」

この結果を先読みして予め形成していたのか。直ぐ様、もう一つの陰陽玉が上空から落下する。これに一方通行は同様に打ち砕かんと――。

「んでもって、三個目……!」

――黒翼を振るった矢先に背中に衝撃が走る。もう一つの陰陽玉が下方から迫り、挟

み撃つように押し潰す。

二つの陰陽玉は互いに反発し、ぶつかり合いながらも膨れ上がるように肥大化していく。それに伴い修復速度も段違いだった。

「さて、これでやられてくれると助かるんだけど——」

次の瞬間、陰陽玉が爆発する。

「ま、そんなことはないか」

「殺y p s——」

爆煙から姿を現した一方通行。あれだけの猛攻に対して目立った外傷は無く、あの黒翼が発生する前に受けた怪我も意に介していない様子である。

全く効いていないのか。それとも暴走状態であるが故に、ダメージを無視して動いているのか。

どちらにせよ、こちらからの有効打はゼロ。現状いくら攻撃しても黒翼の力によって破られるばかりであり、スタミナ切れした瞬間に終わる。

端的に言えば、霊夢は追い詰められていた。

「ふう……やるじゃない」

そんな危機的状况にも拘わらず、霊夢は心底感心した様子で呟く。

「……までの力を隠してたなんてね。それとも、実験とやらの成果かしら？」

その問い掛けに対する返答は当然無く、黒翼がまるで手足のようになり、付近のものを粉碎しながら迫る。

「——良いわ。気が済むまで、存分にやるとしましょう」

絶大なる力から逃れつつ、霊夢は笑った。

思い返すと、初めて一方通行と対峙した際にも同じ感情を抱いていた。己が敗北するかもしれないという危機感。いつもなら面倒極まりなくうんざりするであろうこの状況に、今の霊夢は高揚し、心地好さすら感じてしまっている。

一方通行は自分とは違う。何もかもを諦め、しかし不満を抱き、渴望して止まず、ただただこの夢無き世界を呪い、悲観しているだけの哀れな少女とは違い、現状を打開しようとして必死で抗っている。

その過程で二万人を虐殺しようと、霊夢は決して責めはしない。むしろそうまでして「無敵」とやらを、*「絶対」*とやらを得ようとしている彼に対して敬意すら払うだろう。

アウレオルス・イザードもそうだった。あの男もまた己が目的の為に必死で見苦しいまでに足掻いたからこそあそこまで厄介だったのだ。

そのどれもが、霊夢には無いもの。

故にこそ。

「——4 y j r p 滅 q w——」

「——ええ。来なさい。アクセラレータ」

ただ己を打倒する為だけに、この土壇場で新たなる段階へと至った彼に対し、霊夢もまた全身全霊を以て応じる。

二つの力が衝突し、学園都市全体が揺れた。

「——まずいな」

窓のないビルにて。統括理事長アレイスターは現在起きている状況について溜め息交じりに呟く。

恐れていた博麗霊夢と一方通行の衝突。その過程で現出したあの「黒い翼」——それはプランの要でもある「ベクトル制御装置」が完成したことを意味しており、思わぬ幸運であったが、それを加味したとしてもこれ程のイレギュラーは到底許容出来ないものであった。

今頃実験を主導している研究者達は予想外の事態に混乱していることだろう。そもそもこの有り様を観測出来ているかすら怪しいが。

「儘ならないものだ。彼女が来る前に幻想殺しが一方通行に勝利する……というのが、最も望ましい結末だったのだが」

当然と言えば当然であるが、一方通行は過去の戦闘経験から反射を突破する者への対策を用意していた。それだけではなく、上条当麻が記憶喪失で戦闘経験がリセットされていたのも要因だろう。万全であればもっと上手く対応していただろうし、最悪右手の中身を解放して勝利していたはずだ。

加えて、博麗霊夢がこちらの足止めを物ともせず想定よりも早く駆け付けた。これに関しては岡崎夢美や宇佐見薫子か……十中八九、他の介入があつたからであろう。

「ふむ。それは無能力者に一方通行が敗れた、という結果でなければ実験が中止にならないから、かね？　アレイスター」

同じ空間に居る、葉巻を啜えたゴールデンレトリバー……木原脳幹が問う。

「それに関しては問題無い。博麗霊夢が介入した以上、実験が中止されるのは必然。が、それ以前にこのままではこの街そのものが存続の危機に陥るかもしれないな」

それはつまり二人の戦闘の余波だけでこの学園都市が消失する可能性があるという意味。確かに彼らにはそれだけの力があつた。

「ほう？　では、A・A・Aを投入するかね？　尤も、我々の直接介入は最後の手段だと思うが……」

「その通りだ。こちらの鬼札ジョーカーを切るにはあまりにも早過ぎる。況してや相手が相手……かといって静観に徹して学園都市と第一位の双方を失うという最悪の展開になるのは頂けない。アレには殺意は無いが、容赦も無いのだから」

「……一方通行が敗北するのは確定事項かね？」

脳幹が訝しむ。一見すると、霊夢と一方通行の力関係は拮抗している。むしろ単純なパワー勝負ならば一方通行が優っているようにすら感じるし、彼の力は暴走状態とはいえその解析力は健在であり、戦闘が長引くにつれ強まり、成長していく。

対する霊夢もまた、底を見せていない。脳幹から見れば勝敗は未だに読めないように思えた。

「当然だ。むしろそれ以外には有り得ない。結局のところあの力は、アイオーン「オシリスの時代」に過ぎないのだから。今の博麗霊夢は、アイオーン「ホルスの時代」に……否、或いはそれすらも飛び越えて——」

かの巫女の能力の真髄。名が失われたそれは、実際にこの目で視たことで確信した。それはアレイスタークロウリーが、この世界が定義した概念から逸脱し、ありとあらゆる法則に縛られず、囚われない。

イレギュラー。

存在するべきではない力。あつてはならない不確定要素にしてスイッチの無い核弾

頭。それこそが世界最高の魔術師がたった一人の少女を警戒する最たる所以。

本来であれば今すぐにでも排除すべきであるが、彼にとって彼女は触れることすら憚れる。『パンドラの匣』でもあった。

その蓋を開くのは、少なくとも己ではない。

「さて、君はどうする？　彼女は再び成ったぞ」

「……………？」

ぼつりと溢した、その眩きが誰に対するものなのか、長年連れ添った友犬は理解出来なかった。

けれど、これだけは理解する。この時折その場の思い付きで行動する自堕落なボンクラはきつと、この由々しき事態を楽しんでいるのだと。

(ハア……博麗霊夢に個人的に興味を抱いている私が言えたことではないがね。君が私の知らぬところでナニと繋がっているのか知らないが……この混沌を楽しみ過ぎて足を掬われないことを祈るよ)

心の中で溜め息を溢し、今後の展開からどういった対処をすべきかを予測して思案する。

どう結果が転ぼうと、脳幹は変わりはしない。ただ己が与えられた役割を遂行するのみだ。

「……………」

場面は変わり、宙の上。『彼女』はつまらなそうに幻想を生きる巫女と神の使いに匹敵する存在へと至った者との戦いを眺めていた。

存外、遅かった。ある者にとっては待ち侘びた事象であり、ある者にとっては望ましくない事象である。

そして、『彼女』は後者であった。

「……………」

——ここで消すべきか否か。

顔に手を当て、思案する。その在り方は歪であり、まだ充分に修正が利く。リスクを考慮すれば手を出すのはまだ早計に思える。

然りとて、もはやアレへの直接的な干渉は不可能。自動書記の時のような御膳立ては出来ない。

あの『銀の星』を名乗る魔術師は傍観に徹し、きつと己が動くことを望んでいる。そうすれば不確定要素が消えるし、自身の戦力を隠すことが出来るのだから。

そして、その目論みは期待半分。実のところ放置しても構わないとすら思っているの
だろう。

それは『彼女』とて同じだった。どちらでもいい。だからこそ、決めあぐね、どうし

たものかと悠長に思案に耽る。

「……さて、どうする？」

最後に、誰かの名を口にした。

虚空に向けた問いかけに答える者など当然居るはずもなく、
“彼女”の発した貴重な
言葉はそのまま消えて行く。

二色蝶

いつも窮屈だった。

誰も尊ぶことなく、誰とも並び立つことなく、誰からも理解されず、しかしそんなものは些末に等しく、何にも縛られず、囚われず、惹かれず、ただただ己が道があるがままに往く。

自己中心的の権化。それこそが博麗霊夢という人間であり、この世に生まれ落ちた瞬間からそうであり、全てを忘却してもその在り方は不変である。

——だというのに、彼女にとってこの世界は酷く生き辛かった。

違和感。

不快感。

嫌悪感。

明確な理由も無くそれが胸の奥底に重油のようにこびりついて仕方がなかった。優しき養父と穏やかな日々を過ごし、科学の街で騒がしくも退屈しない日々を過ごし、それは微塵足りとも変わりはしなかった。

ありとあらゆるものが、この世界そのものが拒絶している。己を異物として爪弾きにしようとしているのだと、そう悟らずにはいられない。

だからこそ、朧気な記憶に残る“幻想”を渴望したのでらう。

あの光景は、ひたすらに美しかったが故に。

けれど――。

「――ahhyq――」

一方通行は困惑した。

本能のまま外敵を滅する理性無き狂獣が、目の前で起きた矛盾に一瞬フリーズする。

博麗霊夢はそこに居る。姿も確かにそこにある。視覚による情報は彼女がすぐ目の

前に居ることを脳に伝えている。

――けれど、そこに居ない。

風の流れ、この空間を構築する粒子のベクトルまで支配する一方通行は、視覚以外の全ての要素で博麗霊夢を見失っていた。

ならば、そこに居るのは何だ？ 周囲に高エネルギーに満ちた球体を幾つも漂わせて

いるのは、一体何なのだ？

「――やっぱり気分が良いわね、これ」

踵が、下顎にめり込む。

不可視の力の猛威をすり抜け、瞬く間にこちらへと接近した霊夢が蹴り上げた。

「k g i不y j i——ッ!？」

否、否、否。

確かにそこに居る。居ないけど、居る。ありとあらゆる干渉をはね除けながら、こちらへ干渉してきた——。

まるで不透明な透明人間のように。

「y死ih——nb殺wq——!」

黒翼がうねり、八つ裂きにせんと暴れ狂う。迫り来る光弾を消し飛ばし、陰陽玉を砕き、何もかもを破壊しながら。

しかし、そんな災害が可愛く見える攻撃が繰り広げられる真っ只中で霊夢は意に介さず、涼しげな表情を浮かべていた。

黒翼による打撃も、羽の散弾も、それが発生させる不可視の力場も届かない。その掌から溢れ落ちるように、ひらりひらりと蝶の如く舞って——。

「……………ッ!？」

「ああ、ぶっちゃけ私もよく分かってないのよ、この力について」

明らかに当たっているのに、当たっていない。そんな理解不能な状況に対する一方通行の動揺を読み取った様子で霊夢は言う。

同時に放たれる弾幕は、先程の物よりも量も質も圧倒的な、より純粋な力。それが黒翼の力と衝突する度に空間が弾け、大気を震動させる。

「ただ——」

霊夢は笑う。愉しげに。

「——今の私は、何よりも自由な気がするわ」

この時、この瞬間だけは、霊夢はありとあらゆる柵から解放される。

世界という枷すらも——。

「——y b 狂 g e h % r ——」

涅槃。

まるで何もかもを悟ったような容貌を見せながらそう言い放った霊夢に、一方通行は理解し難いと言わんばかりに叫ぶ。

解析、解析、解析——。理性無き本能のみで動く殺戮マシンは目の前の対象を屠る手段を、方法を導き出さんと脳をフル回転させる。

「無駄よ」

しかし、霊夢はそれを待つてはくれない。

ソツと優しく添えるように、一方通行の頭頂部に触れる。

——触れた？

「ま、追い付けるのなら、あんたもさっさと来なさい」

そして、打って変わって乱暴に掴むと上空数百mから勢いをつけて降下し、地面へと叩き付けた。

「i y h ツ!？」

一瞬にして地面へとめり込む一方通行。然れど、霊夢は手を離すことなく、そのまま引き摺るように前進する。

岩盤ごと大地が砕かれ、地割れのような跡が残る。拘束から逃れんと一方通行は抵抗するも、霊夢に干渉することは出来ずがままだった。

確かに触れられている感触。引き戻しによる裏技でも解析不能なベクトルでもなく、ごく普通に触れられている。

かといって、あの少年の右手のように反射を打ち消しているのではなく、どちらかと言えば機能している反射を無視してすり抜けているかのようであった。

一体どういう理屈なのか。何よりも意味不明で理不尽なのが、こちらは彼女に指一本足りとも触れることが出来ないということ――。

「さて、場所を変えようかしら」

すると霊夢は掴んでいた一方通行を思い切り上方へと放り投げ、片手で印を結ぶ。

「y q 死――」

瞬間、全身に衝撃が走り、打ち上げられる。視界を埋め尽くすのは極彩色の光。追撃と理解した一方通行は即座に己が力をぶつけ、押し戻さんとする。

——が、勢いは止まらない。それどころか信じられぬスピードで増幅していた。

「ッ……………!?!」

先程までとは比べ物にならない出力。無尽蔵のエネルギーが拮抗し、徐々に押し返していく。

一方通行は観測出来ないが、森羅万象ありとあらゆるモノから浮き続ける霊夢はより高次な存在へと至り、その魔力は常に増大している。

際限無く——。

「吹っ飛びなさい」

——そして、一方通行はこの街どころか、日本列島から飛び出した。

常に上昇し続ける出力。

それは霊夢の能力ではなく、あくまでも偶発的な副作用であった。

(少し不安定ね。別に支障があるって訳じゃないけども……何かが足りない?)

淡々と己が力を考察する。あの時、テレステイナーナ||木原||ライフラインの手によって思い出せた、主に空を飛ぶ程度の能力の真髄であり、奥義。あの噴射の黒翼を発生させた一方通行を圧倒するだけの力を発揮しながらも霊夢はどこか欠けているような気がした。

言うなれば、不安定。かといってかつてのそれと比べて弱体化しているのかと言われれば疑問であり、むしろ安定していないからこそ純粹なる力として具現化され、出力さ

れているようだった。

——どうであれ。

「結構飛んだわね。日本海か太平洋か知らないけど……ここなら街が滅茶苦茶にならないし、より存分にやれるでしょ？」

辺り一面に広がる大海原。荒々しく波を立て、暗い水面には夜空の月が浮かび上がっている。

その遙か上空で、霊夢と一方通行は対峙していた。

「——inbf殺wq——」

攻撃に押し負け、猛スピードで日本を飛び出して海のと真ん中まで吹っ飛ばされた一方通行。しかし、未だに健在であり、闘争本能を剥き出しにして霊夢を睨む。

疲弊した様子も無し。多少の生傷ならば細胞分裂を促進させることで治療し、そもそも痛覚や疲労を感じる理性など残っているはずもない。

故に、怪物は止まることなくただひたすらに暴れ狂う。目の前の存在を跡形も無く消滅させるまで——。

(タフね。あいつ自身はもやしのはずなんだけど……やっぱり肉体の方のタガも外れてるみたいね)

奥義を披露し、ここまで圧倒しながらも一方通行自身に大したダメージは無い。結局

のところ光弾の出力をいくら上げたところで反射の膜を完全に貫通せず、有効打にはなっていないのだろう。

やはりと言うべきか、神の如き力の片鱗というのは伊達ではないようだ。ならば目には目を歯には歯を、と言いたいところではあるが、それが今この場で成功するかどうかは分からなかった。

(ま、問題無し。このまま真正面から叩き伏せる——)

圧倒的優位は決して揺るがない。この世界から浮いている霊夢本人の直接攻撃はあらゆる防御をすり抜けて通じるのだから。

対する一方通行もこれを理解しており、この世界に存在する、しないに限らず全ての法則を支配し、霊夢に干渉し、打倒する術を死に物狂いで導き出さんとする。

世界を震撼させる、両者の力が、今一度ぶつかろうとしていた——。

「くだらない」

その茶番をずっと視ていた「彼女」は、漸く重い腰を上げた。

「ッ!?!」

両者の動きが止まる。誰も気が付かなかった、ソレがすぐそこに居たことに。

「(ハ)の感じ……まさか……!」

認識すると同時に即座に霊夢は察する。あれがあの時、路地裏で自分から実験に關す

る記憶を奪った得体の知れぬ存在であると。

実験の関係者だとは思っていたし、一方通行を差し置いて最大の脅威だとも認識していた。それが、このタイミングで仕掛けてくるとは。

「はっ、この前のようにには行かないわよ!」

霊夢の行動は早かった。優先順位を切り替え、無数の陰陽玉を射出する。

「貴方には、そうでしょうね」

しかし、呑み込まんとするそれらは瞬く間に相殺される。

瓜二つの姿をした陰陽玉によって。

「……………ッ!」

目を見開く霊夢。流石にこの程度で倒せるとは思っていなかったが、よもや同じ陰陽玉を攻撃手段に迎撃されるとは。霊夢の物と全く同質という訳ではないが、その形状はよく似ていた。

一体何者なのか。そう考えると同時にズキリ、と頭に痛みが走る。

「ッ……………何?」

「だが——」

一方、*「彼女」*はそんな霊夢には目もくれず、突然のことに硬直していた一方通行へと視線を向ける。

「——i y p p g n 殺 q y——」

これに反応し、一方通行は標的を霊夢から「彼女」へと変更し、牙を剥く。

「貴方の行動は、無意味」

黒翼の力が磨り潰さんと迫り、届く寸前でぐにやりと捻じ曲がった。「彼女」はまるで埃を払うかのように腕を僅かに動かしただけである。

「ッ!?!」

「貴方は、博麗霊夢には勝てない」

湾曲した黒翼が霧散する。「彼女」は無表情で淡々と一言、そう発するのみ。

「n b e k a q y h——ッ!?!」

同時に、一方通行は更なる力によって上から叩き付けられ、巨大な水飛沫が上がる。

「なっ……:……どういふつもり?」

この行動に霊夢は眉をひそめる。実験に関する記憶を奪ったことから実験の関係者、或いは実験の継続を望んでいるのはほぼ確実だった。

少なくとも一方通行とは味方関係のほず。だというのに、一方通行に対して攻撃を加えるという行為に出たことが理解し難かった。

「見飽きた。これ以上、茶番にも些事にも付き合う義理は無い」

「ああん? 誰だお前? いきなり割り込んできたかと思えば……随分と言ってくれる

じやない。水を差された気分だわ」

「……そうでは無い。元より割り込んだのは、貴方の方なのだから。博麗の巫女よ」

姿も、声も、言動も、まるで靄が掛かったように曖昧で不鮮明。唯一分かるのは、底が知れぬ強大な力を有しているということ。

霊夢は、目の前の女を量りかねていた。そもそもそんな情報しか分かっていないはずなのにアレを女であると判断出来てしまっていること自体が異常であるが。

「……精々戦うといい。気が済むまで」

そして、最大限警戒し、様子を伺っていた霊夢に対してそう言い放った次の瞬間、海面が一気にせり上がり、巨大な水柱が二人を飲み込んだ。

「……何？」

濡れもせず、微動だにしない霊夢。しかし、分厚い海水によって一瞬視界が塞がり、晴れた時には既に「彼女」の姿は無かった。

「はあ？ まさか、逃げたつての——」

「——ッ!!」

霊夢がその姿を探そうと辺りを見回した矢先に、到底言葉とは言えないような獣染みを咆哮が背後から響き渡る。

「!? ……アクセラ？」

振り返れば、そこに居るのは一方通行。その背に生えているのは先程までの黒翼ではなかった。

形容し難い、グロテスクな何かに染め上げられた翼かどうかも分からない混沌——。

「——ッ!!」

「……余計に暴走してどうすんのよ」

否、単なる暴走状態ではない。ただ殺意と本能のみで動いていたそれとは違い、そこには理性が無いにも拘わらず強烈な憎悪、怒りが滲み出て、その精神が翼にも反映されているように見えた。

(まさか、あいつが何かした……?)

その変異に、霊夢はあの女が関与しているのではないかと疑う。奴の能力が、自分の記憶を奪ったように、原理はどうであれ他者の精神に作用させるものであるのならその可能性は充分にある。

恐らく霊夢に干渉出来ないため一方通行の方に干渉した……ということなのだろう。頑なに自分で戦わない理由が分からないが、そんな事を考えている場合ではない。

「——ッ!!」

対する一方通行は力を振るう。何かに突き動かされるように、その衝動に抗う余地はない。

ただ、目の前の少女を殲滅することしか考えていなかった。

「ツ——！」

ぐにやりと、空間が歪む。それを見て霊夢は慌てて膨大な量の弾幕を放って迎え撃つ。

数瞬、世界から音が消えた。

「ツ……心中でもするつもり？ あんた」

地が揺れ、海が裂け、天が荒れる。

相殺しただけでこの有り様。何もしなければ、射程上にあつた大陸や島々を巻き込み、甚大な被害をもたらしていたかもしれない。

その力は、世界をも滅ぼすだろう。一方通行自身すらも巻き込んで。

（ああもう……これじゃ移動した意味が無いじゃないの）

霊夢がやるべきことは、一方通行を戦闘不能にすること。このまま戦い続けければ勝利するのは霊夢だろう。

だが、その過程で周りには滅茶苦茶になる。果たしてどれだけ被害を抑え込めるか

「?????????
.....
????? a y ——
.....
?」

「——inbf……無y——こ、のrq——」

その時だった。

一方通行の様子がおかしいことに気付く。頭を掻きむしり、苦しそうに唸っている。

(今度は何……?)

それに呼応するように、翼の形をしたものが不安定になっていく。グロテスクなそれが先程の黒翼に近付いているように見えた。

否、これは——。

「gア……yijpふぎ、けaarn??——」

「……そういうこと。そりゃそうね、あんたは誰かに指図されて動くようなタマじやない」

霊夢が笑う。あの女が何をしたのかは分からない。しかし、何かされたということだけは本能的に理解したのだろう。

一方通行は、それに全力で抗っている。それに伴って、僅かにであるが、理性を取り戻しつつあった。

「——良いわ。手助けしてあげるから、さっさと正気に戻りなさいよ、最強」

極彩色の光が天を覆い尽くす。

光弾、御札、封魔針、陰陽玉。霊夢の有するありとあらゆる弾幕が奔流の如く降り注

いだ。

『ちよつと、何やってんのよ』

『あん?』

いつものように喧嘩を売ってきた身の程知らずの馬鹿共を掃除していた時に、そいつ

は現れた。

『ジャツジメントよ。不良に絡まれてる人が居るって通報があつただけど……こりや絡むどころじゃあないわね』

面倒臭そうに首を回し、こちらを見据える紅白の巫女。風紀委員には到底見えない格好であるが、その身分は腕章が証明していた。

『とりあえずしよつぴくから、大人しくてよね。白もやしくん』

『……あ？』

それが、最初の出会いだった。

『ベクトル操作、ねえ……なかなか便利な能力じゃないの。最強を名乗るだけはあるわ』
皆が恐れるその能力を臆すること無く、ただ便利と言つてのけた。散々その力を見せ付けたというのに、そして単なる愚か者ではなく相応の力を有していた。

そんな奴は、初めてだった。

(なん、……だア?)

何故今になってそれを思い出したのか。都合の良い話だろう、あの時はただ鬱陶しい
としか思っていなかったはずだ。

それとも知らない内に、自分でも気付いていないだけで、あの瞬間から彼女に惹かれていたのだろうか。

(無様なモンだなア……)

理性を失つて暴走している間、それでも意識はあり、記憶も残っていた。

土壇場で現出した黒い翼。その力は、論理の範疇から飛び出した、自覚すらしていなかった理外の力であり、しかしそれがベクトル操作という能力に隠された、真の力であることは容易に理解出来た。

目の当たりにして、改めて思い知らされる。この力は、世界を敵に回す、否、世界そのものを滅ぼしてしまうのだと――。

『貴方は、博麗霊夢には勝てない』

脳裏に過る。そう囁かれた瞬間、目の前が真っ赤に染まり、何も見えず、何も考えられなくなった。

正しくその通りだ。世界を滅ぼす力を以てしても彼女には届かない。ここまで来るともはや笑えてくる。その理不尽な力にも、それに届かぬ己の弱さにも。

けれど、だからこそ、他人の力で倒すなど許せるはずがなかった。

「つたく……どこの誰だか知らねエが、ふざけてンじゃあねエぞ……」

酷く頭がスツキリする。縛られていた何かから解き放たれたように。

——そうか。存外、容易いものだった。この力を制御することなど。

「あ、やっとか」

目の前には彼女が居た。あの時のように、面倒臭そうに首を回しながら。

「悪リイ……待たせたなア」

翼は生えたまま。相も変わらず漆黒に染まっているが、勝手に暴れることもないし、理性もはつきりしている。

その分、相応の何かの浪費を大量に促しているようで長時間維持することは出来なそうだ。

——十分に過ぎる。

「ふうん……良い面構えになったわね」

一体どういう心境の変化があったのか？ と怪訝な表情。確かに彼女からしてみれば痛め付けられて暴走し、正気に戻ったかと思えば先程とは全く違う様子なのだから当然の反応だろう。

然りとて、その疑問を投げ掛けるつもりは無さそうだ。

「じゃあ、早い内に終わらせましょう。あんたが正気に戻るまでにドンパチやってたから霊力が尽きそうだわ」

「はン……負けた時の為の言い訳かア？」

「あー？ そう言うあんたこそ限界でしょうに」

笑い合う。そこに怒りも、憎しみも、殺意すら無く、命のやり取りをしている関係と

は思えぬ程に爽やかで穏やかなものだった。

勝ち負けなど関係無い。散々拘っていたその概念が、今ではあまりにも程度が低く、どうでも良く感じていた。

「なア……もしかして、世界から浮いてンのかア？ オマエ」

ふと、問い掛ける。自分でも突拍子の無い事を言っているのは理解出来たが、そうであれば今も尚目の前に居るはずの彼女を観測出来ないのも、この世のありとあらゆる法則を用いた攻撃が届かないのも納得出来た。

単純明快。そこには存在しないのだから。

「あら、ご名答よ。言つとくけど、理屈を尋ねられても困るから」

そして、彼女はその答えを導き出したことに少し感心しながら、さも当たり前のように言い放つ。

「そうかよオ……まったく、どこまでも馬鹿げた女だなア、テメエは」

何が無重制御だ。ブラビテイルラーこの街の科学者共の無能っぷりにはいい加減うんざりさせられる。

であれば、現状用いられる攻撃手段では彼女に攻撃を当てることは限りなく不可能に近い。聡明な頭脳は容易くその結論に至った。

「——行くぞ」

だが、それがどうした。どちらにせよ、これが最後の一撃なのだ。

「——ええ。行くわよ」

空間が震え、荒れ、歪み、叫ぶ。

これで決着がつく。両者の繰り出した全身全霊の攻撃が真正面から衝突し、交差し、押し合う。

そして——。

人間

——夜が明ける。

海面上から顔を覗かせる太陽が、周囲を照らす。つい先程まで行われていた世界を揺らした戦いの勝者を祝福するように。

「つたく……霊力がすつからかんよ」

能力を解除し、この世界へと戻った瞬間に襲い掛かる虚脱感。それまでの解放感とのギャップに霊夢は溜め息を吐く。

やはりまだ不安定な力であるため消耗が激しい。とはいえ通常ではこうも疲労することはなく、ひとえに一方通行に対抗する為に出力を上げ過ぎたからだろう。

「二度と御免よ。あんたの相手をするのは」

「チツ……こつちの台詞だ、馬鹿が」

すぐ横で、大の字になって仰向けに倒れている一方通行。もはや普段は常時展開している反射の膜を維持することさえ困難な程に満身創痍だった。

壮絶な死闘は幕を閉じた。博麗霊夢の勝利というある意味では予定調和と言える結

果を以て。

「敗者となった一方通行に後悔は無い。独り善がりな自己満足な目的で迷走した果てに、他ならぬ霊夢が終止符を打ってくれたのだから。」

あまりにも妥当で、贅沢が過ぎる結末だろう。あの時、科学者共の口車に乗って最初のクローンを殺した瞬間から、或いはそもそも初めから、自分に彼女と並び立つ資格などあるはずが無かったのだ。

本当に――。

「……ねえ、アクセラ」

「あア？」

「戦いを始める時にさ。今更引き返せるとでも思ってたんのか、って言ってたじゃない？」
唐突に、霊夢が問い掛ける。

『一応訊いておくけど、今からでも止める気はない？ レベル6ナンタラってのが本当は無意味だつてのは薄々分かつてるでしょ』

『あん？ 興が冷めるようなこと言うンじゃねエよ。ま、テメエをぶつ殺した後なら結果次第で考えてやらンでもねエが……というか、今更引き返せるとでも思ってたンのかア？』

ああ、確かに言った。記憶力が良いことだと、一方通行は無言ながらも肯定の意を示

す。

「それって、もしかしなくてもクローンを殺してきてたことに対してよね？ あんだけ大勢殺してしまっただから、もう後戻りなんて出来ないっていうこと？」

「……だったら、なんだ？」

その通りである。己の手は、夥しい量の血で染まっている。

誰も傷付けたくないからと無垢な子供のように力を求めながら、10031人も命を遊び、奪い、ゴミのように踏みじった、本末転倒な愚か者。

挙げ句にこうして無様に敗北し、その犠牲すらも無意味で無価値なものにしてしまったのだから、本当に救いようがない。

「私にはクローンが人間だとかそういうのは判断しかねるわ。ちゃんと会ったことはないし……けれど、あんたが人間だと思っっているのなら、とんでもない重罪人よ。地獄行き確定のね」

「は。地獄行き、か……至極当然だろうなア。因みに訊くが、オマエが人間かどうか判断する基準は？」

巫女からお墨付きを貰ってしまった。一方通行は自嘲しながらもふと疑問に思ったことを尋ねる。

「そうねえ……二足歩行で喋れて、妖精とか妖怪とかじゃないかどうか」

何だそりゃ、と一方通行は呆れる。

「——それと、まあ色々あるけど私が思うに、人間を人間足らしめているモノは、己の意志に他ならない」

その肉体が生物学上同一の物だとして、霊夢が最終的に人であるか否かを判断するのは、正しくそれだ。

人間とは、魂の、心の、意志の生き物。確かな肉体を有し、この星の霊長として立ちながらもそれは揺るがぬ事実である。

だからこそ、闇に生きる者達は人間という種族の魂と肉を好み、求め、喰らわんとするのだろう。

「意志、か……」

『……これは、ミサカの物です、とミサカは所有権を主張します』

脳裏に過る、いつしか殺した彼女の顔。今ならばつきりと分かる。あれは決して演技などではなかったのだと。

「そうかア……なら、アイツらは、立派な人間に違いねエ……」

何が人形だ。

薄々は気付いていたはずだ。あの時、無性に腹が立っていたのは、単に嫉妬していただけ。己には無いモノを得ていた彼女に対して——。

見ないフリをしていた。結局、傷付けるのが怖かったのではない。自分が傷付くのが怖かったのだ。だからこそ、今の今まで目を叛け、後ろを向き、ただただ逃げてきた。

その果てが、これなのだ。

「……アクセラレータ一方通行」

そんな全てを諦めた様子のかつて最強だった少年を、霊夢は呼ぶ。

「説教臭い閻魔が言うにはさ。一度犯した罪つてのは決して消えない……でも、償って軽くすることは出来る。それは殺人も例外無く、ね」

「……はア？」

「死ぬまで善行して徳を積めば、あの世での判決にも影響するらしいわ。黒は黒でも限りなく白に近く……つて感じで。まあ、いくら軽くしても地獄に墮ちる奴は墮ちるんだけど」

いきなり何を言っているのだろうか。一方通行はきよんとした表情で霊夢を見据える。

「だからまあ……そう悲観することはないと思う。人生はまだ何十年もある。死ぬまで償って、罰つてのはその後を考えればいいから」

そして、それが彼女なりの励ましなのだど理解する。

「……ハ、ハハッ……くだらねエ……」

こっちの心境も知らずに。その発言に一方通行は思わず嘖き出してしまふ。何だかもう、馬鹿馬鹿しく思えてきた。

償う……償えらとでも言うのか。これだけの罪を、これだけの悪行を。

自分のような人間でも、いつか――。

“絶対能力進化計画”は中止された。

一方通行と博麗霊夢の衝突。それによって起きた計算のズレはツリーダイアグラムの設計者亡き今では完全に修正することは難しく、また一方通行本人が実験を継続する意志を放棄したため続行は不可能だと判断されたからである。

中には尚も続行を求める動きがあつたようだが、そうなつて再び博麗霊夢が襲撃してくれば今回の戦闘以上の被害になることが予想され、学園都市の存続の危機、延いては最悪二名の絶対能力者候補のどちらか、或いは二名とも失うかもしれない危険性から統括理事会は実験の永久凍結を言い渡し、これらの要望を全て却下している。

加えて、数百にも分散した関連施設が同時に襲撃され、機能停止した。それは以前の正体不明の電撃使い以上の強大な力を有した何者かが水面下で動いていることを意味し、この実験そのものに触れようとする者は次第に居なくなっていくた。

『ということでは事態は終息したのだけれど……まさか、ここまで派手にやるなんてね。実験の方はともかく魔術サイドへの隠蔽は骨が折れたわ。正直、流石の私でも過労死しかねなかったわよ?』

「ふうん……そりゃ御愁傷様」

携帯電話越しから告げられたその内容に霊夢は完全に他人事な様子で返す。これに通話相手の教授は呆れた様子で溜め息を吐く。

宇佐見董子と共に動いていることには気付いていたが、知った上で放置し、傍観していた。教授からしてみれば絶対能力者など建前で二万体のクローン、正確には彼女達の共有する脳波が作り上げたネットワークこそが本命であろうこの実験は実にきな臭く、魅力には感じていなかった。

その結果、ここまでの事態に発展するとは。一方通行の実力は教授の想定を上回るものであり、特にあの「黒い翼」は教授にとつても脅威と成り得る要素だった。

(人工天使と似たようなものかしら。流石は第一位、アレイスターの計画の要なだけはあるわ)

とはいえ靈夢に再びあの力を使わせたことに關しては感謝しかなく、貴重なデータを得られた。テレスティーナとの一件以降、完全ではないにせよ靈夢は自由に力を行使出来るようになったと見て良いだろう。

喜ばしいことだ。かの幻想に生けし巫女は遂に天生へと至ったのだから。

「で？ あつちの方はどうだった？」

『現時点だと残念ながら何も。確かに貴方の言う通りあの場には貴方達二人以外にも何者かが居たのでしょうか。けれど、科学的にはその存在は痕跡すら認識することが出来なかつたわ』

靈夢から実験に関する記憶を奪い、一方通行との戦闘にも介入してきた正体不明な存在。その存在について靈夢は教授に伝え、調べるように頼んでいたのだが、結果は芳しくなつたようだ。

「……そう」

尤も、その弁も本当かどうかは疑わしい。一応調査を頼んだものの靈夢からしてみれば教授自身が得体が知れず、信用するに値しないのだから。情報を伏せているか、実は裏で結託しているのではとすら考えていた。

(……あの女は確かに私を「博麗の巫女」と呼んだ。陰陽玉モドキといい、十中八九知っているのでしょうか。私が何者なのかを)

失われた記憶。臍氣に残った幻想。その元凶こそが奴なのかもしれない。

とはいえ霊夢が能力を使用した際に精神干渉から外れることが出来た。記憶喪失があれと同系統ならば既に過去の全てを思い出ししていなければおかしいはずだ。

(考えても無駄ね。情報が足りなさ過ぎる)

自らの過去、延いては己という人間の根幹に関する話であるにも拘わらず霊夢はあっさりと思考を放棄した。

思うところが無いと言えば嘘になるが、かといって闇雲に探したところでどうしようもない。それはこの街へ来る以前に身を以て理解している。

『まあ、調査は継続するわ。貴方の言うような存在がアレイスターの奴と組んできると、少しばかり都合が悪いかも』

「……あなたの都合は知ったこっちゃないけど、何か分かったらまた教えてちょうだい」
『ええ勿論。じゃあねく、そっちもあまり騒ぎは起こさないように』

無駄な忠告だとは思うけど、その言葉を最後に通話が切られる。

「……………」

携帯をしまい、霊夢は溜め息を吐く。これにて一件落着……とは言い難かった。

教授に話した存在もそうだが、クローンに取り憑いていた霊的存在の正体も目的も謎のまま。思えば、あれも何か知った風な口を利いていたが……。

(こつちも情報が足りない。どうすることも出来ないし、また尻尾を出すまで待つしかないわね)

いずれにせよ、連中がこの街で何かを企んでいるのは確実なのだ。ならば動き出すまで待つのもまた一手だと霊夢は考えた。

(にしても……こんなところでまたしても記憶への手掛かりを見つかるなんてね)

偶然か、或いは。重なる出来事の数々に、今の今まで停滞していた何かは漸く進み出しているのを霊夢は確かに予感する。

今になって、とも言えるが……。

「——博麗さん？」

その時だった。声をかけられ、振り向くとそこには今回の一件に深く関わっていた少女……御坂美琴が立っていた。

「あら、美琴。おはよう」

「お、おはよう……えつと、博麗さんもアイツの……？」

「ええ。当麻の見舞いよ」

霊夢がつい先程まで教授と通話していた場所は病院の待合室。彼女は自分の診察も兼ねて一方通行との戦いで大怪我をして入院している上条の見舞いに赴いていた。

ついでに何故実験を知って一方通行に挑む羽目になったのかも問い質すつもりで

あった。彼の登場は霊夢にとって一番予想外であり、現場に到着してみれば全く無関係なはずのクラスメイトが血塗れで倒れているのだから一体どういう状況なのかと内心驚いていた。

「と、当麻……」

「? どうかした?」

「あつ、いやっ何でもないわ!」

俯きがちで、しどろもどろになる御坂。そんな反応に対して霊夢は頭上に疑問符を浮かべる。

やはりあんなことがあつて、顔を合わせづらいのだろうか。

「……その、博麗さんの方は、大丈夫なの?」

「ん? ああ、多少は怪我はしたけど大したことはないわ。二、三日もすれば回復すると思う」

出てきた心配の言葉に霊夢はそう返す。とは言うものの主武装の大幣は破損したし、一撃しかもらっていないが、内臓に響く程度のダメージは受けた。結果だけ見れば結構な痛手だろう。

「そ、そう……良かった……」

この返答に御坂は安堵する。

「ツ……その、ごめんなさい！」

すると今度は深々と頭を下げ、謝罪の言葉を口にした。

「博麗さんには感謝しても感謝し切れないわ。それと同時に、本当に申し訳なく思ってる。私のせいで巻き込んだりやって……それから……」

「ほんとね。危うく死ぬところだったわ」

「ツ……」

「冗談よ。結局、また私が好きでやったことだから、あんたが気にすることじゃないわ」
「で、でも……」

「というか、あんたにはもつと謝るべき人が居るでしょうが。さっさと元気な姿を見せてやりなさい」

一転して泣きそうな顔をする御坂にやれやれと霊夢はそう言い放つ。謝るべき相手というの、霊夢が実験に介入するきっかけとなった白井のことだろう。

「！……本当に、ありがとう。あんたが居なかったら実験は終わらず、私も、あの子達も、アイツも……」

それでも尚、御坂は頭を下げ続ける。謝罪の次は感謝。霊夢は困ったように、或いは照れ臭そうに頬を掻き、そっぽを向く。

「……それもあいつに言うべきよ。あいつが頼み込んでこなければ、私は関わろうとす

らしなかつた訳だし」

そういう意味では、霊夢も白井に感謝しなければならぬ。彼女が御坂のことを頼み込んでいなければ、霊夢は実験のを知ることなく、御坂だけでなく上条までもが命を落としていたかもしれないのだから。

今回ばかりは偶然に救われた。少しでも歯車が噛み合わなければ、何もかもが手遅れになるところだった。

「ミサカも感謝しています。と、ミサカは背後からお礼の言葉を述べます」

「あん？」

すると別方向からそんな言葉が聴こえてくる。その声には聞き覚えがある、というか今日の前で会話している人物とよく似ており、しかし抑揚のない平坦なものだった。

「あなたは……」

「初めまして。ミサカは妹達シスターズ、シリアルナンバー10032号です、とミサカは命の恩人に対して自己紹介します」

そこに居たのは、片腕にギプスを着け、顔に包帯を巻いて片方の目が隠れているが、御坂と瓜二つの姿をした少女。

成程。彼女が例のクローンか。思えば、こうしてきちんと対面するのは初めてであるが、霊夢はそんな彼女に対し、訝しげな視線を送る。

「いちまん……というか、何その喋り方？」

「どうかしましたか？ と、ミサカは首を傾げながら疑問を投げ掛けます」

「……こういう奴なの？ 美琴」

「え？ あ、うん……まあ気にしないで」

本当に理解していない様子でこちらを無表情で見るミサカ10032号に肩を竦め、彼女の登場に驚いている御坂に尋ねるとそんなぎこちない言葉が返ってくる。

「……ふむ。名乗られたら名乗り返すのが礼儀では？ と、ミサカは聞き齧った知識で名も知らぬ命の恩人に対して問い掛けます」

「恩人に対して失礼な奴ね。ま、変に恩義とか感じられても困るんだけど」

何とも言えぬ、微妙な反応をする霊夢。そもそも彼女は今回の一件で奔走している間、妹達の事など眼中に無かった。

白井に頼まれていなければ、御坂のクローンでなければ、知ったとしても相手が一方通行なこともあつて自分には関係の無いことだと見て見ぬふりをしていたことだろう。

「博麗霊夢よ。えーつと、一万ナンタラ……号だっけ？ よろしく」

「はい。存じ上げています。こちらこそよろしくお願いたします。それからミサカは10032号です。と、ミサカはさりと先程名も知らぬと言ったのは嘘であることを白状しつつ名前もまともに覚えられない命の恩人様に対して訂正します」

「喧嘩売ってんの?」

無表情だが、なかなか愉快な性格をしているようだ。

「あはは……その、悪気は無いから、ちよつと空気読めない部分があるだけで……」

「……そう言うあんたはなんかよそよそしいわね」

「えっ?」

フオローに入る御坂だが、10032号が来てからどうにも口数が少ない。やはり自分のクローンという特異な存在に対してどう接したら良いか分からないのだろうか。

しかし、決して良くない感情を持っている、という訳ではないのだろう。でなければ命を懸けて彼女達を救おうとはしないはずなのだから。

「……んじや、そろそろ当麻の見舞いに行くから」

「あ、ちよつと……」

「折角の親子……シスターズって言うくらいだから姉妹なのかしら? まあ水入らずでゆつくり話しなさいよ」

御坂がどんな心境なのか、二人の間に何かあったのか。何も知らない霊夢だが、今は二人だけにした方が良く、と何となく思った。

そんな配慮など知る由もない御坂は戸惑うも、既に霊夢は廊下の先へと進んでいく。

「——博麗霊夢さん」

すると10032号が呼び止める。

「本当にありがとうございました。貴方が居なければお姉様も、あの人も死んでいたかもしれません。と、ミサカは改めて感謝の意を述べます」

「……どうも。あなたも命を拾ったんだから、もう死ぬ為に生きるなんて馬鹿な真似しないようにね」

体細胞クローン。培養液の中で作られた生命。実際に対面し、言葉を交わしてみれば、それは自分の知る人間と何ら変わらなかつた。

そんな彼女達がもう殺されることも、一方通行が殺めることもない。故に、とんだ面倒事に巻き込まれたとも思っていたが、今回ばかりは良かったと思う。

——博麗の巫女は、人間の守護者なのだから。

正義

「——というのが、事の顛末よ」

とある昼下りのカフェにて。

ガヤガヤと賑わう中、ある二人がテーブルを囲んでいた。

「……聞いただけで頭が痛くなるな」

「そりや御愁傷様。私としてはなかなか面白い物を見せてくれたから別に良かったわ。なんか上条さんが巻き込まれてたのにはビビったけど」

「ああ。それには俺も驚いた。作為的なものがないとは限らないが、見たところ全くの偶然……いつもの不幸って奴のようだ」

「因果なものねー。ま、あの人はそういう星の下で生まれたんでしよう」

片やアロハシャツを着た、金髪サングラスの如何にも不良であるといった風貌の男。片や眼鏡を掛けた一見すると茶髪の文学少女を思わせる女学生。あまりにも対照的で些か良からぬ事を想像してしまう組み合わせだが、周囲に居る客や店員はそれに全く違和感を持っていない様子は無かった。

多角スパイ、土御門元春。

超能力者^{レベル}第八位、宇佐見童子。

本来であれば交わることはないはずの二人が、こうして対面し、密会を行っていた。「ところで例の『黒い翼』について……魔術サイドの見解としてはどうなの？ あれ思うに、どっちかと言うとオタクらの畑から生えたモンでしょ？」

「実際に見ていないから何とも言えない。あの戦闘の記録は既に抹消されていてまともに見覧することも叶わない有り様だしな」

尤も、何か分かったとて、素直に教えるつもりはないが。土御門はまだイギリス清教の協力者として接触してきた目の前の少女を信用していなかった。

「へえ……やっぱり隠蔽に必死なのね。ウケる」

「そういう意味では、お前はあの時に何が起きたのかを知っている数少ない一人ということになる」

博麗霊夢VS一方通行という世紀の大決戦。この夢のマッチアップを見逃す手は無く、霊夢に実験時刻と場所を情報提供してから物見遊山気分です佐見は観戦しに馳せ参じた。

結果は予想以上。特に一方通行の能力の凄まじさは目を見張ったものだ。

大気を圧縮させてプラズマを生み出す、地球全土に影響を及ぼしかねない自転操作、

そして正体不明の理外の力である黒い翼——そのどれもが規格外にも程がある。

そして、それを相手に一步も退かず、真つ向から叩き伏せてみせた霊夢……学園都市を飛び越え、太平洋上空で繰り広げられた熾烈なる戦いは宇佐見をして次元が違うと言う他無い。

(看過した結果がこれ、か。分かり切っていた事だが、本当に勝手な女だ)

一方、土御門はと言うと、内心そう愚痴る。他者の思惑も願ひも全く意に介さず、己が目的の為ならば如何なる被害も顧みない。

それだけ聞けばとんでもない暴君であるが、厄介なことに基本的に善行ばかり。彼女は己が良いと、正しいと思つたことを実行しているに過ぎず、結果だけを見れば土御門からしても「正しい」と言わざるを得なかつた。

他にやり様が無いのかとは思ふも、それこそ彼女からしてみれば知つたことではなく、そこに魔術と科学の摩擦がどうのだの秘匿がどうのだと問題を持ち込むのはこちらの方が勝手な話である。

故に、土御門は二大勢力の均衡の為に排除すべき危険分子だと認識しながらも、博麗霊夢という人間を嫌いにはなれなかつた。

「それでどうする？ その情報をイギリス清教へ売るか？」

「まさか。だったら、わざわざ貴方に接触なんてしないわよ。ツッチー」

裏の人間として振る舞う土御門とは対照的に宇佐見は気安い態度で接し、張り詰めた空気を中和させる。

「……俺のことはどこまで知っている？」

それを無視し、問う。相手が第八位と言えど、そう容易く正体を知られるほど足元を疎かにしていたつもりはなかったが……。

「元々は優秀な魔術師だけど、今は科学側にも属してあちこち奔走してバランスを保っている……ってことくらいは。大変ねえ、スパイ映画みたい」

そして、完全に他人事の様子で大まかな事を把握していることを告げられ、思わず溜め息が溢れる。どこから漏れたか知らないが、一度見直しておかなければならない。

「まあ、私は事を荒立てるつもりはないわ。今回だってここまでヤバい事態になるだなんて思ってなかったから、変に勘繰られる前に貴方に接触したってワケ」

「……そうか。意外だな、第八位は好奇心旺盛で向こう見ずだと聞いていたが」

「えー？ そりゃ心外ね。私は弁えてる方よ、レイムつちと比べればずっと、ね？」

「あれは一番基準にしてはいけない存在だろう」

上述した理由以外に、魔術サイドがどこまで今回の事態を把握しているかを知りたかったのもある。学園都市最強の超能力者と原石にして聖人を撃破する程の魔術師が衝突したのだ。場合によっては戦争に発展しかねず、そうなると宇佐見も今後の身の振

り方を考えなければならぬ。

結果を言えば、各勢力が上手く隠蔽してくれて事なきを得ているようで安心した。

（たぶん「岡崎さん」も動いたのね。さぞかし焦った……のは想像しづらい。これもあの人の掌の上なんじゃないかって思ってしまったわ）

自らを教授と称する赤髪の女。表向きは原石研究の第一人者として活動しながら暗躍を続けているかの科学者を、宇佐見は世話になりながらも得体が知れぬ、どこことなく人間離れた存在だと思っていた。

その計画の要は恐らく博麗霊夢。それはあの入れ込みようからも明白だろう。自分や第七位、その他多くの原石はそれを隠す為のデコイ……そう推理し、宇佐見は気に食わないと思いつつ己も何も知らぬフリをして利用しているのだからお相子なためとやかく言うつもりは無かった。

「宇佐見董子。お前は何を企んでいる？」

すると土御門は唐突に問いかける。

「うん？ ……何の事かな？」

「博麗霊夢が実験について知る切っ掛けとなったのは、佐天涙子がもたらしたドツペルゲンガーの噂だ。そして、それを広めたのはお前であることは調べが付いている」

「それで私が意図的にレイムつちを引き込んだと？ はは、無理があるわ。メリットが

無いし、そもそもそんな回りくどいことしなくて良いじゃん」

勘繰りが過ぎると、宇佐見は肩を竦める。これに対して土御門は表情を変えない。

「そうは言っていない。博麗霊夢が知ったのは本当に偶然なのだろう。俺が問題視しているのは、ドツベルゲンガーの噂を流布した動機についてだ」

「……へえ？」

ぴたりと固まる宇佐見。その眼には驚きと好奇の気色が含まれていた。

「ステイルは知っているな？ 奴から話を聞いた。お前の扱う幾つもの能力の中に、一つだけ魔術に近しいものがあるということを」

それこそが、自己幻像^{ドツベルゲンガー}。宇佐見の保有する超能力とは原理も由来も明らかに別系統である怪奇^{オカルト}——。

能力者なのに魔術が使える理由はこの際どうでもいい。前例なら博麗霊夢が居る。

「伝承による強化や拡大解釈……お前はドツベルゲンガーの噂を流し、より大勢に認知させることで自分の魔術を更に発展させようとした……違うか？」

尤も、その程度で何かが変わるほど魔術は甘くはないのだが、宇佐見は科学側の住人。オカルトマニアらしいので多少心得のあるだけの素人だと読んで土御門はこの推察を立てた。

「……さあ、どうかしらね？」

「この弁に対して宇佐見は微笑みを返す。それは正解だと認めているようなものであり、土御門は苦い顔をする。

「第八位が魔術師だった……となれば、これまた一悶着がある。そういう意味では、お前も爆弾という訳だ」

「だとしたら、貴方はそれを起爆させる?」

「そうだな。お前の企み次第では、多少のリスクを顧みてでも処理する必要がある」

「おお怖。流石は多角スパイ」

サングラス越しからの鋭い視線に宇佐見は肩を竦め、おどけてみせる。

「別にどうこうするつもりはないわ。少し訂正させてもらうと、私の自己幻像ドッベルゲンガイは厳密には魔術ではなく、単なるモドキ。じやなきや能力者の私が見えるはずないし。あれは能力にオカルト知識をちよつと応用したら偶発的に出来ちゃった代物に過ぎない」

「ほう……なら、噂を流布した動機は?」

「実験よ。ただの普通のくだらない、ね。折角手に入れたんだもの。色々試したくなるでしょう?」

謂わば愉快犯。悪びれもせずにそんなことを言つてのける宇佐見に対して土御門は本当かどうか疑うも、これまでの彼女の行動を見るからに、充分に考えられる動機ではあった。

それこそ前述したように、彼女は好奇心旺盛なのだから。

「……そうか。今回はそういうことにしておいてやる」

「お、マジ？　ありがと。命拾いしたわね」

「だが、理由がどうであれ、お前のやったことは魔術と科学の不可侵に違反している。粛清されたくないのなら、魔術モドキとやらを使うのはもうやめとけ」

「はいはい分かっていますよって。魔術サイドを敵に回すなんて真似はしたくないもの」

英国、ヴァチカン、ロシア。

超能力者^{レベル5}は軍隊に匹敵すると云われているが、本当に国家を相手取って勝てるなどと流石の宇佐見も自惚れてはいない。

尤も、現状の戦力では、という話だが。今ここで事を構えるのはあまりにもタイムイン^グが悪過ぎる。

（あちゃー、上手く取り繕ったつもりだったんだけど……しばらくは大人しくしておこつと）

成果は充分に得られた。土御門はドツペルゲンガーの噂の流布程度では大した効力はないと思っっているようだが、実際のところ自己幻像は単なる魔術でもモドキでもなく、より純然たる怪奇^{オカルト}——僅かな切っ掛けで途方もなく変容する。

そして、それはドツペルゲンガーという一つの都市伝説に限った話ではなく、計画は

水面下で進行していた。

(……食えない女だ。良いだろう、精々暗躍しているといい)

対する土御門は実のところ全く納得はしていなかったが、ここで追及したところで惚けられて終わり。

故に、今はまだ動かない。決定的な証拠を掴むまでは、泳がせておくつもりだった。

(まったく……監視対象が増えるばかりだな)

溜め息が漏れそうになる。

上条当麻ヒールローと博麗霊夢イレギュラー、これに加えて宇佐見堇子という愉快犯……この街には本当に多くの火種が燻っている。

世界の安寧の為に、土御門はこれらに睨みを利かせ、今日も奔走する――。

また助けられてしまった。

病室のベッドの上で窓から見える街並みを眺めながら上条当麻はぼつりと漏らす。

つい先程御坂から感謝の言葉を述べられたが、今回自分は何もしていない。一方通行相手に完敗し、ボロ雑巾のようになって地べたに転がっていただけだ。

（博麗が居なかったら……俺は——）

間違いなく、死んでいた。あのままどうにか力を振り絞って立ち上がったとして、一方通行はこちらに近付くことなく死に体の上条を追撃していたことだろう。

三沢塾でもそうだ。自分は、彼女の足手纏いではないのではありませんかと思ってしまう。

記憶を失ったのだから、もしかすると——。

「どうしたの？ 柄にも無く難しい顔しちゃって」

その時だった。

いつの間にか開いていたドアの先で、件の巫女がこちらを見据えていた。

「博麗……」

「おはよう当麻。無事で……は、ないけどまあ元氣そうで何よりだわ」

全身に包帯を巻いた上条に、霊夢はそう言つて笑いかける。

かなりの大怪我だが、風で数十mまで飛ばされてそこから自由落下したと考えれば生きていられるだけでも奇跡。本当に頑丈な肉体であった。

「えっと、その、ありがとうな。助けてくれて」

「どういたしまして。というか、ほんとに肝を冷やしたわよ、あの時は」

「あ、あはは……すまん……」

霊夢の呆れの混じつた言葉に上条は苦笑いしながら平謝りすることしか出来ない。

あの時は上条の方もまさか霊夢が駆け付けるとは思つておらず、朦朧とした意識の中で大変驚いた。聞いた話によると、彼女は自分が実験について知る前から動いていたらしいが……。

「すまん、じゃないんだよッ!」

すると霊夢の背中に隠れていた白い影が勢いよく上条に飛び付く。

「痛アツ!? イ、インデックスツ!」

「何日も帰ってこないと思つたら入院してゐるって聞いてすつごく心配したかも！」

体重の乗つた衝撃が怪我に響く。情けない悲鳴をあげながら上条は涙目でぶんすかと怒る銀髪シスターの姿に目を剥いた。

「途中で鉢合わせしたの。せめて連絡くらいはしてあげなさいよ」

「あ、ああ……すつかり忘れてた……」

ばつが悪そうに上条は頭を搔く。

「むつきー！ 酷いんだよッ！ とうまは私を飢え死にさせるつもりッ!」

「いや、買溜めして冷蔵庫に入れていただろ？」

「あんなの二日も持たなかつたんだよ！」

「え？ 全部食つたの？ マジで？」

つまり今は冷蔵庫の中は空っぽ。あれだけで一週間は遣り繰りするつもりだったのだが、と上条は絶句する。

「ついこの間入院したばつかつていうのに、今度は一体何に巻き込まれたのッ!」

「え、えつと、それは……」

「病院では静かに、インデックス。こいつにとつてここは第二の実家のようなもの。前から厄介事に首を突っ込んで怪我して病院送りになつてゐるからこんなでいちいちキレてたら身が持たないわよ？ 馬鹿は死んでも治らないんだから」

「むう……」

未だに怒りが収まらない禁書目録だったが、霊夢に宥められ、不服げではあるものの押し黙る。

「そ、そんなに入退院を繰り返してるんでせうか？」

それを聞いて上条も思わず尋ねる。どうやら記憶を失う前から自分はこういう不幸に常日頃見舞われていたらしい。

そういえば補習で会った小萌という子供先生も出席単位が危ういと言っていた。度々入院していたのなら納得出来る話だ。

果たして、入院費や進級・卒業とかは大丈夫なのだろうか……？ 急に自分の将来が不安になってきた。

「？ 何でどうまが訊くの？ 自分が一番わかってるはずでしょ？」

「え？ いやそれは……」

「単に自覚してなかっただけよ。そんだけ生傷の絶えない日々を送ってるってこと」

「なるほど！ もうっ！ このアンポンタン！ 怪我で済まなかったらどうするんだよッ！」

禁書目録の問いに上条が言い淀んでいると事情を知る霊夢がフオローする。相変わらず記憶喪失であることは隠し通しているようだ。

(何でアクセラと戦う羽目になったか訊くつもりだったけど……そういう雰囲気ではないわよねえ)

大方いつもの不幸が発動したのだろう。もう終わったことであるし、霊夢はここで問い質すことを止めた。

「まあけど……インデックスの言ってることは普通に正論よ。かといつてあんたは止まることを知らないでしょうし、首を突っ込むにしても自分じゃ手に負えない案件だって少しでも思ったのなら一度は私に連絡を寄越しなさい。前みたいに、ね」

「そうなんだよー。れいむが居てくれるなら安心かも！ すっごく強いしー！」
「ー。お、おう……」

暗に記憶を失う前の己ならそうしていたと告げられ、上条は渋い顔をしながら頷く。御坂にも尋ねられたが、自分と目の前の少女はどのような仲だったのだろうか。

今の上条が知っているのは、自分のクラスメイトであること、魔術師であること、そしてとんでもなく強いということのみ。

(……本当に何も知らないんだな、俺。今更過ぎるけど)

三沢塾でのあの場面は酷く恐ろしかった。けれど、一方通行との戦いで駆け付け、後は任せると自分に語りかけたその姿は――。

「なあ……博麗」

「んー?」

「お前は何で、実験を止めようとしたんだ?」

「何でってそりや……単なる成り行きよ。どつかの誰かさんが、お姉様のことを助けてくれないか?」
「つてお願いしてきて、その解決にあのくだらない実験とやらを止めることが繋がるってだけの話」

唐突な問いかけにきよとんとしながらも、霊夢は噛み砕いて経緯を話す。

「……そいつ、もしかして御坂の後輩の子か? ツインテールの」

「ええ。何だ、知り合いだったの」

「まあ一応……」

お姉様という呼び方で思い出す上条。霊夢は既に忘れてしまっているようだが、あの公園で霊夢を見て赤面しながら逃げ去っていた。まさか彼女が切っ掛けだったとは。

「じゃあ、俺を助けてくれたのは……」

「目の前で死にかけてる奴を見捨てるほど薄情じゃあないわよ。知り合いだったんなら尚更ね」

「ただ、それだけなのか?」

「そうよ。急にそんなこと質問して、どうしたの?」

「いや……」

あまりにも単純な動機。誤魔化している訳でも照れ隠しでもなく、本心からそう言っているということが分かる。

誰かを助けることに理由などない。それは当然であり、自分が言えたことではないのだろう。しかし、霊夢の言うそれは上条の抱く正義感や善意とはまた違うように感じられた。

故に、分からなかった。

あの日、この同じ病院で彼女と会った時に感じた暖かき。謝る彼女を見て、どうか責めないでくれともはやこの世界には居ない己の言葉に突き動かされた。

ついこの間のことなのに遠い昔のように感じられる。上条当麻は、彼女のことを一体どう想っていたのだろうか。

「それは違うかも！ れいむはきつと、＼ヒーロー＼なんだよ！」

「え？」

「……はあ？」

すると禁書目録は突然そのようなことを言い出した。

「テレビで観たカナミンと一緒で！ 困っている人を助ける、優しい正義の味方なんだよ！」

「あのねえ……別にそういう慈善活動家とかじゃあないわよ、私は」

えっへん！と胸を張って自信満々にそう言い放った禁書目録に霊夢は呆れた様子だった。カナミンというのが誰なのかは知らないが、テレビで観たということから恐らくアニメのキャラクターか何かなのだろうか。

「ヒーロー……か」

その単語が、妙にしつくりときた。

そうだ。あの夜、朦朧とする意識の中で視た彼女の姿に、自分は途方もない安堵感に包まれたのだ。

正しく“ヒーロー”が駆け付けてきてくれたのだと、そう思ってしまったかのように。

「ああ、そうだな……」

「？　ちよつと、私はあるみたいなお人好しとは違うんだからね」

思わず笑みが溢れ、これに霊夢が訝しげな視線を向ける。

実際には違うのかもしれない。少なくとも彼女の根幹にあるのは正義感なんてものではないのは確かなのだから。

けれど、それまでの悩みが嘘であったかのような、胸がすく思いだった。今はそんな都合の良い風に捉えても構わないと、何故かそう感じていた。

「改めて……ありがとう。博麗」

博麗靈夢は正義の味方。なら、何故助けてくれたなどと考える方が野暮だろう。
今は、そう思うことにした。

恋路

今日の佐天涙子はやたらとテンションが高かった。

理由は、最近どこことなく元気が無かった友人。もしかすると何かしらのトラブルに巻き込まれているのではと心配していたが、少なくとも問題も解決したようでもいつも通りに戻っていて一安心したかと思えば、そんな彼女が「グツキー」を作りたいから教えてくれと頼み込まれたのだ。

訊けば、手作りクツキーを渡したい相手が居ると。それはつまり――。

「いやあ御坂さんにも春が来たんですねえ」

「えっ!?! ち、違っ……そ、そそそそそそういうんじゃないわよっ!?!」

実のところ当初から男の影を疑っていた佐天。自身の予想がずばりの中し、己の優れた推理力を自画自賛する。頑なに否定していたツインテールが絶叫している姿が脳裏に思い浮かぶ。

御坂は顔を真っ赤にして必死で否定しているが、凶星というか照れ隠しにしか見えな
い。

「はいはい。今度紹介してくださいね？」

「だ・か・ら！ 違うつてばあ！」

「ふふ、またまたあ……」

「そ、それよりも！ この後はどうするの？」

「うん？ ああ、型を取ったらオーブンで焼いちやいましょう。バター塗ると綺麗に焼き上がりますよ」

そんな初々しい反応をからかいつつ、アドバイスする。流石は常盤台のお嬢様と言わべきか。まだまだぎこちないものの覚えは早く順調であり、菓子作り初心者としては及第点だろう。

（けどまさかあの御坂さんがなく。少なくとも相手が男であることは間違いないし、どんな人なんだろう？）

それとなく異性に渡すのかと尋ねれば否定せずにはぐらかされたのでまず間違いない、華の女子高生としてはそういった話題への興味は尽きない。白井は論外として自分や初春にはそういった浮いた話は皆無なため余計にだ。

相手が誰であれ、佐天は友人の恋路を応援するつもりだった。

（そういえば霊夢さんはどうなのかな？ 美人だからさぞモテることだろうし。うーん……けど全くイメージが湧かないなあ）

恋愛とか面倒臭い、と呆れ顔で吐き捨てている姿が容易に想像が付く。否、意外とこういうのには純真な可能性も無きにも非ず。

ふと、脳裏に過つたのは盛夏祭で会ったツンツン頭の少年。記憶の限り佐天が知る霊夢と関わりのある男性といえれば彼女と同級生だという彼くらいだ。

（上条さん……だっけ？ インデックスちゃんの保護者つて言つてたけど……もしかして一緒に住んでいるのかな？）

思春期の男女二人が同居している、となるともはやそういう関係としか思えないが、あの光景はどちらかと言えば親子或いは兄妹のようであり、保護者という自称に相応しい。

霊夢とも親しげに見えた。否、上条の方はどこか他人行儀というか余所余所しい態度だった。

その際の霊夢の表情は心なしか切なげで――。

（――うん、わりとアリかも！）

確定情報は皆無。しかし、だからこそ想像の余地があり、上条が記憶喪失であること知らない佐天は勝手に妄想を膨らませる。

「……どうしたのよ佐天さん？ さっきからにやけちゃって」

「御坂さんも応援してますから！」

「だから本当に違うんだってばあ！」

目を輝かせ、エールを送る。よもや今しがた思い浮かべた少年が御坂がクッキーを渡そうとしている相手と同一人物だとは夢にも思っていない。

一方、御坂は必死になつて勘違いを解こうとするも、内面に秘めたる自覚すらしていない淡い恋心が滲み出ており、結局最後まで全く信じてもらえないのだった。

「まったくもう……佐天さんったら、面白がっちゃって……」

その後、時刻は昼下がり。クッキーの入った紙袋を片手に御坂は病院へと向かっていった。

クッキーは手作りがいい。見舞いに来た際、デパ地下でそれなりに考えて選んだ高級品を前にそのようなことを宣った上条へと渡す為。

「別に好きで作った訳じゃないんだから。ただのお礼よ、お礼」

誰へのものか。ぶつくさと言いつつ、誰へのお礼を並べる。

「まったく……この私に手作りさせといて受け取らなかったらただじゃ——」

「何がタダだつて？」

「うえっ!？」

あれやこれやと渡す際のやり取りをイメージしていると、そこへ入院しているはずの上条が姿を現す。

「な、何であんたがここに居んのよ!？」

思わぬアクシデントに驚く御坂。咄嗟に紙袋を尻の後ろへと隠してしまう。

先程の独り言を聞かれていたのではと御坂は赤面するが、上条は貧乏であるが故にタダという単語だけは聞き逃さなかった。ただで話自体は全く聴こえていなかった。

「まだ入院中のはずでしょ?」

「いやあ入院費も馬鹿にならないし、インデ……ひもじい思いをしている同居人が日増しに凶暴になっていくしな」

後半はぼそぼそ声で聞き取れなかった。そんな理由でカエル顔の医者が出院を許可するとは思えないので怪我自体はほぼ回復しているのだろう。まだ松葉杖を突いている状態とはいえあれだけ酷い怪我だったのに、とんでもない回復力である。

あの一方通行の能力さえ打ち消してしまう右手。無能力者扱いされていることから恐らく生まれついているものなのだろうが、霊夢といい原石というのは皆、頑丈な肉体を有しているのだろうか。

「つか、お前こそこんな所で何してんだ？」

「ふえ？」

「あ、もしかしてまた俺の見舞いに来てくれたのか？ なーんて……」

「ち、ちち違うわよっ！」

「そんな……全力で否定しなくても……」

（馬鹿く！ 何やってんのよ私く！）

反射的に否定の言葉を口走ってしまった。単なる見舞いだというのに、何故自分はこのまで羞恥心を抱いているのだろうかと御坂は自問自答する。

「み、見舞いとかじゃなくて……その……えっと……今回は色々と助けられたから……」

顔が熱くなる。改めて礼を述べようとするも段々と尻すぼみになっていき、顔を見る
ことが出来ずに俯いてしまう。

「あり……ありが……」

「？ 蟻……？」

「礼くらいちゃんと言いなさいよ」

「で、でも……え？」

「うん？」

「あ？」

その時である。上条以外の第三者の声に反応して後ろを振り向くと、紅白の巫女が呆
れた様子でこちらを見据えていた。

「は、博麗さんっ!？」

「おー、博麗。お前は見舞いに……来てくれたんだよね？」

「ええ。その様子だともう退院したのね」

驚く御坂を他所に、上条と霊夢は会話し始める。

「ところで礼って？」

「ああ、多分だけど美琴こいづはあんたにお礼がしたくて来たのよ。そうでしょ？」

「えっ!？」

「そうなのか？」

「あ、いや……う、うん……」

霊夢にそう言われ、小さく頷く御坂。ここで上条も先程彼女はありがとうと言いかけていたのだと理解し、照れ臭そうに頬を掻く。

「別に自分の為にやったことだ。礼を言わせるようなこととした覚えはねえよ」

「っ……なら、筋を通すつてのも私の勝手だし！」

予想していた通りの言葉。これに御坂はやはり野暮だったのかと思うも、すぐにその思考を振り払って言い放つ。

「だから……ありがとね。色々と」

「……おう。確かに受け取ったぜ、その感謝の気持ち」

恥ずかしい。けれど、それ以上にちゃんと面と向かってお礼が言えたことへの安堵と嬉しさが強かった。

「けど一番礼を言うべき相手なのは博麗なんじゃないか？　ぶつちや俺なんかボコラれて気絶してただけだし」

「なっ、博麗さんにはもう散々お礼したわよ！　いやそれでも全然足りないんだけど！

それと、あんたが居なきやあの子は助かってなかったんだから、そう自分を卑下するんじゃないわよ！」

そう、一方通行を倒したのは霊夢だが、上条が駆け付けていなければミサカ1003
2号は彼女が到着する前に殺されていたに違いない。

故に、妹達によつて上条が恩人であることは、何ら変わらない事実なのだ。

「……そうだな」

これに上条は安心したように笑う。役に立てなかつたと思つていたが、己が救つた命は、確かに存在していた。

「ありがとな、ビリビリ」

「えっ」

逆に感謝の言葉を述べられ、御坂は戸惑う。

「じゃあ、そろそろ行くわ。あの腹ペコシスターも首を長くして待つてるだろうし」

「それなら早く行った方が良いんじゃない？ スフィックスだっけ？ あの三毛猫、部

屋の中で好き勝手暴れてるみたいよ」

「マジでっ!? あいつ、ちゃんと躡けとけつて行ったのに……」

何となしに告げられた霊夢の言葉に顔を青くして上条は松葉杖ながらも急いで自宅へ帰ろうとする。

「ビリビリじゃなくてっ!」

「?」

しかし、御坂の言葉に足を止める。

「御坂美琴っていう名前があるんだから。いつもいつも……いい加減に覚えなさいよね。まあ、あんたに言っても無駄かもしれないけどさ——」

「——ああ。またな、御坂」

「!」

そう言つて上条は去つていく。その後ろ姿を見送る御坂の顔を霊夢は訝しげに覗き込み——。

「……惚れた?」

「は、はあっ!? 違つ……」

「お姉様! 大変ですよ!」

ポワポワしていると、霊夢のその一言に現実へと引き戻される。慌てて否定しようとしたその時、空間移動で白井が現れてこちらへ駆け寄つてきた。

「あ、黒子」

「げっ な、何故貴方がここに……」

露骨に顔をしかめる。

「居たら悪い? この前の公園でのことなら気にしてないから大丈夫よ」

「うっ……貴方が気にするとかそういう問題では……というか気にされないのもそれは

それで……」

「？」

「ところで何が大変な訳？」

また何かしらの事件でもあったのか。内心先程のやり取りの余韻に浸りつつ、御坂が尋ねる。

「あ、それが……一連の無断外泊が寮監の知るところとなったようで……」

瞬間、御坂の表情が固まった。

「納得のいく説明をせよとお達しが」

「まずいわね……何か言い訳を——って、でもどうしてここが？」

「えっ？ 蛇の道は蛇ですわ。お姉様の在るところに黒子在り、ですの」

半目で顔を逸らす白井。本当はGPSで探知してきたなどは口が裂けても言えない。

「そ、それよりもお姉様こそ博麗霊夢と一体何を……おや？ その紙袋は？」

「え？ あ……」

白井に指摘され、そこで御坂はクツキーを渡しそびれていたことに気付く。

また今度渡しに行くべきか。否、札を口にするだけであそこまで動揺するとなるともはや無理なように思えてきた。

クッキーを手作りして渡す理由など……うう、そんなことが——)

そこで白井は想像してしまう。自らが敬愛して止まない御坂美琴とかつての己の指針であり、未だに憧憬の念を抱く博麗霊夢。

その二人が——。

「……アリですの」

「え？」

何かと二人が問うよりも先に、視界が赤く染まる。

「ちよっ!? 黒子っ!?!」

そして、白井は興奮のあまり鼻血を噴き出しながら倒れ込んだ。

「……ってなことがあったんだ」

一方その頃。御坂が立ち去った後、佐天は別室で寝ていた妖夢の元へと訪れ、談笑し

ていた。

「成程。で、これが例のくつきーという洋菓子ですか」

「うん。もしかして初めて食べる？」

「ええ……恐らくは」

皿に盛られた先刻作った余り。妖夢は物珍しげに見つめながらその一枚を手を取って口にする。

「どう？」

「ふむ、甘い……煎餅とはまた違う食感ですね。食べやすくて美味しいです」

「でしよー？ 今度妖夢ちゃんにも作り方教えてあげるね」

煎餅は知っているということは、知識に関する記憶である意味記憶は残っている。にも拘わらずクツキーは知らないということは親の好みか、地域の特徴か、あまり洋菓子が馴染みの無い場所で暮らしていたのだろうか。

どちらにせよ、初めての物に驚き、興味を示すその姿はとても微笑ましかった。

「でもごめんね。なんか隔離するような真似をして……御坂さんに知られたら変に詮索されてまずいかなって。白井さん……風紀委員の人とも相部屋だし」

「別に構いません。こちらとしても、その方が都合が良いので助かりました。それから、居候の身である己にここまで配慮してくれる時点で有り難い話ですので、そんな申し訳

無さそうにしないでください」

二度も助けられた。しかも一度目とは違い、己が如何に危険な存在であるかを理解していたにも拘わらず。既に彼女への恩義は到底返し切れるものではなかった。

だからこそ、全身全霊で報いなければならない。

「この恩は、いつか必ず」

「そんな大袈裟な……あ、体調の方はどう？ 少しはマシになった？」

「はい。未だに剣を振るえぬ身ですが、歩けるようにはなりました。回復までそう時間は掛からないと思います」

「そっか……良かった。けどまだ安静にしててよ？ ついこの間まで寝たきりだったんだから」

あの後、自宅で看病してから先日まで妖夢は立つことさえ儘ならない有り様だった。本人曰く「慣れぬ環境で無理をした反動」とのことだったが、医者に診てもらった方が良いのではと何度も悩み、心配したものだ。

一体何があつたのか。気になるが、それが自分が踏み込んで良いような領分ではないことも何となく予感していた。

（でも寄り添ってあげないと……）

ふとした拍子に消えてしまふような、そんな儚さが今の妖夢にはあつた。放っておく

ことなど出来やしない。

故に、佐天は決めた。己に出来ることを精一杯やるといふことを――。

(……“奴”の言っていた通りだ。この環境は、私達にとつては毒に等しい)

“半霊”の動きも鈍い。力の大半が失われた。回復したとして、存分に振るうことはもはや不可能。恐らく肉体が無意識にリミッターを掛けてしまう。

幻想無き世界。そこに居場所は無く、故にこそ世界は存在するべきではない “異物” に対して容赦無く牙を剥く。

分かつていたことだ。散々警告されたし、本能でも理解していた。

けれど、それでも――。

己はあの空を舞う紅白の巫女を斬りたかった。

(挙げ句に無様に敗走したのだから、笑えない……)

あの乱入してきた雷を操る亡霊は上手くやったものだ。他者の死体に憑依することで世界を誤魔化し、反動を恐れること無く思うがままに力を行使していた。

単なる憑依でもない。恐らく死体にも細工が施されている。肉体と亡霊の性質・能力も似通っているのだろう。でなければそんな理屈が罷り通るはずがないのだから。

(――反魂の術)

脳裏に過る単語。意味は知らず記憶には無いが、けれども己は確かにそれを知ってい

るからこそ、今ここで思い浮かべた。

肉体への反動とは裏腹に、記憶への鍵はどうにも緩くなっているようである。

(駄目、ですね……どうにも難しいことを考えるのは苦手です。本当に嘆かわしい)

だからこそ、覚えていた師の教えを愚直に守ってここまで突き進んだ。

失われた記憶に關してもどうでもいいと思つて放棄し、今の今までは気が楽だったが、ここに来て妖夢は己のそんな性分を忌々しく思う。いざ思い出そうとしても未だに何よりも大切なはずの主の顔は靄が掛かったように朧気なまま。かといってこれからどうすれば良いのかすら思い付かない。

力無き今、己には主どころか目の前で笑う恩人を守ることさえ危ういというのに――

「そういえば……佐天さん。先程来られていた御坂という方について訊ねたいことが」

「ん？ 何？」

「彼女の……姉妹、或いは親類はこの街に居ますか？」

ちらりと一瞥してその姿を確認し、酷く驚いたものだ。何せあの佐天の友人だという茶髪の少女の顔は、あの乱入者と瓜二つだったのだから。

本人ではないことは明白。ならば考えられるのは肉体との血縁だろう。

「え？ うーん……姉妹は居ないって言つてたし、親戚が学園都市に来てるって話は聞

いてないなあ……どうして急に？」

「……いえ、以前に似た人物を見掛けただけです」

関係者か、或いは。どちらにせよ、妖夢はあの御坂という少女がトラブルに巻き込まれる要因であるのではないかと懸念していた。

そして、あの忌々しき紅白の巫女も。

（奴が、度々話題に出ていた『霊夢さん』だったとは。因果なものですね）

妖夢は自分が居ない間、佐天を守るために残った僅かな力を使用して己の『片割れ』を彼女に憑かせた。その際に自分を二度も打ち負かした巫女が彼女の友人の一人だと知ってしまった。

感付かれなかったのは幸運と言う他ない。本当にどうしたものかと頭が痛くなるくらい悩んで、結局問題を先送りにしてしまっている。

少なくとも弱体化しているこのタイミングで顔を合わせる訳には行かないので佐天にはより強く口止めしておく必要があった。

（佐天さんには悪いですが……彼女は、斬らなければならぬ。何がなんでも）

敗北したからではない。その事実が悔やまれるが、恩人の友が相手だとしても構わず切り捨てんとする程に拘りがある訳ではなかった。

ただ、失われたはずの過去が想起されたのはあの巫女と斬り結び、命のやり取りをし

た後ばかりだった。

それは断片的であまりにも曖昧な追憶。

けれど、だからこそ、妖夢は予感するのだ。

（――斬れば、わかる）

その教えに間違いはない。ならば今までもこれから何も変わりはず、そう在り続けることをひたすらに望む。

然りとて、もはや単なる剣鬼には戻れない。此度は思い出さなければならぬ理由が出来た。

己が何者であるかを、己が剣を振るう理由を、己が斬り、守るべきものを。

「願はくは……」

幽玄の間、桜の下で詠う、あの方を――。

お祓い棒

お祓い棒。

正式には大幣、祓串等と呼ばれる神道の祭祀において修祓に使う道具。一般的には神主や巫女が振るっているイメージが浸透しているだろう。

そして、霊夢が持つそれは文字通り敵を祓う霊装であり、彼女の主武装の一つ。

——だった。

「直せる?」

「いやいや、無理でしょ。わちき鍛冶師だよ? 鉄ですらない物は流石に専門外だつて」

多々良刃物店にて。

ぽつきりと折れたお祓い棒を手渡された店主はぶんぶんと首を横に振った。

「やっぱり、か……」

結局、あの後躊躇無く放り捨てたお祓い棒を霊夢は回収した。戦闘中はノリで捨てたが、もしかしたら修理できるかもしれないと思ったから。あの瓦礫まみれの凄惨なかつて操車場だった場所から折れた先と根元を探し出すことが出来たのは、彼女の勘と幸運

の賜物と言えよう。

しかし、見つけたとして結果はこの通り。既にお祓い棒は霊装としての効力を失い、単なる木の棒と化していた。

「あ、ごめん……でも本当に私じゃ修理出来ないわ。金具を使えばくっ付けることはできるだろうけどそれじゃ意味無いし」

どこことなく残念そうにする霊夢を見て、あつさりと断言し、突き放したことを悪く思った店主は俯いて謝る。

「その……大切な物だったの？」

「……そうね。愛着はあったのかも」

いつからか。知らない内に、気が付いた時に「陰陽玉」と共にそこにあつた。

魑魅魍魎の血を吸った無慈悲なそれは、彼女にとつて数少ないあの記憶への繋がりを証明する縁よすがでもあり、だからこそ霊夢はそれが存在することも己が所有していることも至極当たり前の、そう在るべき事象だと認識していた。

それが折れた。いまいち自覚出来ないものの己はそれなりにショックを受けているのだろうか。

「きつと、道具も大切に使われて喜んでるよ。修理は無理だったけど、しっかり供養してあげてね」

「付喪神になつてゐること？　そこまで使い込んだ覚えはないけど」

「つくも？　何それ？」

「……何でもないわ」

頭上に疑問符を浮かべて首を傾げる店主。それに対して霊夢は知らぬのも当然かと内心溜め息を吐く。

「あ、そうだ。発注した封魔針についてなんだけど——」

「ふふん。私もプロフェツショナルだからね。夜なべしてもう用意できたよ」

「半分近く壊れたからまた追加で」

「な、何ですと——ッ!？」

がびーん、と店主は度肝を抜かれる。針の注文を受けてからまだ数日も経っていない。

「おつたまげた……な、何で？　もしかしてまた魔術師と戦つたり？」

「いえ。今回はこの街の能力持ち相手よ」

「はえー、やっぱり超能力つてすつごいんだね」

驚きつつも納得する。あの木製なのにやたらと頑丈で不思議パワーに満ちたお祓い棒がこうもぽつきりと折れたということは、それ相応の激しい戦闘があつたということ。は容易に察せられ、そうなれば針も消費しているのは当然の帰結であつた。

「けどこのペースだと過労死しちゃうよー」

「……今回は急がなくても良いわ。代金の方も近い内に用意するから」

「ううっ、約束だよ？」

「ええ。約束するわ……じゃあ、よろしくね」

そう言い、霊夢は踵を返しながら店主へ手を振ると折れたお祓い棒を持って店を後にする。

「うーん……大丈夫なのかなあ霊夢。まだ高校生なのに」

自分を助けてくれた時は、もっと若かった。その後ろ姿を見送り、店主は腕を組んで悩ましげに呟く。

霊夢が自分の想像も付かないくらい物凄く強いことは知っている。ただそれでも彼女はまだ成人にも達していない子供であり、針よりも花が似合う幼気な乙女なのだ。

社会に生きる大人として、命を救われた個人として、店主は日常のように死と隣り合わせの戦地の中を往く霊夢の身を案じていた。

彼女は常に誰かを助ける。けれど、ならば彼女を助けるのは一体誰だというのか。

「……………」

からんからんと、鈴の音と共に戸が開く。

「あ、いらっしやいませー。何かご入り用ですかー？」

「……よう、久しぶりだな。こんな所で店を出しているとは思わなかったよ」
「へっ？」

来客。こんな時間に珍しいと思いつつもサービスピス精神と元氣満点の笑顔で出迎えるが、そんなことを言われてきよんとしてしまふ。

知り合いかと思うも、その顔に見覚えはない。少なくとも過去に商売した客の顔は一人残らずしつかりと覚えていると自負していたのだが……。

「えつと、ごめんなさい。どちら様でございましたか？」

「ん？ 何だ、やっぱり忘れてるのか」

「ほ、本当にごめんなさい……」

しゅんとする店主。知り合いの顔を忘れてしまうなんて、うっかりでは済まされな
い。

誰かに忘れられるということは、とても、とても悲しいことだというのに。

「良いってことよ、そういうもんだ。ぶつちやけ私らそこまで関わり無かったし、もしかするとガチで初対面かもしれない」

対する彼女は特に気にした様子も無く商品棚を見物する。

「ほう……クク、相変わらず良い腕前だな。にしても、こうも成り果て、何もかも失ったお前に唯一残されたモノが鍛冶とはねえ」

「? どういうこと?」

「分からないならそれでいい。実のところ私もお前が本当にそうなのか、単なる他人の空似なのかは判別出来ないんだ。どちらにせよ、とんだ奇縁だよ」

発言の意味が分からず、店主は首を傾げる。未だに相手が誰なのか思い出すことは出来ず、しかし何となくであるが、ゾクリと寒気がするような嫌な感覚がした。

——悪意。

その感情の意味はすぐに理解し、同時に驚く。自分が名前も知らぬ他者にそのような感情を抱くなど思ってもみなかったが故に。

そして、それに対して困惑の他に真つ先に考えるのが罪悪感と自己嫌悪な辺りつくづく店主は人が好く、優しかった。

「お前のその心は正しいさ。何一つ間違っちゃいないとも。嫌われ者というのは、嫌われるべくして嫌われるのだからな」

「……貴方は、一体?」

「そんなに知りたくない? ま、知りたいか普通は。誰が教えてやるもんかよバーカ……つて、本来なら言つてやりたいんだがなあ」

特別に教えてやる、と彼女は尊大に振る舞うが、酷く芝居臭かった。

「我が名は?????。単なる通りすがりであり、今はお前の客でもある」

彼女は確かに名乗った。だが、発せられた筈の名前と思われる単語は酷いノイズ混じりで本当に言葉かどうかすらも怪しいくらいに聞き取れない。

まるで脳がそれを拒絶しているかのようにだった。

「客？」

「そう、客。となれば目的は明白だよな？ 頼みたい仕事があるんだ。鍛冶師のお前にや専門外かもしれないが、その分報酬は弾むさ」

悪い話ではないだろう？ と、彼女は法外とも言える金額を提示し、にやりと笑う。明らかに怪しい。それに先程から言っていることも理解出来ず、訳が分からないので、ただただ困惑するばかり。

そして、悩んだ結果、店主の返事は――。

帰路に就きながら、霊夢は考える。

一方通行によって折られ、使い物にならなくなったお祓い棒。その損失を如何にして埋めようかと。

「オイ嬢ちゃん、ちよつと向こうで俺らと遊ば——ぐげエっ!」

「こいつらには必要無いんだけどなあ……」

道中絡んできた身の程知らずの不良三人組を一撃で叩きのめしつつ、霊夢はどうしたものかと頭を捻る。

いつものようにこの街で暢気に過ごすのであれば、お祓い棒の出番は然程無かった。そこらのスキルアウトや大能力者^{レベル4}以下の能力者相手ならば基本的に素手で事足りるか

らだ。

しかし、逆に言えばそれ以上の相手ならば必然的にお祓い棒を持ち出すことになる。神裂火織や一方通行といった強敵の他、木山春生といった厄介な能力者、テレスティーナが差し向けた駆動鎧部隊にも手っ取り早く片付ける為に用いた。

別にお祓い棒が無くとも霊夢は強い。それは純然たる事実であるが、その戦闘力が少なからず損なわれてしまうということもまた確かな事実である。

今後上述したような面々と同じく一定のラインを越えた敵が現れないという保証はどこにもなく、むしろ魔術師が相手ならばその可能性は跳ね上がることだろう。

（霊力を込めて振り回す？ 鉄くらの硬さにはなると思うけど……火織とか相手だと心許ないわね）

わざわざリソースを割いて木の棒を強化するなど無駄の極み。ならばと代用品の霊装を発注することも考えたが、慣れない武器を無理に使うとするのは逆効果だと思っただけだ。

（……とりあえずは様子見か）

現状解決策は無く、霊夢は一旦保留する。無いなら無いなりの戦い方を考えれば良いだけの話だ。

それに、もしかしたら土御門辺りなら壊れた霊装を修復する手段やよく似た物の存在

を知っているかもしれない。イギリス清教に借りを作るのは癩だが、今度訊いてみようか——。

「あつ」

「げつ」

第九学区を抜け、そろそろ歩くのも面倒なので飛んでしまおうかと思つて見覚えのある少女と出会う。

「れ、霊夢さん……」

「最愛ちゃんじゃない。奇遇ね」

絹旗最愛。ついこの間、思わぬ場所で久々の再会を期したばかりの顔見知りである。

「あいつに斬られた怪我は大丈夫？ ごめんねえ、あの後色々あつて治療に向かえなくて」

「それについては超大丈夫です。薄皮が切れた程度だったので……むしろ霊夢さんが居なきや本当にぶち殺されていたので超感謝しますよ」

実のところ心配していた。辻斬りとの戦闘後、御坂に襲われて絹旗の安否を確認する暇は無かつたが故に。

とはいえ、あの程度で死ぬようなタマでは無いとも思つていた。しぶとさに関して言えば、彼女は他の面々よりもずば抜けて高い。

(まさかこんな所で会うことになるとは……いや、オフの日で超良かったと言うべきですな)

一方、絹旗は安堵する。出会った当初こそ酷く驚いたが、見たところ敵意も無いし、機嫌の方も比較的悪くなさそうであった。少なくとも向こうは前回の施設での一件は微塵も気にしていないのだろう。

それは絹旗としては望ましい展開だった。アイテムとしては敵であり、出来ることならば顔を合わせたくないが、個人としては――。

「霊夢さんはここで何を？」

「用事を済ませて帰るとこよ。最愛ちゃんはまた例の仕事？」

「超休暇です。霊夢さんがうちのリーダーをボコってくれたお蔭でしばらく仕事は超ありませんよ」

麦野、フレンダ、滝壺の三人はまだ療養中である。よって単独で実行可能な任務以外はない。そして、その程度の任務ならば相応の報酬が必要なエリート扱いのアイテムではなく、より下の暗部に依頼するため実質無期限の休暇のようなものであった。

「え？ 私か？」

一方、霊夢は絹旗のリーダーをボコったと身に覚えの無いことを言われ、きよとんとする。

「……麦野つて言う、マルチタウナー原子崩し……と、言つても分かりませんよね。なんか眩しいビーム撃つてくる人が居ませんでしたか？」

「ビーム？ ……あ」

そこで思い出す。辻斬りと戦つてる最中、いきなり攻撃してきたので何だこいつと思いながら開幕夢想封印で吹っ飛ばした茶髪の女の子のことを。

「あいつか。そりゃ悪いことしたわね」

「思い出していただけでしたか。あの人、超根に持つてるんで気を付けてください」

「ふうん……ま、あの時は気が立ってたから少し大人気ない真似しちゃったわ。能力自体は弾幕みたいで面白そうだったけど」

「弾幕……？ 超よく分かりませんが、『第四位』相手にそんなこと言えるの、霊夢さんくらいですよ」

「四位？ へえ……あれがねえ……」

御坂より下で食蜂より上。確かにそれくらいの実力のように感じたし、妥当と言えよう。

あのビームも恐らく単なる熱光線ではなく、特殊なもの。火力はトップクラスであるし、下手に防御しようものならば霊夢でも危ないだろう。そもそも当たることなど有り得ない話だが。

「あれって……やはり霊夢さんからすれば、レベル5も超大したことありませんか？」

「いや？ 普通に厄介だと思うわよ。一位のアクセラとかもう二度と相手にしたくないし」

「厄介扱いしてる時点で超異常なんです。……というか、あの噂は本当なんですか？ 鬼巫女と第一位が超バトツたつていう話は……」

「何？ もう噂になってんの？」

「はい。与太レベルですが……」

「この口振りだと本当のようだ。色々調べて前回の案件が『絶対能力進化計画』という第一位絡みの実験に関係しているという話は聞いていたためまさかとは思っていたが。」

「どつちが勝ったんですか？」

「……どつちだと思う？」

「何ですかその超面倒臭い回答。まあ今ので分かりました。どうやったんですか？ あの化け物に勝つとか流石に超人間止めてますよ、マジで」

自分で言つて、信じられない。

「あら、そりやまた何で？」

「霊夢さん、意外とプライド高いですからね。敗けたのなら話題に出された時点で多少

なりとも機嫌が悪くなるでしょう」

恐らく非科学オカルトの類いを用いたのだろう。霊夢の扱うそれならば一方通行の絶対防御を破る手段を持ち合わせていても別段不思議ではない。

「因みに私の術でも通じたりとかは？」

「無理ね」

「むう……超きっぱり否定しますね。一応、あれからも陰で鍛えていたのですが」

「素人のやる事なんて、たかが知れてるわよ。なまじ効いたとして、すぐに対応されるのが関の山でしょうね」

「………そうですか」

過去に霊夢に教わった呪いまじな。能力者でも使用可能なそれは、魔術などとは到底呼べないレベルの子供騙しであったが、絹旗は自分なりに分析し、隠れて研ぎ澄ましてきた。

途中で比喩ではなく、本当に血反吐を吐いて死にかけてこともあったが、今や能力と併用することで実戦レベルにまで到達していると自負している。

これにより絹旗が本気になれば本来格上である麦野相手でも条件によっては勝利することが可能だった。

「超残念です。私も一度で良いので第一位の野郎をぶん殴ってみたかったです」

「恨みでもあんの？」

「そりゃあのクソツタレな実験の超元凶に等しいので多少なりとも思うところがありま
すよ」

諸悪の根源は実験を主導した連中で一方通行に非が無いということは絹旗も分かっ
てはいる。そもそも彼が居なくても置き去りチャイルドエラーは別の実験で利用されるだけだろう。

しかし、その演算パターンを脳に埋め込まれた身からすれば、一方通行を恨むと言
う方が無理があり、好きか嫌いかで言えば間違いない嫌いであった。

これに、あのイカれた実験の内容を知る霊夢はそれもそうかと頷く。

「まあその、悪い奴じゃないのよ？ あ、そうそう、口調とか性格とかは海鳥ちゃんみた
いな感じよ」

「どんなフオローですか。つか、あの糞女と似てる時点で超論外です。要するに超粗暴
で超口が悪いってことじゃないですか」

「えー？ あんなに仲良しだったのに……」

「ですから違いますって！ 超有り得ないです！ 貴方にそう思われてたことが過去一
番で超シヨックなんですけど！」

黒夜海鳥。

同じく暗闇の五月計画の被験者であり、一方通行の“攻撃性”を植え付けられ、その
一点においては最もオリジナルに近付いた存在だった。

絹旗は彼女のことが嫌いであり、犬猿の仲であったのだが、どうやら霊夢には今の今まで真逆の解釈をされていたようである。

(まあ、恐らくあの「訓練」に最後まで食らい付いてたのがあいつと私だけだから、なんでしょうが……)

きつと、顔や名前を覚えてもらっている理由も、そうなのだろう。

暗闇の五月計画の被験者達にとって博麗霊夢という人間は決して忘れられぬ存在であるが、当人にとっては有象無象に等しく、辛うじて顔を覚えているかどうかだと思われる。

「あ、そろそろ行きませんと……」

「ん？」

「実はこれから映画を観に行くところでした……あ、そうだ。霊夢さんもうですか？」

「映画あ？ ……別に構わないけど」

いつもなら面倒だと断るところだが、丁度予定もなかったし、以前に可愛がっていた知り合いが誘ってくれたのだ。たまには付き合うのも悪くないと思った。

これに絹旗はぱあと顔を輝かせる。

「本当ですか。それじゃあ、超行きましょう」

霊夢はまだ知らない。

絹旗の趣味が怪しげなタイトルの俗に言うC級映画を鑑賞することであり、今回もその一環であること。

そして、これから超が付くほどつまらない作品を観せられるということ……。

御使墮し

霊夢は後悔する。

絹旗の誘いに乗り、彼女がオススメする怪しげなタイトルと明らかに人が少ないがらの館内に若干の不安を覚えながらも指定席に座り、大画面のスクリーンと対峙した。

そうして二時間近くもの時間を浪費した結果、得られたのはゴミのような情報だけだった。

「何このクソ映画」

シンプルかつ直球。映画を観た感想は、その一言に尽きる。あまりにもチープでつまらないというレベルではない。

霊夢は映画というものを殆ど観たことがないし、知識も皆無だ。精々一話完結の少し長いドラマやアニメ、といった程度の認識である。それに加えて、こうして映画館の大スクリーンで観たことなど一度も無かった。

しかし、それでも少なくともこんなレベルが一般的に普通ノーマルではないということだけは

分かった。

貴重な時間とチケット代を溝に捨てたような気分。くだらなさすら感じず面白味が全くないので入口前で買ったLサイズのポップコーンが開幕十数分で尽きてからはもうただただ苦痛な虚無の時間だった。

「それが超良いんですよ、霊夢さん」

完全に目が死んでいる霊夢とは対照的に絹旗は実に満足した様子で笑っていた。

ハリウッド映画に挑んだにも関わらず結果的にC級になった天然ものが好みという感性が終わってしまったている彼女からすれば、この絶望的な内容にも拘わらずそれなりの予算を費やしているであろうこの作品は期待を裏切らないものであった。

「最愛ちゃん。やっぱりあの実験で脳が……」

研究員からは比較的まともな人格で優等生なんて持て囃されていたが、相応の犠牲を払っているようだと言夢は同情的な視線を送る。

「超辛辣ですね。お気に召しませんでしたか？ なら、気分転換に他のを梯子しちやいますか？」

「私に死ねと？」

「またまたー、映画で鬼巫女が死ぬならこの街の連中も超苦労しませんよ」

「言うわね。……クソ映画にしてもつとこう、なんかあるでしょ。ほら、妙ちくりんな化

け物とかと戦う奴？ あれなら飽きはしないとと思うけど」

「スプラッターモノとかホラーパニック系ですか？ それなら丁度オススメするシリーズの新作が出てますよ。ヒロインが派手に死ぬのが超恒例です」

「じゃあ、それで」

ヒロインが死ぬとネタバレされたが、少なくとも今観た虚無よりはマシだろう。

「では、サナエさん 4 人喰い鮫襲来！ 勝手に戦え！ “ を超観るとしましょう ”
「……やっぱり帰ろうかしら」

今度はポップコーンのサイズをLにしようと思いつきながら霊夢は絹旗の引つ張る手に促されながら映画を梯子するのであった。

「やっぱりクソ映画じゃない」

「1作目は普通に好評でそれなりに話題になったんですけどね……あつ、ちよつと、私のポップコーン食べないでくださいよ」

どこことなく見覚えがあるような、一昔前に流行った都市伝説だという湖に落ちたとかイジメで自殺したとかで失踪した女子高生の悪霊が、何故か飛行能力を得た巨大な鮫と戦う映像を冷めた眼で眺めながら霊夢は呟く。

シナリオは支離滅裂で最悪。しかし、主演の悪霊の演技力とアクション面はそこそこなのでまだ観れる映画だった。

「あ、死んだ。ヒロインどころか全滅じゃん」

「これも超恒例ですよ。在庫処分って感じで雑過ぎて超笑っちゃいますよね」
「失笑の方ね」

巻き込まれた人間サイドの大半は悪霊と鮫に派手に虐殺され、生き残った数少ないメンバーも最後にやっぱり殺されてそのままエンドロール。こんなアクション以外面白味が殆どない作品が四作も続いているとは、映画業界というのはよく分からない。

「因みに最愛ちゃんはこれのどこが面白いと思ってるの？」

「そうですね……超調子に乗ってシリーズ化したは良いもののマンネリ化してそこから抜け出そうとして結局抜け出せない超カビの生えたお決まり展開もそうですが、一番は四作目にして鮫と戦わせるなんていうウケ狙いの超安直さ！ ですかね」

「ふうん……やっぱりよく分かんないや」

趣味は人それぞれ。さっぱり理解出来ない絹旗の感性に霊夢はそう結論付けて考えを放棄する。

そんなこんなで上映終了し、映画館から出ると外はすっかり暗くなっていた。

「映画って長いのね」

「今日は付き合ってくれて超ありがとうございます。霊夢さんには合わなかったみたいで、申し訳ありません」

「良いわよ別に。映画なんて滅多に観ないし……映画はあれだけど、ポップコーンは美味しかったし」

この映画の評価する点：ポップコーンが美味しかった、はなかなか他に類を見ない最低レベルの評価だと思われるが。

「とりあえず最愛ちゃんが楽しくやれているようで良かったわ。麦野……だっけ？ この前はぶっ飛ばしちゃったけど感謝しないとね」

「！……そうですね。怖い面もありますけど、超優しいリーダーです」

「……………」

「その、今日は本当にありがとうございます。霊夢さんと映画観れて超楽しかったです」
真つ直ぐな礼を言われ、霊夢は照れ臭そうに、ばつが悪そうにそっぽを向く。

(……………てつきり恨んでいると思ってた。私のこと)

暗闇の五月計画。あの狂った科学者共に対して、霊夢は何もしなかった。その気になれば一切合切を無茶苦茶に出来るというのに。

連中は霊夢が来る時は外面を良くして実験の内容も甘くしていたが、その程度で彼女を誤魔化せる訳がなく、何となく察してはいた。

それでも何もしなかった理由は、単にどうでも良かったから。当時の霊夢は風紀委員に所属していなかったし、この街に対して何の価値も見出だせず、ただ現状を憂い、悲

観し、何もかも投げやりだった。

今も然して変わらぬが……。

そうして霊夢が何かするよりも先に、暴走した黒夜海鳥の手によつて暗闇の五月計画は壊滅した。本当は暗部の襲撃という話もあったが、どちらにせよ、狂った科学者共が自分達の悲願を叶えることはなく、呆気無い幕切れであつた。

霊夢はふうんと思わなかつたが、散り散りとなつたらしい置き去りの子供達の事は少しだけ気になつた。

ついで何もしなかつた自分に対してきつと、悪意や憎しみを抱いているのだろうか勝手に考えていたが、少なくとも絹旗最愛は違つたようだ。

(ハア……どういつもこいつも)

自分は上等な人間ではない。心の中でそう卑屈に吐き捨てる霊夢だが、実のところ彼女の方こそ気付いていなかった。

ただ悲観してばかりだった己が、そう思考している時点で、既にかつてとは変わつたつあるということに――。

「んじゃ、またね」

「はい。またいつか、出来れば仕事中外で――」

二人が別れようとした、その時である。

霊夢に悪寒が走った。

「!!」

神掛かった第六感。それは何の脈絡も無く、あまりにも唐突で、然りとて彼女は本能的に裾から札を取り出し、周囲へと張り巡らせる。

「ツ!!」 なつ、霊夢さん——」

これに絹旗は身構える。霊夢のあまりにも突然の行動に動揺するも敵意は向けられておらず、しかし真剣な眼差しに尋常ではない事態なのだとして即座に理解した。

同時に、結界が二人を覆い尽くす。

「超何が起こるんですツ!!」

「——んなこと私が知る訳ないでしょうが」

「はあっ!!」

そして、天から光が降り注ぐ。

誰にも見えぬそれは万物を透過しながら学園都市を、日本列島を、地球全土を呑み、霊夢が展開した結界へと衝突する。

「ツ——」

この日、世界がひっくり返った。

多くの人々は、それに気付かず、然りとて“異変”は確実に起きていた。

翌日。

その日は、雲一つ無い快晴だった。

「……良い天気ね」

目覚まし時計が鳴り響くほんの少し前に目覚めた霊夢は柔らかな布団に名残惜しさ

を感じながらも起き上がり、洗面所へと向かう。時刻は早朝で彼女は自墮落であるものの意外と規則正しく休日でも早起きであった。

顔を洗うと今度は朝食の準備。その片手間にBGMとしてテーブルの上にあるリモコンを手にとってテレビを点ける。

実に優雅なモーニングであった。

「……………」

自然とテレビに釘付けになってしまう。液晶画面に映るのはごく普通のニュース番組である。

キャスターが、自分の担任であるはずの子供先生であること以外は。

「……………」

無言でコンロの火を止める。驚きのあまり固まって料理を焦がすことがなかったのは、この光景を予期していたからだだった。

ピンポン。

玄関のチャイムが鳴る。はいはいと扉を開ければ、そこには昨日共にクソ映画を鑑賞した絹旗が汗を流し、ゼエゼエと息を切らしながら立っていた。

「おはよう。随分と早いわね」

「おはようございます。良かった、霊夢さんは超霊夢さんのままです……………」

「そりゃ私は私だからね」

「朝早くにスミマセン。超早急に状況を共有したくてっ……」

「そう……とりあえず上がりなさい。丁度朝餉ができたところだから食べてく？」

絹旗が招かれる。二人は椅子に座り、テーブルを挟んで向き合う。

「で、どうだった？」

「……麦野がロリっ娘に、フレンドがおっさんに、滝壺が金髪のヤンキーになってました」

差し出された冷たい麦茶をがぶ飲みし、絹旗は自分が体験したことを語る。

一方、霊夢はやはりかと同情的な視線を送りながら焼きたての目玉焼きを白米と共に口に含んで咀嚼し、視覚はともかく味覚に関しては問題無い事に安心した。

「ついでに私は別人に見えているようで、しかも麦野に因縁がある相手なのか殺されかけました。超頭がおかしくなりそうです……」

「中途半端に防いだ影響ね、きつと。私は知り合いの根性根性喧しい熱血馬鹿が居たかと思っただですのお嬢様口調で吐きそうになっただわ」

昨日の出来事を思い出し、霊夢は顔をしかめる。彼……恐らく中身は彼女が絹旗の時とは違い、自分を博麗霊夢だと問題無く認識していたのはやはり咄嗟に“夢想天生”も発動して完璧に防いでいたからだろう。

あの後、確実に何か起きたにも拘わらず二人に特に影響は無く、酷く困惑した。念のため連絡先を交換し、その日は一旦別れたが、暫くして異常はすぐに判明する。

世界は気が付かぬ内にがらりと変わった。外では赤子が働き、老人が通学し、子供が医者をやっている。知り合いは軒並み違う姿で、しかし中身は確かに本人そのものであった。

——入れ替わり。

それも認識の操作や肉体の変異ではなく、魂の交換。老若男女問わず他人が別人の姿となつて、皆がそれを当たり前のように受け入れている。影響外に居る者からすれば、あまりにも異様な光景だった。

「非科学……ですよね？　こんな超出鱈目な現象。そうとしか超考えられません」

「ええ。規模は不明だけど、こんな事を出来るのは相当な使い手だと思わう」

少なくとも学園都市全域は影響下にある。魂の入れ替わりだけではなく、個人の認識すらも歪めているのだ。アウレオスの黄金錬成アルス・ヒマグナのような世界の改変に等しい規模の大魔術が行使されたとみて良いだろう。

「超最悪過ぎます。これなら私も影響を受けた方が……いや、自分が知らぬ内に汚いおっさんになってるとか想像するだけで超ゾツとします」

とんでもないことに巻き込まれた。頭が痛くなつたのか絹旗は額に手を当て、溜め息

を吐く。

「それで……どうやったら元に戻せるんです？」

「そうねえ……術者を叩きのめす、つて感じで簡単なら良いけど、他には術式の核を見つけて破壊する、とかかしら」

そもそも動機が不明だ。入れ替わりを行ったところで黒幕に何のメリットがあるというのか。余程のことがない限り無いに等しいだろう。

ならば、入れ替わり自体は単なる副作用に過ぎず、本来の目的は別にあるのでは。その結論に行き着くのはごく自然のことである。

「入れ替わり……魂の移動……もしかして、何かを召喚した？」

「はい？ 超どういうことですか？」

「玉突き事故みたいなものよ。肉体の無い存在を喚び出し、人間の身体に宿す。通常なら共存するかどうか塗りつぶされるんだけど……元の魂を弾き飛ばすってパターンがあるとするば……」

「その魂が別の肉体に入って、また追い出して……という感じですか？」

「ええ。にしても無理矢理が過ぎる。仮にそうだとしたら、一体何を喚び寄せたのやら

――」

恐らく高位の存在。このような混沌を生み出すような輩だから、ろくでもないのは確

かであった。

「……さて、どうしましょうか」

「? さつき言った通り、術者を倒すか術式とやらを破壊するのでは? それに、出来るかは知りませんが召喚したやべーやつを超ぶつ飛ばすつても……」

手段は豊富だというのに、何故手をこまねているのかと絹旗は首を傾げる。

「それが出来たら楽なんだけどもねえ……場所が分からない。少なくともこの街には、それらしき気配は微塵も感じないわ」

あの時は霊夢も防ぐので必死で位置を特定することは出来なかった。

もしもこの術式が学園都市だけでなく日本、延いては世界にすら影響を及ぼしているとなれば、その術者や術式の核がどこに存在するかなど分かるはずがない。

「けどまあ……近い内に向こうから姿を現すわよ」

「何故です?」

楽観的に思える発言だった。

「術者からすれば、私達のような異変を認識している存在は目障りなはず。排除しに来ると考えるのが自然でしょ」

「……私、霊夢さんの傍を離れません」

下手人と対面したらぶん殴ってやりたかったが、こんなことを仕出かすような出鱈目

な相手にまともにやり合えるとは微塵も考えていない絹旗はすべて霊夢に任せるつもりだった。

「とりあえず……影響を受けていない奴にもう一人心当たりがある。食事を終えたらそいつとも合流しましょう」

「そんな人が……誰です？　岡崎ですか？」

「あいつも平気かもしれないけど違うわ。今頃不幸だと嘆いている馬鹿よ」

優れた魔術師ならばこの異変を防いでいる可能性は高い。それ以外となれば、霊夢が知る限りではありとあらゆる異能を打ち消す“幻想殺し”を有する上条当麻一人しか居なかった。

但し、こちらにも問題がある。

（あいつ……今、学園都市の“外”に居るんだっけ？）

天使

博麗靈夢 VS 一方通行。

学園都市とその外すらも巻き込んだ災害にも等しきその戦いは多くの噂をもたららし、暗部といえど到底隠蔽し切れているものではなかった。

その中にこのような話がある。一人の無能力者があの第一位を倒した。

そして、それが上条当麻であると。

無論、事実は異なるが、そもそもかの鬼巫女が戦ったという話ですら真実か定かではない与太話であり、情報が錯綜していた。

噂は噂を呼び、形を変えて誰か、また誰かへと伝聞され、ウイルスが媒介するかのように瞬く間に広がっていく。これは単純な権力や情報統制でどうにか出来るようなものではなく、この科学の街でも例外ではない。曲がりなりにも法治国家である日本国に属しているし、そもそも強硬手段を取った時点でその噂が真実であると言っているようなものであるのだから。むしろあれだけの被害と混乱に対して事実を隠蔽し、眉唾物の都市伝説が広まる程度で済んでいるのは流石と言えよう。

賢しい者は真意が定かではない情報のみでは動かない。けれど、いつの世も愚者が多数派であり、そういった者は己にとつて都合の良い情報のみを耳に入れ、歪める。

そうして支持されるようになるのは、無能力者が学園都市最強を倒したという与太話。たちの悪いことにその話の中で出てくる無敵であるはずの一方通行を殴り飛ばしたというのは紛れも無い事実であり、確かに一方通行が入院したということもあつて、どんどん尾鱈が付いて彼らの中では完全な真実となつていた。かの恐ろしい鬼巫女よりも誰かも知らぬ無能力者の方が夢があり、都合が良いのだ。

彼らの目的はただ一つ。最強を下した存在を討ち取り、自らが最強の座へ名乗りを上げる。

あまりにも無知蒙昧で短絡的であるが、残念ながらそのような思考に至る連中が学園都市にはありふれていた。

故に、上条当麻は学園都市中から狙われた。どういふ訳か海胆のようなツンツン頭という特徴まで広まってしまつており、過去に成敗された彼に個人的に恨みがある連中を含んだ多くの不良共が道行く先々で襲撃してくるようになる。

この事態に統括理事会も問題視し、ある程度ほとぼりが冷めるまで情報操作に邪魔できない上条を一時的に学園都市の外へと隔離することを決定した。

「このハナコ……」

「……正気？」

通達された内容を聞いた霊夢は溜め息交じりに呟く。それなりの騒ぎになるとは思っていたが、このような馬鹿馬鹿しい展開になるとは。

因みに霊夢に対しての襲撃者は極少数である。災厄の如く恐れられる鬼巫女に挑もうなどという命知らずはそうそう現れない。

「ハア……じゃあ、マジで帰るの？ 実家に」

「……そうなる」

「記憶喪失なのにな？」

「……記憶喪失なのにな」

上条としても昼夜問わず追いかけて回される日々から逃れられるのは願ってもないことであつたが、一つ致命的な問題があつた。

それは彼が記憶を失くしているということ。外部へ行くとなれば身元引受人は当然親族となる訳だが、つまり上条は親の顔も知らぬまま里帰りしようとしているのだ。

友人知人ならいざ知らず、血の繋がった両親相手に果たして誤魔化し切れるかどうか……。

「いや、無理でしょ」

「ぐ……俺もそう思うが、もう腹を括るしかないだろ」

ぼつさり切り捨ててる靈夢。とはいえ統括理事会の通達に異議を申し立てようものなら正当性を示す為に記憶喪失であることを告白しなければならぬ。

つまりどうすることも出来なかった。

「というか、インデックスも一緒に行くの？」

「ああ。海に行きたいって駄々を捏ねられて仕方なく……」

「ふうん……けどまあ、その方が良いでしょう。私は面倒見るのは嫌だし、小萌先生に押し付けるのも申し訳ないでしょうし」

居候の銀髪シスターを家族にどう説明するつもりなのやら。かといってあの暴力の化身を預かるなんて真似は真つ平御免である。

「……一応尋ねたいのですが、私のご両親について何か知っていたりしないでせうか？」

「逆に訊くけど、知ってると思う？」

「だよなあ……」

頭を抱える。上条はただただ不安だった。

顔も、性格も、思い出も、何も知らぬ家族。どんな人物なのか、どのような顔で会って、接すれば良いのか――。

「バレたくないのなら、精々頑張ることね」

完全に他人様な様子で靈夢は投げやりに言うもの思うところが無いと言えば嘘に

なる。

上条の記憶喪失は他ならぬ己が咎。彼を無責任に死地へと招きながら守り切れなかったが故の末路であり、恨まれるだけの道理はあるのだから。

全てを知らされた場合、彼女はそれを打ち明け、あらゆる叱責も報復も当然の罰として受け入れるつもりだった。

「ま、何かあったら連絡でも超越しなさい。と言つても流石にこの街の外じゃあ出来ることなんて無いに等しいけど」

「おう、分かった……ありがとな。博麗」

そんなやり取りをしたのが二日前。思い返しながら霊夢は玄関のチャイムを鳴らすも、一向に応答は無い。

「……やっぱりまだ帰ってないわね」

溜め息を溢す。電話しても出なかったので学生寮まで足を運んだのだが、無駄足だったようだ。

「これから超どうするつもりですか？」

同行している絹旗が尋ねる。現在、彼女はフードを目深に被り、そこから辺の売店で買った安物のカラフルなサンングラスという完全なる不審者スタイルであった。

麦野に襲われた時のように見知らぬ誰かと間違われて揉め事になるのを未然に防ぐ

ため。本当はマスクで口元も隠したかったが、真夏なので蒸れるわ息苦しいわで耐えられなかった。

「さつきも言ったように、元凶が向こうから来るのを待つしかないわ。先にどっちに行くか分かんないから合流しておきたかったんだけど……」

「……もしも元凶が来なかった場合は？」

「……世界中の魔術師を片っ端からしばくことになるわ。何十年掛かるのかしらね」

「ええ……」

ほぼ同時に二人で溜め息を吐く。術者がこの街、この国に居るとは限らず、海外に潜伏しているとなれば特定は不可能に等しいだろう。

せめて大まかな発生源が何処か分かればまだやりようがあるのだが……。

「しばらく超雲隠れするとして……麦野達にどう説明しましょう。声も変わっているでしょうから電話でも超怪しまれそうですし……」

「最愛ちゃんの声真似って簡単そうなものね。適当に超超言ってるだけで超それっぽくなりそう」

「喧嘩売ってます?」

「まあ、当てがないって訳じゃあないんだけど……」

じろりと睨まれるも、スルーして霊夢は素知らぬ顔でどうしたものかと顎に手を当て

る。

魔術師達はきつと、この事態を把握しているに違いない。イギリス清教に連絡を取れば少なからず情報が得られると思うが、何となく嫌な予感がし、そうしようとする気になれなかった。

霊夢の勘は当たる。しかし、現状を打開する策は未だに思い付きそうにないため神掛かるそれを裏切るべきか否か思索してしまふ。

「んっ。」

その時である。着信音が鳴り響く。

「噂をすれば……ね」

画面に表示される名前と番号を確認し、霊夢はそう呟いて電話に出る。

『よう博麗っち！ 調子はどうぞだぜい？』

「良いと思う？ 何が起きてんのか教えてちょうだい」

電話の相手は、土御門元春。霊夢のクラスメイトにしてイギリス清教必要悪の教会の魔術師。そして、その顔すらも数ある一つでしかない多角スパイ……彼ならこの入れ替りの異変を把握していても不思議ではない。

『おお。その様子だと気付いているみたいじゃー？ 流石だぜい。いやあ念のため連絡してみても正解だったじゃー』

「御託は良いから、さっさと説明しなさい」

いつものふざけた口調に辟易しながら霊夢は問う。イギリス清教がどこまで把握しているか知らないが、腐つても魔術大国。自分よりは物を知っているはずだ。

『分かったぜい。何で世界が今こんなすつとんきような事態に陥っているのか簡潔に言う——』

「——『天使』、だと?」

とあるバーにて。

店内の景観や雰囲気には似合わぬ日本酒の入ったお猪口を片手に女は聞かされた内容に眉をひそめて言う。

「ええ。言葉のままに天かみの使い。基督……いえ、こちらでは十字教と言う方が馴染み深いですね。西洋由来の、今では世界で最も信仰される高名な一神教ですが、ご存知で?」
「異国の異教のことなど知る訳なからう」

「あら左様で。では説明致しましょう。天使Angelというのは、その十字教において信仰される聖四文字、ヤーヴェ、エホバ……色々な呼び名があるその神の被造物。自我を持たぬ装置、傀儡のようなものだとして認識されて結構です」

クスクスと笑い、愉しげに語る。

「陰陽の式神のようなものか？ その異教の神は、随分とけつたいな物を作るのだな」
 「唯一神らしいので人手が足りなかったのでは？ 徹底して自我を有することを認めぬ
 辺り、同じ神としては扱わぬ傲慢さがあります。……まあ、ともかく今回の珍事の原
 因は、本来なら異なる位相に住まうその天使の一角を何者かが地上に降臨させたことが
 原因という訳なのでございます」

人呼んで、御使エンゼル墮フォールし。

世界全体を巻き込んだこの異変の正体を告げられた女は更に眉間に皺を寄せ、傍迷惑
 な話だと吐き捨てる。

「……それで、計画に支障は？」

「全く。予期せぬ事態ではありますが、降臨した天使自身が帰還の為に動いています。
 近い内に愚かな術者は消され、全ては元通りになることでしょう」

「なら良い……こんなふざけた事でご破算になろうものなら怨霊に転じてしまふところ
 だ」

「それは恐ろしい。菅原道真の再来ですわ」

「はっ 私の方が先輩だ」

今回の事象に彼女達が関わるつもりはなかった。放置していれば勝手に終わるのだ。

わざわざ藪をつついて蛇を出す必要などあるまい。

けれど、危惧することがあるとすれば――。

「天使とはいえ別位相の高次生命が降臨。呼び水には充分ですが、はてさて何が出るのやら」

ぼそりと呟く。

十字教の魔術師の力の起源。故に、その神秘はあらゆる魔術に垣間見られ、然して珍しくはない代物であるが、本物が顕現するとなればそれは何百年ぶりの邂逅となるだろうか。

まだ一波乱ありそうだと予感する。傍観に徹しながらも彼女は注目して止まない。

「どうした？　またくだらぬ企てか？」

「そんな企てなどと酷い。何でもありませんよ。我々は計画を続行しましょう。我らがご同輩も目覚める当てが出来ましたのですし」

訝しげな視線にわざとらしく誤魔化しつつ、話題を変えようとそう言えば女は露骨に顔を渋め、複雑そうな表情を浮かべる。

「む、彼奴か。歡ぶべきか憂うべきか……どうであれ、また騒がしくなるな」

ちらり、と一瞥した先にあるのは壁に飾られた一枚の古い時代の物であろうひび割れた皿。

それへと僅かに向けた女の視線はあまりにも歪で不可解極まりない。長らく会えていない、旧友に対するようなものであるのと同時に仇敵に対するようなものでもあった。

「ああ、そういえば——」

すると思い出したように女は問う。この異変を感知した時からずっと疑問であった事を。

「肉体の無い私はともかく……何故お前は入れ替わっていない？ それとも私がそう見えているだけで実際には影響を受けているのか？」

どこぞの木っ端の魔術師が引き起こした矮小な術式であれば何ら問題無いのだろう。しかし、これは世界をも巻き込んだ、超大規模の召喚儀式。いくら目の前の者がありとあらゆる邪法、外法に精通し、こちらの理解の範疇を超えた化生の類いであろうと、果たして完全に影響下から脱することが出来るのだろうか。

そんな疑問に対し、彼女は微笑を崩さない。

「その事ですか。ええ。おっしゃる通り私は全く影響を受けていません。かといって何らかの防護を施したということもありません」

ならば何故か。理由など明白である。

「我らは幻想と成り果て、世界から見棄てられた異物。端から存在しないモノを頭数に

入れる道理など有るはずがございませんから——」

場面は戻り、霊夢は土御門から事の詳細を訊いて首を傾げていた。

(……要するに、神霊みたいなもの、って認識で良いのかしら？ その天使ってのは)

曰く神ではなく、その使いらしいが、然りとてその力の強大さを見れば神々の類いと然して違いはないだろう。十字教の世界観においてどのような存在でどのような立ち位置なのかなど霊夢の知るところではないし、至極どうでも良かった。

何せあちらでは神でもこちらでは妖怪や悪魔。その逆も然りというのはありふれており、神とそれ以外の区別や差異など遙か昔から曖昧なのである。

共通していることがあるとすれば、そのどれもが神と崇められるだけの“力”を有していること——。

「で、そのエンゼルなんたらってのは術者はまだ特定出来てないのね？」

『ああ。発生源に関しては大まかな位置は分かっているんだがにや』

大体の予想は当たっていた。やはり今回の異変は何処かの馬鹿が大それた存在を喚び寄せたことによる余波だったようだ。

「ふうん……面倒ね。その天使ってのは？」

『そいつの居場所もまだ掴めてないぜい。恐らく魂の位を人と同格に落とされているだろうから、目に見えて分かるって訳じゃあないんだと思うぜよ。とはいえ術者に使役されている訳でもないからそこはまあ一安心ってところかにや』

「そ。死ぬほど面倒ね」

『……忠告しておくが、見つけ出しても挑むなんて真似は止した方が良いぜい。人と天使にはそれだけ隔絶した差がある。少なくとも十字教の魔術師では“絶対に”勝てない』

「安心してちょうだい。無策で神様クラス相手に喧嘩売る訳ないから……無策では、ね」
神にも千差万別。その天使とやらがどの程度の強さなのかは知らぬが、高く見積もつておいた方が良いでしょう。

「ところでそっちは無事なの？ 入れ替りを自覚してるってことはまあ、防げたってことなんでしょうけど」

『どうにか、な……と言っても見た目は変わっているように見えるみたいで生活には苦勞するぜい。特に“ねーちゃん”はよりにもよってステイルの見た目になってるみたいで相当ストレスを抱えているみたいにやー』

「ねーちゃん？」

『あ、神裂火織のことですたい。今一緒にこの“御使墮し”の調査をしているぜよ』
「ふうん……火織も一緒なんだ」

しかし、まさかステイルの見た目であの露出の多い格好をしているのだろうか。想像するだけで嘔き出してそうになってしまいう絵面だ。

「というか、あんた達も完全には防げてないんだ。私みたいに事前に結界を張っておかないと、難しいのかしら」

そこまで言つて、よくよく考えたら自分は「夢想天生」という裏技を用いて影響下から脱しており、同じく結界に籠っていた絹旗は土御門らと同じような状態になっていることを思い出す。

この御天墮しとやらを完璧に防いでいる者は、割と少ないのかもしれない。

『……うん？ もしかして博麗つち、誰とも入れ替わつてないのかにやー？』

「ええ。そうだけど」

『……マジで？』

「え、何？」

過剰なまでに驚く土御門に首を傾げていると、暫くして土御門の慌てる声と共に女の声が聴こえてくる。

『——博麗霊夢。今、どこに居られるので？』

「その声、火織？ どこつて……今は当麻の寮の前に居るけど」

挨拶も無しにそう問い掛けられ、不審に思いながらも霊夢は正直に答える。

『分かりました。今からそちらに向かうので一歩足りとも動かないでください』

「はっ？」

『おいおい！ 待ちやがれってねーちん！ 学園都市に入るには許可が必要ですよ！』

『ですが土御門……！』

「……何なのよ、一体？」

騒がしい喧騒に思わず携帯を耳から離し、困惑する。二人して様子が変わるが、もしかすると何かしらまずい発言をしてしまったのかもしれない。

思い当たるのは自分が入れ替わっていないということ。術式を完璧に防いだ場合、何らの不都合が生じるのだろうか。

『あー、博麗つち。大変言いにくいんだが……』

「ん？」

すると神裂をどうにか落ち着かせたと思われる土御門がそう切り出す。

『たった今、博麗つちが御使墮し実行犯の最有力候補に躍り出ちやいました』

「——あん？」

眉をひそめ、そして理解する。

先程からしていた嫌な予感というのは、こういう事かと。

容疑者

前提として、今回の入れ替わりの原因である大魔術、「御使墮し」を防ぐのは非常に困難である。

あの「歩く教会」と同等以上の効力を有する城塞クラスの結界ですら約300秒ほど食い止める程度で結局は破られた。土御門元春と神裂火織はその堅牢な結界が張られた英国君主の公邸の一つ、ウインザー城に居たため半ば難を逃れることが出来た。

他にもウエストミンスター寺院とサザーク大聖堂の最深部に潜っていた人間も無事であったが、ウインザー城よりはマシなだけで完全に防げた訳では無い。

それ以外の者は当然術式の影響をもろに受けた。中には自力で防げるだけの実力者も居たが、何の予兆も無く突然発生した大魔術に対して事前に城塞クラスの結界を張って備えるなどまず不可能であろう。

つまり、そんな中で全く影響を受けず、完全に防いでみせたのは現段階では幻想殺しを有する上条当麻以外には、博麗霊夢しか確認されていなかった。

『えっと、まずどうやって御使墮しの発動を察知したんだぜい？』

「勘よ」

『……真面目に答えてくれないか』

「真面目も真面目、大真面目よ。私の勘は当たるの。後は結界だけじゃなくて能力も使って……まあ、一時的に無敵モードになれるのよ」

『うーん……証拠が少ない。今のところ身の潔白は証明出来ないぜよ』

土御門が悩ましげに言う。霊夢の言い分が正しいという証明は難しく、状況証拠から見れば彼女が犯人である可能性が非常に高い。

サラッと無敵モードなんて発言しているが、今これに突っ込んで話が更にややこしくなるのは避けたかったので一先ずスルーしておく。

「ああん？ 大体やるメリツトが無いでしょうが。そもそも十字教の魔術とか畑違いにも程があるし」

『それはそうなんだが……博麗つちは神道の巫女。〃神降ろし〃だなんてのは遥か昔に失われた代物だが、別に再現出来ない程ではない。色々と理屈を捏ねて関連付けるには充分ですわい』

「神降ろしって……だつたら尚更有り得ないわよ。修行してないからあまり得意ではないけど、少なくとも私がやればこんなふざけた入れ替わりなんて起きるはずがない。やろううとも思わないし」

『……何?』

その発言に土御門が一瞬硬直する。

『まさか、出来ちやうにや?』

「ええ。一応、出来るはずよ」

『おおう。そりやまた面倒なことに……いや、博麗つちの言う入れ替わりの起きない“神降ろし”を見せて証明すれば……駄目だな。今度は異端の神を降霊させたことで魔女裁判とか別の問題に発展するかもしれないぜい』

「はあ? 神の御業を行使するとか、あんた達が普段からやってることじゃないの」

『魔術で再現するのと、“本物”を喚んじまうのとは話が全然変わってくるんだぜい……』

霊夢の言う“神降ろし”がそのままの意味であることを察した土御門は、この何気ないやり取りで爆弾が一つ増えたことに対してどうしたものかと額に手をやる。その隣で話を聞いていた神裂も驚きを隠せない様子だ。

才覚と体質が物を言うため現代では衰退している超高等魔術にして禁忌。十字教は基本的に唯一神以外の神を認めていないためその業を見せてしまえば、霊夢を神の敵と見なして排除しようとする動きが可能があった。少なくともそういった声は一つや二つは飛び交うだろう。

果たして本当に神降ろしが出来るのか。という疑問は無く、博麗霊夢という人間の出鱈目さを知る身からすればむしろ納得してしまった。

「じゃあ、どうしろつてのよ。まさか本当に私がやっただなんて思ってるんじゃないでしようね？」

『まさか。しかし、俺っち達が納得しても他の連中がどんなアクションを起こすのかわかったもんじゃないぜい。ねーちんみたいに問答無用で襲おうとしてくるかもしれないしにやあ……』

『うっ……面目ありません。落ち着いて考えれば、博麗霊夢が、このような儀式を行うはずがありませんでした』

「ちっ……面倒臭い」

世界全体を巻き込んだ大魔術なのだ。イギリス清教だけでなく、ローマ正教、ロシア成教も犯人探しに躍起になっている。世界中に情報網を有する彼らが霊夢という例外を知るのも時間の問題。或いは既に察知している可能性すらあった。

不可侵条約が結ばれているこの学園都市内で白昼堂々仕掛けてくるとは思えないが、かといって追手を出さないというのは考えづらい。

巻き込まれなかったから、犯人扱いされる。かなり必死で防いだというのに、その結果がこれかと霊夢は苛立った様子で頭を搔く。

「何より最悪なのが、この街から出られない以上、あんた達と合流して犯人探しに参加することも出来ないってことね。ぶっちゃけ無断で学園都市から出ることも可能っちゃ可能だけど……」

そう、霊夢は学園都市から出られない。それは単に許可やらの手続きが必要という理由だけではなく、より明確な「契約」がそこにあるから。

尤も、一方通行との戦いで太平洋まで移動したように霊夢は然してこの契約を重要視しておらず、必要であれば躊躇無く反故にできる。

いよいよ「教授」の堪忍袋の緒が切れそうではあるが。

『それは勘弁してくれ。頼むから』

これに土御門は真顔で待ったをかける。彼としてはただでさえ一方通行と学園都市を飛び越えて派手にぶつかり合った件で世界各地のあらゆる勢力から注目されているこの状況下でまた目立つ真似をしてほしくはなかった。

「分かっているわよ。仕方ないけど、あんた達に任せる。追手やら刺客やは自力で何とかするわ」

「あの……霊夢さん。追手とか刺客とか超不穏な単語が出てきたんですが……」

「ん？ ああ、後で説明するから待って」

すると絹旗が不安げに話し掛けてくる。

『……誰か近くに居るのか?』

「たまたま術式発動時に私と一緒に居た子が。あんた達と同じで完全には防げてないけど」

『ッ! 最初に言ってくれないかにやー? ペラペラと喋り過ぎちまったぜい。そいつは一般人か?』

「カタギとは言えないけれど、科学側よ。魔術に関してはそういうオカルトが存在するってことくらいは知ってるだけ。問題は無いわ」

『問題かどうかはこちらで判断するぜい。……ま、俺らと同じなら容疑者扱いはされないだろうが……事態が終わった後、記憶処理も検討する必要がある——』

「私の前でそれを言う? 元春」

声質が僅かに低くなる。ここで土御門は霊夢が記憶を消去・忘却させることに対して異様に忌避感を持つことを思い出す。

『……悪い。だが、こちらの身にもなってくれ。口止めだけは、絶対にさせろ』
「ええ。勿論よ、あんたも大変なものね」

地雷を踏んだ。土御門は苦い顔をしつつも念押しする。最悪霊夢と敵対してでも魔術の存在を学園都市の住人の多くに知れ渡るのは避けたい。

(……やっぱり非科学……いえ、*“魔術”*でしたか。超秘密統制がされているみたいで

すね。ですが、その人……超普通に私達に教えてますよ)

こつそり耳を傾け、聴こえてきた内容に絹旗は顔を知らぬ電話の相手に対して哀れみを抱く。

霊夢は過去に絹旗は勿論、暗闇の五月計画の被験者達の中で才能のある者や興味のある者に子供騙しレベルではあるものの手解きしている。そして、絹旗は素人ながらもこれがある程度実用可能なまでに研鑽しており、他にも同じようなことをしている者は居るだろう。

当時の霊夢は科学と魔術が不可侵条約を結んでいるなど知らず、そういった意識が低かったので仕方無いが、どうであれ彼女がきつかけで非科学オカルトの存在に気付いている者はそれなりに居た。つまり既に霊夢はやらかしてしまっているのだ。

「そうだ。当麻のことなんだけど——」

『カミヤんなら、一緒に居るぜい』

「あ、やつぱり？ そうだろうと思っただわ」

ただ影響を受けてないというだけで見境無く疑うのだ。能力開発を受けているかつ「幻想殺し」を有することから魔術を逆立ちしても使えぬ上条当麻といえど、真つ先に接触していても不思議ではないと思っていた。

そして、自分が最有力候補という発言から察するに、上条への疑いは既に晴れている。

『察しの通りカミヤんに關してはきちんと確認して身の潔白が証明されてるぜい。まあ、幻想殺しがあるから俺は最初から無いとは思ってたんだが……ねーちゃんが突っ走ってしまつてなあ』

『つ、土御門！ それは言わなくても……！』

『火織……あなた、そんなに脳筋だっけ？』

呆れる霊夢。禁書目録の件から思うに、一般的な知識面はわりとアレであるが。

『のうっ……!? 私も冷静ではなかったのです！ 赤髪の大男が女のようなしなを作つて歩いているなどと、言われる苦しみが貴方に分かりますか！』

「……そりゃ御愁傷様」

そういえばステイルの姿で認識されているのだったか。この短い間に相当なストレスを抱えているようである。

『貴方は良いですよね……見た目そのままで』

「いや、そのせいで犯人扱いされてんだから良かないでしょ」

ステイル姿の神裂を想像して笑いそうになった手前、罪悪感からか霊夢は微妙な表情で言う。そう考えると、異変を知る者達が犯人捜しに躍起になるのも当然と言うべきか。

「んじゃ、さつきも言った通りこの件はあんた達に任せる。さつきと解決してちようだ

「い」

『ああ。あまり目立つ真似は避けて、学園都市で大人しくしてくれると助かるぜい。くれぐれも頼むにやー?』

「そりやあんた達の頑張り次第よ」

『……成程。それはちつとばかり全力で捜査しないとにやあ』

解決するのが遅ければ、こちらで動く。暗にそう脅しを掛けつつ、霊夢は電話を切る。そして、同時に溜め息を漏らす。

「……結局どうなったか超説明してくれませんか?」

「結論から言うと、私がこれをやったって疑われてるみたい」

「は?」

「意味分からないでしょ? んで、犯人認定して襲ってくる連中が居るかもしれないって話」

「それって、超まずいんじゃない?」

「追手やら刺客やらの不穏なワードが出てきた理由をここで絹旗は理解する。」

「ええ。しかも術者はこの街の外に居て私達に出来ることはなく、他所の連中が事態を解決するまでせいづらに対処しなきゃいけないし、この入れ替わりはそのまま……本当に最悪が過ぎるわ」

「……もしかして霊夢さんと一緒に居るのが超危なかったり？」

「どうでしょうね。今頃離れても手遅れかもね」

「ぐっ……」

頭を抱えなくなる。狙われているのは霊夢一人だけなので自分は関係無い……と、言いたいのが不完全ではあるものの影響下から脱している絹旗がどう見られるかは分かったものではない。

そして、この事件の元凶が自分達の元へ現れるという可能性は無くなっていなかった。

「因みに襲ってくると思われるオカルト使い共はどのくらいの強さなんですか？ 当たり前ですけど私、霊夢さんと岡崎以外とは会ったことありませんし」

「……そうねえ。つい最近三人くらいと戦ったけど一人は炎使いでもしもこの街の能力持ちならレベル4……いや、5でもおかしくないわね。もう一人は魔術師として別格。軍覇よりも身体能力がヤバくて私でも結構手こずったわ」

「そ、それ程ですか……」

超能力者に匹敵する強さ。霊夢の実力をよく理解しているが故に、彼女の見立てが間違っているとは思えない絹旗は戦慄する。

「最後の一人は……普通に死にかけた。もう二度と戦いたくないわね」

「……一方通行よりも？」

「ええ。まあ流石に、あんな出鱈目なのはそうは居ないと思うけど……」

そんなのがつい最近までこの街に潜んでいたのか。信じられない言葉に絶句する絹旗を他所に、霊夢はアウレオルス・イザード戦のことを思い出しながら渋い顔をする。

この街へ来て以来、霊夢が戦った相手の中で最も強かったのがあの錬金術師だった。上条、ステイル、宇佐見を含めた総力戦であったにも拘わらず、こうも評価されるだけ黄金錬成という術は霊夢の基準においても次元が違う。

「……ま、巻き込んだ以上、目の届く範囲に居るのなら守ってあげるわよ」

「それは……超心強いことで。分かりました。私もまだ死にたくありませんので」

つまり離れた場合は自己責任。絹旗は悩みながらも自らの安全の為に霊夢に同行することにした。

「決まりね。——じゃあ、そろそろ出てきたら？」

「え？」

唐突に霊夢が虚空へと投げ掛ける。

「問一、貴方が『御使墮し』の首謀者か」

そこに居たのは、禁書目録と同じくらいの小柄な金髪の少女。半透明の下着の上から黒いベルトで構成された拘束具のような物を着用し、その上から赤い外套を羽織っている。

る。おまけにリード付きの首輪と神裂を遥かに上回る奇怪で滅茶苦茶な格好だった。

十中八九、魔術師。

「なっ……」

絹旗は驚く。この瞬間まで、彼女の接近に全く気が付かなかつた。

「随分と早いわね、監視でもされていたのかしら。質問に対する返答だけど、NOよ。と
いうか電話の内容は聞いてたと思うけど？」

「解答一。それだけではまだ確証が無い。問二、貴方が『御使墮し』を引き起こして
ないと完全に証明出来るか」

再度問う少女。これに霊夢は意外と話の出来そうな奴が来て良かったと内心ホツと
する。尤も、話を通じない相手であれば蹴散らすまでだが。

「完全に証明、となると難しいけれど……ある程度疑いを晴らすことなら……あら？」

そんな絹旗を他所に、当たり前のように会話していると霊夢は何か気付く。
気配だけでは分からなかつたが、よく見てみればこの少女……。

「——貴方、中身は人間じゃないわよね？」

「——」

その問いに、少女は硬直する。絹旗は訳が分かず、戸惑うばかりだった。

「……問一、何故——」

「見たら分かるわよ。人間以外も入れ替わるのね。一体どこの妖怪……いや、どちらかと言うと、これは神力に近い」

その力の性質に、霊夢は見覚えがあった。一方通行が行使した『黒翼』——ソレから感じ取った力と目の前の少女の内面から感じ取れるナニカは酷似している。

まさか。脳裏に過った推測に霊夢は僅かに瞠目し、そしてすぐにそれが正しいと確信した。

「——もしかしくなくても、貴方が『天使』って奴？」

「……………」

ある意味では、今回の異変の元凶とも言うべき存在が姿を現した。

予想外の展開に眉をひそめる霊夢に対し、正体を言い当てられた少女は沈黙したまま長い前髪で隠れた瞳でジッと見つめる。

その心情は——。

神の力

「沈黙は肯定と受け取るわよ」

視線が交わる。

両者一歩も動かさず、空気がひりつく。目の前の少女は既に臨戦態勢に等しく、いつこちらに牙を剥いてもおかしくはなかった。

「……再度問う。貴方が御使墮しの首謀者、私を喚び寄せた張本人か」
「勿論、違うわ」

「しかし、私にはそれを判断するだけの情報が無い。問一、貴方が御使墮しの首謀者でない証拠を提示してほしい」

「それが難しいってのは、さっきの電話を聞いていた貴方なら分かっているでしょう。私が影響を受けていない理由なら、証明出来るけど？」

一触即発。そんな状況下でも霊夢は落ち着いた様子で会話を続ける。

未だに襲い掛かって来ていない時点で、目の前の少女……天使が己を問答無用で処断することに対して迷い、揺れ動いているのが分かっているからだ。

「…………それは？」

「元春には『無敵モード』ってザックリ説明したけど……」

——夢想天生——

あまり大っぴらには見せたくないが、こうなってしまったては致し方無し。霊夢は目を閉じ、自らの奥義を披露する。

「！」

「……………？」

霊夢が世界から浮く。天使は僅かに瞠目し、絹旗はその変化を感じ取れない様子だった。

「これで、私は術式を防いだ。試しに適当な攻撃をして確かめても——」

そう言い終わるよりも早く虚空から発生した無数の水柱が霊夢を貫く。

「ッ!？」

「…………躊躇無いわね」

ぎよつととする絹旗。対する霊夢は水柱に串刺しにされているように見えるが、実際には肉体をすり抜けており、平然としていた。

代わりに背後の上条の部屋のドアが破壊されてしまったが。

「…………真偽を明らかにするためとはいえ、刃を向けたことを謝罪する。私見一、視覚情報

以外ではこちらからは貴方の存在自体を観測出来ない。この世界から消失していると考えられ、御使墮しの影響から逃れられたことに納得した」

霊夢の知らぬことであるが、彼女或いは彼は天使の中でも「神の伝令」という役割を持つことから特に情報の送受信に長けており、故に人類とは比べ物にならない膨大な量の情報を一寸の狂いも無く森羅万象から取得し、処理することが出来る。

だからこそ、博麗霊夢の能力、そして本質すらも見抜く。言の葉ではいくらでも偽れるが、実際に目撃した情報は決して偽れない真実なのだ。

「……………」

俯き、再度沈黙する。得られた情報を咀嚼し、思考を巡らせている様子だった。

「……………貴方の疑いが晴れた訳ではない。しかし、貴方が首謀者である確証も無く、よつて现阶段での判断は保留することにした」

「そう……………ありがとう。話の分かる奴で助かったわ」

ふう、と霊夢は一息吐く。目の当たりにし、一触即発の空気になってよく分かった。アレはそこらの神霊よりもずっと純粋な力の塊。神だと判断して間違いなく上位に位置するレベルだろう。

こんなところで衝突することになれば、最悪この学園都市が更地になりかねない。

「では、問……………」

「あ、待って」

「？」

「とりあえず場所を変えるわ。人払いをしてなかったでしょう？ 野次馬が来る前に

さっさと退散しましょう」

「……………」

こくりと頷く天使。存外素直な奴だと思いつながら霊夢は彼女を引き連れ、壊れたドアを放置して寮を後にする。

(超帰りたい……………)

一方、絹旗は先程天使の放っていた重圧のせいで吐きそうになっていた。

いつものファミレス。

恐らく顔馴染みだと思われる廻しを付けた土俵入り前の力士の風貌をした店員に天使の格好を二度見されつつもテーブル席に案内される。

「何でファミレス……」

「丁度小腹が空いてたのよねえ。あ、好きな頼みなさいよ。立て替えておくから」

「そこは超奢るとこなんじゃ……」

「……………」

天使は無言のまま手渡されたメニューを凝視する。流星に急にファミレスへ連れて来られて困惑しているのだろうか。

（というか天使って……あの天使ですよね？ 輪つかと羽の付いた）

どこからどう見ても人間。そりゃ入れ替りの影響で本当は別の姿なのだろうが、ただでさえ魔術というオカルトを漸く理解した段階だというのにいきなりそんな人外ファンタジーな存在と対面させられても、いまいち実感が湧かない。

しかし、ヤバい存在なのは本能で分かった。正直自分がこの場に居るのが酷く場違いに感じる。

「私は焼肉定食で。貴方と最愛ちゃんは？ 別に頼まないならそれでもいいけど」

「じゃあ、自分はこちらのランチを……」

「……………問一」

「ん？」

すると天使はメニューのある部分を指差す。

「これは甘味か？」

その先にあつたのは、期間限定のジャンボストロベリーパフェ。初春が好きそうなデザートである。

「ええ。デザートよ、それにする？」

「……………」

天使は頷く。甘い物が好きなのか。何だか意外であるし、急に親近感が湧いてくる。霊夢は店員を呼んでそれぞれのメニューを注文した。

「さて……………まずは自己紹介からしましょうか。ただ天使って呼ぶのもアレだし。私は博麗霊夢。見ての通り素敵な巫女よ」

「き、絹旗最愛です……………」

「……………ミーシャ。否、正体を知られている以上、そう名乗る必要も無いか。我が真名は、^{ガブリエル}神の力」。月の守護者にして、後方を加護する者。神の左手に侍る、崇高なる熾^{セラフ}天使である」

霊夢に促され、数瞬悩んだ後、漸く天使は神から与えられし自らの名を雄々しく告げた。

「ガブリエルね。よろしく」

「……………」

思いの外気安くそう言われ、ぴたりと硬直してしまう天使改め、ガブリエル。彼女と

しては本当の名を告げれば相応の騒ぎになると思ひ、今の肉体の本来の持ち主の名を振り、「世界の歪み」によって自らの概念に混じっている同僚ミカエルの別称を名乗っていた。

しかし、霊夢はそもそもガブリエルという天使の存在を端から知らない様子だった。

「ガブリエルって超聞いたことありますよ。映画でも何回か出てきたことあります。結構なビッグネームなんじゃないんですか？」

「そうなの？ ごめんなさいね。十字教に関してはよく知らなくて」

「……問一、この国では、十字教は布教されていないのか」

「大半が無宗教よ。国教は一応神道だし、むしろ仏教の方が普及しているんじゃないかしら」

日本での十字教要素と言えば、精々クリスマスとバレンタインデー、結婚式での教会くらいであるし、それらも商業向けに改変され、十字教との繋がりすら知らぬ者も多い。過去には排斥されていた過去もあって日本の十字教徒はごく少数だろう。

それに加えて葬式や法事は寺院、初詣は神社とごちゃ混ぜであり、日本人の多くは特定の宗教を意識する場合などほぼ皆無であった。

「……奇怪だな」

「ええ。ま、信仰が廃れた結果ね」

理解不能。天使の発したばやきに近い言葉に霊夢もまた同意する。

他ならぬ彼女も巫女を自称しながらも信仰には無頓着。然れど、そんな自分を棚に上げてこの国の、現代の有り様を憂い、嘆く。

「……………」

「そろそろ本題に入りましょうか。ガブリエル……召喚された天使である貴方は、このエンゼルなんたらとかいう儀式をどう見る？」

霊夢が問う。ある意味では、今回の異変の元凶。それが術者と共に行動しておらず、犯人捜しをしているのは予想外であり、また幸いであつた。

「……解答一。御使墮しは、まだ未完成」

「未完成？」

「術者の目的は不明。天使の力を使役するつもりなのか、或いは自らが天使の位に到達する為か。どちらにせよ、完成すれば世界全体に神話レベルの厄災が振り掛かる」

「そりやまた、厄介な代物ね」

半端な魔術だとは思っていた。全人類の魂が入れ替わるなんてふざけた副作用がある時点で。

しかし、未完成ときたか。ますます術者の目的が分からない。未完成の魔術でも安易に発動してしまうような余程の愚か者なのか、本来は完成するはずだったが、何かしらのアクシデントが生じたのか……どうであれ、肝心の天使をコントロール出来ていない

というのは、あまりにも愚行と言う他無い。

「貴方の目的は？ 術者を見つけてどうすんの？」

「解答一。無論、排除する。私の目的は私が本来居るべき位階への帰還」

地上へと墮とされたことはガブリエルにとっては不本意なことであり、このままでは己が与えられた役割を遂行出来ない。

だからこそ、彼女は一刻も早くの帰還を願い、首謀者を搜索していた。

「……成程ね」

そして、霊夢にとつてその解答は、何よりも正当性のあるものだと感じられた。

「お待ちせしましたー」

「お、きたきた」

同時に、注文していた品が運ばれてくる。

「……………」

「？ どうかした？」

「……解答一。想定よりも大きかった」

ドンツと目の前に置かれる通常の1.5倍ほどの大きさのパフエ。写真では分からなかつたサイズにガブリエルは一瞬圧倒される。

「問一、これはどこから食すべきか」

「別にどこからでも。美味しそうな所から食べたら？」

パフェとは対照的な焼肉定食にがつつきながら霊夢は適当にそう言う。ガブリエルは暫し沈黙し、スプーンを手に取り天辺から掬って恐る恐る口へと含む。

そして、舌に伝わる強烈な刺激。

「――」

「どう？ 初めての感想は？」

「解答一。情報の処理が追いつかない。甘味は良いな。糖の類は長寿の元とも言うし、神の恵みを思い出す」

「そ。気に入ってもらえて何よりだわ」

「とはいえ、これは些か強烈が過ぎるが……」

そう言いつつも二口、三口目と口へ運んでいく。当然ではあるものの天使にも味覚はあるようだ。或いは人間の肉体を有する影響か。

「……問一、他に容疑者を割り出しているか」

それはそれとして、本題に戻り質問する。

「いいえ。少なくともこの街には居ないと思うわ。さつき電話してた相手が発生源をある程度まで突き止めているっほいけど。貴方の方は……私の前に現れた時点で何も手掛かりは掴んでいないか」

「……………」

再び無言。言葉に詰まっているのか思案に興じているのか。ガブリエルは時折黙り込む癖があるようだ。

「悪いけど、私はこの街から出られないから大した協力は出来ない。解決に動いているイギリス清教の連中に手を貸すのが良いかも」

「……解答」。理解した。であればここに長居する必要は無い。食事を終え次第、向かうとしよう」

そう言い、パフェを食べ進める。いとも容易く学園都市へ入り込んでいる以上、日本各地を瞬時に移動するなど訳無いことなのだろう。

「具体的な場所は後から聞き出すわ。貴方の正体は教えてもいい？」

「解答」。彼らは十字教徒だ。正体を明かせば警戒されるだろう。故に、可能であれば伏せてほしい」

「そ。じゃあ、説得出来た魔術師が協力したいと要請してきた……ということにしておくわ」

「感謝する」

ガブリエルとしても自分は強大な力を有する天使といえど、魔術師としては素人。ならばその方面に明るい相手が協力してくれるのは助かるし、手掛かりは僅かでも得難い

ものであった。

(……とりあえず話が纏まりそうに超何よりです)

一方、完全に蚊帳の外ながらも話を聞いていた絹旗はとりあえず目の前のヤバい存在が学園都市から去ってくれるらしいことに安堵し、コップの水を飲む。

本当に何故己がこのような事に巻き込まれているのか……元を辿れば霊夢が自分ごと術式を防いで中途半端に難を逃れたからであるが、そうでなければ今頃フレンドのように汚らしいおっさんになっていたかもしれないと考えるとどちらがマシかは難しい話だった。

「あ、霊夢さんじゃないですか」

その時である。

聞き覚えのある声が、霊夢の名を呼ぶ。はて、この無性に腹が立つ声は誰のものであったかと絹旗は視線を向け、飲んでいた水を噴き出しかける。

(ぶふっ!?! く、黒夜ッ!?)

視界に飛び込んだ黒髪黒目の少女。それは絹旗にとつては犬猿の仲である暗闇の五月計画の被験者の一人、黒夜海鳥だった。

「海鳥ちゃん? ……じゃなくて、涙子?」

「はい! お昼ですか?」

霊夢もまた驚き、しかしすぐにその正体が佐天涙子であると見抜く。理由は至極単純、柵川中学の制服を着用していて自分の事を霊夢さんと呼ぶ人物は一人しか居ないのだから。

「れ、霊夢さん。この黑夜、じゃなくてこの方は……?」

「佐天涙子。私の友達よ」

「へえ、そうなんですか……友達ッ!? マジですかッ!?」

「……そんなに驚く?」

あの博麗霊夢が友達認定している。絹旗は信じられないといった様子で黑夜——改め佐天を二度見した。

「うん? その人は……え、妖夢ちゃん?」

「え?」

すると佐天が目を剥いて絹旗を見る。一瞬困惑するもすぐに今見えている姿が彼女の知り合いなのだと察した。

「あ、いや。自分はヨウムなんて鳥みたいの名前ではありませんけど……超人違いなんじゃないんですか?」

即座に誤魔化す。

「本当に? あ、ごめんね。知り合いに雰囲気似ててちよつと吃驚しちゃった」

じろりと見られるも、フードとサングラスを外していなかったのが幸いし、多少怪しまれるだけで済んだ。

「佐天さん。何してるんですかー?」

「あ、初春、来て来て。霊夢さんが居た」

そして、呼ばれたことで完全に絹旗から意識が逸れる。佐天が手招きし、二つの人影がやって来た。

(げっ)

「奇遇ですねー」

「今朝ぶりですわね」

一人は常盤台中学の制服を着た、第七位。今朝早々に会って衝撃を与えた白井黒子である。隣に居る見覚えがあるようなないような茶髪長身の少年は佐天の言葉から察するに初春飾利だろう。

何と言うか、物凄い絵面。本当に目と精神に悪過ぎる異変である。霊夢はどうかポーカーフェイスを保っているが、絹旗は既にプルプルと震えて限界のようだ。

「……博麗霊夢。そちらの方は?」

そんな霊夢達の心境など知る由も無い白井が尋ねる。その視線は絹旗ではなく、こちらに目もくれず無言で食べ進めるガブリエルに向けられていた。

「あー、友人の……えっと……」

「……ミーシャ。ミーシャ・クロイツェフ」

「そ。ミーシャちゃん」

「また友人、ですの……やっぱり露出同盟でも組んでるのでは？」

「何それ」

同じく霊夢の友人らしい神裂火織のことを思い出し、眉をひそめる白井。ミーシャ……という名らしい外国人は彼女を上回る露出度。というか自分が路上で目撃したらまず間違いなく補導するレベルである。

「けど本当に凄い格好ですよ。ミーシャさんはどこの国の方なんですか？」

「……ロシア」

「へーロシア人なんですか。道理で美人な訳ですね。あ、初めまして私は佐天涙子って言いますー！」

「……………」

初対面に対してグイグイとくる佐天にガブリエルは無表情。しかし、佐天は格好の割に大人しい子なのかな？ と特に気にしていない。

これに霊夢は相変わらずねと呆れ、絹旗はあまり刺激しないでくれと焦る。

「あ、これから御坂さんも交えて勉強会兼鍋パーティーやる予定なんですけど、良かった

ら霊夢さん達もどうですか？」

「……悪いけど遠慮させてもらうわ。これから用事があるから」

霊夢は断る。普段ならいざ知らず流石に今の状態で彼女らと遊ぶ気分にはなれなかった。

「そうですかー。残念です。また今度やりましょうね！」

「ええ。それじゃ、もう行くわ」

丁度ガブリエルもパフェを完食した。霊夢は逃げるように伝票を持って席を立ち、絹旗とガブリエルもそれに続く。

「うーん……今日の霊夢さん……なーんか余所余所しかったですね」

「……やはり露出同盟の密会だったのでは？」

「白井さん、さつきから何ですかその露出同盟って」

容姿が違う。ただそれだけだというのに、想像以上にきつい。

霊夢は佐天達とのやり取りを思い出し、溜め息を吐く。一刻も早くこの地獄から脱け出したかった。

「という訳で、一先ずお別れね。さっさと解決してくれると助かるわ」

「解答一。貴方が首謀者ではない以上、次会うことは無いと思われる」

「そう。なら、良いのだけど」

先の宣言通りガブリエルは学園都市を後にし、土御門らと合流する。既に連絡は入れ

ており、向こうも協力者は多い方が有り難いと歓迎していた。

幸か不幸かガブリエルの肉体の本来の持ち主はロシア成教の魔術師であり、その記憶もあるため口裏を合わせるのは容易いだろう。

「それじゃあ、帰るべき場所に帰れると良いわね。ガブリエル」

霊夢は心からそう思う。

ただひたすらに帰りたい。自分が居るべき場所に、ただ自分が居たい場所に。

それは同情ではなく、共感。そういった思いは好ましく、また霊夢はガブリエルの立場を己の境遇と重ねた。

「

対するガブリエルの感情は窺えない。しかし、何らかの変化はあったのだと思われる。

「——博麗霊夢」

彼女は口を開く。

地上に対しての興味が皆無であったが故に、伝えようと思っていなかった事を伝える為。

「警告しておく。実は今回の御使墮しにおいて、地上に現出した天使は私一体だけではない」

「……何ですって？」

それはあまりにも予想外な事実だった。

「そして、その天使は恐らく儀式に便乗して望んで降臨した……故に、貴方は私のように
憐れみや優しさを持つべきではない。アレには我々とは違い、明確な『悪意』がある」
ガブリエルは淡々と告げる。

新たな脅威を。

「その名は、『神の命令』」

死の天使

「サリエル……サリエル、ね」

ガブリエルが去った後、一先ず絹旗と共に帰宅した霊夢は彼女から告げられた二体目の天使の名を口にする。

聞き覚えはない、はずだ。しかし、何故だろうか。その名が脳内にこびり付いて離れない。

「うーん……あんまり情報がありませんね」

ネットを使って調べていた絹旗がぼやく。

聖書において、かつて聖母マリアに「神の子」の受胎を告知したことで有名であり、神如^{ミカエル}き者と並んで最上位に位置する神^{ガブリエル}の力。それと比べれば「神の命令」という意味の名を持つかの天使は非常に謎の多い天使だった。

十字教、ユダヤ教の伝承に登場する天使或いは墮天使なのだが、聖書正典にはサリエルという名前の天使は登場しない。新約聖書と旧約聖書にも、また旧約聖書の元となったユダヤ教の聖典タナハにおいても現在広く正典とされている文書の中には、サリエル

という名前の天使は全く記載されていない。

あるのは聖書偽典の一つであるエノク書、及び死海文書のみで、それすらも記述がまちまち。

「けど出てくる記述はどれも、超ヤバそうではあるんですけどね。墮天使なんて書かれてる記事もありますし」

曰く、死を司る。

曰く、強力な邪視を有する。

曰く、魔術の源である月の支配者。

得られた数少ない情報はどれも不穏なものばかり。元の場所への帰還を目的とするガブリエルは何とか話が通じたが、曰く望んで降臨したらしいこの天使の場合はどうなるのだろうか。

「そいつが何かする前に、元春達が術式を破壊してくれるのを祈るしかないわね」
「……超そうなりますか」

そう言いつつ、霊夢は頭の中で揺れ動くその存在について思考を巡らせる。

死を司ると聞いて初めに連想したのは死を操る大亡霊であるが、よく調べればあくまで靈魂の看守といった意味合いでそのあり方は死神に近く、直接的に司っているという訳ではないらしい。と言っても本物がどうかなど分からぬが。

邪視というのは吸血鬼の魔眼と似たようなものだろうか。他にも眼に関する能力を持つ者が居たような気もするが、それについては思い出せない。

そして、月の支配者という点。これに関しては何とも言えない。月の守護者と自称したガブリエルを見た感じ月に纏わる存在とはいえ「奴ら」の関係者とは限らないだろう。

どちらにせよ、その力がガブリエルと同等かそれ以上だとすると、考えるだけで億劫になる。勝てる勝てない云々以前に周囲の被害がとんでもないことになるのは間違いないのだから。

「ん?」

そんな思考を掻き消すように調べ物に使っていた絹旗の携帯から着信音が鳴り響く。

「非通知……?」

画面に映る宛名に訝しむ絹旗。このタイミングで非通知の電話など極めて怪しく、不吉な予感を感じ取った彼女は出るべきかと悩む。

『ハアイ♪ ♪こんにちは霊夢♪』

しかし、絹旗が判断するよりも早く勝手に携帯は応答し、スピーカーもオンとなって女の声が響き渡る。

「なっ……!?!」

「……教授」

眼を見開く絹旗に対し、霊夢は眉をひそめるもある意味では当然かと納得する。彼女が今回の異変を関知していない方が、不自然なのだから。

『随分と素敵で愉快な経験をしたみたいね?』

「どこがよ。最悪が過ぎるわ」

「お、おお岡崎……さん。何で私の電話番号をツ!? というか超何で勝手にツ!」

『あら、気軽に教授で良いわよ。暗闇の五月計画の被験者、“優等生”の絹旗最愛ちゃん?』

肝心の疑問には全く答えていない。百歩譲って電話番号を特定するのは理解出来るが、他人の端末を遠隔操作してしまうなど聞いたことがなかった。絹旗の端末は暗部向けの代物で特にハッキングに強い代物だというのに。

今すぐに端末を破壊して買い替えたいと絹旗は背筋がゾツとする。そうしたところで無意味だろうが……。

「何で私のケータイに掛けなかったの?」

『気分よ♪』

あつけらかんと言いつ放つ。

『フフ。いやあ神の命令やら神の力やら、随分と天使について調べてみたいじゃない。

靈夢がキリスト教に興味を持ってくれて、とても素敵な気分だわ』

「ふん……どうせ事の仔細も把握してるんでしょ？ 簡潔に問うわ、あんたはどうなったの？」

『勿論、防いだわよ、何ら問題無く』

「これまた何て事の無いように平然と告げる。魔術師というその道のプロフェッショナルが悉く影響を受けてしまった、この大魔術を如何にして。」

『英国の古臭い結界とは訳が違うもの。ま、ちゃんとした術式だったら危なかったかね。窓の無いビル』の連中も無事なんじゃないかしら？』

「へえ……そりや良かった。容疑者がまた増えたわね」

『まあ酷い。折角、面倒事を片付けてあげたのに』

「……何ですって？」

土御門らの弁とは違い、意外にも御使墮しを防いでいる者は多いようだ。イギリス清教やガブリエルに告げ口してやろうかと思っていると、教授はわざとらしく泣き真似をしながら言う。

『貴方に差し向けられた刺客、こちらで処理しておいたわよ。天使の方は見逃しちゃったけど』

「！」

「……あ、そう」

余計な手間が省けた。道理でガブリエル以外には追手のおの字も無かった訳だ。

一方、絹旗は当たり前のようにそう語る教授に戦慄する。これだからこの女は怖いのだ。博麗霊夢に対する執着にも似た異様なまでの研究欲。彼女を害する、利用しようとする連中に対して精査し、不利益と見なせば容赦無く抹消してきた。

あの暗闇の五月計画も彼女の気分次第では初めから無かったことになっていたことだろう。故に、いつしか博麗霊夢に近づく研究機関は存在しなくなつた。

「そりやどうも。で？ それだけの用で電話してきたのならもう切るけど」

『もう。冷たいんだから。わりと本気で泣いちゃいそうな気分になるわ。——とまあ冗談はさておき霊夢、天使との邂逅を果たした気分はどう？』

本題があるのならさっさと入れと語気を強める霊夢に対し、教授は態度を崩さず、徐に尋ねる。

「……どうって言われても。別に」

『本当に？ 本当の本当に？』

「ああん？」

『神の従僕。自我を持たぬ被造物に過ぎないとはいえキリスト教圏において神に次ぐ超特大の神秘。現状この世界において貴方が追い求めるモノに最も近いんじゃないか

しらっ?』

「……………」

教授の弁に怪訝な表情を浮かべていた霊夢はその意図を理解し、黙る。

それは神ではなく、妖でもなく。然りとて紛れも無き人外魑魅魍魎。魂だけとはいえ対面した霊夢からすれば疑いようもない。

けれど、だからこそ――。

「あれは、違う」

『…………そう。まあ、ある意味では“幻想”から一番程遠い存在だものね』

神に等しい力を有しながら神に非ず。造物主から認められず、許されず、ただ道具として、己が与えられた役割を実行するだけのシステム。

ガブリエルと語らい、随分と感情が希薄だなど思ったが、教授曰くそもそも自我が無いらしい。そう考えればその歪な在り方にも納得が行く。

ただ純粋な力の塊。通常神の力の糧は“信仰”であり、世界最大の宗教である十字教の神はさぞかし力を蓄えていることだろう。

けれど、天使は神でないが故に信仰という概念は無価値で無意味。逆にそれは増減せずとも信仰に縛られること無く、不変のまま世界に根付いているという意味でもある。

たとえ創造主である聖書の神が消えようとも、その在り方故に天使は消えることがな

いのだろう。

あくまでも推論に過ぎぬが。

『残念だわ。でも、それなりのインスピレーションは与えられたんじゃないかしら？』

少なくとも魔術よりはずっと』

「……どうでしょうね」

そんな心の内を見透かしながら、そう囁く教授。これに霊夢は不快そうに顔をしかめる。

彼女に自身の内面を教えたつもりはない。なのにまるで初めから知っていたかのよう、この世界もまだ捨てた物ではないと言いたげに踏み込んでくる。

それが霊夢には酷く不可解で得体が知れなかった。知った風な口を利くなど怒鳴りたくもあつたが、それが無駄であることも理解しているため敢えて言葉を紡ぐ。

「——言いたいことは、それだけ？」

『そう急かささないで。慌てたところで、どこに居るかも分からない天使相手に何も出来やしないでしょう？ ゆっくりと楽しくお話ししましょうよ』

「チツ……」

全く以てその通り。いつもの霊夢なら無視してそのまま切るところだが、現状どうすることも出来ない中、教授は打開策を用意している可能性があつた。

もしかすると、彼女は既に御使墮しの実行犯を特定しているのかもしれない。

(うわあ……霊夢さんの機嫌が頗る悪い。超この場から去りたいです……)

一方、絹旗は苛立ちを隠そうともしない霊夢に内心ビクビクと怯えている。

『しかし、神の命令とはね。——奇縁、なのかしら?』

「はあ?」

ぼそりと呟いた教授の囁きは、都合良く霊夢には届かなかつた。

『何でもないわ。そうね……ふふ、ねえ霊夢? どうして今回の御使墮しが、不完全な状態で実行されたと思う?』

「……さあ? 使い手の腕が大したことなかつただけじゃないの」

唐突な問い掛けに霊夢は興味無さげにそう答える。敢えて不完全な状態で行うメリットがあるとは思えないため単純に実行犯の力不足、或いは詰め甘さが原因だといふ、妥当な判断だった。

『そうかもしれないわね? けれど、もしもこの世界が、本来あるべき姿から歪められていたとしたら?』

「……何のこと?」

霊夢が眉をひそめる。

『ふふ、その様子だと本当に気付いてないようね? まあ、そもそも本来の形を知らな

きや認識するはずが無いものね』

「いちいち意味深なこと言ってんじやあないわよ。御託は良いからはつきり言いなさい」

意味が分からない。今と昔。幻と現の話だというのなら、それはあまりにも今更が過ぎる。

だからこそ、霊夢はこの世界を憂い、この科学の街に閉じ込められている現状を良好としているというのに。

『あら、ごめんなさい。要するに世界は今不安定でそれに気付いてる人間は殆ど居ないということよ。そして、それが天使を降臨させる儀式で“魂の入れ替り”なんて可笑しな事象が生じた原因なの』

「……だったら?」

『今後も世界は荒れるわ。御使墮しも死の天使も、始まりに過ぎない。科学というにはあまりにも魔術の面に近過ぎるこの街が台風の目になる可能性も高いでしょうね』

「……ああ。そりや最悪ね」

『ええ。楽しみにしとくと良いわ』

結局、よく分からない結論に落ち着く。まだ問い詰めてやろうとも思ったが、そもそも答える気更々無いのは明白。この女の言動はこういうものだと諦めた。

ただ面倒事が次から次へと舞い込んでくるだろうと、そんな予言を受けてしまった霊夢は辟易とした様子で通話を乱暴にぶち切る。

「……超切つてよかったの？」

「ええ。どうせ訳の分からないことを言うだけだし、付き合うだけ無駄よ」

携帯を絹旗へと返し、霊夢はそう吐き捨てる。仮に打開策を知っていても、あの様子だとこの場で教えてくれるとは思えなかつた。

「ハア……結局、ただの迷惑電話だったわね」

進展は無し。どうやら教授は今回の件についてあまり関与するつもりはないようだ。となるとやはり自分達は刺客の魔術師を撃退しながら土御門達の健闘を祈るしかない。

そう分かっていながらも、霊夢は寛ぐこと無く、少し苛立った様子で思考を巡らせる。

(……嫌な予感がする)

こういう勘も大抵当たるのが霊夢の常であるが故に。

「あら、切られちゃった」

研究室にて。

教授はティーカップを片手に肩を竦める。軽く揺さぶってみたが、あの露骨に機嫌の悪い態度から凶星を突いたのだと察した。

「霊夢だったら……本来なら喜ぶべき事象のはずでしょうに。それとも、貴方は本気で諦めてしまっていたのかしら？」

教授にとつて御使墮し自体は完全なイレギュラーであったが、同時にそれは吉報でもあった。

この世界にはまだ、理から外れた超常の存在が降り立つだけの土壌が残っていたというのをこの目で直接確認出来たのだから。

そして、程なくして「死の天使」が降臨した。

「神ガブリエルの力の降臨を「呼び水」とし、便乗したのが光ルシフェルを掲げる者でも神サタンの敵でもなく……神サリエルの命令という現代に記録が大して残っていない、立ち位置すらも曖昧な天使だったか。両者共に「月」に関係してるから……なんて、単純な理由ではないわ」

散々言われているが、天使というのはシステムであり、それこそ上位存在からの司令がない限りは自らの領域から出ることなど考えてもいない。

では墮天使も含まれる、地獄の悪魔達はどうか。人を誑かし命を奪う、悪意に満ちた彼らは地上へと這い出られる機会があれば挙つて乗るだろう。

不倶戴天の敵である天使。それも、最上位の「神の力」と同伴という致命的な点が無ければ、の話だが……。

そして、そもそもの話、天使の降臨自体が「呼び水」となり、あらゆる天使や悪魔、それに類する魑魅魍魎が便乗して降臨出来てしまうのなら、今頃この世界は崩壊し、成り立っていないはずではないか。

であれば、今回現れた「神の命令」は——。

「呼び水は二つあった。かつて、魔界にて死の天使と邂逅し、縁を結んだ者。そういう意

味では私がここに居るのもそうなのかもしれないのかしら？　だとしたらとても素敵ね」

きつと、今回の事象は、とうの死の天使すらも予想外な出来事だったのだろう。

何故ならそれは今はもう失われた異伝の物語であり、もはや初めから存在していないに等しい、遠い、遠い泡沫の夢――。

だからこそ、この思いもよらぬ到来を観測した教授は驚喜した。

「言いそびれちゃったわね、霊夢♪」

歌うように、悪びれもせずに眩く。

聖人、錬金術師、そして一方通行との戦いを経て、ここ最近で彼女は以前と見違える程に成長したが、しかしまだまだ刺激が必要だった。

「――死の天使、サリエルの狙いは、他ならぬ貴方自身だつてことを」

視界に飛び込んだのは、暗黒だった。

「——あ?」

霊夢は目を見開く。

ほんの瞬きしたその間に、先程まで彼女の自室だったはずのそこは変わり果て、暗く冷たく静謐が支配する、瘴気のような魔力に満ちた世界が広がっていた。

——堕ちたる神殿——

世界が書き換えられた。

あまりにも唐突に、
身構える暇さえ与えず、
“悪意”
は牙を剥くのだ。